第百十二年（通巻一七〇号）

山岳

二〇一七年

山岳　二〇一七年　目次

［記録］

剱沢大滝左壁ゴールデンピラー　厳冬期黒部横断32日間……佐藤裕介……7

東ネパール・ナンガマリⅡ峰初登頂……重廣恒夫……31

若手メンバーで東稜からマナスル登頂……東京農業大学マナスル環境学術登山隊２０１６……54

［調査・研究］

ゴジュンバ氷河調査隊　活動報告……大森弘一郎……65

河川の支流を表わす「沢・谷」地名考……五十嶋一晃……117

［読物］

積雪期鹿島槍ヶ岳南峰の初登頂を巡って

①　忘れられた一高旅行部と濱田和雄の記録……中村純二……139

②　その初登頂者が知られていない理由……早川滉……149

③　田辺和雄博士とその高山植物研究……大場秀章……162

吉田　博、一匹狼の山岳画家……関塚貞亨……169

小島烏水と親交があった飛騨の岳人……木下喜代男……184

大学ワンダーフォーゲル部の発足――学生登山の戦後史と現況……城島紀夫……194

インドネシア・南東スラウェシの山、メコンガ山……児玉茂……206

図書紹介
外道クライマー（宮城公博）……絹川祥夫…232／山その大いなる旅　Ⅱ（同志社大山岳部・山岳会）……平井一正…234／登山の運動生理学とトレーニング学（山本正嘉）……杉田浩康…237／「山の不思議」発見！　謎解き登山のススメ（小泉武栄）……児玉　茂…239／岩と雪　BEST SELECTION（池田常道）……海津正彦…241／世界最悪の旅（アスプリー・チェリーギャラード／中田　修）……宇都木愼一…244／THE MAVERICK MOUNTAINEER（Robert Wainwright）……南井英弘…248
……232

追　悼
谷口けいさん（江本嘉伸）…257／水谷弘治さん（松澤節夫）…260／恩田善雄さん（市川　正）…264／田部井淳子さん（神﨑忠男）…268／徳久球雄さん（中川博樹）……274／
……257

会務報告……280
支部の活動報告……308

委員会の活動報告……369
山岳図書目録……A19

表紙デザイン＝小泉 弘
表紙画＝田立泰彦

剱沢大滝左壁ゴールデンピラー　厳冬期黒部横断32日間

佐藤裕介

入山後22日目にしてたどり着いたゴールデンピラー。やめるべき理由はいくらでもあったが、3人のこれに懸ける情熱はそれらを上回っていた。〝死なずに、この課題を切り抜ける〟という道筋を強引につけ、覚悟を決めた。

十字峡、厳冬期黒部横断

２００８年正月、我々は完全に打ちのめされた。あの悪夢を私は今でも鮮明に思い出すことができる。切れ込んだ池ノ谷ガリーのゴルジュに雪崩とともにのみ込まれていく、ふたりの仲間。標高差６００m、実距離１・２kmにも及ぶ雪崩に巻き込まれながらの奇跡的な脱出行は、私の登山観に大きな影響を与えた。この山行の前半、私は初めて厳冬の剱沢に踏み込んだ。今思えば非常にまれなチャンスをあっさりつかみ、トサカ尾根に取り付いている。ビバーク時、円形劇場のような最高のロケーションのなかで、我々を魅了したのが対岸の大滝尾根だった。今登っているトサカ尾根より数段難しそうで、鋭利なリッジにキノコ雪を無数にまとった姿はカッコよかった。

ボルダーでも、ビッグウォールでも山でも。圧倒的な大自然のなかで、カッコいいと感じるラインを実際にトライできるのがクライマーの強みだと思う。私は黒部横断でもそれを目指してきた。

２０１２年。３度目のトライでやっと大滝尾根に取り付く。伊藤（仰二）、岡田（康）、私の３人は、幻の大滝として知られる剱沢大滝の轟音を聞きながら厳冬の雪と格闘していた。この年の降雪は本格的で大滝尾根のキノコ雪は発達しまくり、何十個というキノコ雪をダブルスコップで切り崩しながら奮闘的な登攀が続いていた。うんざりするくらいに時間のかかるキノコ雪登攀のビレイ中、つい見入ってしまうのはまたもや、対岸にそびえ立つピラーだった。異様に急峻なピラーは雪をまとい、見る者を圧倒した。傾斜が強すぎて、ポータレッジを準備してトライしてもおかしくないような代物である。あんなピラーに取り付いたら命がいくつあっても足りなさそうだ。トライを想像するだけでゾッとした。対岸を見つめては「取り付くことなど考えてはいけない。危険すぎる」と言い聞かせている自分がいた。

２００９年に登攀したカラコルムのゴールデンピラーとイメージがピッタリで、私は勝手に黒部のゴールデンピラーと呼んだ。スパンティーク北西ピラー（別名ゴールデンピラー）は、西日を浴びて黄金色に美しく輝き、フンザ村からも目立った存在である。１９８７年に初登されたこのピラーはアルパインを始めたころの憧れで、その初登攀ルートはアルパインクライミングの金字塔として脚光を浴びていた。明るく光り輝くそれとは対照的に、剱沢の深く暗いゴルジュに隠された黒部のゴールデンピラーは、華やかさとは無縁のおどろおどろしいピラーである。

２０１５ゴールデンピラー敗退行

厳冬期黒部横断からの剱岳・八ツ峰完登を目指したトライは、敗退の連続だった。毎年黒部に向かい、この山域に60日を費やして5回目のトライで剱岳・八ツ峰完登を決めた私は、久々に厳冬の黒部から離れパタゴニアに向かった。快適な町をベースとして、確実な天気予報を得ているから短期速攻、スマートにトライする。岩質は良質でどの岩もすばらしく、登攀欲を刺激するものばかりだった。チャルテンでのそんな生活も魅力的だったが、安全で快適なアパートで悠々と暮らしていると、厳しい黒部が無性に恋しくなった。ビショビショに湿った雪にまみれ、雪崩に怯えて雪洞で脱出の機会を祈るように待ったあの刺激が、麻薬のように私の脳を蝕んでいるのかもしれない。

「あのゴールデンピラーをやりたい」と伝えると、一緒にパタゴニアを訪れていた岡田もすぐに乗ってきた。この冬も日本で黒部に向かった伊藤も「あれ、やるの？」と警戒



牛首尾根より望む、深い谷の中央にある剱沢大滝。その左に雪をまとったゴールデンピラー

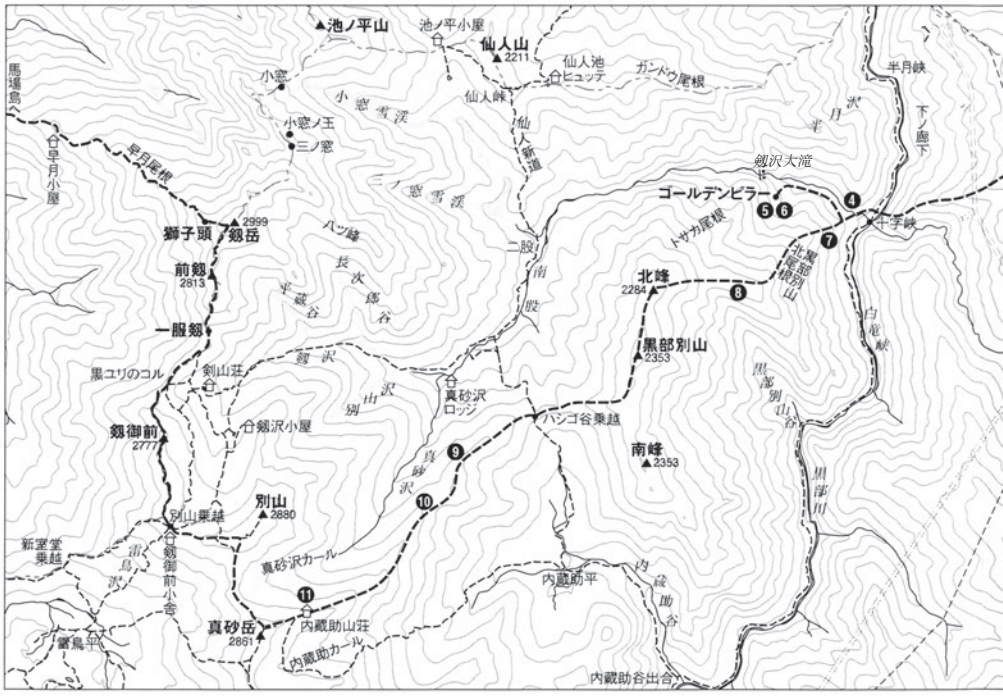


しながらも、やはり気になってしょうがない課題だったようだ。

2015年1月。ゴールデンピラーの放つ恐ろしさを共有した3人でのトライ。首尾よく鹿島槍を越え、十字峡へと続く牛首尾根で雪洞を掘ってチャンスを待った。しかし、いつまでも天気予報は悪いまま。雪洞で待ち続けているうちに、私たちはある焦燥感にとらわれた。

「せっかく25日も用意した日程を、無為にして何もできずに帰ることになるのでは？」

動きたかった。懸命に雪と格闘したほうが、こんな惨めな雪洞生活を続けるよりはるかにマシに思えたのだった。雪洞で1週間チャンスを待ったが、その後の週間天気予報を見るかぎりチャンスはなさそうだった。耐えきれず、雪洞を後にして別の無難なラインから剱岳を目指した。十字峡周辺の主だった尾根はすべてトレースしてしまったこともあるし、本来狙っていたピラーの存在が大きかったことも影響して、18日間も山に入って富山に抜けたのに、いつになく敗北感漂う、後味の悪い横断となってしまった。下山したその晩、我々は珍しく富山で宿に泊まった。話の中心は来年のゴールデンピラー・リベンジについてだ。今回の反省点を踏まえて装備や食料、日程を話し合い、二度と



こんな思いをしないよう、来年は覚悟を決めてトライしようと確認し合った。

2016黒部横断　ゴールデンピラー、リベンジ

ゴールデンピラーのことで頭がいっぱいになりつつあったトライ1ヶ月前。岡田が骨折してしまい、参加できない事態となった。信頼できる重要なメンバーをひとり失うことは、今回のようなトライでは致命的だ。伊藤とふたりでのトライは厳しすぎる。それでも、ここまで高めたモチベーションを考えると簡単には諦められなかった。

直前に、1ヶ月もの黒部横断に行ける者を探すのは無理があると思われたが、ひとりだけいた。称名滝の冬季初登や、海外での厳しい沢登りを一緒に行なった宮城（公博）だ。厳冬期黒部横断を経験しており、積雪期縦走の実力も十分で、日本の暇人トップクライマーである。髭モジャの風貌どおりいい加減なヤツで、長期の黒部横断で一緒に雪洞に泊まることに一抹の不安があるが、なんとかなるだろう。冬恒例の黒部横断予行山行で伊藤と初顔合わせ。いい加減さが目に付き、生活技術もなっていないが、馬力はすばらしい。46日間のジャングル冒険野郎は、やっぱり只者ではなかった。トライが楽しみである。

2月3日（1日目）　晴れときどき曇り。松本～大町～大谷原7：10～赤岩尾根1800m 15：50

爽やかな晴空の下、スタート。雪の状態良く、40kgの重荷としては上々のペースで進んでいった。

2月4日（2日目）　晴れときどき曇り。出発7：30～冷池山荘14：40

朝、テント内でマイナス10度Cとかなりの冷え込み。連日の好天でラッセルが進む。高千穂平を過ぎ、稜線手前でトラバース。念のため雪崩を警戒し、ロープを2P延ばして稜線へ。

2月5日（3日目）晴れのち曇り。出発6：30～牛首尾根2200m 16：00～雪洞掘り18：00

鹿島槍を越える際はいつも強風に悩まされるものだが、今回はわりと穏やかな稜線でロケーションを楽しみながら頂上へ。十字峡へと続く牛首尾根を2200mまで下り、雪洞を掘る。2月というのに今年は積雪が少なく、これ以上、標高を下げると雪洞が掘れない可能性が高そうだ。

翌日からこの雪洞でトライのチャンス待ちが始まった。狙っているゴールデンピラーは、雪崩の巣である剱沢下流域の最奥まで踏み込まねばならない。4年前、対岸から眺めたゴールデンピラーは、トライを考えるだけでも恐ろしいほどの傾斜を感じた。当然、途中敗退の可能性も高い難課題である。ピラー上部はガリーを登る必要があるので、登攀開始から2日間は降雪のない好天が訪れなければ、トライは厳しい。取り付く前日は快晴の強い日差しによって剱沢の雪が安定するのを待つ必要がある。つまり、トライに我々は3日の好天を求めた。この時期、このエリアで3日間の好天などまずないといっていいほどの条件である。25日間の日程を用意した昨年の敗退トライでは覚悟が中途半端だったという反省を踏まえ、1ヶ月超の日程を用意した。狙うは剱沢大滝ゴールデンピラー一点集中。ダメなら牛首尾根を登り返し、潔く帰る。まれなチャンスをひたすら待ってやるつもりだ。

雪洞停滞日記

2月6日（4日目）雪。停滞1

雪洞での沈殿生活が始まった。

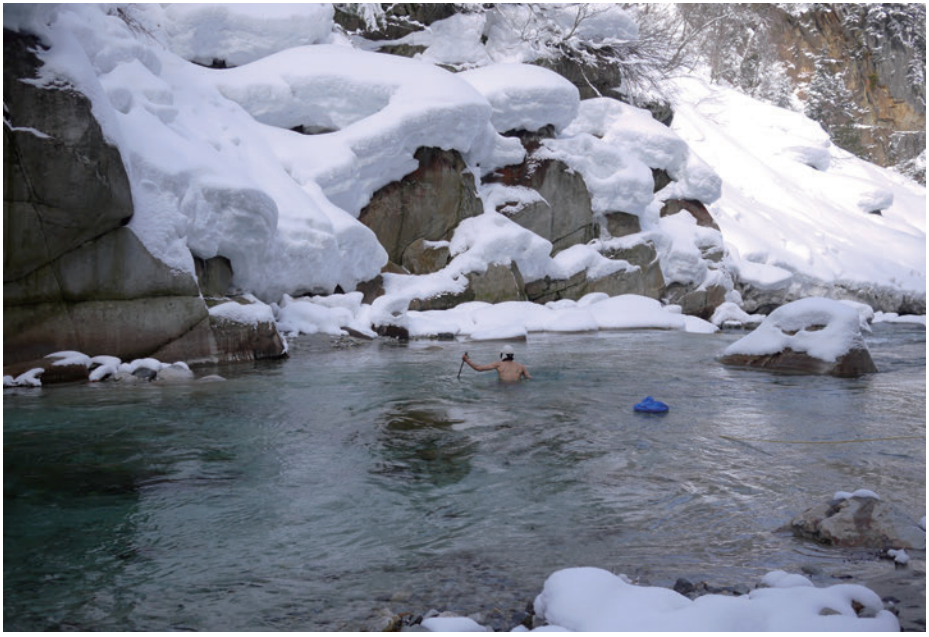
2月7日（5日目）雪のち晴れ。停滞2

昨日に引き続き、おおむね穴蔵で一日を過ごす。お互いにマッサージをし合いリフレッシュ。

2月8日（6日目）晴れ。停滞3



鹿島槍から牛首尾根を下降する



全裸になってから 100 g のナイロンズボンとネオプレンソックスで徒渉する佐藤

今日晴れても、明日の天気予報がダメなので停滞。暖かな日差しを利用して、シュラフ干し。テントもいったん雪洞から出して、日中は明るいテント生活を楽しむ。雪洞の整備も丁寧に行なった。

2月9日（7日目）雪。停滞4

穴蔵生活の一日は以下のルーティンで過ぎてゆく。

朝7時。ゆっくり目覚めたら、シュラフに入ったままラジオを聞きながら、しばしまどろむ。

7：45、石川ラジオで週間天気予報を聞いてから起き上がり、「とりあえず、あと1週間は、待ち」と確認後、極めて薄いインスタントコーヒーをする。

朝飯アルファ米125g。昼までにお茶や白湯を2度ほど飲んで、昼飯はアルファ米150g。次は3時のおやつ。今日は3人でサラミ50gとクラッカー。クリームチーズを添えてお茶とともに楽しんだ。夕飯アルファ米125g。アルファ米は白米で、チャーハンの素やふりかけで味付け。ラードを毎食少しずつ入れる。夜はスープ類と白湯で締める。

「食事がショボいと長期停滞はつらすぎる」という、去年の敗退から得た教訓から、これまで行なった10回の黒部横断でダントツに充実した食事とした。

2月10日（8日目）雪。停滞5

降り続く雪で新たに1mの積雪。

2月11日（9日目）快晴。停滞6

十字峡への下降時のポイントとなる分岐へ、散歩がてら偵察した。

停滞を続けている牛首尾根2200m付近は最高のロケーションである。今回の目標と定めた、剱沢大滝のピラーが見下ろせる。それは剱沢の深く急峻な谷間から、すばらしい傾斜でそそり立っていた。バックには八ツ峰に守られた剱岳がドッシリと構えている。

2月12日（10日目）晴れのち曇り。停滞7

2日続けての晴天。しかし明日は雨が予想され、停滞は継続だ。紙でオセロを作るが、つまらん。

2月13日（11日目）小雨。停滞8

霧雨の降る午前中、テントをたたみ雪洞整備。明日の大雨に備えて、薄い側面の壁を外から厚くする。

登山開始から11日目。この雪洞での停滞日数は8日目となった。寄り添うように3人が寝転がり、シュラフに埋もれて時がたつのを待っている。2月半ばというのに外は雨。週間天気予報を見るかぎり、さらに1週間以上ここに留まることは決定的である。宮城は、また時計に手を伸ば



チャンス待ちの日々が続く。晴天時は、のんびり日なたぼっこをして過ごした



19 泊した雪洞を掘る

し、昼飯までの時間を確認しては、ため息をついている。私は、ラジオに耳を傾けながら、まどろみを楽しむ。去年の経験からだろうか。まだ余裕があった。

2月14日（12日目）雨。停滞9

春の嵐到来。5月並みの高温となり、3000mの稜線に至るまで雨である。剱沢の側壁は、底雪崩が起きたのだろう、泥が雪面を汚し、茶色の荒々しい姿となっている。「今ごろあのピラーのどこかにいたら、死んじゃうな」と私が言うと、「ヤバすぎるでしょう」と宮城が引きつった笑いで返した。

終日の雨だったが、雪洞は崩れずに持ちこたえてくれた。

2月15日（13日目）雪。停滞10

冬型となって終日の降雪。昨日作成した将棋セットで3局。佐藤はこの雪洞で初の将棋体験。「王＋歩3つ」という大ハンディをつけても伊藤に勝てないが、とても楽しく、おやつの時間も忘れて将棋に夢中な午後を過ごした。

2月16日（14日目）小雪。停滞11

狭い雪洞の中でテントをたたみ、雪洞の整備。面倒だが、しっかり手入れをしないと長期をここで過ごすことは叶わない。

2月17日（15日目）雪。停滞12

一日中、雪洞内で生活。将棋とマッサージ。

2月18日（16日目）晴。停滞13

5日間の悪天を経て、久々の晴天となった。シュラフを干し、テントも外に立ててポカポカの昼間を味わう。雪でテーブルとイスを作って優雅におやつを食べたら再び穴蔵生活へ。

2月19日（17日目）小雨。停滞14

晴れ予報が外れ、小雨の舞う一日。朝食後、将棋1局、昼飯、昼寝、将棋2局、おやつ、マッサージ、夕食、天気予報チェックと今日も忙しい……。

2月20日（18日目）曇りのち雪。停滞15

異様に暖かな外に出ると、雪は締まり、春山のようだ。雪洞の整備をして、雪が降ってきた午後は雪洞へ。宮城とのハンディなし対局。何度も詰むチャンスがあったのに惜しくも敗れる。

2月21日（19日目）雪。停滞16

雪洞から一歩も出ない一日。今日も、伊藤に「飛車、角」抜きで負ける。

天気予報は悪化し、昨夜ほのかに期待していた24日トライのチャンスが消えた。一同、しばし無言。32日間用意した日程も尽きつつある……。

2月22日（20日目）晴れ。停滞17

シュラフ干し、ラジオ体操、昼食後の将棋は今日も2連敗。夜、3人枕をそろえてシュラフをかぶり、日課の天気チェック。緊張のひととき。昨日から再び変化したwindguru＊予報は好転しており、トライの日程が見えなくもない。しかし、予報は安定せずコロコロ変わり、ラジオから流れる予報は悪天を告げている。どちらに転ぶか分からない状況といいたいところだが、実際は剱沢に入渓してトライができる可能性は低い。

天気予報サイトwindguruの週間天気予報によると、23日雪。24日曇りときどき晴れ。25日快晴。26日雪。27日晴れ・曇り。ラジオが伝える北陸地方の天候は29日以外すべて降雪が予想されていて、まったくダメな感じ。

宮城「windguruの予報どおりだとすると、25日トライできるんじゃない？」

佐藤「26日、雪降るじゃん」

宮城「ゴールデンピラーじゃなくて、左のリッジにすれば一日の降雪もやりすごせるでしょ」

佐藤「確かに、左のリッジなら行けるかもね。こんな不安定な予報では実際どうなるか分からん。このタイミングで出発しなければ日程的に何もできないことは確実なんだし、予報はどうあれ、とりあえず十字峡に行こう」

シュラフに入る直前、伊藤が自分に言い聞かせるように言う。

「成功しようが失敗に終わろうが、粘りまくってこの1ヶ月を充実した山行として振り返りたいね」

登山開始からすでに20日間がたっている。伊藤の言葉は、3人に共通する願いであった。チャンスを諦めず、好天を願って眠りに就く。「ドクン、ドクン」と心臓の鼓動がやけに大きく感じられ、なかなか寝付けない夜を過ごした。

＊今回のメインに使用していた天気予報サイトは「windguru」。緯度経度などの情報を自身で設定し、NOAA（アメリカ海洋大気庁）の数値計算を基に1週間予報として示してくれるサイトで、停滞中は剱沢大滝（標高1170m）地点での予報を主に参照。

2月23日（21日目）雪。停滞18

一日雪が降る。新たな積雪は30cmほど。明日の出発に備えて18時に就寝。

雪洞19泊を経て行動再開

登山開始から22日目。32日間の日程を用意したのに、もう出発しなければ何もできないというタイミングまで追い

込まれてしまった。天気予報は芳しくないが、十字峡に向けて行動を開始する。

2月24日（22日目）小雪。出発5：30～十字峡12：00～剱沢右岸の台地15：30

19泊した雪洞と別れ、出発。我々の願いは届かないのだろうか。なんとか晴れてほしいところだったが、雪降るなか、十字峡目指して1200m下る。剱沢とゴールデンピラーがガスの切れ間から覗けた。当初からの大本命ラインは、予想以上の傾斜であることが見て取れた。条件が最高であっても、あれはヤバすぎるように感じてしまう。代替案として狙っているピラー左のリッジだって相当イカツい。曇り空に少し青空も見えてくるが小雪は舞い続けた。昼に十字峡に到達。胸までの徒渉後、雪に埋もれた水平歩道まで上がり、吊り橋を渡って台地にテントを張った。

テント内で明日からの行程を話し合った。予報が悪すぎるため、雪洞出発時点で大本命だったピラー正面のラインは諦めて、ピラー左のリッジを登ることを目標としていた。その前提は今日晴れることなのだが、実際は終日小雪が舞い、昨日の降雪を落ち着かせるような天候とはならなかった。明日、早朝から剱沢に踏み込むのは雪崩のリスクが高すぎる。現実は甘くなかったということか。

しかし、ピラーの取付に行って、想い続けたピラーを見上げることくらいはしたかった。今回登れなくとも次のトライの糧としたい。予報どおり明朝から晴れたら、午前中を雪の安定化に充てるつもりで昼から入渓。雪崩が非常にヤバい区間の手前で様子を見て、状況が良ければ取付へ。時間的に偵察のみで、再び十字峡へ帰ってくる可能性が高い。見上げられれば御の字なのだけど……。取付で見上げて「15時からの登攀で、翌日の降雪&雪崩をやり過ごせる中間テラスに到達できそう」なら、左のリッジに取り付いてしまおう。夜間登攀に突入することは確実。かなり薄いチャンスを生かすにはスピーディな行動が必要だろう。ピラー登攀に必要な装備と5泊分の食料のみを持参し、ほかは十字峡にデポする。つまり剱岳方面は諦め、「非常に運良く」ピラーを登れたら十字峡に戻ってくるラウンドトリップとした。下山路はいちばん確実で早い後立山越えだ。

入山してから21回目の夜。明日以降、黒部の神様のご機嫌はどんなものなのだろう？　今宵はしばらく寝付けそうにない。

2月25日（23日目）晴れ。出発10：00～剱沢入渓11：00～剱沢大滝直下14：00～登攀開始15：00～登攀終了＝ビバー



ゴールデンピラー１Ｐ目を登攀する宮城

ク21：00

晴天の朝。シュラフから這い出て、さっそく朝食の準備を始めようとすると、伊藤が神妙な顔で言う。「昨日の下降時から気になっていた左膝がかなり痛い。申し訳ないが、こんな膝では下山も危ういから、俺はここで待ってるわ。ふたりでトライしてもらえるかなぁ」

19泊の雪洞停滞なんて入院生活のようなものだ。そこから大荷物で急な尾根をいきなり下りるのだから、思いもよらない不調が出ても無理もない。さて、どうしようか。テント・ツエルトの類はひとつしかないし、この標高では雪洞も掘れないので、伊藤ひとりを残してのトライはない。そもそも、3人で取り組んできた課題だ。ひとりが欠けた状態でのトライなんて考えられなかった。

「みんなで下山しよう」という当たり前の即答ができず、食事を作りながら検討する。ここ十字峡は、最短ルートを取るにしても、天気に恵まれて3日間の本格的な登山が必要な場所である。この谷底では無線も携帯電話も通信不能。伊藤の膝は寝返りを打つだけで痛んでしまうほどという。やたらと我慢強い男がそう言っているのだ。「トライは中止。確実に下山できる方策を練る」それが冷静な判断だと思うが……、私は諦め切れなかった。かなり強引な計

画で、伊藤には心身ともに負荷が高いものであるが、ピラー目指して出発することに決めた。

ザックはふたつ。佐藤と宮城が背負って、伊藤はほぼ空身で行動。昨日考えたとおりの行程で進んでいき、歩いてみて伊藤の膝がやはり悪すぎるようなら下山。膝の調子がなんとかなるのなら、天候、剱沢の積雪状況を見て、取付からラインの偵察をする。薄い可能性になってきたが、取付でラインも伊藤の膝の調子もいいならトライする。十字峡からの脱出時、このトライによって伊藤の膝が悪化する可能性も十分考えられる。その際はふたりで荷を背負い、岩小屋沢岳北西尾根から下山すればなんとかなるだろう。

10時出発。天候は良く、雪質もかなり良好に感じる。黒部別山北尾根をしばらく登り、雪面をトラバース。50mの懸垂下降を経て、1時間で剱沢に入渓した。意外なほど静かな谷を、雪崩ポイントの手前まで進んでいく。昼となるころには、雪崩要注意の大きめの沢を渡る地点に到達した。歩くのは谷底であるから、気をつけるべきは、大きな沢と斜面から自然発生する雪崩である。少なくともこの3時間は剱沢で雪崩はどの面からも起こっておらず、新たに日射にさらされる斜面も当面の間、ない。ギラギラと照りつけていた日射は湧き出てきた雲とそびえ立つトサカ尾根の陰になって穏やかになった。「行ける」と判断し、数日前のデブリを踏み締め、両岸が極端に狭まる谷間の先、剱沢大滝を目指す。

14時。登攀予定のピラー左リッジ取付に到達。中間部のコルは明日の降雪に耐えられそうだし、登攀も無難に見える。怖いくらい順調だ。4年前から夢見たゴールデンピラーのラインを拝みに、剱沢大滝直下までゴルジュを進んでいく。剱沢大滝中心に、右壁は凹状岩壁、左壁は大本命のゴールデンピラー。生唾をゴクリと飲み込みピラーを見上げる。4年前、対岸の大滝尾根から見えなかった取付部分は、予想していたよりはマイルドで、条件さえつかめば下部は登攀可能に見えた。美しく天に向かってそびえ立つピラーを見つめていると、胸の鼓動が大きくなった。

佐藤「いやー、本当にスゲーところだ」

伊藤「この左上ルンゼから登れば、速攻で左リッジのビバークポイントに行けそうだね。明日の降雪での雪崩も耐えられそうだ」

佐藤「左リッジ行くなら、それがいいですね。ところで……このゴールデンピラー、取り付かずに後悔しないかね」

伊藤「えっ⁉ ピラーかぁ。うーむ……」

宮城「行けそうじゃないですか」



ゴールデンピラー９Ｐ目を登攀する宮城

佐藤「ところで伊藤さん、膝は？」
伊藤「まあまあ～かなぁ。このピラーやるんだったら痛かろうが……、行っちゃおうかな。これに取り付くチャンスなんて、一生に何度もないからね。でも、これ取り付いちゃって、明日の降雪は耐えられるかなぁ？」
佐藤「中間部のビバークポイントは完全なリッジ上だから、デカい雪崩は食らわないんじゃない？」
伊藤「ちなみにもう、15時なんだけど……」
佐藤「あそこまでは、夜になっても登り続けられるし、大丈夫でしょう」
伊藤「明日以降、降雪があったら中間部から上のガリーはヤバすぎるなあ」
佐藤「確かに……。降雪でガリーがダメなら、上部はあのかぶったピラーはどう？　雪崩は絶対食らわないし、思っていたよりブッシュがあるじゃん。時間はかかっても、あんな太い木があれば死にはしないでしょう」
伊藤「確かに死にはしないかも……。でも、あんな傾斜のあるブッシュピラー登ってたら、最終下山日に間に合わない可能性もあるなぁ」
佐藤「あり得ますねぇ。まぁ、３月５日には下山できなくとも、それまでに無線か電話で連絡して、各方面に迷惑か

からないようにできるでしょう。行っちゃおうぜ！」
宮城「よっしゃ、燃えてきた」
　こういうのを「行き当たりばったり」というのだろう。これからの天候は、チャンスというには程遠く、明日は雪が降るらしい。そうなればこの剱沢は、間違いなく雪崩の押し寄せる地獄の谷底となる。非常に困難に見える壁なのに、途中敗退も許されない可能性があった。プレッシャーは半端なものでなかった。伊藤は膝の不調を訴え、取り付く時間は15時。すぐそこに闇が迫ってくる。やめる理由はいくらだってあったが、3人のゴールデンピラーに懸ける意欲はそれらを上回っていた。「死なずに、この課題を切り抜ける」という道筋を強引に付け、覚悟を決めた。
「行くのか、引くのか」――山行の核心はここにある。
　あわよくばゴールデンピラー左のリッジ登攀、という計画から一転、大本命のゴールデンピラーに取り付くことに決定する。

片道切符のゴーアップ

15：00、雪壁ルンゼを80m登ってからロープを付けて登攀開始。
　ときおりスノーシャワーを浴びながらビレイする。思っていた以上に傾斜のあるミックス壁を進む宮城は、苦労しながら中間支点を設置していく。サードの私がユマーリングしていくと、ふいにロープが弛み1m落ちた。「どうなってるんだ！　アンカーは大丈夫なのか！」と怒鳴るが、剱沢大滝の爆音が大きすぎて、上にいるふたりには伝わらなかった。登っていくと中間部10mトラバースの屈曲点のナッツとピトンが抜け、フィックスロープは細い雪のリッジに引っ掛かっているだけだった。リッジをロープが切ってしまえば、10mの大スイングを食らうところだった。連続3ピッチを宮城が登っていく。ブッシュが出ているのに傾斜は強い。ゆっくりであるが順調にロープが延びていった。暗くなる直前、4年前の偵察時から目を付けていたビバークポイントに到達。お座りビバークを覚悟していたが、雪を切り崩せば、テントが設営できそうだ。
　さらにヘッドライトの明かりで登り続け、明日のために2Pフィックス。75度の強傾斜でブッシュ壁の雪と格闘してきた伊藤は「楽しすぎて、膝痛いの忘れちゃってたよ」と興奮している。
　アンカーに固定されたテントに入り、お茶を飲もうとテルモスを持ち上げると右手首に痛みが走る。日中から気になっていた手首は、かなり腫れ上がっていた。



登攀２日目。傾斜が強く、ハンギングビレイとなった

2月26日（24日目）雪、朝のみ曇り

昨日フィックスした2Pをユマーリングしたあと、伊藤がトップで1ピッチ延ばすと雪が降り始めた。昨晩は暗くて分からなかったが、見下ろす剱沢ゴルジュが凄まじい迫力である。よくもこんなところに横になれるスペースがあったものだと、呆れるほどの角度で壁は切れ落ちている。ここは世界でも有数の隔絶された岩壁だ。

雪が本格的になり、早くもスノーシャワーが勢いを増してきた。佐藤がトップを代わり7P目を行く。薄い雪の下のスラブにアイゼンを軋ませ慎重にロープを延ばすが、行き詰まった。先ほどまでなんとかすがることができたブッシュはなく、嫌らしい逆層のスラブにリスを見つけようとアックスを振りまくった。ピトンを苦労して設置し、意を決して進む。何度もビレイする伊藤に「頼むぞー」と声をかけずにはいられないシリアスな一手を出し、微妙な立ち込みからマントルを返した。５m下のピトンは効いていて、落ちても死んでしまうようなことはないだろう。しかし、このスラブでフォールしたら簡単に捻挫や骨折くらいはしてしまいそうで、プレッシャーは高かった。

白いガスに隠された谷底には雪崩が押し寄せているに違いなく、敗退後の脱出は極めて難しい。ケガなどしたら、

それこそ命取りなのだ。ときおり危険なスノーシャワーを受けながらも、最大限の集中力を切らすことなくこの核心ピッチを登り切る。リード中、かまっている余裕のなかった右手首がひどく痛む。非常にシビアなリードに疲弊してしまって、「リードを代わってくれ」と言いかけた。デシャバリの私としては、あまり記憶にないことだ。

続く2Pはブッシュが出てきて、プロテクションは5mに1つほど取れて少しはマイルドに。それでも、ひたすら傾斜が強く、心もとないブッシュをつかんだり、アックスを草付に打ち込んだりしては、かぶった部分を乗り越していく。手は異様にパンプし、「もうこのブッシュを放して落ちたほうが楽なんじゃないか」と思ってしまうほど。痛めた右手首の感覚がなくなるころ、なんとか作製したアンカーにぶら下がり、苦痛と安堵でうな垂れた。この傾斜の強いピラーではビレイ中もハンギングビレイとなり、休まることはなかった。アンカー10個中、ビバークしたテラスと上部にあった窮屈な洞窟の2ヶ所以外はハンギングとなり、もう腰が折れそうだ。雪は降り続き、大きなスノーシャワーでガリーが真っ暗に覆われる頻度が高くなってくる。11P目でリード宮城のピックがすっぽ抜け、ビレイしているほうもドキリとした。最後のルンゼのミックスピッチでも傾斜が緩まることなく続き、侮れない。

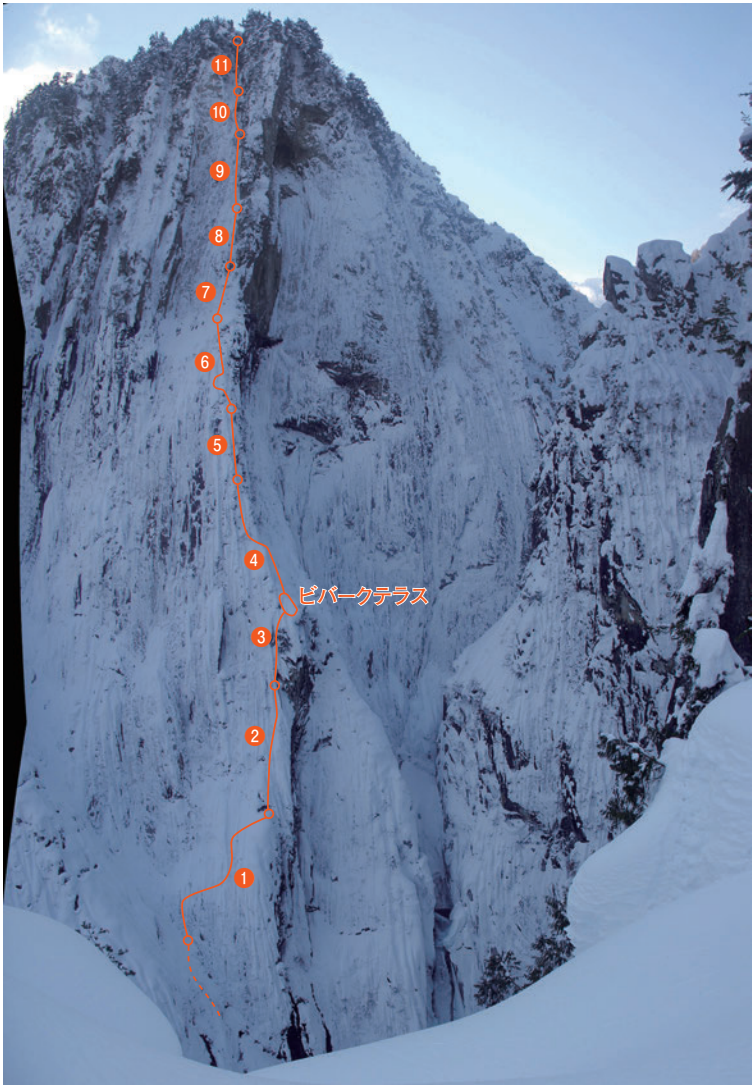
暗闇のなか、真っ平らの雪面に飛び出し、壁の終わりを知った。うれしさが湧き上がるけれど、まだまだ脱出には時間がかかる。爆発させたい喜びを抑え込んでテントを設置した。右手首の調子は最悪だ。異様に腫れ上がっており、骨折でもしているのではと疑ってしまう。スプーンを持って食事をするのもつらく、左手でほとんどの作業をこなした。

剱沢脱出

2月27日（25日目）晴れ、夕方から雪。下降開始8：00〜取付13：00〜十字峡16：00

昨晩までの降雪はやんで、晴天の朝を迎える。当初は、黒部別山北尾根合流点まで登って十字峡に下りるつもりだったが、同ルート下降とした。完登後、地獄の谷底に下りていくなんて思ってもいなかったが、昨日の新雪も午前中、日射に照らされれば落ち着くだろう。半日をかけ、9ピッチの懸垂下降で再び剱沢大滝の爆音響く取付に下り立った。下降中も洞窟状のアンカー1ヶ所以外はハンギングとなり、あらためてこの壁の傾斜を思い知らされる。

真新しいデブリを踏みながら足早に剱沢下流の安全圏に



黒部 剱沢大滝左壁

ゴールデンピラー 11P 380m Ⅵ

0P目＝80m 雪壁

1P目＝50m Ⅳ＋ Mix（ハンギングビレイ）

2P目＝40m 75度ブッシュ（ハンギングビレイ）

3P目＝20m 75度ブッシュ
（雪のテラス・ビバークポイント）

4P目＝40m 70度ブッシュ（ハンギングビレイ）

5P目＝25m 75度ブッシュ（ハンギングビレイ）

6P目＝45m Ⅴ Mix（ハンギングビレイ）

7P目＝50m Ⅵ Mix プアプロ(ハンギングビレイ)

8P目＝25m 80度ブッシュ どパンプ
（ハンギングビレイ）

9P目＝40m Ⅴ＋ Mix（プチ洞窟）

10P目＝50m Ⅴ Mix（ハンギングビレイ）

11P目＝35m Ⅴ Mix（ハンギングビレイ）

着いたころ、降雪が始まる。この降雪が3時間早かったら……と、剱沢を振り返りゾッとした。湿雪が激しく降る十字峡の岩屋で幕営した。

2月28日（26日目）晴れ。十字峡7：00～黒部別山北尾根1980m 18：30～雪洞完成21：00

同ルート下降にしたことで2、3日短縮でき、残りの日数が7日間あった。「十字峡に帰ってきたら、後立山を越えて最短コースで下山する」という計画でここを出発したのだが、剱岳方面へのトライをすることに。けっこうギリギリだが、最後は剱岳に立って、この長大な山行を締めくくりたい。

快晴のなか、傾斜の強い北尾根のラッセルを続ける。苦しいラッセルに喘ぎながら「楽しいなぁ」と呟く伊藤がおかしかった。しかし晴天のもと、黒部川から剱岳に向けて前進する高揚感は格別で、苦しくともやっぱり楽しい。今日は1回の懸垂下降以外、ロープを使用することもなく順調に高度を稼いだ。天気のいい日にできるだけ進もうと1980mまで長めに行動し、雪洞に潜り込んだのは21時となった。

2月29日（27日目）。1980m 7：00～黒部別山～真砂尾根2280m

南風の吹く暖かな朝。湿雪のなか、黒部別山目指してラッセルを続ける。ウエアを濡らしつつも順調に黒部別山へ。ハシゴ谷乗越に下り、真砂尾根を登っていく。すでに体に蓄えられていたエネルギーは枯渇していて、補給をせずに動くとひどくつらい。しかし、十分に食べるほどの食料もない。

3月1日（28日目）ガス、停滞。

天気予報を勘案し、昨夜のうちから停滞を決めていた。9時にやっと起き上がった3人は、しばし呆然として黙りこくったままだった。疲れ切っている。思い返せば、19日泊の雪洞生活から一転、6日連続でハードな行動を続けていた。朝食後、酸欠ぎみになったので入り口を開けて換気する。外はガス。

悪天続きの脱出行

3月2日（29日目）地吹雪。出発5：00～真砂尾根2500m 7：00

昨日の休養でリフレッシュし、目覚めもいい。3時半起床。「北陸地方が高気圧に覆われる」というラジオから得た情報にチャンスを期待し、気合十分で出発した。しかし、雪洞を出ると雪が舞う予想外の展開だ。さらに200mも

高度を上げると、風・視界ともにかなり悪化。「この状態では、稜線付近での行動は厳しいだろう」としばらくテントをかぶって天候回復を待つ。少し回復したかのように見えた2時間後、再スタートするが、50mも上がらないうちに強風と地吹雪で跳ね返される。「高気圧って、いったいどうなったんだよ……」また先ほどの窪地に戻って、つらい天候待ち。足先の感覚がなくなるほどに体を冷やし、待ち続けること4時間。結局、天候は回復せず雪洞を掘って泊まることになった。

いよいよ残り日数に余裕がなくなってきた。明日以降、天候に恵まれないと劔岳登頂は厳しいだろう。エスケープ案は、稜線に出たらすぐに室堂へ下って、アルペンルート沿いをラッセルするというもの。こちらはさほど魅力的でないうえに、非常に長い雪原のラッセルが待っている。このエスケープを一昨年経験している伊藤から、その行程がいかに大変なのか、雪洞停滞中によく聞かされていた。どちらのルートにせよ、日程的に追い詰められている。

3月3日（30日目）湿雪後、地吹雪。出発5：00～内蔵助山荘8：00

残すところ3日間。今日こそは、稜線に抜け出して下山への見込みをつけないと、本当に下山遅れになってしまう。

雪洞を出ると生ぬるく湿った風が吹いていた。伸び放題の髭にツララを作りながら真砂尾根を登り、稜線直下の内蔵助山荘に到着した。稜線に近づくにつれて風・視界ともに悪化してきた。小休憩し気合を入れて出発。しかし、真砂岳付近では風は猛烈、視界もなしで前進不能に陥る。いったん内蔵助山荘付近に下りようと踵を返すが、足元さえうっすらとしか確認できないような完全なホワイトアウトで、コンパスを切っても、強風と傾斜にヨロけながら進んでいると方向が定まらない。やむなくスマホのGPSを使用して内蔵助山荘へ逃げ帰る。自分の山行で初めてGPSを使ってしまった。

まだ時刻は8時。風は小屋付近でも猛烈になっており、待機するにもテントの中でなければ完全に冷え切ってしまいそうだ。強風に吹き飛ばされぬよう慎重にテントを立てて、ひと息つく。稜線上で先ほど得た天気情報をスマホで確認すると、今日中は強風が続くようだ。明日こそは大きな高気圧に覆われて穏やかな晴天になるらしい。今日も2時間ほどしか前進できなかったが、ここで泊まる以外の選択肢はなさそうだ。少しでも条件のいい場所を探そうと小屋の周りを探してみるが、小屋脇の雪面はカチコチの氷となっていて雪洞は不可。結局、小屋の脇で厳重に張り綱を



後立山連峰上空から望む剱岳の勇姿（写真＝内田 修）

張ってテントを固定した。ナイロンがバタつく大音量のBGMが鳴り響くテント内では、会話もままならない。突風にテントの側壁ごと押されて何度もお茶をこぼすありさまで、飛んできた氷片でいつテントが裂かれるかと冷や冷やしながら時を過ごした。

テント生活の日課である水作りを終えて、ひと息ついたころ、「こんなの落ちてたわ、ジャンケンしようか」とテントの底に落ちていたチョコの欠片を拾い上げ、伊藤が言った。間髪入れずに宮城が「それ、さっき俺が食ってたブラックサンダーですわ。ジャンケンとかしませんよ。はい、ちょうだい！　モグモグモグ……ん？　苦ゲェ！　なんだこれ！　ウンコじゃねえかぁ!!」

「またぁー、冗談よせよ。おまえ、ウンコなんか食ったことねえだろ……。うわっクサッ！　ホントにウンコ食ってるよコイツ！」「マジかよ、エンガチョー」

というわけで、髭もじゃの宮城がウンコを食ってしまった惨事で腹がよじれるほど笑わせてもらい、シリアスな雰囲気漂っていたテント内も一時にぎやかになった。

この1週間ほどシュラフも乾かす余裕がなく、かなり濡れてきていた。あまりの寒さにシュラフ3つを連結して、ひとつの大きなシュラフとし、3人寄り添って眠りに就い



31 日目にして剱岳山頂に立つ、左から佐藤、宮城、伊藤

た。隣の宮城の息がウンコ臭いのが気になるが、寒すぎるので許す。

夜中、強風の音と寒さで幾度も目を覚ます。明日は本当に回復するのだろうか。震えながら不安な夜を過ごした。

3月4日（31日目）　出発5：00～剱岳12：00～馬場島18：00

連日、今日こそは……と、本気脱出モードで早朝起床を続けてきたが、本当に今日こそ勝負の日としなければならなかった。1時と決めた起床時間に目覚めたものの、起き上がる気にもならないほどの強風。3時に再び起きると、強風は吹き続けているが少しずつ弱まっている気もしたので、起床して食事をとった。強風は徐々に断続的となり、5時に外に出るころにはだいぶ穏やかになっていた。星が瞬くすばらしい天気だ。この1ヶ月で最高の天候を得て、稜線を軽やかに進む。

31日目となり体は消耗しているだろうが、昨日までの苦労はいったいなんだったのかと思うくらいの無風晴天で、行程ははかどった。昼、待望の剱岳山頂へ。

3月5日（32日目）馬場島～伊折

今日は最終下山日と決めていた32日目。ライト&ファストが持てはやされるのが最近のアルパインクライミングの

傾向だが、黒部横断の場合、かけた日数は、その山行の価値と充実感に比例する傾向が強い。長いことはいいことだ。まさか、すべての予備日を使い切ってしまうとは思いもよらなかったが、大きな充実感に浸りながら、伊折までの８㎞を歩き下山した。

（『ROCK & SNOW072』を再編集・整理し、再録しました）

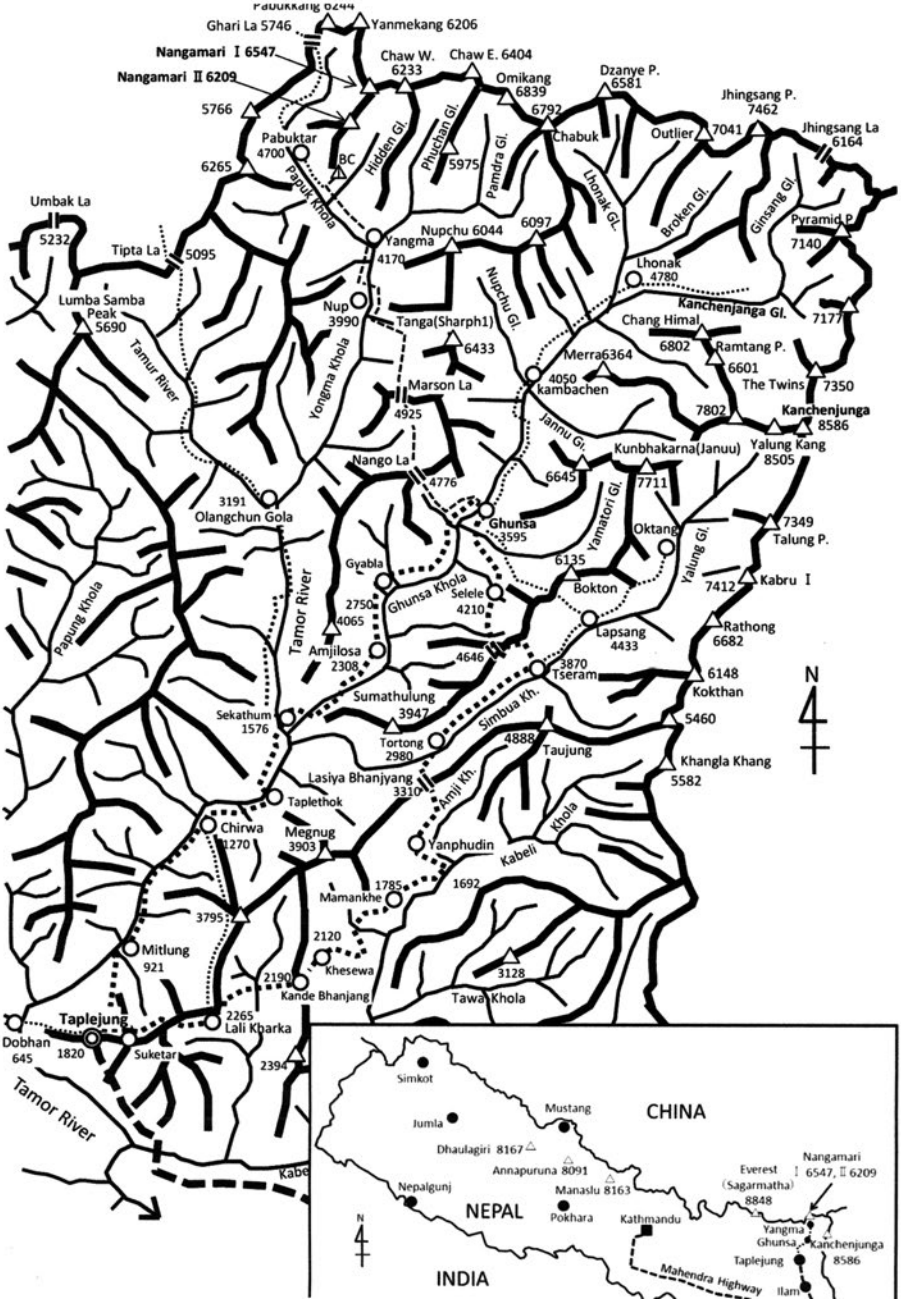
東ネパール・ナンガマリⅡ峰（６２０９ｍ）初登頂

関西支部東ネパール登山隊２０１６

登山計画の始まり

日本山岳会関西支部は２０１５年、設立80周年を迎え、記念事業の一つとしてヒマラヤ登山隊を派遣することにした。２００５年の70周年のときも「西チベット学術登山隊」を派遣し、パチュムハム（６５２９ｍ）峰北稜とギャンゾンカン（６１２３ｍ）南東壁の初登頂と、河口慧海の「謎の越境ルート」の解明をするなど大きな成果を挙げた。２０１３年に入って、ネパール・ヒマラヤ研究の第一人者である大西保（70周年記念登山隊長）会員と打ち合わせを繰り返し、東ネパールの未踏峰・ナンガマリⅠ峰（６５４７ｍ）を目標とした。１９１２（大正元）年に、青木文教が南西のティプタ・ラ（５０９５ｍ）を越えてチベット入りしたことも念頭にあった。同年６月に「関西支部設立80周年海外登山ＰＪ」を立ち上げ、月１回の打ち合わせを開始した。２０１４年６月には、支部報で「ヒマラヤ登山隊参加者募集」を行なった。

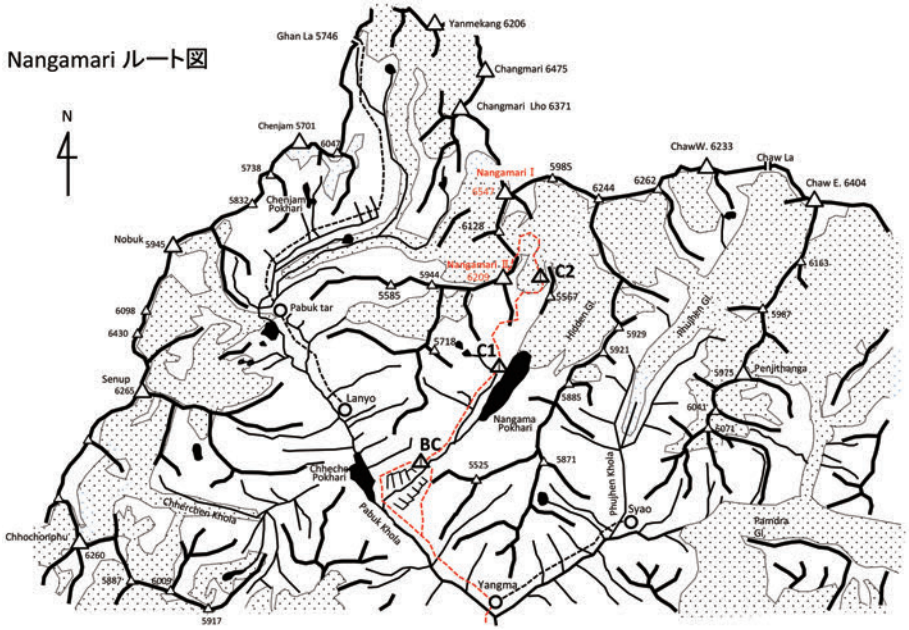
しかし10月下旬、隊長に予定していた大西さんが食道・胃・大腸癌の摘出手術を行ない、２０１４年９月20日、帰らぬ人となった。併せて11月には目標としていたⅠ峰がスイス（現地ではニュージーランドという）隊によって登られてしまった。その後、２０１０年にアメリカ隊が登ったパブクカン（６２４４ｍ）が、実はナンガマリⅠ峰（６５４

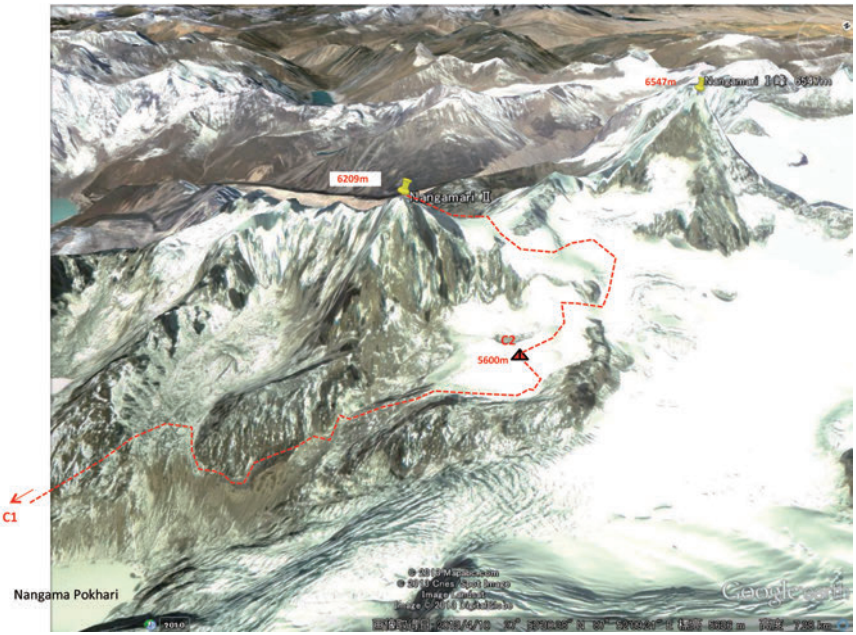

Ghari La 5746
Yanmekang 6206
Nangamari Ⅰ 6547
Nangamari Ⅱ 6209
Chaw W. 6233
Chaw E. 6404
Omikang 6839
Dzanye P. 6581
Jhingsang P. 7462
Jhingsang La 6164
5766
Pabuktar 4700
BC
6265
Hidden Gl.
Phuchan Gl.
5975
Pamdra Gl.
6792
Chabuk
Outlier 7041
Lhonak Gl.
Broken Gl.
Ginsang Gl.
Pyramid P. 7140
Umbak La 5232
Tipta La 5095
Papung Khola
Yangma 4170
Nupchu 6044
6097
Lhonak 4780
Kanchenjanga Gl.
7177
Lumba Samba Peak 5690
Nup 3990
Tanga(Sharph1)
Nupchu Gl.
Chang Himal 6802
Ramtang P. 6601
Tamur River
6433
Merra6364
4050
kambachen
The Twins 7350
Yongma Khola
Marson La 4925
7802
Kanchenjunga 8586
Jannu Gl.
Kunbhakarna(Januu) 7711
Yalung Kang 8505
Nango La 4776
6645
3191
Olangchun Gola
Ghunsa 3595
Yamatori Gl.
Oktang
7349
Talung P.
Gyabla
6135
Yalung Gl.
Papung Khola
Tamor River
Ghunsa Khola
Selele 4210
2750
4065
Bokton
7412
Kabru Ⅰ
Amjilosa 2308
Lapsang 4433
Rathong 6682
4646
3870
Tseram
6148
Kokthan
N
Sumathulung 3947
Simbua Kh.
Sekathum 1576
Tortong 2980
4888
Taujung
5460
Khangla Khang 5582
Lasiya Bhanjyang 3310
Amji Kh.
Taplethok
Chirwa 1270
Megnug 3903
Yanphudin
Kabeli
Khola
1692
1785
Mamankhe
3795
Mitlung 921
2120
Khesewa
2190
Kande Bhanjang
3128
Tawa Khola
Taplejung
2265
Lali Kharka
Dobhan 645
1820
Suketar
2394
Tamor River
Simkot
Jumla
Mustang
CHINA
Dhaulagiri 8167
Annapuruna 8091
Manaslu 8163
Everest (Sagarmatha) 8848
Nangamari Ⅰ 6547, Ⅱ 6209
Nepalgunj
NEPAL
Pokhara
Kathmandu
Yangma
Ghunsa
Kanchenjunga 8586
Taplejung
Mahendra Highway
Ilam
INDIA



ナンガマリⅡ峰初登頂

ナンガマリⅡ峰北壁を登る。左上がⅡ峰主峰（南峰）





ナンガマリⅡ峰登頂ルート（グーグルアースより）



ナンガマリⅠ・Ⅱ峰間のコルに向かう。中央がナンガマリⅡ峰(左奥が主峰、右が北峰)





ナンガマリⅡ峰を目前にして。左手後方は同Ⅰ峰





ナンガマリⅡ峰北壁から西方を望む。右からエベレスト（チョモランマ）、ローツェ、マカルー



ナンガマリⅡ峰頂上に立つ



Ｃ２で記念撮影。バックはナンガマリⅡ峰

東稜からマナスル登頂



7300 m付近のトラバース。前方右側、日の当たっている斜面がノーマル・ルート



マナスル東稜登頂ルート（グーグルアースより）



技術的核心部となった 6000 m付近の岩稜帯。左上はピナクルとマナスル山頂（左）



6000 m付近の岩稜帯。一部はプンゲン氷河側を巻いて通過





C 2～C 3 間、6100 m付近のナイフリッジを慎重に通過する





C 3 の手前、6500 m付近の雪原を行く。行く手には雪煙を上げるピナクルが



7200 m付近の大雪原をトラバースしてノーマル・ルートのプラトーへ



10 月 7 日アタック日、7550 m付近のプラトーを行く小野寺隊員

7ｍ）であったという訂正記事が、２０１５年のＡＡＪに掲載された。大きなショックを受けたが、目標をナンガマリⅡ峰の初登頂と、Ⅰ峰への縦走登山に切り替えて実行することにした。

いよいよネパールへ

カトマンズ到着後、日本から発送したテント・登攀装備・高所食や現地購入のフィックスロープ・ガスボンベ・マットなどの数量確認と、不足する食料と登攀装備などの購入や梱包作業などで、あっという間に３日間が過ぎた。チャーターバスで移動したタプレジュンでは約２・５ｔ、80個の隊荷にナンバーを付け、ポーターにナンバープレートを持たせて、キャンプ地到着時に隊員が隊荷の状況をチェックした。

グンサまでのキャラバンはおおむね順調であったが、モンスーン中とあってキャラバンルートが所々崩れており、通過に緊張した。キャラバン中はほかの登山者やトレッカーを見かけることはなかったが、タムール川沿いの道にはヒルが多く、悩まされた。キャラバン６日目に登山基地・グンサに到着した。

翌日は１日休養とし、久しぶりに水浴をしたり、ラマ僧にプジャ（安全登山の祈祷）をしてもらったり、衛星通信のテストを行ない、ベースキャンプ入りに備えた。また、タプレジュンで雇用したポーターを解雇し、ここからは隊荷の輸送のほとんどを36頭のヤクが担うことになった。翌日からベースキャンプに向かう峠越えが始まったが、連日の雨でナンゴー・ラやマルソン・ラからは目指すナンガマリ峰は見えなかった。また、最奥の村ヤンマでは前日の降雪でヤクが動けないということで１日停滞となったこともあり、いつモンスーンが明けるのだろうかと焦りを感じ始めた。

登山活動

ヤンマ集落からパブク・コーラ沿いに北西に進み、チェチェ・ポカリ上のカルカで１泊して、９月29日、ナンガマ・ポカリの約２㎞下流の４８００ｍ地点にあるカルカにベースキャンプを設営した。計画ではナンガマ・ポカリの北端にベースキャンプを設ける予定であったが、グンサのラマ僧から水源の汚染には注意をするように言われていたことと、湖の周辺は氷河の後退による削岩で平坦地が少なく、これらによって予定した湖の上端ではなく、下端のさらに下のカルカに設けざるを得なくなったのである。したがっ

て、C1、C2の高度も下がることとなり、その後の隊員による荷上げにも大きな影響をもたらすことになった。

30日はベースキャンプの開村式を行ない、上部で使用する登攀具と露営用具、食糧の仕分けを済ませた。また、キャラバン途中から高度の影響で体調を崩す隊員も出始めたので、当初C1に予定していた5600m地点をC2にすることにし、その中間にC1を設けることにした。翌日から荷上げを兼ねてC1の場所を探すことにした。ベースキャンプから河岸段丘の上端を進み、さらに山稜を登って5209mの地点の、水が流れる場所を仮C1として荷物を残置した。以前のパーティもこの場所をキャンプ地としたようで、朽ちた竹棹などが散乱していた。帰路、そこから150m下った地点に水場を見付けることができたので、荷上げの利便性などを考慮して新たなC1とし、10月2日、2張のテントを設営した。

しかし、順調に進んでいたかに見えた登山活動も、3日以降新たな局面を迎えた。BC入り前後から隊の先頭に立って偵察や荷上げを行なっていた岩井隊員が2日、大岩(5282m)までの偵察を終え帰幕したC1で、4日には松仲隊員がBCでそれぞれ体調を崩した。その後も岩井隊員は42度を超える高熱が続き、松仲隊員も浮腫がひどくなったので10月6日、最奥の集落ヤンマに下ろした。その間も上部への荷上げやルート偵察は継続していたが、ヤンマ滞在の隊員の体調回復は思わしくなく、立野医師の要請もあって7日、C1より衛星携帯を通じて、ヘリコプターのチャーター準備をカトマンズのエージェントに要請した。8日には重廣がC1よりBCを経てヤンマに下り、2人の体調を確認するとともに、正式にヘリコプターのチャーターを行ない、翌9日、2人をカトマンズに送り出したのちBCに戻った。ヤンマの長老に聞いたチベット暦では16日までは天気が悪く、17日以降は好天という。10日のインターネットによるラサの天気予報では、13日以降の好天を予測していた。

11日C1入りしたが、夜半からの降雪のため翌日は停滞となった。当初予定では、登頂を済ませてBCを離れる日を21日と決めていたが、22日に変更した最終スケジュールを12日に発表し、13日、8隊員が上部デポ地(5450m)までの荷上げと、C2予定地へのルート工作を行なったが、翌日は晴天にもかかわらず、前日の荷上げの無理がたたった隊員の疲労が激しいため休養とした。そのため、前日カトマンズからヘリコプターでヤンマに到着した岩井隊員がC1に戻り、隊に合流できた。15日、全員がC2予定地に

到着してキャンプを設営した。16日、ナンガマリⅡ峰の登頂に向かったが、時間の経過とともに、好天による昇温でⅠ・Ⅱ峰間のコル下の斜面の雪崩が心配されたため、５８８０m地点で引返した。東方遠くにカンチェンジュンガとクンバカルナ（ジャヌー）が眩しく見えた。この時点でⅠ峰への縦走を諦め、Ⅱ峰の初登頂のみに絞り、帰りのキャラバン手配のためサーダーをＢＣに下山させるとともに、隊員には明日が最後のアタックになることを伝えた。

17日は24時起床、２時過ぎにＣ２を出発した。昨日の最高到達点までは２時間半で到達し、Ⅰ峰～Ⅱ峰の最低コルには６時に着いた。日の出前とあって気温は低いが、眼前（西方）には朝焼けのマカルーからチョモランマ、チベットの山並みが見え、その神々しさに息を呑んだ。左手にはナンガマリⅡ峰北峰が屹立している。支部設立80周年の目的は、参加者全員が安全にⅡ峰の初登頂を果たすことにある。ここからは20代の若手隊員２名がフィックス工作隊として先行し、２名がロープやスノーピケットの補給を行ない、５隊員が後続する編成をして、登頂の確実性と安全確保に努めた。

４段になっている雪壁の弱点を衝きながら高度を稼ぐ。最後は北峰と南峰（本峰）のコルに出て、右のナイフリッジを慎重に進む。リッジの西側に出ている雪庇に注意しながら登り、12時37分（現地時間）、ナンガマリⅡ峰の頂上に９名がたどり着いた。登高の途中から雲が湧き、残念ながら視界はほとんどない。全員が集まって登頂写真を撮りたいところであるが、脆弱なリッジ状の頂上がそれを許さず、へばりつくような格好の写真となったのは残念である。

撮影後は、不安定な頂上に長居は無用である。出発からの行動時間はすでに10時間を超えており、下山中、フィックスロープのランニング・ビレイの架け替えのたびに座り込もうとする隊員を鼓舞しながら、急斜面を下降する。16時11分、到達したコル下からはロープを解いて17時35分、Ｃ２に帰幕した。翌日、全員がベースキャンプにたどり着いて今回の登山が終わった。

登山を終えて

80周年記念海外登山ＰＪは２０１３年６月に第１回の会議を開始し、出発までに34回を数えた。２０１５年２月から始めた「ヒマラヤ登山塾」も20回開催し、登山準備とともにヒマラヤ登山のイロハを学んだ。トレーニングは例会山行参加以外に、２０１５年３月から出発直前の８月28日まで10回行なった。前半は雪上歩行や縦走登山を主として

体力養成を図り、中盤では岩場でのユマーリングをトレーニングの主体とした。２０１６年７月から８月末にかけて３回、富士山頂上周辺でのビバークを中心とした高所順応トレーニングを行なった。その結果は、必ずしも満足のいくものではなかったが、体力・技術の錬成とともに体験の積み重ねが必要である、との認識は参加者全員が感じたと思われる。

今回は支部の80周年記念事業ということもあって、創立１１０周年記念事業からも１５０万円の助成を受けることができた。また、支部募金委員会の推進力もあって、約１０００万円の募金を集めることができたが、特筆すべきは、そのうちの３００万円ほどは参加隊員によるものである。隊員の個人負担金は１人80万円で、ほとんどの隊員がヒマラヤ初挑戦とあって、装備費も半端な額ではなかった。隊員には多大な負担をかけて申し訳なく思うとともに、これほどまでに今回の山登りに懸けた情熱を忘れずに、今後の活動をさらに増幅させてもらいたいと願う次第である。

【行動記録】

9月9日　関空～カトマンズ
9月13日～14日　カトマンズ～タプレジュン（１８２０m）
9月16日～21日　タプレジュン～グンサ（３５９５m）
9月23日～29日　グンサ～ベースキャンプ（４８００m）
10月2日　C１（５０５０m）建設、大岩（５２８２m）到達
10月3日　上部デポ地（５４４８m）到達
10月6日　岩井・松仲隊員ヤンマ（４２００m）へ下山
10月9日　岩井・松仲隊員ヘリコプターにてカトマンズへ
10月9日～10日　BCにて休養
10月11日　BC～C１
10月12日　C１にて休養
10月13日　C２予定地ルート工作、荷上げ。岩井隊員BC復帰
10月14日　C１にて休養
10月15日　C２（５５８０m）建設
10月16日　５８８０m地点（Ⅰ～Ⅱ峰間コル下）往復

10月17日　ナンガマリⅡ峰初登頂
10月21日～24日　ベースキャンプ～グンサ
10月25日～11月1日　グンサ～タプレジュン
11月2日～3日　タプレジュン～カトマンズ
11月7日～8日　カトマンズ～関空

【登山隊員】

隊長	重廣恒夫	69歳（7931）	関西支部
登攀リーダー	岩井賢助	27歳（15223）	四国支部
食料	加藤芳樹	49歳（14413）	関西支部
装備	黒田記代	63歳（14591）	関西支部
輸送	竹中雅幸	26歳（15458）	関西支部
医療	立野里織	40歳（15764）	関西支部
会計	長瀬美代子	38歳（15205）	四国支部
食料	松仲史朗	64歳（15395）	関西支部
記録	茂木完治	69歳（13568）	関西支部
通信	森本悠介	27歳	関西支部会友

（重廣恒夫）

若手メンバーで東稜からマナスル登頂

東京農業大学マナスル環境学術登山隊２０１６

登山に至るまでの経緯

東京農業大学山岳部創部90周年にあたる２０１４年、海外の高峰登山を経験するという計画が挙がり、大学の夏季休暇期間に日程を合わせ、現役学生たちとともに中国のムスターグ・アタ峰（７５４５ｍ）に挑み、メンバー８名で全員登頂を果たすことができた。そして、この遠征のメンバー４名が主体となり、次なる山を模索することになった。高所において自分の身体がどのような反応をするのか知っておくことは、今後の登山活動を考えた上でも必要であると考え、目標を８０００ｍ峰に絞ってルートを検討すると、長大なマナスルの東稜が挙がってきた。未踏ルートではないが、学生時代に長期山行で培ってきた体力とムスターグ・アタでの経験を生かせる、私たちには挑戦しがいのある、とても魅力的な対象であった。

今回の遠征は東京農業大学の創立１２５周年の記念事業であり、山岳部ＯＢ６名からなる登山隊と、短期大学部助教の下嶋聖先生と学生４名からなる学術調査隊の計11名で構成され、ＢＣと麓のサマまで行動をともにした。また、登山隊は２００３年のエベレスト・ローツェの遠征より継続している上部キャンプでの大便の荷下げ、ＢＣでの雑排水の濾過など、環境へ配慮した登山活動を展開した。

今回の登山計画に至るまでに私は２度、中国での海外登

山を経験していた。初めての遠征は学生のとき。コングール・チュビエという山で、ベースキャンプからはムスターグ・アタがきれいに見えていた。このときの景色と頂上を踏めなかった悔しさとが、２０１４年のムスターグ・アタ遠征に行くきっかけとなった。そして、今回のマナスル東稜である。３回の遠征はつながりを持っており、経験することで見えてきた目標であった。

カトマンズでの準備

本隊出発の３日前に先発隊３名を派遣し、事前の買い出し、ホテルの手配、輸送した荷物のチェックを行なった。事前に把握していたことだが、船便で３ヶ月前に発送していた荷物の半分以上が、まだ届いていなかった。そこには上部で使うテントやロープはもちろん、個人装備も大量に入っていた。登山隊到着までに届くことを祈っていたが、とうとう荷物が届くことはなく、タメルの登山用品店で購入したり、レンタルすることによって対応した。購入した装備は下山後にタメルで思いのほか高値で買い取ってもらい、想像よりも出費は抑えることができた。結局、荷物は発送した９ヶ月後にカトマンズに到着し、一度も使うことなく日本に帰ってきた。登山隊のメンバーは全員初めてのネパールであったが、カトマンズでの準備は、優秀なガイドが慣れた手つきで段取りをしてくれたおかげで、とてもスムーズに進んだ。ネパールでは理不尽に登山を終わらせようとしたり、突然、日程を変更させられたりするようなことがないので安心できる。ネパールのガイドは登山に協力的で、非常に経験値が高い。最新の登山用品を手に入れるのは難しいが、道具もなんだかんだそろってしまう。さすがに登山を生業としている国だけのことはある、と感じた。

魅力的なキャラバン

今回はカトマンズからベシサハールへ移動し、５１６０ｍのラルキャ・ラを通過して、マナスル登山の拠点となる村サマに入るというアプローチ方法をとった。ヘリを使ってサマに入る隊も多いようだが、キャラバンも今後の活動の幅を広げる経験の一つと捉え、時間をかけて、あえて歩くことにした。下山の際はアルガート・バザールへと下り、行きと帰りでマナスル・サーキットを一周するという魅力的なキャラバン・ルートとなった。

学術調査隊は各ロッジのヒアリング調査も行なった。ジープで入れるダラパニはアンナプルナ・サーキットとマ

ナスル・サーキットの分岐点でもあり、比較的大きな村だが、ダラパニ、サマ以外の村はロッジが数軒しかない、小さなものだった。しかし、想像よりロッジは清潔で、不快に思うことはなく、快適なキャラバンであった。ラルキャ・ラ越えの日は13時間の行程となったが、大きく体調を崩すことなく、無事にサマに到着することができた。

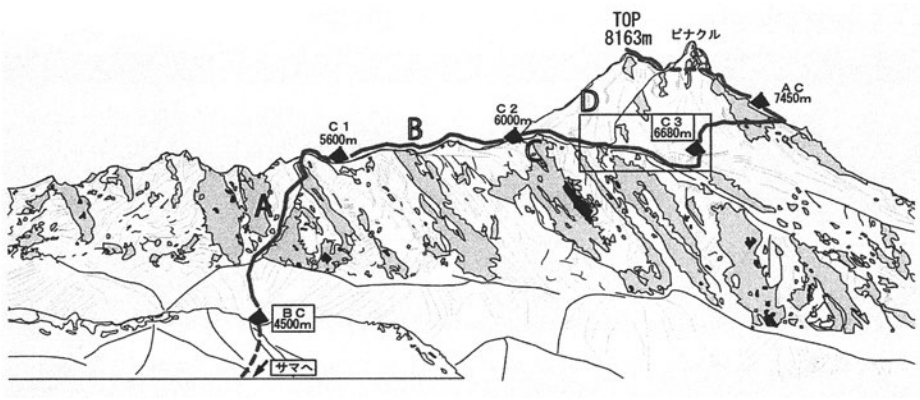
ここから学術調査隊はノーマル・ルートのBC、登山隊は東稜のBCへと、それぞれ分かれて活動することになる。学術調査隊はノーマル・ルートBCにて、水質調査、ドローン等を用いたBCの測量、見取り図の作成、各隊へのヒアリング調査等を行なった。

登山活動開始、BC入り

事前のミーティングで、ガイドはサマから東稜BCへの道を知っていると言っていたが、詳しく聞いてみると、そこは全く見当違いの場所であった。サマの村人の中から過去に東稜BCに行ったことがあるという人物を案内に付けて急遽、偵察日を設けることとした。途中まで村人の話を聞きながらゆっくりと登っていたが、あまりにもスピードが遅い。しびれを切らしたガイドがBCまでの行き方をある程度聞き出すと、村人を置いてどんどん登っていってしまう。村人に別れを告げて急登を登って行くと突如、平坦地が現われ、BCに最適な場所を見つけ出すことができた。歩いて1分ほどの所に水場もあり、大きなテントも問題なく設営できるのだが、このあたりはとりわけ雲が発生しやすかった。そのためBCでの滞在時は終日雨に見舞われることとなるのを、このときは知る由もなかった。

サマで学術調査隊と別れ、8月26日にサマの村人をポーターとして雇い、BCを目指す。この日は天候も良く、村人も含め皆気分がいいようだ。和気あいあいとした雰囲気で、気持ち良く登ることができた。出発前に行なっていた大学の低酸素室でのトレーニングと、ラルキャ・ラを越えた影響もあり、体調も良い。それでもBCでの整地、テントの設営をしていると息が上がり、立ちくらみを起こした。雑排水の濾過装置や大便を降ろす樽の設置も行なった。

ここからいよいよ登山活動がスタートする。今回はBCから頂上までにキャンプを4つ設営する。キャンプ設置ごとにBCへ下降し、休養をとるというオーソドックスなスタイルで、アタック・ステージを含めると5つのステージから成り立つ計画を立てた。



BC〜C1

出発前にプジャを行ない、C1へ向けて急なモレーンを登っていく。2時間ほどで5000m付近の東稜の取付であるルンゼ基部に到着する。見上げるルンゼはぼろぼろの急な土壁から始まる。これから幾度となく上り下りする登路としてはいささか不安を覚えたので、別のルートを探し、500mほどトラバースした箇所に見付けた尾根ルートを試登したが、上部で発生した雪崩がこれから向かおうとしていたラインを通過したので、登るのを断念した。

ルンゼに戻り、土壁を登るとルンゼ上部まで見渡せる箇所に出た。岩質自体は氷河で磨かれ硬い。想定していたよりも状態は良さそうだが、砂と不安定な石が堆積して、一度転がりだすと止まらない。特に下降の際は、どんなに気を付けていても落石を起こしてしまうため、全員まとまって下降せざるを得なかった。

2日間のルート工作でルンゼを抜け、偵察を含む5日間の行程で5400mのC1にたどり着くことができた。ルンゼを抜けた後もブラック・アイスの斜面があり、想定よりもロープを出す箇所が多かった。スピーディに行動するために、ルンゼ内はすべてロープを固定することとしたが、落石で埋まったり、切れることも多く、ステージごとに補

修した。

C1〜C2

東稜の主稜線上に合流したC1からは明瞭な雪稜となり、ルンゼと比べると精神的な負担が少ない。途中の細い雪稜とセラックの通過にロープを使用したが、特に困難な箇所もなくC2に行ける。高度に順応してしまえば3時間足らずだ。岩稜帯の取付があつらえたように台地となっていて、絶好のキャンプ地だった。

C1までは状態の悪さに出鼻をくじかれそうになったが、皆体調は良い。これから始まる岩稜帯を前にして、ようやくこのルートのスタート地点に立った思いだった。C2への荷上げ日にあてた2日間は、時間に余裕があったため岩稜帯のルート工作も行なうことができ、岩稜帯を抜けられる見通しが立ったことは大きかった。

C2〜C3

岩稜帯の岩質は硬く、ハーケンの効きも良い。荷物が重いので余裕はないが、天候が良ければ、圧倒的にそびえるピナクルを見ながら高度感のある登攀となり、気持ちも高ぶる所だ。その後に現われるナイフリッジを抜けると、ルートは徐々に広い雪原状の広い尾根となり、一昨年登頂した中国のムスターグ・アタを彷彿とさせた。

6400m付近で150mほどのナイフリッジを通過し、クレバスのある雪原を抜けると、頂上台地へと続く尾根へとルートをとる。ここでは、マナスル氷河側へ中規模な雪崩が発生した。尾根上を忠実にトレースしていたが、少しでもマナスル氷河側に入っていたら巻き込まれていただろう。破断面は40cmくらいで、広範囲に及んでおり、ここ数日間で積もった新雪と気温の上昇が原因だろう。ビーコンは着用していたが、巻き込まれればとても救助できるような場所ではなかった。傾斜の緩い箇所を整地してC3とした。

C3〜AC

今回我々にとってルート中最大のポイントは、この区間であった。C3からは脛ないし膝のラッセルで始まる。朝は快晴であったが時間とともに視界が悪化し、いつしか数m先しか見えなくなった。高度が上がると行動スピードも落ちてくる。これに比例して、隊員間のスピードの差も顕著に表われるようになってきた。視界の悪いなかGPSでこまめにルートをチェックするが、想定よりも登り過ぎて

しまい、うまくノーマル・ルートに合流できなかった。セラックや露岩などの詳細な地形の判断は、GPSや地形図だけでは限界があった。7450m付近まで高度を稼いだが、7300mまで下降して荷物をデポし、C3に戻る。

計画ではACを往復し、翌日BCに下降、BCで休養のちアタック・ステージに入る予定であった。C3に戻った我々は、翌日再度ACへの荷上げに向かうか、一度下降して立て直すか悩んだが、長時間行動で疲労がかなりたまっていた。現在のコンディションでACまで届く確証が得られなかったため、一度BCに下降することを選択した。

雨と霧ばかりのBCでは、ダッフルバッグにカビが生えていた。読書やトランプでゆっくりと休養したのち再度ACへの荷上げを試みたが、2回目の荷上げもACには届かず、ノーマル・ルートに合流した7300m地点でタイムアップとなった。テントは設営できそうもないので、デポした荷物は次回、ACへの移動の際に荷を上げることとして、アタック・ステージに移ることにした。

この区間は、地形図で見る限り徐々に標高を上げながらノーマル・ルートに合流できると考えていたが、実際は7200mまで高度を上げてからでなければトラバースできなかった。ほぼ平行移動のトラバース区間は距離が長く、上部プラトーから吹き下ろしてくる風がトレースをあっという間に埋めてしまう。一度ルートを作ってしまえば楽な岩稜帯とは異なり、常に一からのスタートとなるこの区間は、最後まで私達たちを苦しめることとなった。下降中、まとまった降雪のせいでC1のテントは埋没し、1張はポールが折れ、完全に使えなくなってしまった。

アタック・ステージ

10月2日にBCを出発し、10月5日、全員でAC入りに成功したが、ペースの落ちた長谷川の到着は日没後になった。テントに入り、しばらくすると疲労は回復したようだが、無酸素での行動はリスクが高いと判断し、翌日は長谷川のみ酸素を使用してアタックに向かわせることにした。今回の計画では酸素ボンベをC3に1本、ACに3本荷上げしていた。C3は緊急用として、ACは緊急用兼無酸素での登頂が困難となった際に使用する目的としてのものだった。

10月6日、天気予報では天候は回復に向かうはずであったが、風も強く、視界も悪い。一向に回復の兆しがない。私の頭の中にACでの停滞は選択肢になかった。ここから先は全員未体験の高度へ踏み込むことになる。自分の体も

どうなるか分からない状況で、あまりに先の読めない部分が多過ぎる。ただでさえ疲労する高度で長時間過ごせば、体力の消耗は避けられない。登るか降りるかの二択。靴を履き準備万端で待機するも、時間だけが過ぎていく。疲労はあるものの体調は悪くない。ここに留まっても、少しずつ削られていくだけである。天気が回復に向かうという予報の下、全員で出発することにした。日没になっても天候が回復すれば、頂上を踏んで帰幕できると判断した。しかし、７６５０ｍまで登った時点で天候回復の兆しが見えなかったため、断念せざるを得なかった。

翌日もさほど天候は変わらなかったが、しばらくするとうっすらと山頂が目視できるようになってきた。高度に最も順応していた小野寺、西出に体調を尋ねると、昨日とあまり変わりないという。悩んだ末、酸素使用で山頂を踏んで帰るという選択をした。私と小野寺の２名で毎分２ℓの酸素を使用して山頂を目指し、西出には下山の指揮を取ってもらい、４名で先にＣ３へ下山させることにした。

山頂までは大海原のごときプラトーを突き進んでいく。ＡＣを７時に出発、交代でラッセルをして13時15分に山頂手前のコルに到着。西からの風はあるものの行動には支障ない。天候は良かった。13時25分、カメラを取り出し山頂直下で小野寺の登頂シーンを撮影した。小野寺が山頂に立ったのを見届けたときは、一緒に登った仲間たちへの感謝の気持ちでいっぱいになった。きっと小野寺も同じ気持ちだったと思う。

しかし、続いて私が山頂に立ったときには、小野寺はすでにそこにいなかった。どこに行ってしまったのかすぐには理解できなかったが、足元の雪面を見るとトレースが不自然な形で途切れていたのを見て、滑落したことを悟った。安定したコルまで戻り、13時30分に下山中の西出へ事故発生の無線を入れる。衛星電話は小野寺が持っていたため、無線以外の通信手段はなかった。西出からＢＣのガイドに一報を入れてもらい、カトマンズのエージェントや日本への連絡を考えて、西出には一気にＢＣまで下るように指示をした。

私もすぐさま下山にかかり、山頂からＡＣへ１時間半で戻り、デポされた個人装備をパッキングしてＣ３へ向かった。先行した隊員のトレースはすでに風で消され、長いトラバースではラッセルを強いられた。深さは脛くらいで大したことはなかったが、ペースが上がらない。

西出は15時にＣ３に到着し、そのままＢＣを目指した。ほかの隊員は順次Ｃ３に到着し、20時に高野、西出以外の

3名全員がC3にそろった。C3に向かっていた私は、日没となりフラッグも見失って、完全にルートを外れてしまった。トラバースが終わる前に高度を下げてしまい、セラックの切れ目に出るなどして、幾度となく登り返しをしていた。正規のルートに戻り、迎えに来た関根と合流して、日付の変わった1時に無事C3に戻ることができた。時を同じくして西出も無事にBCまでたどり着いた。暗闇の中、単独での下降は大変であったと思う。西出と3時ごろまで交信を行ない、次回交信を6時半として床に就いた。

翌日はテントを撤収して全員BCへと帰幕。西出は各所への連絡のためサマへと下った。捜索のヘリはサマのヘリポートまで来るものの天候が悪く、なかなかフライトできなかった。天候の回復した10月15日、17日とそれぞれ3回の捜索フライトを行なったが発見には至らず、私はネパール政府、日本大使館等への報告のため、そのままカトマンズまでヘリで戻った。隊員たちはキャラバンでアルガート・バザールまで戻り、カトマンズで私と合流したのち、10月25日に帰国した。

信頼できる仲間と、すばらしいルートに挑めた幸せな時間だった。しかし、目的であった「無酸素での全員登頂」は果たせず、登頂を果たした小野寺隊員を事故で亡くしてしまった。この事実に対して、何も言い訳することはできない。彼と過ごした時間と経験を今後、私たちにとって有意義なものとしていくことでしか、彼を供養することはできない。登山中、彼は常に朝一番のラッセルを買って出てくれていた。ほかの隊員の準備が終わる前に彼は登りだし、登山隊が目的を果たすために、自分ができることに精一杯取り組んでくれていた。今でも彼の後ろ姿が目に浮かぶ。最後まで私は彼の背中を見ていた。

計画に至るまでの苦労を厭わず、経験を重ねることで見えてくる世界を、これからも大切にしていきたいと思う。

【行動概要】

8月12日～13日	先発隊、羽田～カトマンズ
8月15日～16日	本隊、羽田～カトマンズ
8月19日～25日	カトマンズ～ベシサハール～ビムタン～ラルキャ・ラ～サマ
8月28日	サマ～東稜BC
9月7日	C1建設
9月13日	C2建設
9月20日	C3建設

10月5日　AC建設
10月6日　第1次アタック失敗
10月7日　2名で登頂に成功するも滑落事故発生
10月12日　BC撤収～サマ
10月15日～19日　サマ～フィリム～カトマンズ
10月20日～24日　カトマンズ滞在
10月25日　カトマンズ～広州～羽田

【登山隊員】

隊長　高野 優（渉外、31歳）
隊員　西出広平（輸送・保険、27歳）
長谷川新平（食料・医療、27歳）
岩附正樹（装備・会計、23歳）
小野寺央峻（通信・気象、23歳）
関根孝高（記録、22歳）

（高野 優）

［日本山岳会創立１１０周年記念海外学術登山隊］

ゴジュンバ氷河調査隊　活動報告

大森弘一郎

【第１章】　発端と経緯

はじめに

当会の初代会長の小島烏水（久太）は、当時、日本の氷河地形を考える中心人物であったと言われている。日本山岳会は地質や氷河や生物など、自然科学の分野での貢献も目指していたと見られ、特に氷河に対する関心は高かったと思われる。

山はただそこにあるだけだが、その山に向かい、山を通して考え、行ない、感じて、自分に何かを得る。そういうかたちで、人々は山から恵みを受けてきた。言い換えると、物言わぬ山からの言葉を聞き取って自らに役立てたということになる。こうした考えと同様に、今回も山が人々に言いたいことを、具体的なかたちで聞き取ってみたい、それを氷河の変化を通してやってみて役立てたい。小島烏水の時代の人たちと同じ思いの行動を、現代の環境のなかでやりたいと考えた。

この調査と考察においては、自分が測定し、撮影し、また観察した事象のほかに、現代の技術で公開されている豊富な情報を使い、それを組み合わせて利用し、解明に役立てようとした。例えば、グーグルアースの衛星画像であり、気象衛星であり、フォトスキャンのソフトであり、一眼レフの連写機能、GoPro、ヘリコプターであり、水深を測る

簡便な測深器である。これらは今後も簡便に活用できると思われる。

当会の一員として、会と縁の深い氷河との関係のなかで、氷河からの自然の声を人々への警告として聞き取ること、また氷河池の拡大が氷河決壊洪水（ＧＬＯＦ）を起こす場合には下流域に津波の被害を及ぼすが、これを予知して事前に防ぐこと。これを行なうことは我々の役目であろうと考えた。

我々と縁の深いクーンブの中心にあるゴジュンバ氷河は格好の対象であった。さらに思いを広げて我々が直面する地球環境問題に貢献する、それを自分たちのできるなかでやりたいと考えた。

これが創立１１０周年記念事業への応募の動機であり、このような行動を目指している団体会員である「ＮＰＯ山の自然学クラブ」を母体とするかたちで活動の申請をした。

これに対して、当会の理解が得られて、記念事業として取り上げられることが決まったのは２０１６年９月であり、会報で参加募集公告をできたのは11月である。これに20人ほどの関心者が集まってくれた。

その後、資金の不足を埋めるために寄付を募り、多くのご協力をいただき、計画の修正をした。また、流動的だったが自己負担額が増えるかたちの計画に変更し、調査を主目的とする本隊（Ｇ隊）の計画を縮少し、サポート隊（Ｓ隊とＦ隊）を計画のなかに据えるようにした。

調査の内容と参加費用に合わせて、参加者が次第に減っていくなかでも計画の準備を進めていた。

その過程で予想外のことが起きた。２月に大森が椎間板ヘルニアになったのだ。これの治癒に対する医師の診断内容により、計画を秋に延期した。当初の参加希望者には申し訳ないことであった。

その後、審査委員小委員会の福岡孝昭氏、三浦英樹氏、神長幹雄氏の工夫と助言もあって、調査を現地調査のみでなく、私にとって経験の多い空撮に現地調査を組み合わせることとし、参加しやすいように３つの期間の計画に変更した。

隊は空撮で得た資料を使って現地を調べる。そのためには空撮が先でなければならないが、遅くなると結氷があり現地調査に影響する。この「空撮→現地調査」の条件を満たすため、モンスーンが明けてなお、結氷の始まらない期間を上手につかむという難題をクリアすることが必要になる。モンスーン明けに関する過去情報は得られるのだが、氷結の情報は少ない。

そこで、過去の気象情報を克明に調べ、経験と合わせて10月12日に日本出発と決めた。日本からのメンバーは3人で、現地参加のシェルパの活動を期待した。

過去の経験

この氷河には、1974年から縁があった。

1974年12月にクーンブの上を飛んだときに写真記録を得ていた（P100）。このときの写真では小さい池を数個を探し出すことができた。1992年4月の空撮でも目は池に吸い寄せられた。このときはゴジュンバ氷河のターミナルに大きい池が成長していた。

2007年11月に朝日新聞の武田剛記者が社機で氷河を写していたが、これにも全域は入っていない。前後してS.S.Thompson の調査があった。

2009年に現地予備調査を行ない、2010年には空撮を行なった。これらの取得したデータを基礎データとして今回の調査に活かした。

これを整理すると、以下のようになる。

1974年12月：大森、GENメンバーでB727空撮
1984年：　S.S.Thompson 調査
1992年4月：大森、PC-6空撮　S.S.Thompson 調査
2007年11月：朝日新聞・武田剛記者、社機で空撮、S.S.Thompson 調査
2009年11月：大森の現地調査
2010年4月：大森・岡内　PC-6空撮　S.S.Thompson 調査
2016年10月：今回の空撮と現地調査

これを池の面積と体積の経過で見ると以下のとおりである。

	1974	1984	1992	2007	2010	2016
氷河池の表面積	2ha	—	7以上	15以上	31ha	27ha
S.S.Thompson 面積	—	4	6	17	30	
氷河池の体積	不明	不明	不明	不明	不明	約160万㎥

全面積での比較が出せないが、ターミナルの池の拡大状況は、S.S.Thompson のデーターとうまく整合している。1974、1992、2007、2010年の記録と、グーグルアースの2015年の画像に、今回の空撮と現地測深調査を加えて検討し、さらにグーグルアースの過去データ（2008年まで遡れる）を加えて検討した。今回の空撮と現地での計測結果を次の調査のときの比較に役立てるために、ここに残す。

（今回の調査結果を表に加えると、2010年と201

6年で池面積が減っている、これは画像比較でも明らかで〈P95〉、これは予測と全く違った。〉

計画と行動

リスクと対策

この「山」に「空と水」を加えた、我々にとって未経験の調査に行くことについて、不測の事態の予知と対策を考えていた。その一つは高度順化であり、順化を目的にした行動を重視した。順化に失敗した場合は速やかな下山を考えていた。

医師の同行が得られなかったので自己管理を徹底することを考え、最悪時にはヘリコプター使用を考えていた。ヘリコプターフライトにおいては、天候と雲と風を考えて無理のない飛行にパイロットを誘導をする。

ゴムボートの破損に不安があり、岸への接近時に岩の尖った部分に接触しないように注意する。ボートを出す際は、岸にはシートを敷いて傷を防ぎ、また細かく修理することを考えた。風と波によりコントロール不能とならないよう、天候と風に注意したが、幸いそうした事態には至らなかった。

以上の問題はいずれもクリアすることができた。

なお、ボートについては、次回から2艇方式か無人ボートが良いと思われる。

協力と提供

1、画像の無償提供と活用への期待

今回の撮影画像に関しては、今後の研究のためにすべて提供することにした。申し出があった場合、自由な活用を期待し、２００ＧＢのデータ内容のすべてを無加工で提供する。「日本山岳会２０１６ゴジュンバ氷河調査隊提供」というクレジットだけで無償提供とする。

すでに提供してあるデータには、広島大学・中田高名誉教授と名古屋大学・藤田耕史教授のものがある。

2、撮影物の活用

写真情報は、撮影時に意識したものの数百倍である。カメラという記録媒体が取得した情報は、いかに活用するかで存在の意味が変わる。この空撮は少なくとも２０１６年10月の時点のものであり、内容にかかわらず今後得られることのないものである。

ゴジュンバ氷河の周辺とクーンブについては20161017 00714421～20161018 005113234 の中に連続して入っている。フォトスキャンの画像は、パソコンで画像処理をして

みると新しい発見があると思う。

このような画像がこのSSDディスクのなかにあるので、それぞれの目的で活用いただきたい。

3、研究者との意見交換

① S.S.Thompson（2012）は、2000年以降年率1割でターミナルの氷河池が拡大している、2009年でその水量は220万㎥だと推定している。また、エンドモレーンの落とし口の水路は変動せず、ここから6・5㎞の氷河は移動していないから、全長6・5㎞くらいの大きさの氷河湖が将来形成される可能性があると指摘している。

幅1㎞で、6・5㎢となり、その平均水深も50ｍと見積もって、ヒマラヤ最大級の不安定な氷河湖が将来形成される大きなリスクがあると予測しているが、その池はできず、別のリスクがあることが調査結果の結論である。

② ＩＣＩＭＯＤには報告を約束しているので報告する。

③ 中部大学隊（福井弘道隊長）とは情報交換をする。現地ではすれ違いになってしまった。

④ 名古屋大環境学部雪氷圏研究所の藤田耕史教授には200GBのSSDメモリーを渡して、今後の氷河解析作業の展開に取り組んでもらっている。

⑤ 防災科学技術研究所（井上公氏）とは情報交換を始めた。

⑥ 中田高先生（広島大名誉教授）には200GBのSSDメモリーを渡して、画像情報解析の指導をしてもらっている。

⑦ 日本地図センターの田中圭氏にはデータの図化の指導をしてもらっている。

⑧ チャドテンにアメリカの大学が設置した機器は、恐らくソーラーパネルの強い反射だと思えるまぶしいほどの



① チャドテン頂上に光るもの



② 氷河を観察できるチャドテン（5065m）

光が池に届いていた。これは今後の現地の人々への影響が気がかりである。恐らく角度の変更で改善できるので、そのことを設置者に伝えることを考えている。

【第2章】行動概要

当初の計画と行動内容

行動の概略は、２０１６年10月12日羽田発、13日～15日カトマンズ、16日ヘリでルクラへ、17日～18日朝空撮フライト、18日ルクラ発、21日クワンデ・ピーク往復、22日クムジュン発、25日タンナ着、26日～29日氷河池測定、30日パンガに移動、31日落ち口調査、11月１日撤収、５日ルクラ着、９日朝羽田帰国。

なお、当初の計画と実際の行動は、以下のとおりである。

① 空撮のコースはヘリで１時間の４フライトを計画していたが、３フライトとなり、20分＋70分＋40分のフライトであった。

② GoPro による記録と１眼レフの24㎜による連続撮影は有効であった。

③ ゴジュンバ氷河のターミナルの近くにある、氷河池を俯瞰できるチャドテン（５０６５ｍ）に登り、観測定点を作ることを予定していたが、空撮の成果が得られたこと、また、アメリカ隊（学校名不明）がこの頂上に観測機を設置したとの情報があり、中止した（P69）。

④ 池にゴムボートを浮かべて行なった氷河池の水深調査は、結氷した池があってすべての調査を行なえなかった。計測できた池も、位置データの記録整理を現地で行なえなかったため、不足部に気づかず、主要な箇所に測定のもれができてしまった。

⑤ モレーン端部の岩石採取は、調査地が広大過ぎて期間内の調査は見送った。一方、石が自然に組まれて暗渠になって水路となっていたであろう岩の集まりを発見し、水路がどのような形になっているのかのヒントにはなった（P１０２）。水の動きの解釈に役立ちそうな白砂の浜があり、これに近寄れたのだが、氷の危険を冒してこの砂を採取することまで考えなかった。思えば残念で惜しいことであった（P92）。

⑥ 氷河から流出する水量の計測は、事前準備がなかったが、工夫で可能になった。

⑦ 現場と周辺の空撮は、うまくチャンスをつかめ臨機に対応できた。Agisoft PhotoScan による解析も活用できた。

⑧　水深調査で、池が予想外に浅いという立体像を知ることができ、水の経路を考えることができた。氷結していて測れなかった池のなかに重要な鍵のあった可能性がある。

行動日誌

難産であった氷河調査がスタートした。

２０１６年10月14日：ＩＣＩＭＯＤとエアーダイナスティー社（ヘリコプター会社）に行く。

15日：足止め。ヘリで上がれるチャンスを逃がす。カトマンズに入ってから2日間天候で足止め。衛星写真ではモンスーンはもう終わっているのだが、ルクラはそうではない。猪熊隆之氏の予報では18日から奥地は良いとのこと。

16日：ヘリで上がる。雲のなかの低空フライトでルクラへ。

17日：早朝6時30分に飛ぶが、ゴジュンバ氷河は雲の壁に遮られて退散。20分フライト。その後、低層雲は変わらないが南が開いていることに着目して、ここから雲上に出て飛ぶことにした。11時15分に離陸。

ゴジュンバ氷河は少し雲が懸かっているが出ている。上部に行くとエベレスト、マカルー、バルンツェ、アマ・ダブラムの周辺の氷河が眼下ですばらしい。

ヘリはバンクが嫌いで飛行機と違う飛び方になる。その点の理解が必要だが、騒音でも手話のような交話が通じる。（離陸11：15→着陸：12：25（現地時間）（日本時間は14：30→15：40で、画像記録は日本時間である。）（11時40分の高度メモは2万４０００ft90ｋｎｏｔ）

18日：Ｆ隊の最終日、カトマンズに降りたヘリが帰って来られないため、早朝フライトができない。上がってくるのを待って離陸、ゴジュンバ氷河を十分に見ることができた。会心のフライトであった。これでＦ隊の目的は十分に果たせた。この結果は次の研究に役立てる。

離陸07：55→着陸08：35（現地時間）（日本時間は＋3：15）（高度メモは最高高度1万８５００ft。一眼レフ記録20161017007 144216～20161018005 115228。GoPro 記録106 37961～113 55503）

10時の便でＦ隊の岡内完治隊員は下山。ルクラの天候回復のなかで、ぎりぎりの行動であった。

Ｇ隊・Ｓ隊は11時に出発、パグディンまで。次第に飛行の感覚からトレッキングの意識になってくる。

19日：パグディンを7時半ごろ出る。途中、地震で壊れた家がある。急な坂に参る。腹をこわす。ナムチェバザー

ルは中国の温泉街のような風情でがっかり。

20日：ナムチェバザール8時半発、ホテル・エベレスト・ビューに12時20分着。下痢は回復。オキシメーターは72～84、HEVでは最高92、着いたクムジュンでは76～86。

21日：順化のためにクワンデ・ピーク（4200m）往復。

22日：クムジュンからドーレへ。今日はテント生活の初日の試運転だ。歩きながら思うことは、高山病で亡くなった友人のこと。なぜビスタリ（ゆっくり）を教えられなかったのか、これからの十数日間、自分もこの教訓を活かしてゆっくり歩こう。歩きながら、空撮で見た氷河の碧い目の池と灰色の目の池は、女神の目なのか魔女の目なのかとしきりに思う。

23日：モン・ラでは400m下の谷の音が凄い。テントの地面が常に振動しているからすごい。この水源を調べに行くのかと思いつつ、そこのテントで泊まった。谷のなかで寒いので、8時に早く出る。4000mのシャクナゲの森を通ってドーレへ。テント泊の2日目、言われていたとおり寒い。朝は快晴。6時半ごろヘリが上空を通る。山はまだ朝日の余韻を残している。

小屋には夫婦と子供。モン・ラでは地震でひびの入った建物に子供2人。大変な教育環境だ。



③ ドゥードコシの向こうにモレーンとチョー・オユーが

ドーレに着く12時ごろには雲が湧いてきた。3時ごろは寒い。来る途中にチョー・オユーとモレーンが見えたが、あのモレーンの高度で何時ごろまで池にボートを浮かべられるかと考えてしまう。やたらに奥の細道の言葉が出てくる。中学の先生の朗読が思い出される。好きだった先生の姿も。「月日は百代の過客にして、行き交う年もまた旅人なり――」、なんと覚えていないはずの言葉が最後まで不思議にどんどん出てくる。この言葉のような不可逆の流れの時間のなかに生きる人間を考えている。

24日：ドーレからの道、マッチェルモで、テント場に着いて書いたもの。「今、送電のないところにいる、そこでもなんとWiFiはある、数日前にWiFiを開いてみたときに、たまった迷惑メールに回線が長時間使われたのが恐

ろしく、電池対策はあるが開けない。」

ここは標高４４１０m。地球温暖化でのヒマラヤの氷河縮小など、陸上の水ストックが海に流れて海面上昇になるのか、さらに水循環がいろいろと変わって異常気象になったり何が起きるか、などと考えたり頭脳は働いてくれる。

25日：タンナ／４７００m。パンガから下に降りた所に橋があったはずだが、毎年橋を架け替えて、今はパンガの上流に移動していた（P１０３）。噴出した水で洗われたらしい岩を見る。岩に生える地衣類の様子から、これの発生が数十年昔だとすると、１９９２年の写真以前のことになる。そんなはずはない、どう考えたら良いのか。氷河が運んだ大きな岩がごろごろしている。

26日：氷河池調査（F池）、ボートを初めて降ろす。野本勇さんが乗ってくれて作業は軌道に乗る。一部氷が張っている。

27日：氷河池調査（C池）

28日：氷河池調査。野本さんはゴーキョ・ピークへ、私はモレーンの中央の矮性小灌木の森の所へ。碧い池の成因が良く分かった。ブルーベリーの幹のサンプルをエンドモレーンの中心部で採集した。

シェルパのリンジンの話「ブルーベリーとピンクベリーはいっぱいある、ペリチェでは採取して煮てジュースにして売っている、いっぱい採れる。鳥が糞で運んでいる。ピンクベリーとブルーベリーは混ざって生えているが、ブルーベリーのほうが少ない、ピンクベリーにはとげがある。ディンボチェとチュクンの間でいっぱいとれる。Shivathoron-juice という名前でロッジで売っている。氷河の上面を覆っている泥と石の下には氷の層がある、これが解けて空洞になってそれが崩れて凹んで池になる。誤って歩くと危ない。」

29日：氷河池調査（M池）

30日：落ち口調査のためにパンガに移動。

31日：落ち口を調べて水量を測るために行く。落ち口のかたちを測り、ボートが流される量で、水の流速を知ろうとしたが、風に押し流されてうまくいかない。落ち口の上部という、なんとも危険と隣合わせの作業だ。これを断念して、物を浮かべてこれの移動を上から見て測ろうと考えた。

風の影響の少ないあり合わせのもの、緑色の棒とボトルと水筒を投げて連写でデータが取れた。乾燥のため咳がひどい、ダイアモックス半錠のためにトイレが多い。夜中せっかくの澄んだ空の星をゆっくりと見ることができな

い。

11月1日：最終日、目的を果たせた。帰りの道は、一歩一歩が我が家に近づいている感じ。空気が濃くなる。最後の一歩まで丁寧に。

昨日からの咳に難渋、クムジュンから毎朝半錠のダイアモックスを今朝からやめた。

【第3章】空撮調査

ヘリコプターフライト

調査前半の空撮作業は、天候回復の機会をうまくつかむことができた。

ヘリコプターの飛行は経験が少なく、空撮に必要な上昇性能、高度と速度、飛行距離、乗員数、旋回とバンクなどの飛行特性について、事前に細部が分からない。今回、初経験であり、チャーター料とともに不確定なことが多い。また、予測不能の天候のなかでのぶっつけ本番であったが、目的に叶う行動ができた。ヘリコプターは機体と乗員と燃料の重さが、上昇高度と飛行時間に敏感に反映される。

エアー・ダイナスティー社のエキュイール、機体番号9N-AFQ、アメリカ人パイロットのジミー・グロサー氏とは呼吸が合い、彼はうまくやってくれた。

有視界飛行が条件のヘリコプターであるが、雲の切れ間から雲の上に出ることができた。飛行高度については、乗員3名（パイロットを含む）のときは高度7400m、乗員4名のときは6200mが今回の最大上昇高度であり、約1時間で帰港した（時間を延ばすために燃料を多く積むと、上昇は悪い）。

左上の図①は、クーンブの地図に飛行コースを双発のドルニエ機を使うことにして初めに計画したものである。ドルニエの上昇限界は7500m。時速320mで旋回半径は4kmであり、この性能限界に合わせて作った。

図②は、今回のヘリコプターに合わせて計画し直したコースである。航続距離、人数と上昇限界の関係、酸素補給を考えてこのような数回の飛行が必要になると考えた。

GoProという小型カメラをヘリコプターの機体前部に直下に向けて取り付けた。地図に記入のルートを4回で飛行する考えだったが、2回で下の図③のように飛ぶことができた。この図③の飛行コースは、GoProの画像で位置の同定をして、飛行コースの記録メモを修正したものである。ゴジュンバ氷河上空の時間記録は省略した（画像記録にある）。

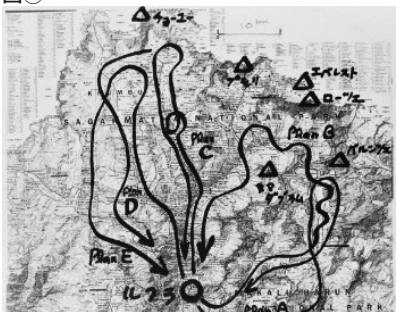
氷河を写すのにヘリコプターのローターは邪魔にならなかったが、振動は予想以上で、24㎜、ISO1600、1／2000、絞オート、毎秒3コマで、指の緩衝機能でなんとか撮影できた。

GoPro 1200は1台を機体前部に取り付けて、直下を0・7秒に1枚の連続撮影をしたが、全フライトを64GBのSDカードは十分カバーしてくれて、電池も1時間の低温フライトに耐えた（フライトごとに充電済と交換）。上空での速度はほぼ90knotであった。

ピラタスポーターPC-6のような機体でないとできな



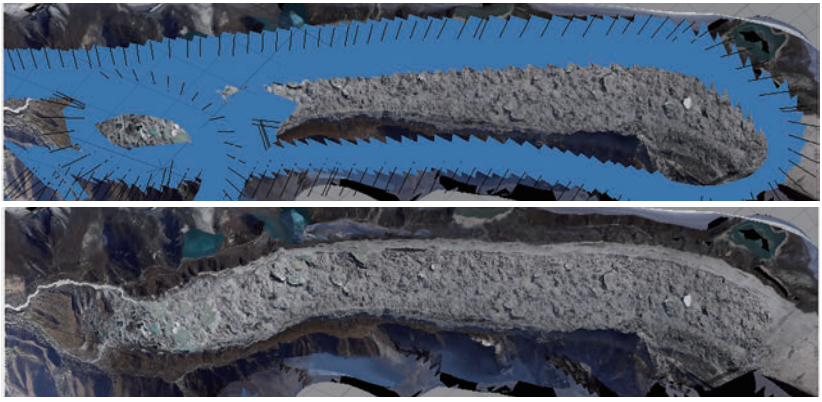
図①



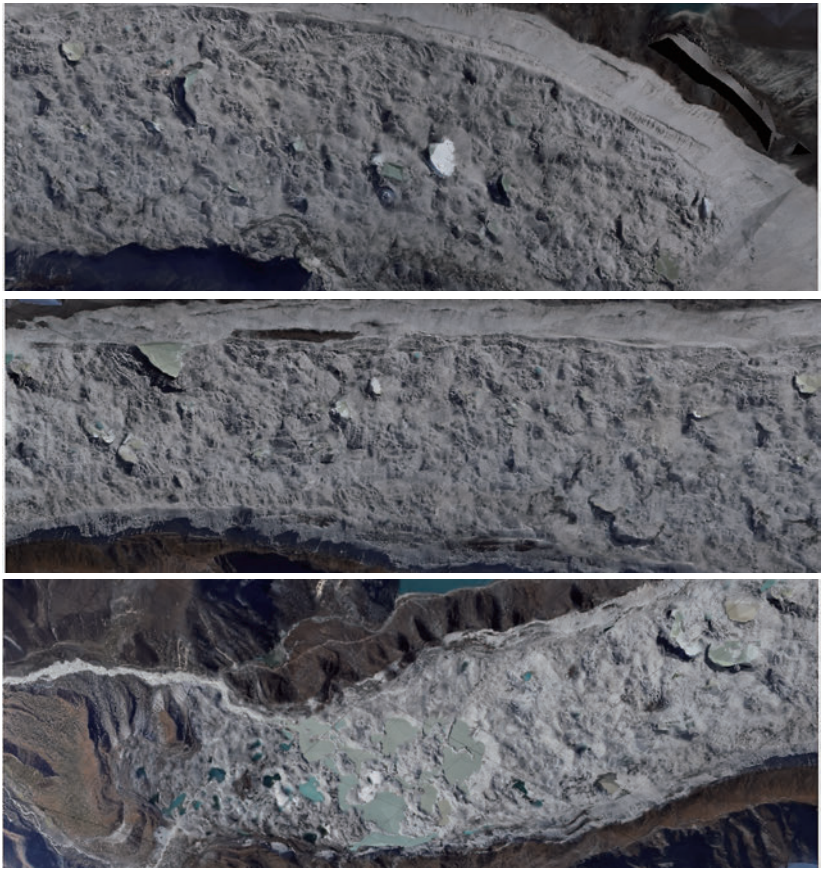
図②



図③



図④⑤



図⑥⑦⑧

いと考えていたヒマラヤ空撮が、斜め下を見たい氷河調査に限るならば、また、振動の対策ができるならば、このヘリコプターでも行なえる。ただ防振装置は欲しい。

空撮の結果

10月17日朝：ゴジュンバ氷河に行くが雲が壁になって隙間なく、引き返す。

10月17日昼：11時15分～12時25分（現地時間）、ゴジュンバ氷河からエベレスト、イムジャ、バルンツェ、アマ・ダブラムの雲のない所を空撮。

10月18日朝：7時55分～8時35分（現地時間）、ゴジュンバ氷河周辺を空撮。

空撮は、すべて立体画像になるように3コマ／秒で撮影してある。レンズは24㎜の固定焦点。18日の撮影はニコンD750、19日の撮影はニコンD5300、約2万枚のすべてが200GBのSSDディスクに収納してあるので、必要な研究には提供できる（写真番号は撮影時の年月日時分秒と順番号）。この報告書の写真の細部を見たいときは、SSDから原画を見ることをお勧めする。

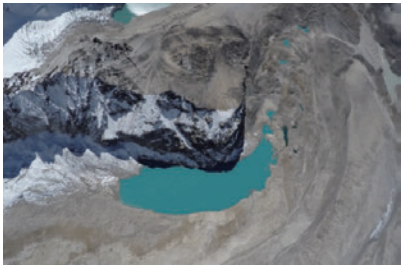
Agisoft PhotoScan のソフトを持つパソコンの場合、立体画像を自在に見ることができる。原画と Agisoft PhotoScan に取り込んでできた立体画像の一例をお見せする。原画からの展開は無数なので、画像を出して加工して活用してもらいたい。

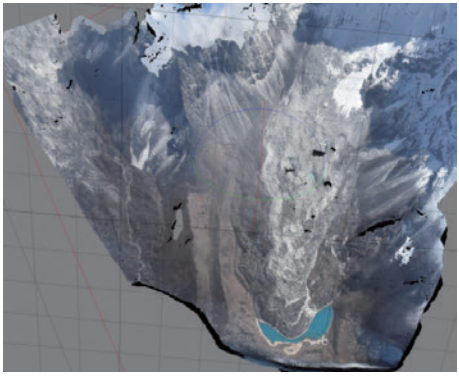
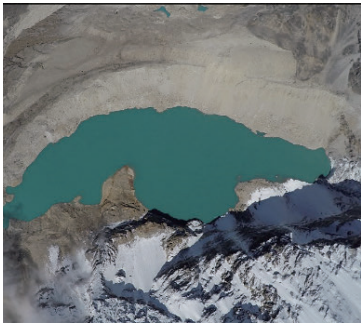
ゴジュンバ氷河空撮

右の写真は、ゴジュンバ氷河上空の撮影を Agisoft PhotoScan で画像化したもので、上の2枚のうち上がその撮影写真の状況を見えるようにしたもので、青い帯は写した写真の約160枚の位置を示している。下はその撮影記録を取り除いたもので、左の隅が崩れているのは撮影した範囲からはみ出ているため。氷河は右につながっている。下の3枚の写真はそれを3つに分割して拡大したものである。これらは上下を逆にして見ると、影の影響で立体感がよく出る。以降は左右を逆にして使う。

ゴジュンバ氷河周辺以外の空撮

空撮ではゴジュンバ氷河以外のクーンブエリアの氷河の記録もした。その17日の成果を少しご覧に入れる。飛行コースから左方向を見た画像が、SSDメモリーの20161017007-144217～20161018005-113234 のなかにある。それをフォトスキャンで処理した立体画像の一例が、⑨～



⑨⑩⑪⑫ クーンブにある氷河池

⑫である。

GoProの撮影データ

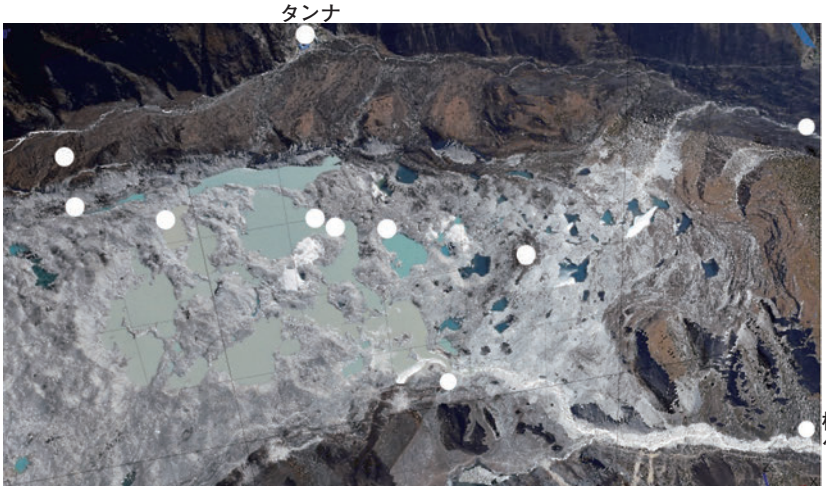
ヘリコプターの機首に取り付けたGoPro１２００が直下を０・７秒ごとに写してくれた画像は約1万枚で、これは飛行コースの記録にもなっていると同時に、３D化のできる次回の撮影との比較に役立つデータとなった。これの検索は２００GBのSSDメモリーからできる。

【第４章】氷河池現地調査

現地調査の基地

10月19日朝のF隊とのフライトの後、G隊・S隊はルクラを出発し、パグディン、ナムチェ、クムジュン、クワンデ・ピーク、モン・ラ、ドーレ、マッチェルモ、タンナと高度順化をしつつ基地に入った。はじめBCをエンドモレーンの中心に作ることを計画していたが、国立公園内の指定地外の幕営に遠慮するところがあり、空撮の写真を見て具体的に位置を検討して、タンナ（４７００m）を基地にする方が効率が良いとの結論に至った。

大森の病気（椎間板ヘルニア）が治癒したとはいえ、医



⑬ エンドモレーンの俯瞰図

者からは治癒はしたが絶対転んではいけないとの厳命。それに長い現地滞在のための高度順化をしなければならないし、野本にも持病がある。そこで、ビスタリビスタリと、腰バンドをした慎重な歩行で基地に入った。通常のコースタイムより、毎日1時間は多く費やす歩き方であった。

基地からの行動は、2015年6月のグーグルアース衛星写真と、数日前の空撮写真を使って検討した。氷と泥と石と水が造った地形は1年で変化していて、空撮写真でその細密部まで分かる。「空撮→現地調査」という行動は実に有効であった。

⑭ サイドモレーンの内側
⑮ サイドモレーンの外側





このエンドモレーンは、エベレスト街道からチョラ・ラ越えをしてきたトレッカーが、タンナからゴーキョに行くときに渡らねばならない。池の拡大につれて横断できる場所が変わるため、かつて通った道や、コースを探した跡が残っている。そこは氷河表面の陥没する危険の少ない所である。経験の長いリンジン・シェルパはこの地形を熟知していて、空撮と相まってムダのない動きで希望地に誘導してくれた。

氷河池調査

前ページの写真⑬は、エンドモレーンの状況を空撮写真を画像処理して俯瞰写真にしたものである。図の上に、タンナBCの位置、⑭と⑮の写真の撮影位置、調査した池のボートを出した入り口、左岸の排出流路、右岸の橋の近くを白丸の記号で示した。これでターミナルの全体像を理解されたい。

タンナ近くのサイドモレーンから内側上部を見た姿が写真⑭である。かってはこのサイドモレーンの高さまで氷があったので、氷河の氷の減少と池の生成の様子が分かる。写真⑮は同じく、モレーンの外側の水が流れる最低部からサイドモレーンを見上げたものである。

装備と機器

持参した測量機器は、通常の登山装備のほかに以下のものであった。

ゴムボート（アキレス製）、GPS（ガーミンのe-trec）、音波測深器（本多電子PS-7、PS-7FL）、測深紐（ガラス繊維製）、距離計（ゴルフ用）、ペッテンコーヘル水温計、ニコンD750、ニコンD5300、D3200、GoPro 1200、採石ハンマー。

氷河池の水深測定

ゴムボートに取り付け具を固定し、これにGPSと音波測深器をマジックテープで貼り付け（写真⑲）、氷河池のなかをボートで移動して、GPSの値と音波測深器の値を耐水ノートに記録した。その値は（P83）のとおりである。

例えば、北緯27度56分44・1秒、東経86度42分20・1秒、深さ3・5mは「44.1、20.1、3.5」と緯度・経度・水深を記録し、のちにこれをパソコンのXL表のマス目に移した。現地で表に移せたのは一部であり、もし現地で図化まで進めることができていたら、さらに完全な測定ができたのだが、そこまではできなかった。

GPSはガーミンの旧型のe-trecであったが、こ







⑯⑰ 氷河池にボートを浮かべる
⑱⑲ GPS と測深器で、一部氷結





⑳ 氷河ミルクで濁った冷たい池を調べる

の場所が開放空間であったため、良く測定してくれた。ただ電離層などの影響の補正は十分ではないようで空撮図と少し矛盾があり、位置関係と形状は空撮によった。

ゴムボートでの計測

冷たい氷河池（後の測定では1・6℃）（藍色の池では1回測定7℃）にゴムボートで漕ぎ出ることには、少しの躊躇があった。池の岸には尖った石があり、これによりゴムボートに穴が開くことを最も用心し、岸にはシートを敷いてここから水上にボートを出した。しかし、ピンホールがあって修理したことが2回あった。予測では波による浸水を恐れたが、そのような波はなく、風のために測定に必要な一ヶ所停止ができない問題の方が大きかった。

氷河池のなかというのは、初めはなんとも薄気味が悪い。その1回目の漕ぎ出し（おそらく人間の初浮遊）のときに、皆が尻込みするなかでサポート隊の野本勇氏が進んで同乗してくれて、順調に漕ぎ始めることができた。以降、2回目からはガネッシュ・ライ氏などが喜んで同乗して漕いでくれた。一方それが慣れとなり、目を離している間にポーターが2人で風下に漕ぎ出して、呼び戻すまで心配をする事態が起きた。考えてみると、持っているボートは1艇であって、もし何かがあっても助ける手段がない。使用したライフジャケットは、救命には無力であろう。次回は2艇であることを条件としたい。また、無人ボートと魚探の使用も考えたい。

測深機の計測は、流水のもとでは不正確だと言われていて、ボートを早く移動させると問題になると予想したが、問題になる移動速度ではなかった。問題は風の影響で、GPSの記録と水深計測の記録の時間差で位置が移動してしまうことであった。これを小さくするよう同時に読み取るように努めたが、1～2mの位置誤差は残っている。石英の微粉が浮遊するグレーシャーミルクが音波測定の値に影響するかが気掛かりであり、測深紐での測定を3ヶ所で行なって比較したが、差が見られず問題なしとした。それによりすべての測定は音波測深で行なった。

氷結している所の、薄い氷の部分はストックで割って進入したが、ゴムボートであることを考えて氷の厚い所は測定を避けた。その状況は写真のとおりだが、遠くから結氷を認められる池には行かなかった。下の写真⑱の波のない所は、すでに氷結が始まっている所である。

緯度：27° 56′N
経度：86° 42′E

池	緯度	経度	深さ m	注
F	27.7	44.5	5.6	
池	27.6	50.3	3.3	
	27.5	51.2	1.5	
	27.5	49.7	3.9	
	27.4	51.2	2.3	
	27.3	50.7	3.1	
	27.3	48.9	1.5	
	27.2	48.8	2.0	
	27.1	51.3	1.6	
	27.1	45.1	14.6	
	26.9	49.3	8.9	
	26.9	43.9	3.7	
	26.7	51.3	2.1	
	26.7	45.4	11.8	
	26.5	51.4	2.0	
	26.5	44.0	5.6	
	26.3	49.1	9.4	
	26.2	45.3	18.9 43.3？	
	26.1	51.2	4.1	
	26.1	44.2	1.9	
	26.0	49.1	13.6	
	25.7	50.9	2.9	
	25.7	50.8	3.1	
	25.7	49.0	15.4 急深？	
	25.6	49.0	6.5 @	
	25.5	45.4	14.9 45.9？	
	25.5	45.3	15.9	
	25.5	45.3	18.7	
	25.5	44.3	5.9	
	25.2	44.1	6.7 24.2？	
	25.2	43.9	4.8	
	25.2	43.7	5.5	
	25.1	45.4	17.2	
	24.8	48.9	17.4	
	24.7	48.4	15.4	
	24.7	45.6	20.9	
	24.6	57.1	4764野本	
	24.6	57.0		
	24.6	48.1	17.6	
	24.5	57.1	4765 4	
	24.5	50.7	3.5	
	24.5	43.7	8.9	
	24.5	43.7	8.3	
	24.4	57.2	写真とる	
	24.4	50.7	4.0	
	24.4	48.5	14.3	
	24.1	48.3	13.5	
	24.1	45.7	18.9	
	24.1	43.8	4.8	
	24.0	50.2	3.8	
	24.0	49.9	3.7	
	23.9	48.2	14.2	
	23.8	45.6	16.9	
	23.7	49.6	2.8	
	23.7	48.2	13.6	
	23.7	43.9	5.8	
	23.5	49.4	2.7	
	23.5	48.1	15.0	
	23.5	45.7	11.1	
	23.5	44.1	7.5	
	23.3	48.0	16.2	
	23.2	47.9	18.6	
	23.2	44.5	6.1	
	23.2	44.3	5.7	
	23.1	49.5	1.2	
	23.1	45.8	14.4	
	23.0	47.5	20.0	

22.9	46.0	11.9		
22.9	44.5	5.1		
22.8	49.6	1.3		
22.7	48.9	9.1		
22.7	47.0	12.0 47.6？		
22.6	48.3	15.4		
22.6	48.3	13.3 15.4？		
22.6	48.1	15.0		
22.6	47.5	16.7		
22.6	46.4	8.3		
22.6	45.6	4.2 ？		
22.5	48.0	15.0		
22.5	47.9	16.3		
22.5	46.7	9.9		
22.5	45.8	5.0		
22.4	47.8	16.5		
22.3	48.0	15.5		
22.3	47.6	14.3		
22.2	49.6	2.1		
22.2	49.4	6.2		
22.2	49.1	8.8		
22.2	47.5	13.2		
22.1	48.0	16.0		
22.1	47.5	14.4		
22.1	46.1	4.5		
22.0	47.4	10.2		
21.9	48.2	14.8		
21.9	48.1	12.2		
21.8	47.3	8.3		
21.7	47.2	6.6		
21.6	48.2	7.3		
21.6	47.1	7.6		
21.5	48.4	8.8		
21.5	48.2	4.0 ？		
21.5	47.5	7.0		
21.5	47.1	5.4		
21.4	48.3	3.0		
21.4	47.2	4.5		
21.2	47.9	3.5		
21.0	48.1	1.3		
20.4	47.4	5.2		
20.4	47.3	3.9		
20.4	47.3	4.6		
20.3	47.3	4.9		
20.3	47.3	4.9		
20.2	47.3	3.0		
20.1	47.4	5.0		
20.1	47.3	2.3		
19.9	47.4	5.2		
19.9	47.4	5.5		
19.8	47.6	5.0		
19.8	47.5	2.5		
19.5	47.7	2.0		
19.4	47.7	1.7		
19.3	47.5	2.9 19.7？		
19.1	47.7	1.8		
19.0	48.2	0.8		
18.6	49.2	スタート岸	G	
18.5	48.5	0.6	池	
18.4	48.9	1.2		
18.3	48.3	1.3		
18.1	48.9	2.5		
17.9	49.0	3.8		
17.9	48.4	5.2		
17.8	47.9	0.9		
17.7	49.9	2.9 紐3m		
17.7	48.7	4.1		
17.7	47.7	1.3		
17.3	44.3	5.1		
17.3	43.9	4.2		
17.2	48.9	5.1		

17.2	48.7	5.2		
17.2	48.4	5.5		
17.2	48.3	5.8		
17.2	48.2	5.4 紐5.15m		
17.1	48.3	6.6		
17.1	48.1	5.2		
17.1	44.9	4.6		
17.1	44.1	4.1		
17.1	43.9	4.1		
17.0	48.4	6.9 紐7m		
17.0	48.3	4.9 再		
17.0	47.9	5.0		
17.0	45.0	4.6		
16.9	48.4	2.3		
16.9	47.7	4.4		
16.9	46.4	4.1		
16.9	46.2	3.4		
16.9	46.0	4.1		
16.9	45.9	4.8		
16.9	45.1	4.8		
16.8	47.6	4.2		
16.8	46.7	4.1		
16.8	46.1	4.9		
16.7	47.8	1.7		
16.7	47.4	4.3		
16.7	47.2	4.1 17.7？		
16.7	47.0	4.4		
16.7	45.1	5.0		
16.7	44.5	4.4		
16.6	47.7	0.8		
16.6	45.7	5.0		
16.5	47.5	0.7		
16.5	47.3	0.7		
16.5	44.7	4.2		
36.6	44.2	7.9	C	
36.1	44.0	1.6	池	
36.0	46.3	0.9 1.7？		
35.9	46.1	2.6		
35.9	44.8	3.6		
35.9	43.8	3.6 25.9？		
35.8	46.6	1.8 水出る所		
35.8	43.9	3.4		
35.7	45.5	1.8		
35.7	45.4	2.8		
35.6	44.3	5.3		
35.6	43.5	2.4		
35.6	43.3	2.0		
35.5	46.0	4.9		
35.5	43.2	1.0		
35.4	46.0	5.6		
35.4	45.9	5.6		
35.4	44.7	4.8		
35.4	44.2	6.1		
35.4	43.9	6.1		
35.4	42.9	2.1		
35.3	45.7	3.7		
35.3	45.7	4.6		
35.3	45.5	2.3		
35.3	44.3	6.7		
35.2	47.2	3.8		
35.2	47.2	4.2		
35.1	46.6	5.7		
35.1	46.2	5.0		
35.1	45.6	4.9		
35.1	42.5	2.5		
35.0	47.5	1.6		
35.0	47.0	7.0		
34.9	46.7	3.0		
34.9	43.8	8.6		
34.9	43.7	8.5		
34.9	43.5	7.1		

34.8	47.8	1.4		
34.8	47.7	1.7		
34.8	47.2	1.6 この北傾		
34.8	46.9	3.3		
34.8	46.8	2.9		
34.8	46.6	1.9		
34.8	45.7	5.1		
34.8	43.7	8.1		
34.8	43.5	7.8		
34.8	43.5	7.2		
34.8	42.9	3.9		
34.8	42.6	3.2		
34.8	42.6	3.8		
34.7	47.2	3.2		
34.7	43.8	8.0		
34.7	43.8	8.1		
34.7	43.6	8.9 24.7？	池	
34.7	43.5	8.5		
34.7	42.6	3.1		
34.6	47.8	1.6		
34.6	46.8	0.9		
34.6	46.7	1.0 砂浜		
34.6	45.6	4.5		
34.6	44.2	7.1		
34.6	44.2	7.0		
34.6	43.7	8.3		
34.6	43.5	8.5		
34.6	43.0	5.3		
34.6	42.9	5.4		
34.6	42.6	5.0		
34.5	47.7	1.8		
34.5	45.3	2.4		
34.5	43.9	7.2		
34.5	43.5	7.6		
34.5	43.1	5.9		
34.5	43.1	6.3		
34.5	43.1	5.8		
34.5	43.1	6.2		
34.5	43.1	5.5		
34.5	42.8	4.6		
34.5	42.7	3.4		
34.5	42.6	3.6		
34.5	42.6	3.3		
34.5	42.6	4.5		
34.5	42.5	2.9		
34.4	44.8	8.3		
34.4	44.5	6.6		
34.4	44.0	6.7		
34.4	44.0	6.6		
34.4	43.7	7.9		
34.4	43.6	8.3		
34.4	43.6	7.2 33.6？		
34.4	43.5	4.3		
34.4	43.4	8.2 紐は8m		
34.4	42.9	3.6		
34.4	42.6	2.3		
34.4	42.6	2.0		
34.3	47.5	5.3		
34.3	44.0	8.1		
34.3	43.1	6.5		
34.3	42.9	3.8		
34.3	42.8	3.4		
34.3	42.7	3.5		
34.3	42.6	1.3 近く		
34.2	42.9	4.9		
34.2	42.7	0.8		
34.1	43.9	4.6		
34.1	42.9	2.2		
34.0	44.8	3.7		
34.0	44.0	4.5		

34.0	44.0	3.5		
34.0	43.9	7.5		
34.0	43.1	5.9		
33.9	43.9	3.9		
33.8	44.5	1.2		
33.8	43.4	5.0		
33.6	44.2	1.8		
33.6	43.7	4.8		
33.6	43.4	1.3		
33.5	43.6	2.6		
33.5	43.4	0.5		
33.5	43.4	0.5		
33.4	43.9	0.9 落口の上		
33.4	43.7	0.7		
13.5	46.6	1.0	M	
13.4	46.7	2.0	池	
13.4	46.5	0.5		
13.3	46.6	4.1		
13.2	46.6	3.4		
13.1	46.4	1.6		
13.1	46.4	2.1		
13.0	46.6	5.2		
12.8	46.6	3.0		
12.7	46.5	1.9		
12.6	46.6	1.3		
12.5	44.8	0.8		
12.5	44.7	0.8		
12.5	44.7	1.3		
12.4	46.6	1.9		
12.3	45.1	1.0		
12.2	48.7	1.0 上層7℃		
12.2	47.8	4.4		
12.2	46.5	3.1		
12.2	45.4	1.1		
12.1	46.5	3.6		
12.1	46.2	2.8		
12.1	45.9	1.8		
12.1	44.4	1.1		
12.0	48.7	0.9		
12.0	46.5	5.1		
11.9	45.6	3.2		
11.9	43.5	3.6		
11.8	48.6	2.5		
11.8	46.4	5.8		
11.8	45.9	5.3		
11.8	44.0	1.3		
11.8	43.9	1.9		
11.7	48.4	3.6		
11.7	48.3	5.1		
11.6	48.5	3.6		
11.6	48.2	5.0		
11.6	48.2	5.0		
11.6	46.4	6.6		
11.6	46.1	6.1		
11.5	48.3	1.9		
11.5	46.5	6.9		
11.5	43.7	3.9		
11.5	43.6	2.5		
11.4	48.3	1.1		
11.4	46.3	7.3		
11.4	45.3	5.8		
11.3	46.5	7.3		
11.3	45.4	6.1		
11.2	48.2	1.2		
11.2	46.6	7.4		
11.1	45.5	6.6		
11.1	43.7	1.7		
11.0	48.2	0.5		
11.0	46.7	7.1		
10.9	46.8	6.5		
10.9	46.7	6.8		

10.9	45.7	6.8		
10.9	44.0	4.5		
10.8	47.9	3.5		
10.8	47.0	4.8		
10.8	44.6	3.0		
10.7	47.2	5.0		
10.7	46.8	6.1		
10.7	46.1	6.7	島中心	
10.7	46.0	6.4		
10.7	45.1	1.8		
10.7	44.2	2.5		
10.6	47.8	2.0		
10.6	47.2	5.9		
10.6	45.3	4.8		
10.5	47.8	0.3		
10.5	47.3	6.6		
10.5	46.1	6.5	島中心	
10.5	46.1	4.9		
10.5	46.0	4.0		
10.5	45.8	5.1		
10.5	45.8	4.6		
10.4	47.7	5.0		
10.4	47.3	6.8		
10.4	47.3	6.8		
10.4	46.3	3.7		
10.4	46.1	3.7		
10.4	46.0	4.2		
10.4	45.4	0.9		
10.2	46.4	1.9		
10.2	46.0	1.0		
10.2	45.9	0.8		
10.2	45.9	0.9		
10.1	46.0	0.7		
10.0	45.5	0.5		
9.9	46.1	2.4		
9.9	45.4	0.4		
9.7	47.0	2.6		
9.5	45.7	2.7		
9.4	47.0	4.1		
9.2	46.7	1.9		
9.1	46.2	1.6		
9.1	46.1	3.2		
落ち口				
L	7.3	34.2	0.0 岸	
池	7.1	34.3	0.0 岸に接	
	7.0	34.3	0.0 岸に接	
	6.7	34.7	1.1 餓	
	6.7	34.4	0.0 岸	
	6.5	34.8	1.7	
	6.4	34.4	0.9	
	6.3	35.0	0.9	
	6.3	34.8	1.6	
	6.3	34.7	1.0	
	6.1	35.0	0.3	
	6.1	34.5	1.6	
	6.1	34.4	1.0	
	6.0	35.0	0.0 岸	
	6.0	34.9	0.6	
	5.9	35.0	0.0 対岸	
	5.9	34.6	1.6	
	5.0	33.8	0.6	
	4.9	33.9	1.0	
	4.7	33.8	1.6	
	4.7	33.8	2.8	
	4.6	33.8	2.0 巾	
	4.6	33.8	1.8 約10	
	4.6	33.8	2.8 約10	
	4.6	33.8	2.1 約10	
	4.6	33.8	2.0 m	
	4.6	33.7	1.7	
	4.6	33.7	2.9	

図④ 深さを測定した位置の緯度・経度と深さの測定値

計測結果

測定した約５００ヶ所の値を、緯度・経度順に並べ替えたものが前ページの図④である。揺れるボート上のため読み取れない記録があり、これは除いた。偶然同じ場所を重ねて測定している場合は平均値とした。

初めは計画的に測ることを考えていたが、漕ぎ手の技術と誘導技術、風で難しかった。

水深の図化

まず空撮図の画像から池の形状を求めて、エクセルで作った約３ｍの緯度・経度のメッシュに池の輪郭を０ｍで入れた。このなかに前ページの図④の水深の値をコンマ以下１桁の測定値で入れた。図表を縮小すると自動で四捨五入され整数になる。この整数を有効数値として「氷結がなくてボートで入れたが計測値のない所」に整数を内挿してメッシュを補間し、これをエクセルの「条件付き書式機能」で図化した。

計測前には50ｍぐらいの深度の値が出ることを予測したがそれはなく、今回の計測では21ｍが最深であった。

「氷のためにボートが入れず測定不能の所」は白で残した。内挿には周辺地形からの推測は加えていない。氷結のために計測できなかったこの空白部に、重要な地形があった可能性がある。

内挿した場所には急な凸部や凹部があるかも知れないが読めていない。例えば、Ｍ池で水面に出ていて発見した岩などは、水中にあれば見落としている。

測定点を入れた図と、等深線にした図は以下の図⑤⑥のとおり。図⑤のメッシュに色の入った所が測定値、ほかは内挿で補間した値である。

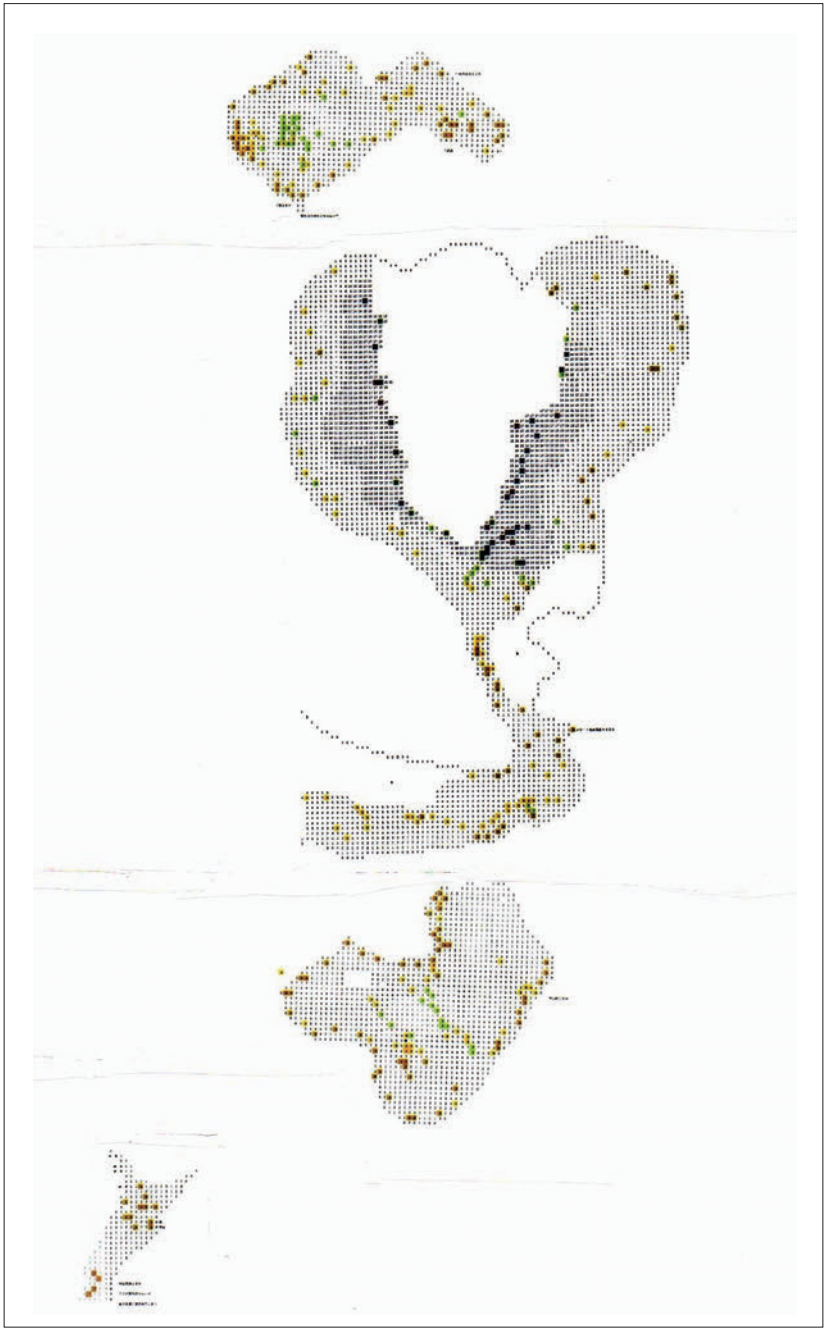
図⑤のデータに色を入れたのが図⑥。これで等高線を入れないでも実態がつかめる。氷結のためにボートが入れなかった所は白紙である。

池と池との間は省略してつめて１枚の図にした。

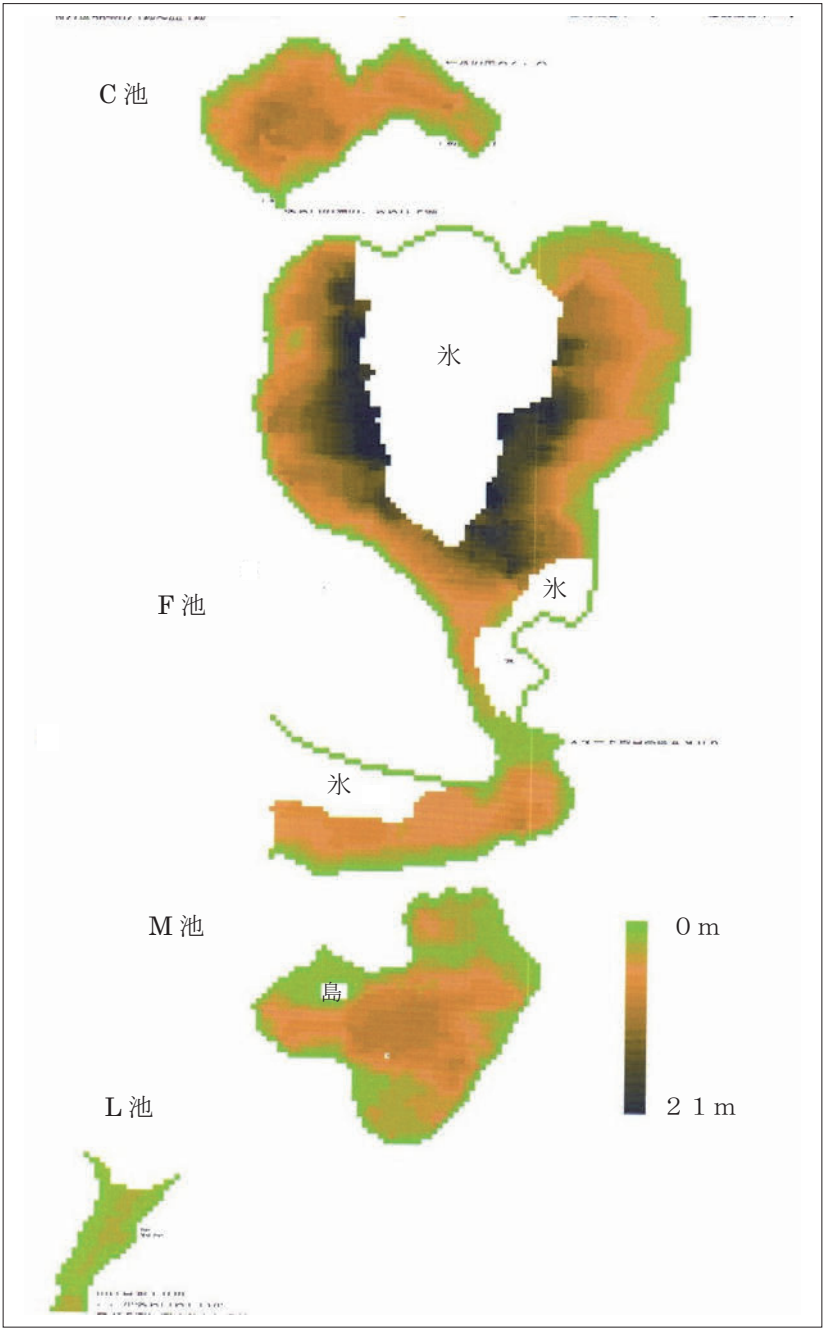
着色と深さの関係を図⑥の右に置いた。上の草色が０ｍ、橙色、茶色と深くなり、Ｆ池の濃紺色が21ｍである。

Ｃ池、Ｆ池、Ｍ池、Ｌ池については次の俯瞰図⑦にある池に重ねてご理解いただきたい。ほかの池については結氷のために測深を行なえなかった。

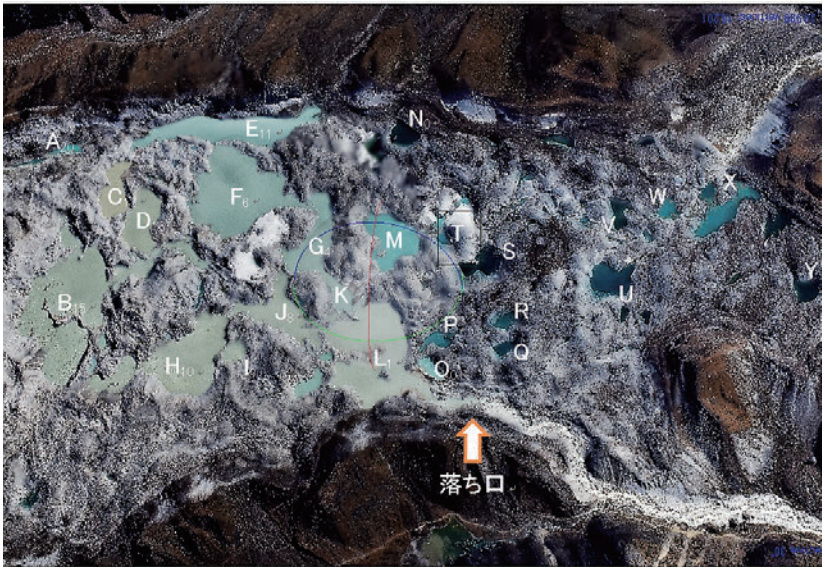
【第５章】　氷河池



図⑤ 深度測定値を緯度、経度の位置に入れ、数値のないときは補間した



図⑥ 測定のできた池の深度図。池の位置関係はつめてある



図⑦



図⑧

氷河池の計測

空撮と現場の比較

空撮と現場調査は約10日の違いであるので、大きな変化はないとして考える。

空撮の画像と現場は非常に良く符合して理解に役立った。さらに空撮画像を使って画像処理することで、様々な考察と理解ができる。

ゴジュンバ氷河は、その上流で融氷し、あるいは降雨が染み込み、ここから流れる水は、氷河底に流路があって池に流れ込んで（湧き出して）いると思われる。その場所は上部にある池のB池かC池かD池のはずだが分からない。その流入部の底の形状を氷が邪魔して調べることができなかったのは残念だったが、それぞれの池が予想より浅いことは意外であった。

前ページの図⑦は、空撮写真をフォトスキャンで画像処理したもので、考察の便宜のために池に符号を入れた。下の図⑧のなかに入れた白の境界線については後述する。

池の変化

N池、S池、U池、V池のような藍色の池は、ほかからの水の流入のない孤立した池であることが分かる。初めこの色は、池が深いためだと考えていたが、野本氏の観察で藻類が生育しているためだと分かった。その藻類の採取は持ち帰る装備を持たないため行なわなかった。これは次回のテーマであり、有用なものである可能性がある。

M池、O池のような乳藍色の池は、増水時にのみほかの池と表面でつながっている、孤立した池だと考えれば理解できる。

B池、H池、J池の乳灰色とF池、E池、G池の乳青色と色がわずかながら違うのは、何を意味しているのだろうか。C池が濃い乳茶色なのは、何を意味しているのだろうか。測深の結果を見るとC池は浅いのだが、水の流れを見てもC池が最上部だとなる。

M池の近くで赤い色の石を発見した。周囲の砂に酸化鉄の赤茶色の色が染み出ていた。空撮図で上流を見ると、いくつか乳茶色の水の池を発見し疑問に思っていた。どこから運ばれてきたのか不明だが、流路にこの石があって、通る水を着色しているのではないか。

俯瞰写真で見ると、C池は乳茶色が濃い。このC池の色から考えるのだが、C池からD池に流れて色が薄まるということは、D池に別の池からの流入があるということを意味している。

高度の値に関しては、グーグルアースからの値の比較で求めたが誤差が大きいので、空撮図にある池と池の接合部の水の流れを参考にして高度差を修正した。前図⑦の池記号の後ろの小さい数値は、O池を基準の０mとした高度差のm値である。

水の動きを考える。⬇印は現場で確認した流れである。→印は空撮図で確認した流れ。

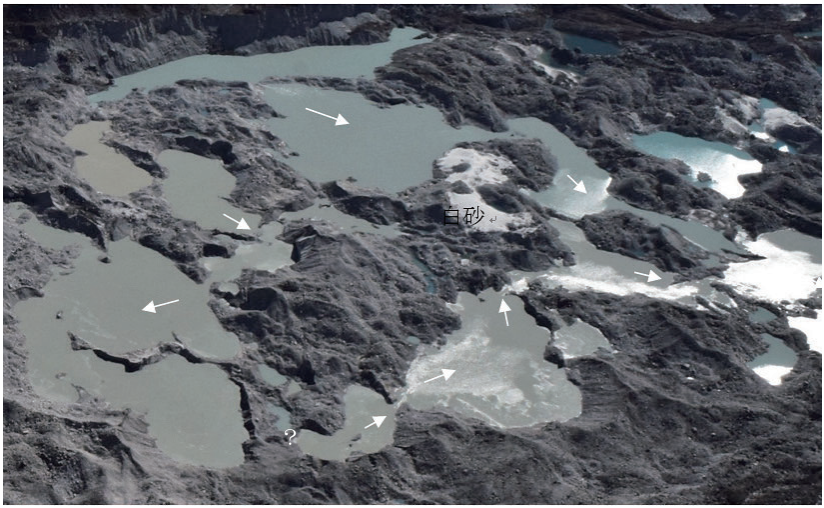
A池（20m）⬇C池（17m）⬇D池（16m）→無名池→B池（15m）→（地下経路）→H池（10m）→J池（８m）→L池（１m）

E池（11m）→F池（６m）⬇G池（４m）→K池→L池（１m）

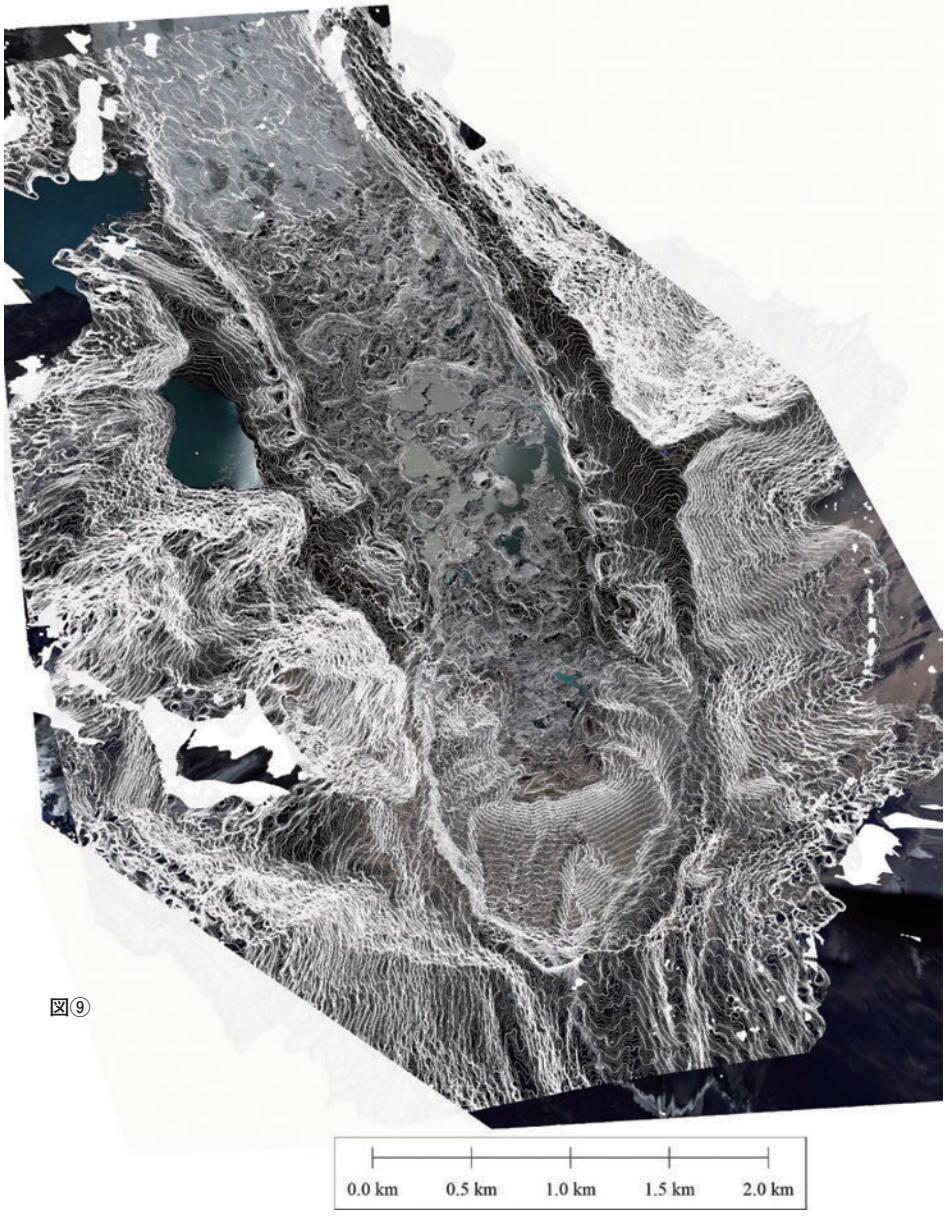
空撮写真のなかに水の流れの良く分かるものがあった。これは画像処理用に連続で写したもののなかに光の反射で小さい波の分かる数枚があり、ここから選んだ（下の写真㉑）。

H池（10m）→J池（８m）→L池（１m）であること、E池（11m）→F池（６m）⬇G池（４m）であることがよく分かる。

しかし、H池からの流出が見られるのに、流入路が見られない。良く見るとB池とH池は、水の色が同じである。



㉑ 池にできた小さい波は水の流れる方向を示してくれた。原図では色の変化がより良く分かる



図⑨

画像処理：中田高

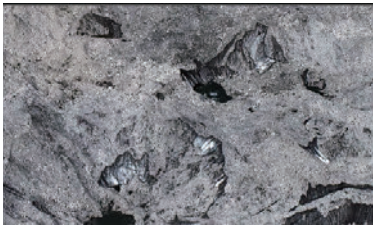
このことから、B池とH池は地下水路でつながっている、と解釈した。水の色が同じであることもこれで納得できる。空撮写真のH池の左には、?印の近くに小さく白い部分があるが、この下に地下流路の出口があるのだと推測する。

この色の差は2015年6月のグーグルアースでは確認できない。2015年と2016年の雨期に何かの変化があったのだと考える。

氷河の上流から来る水は、このC池、B池、そのほかの池に地下から流れ込んで、これらの池を経由してL池の下の排水口に流れている。

氷河池の形状

2016年10月に撮影した空撮写真を使い、Agisoft PhotoScan 版により等高線地図を中田高先生（広島大学移動地形学名誉教授）に作成してもらった。これにより現場がさらによく分かる。写した写真が、このように生まれ変わるのは驚きである（図⑨）。この図はさらに細密に表わすことができ、また数字も入る。





㉒㉓ 凹凸が次第に拡大する



㉔㉕ 池ができて成長する



池の変化を考える

調査をする前に予測していたことは、池がさらに拡大して、それがいずれは決壊してGLOFを起こすという単純なストーリーであったが、現場を見て、また空撮の写真を解析しているうちに、当初の単純な考えとは違った未来が見えてきた。

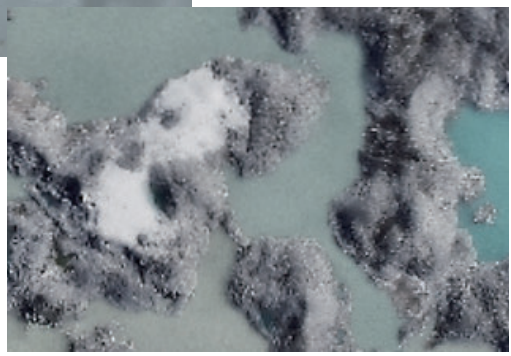
まず、池の成因を考える。

①氷河の上部からの氷の補給がなくなる→②内部の氷が融けて水は氷河の底部に流れる→③泥と石でできた表皮の下が空洞になっていく→④それが突然崩れて窪みになる→⑤雨がたまる→⑥たまたま水が残る→⑦周りが融ける→⑧池になる→⑨水の対流によりさらに池が拡大する→⑩底が氷河底の流路とつながって水が抜ける→（または）→⑪深くなる→⑫地上で流路とつながる→⑬隣と合体する→⑭底部の流路で下の池につながり、下の池の水位に近づく→（または）→⑮大きい池が生まれる→⑯それぞれの条件で変化する→⑰合体して大きくなる→⑱深くなる→見かけが小さくなる。

空撮と地上写真のなかに、この経緯を考えるのに相応しい写真があるので、それを選んでお見せする。これは1つの池の変化を追跡したものではないが、経過を考えるのに



㉖



㉗ 2008年から同じ所にほぼ同じ形のままである

適する例が随所にある（写真㉒〜㉕）。

白砂の丘の成因

3ヶ所、白砂の丘があった。遠望では雪かと思うほど白かった。その採取は氷に阻まれてできなかったが、後で空撮図を見ると陸がつながっていた。石の採取を思いながら、砂の採取を見過ごしてしまったことが惜しまれる。

この白砂の丘がなぜできたのか。シッキムのツォゴ湖の決壊した湖の湖底の記憶は真砂であった。

ツォゴ湖（今はサミティ湖という）の写真を並べてみよう。鹿子木員信先生、大森、村田省二郎氏の順だ。

100年昔にここを歩いた鹿子木員信先生は『アルペン行』でここをツォゴ湖と報告している。同じ所を私が歩いたのは2007年、そのとき湖はなく、平らな湖底を歩いていた。この数ヶ月前にこの湖は決壊していて、ヨクサムという下流の村が壊滅したと聞いていた。

今はサミティ湖といい、2014年に村田省二郎氏が写した写真にその姿がある。湖底が造った原に湖ができている。恐らく2007年の砂原の上にできた浅い湖であろう。決壊口の100年昔の写真を見ると、2007年の決壊口と似た地形が見られる。これはゴジュンバ氷河のター



㉘ サミティ湖、1918 年鹿子木撮影



㉙ サミティ湖、2007 年大森撮影



㉚ サミティ湖、2014 年 11 月村田撮影

ミナルの変化の将来予測の参考になる。

この湖底は水簸で平らな真砂の原になったのであろう。ゴジュンバ氷河の白砂の丘が湖底でできたと考えると、水位がここまであったことが必要になる。

この白砂はツォゴ湖とは似ていて違う。この白砂はこの場所の過去と氷河の未来を語ってくれそうなのだが、読み解く力が足りない。

白砂がもし水簸だけでできるのなら、白砂の原は平らなはずである。この砂の比重も重要そうだが、残念ながら採取していない。画像を観察するといずれも水辺に接している丘であること以外、3ヶ所の共通点を見いだせない。

考えるうちに、ふと伊豆の狭い浜にできた田牛サンドスキー場に似ていることに気付いた。ここの生成は水で篩われた細かい砂が水辺にたまり、冬の乾燥した風で吹き上げられて小さい丘を造る。グーグルアースで田牛を探すと、ソリで滑った痕まで分かる。恐らく同じように、雨期に水位が上がったときに水簸された砂が、水位が下がるときに吹き上げられるのだと推察するのだが、その現場を見ていない。

空撮図（写真㉗）の白砂の形は、２００８年の衛星写真とほとんど変わっていない。不思議である。

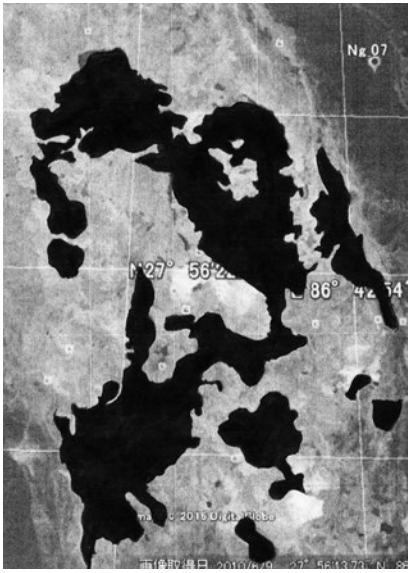
変化と将来予測

２０１６年の空撮図と過去の衛星写真の比較を試みたが倍率を正確に取れない。衛星写真において現地が海抜より高いためである。そこで衛星写真同士での比較を行なった。

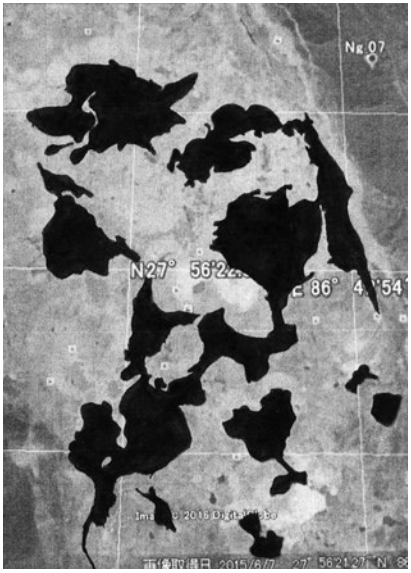
左上の図⑩と図⑪は、２０１０年と２０１５年のグーグルアースの池に着色したものである。池面積が２０１０年に30万㎡であったものが、２０１５年には27万㎡に減少している不思議は前述した。計測ミスではないかといろいろ検証をしたが、この図を見るとこの減少が明らかである。

池が縮小しているのである。これは上にある池と下の池との境が貫通して、上の池の水位が下の池の水位になったことによる。境が次第に広がる状況と、水位が下がったであろう池の様子を写真㉛～㉝でお見せする。

このように池は境界が貫通するに従って下の池の水位にそろい、したがって水位が下がって池は小さくなる。水面が下がって水の量が減ると対流が減るのでその池の拡大は遅くなり、凍土がなかに残ったかたちで険しい凹凸が残る。しかし、氷河上部からの水の補給は続くから、次第に融ける。この過程で不安定な岸が崩れて、その衝撃で水が大きく動くことがあり得ると考える。



図⑩　2010 年 6 月 9 日



図⑪　2015 年 6 月 7 日



㉛ 上の池からしみ出している

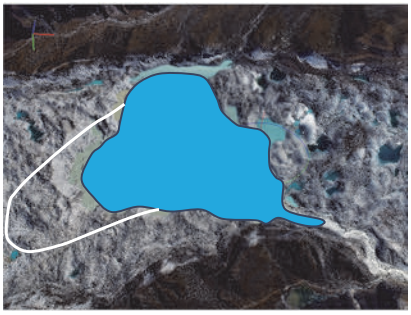


㉜ 上の池から流れ出る

図⑫

㉝ 水位が下がった池





いろいろな変化を経ながら、池は小さく、深くなっていくであろう。

測定できた池の水深の最大値は21mであった。ほかの池もだいたいこのような水深だと考えると、L池よりも高度の高い池が、下と水路でつながったときには水位が下がり、池は小さくなる。

すなわち、境になる凸部が次第になくなり、水面はL池に近づいて下がり、雨期には上部からの水をうまく下に吐き出す機能を拡大していく。

その結果最終的には、池の底が氷河の底に届いて、排出口を水面高度とする、一つの氷河湖ができる。藍色の池はそのまま残っている。前ページの図⑫は、図⑦の空撮図にその30年後を青色で、さらに数十年後の氷河が消えたときを白線により書き込んでみた。

流出口の落ち口調査

1、流出口の形状と流量

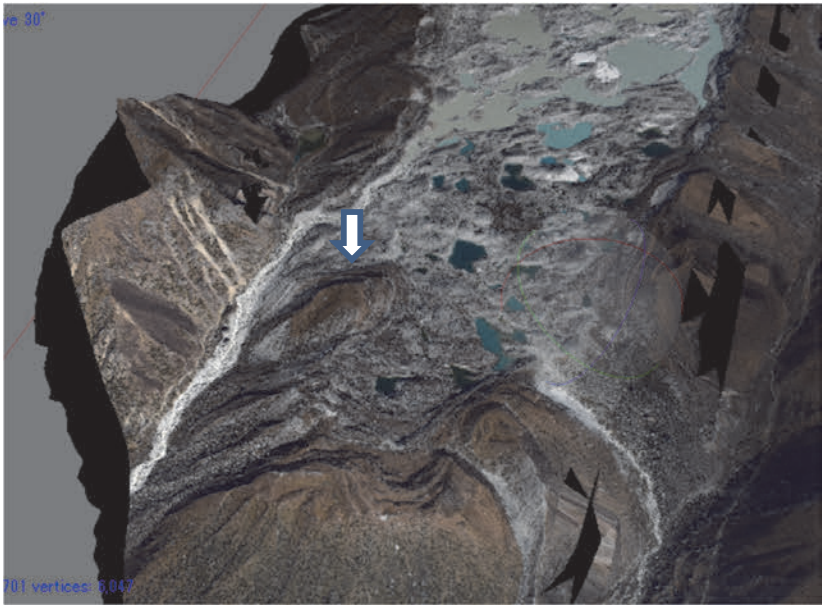
空撮図⑦（P87）のようなこのターミナルは、エンドモレーンを中心に左岸と右岸に水を分けて排出している。1974年の図⑭の左（P100）にも左岸に流路のできる兆候が見られるが、現在は右岸に流れている。この流路となるトリガーに、先端にある基岩と思える大岩（P97の写真㉟）の存在が役立った可能性がある。

現在は左岸の流出路には、少しの清水が流れている。左岸と右岸の流水を左の写真㉟㊱で比較する。左の写真㉟は左岸側にある流路だが、清流がわずか流れるのみである。右の写真㊱には、排水の落ち口から数百m下で流入する細い流れがある、これはサイドモレーンの外側から来る水で、この量なので無視して検討する。

注目すべき右岸の流出口（落ち口）は、L池の下、0池の西にある。

ここの断面形状を調べ、流速を調べることができれば、流水量を測ることができると考えた。排水の量を知ることは、池の全体像を知る上に重要だと気づいたからだが、それにふさわしい測定器がない。そこで以下のような方法を考えて試みた。

まず落ち口の近くにボートを進めてほかの池と同様に深度を計測する（写真㊲）。この計測を行なったボートを、そのまま水流に乗せて移動量を測れば流速が分かると考えたのだ。これの実行は気持ちのいいものではなかったが、形状の測定はできた。しかし、流れの計測は、風の影響で水流と違う動きをするためできない。

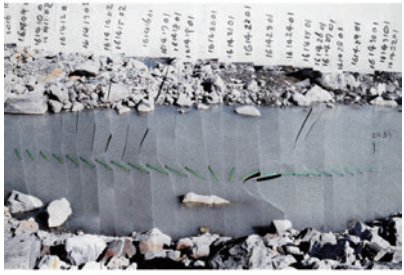


㉞


㉟


㊱


㊲


㊳

深さの値は、1・7、2・0、1・8、2・8、2・1、2・0で、凹凸が多い。たぶん岩がごつごつしているのであろう。

ここでボート方式では流速が測れなかったので、次の方法を考えた。

落ち口の近くの右岸の斜面にある大岩の上から、浮遊する物を流水の上に投げて（浮遊物とするべき適当なものを、身の周りからはぎ取った）、その移動を連続写真で撮影した。その同じインターバルで時計の秒針を写して3コマ／秒であることを確認して、この結果から1秒ごとの写真を選んで重ねて貼り、浮かんだ棒（測深に使った器具・84㎝）の長さから移動距離を求めた。投げたほかの物品の動きもほぼ同じであった。これにより流速を求めたのである。

落ち口の断面積は10ｍ×2ｍ、流速は0・45ｍ／秒で、したがって、「水量は9㎥／秒」となる。水流の表面を測っていること、断面積の計測精度があるが、この数値を水の動きを考える参考にした。

前ページの写真㊳は、計測に使った1秒ごとの写真を並べて貼り込んだ図である。

106ページの図⑮の上の写真は、中央部のくびれた所が排出口の計測をした位置であり、その周辺に増水時の痕がある、97ページの写真㊲のボートの先が水量を測定した位置である。これを見ると、さらに下までボートで行けそうに見えるが、水面近くの目線で見ると、ここから急流になるように見えて、とても先に進めなかった。

【第6章】氷河と水の動き

氷河の変化

氷河の移動は止まっている。

初め氷河のターミナルにある池を考えたとき、この水は上部から押し出されて来る氷河が、ここで融けながら水がたまって池が造られるのだと単純に考えていた。B池かC池の付近に、その動きを知る鍵があると思っていた。しかし池は予想以上に浅かった。水は上部の氷河で生まれて流れ下り、この池を中継地点として排水口から下に流れていることを知った。

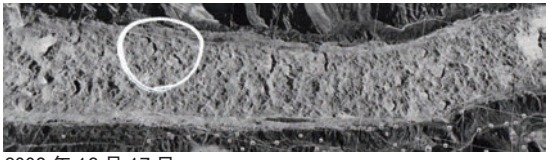
この動きを理解したいと、2015年6月の衛星写真と2016年10月の空撮写真（P99下の2枚）を見比べていた。

2015年6月には上部にも氷河表面に多くの池があって、2度の雨期の後の2016年10月には雨期の後にもか

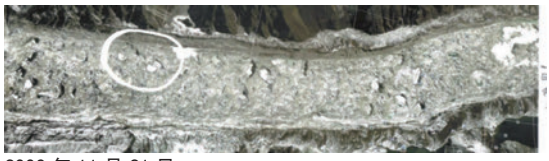
かわらず、その池が消えている。グーグルアースの過去データ（２００８年まで遡れる）を時間を逆戻しして見ていくと、今の池になった初めの皺を知ることができる（図⑬）。その皺は今の池と同じ位置にあり、さらに空撮図を並べてみても、位置は変わっていない。氷河は動いていない、ただ「痩せ細っていっている」のみだ、と理解できた。

Gaunara 氷河合流点（この写真の左端）からターミナルの池（右端）までの８kmでは氷河の移動が止まっている。つまりここでは上部から氷の押し圧はなく、上部での雨・雪（降水）の水を受けて、それを氷河底にある流路で、ただ水の形で下に送っているだけになっている。そして、この区間の氷河は融けて痩せ細っていくのみになる。

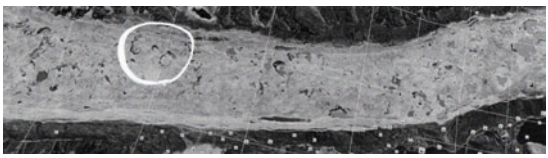
変化で比べると、この期間に氷河面が78m下がっている（Ｐ１００）。温暖化が今の速度で進むなら、あと60年経た



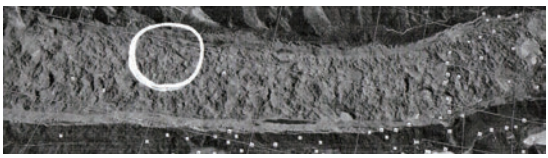
2008 年 12 月 17 日



2009 年 11 月 21 日



2010 年 6 月 9 日



2012 年 12 月 23 日



2014 年 12 月 6 日

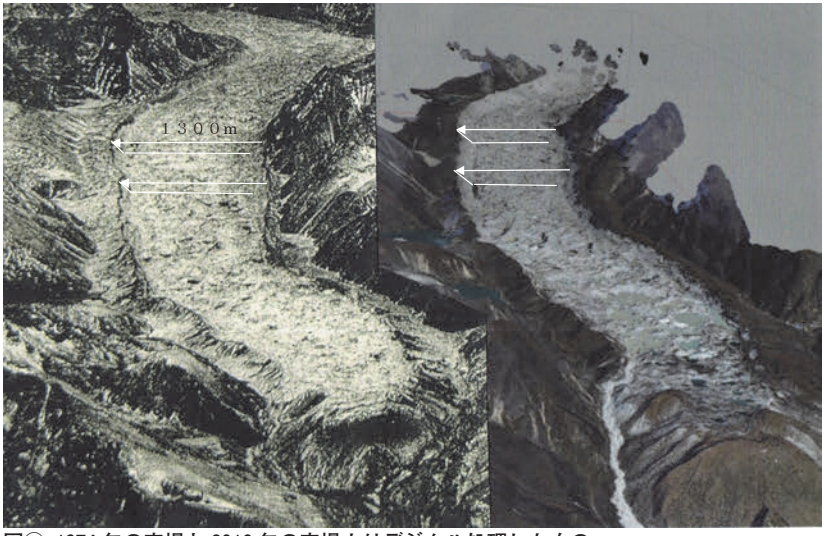


2015 年 6 月 7 日

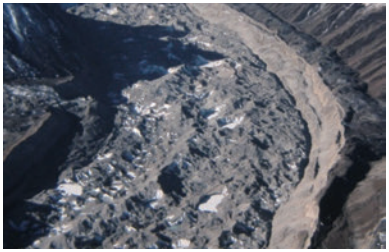


2016 年 10 月 18 日（空撮図）

図⑬



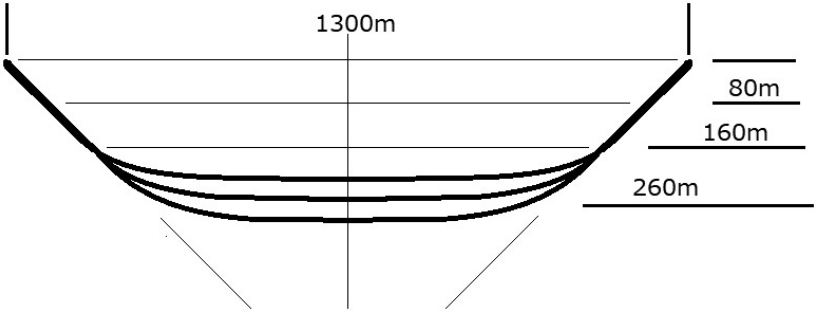
図⑭ 1974 年の空撮と 2016 年の空撮よりデジタル処理したもの



⑲



⑳



ないうちにGaunara氷河合流点から下の8kmの区間で氷のストックはなくなり、ここの氷河は消える。その下部に1km×1kmぐらいの池が残ることになる。

その間に何が起きるだろうか。雨による急激な氷の融解での増水が起こり、それを引き金にした土砂崩れなどを恐れるが、確かなことは分からない。

池は小さくなり、深くなる。そこには今とは違う景観が生まれているだろう。

前ページの図⑭は、左が1974年の1万m以上の高空からの空撮写真、右は今回の空撮を画像処理したものであるが、遠近が生じ、私の技術では遠くが小さくなる。ここでは手前のターミナルにある岩を合わせてあるため、遠くの画像は小さくなるが、縦横比は変わらないので比較に使った。

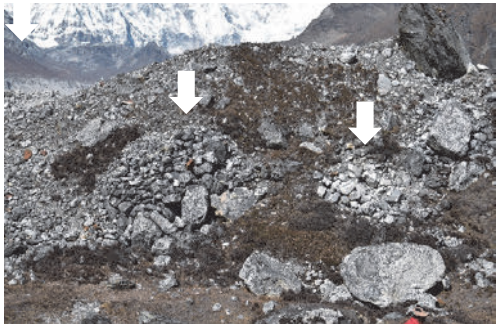
これに白線で寸法を入れ、それを使って図上で①左岸と右岸のモレーン頂部の距離、②右岸の氷河側のモレーンの高さを測り、その差から氷河表面の高度低下を算出してみた。その数値は78mであった（この数値は画像を比較しても納得できる）。

右の2枚の写真㊴㊵は、2009年の空撮と、2016年の空撮を画像処理して得たものだが、サイドモレーンの上縁から氷河の表面がずれ下がっている姿を見ることができる。

氷河の表面のレベル低下が78m／40年であることは、この位置では毎年約2m表面が下がっているということである。表面が下がるに従い、氷河の幅は狭くなる。したがって同じ融け量の場合、下がる高さは大きくなる。上部からの氷の補給が止まっているので、氷河自体が融ける量、雨に融かされる量、上からの水で融かされる量を考えると、氷河底までの深さは分からないが、もし100mだとすると、40年で全量消えていることになる。

得られるわずかなデータから考えて、模式的に氷河の断面を考えてみる。

サイドモレーンの内側の傾斜を垂直画面にある幅と高度差から考えるとほぼ45度である。その延長線の最深部は650m、160mをマイナスすると490mで、これより深くはあり得ない。一般のU字谷の形を考えながら自然にできる形の曲線をいくつか引いてみた。この形から深さを想定する。実測の手段があれば深さを測ってみたいのだが、水深測定で池の深さの最大は21mであった、この底が氷河の底に届いているとは思えない。自然に見てこの3本の線のなかに答えがあると思える。見ていると、あと10



㊶ 浸食跡



㊷ 水の吹き出し

この区間で考えると、水は雪や氷として下方に下るのではなく、水のかたちで下りてくる。今の氷河の8㎞は今の位置にとどまっていて、次第に融けて痩せていくだけである。

これからあと60年ぐらい経つと、氷河の末端はこのGaunara氷河合流地点の付近に後退する。現在は、恐らく氷河の底には流路が無数にできているはずである。

雨期でない10月18日の排水口からの流水が9㎥／秒（以上）であるということは、それだけ氷河の水貯蓄が減少していることになる。

上の写真㊶は水の通った痕だと考える、このような流路が氷河の下にあるに違いない。

下の写真㊷は水の吹き出た痕で、水の流路はモレーンのなかにたくさんあるのではないか。

水の動き

2009年にパンガの下にあった橋（次ページ上の写真㊸は2009年撮影）は、雨期の増水時に流されたという。場所を変えて1㎞ほど上流に架け替えられたのが上右の橋（写真㊹）で、それがいつだったのかは分からなかったが、数回の増水期にも無事が続いたようである。写真を手

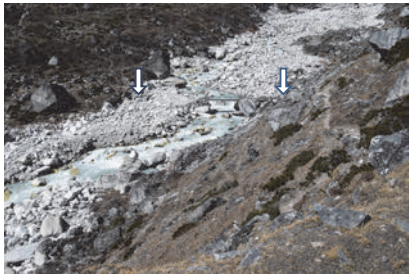
0mだとした想定が自然に思えてくるのだが、いかがであろうか。

8㎞で考え得る最大は、断面積の（1300×650／2）−（1300−160）×160＝24万㎡に8㎞を乗じたもの、すなわち19億㎥。これが考え得る最大で、この1／2だとして9・5億㎥が毎年約1600万㎥（1㎞×8㎞×2m）融けると、60年で氷はなくなる計算になる。この嬉しくない数値に対して何を考えるか。


㊸


㊹


㊺


㊻

掛かりに人の身長と比べて手すりを測るとほぼ70㎝と考えられるので、これから橋げたの岩の水流の痕の高さを推測し、これから水量を考えた。

この橋（上の写真㊹）の下を流れる水の量は測ることができないが、写真㊹の人物と比較して岩の痕の高さも考える。

タンナからの帰路に写した橋の写真㊺に、増水時の痕を頼りに白線を入れてみた。この白線まで水が増水した場合の水量を写真㊻から考えて、増水時の流量は現在の流量の約5倍、あるいは約10倍だと言えるだろうか。

落ち口で測った水量は毎秒9㎥であった。この橋の下を流れる水も落ち口を流れる水とほぼ同じ量（サイドモレーンの外側から来る水を無視して）で、それがさらに流れて下の渓谷を震わせている。

橋を渡る人（写真㊹）と手すりと、水が流れた跡である白く岩肌の出た位置を比べて、増水時の水量を想像してみる。データがないのが残念だが、ほかの写真も使って橋げたの水痕からその水位を写真にある対象物と比較して推測する。これも5～10倍、高さで約2ｍが妥当な数値だと読む。

10月の落ち口の流れの断面積は20㎡であったが、落ち口

の周囲の、写真㊼に示される水没した痕跡（白線）の大きさから、増水時の断面積を空撮画像処理図も参考に考察してみると約10倍となり、流速が変わらないなら水量はほぼ毎秒１００㎥となる。前ページの右の写真㊻の、橋の周囲の白い部分の端（矢印）をつないで現在の水量と比べると、やはりこの写真の10倍ぐらいだろうと考えられる。

これはのちに流出口周辺の水位の跡も含めて、画像処理の画面の解析から水の流れた断面を考えたが、これも概略同じ答えになる。つまり雨期には降雨と融雪で増水するが、そのときの池の水位は約２ｍ上昇するのだと考えるとすると、写真の増水時の痕（水流の変化のなかのどこまでが痕に残るか不明）からも納得できる（現地でその痕の計測をすべきであった。写真よりの計測でも対象物は人物になる）。

上流の降水量は測定がないが、ほかの地域の降水量から推定を試みる。

カトマンズの①年間降雨量　②雨期の３ヶ月（6～8月）③10月の降雨量の値（２０１５年データ）は、①１４５０㎜　②９３８㎜　③57㎜。ナガルコットは①１９１０㎜　②１２９０㎜　③76㎜。ポカラは①３９５０㎜　②２４９０㎜　③１７５㎜。ジリは①２２７０㎜　②１５３０㎜　③73㎜。

雨期３ヶ月の降雨量の年間の降雨量との比率を見ると、カトマンズ67％、ナガルコット68％、ポカラ63％、ジリ67％である。

10月の降雨量の年間の降雨量との比率を見ると、カトマンズ３・９％、ナガルコット４％、ポカラ４・４％、ジリ３・２％となる。

ヒマラヤの全体地形と気象衛星の雲の動きを見て、ゴジュンバ氷河上流の降水量をポカラに近いとし、年間４００㎜だと推定してこれを仮定すると、雨期３ヶ月を65％の２６００㎜、10月は４％の１６０㎜だとなる。これからさらに考察を展開してみる。

年間降水量が４０００㎜だと，取水域の１３０㎢に５・２億㎥の水を降らせていることになる。雨期の３ヶ月に３・４億㎥を１ヶ月に１・１億㎥／月を降らせている。これに過去の氷への蓄積を融かした水が流れ出す量に加わる。

今回実測できた水量の９㎥／秒がそのまま雨期以外の平均水量だと仮定すると、２・８億㎥／年（０・23億／月）であるので、雨期にはこれの５倍だとすると５・６億㎥／年となり、数字がうまく符合してくれる。橋げたや落ち口



㊼

の水の痕跡からは、5〜10倍ほどの水が流れたと考えられる。氷河が痩せ細り、氷のストックが減っていっている量がこれに加わっていることになり、妙に数字が合う。

池の形状変化とその予測、排水口

排出口の上部に増水時の影響の残る干潟がある。増水時のレベルの分かる痕が両岸に残され、増水時の姿が推測できる。

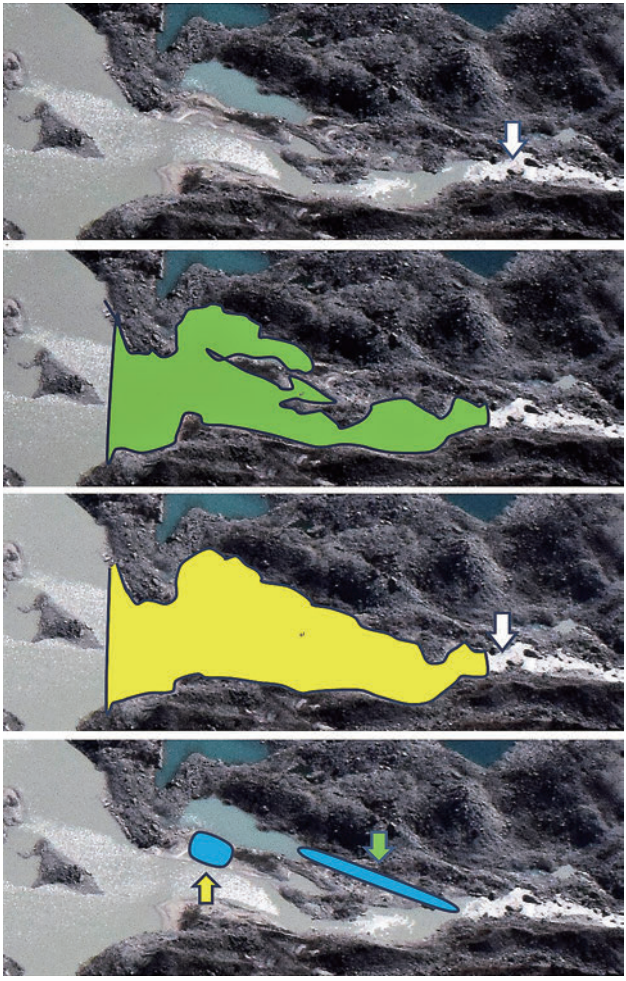
雨期には増水する。この痕から増水時の様子がよく分かるのだが、これも寸法の指標がない。写真㊲に写っている人とボートを利用して、落ち口の幅を推測した。またレンズの焦点距離を利用して、距離と角度から算出した。

この結果から、水位の上昇は2mか3mだとした。そのときの排水口は写真㊼の白線の位置まで広がっていたと思われる。このときこの位置の水の流速は、特に早くはないと考える。このことは泥が沈澱して堆積している干潟の姿からの推測である。増水のときにV型に上が広がったかたちで排水口から水は溢れていたであろう。

そしてそのとき、排水口から下の急流の始まる所では浸食が起きている。

排水口の変化予想と対策

現在は排水口はよく機能している（次ページの図⑮の上）。増水時には水位が約2～3m上昇する。そのときは2番目の図の草色のようである。もしさらに増水した場合は、3番目の図の黄色のようになると思われる。このときには最後の落ち口（白の矢印）の浸食が激しくなり、その波及する危険性が増大している。これは避けたいことである。4番目の図のように草色矢印の青色導水路を造っておけば、増水時に黄色矢印の青色部分を越えた水はこれに流れ、次第に広がって平常時の流路となり、池の水位を下げてくれる環境ができる。

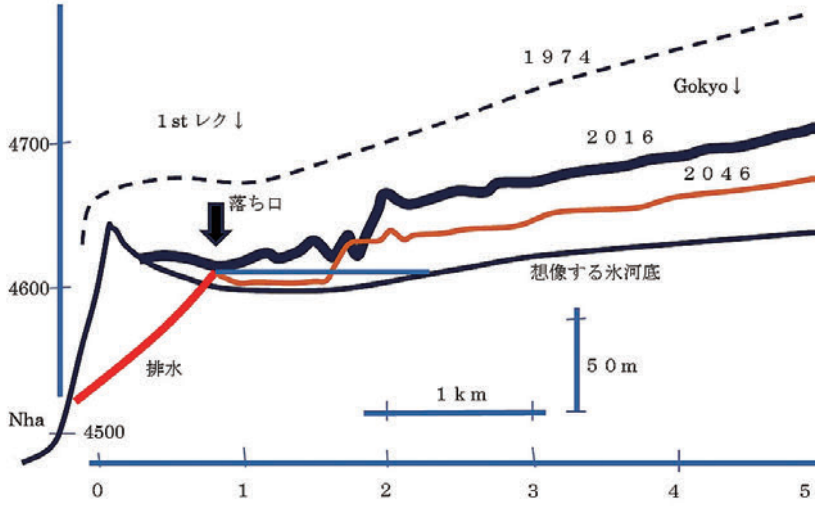


図⑮

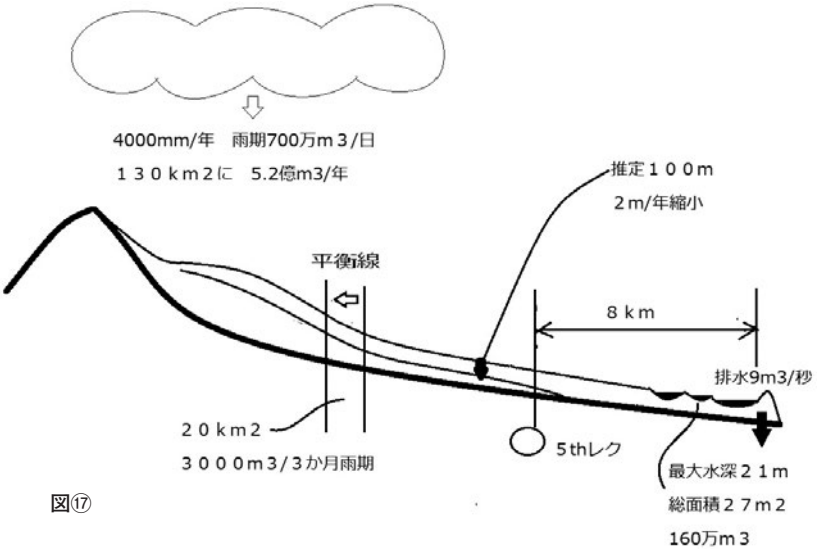
池の変化

次に池の高度差を参考にして、池の境界がすべてなくなったときの池の姿を推測する。この場合、すべての池の水面はL池の下の現在の落ち口の位置の水位になる。

過去の池の成長速度を一定だと仮定して、その延長線で考えてみよう。池は全方向に等速で拡大すると仮定すると、あるときに池の境がなくなる。そうすると


1974
Gokyo↓
1st レク↓
2016
2046
4700
落ち口
4600
想像する氷河底
排水
50m
1km
Nha
4500
0
1
2
3
4
5

図⑯


4000mm/年　雨期700万m３/日
１３０ｋｍ２に　5.2億m3/年
推定１００m
2m/年縮小
平衡線
8km
排水9m3/秒
２０ｋｍ２
３０００m３/３か月雨期
5thレク
最大水深２１m
総面積２７m２
160万m３

図⑰

水位が下の池にそろい、そのときに全体の形状はどのように推移するのか。

少なくとも池が上方に拡大することはなさそうである。池の境界がなくなるまでの時間は、温暖化影響の速度によるので確定的な予測はできないが、池の数は減り、深くなっていき、貯水量は増える。排出口が健全に機能する限り水位は変わらず、増水時の現状より約2～3m高い水位までで問題は起きないだろう。前述の導水路方策をとっておけば、さらに安全である。

何事かがあって、排出口がもし塞がれて次に切れる、また氷河上部よりの水が通年以上に増水し、池の境が切れて水位が急に上がると危険である。そのリスクを小さくするためには、106ページの図⑮のごとくO池の上と下に人工的な流路を造って、これを通常の排水経路にして　排水口を広げておくと良い。

これにより池の水位上昇を半分に抑えることができる。

図⑯はその過程の池の形状変化の推測図である。

氷河には、それぞれにいろいろの条件があるはずである。氷河の後退に伴って末端に池ができるのは通常の変化だが、そのとき、池に排水路ができて水位が下がり、池がつながって拡大（または縮小）するときに排水の量を増やせ



⑱

れば、池は形状を変えつつ安泰に成長すると思われる。
　排水路が広く広がらず、池の水位が上がり続ける場合は、いずれは決壊することになる。

氷河池の変化と流水の測定

　現在の池の貯水量を、面積と断面形状による個々の池の体積で求め、測定できなかった池も加えた平均深さを等深線図から推測して６ｍだとして、現時点の貯水量を推定すると、総合計は約１６０万㎥になる。この場合、氷河底からの流入と排出口からの排出が同じはずである。池の深さと大きさの変化に影響されて流入水は増減して、排出水量も増減する。その値は、雨期の３ヶ月の水量を平均の５倍だとすると、降雨量と池のストック量と排出量をバランスさせて考えることができる。流入する水は通常は約２日で排出される。雨期ではこの滞留期間は１日ほどになることになる。
　水量（水位）の年間の変化を測定できると良いのだが、これには１～２年間の計測ができる絶対圧水位計（ＨＯＢＯＭＸ２００１ウオーターレベルロガー）がある。内面処理した鉄パイプを水中に沈めて直径３㎝の水位計を入れる。これで調査しにくい雨期の水量変化を知ることができる。
　理想的な設置位置は、パンガの橋の付近だが、管理の点を考えて、ドゥード・コシにイムジャ・コーラが合流する手前の場所を考える。
　コース途中のモン・ラの先、ポルツェ・タンガ（３６８０ｍ）の橋（写真㊽の矢印）付近は、ドゥード・コシ渓谷がほかの谷と合流する手前で道にも近く、設置の適地だと思う。この機器で観測値をリアルタイムで知れば、平常と違う流量の急増減を見て異常を知ることができるであろう。
　氷河から流下する水量の変化が通年で分かると、氷河の様子が分かるだけでなく、水利用のためにも有用な情報になる。
　この水の動きを図⑰にしてみた。

【第７章】　調査の結果

調査結果の要約

　１、①藍色の池、②乳藍色、③乳青色、④乳灰色、⑤乳茶色の５種の池があり（この違いを写真はとらえている）、①②の藍色の池は、動かない凍土の上に独立してできてい

て、上流からの氷河の融水とは隔絶している。③④⑤の乳青色・乳灰色、乳茶色の池との境は明確である（P㊽空撮より）。乳藍色の池は、増水時に冠水して乳青色の池とつながり、乳青色の水が流入していたと考えられる。そのときの増水レベルは約2m～3mであろう（P105）。

2、④乳灰色、③乳青色の池は、池と池が地上と地下でつながっていて、上流からの雨水と融水が入り、氷河から流れる水の中継貯水池になっていて、乳色の水（氷河ミルク）を排出口（高度4710m）から流出している（空撮図と地図の標高より。P89）。

3、乳白色と乳青色の池の水深は、最大21m（測定範囲）、面積は24万㎡、貯水量は約140万㎥である（池の形状と測定できた池の深度よりの推定）。この池の境はいずれ融けてなくなって、1つの湖になると思われる。そのときの水位は現在の排水口のあるL池の水位にまで下がり、池の形は予測図のように小さくなる。そのときの貯水量は氷河底の深さによる（P95）。

4、そのときの池の北端の氷河壁の高さは、今は計測できない氷河の厚みと氷河の減少量により決まる。池が拡大するときに氷河が消えていると氷壁はできず、氷河が残っていると、高い氷壁になる。その姿を予測断面図に表わした（P107）。

5、水位低下のあった池は小さくなっている。特にB池、D池とL池において顕著で、これは下の池との堤が切れて水位が下がったためである。

6、池の最深部が氷河底に届いているかどうか、今回の測定結果からは考えることができない（これを知りたいが）。池の底は氷河底に届いていないと推定する。氷河の厚みは池の深さよりも大きいので、池の成長余地は大きい（U字谷の形状より推定）。1つの湖になったときの湖の面積は最大70haで、これが深くなったときには最大容積3500万㎥まで成長可能である（ターミナル付近は土砂で浅くなっているので50mとする。P107）。

7、池の変化では、まず池と池の間の境がなくなって池の数が減り、上部の池は水位が下がって小さくなることが起きる。最後には1つの氷河池になる。そのときの形状は空撮図に記入した予測線のとおりである（P95）。

8、排出口の幅の測定値は10m、深さは2m、増水時を推定すると幅30m、深さ4m（P106）。

9、この排出口の堰になっている岩が、氷の上に載っているのか、基岩の上にあるのかは分からない。モレーンの凍土が融けるときに崩れる可能性はある。

10、排水口から流れ出る水は9㎥／秒（10月31日時点の計測）であり、増水時に水が来ているのは水路の両側が白色化している部分までである。この深さは測定していないが、周辺の物と比較して約2ｍ（Ｐ105、103）。

11、この池は氷河から流れ下る水の短期間の中間貯留池として機能していることになる。意外な感じがするが、貯留期間は単純計算で雨期以外はほぼ2日間、雨期には1日である（Ｐ89）。

12、増水時の水のレベルは、写真の白色化した河床より推定する。流水の量と白色化の位置で考えるが、増水時の流量は5～10倍か（Ｐ103）。

13、氷河の表面のかたちからは推測できないことだが、池からの排水が9㎥／秒だということは、ほぼ同量が氷河から流入していることである。氷河の河床に水の流路があって、Gaunara氷河合流位置、ゴジュンバ・ツォ（下から5つ目の湖）の東の位置から、また、さらに上からの融水が氷河底を流れているはずである。暗渠のような岩の断面を見たが、このような流路がいくつもあると考えたい。これが壁面に露出していると、流水の痕が残るのであろう（Ｐ102）。

14、氷河のこの8㎞の間の流下は、少なくとも2008年以降は止まっている（2016年空撮とグーグルアースの過去写真より。Ｐ99）。

15、この氷河は痩せ細りが進行している。1974年12月空撮と2016年10月空撮を比較し、この横断面から沈下を読むと、40年間で78ｍ厚みが減っている（Ｐ100）。

16、この量は年間約1600万㎥（2ｍ×1㎞×8㎞）となり、上部を含めた氷河全体の減少量はこれの数倍である。

17、降水量の測定値がないのだが、降水量に融水量が加わって排水量となる。その量の変化を下流の適地で通年測り、ドゥード・コシの流量変化を長期に続けて見れば、氷河の状況を推定できる（Ｐ108）。

18、涵養域への降水を年間4000㎜だと推定すると、総量は5億㎥（カトマンズ、ポカラなどの降雨量より推定、Ｐ104）。

19、この降水は主に夏季であるので、気温が2℃上がって標高で300ｍ平衡線が上昇すると、これにより面積で約20㎢増え、雨期の3ヶ月の降雨量で3000㎥となる。単純計算では氷河の融水は雨期の流水を約10％増やすことになる（Ｐ107）。

20、池の水位が2ｍ上がるとその総量は320万㎥であ

り、今は無難に貯水しているが、池の境がなくなり、面積が縮小して氷河の末端が氷壁になると、崩壊の可能性が出てくる。したがって、今後も観察が必要になる。末端が大きく池の上にせり出る可能性もあるが、安全に推移する可能性の方が高い。これは現在の氷床の深さ（今後の測定が必要）による（P107）。

21、氷河のなかに生える植物の1つの年輪が12㎜直径で37年であった。広く植物調査を行なえば、多くの知見が得られると考える。

調査より得られた結論

1、ネパール・ヒマラヤの代表的な氷河で、チョー・オユーの南にあるゴジュンバ氷河は流下が止まっていて、少なくとも下部8㎞は移動がなく、痩せ細りつつある。ここは地球温暖化の指標になる。氷河の表面では池ができたり水が抜けて消えたりして、年間約2mの速度で厚さが下がっている。

2、氷床の厚みは分からないが、通常のU字谷と比較してサイドモレーンの角度から約100mだと推定する。池の等深図から考えると、池の底は氷河の底に届いていないと思えるから、氷河の厚みは池の深さの最大値21mよりも厚い。氷河の深さは、今後の変化予測のために調べたい点である。池の変化のウォッチも氷河の変化を知るのに役立つと思われる。

3、エンドモレーンには26の池ができている。その総面積は27万㎡、平均水深を6mとすると、総貯水量は約160万㎥である。そのうちの15の池は水の流入で拡大を続け、つながり、浅くなり、広くなり、小さくなり、最終的には1つの池になる方向で変化を続けている。

4、この池群の水位は、雨期には2～3m上昇したと思える。その痕跡が白砂の原と岸と落ち口にある。その増水時の水は、雨期の降水と氷河の氷の急激な融解により生まれたと考える。

5、白砂の原の成因は水篩と風篩（ふうし）によると考えるが、詳しい成因は解明できない。風篩を考えることで、水位の上昇が2～3mであることの理解ができる。

6、1つの池になるときは、現状の15の池の外を結んだ輪郭より小さくなり、また全般に深くなる。水面の高度はL池の高度になる。

7、10月末に排水口を通る水量は、9㎥／秒（10月31日）約80万㎥／日であった。氷河全体から流下するすべての水をこの排水口から吐き出している。これは130㎢の取水

域に降る水（雪と雨）と氷河の融水である。雨期にはこの流水が5～10倍になる。

8、増水時には流水が増え、V型の排出口が溢れるように水位が上がる。そのときは約2～3m水位が上がり、100万㎥ほど水ストックが増えている。このとき池の面積は拡大していて、O池にも流入する。

9、平時の1日に落ち口を通る流量は80万㎥／日、雨期にはこれの5～10倍が通過していることになる。これは仮定だが、雨期に130㎢の取水域に降る水が50㎜／日で続くとすると、700万㎥／日であり、平常時の水量の80万㎥／日の8倍の数字になる。これに氷河の融解量が加わることになる。氷河の下部の8㎞には5億㎥の水のストックがあるので、氷河にある水は降雨の量にほぼ近いことになる。

10、B池の北側に雪壁ができると、これが崩れる可能性もある。B池などに上部の池と下の池に高度差ができ、その境が切れるときには急な水流が生まれ、それが排水口への衝撃になることは容易に考えられる。そのときに排水口でどのようなことが起きるかは分からない。

11、安全と安心に向けて対処していく方法として考えられることは以下のとおりである。

① O池をバイパスとして活かすようにし、排水口を広くして雨期に起きる水位の上昇を減らすこと。これはO池の下部に水路を造っておき、増水時にO池に入った水がここを通って本流とつながるようにしておくのが有効で、できるだけ水を下に流して雨期の水位上昇を小さくする。排出口の幅を拡げ、溢れる水の水位を下げておくのである。

② 下流で水位の測定を通年で行ない、水量の変化をウォッチする。これの急激な変化で異常を知る。

③ 衛星の情報で変化をウォッチする。急激な変化には対応できないが、長期間やれば異常がつかめる。

④この氷河の調査を継続する。ヒマラヤ氷河の代表例であり、変化がつかめるので、ほかの氷河も含めた災害防止と地球温暖化対策の指標として役立つ。

12、温暖化がある限り、氷河の流下停止と痩せ細りは止まらない。これは地球の危険信号として捉えることができる。2℃上昇したときには、（気温逓減率0・6℃／100mとする）、エンドモレーンの位置が、高度にして300m上部になることになる。

それは今のターミナル・モレーンの位置が高度4700mから高度5000mになろうとすることで、その位置はゴーキョからはるか上のゴジュンバ・ツォぐらいとなる。

すなわち、そのときには今回調べた８kmの氷河はなく、今の池の位置に小さい氷河湖が存在することになる。この警告を登山のみならず、人間の活動に活かしたい。

クンブ地域とゴジュンバ氷河の氷河後退の調査隊（略称：ゴジュンバ氷河調査隊 JAC Ngozumba Glacier Investigation）

今回の計画の大要は以下のとおりである。

指導

調査研究指導：岩田修二先生（会員番号９１１１）
画像情報解析指導：中田高先生（広島大学）
画像入手後の活用：藤田耕史先生（名古屋大学）
解析への助言：田中圭先生（日本地図センター）

隊員構成

調査隊（G隊）：隊長：大森弘一郎（４５３２）、隊員：リンジン・シェルパ、ガネッシュ・ライ
サポートS隊：野本勇（１３０７２）
F隊：岡内完治、シャム・バハドール・ドンゴル

実行者：ＮＰＯ法人　山の自然学クラブ・大森弘一郎
後援：公益社団法人日本山岳会　担当・神長幹雄
留守本部：大蔵喜福・ＮＰＯ法人　山の自然学クラブ理事長
旅行手配代行：㈱ヒマラヤ観光開発（担当・丸山）

行動

全員：２０１６年10月12日　羽田発10：35ＴＧ６８３　バンコク市内泊
13日　バンコク→カトマンズ
14日　カトマンズ交渉
15日　カトマンズ、天候回復待機（計画より１日遅れる）

16日　ヘリコプターでルクラへ
17日　ルクラからマウンテン・フライト
18日　ルクラから朝マウンテン・フライト、F隊はルクラ発カトマンズへ21日帰国。調査G隊・S隊ルクラ（2840m）→パグディン（2610m）
19日　パグディン→ナムチェ・バザール（3440m）
20日　ナムチェ・バザール→クムジュン（3700m）
21日　クムジュン→クワンデ・ピーク（4200m）→クムジュン（3700m）
22日　クムジュン→モン・ラ（3972m）
23日　モン・ラ→ドーレ（4040m）
24日　ドーレ→マッチェルモ（4400m）
25日　マッチェルモ→タンナ着（4700m・BC）《S隊行動》
26日　F池調査《氷河池調査》
27日　C池調査《ゴーキョへ》
28日　矮性落葉の原調査《ゴーキョ・ピーク登山》
29日　M池調査《ゴーキョからタンナに帰る》
30日　タンナ→パンガ（BCを移動）《→パンガ》
31日　L池排出口調査《休養》
1日　BC撤収→ドーレ
2日　ドーレ→キンツマ
3日　キンツマ→ナムチェ・バザール
4日　→ナムチェ・バザール→パグディン
5日　→パグディン→ルクラ
6日　ルクラ→カトマンズ
7日　カトマンズ予備日
8日　カトマンズ→帰国の途に　9日早朝羽田

お礼

今回の作業は、シェルパをはじめ、コックやヤクの御者や、ポーターが献身的に支えてくれたことで成功した。特にリンジンさんの適切なアドバイス、ライさんの率先した行動は有難かった。

こういうことに対するお礼の形がチップだと思うのだが、その習慣が我々にはない。ちょうど同宿したツーリストの知人に意見を聞き、1万～4500ルピーの金額でお礼をした。その多少と渡す順位が重要であるとのことである。

最終日の夜、納会として皆が集まった、「JAC Ngozumba Glacier Investigation」とクリームで書いたケーキを作って

きてくれ、見知らぬお客さんにもふるまってもらった。

guide Rinjin sherupa、cook Asish rai、yak driver Dawa geljen Sherpa、asst guide Ganesh rai、assit cook Badiri rai、cook helper Jivan rai、camera porter Bedram rai、以上7名

11月5日の最終日の夜、すべて無事に終わってルクラの夜になった。皆に挨拶し。チップを渡し、彼らなりに飲み、楽しく終わった。

思わずエンドモレーンに咲くエーデルワイスを思った。厳しい環境にたたかれて、それでも立派に育っているたくましい花を思った。今回良く協力しくれた彼らにも、この花のように生きてほしいと心から思い、そのように挨拶して聞いてくれた。

私にとっては小さいながらチャレンジの日々であった。昭和35年にヒマルチュリに行ったとき、そこに居ながらやれなかったこと、やり残したことがあった。それから約50年経って今回の現地に行って、与えられたチャンスを最大限に生かして成果にしたいと思っていたが、この報告がその結果である。完全な活動を目指していても、なかなか満足できないものである。



ご指導くださった岩田修二先生、中田高先生をはじめとする多くの先生方。ご協力くださった、岡内完治氏、野本勇氏、宮原巍氏、リンジン・シェルパ氏をはじめとする現地で助けてくれた人々。この調査行の実現のために尽力してくださり、またご寄付などのご援助を下さった多くの方々に厚くお礼申し上げます。

［調査・研究］

河川の支流を表わす「沢・谷」地名考

五十嶋　一　晃

はじめに

河川の支流を意味する地名語尾の「沢」と「谷」の使い分けについて、「谷は比較的規模が大きく深い渓流を指し、沢は比較的規模が小さく浅い流れ」という意味合いが一般的であると筆者は認識していた。

ところが、古い事例ではあるが１９５４（昭和29）年７月、大学山岳部の夏山合宿において、遠見尾根から後立山連峰の稜線に着くやいなや、長野県出身である同期の新人は「剱岳だ。長次郎沢だ。平蔵沢だ」と叫んだ。筆者は剱岳の地元、富山県出身であるが「長次郎谷（だん）」「平蔵谷（だん）」と呼んでいたので、一瞬驚いた。谷を「だん」と呼ぶのは越中富山弁で、長次郎沢が正しいのであろうかと戸惑った。確かに富山県に限って谷を「たん」または「だん」と発音し、そう呼んでいる谷地名が圧倒的に多い。山の名称についても『富山県山名録』（２００１〈平成13〉年刊）では、掲載されている２４３山のうち、剱岳の北方稜線上にある「赤谷山（あかたんやま）」のように「谷」が付いている山は22山あり、うち「たん・だん」と呼ばない山は3山に過ぎない。

当時、長次郎谷・平蔵谷に関する登山記を調べると、明治末期から昭和初期までの登山記に「長次郎澤」と書かれている記述が散見され、どれが正しい地名であるのか分か

らない状態であった。ただし、地理調査所（現・国土地理院）、昭和28（１９５３）年6月30日発行の5万分1地形図には、長次郎谷・平蔵谷と表記されているので、一応、谷地名が正しいと受け止めていた。

筆者が登山史に関心を持ってからではあるが、「長次郎谷」の命名者は、１９０９（明治42）年7月、近代登山として剱岳初登頂に成功した富山県の青年4人で、案内人の宇治長次郎が先導した登山のときに命名したこと。初登頂のリーダーである吉田孫四郎は、日本山岳会の『山岳』第5年第1号に、登山記「越中劔岳」を寄せ、そこに「別山峠よりの雪谿途上にて望見する劔嶽山腹の右端、U字形をなす絶壁の南側下なり、余等之を長次郎谷と命名す」と記して、世に案内人の名をとって「長次郎谷」と名付けたことを発表していることが分かった。

この事例から地名は地方によって呼び名が異なるという実例を学び、それがきっかけとなって川の支流の語尾表記に関心を持ち、全国的に「沢・谷」地名は、方言が基になっていることを知った。

今回、日本の方言区画の視点から「沢・谷」地名を明らかにし、日本全体の「沢・谷」地名表記の分布、そのいわれを紐解き、使い分けの境界である飛騨山脈（北アルプス）のうち、特に黒部川を対象に現状の検証を試みた。

結論を述べると、地形としての「沢・谷」地名の違いは、水系、水流規模の大小・長短、地形の深浅、流量の多少、上流・下流の場所、植物の生え具合などによって使い分けているのではなく、一般論としておおむね新潟県―長野県―静岡県を結ぶ以東の東日本は「沢」地名、富山県―岐阜県―愛知県を結ぶ以西の西日本は「谷」地名という方言によって分かれている。ただし、分布の精度を高めれば愛知県は国土地理院の地形図上は沢が多いので、地形図に表記されている地名では富山県―岐阜県―三重県を結ぶ以西が谷地名であるとすべきではあるが、国土地理院の地形図に表記されていない谷地名が多く存在していることも考えられ、本稿では一般論を基調として進める。

一方、「沢」地名山域である東日本の前穂高岳の南東面の支流は、ほとんどが「谷」地名であり、谷川岳の越後側も「谷」地名であることはなぜだろう。そして、「沢・谷」地名の境界は飛騨山脈（北アルプス）ではあるが、この山域は混在地帯で、その実態を確認したい。なかでも「劔沢」は、「谷」地名山域であるが、流れが長く深く落差１３４ｍ・12段の劔大滝がある渓谷あるいは川が、「沢」地名であることに特に関心を持った。黒部川は明治中期以降、登山者や

その案内人によって谷地名が沢地名に変わった支流が多くある。劔沢はその例に該当するのであろうか。いろいろな興味を抱いたので調査を進めた。

さらに、「沢」は縄文文化人、「谷」は弥生文化人が名付けた、という筋道を立てて述べられている学説がある。この提唱にも関心を持ち、その内容も吟味してみたい。

なお、沢・谷地名は固有名詞であり、正字は「澤」である場合がある。ただし、本稿では以降、原則として常用漢字の「沢」と表記する。国土地理院の現在の地形図には「〇〇澤」と旧字体で書かれた例を見ていないが、国土地理院では「市町村から提出された地名調書どおり表記しており、常用漢字に統一するようなことはなく、測量法とその関連する法律においても定めていない」との説明があった。古い絵図などに「澤」と書かれているが、各市町村では時代の経過とともに常用漢字に変えたのであろうか。

また、以降の記述で「沢」「谷」のみの表記は、それぞれ「沢」地名・「谷」地名を表わす場合が多く、「地名」という文字が省略されていることを了解願いたい。

沢と谷は、結局のところ同じ意味

「沢」と「谷」について各種辞典・事典などの記述は次のとおり。

◆国語辞典（三省堂）

【沢】①くぼんでいて、草の生えている湿地。②山間の、源流に近い谷川。

【谷】両側が台地や山にはさまれて低くくぼんだ地形の、細長い一続きの土地。

◆広辞苑（第6版）

【沢】①低くて水がたまり、蘆・萩などの茂った地。水草の交じり生えた地。②山間の比較的小さな谷川。渓流。

【谷】（谷、渓、谿）地表の隆起部の間にある細長く凹んだ地形。成因によって浸食谷・構造谷などに区別し、浸食谷はさらに河谷・氷食谷に、構造谷は向斜谷・断層谷などに分けられる。

◆ウィキペディア（インターネット）

【沢】細い川、もしくは短い川の通称であるが、その区別は曖昧であり、長大な沢・広い河原を有する沢もあれば、長さ数百ｍに満たない川もある。更に沢の支流に川がある

こともある。また、原頭部（筆者注・源頭部のこと）からの距離が短く、したがって流量は少ないが水質の良い山間部の川を指す場合もある。湧水のことを指す場合もある。

【谷】山や丘、尾根、山脈に挟まれた、周囲より標高の低い箇所が細長く溝状に伸びた地形のことである。渓・谿とも表記され、渓谷ともいう。また、新潟県、長野県、静岡県以東の東日本では「○○沢」と呼ばれることが多いが、富山県、岐阜県、愛知県以西の西日本では「○○谷」と呼ばれることが多い。つまり、「谷」と「沢」とは、同じ意味を表す方言どうしであった、という見方も可能である。

◆類語例解辞典（小学館）

【沢】類語として沼、池、湖。地面に、自然に水のたまったところ。関連語として沼沢、湖沼、泥沼、潟。また、小川の関連語として「沢」があり「山間の、谷川より小さい流れ」。

【谷】山と山の間の細長くくぼんだ所。また、谷川のこともいう。関連語として峡谷、渓谷、幽谷、空谷。

◆地名用語語源辞典（１９８３〈昭和58〉年、東京堂出版）（方言の地名はその後の合併で変わっている）

【沢】（沢、寒、佐和、佐波）①山間などの湿地（方言―兵庫県美方郡熊次ほか）。②水のたまっている所（方言―奈良県吉野郡大塔、鳥取県八頭郡若桜）。③木の茂っている窪地（方言―伊豆三宅島）。④山あいの水のある所。谷川（方言―新潟県中蒲原郡、長野県）。⑤谷（方言―岩手県和賀郡、長野県上伊那郡ほか）。⑥渓谷（方言―津軽、佐渡）。⑦物洗い場（方言―岐阜県揖斐郡徳山）。（「沢」以外省略）

解説―この用語は西日本では「湿地」の意味で使われ、東日本では「谷、渓谷」の意味とされているようである。アイヌ語で「山間小平地」を意味する「サハ」との関連を説く向きもあるが、アイヌ語からの借用語あるいはその残存と見るよりも、西日本の「湿地」系のケースも含め、日本語もアイヌ語も同系同源の語から派生した例と見たい。

鏡味完二は河川名に付く地名語尾「沢」「谷」の分布を調査し、東日本の「沢」に対し、西日本は「谷」型とした。河川の支流、支谷を意味する地名語尾「サハ」の分布としては、この認識はおおむね正しいが、これをさらに敷衍（ふえん）して、「サハ」があたかも東日本だけの地名用語であるというような結論にはならない。支流、支谷以外の自然地名、集落名、また耕地名としては、西日本にも「サハ」地名が多数見られるからである。

【谷】（谷＝や、「たに」では記述なし。谷以外の矢、屋、箭、八などの解説は省略）①略。②ヤツ（蕄）の略で「湿

地」の意。草茂りて水ある所。沢。沼地（方言―千葉県印旛郡）。③ヤツの一字音化で、小さな谷地形をさすことも多い。④水、流水の意。

解説―②の用例は従来、東日本系とされてきたが、西日本（とくに山陰、南四国、九州）にもかなり存在する。また、「谷」の用字の例も山口県の油谷などがある。

◆世界山岳百科事典（１９７１〈昭和46〉年、山と溪谷社刊）

【沢】（地形）山地内部の河谷の上流部や支流の谷床部をいう俗称。やや浅く広く開いた谷の場合にあてはめる。平水時には水が細流となって流れているか湿っているだけで、はっきり河流が作られていない場合が多い。したがって沢の傾斜は急で、滝など遷急点も多く、大雨の後や融雪期には増水して不安定な状態の谷床を呈する。変化に富み、しかも山頂や山稜への直進コースとなりうるので、沢登りとして登攀のルートに利用されることも多い。

【谷】記載なし。

◆山の用語なんでも事典（１９８４〈昭和59〉年、山と溪谷社刊）

【沢登り】の説明に「[渓谷遡行][沢歩き][谷歩き]なども同じように使われる」とあり、「渓谷登攀」の説明に続いて「沢（谷）には、滝の連続する登攀的要素の多いものと、ゴルジュや瀞（とろ）が発達したものがあり、登るにはそれに合った装備が必要である」とある。

以上、『河川名辞書』のような専門的な地形用語の解釈は別として、一般的な辞書に書かれている沢・谷については、ここに取り上げた辞典・事典・資料以外の文献をも含めてまとめてみると、地形・地質面では大差なく、流量の多少や植物の生えている湿地などは使い分けの要素ではない。また、実際に山へ入り、沢登り（「谷登り」とはほとんど聞かれない）や渓流釣りで水流地を歩いた体験では、区分することはできない。

事典類によっては、一見、明確な区分があるように説明されているが、突き詰めて考えれば、ウィキペディアのように「『谷』と『沢』とは、同じ意味を表す方言どうしであった、という見方も可能である」。あるいは『地名用語語源辞典』の解説の一部にあるように、「沢＝谷」「谷＝沢」と同意語であるとまとめられる。

おおむね東日本は沢、西日本は谷地名

国土地理院の地形図には載っていないが、登山用ガイドブックには、かなり詳しく沢・谷の名が記されているものがある。ガイドブックでは地域の人たちが日常使っている名を表したものが多く、水流の名称を研究するには非常に有用である。ただし、本稿では混乱を防ぐために、国土地理院の地形図を資料として優先させる。なお、おおむね1965（昭和40）年以降は、各市町村から国土地理院へ地名調書追加の提出がなければ、地形図上には名が載っていない。つまり、地域の人たちが使っている名であっても地形図上には表記されていなく、無名となっている。また、逆に地名調書で無名とした例もあろう。

国土地理院発行、2万5000分の1地形図に表記されている「沢・谷」地名を県ごとに集計した資料（㈱東京地図研究社のホームページにある2004年現在のデータ）で得た情報を一部確認・追認し、整理すると次のとおり。ただし、支流地名の語尾が沢・谷以外（渓谷、峡谷、渓、峡、俣、又、窪〈くぼ〉、淵、瀞、浴〈えき〉、ヤツ、入、内、別など）を除く。除いた支流語尾のうち、名は体を表わしていない表記は次のとおり。

①「俣・又」は支流から枝流が分岐する場合に示すことが多く、右俣・中俣・左俣や東西南北に俣の付いたものが多く、全国的に使われている。「又」は俣の表記を変えたもの。

②「浴」山口県に多く、谷地名の数を上回る。

③「ヤツ」「入」は埼玉県奥武蔵の名栗川の支流に「炭谷入」などがあり、秩父地方の東部にあたる高麗の周辺は朝鮮半島とのつながりが多いので、その名が付いたという。ただし、地形図上無名の支流も多い。

④「内」「別」は河川を意味するアイヌ語の「ナイ」「ベツ」の当て字である。

都道府県ごとの集計を地方ブロックごとに表示し、境目である「境界の県」および「検討を要する県」は別に表示する。

地　方	沢数	谷数	沢比率%	谷比率%
北海道地方	952	12	98・8	1・2
東北地方	4403	22	99・5	0・5
関東地方	918	49	94・9	5・1
中部東／注①	2216	174	92・7	7・3
中部西／注②	94	1197	7・3	92・7

近畿地方		0	793	0.0	100.0
中国地方	13	116	10.1	89.9	
四国地方	0	209	0.0	100.0	
九州沖縄地方	8	538	1.5	98.5	
合　計	604	3110	73.5	26.5	

〈境界の県〉

県名	沢数	谷数	沢比率%	谷比率%
新潟	757	61	92.5	7.5／注③
長野	1010	76	93.0	7.0／注④
静岡	226	6	97.4	2.6
富山	44	259	14.5	85.5／注⑤
岐阜	40	711	5.3	94.7
愛知	9	5	64.3	35.7／注⑥
三重	0	142	100.0	0.0

〈検討を要する県〉

埼玉	77	18	81.1	1.9／注⑦
千葉	0	1	0	100.0／注⑧
東京	28	18	60.9	39.1／注⑨
鳥取	13	23	36.1	63.9／注⑩
鹿児島	8	11	42.1	57.9／注⑪

〈注記〉

①「中部東」とは新潟県、山梨県、長野県、静岡県。

②「中部西」とは富山県、石川県、福井県、岐阜県、愛知県。

③新潟県は糸魚川から富山県方向はほとんどが谷である。

④長野県は梓川流域の穂高・槍ヶ岳方面はほとんどが谷である。

⑤富山県は谷比率が90％を割っている。ただし、黒部川水系以外はほとんどが谷である。黒部川は明治中期以降に「谷」が「沢」に変わった所がある。「黒部川の支流が谷地名から沢に変わった要因」参照。

⑥愛知県は対象数が14件で、谷地域であるが、沢割合が多い。ただし、一般論として谷の多い県に入っている。注⑧参照。

⑦埼玉県は奥秩父に大久保谷、細久保谷、広河原谷などがある。

⑧千葉県は地形図上、谷が1件のみであり、比率の対象から除外すべきであろう。

⑨東京都は埼玉県との境（西谷山～日向沢ノ峰）の稜線の南面・奥多摩に、孫惣谷、小川谷、カロー谷、倉沢谷、

川乗谷、峰入川谷など、この山域はほとんどが谷である。

⑩鳥取県は「沢が13で、このすべてが1市町村にある」という文献がある。鳥取県へ問い合わせたところ「『角川日本地名大辞典』では、語尾が沢は5件あるが、市町村は異なる。一・二級河川名には沢表記の該当がなく、準用河川の68件および普通河川は市町村の管轄であり、不明である」との回答を得た。そこで鳥取県すべての地形図を調べてみた範囲では、1市町村に13の沢のある所は見当たらず、県内ほとんどの支流は本流の川名に吸収されて、地形図上はほとんどが無名である。２００４（平成16年）以降に「沢」と名付けていた支流語尾が現在、消去されているのであろうか。

⑪鹿児島県は屋久島が沢・谷・川が入り混じっている。

地名表記の分布から読み取れる主なことは、

⑴全国の支流語尾が沢・谷と付く名称の分布を見ると、おおむね東日本では「沢」であり、西日本では「谷」が多い。なお、沢・谷の表記が少ない県は、水流地形が少ないことにもよるが、飛騨山脈や紀州山地以外は、中流・下流になると、ほとんどが本流の川名に吸収され、支流には特に名の記載がないことにもよる。

⑵東日本では沢地名が圧倒的に多いが、谷地名も確認できる。特に関東周辺に谷地名が比較的多い。西日本では境界の県および特殊な例（注⑩⑪）以外は沢地名がほとんど確認できない。

⑶沢と谷の境界は飛弾山脈（北アルプス）であり、そこは混在地帯でもある。したがって、東日本の新潟県、長野県にも「谷」が、西日本の富山県、岐阜県でも「沢」がそれなりにある。

愛知県は国土地理院発行の２万５０００分の１地形図では、谷が５ヶ所、沢が８ヶ所であり、沢が多い。西隣の三重県は谷が１４２ヶ所で沢ゼロである。愛知県は国の地形図に載っていない支流の名称では谷が多いと考え、愛知県へ問い合わせたが、判然とした説明は得られなかった。

なお、各都道府県では、少なくとも国土地理院の地形図に載っている地名はコンピュータに入力してあり、そのデータによっていろいろな事項が簡単に分かるであろうと判断して種々問い合わせたが、回答が鈍く、時間をかけて調査した県もあるが、問い合わせた範囲では、地名という視点からはコンピュータには入力していないことと、地名のことを問うてはいるが、図書館または河川は防災を目的として管理する担当部署があり、そこからの回答が多く、

問い合わせの目的とは異なった説明を受けた例が多い。

また、「地名調書」を担当する市町村では、担当部署を特に置かず「観光担当部署」とか「総務」などが必要により業務を行なっている所も多いように感じられる。

念のため河川の管理は、北海道建設部建設政策課維持管理防災課管理グループからの説明を例に示すと下記のとおり。

いわゆる「河川」は、河川法に基づき管理する「河川（法河川）」と市町村の条例に基づき管理する「その他の河川（普通河川）」に大別され、管理者は次のとおりとなっている。法河川の数は平成28年4月30日現在。

【法河川】

一級河川：国・北海道・札幌市が管理　1129河川（管理者重複を含む）

二級河川：北海道が管理　467河川

準用河川：河川法を準用し市町村が管理　429河川（管理者重複を含む）

【その他の河川】普通河川：市町村が条例に基づき管理

法河川を指定した場合は、官報などで公示することとされており、法河川の河川名を確認したところ、すべて「○○川」という名称で、「○○沢、○○谷」などの名称の河川はない。

以上であるが、全国的に支流語尾の沢・谷を求めるならば、都道府県単位ではなく「準用河川」「普通河川」を管理する市町村への問い合わせが必要であろう。

沢・谷の分布が東日本は沢で、西日本は谷であるという諸説を紹介する。

地質学者・隅田実は「日本の背骨と呼ばれる飛騨山脈を境として、西側は谷、東側は沢に、ほぼ統一されていることである。この地名の分水嶺は、地質学的には、糸魚川―静岡線（大地溝帯あるいはフォッサマグナ）の東側に平行して走っており、南端は御岳南麓まで続いている。次に飛騨山脈の中央部、北部、東京都、埼玉県、山梨県の境界付近および新潟県全域の4地域で谷と沢が入り混じっている。また、屋久島では、沢、谷、川が入り混じっている。北海道の場合には、谷はなく、河川を意味するアイヌ語のナイ、ベツの当て字である内、別が多く、沢も数多く見られる」と解説する。

地理学者・鏡味完二は「河川名につく地名語尾の沢、谷の分布を調査し、東日本の沢型に対し、西日本は谷型とする。しかし同時に、河川の支流、支谷を意味する地名語尾・

サワの分布としては、この認識はおおむね正しいが、これを更に敷衍して、サワがあたかも東日本だけの地名用語であるというような結論にはならない」としている。

『日本地名大辞典』（２００４〈平成16〉年、新人物往来社刊）の著者・吉田茂樹は「いくつかの例外はあるものの新潟県の親不知と三重県桑名市を結ぶラインの西にヤマト族が住む『谷』地名地域、東をアズマ族が住む『沢』地名地域」であるとの見解である。親不知は富山県朝日町と隣接しており、その間の水流地名は上路川、大滝谷、小脇谷など、すべて谷または川である。したがって、この吉田説は県別表示よりも精度が高く、愛知県は「沢」地域であるとしている点でも納得できる説であり、筆者は線引きについては、この説がベストであると認識する。

縄文文化人は沢、弥生文化人は谷と呼び名を付けた

日本先史時代の縄文人や弥生人の勢力圏とか文化圏については諸説ある。勢力とか文化以前に、たとえば、縄文人は東アジア人集団から独立し、独自の進化をとげた集団である可能性がある、と最近の研究で提唱されている。それには、縄文人とほかの地域の東アジア古代人の核ゲノム（特定の生物が持つ遺伝情報）を解析する必要がある、という。

一方、弥生時代は紀元前3世紀中ごろから始まるとする説には、異論が出されている。近年、縄文末期に属する遺跡の土器片からプラント・オパールが見つかり、少なくとも約３５００年前からすでに陸稲による稲作が行なわれていたとする学説が発表されている。

このように、先史時代の諸事項については最近新しい説がいくつも発表されているが、諸説紛々たるなかで縄文・弥生時代の文化、なかでも具体的に「沢・谷」地名を理解するための前提事項を述べる。

従来、一般的には「縄文時代（紀元前14世紀ごろ～紀元前3世紀中ごろ）は狩猟採集による生活であったが、弥生時代（紀元前3世紀中ごろ～紀元後3世紀中ごろ）に入ると、大陸（北東アジア）から渡来民がやって来て水稲が伝来し、水稲耕作が始まった」という認識があり、NHK for School によると、「弥生の新しい文化を持った人々は、九州北部から海や陸を通って次第に東へと移動した。それまで縄文の暮らしを営む人々が住んでいた場所にも、弥生の文化を持った人々の集落ができた。弥生の人々は、田んぼを作り急速に増えていった。すると各地で、縄文の人々と弥生の人々との間で戦いが起るようになった。弥生の人々

は道具を作る技術、米作りを通じて身につけた集団での行動など、縄文の人々よりすべての点で勝っていた。弥生の人々は、近畿地方から東海、関東平野へと急速に勢力を拡げていった」とまとめられる。そして、インターネット上では「渡来人（＝弥生人）の多くは倭国西部（＝後の西日本）に集住しており、縄文人の子孫は倭国東部（＝後の東日本）に集住していた。縄文人は人口も少なく、弥生人と縄文人を対等に考えるのはあまりにも不自然である」と記されているが、後半部分はよく理解できない。

地質学者・隅田実は「私流に言えば、谷を使っていた谷族と、沢を使っていた沢族なる民族が、相当に長い年月にわたって本州を二分して勢力拮抗していて、その行動範囲のぶつかる地帯が飛騨山脈であり、その後、沢族（日本全土に定着していた土着先住民、時代関係から見て当然縄文人）は、関東地方から東北地方へ、更に北海道へと追いやられていった。しかし、言葉は音として地名や話し言葉として残った。一方、九州以南へ追いやられた言葉は、屋久島をはじめ沖縄諸島の方言や地名に、そのレリックがのこっている筈である」とし、「谷族文化の勢力圏は、本州西半部、四国、九州であったこと、また谷という語の起源は朝鮮半島に今でも残っているタン、ダン、トンであり、一方、谷という字は中国渡来の漢字を当てたものである、ということに異論をはさむ余地はほとんどない。三段論法式に言えば、谷族イコール古代朝鮮民族ということになる。古代朝鮮民族が彼らの言葉を、例へタニという言葉だけとしても、我が国の先住民に徹底して普及させる為には、余程、長期にわたる強い政治力と文化の浸透のあった事がうかがえる」（『地質ニュース』２００１年７月号）としている。

地理学者・鈴木秀夫は「日本における、土器による各時代の文化圏の分布、血液のＨＢ抗原やＡ因子の頻度分布、方言圏の分布などを比較して、先に沢地区名をつけた人（仮に縄文人）が住んでいて、その後谷地名をつけた人（仮に弥生人）が朝鮮半島からやってきたと（読者に判断させながら）、推測している」と説く。

哲学者・梅原猛は、「世界的にみて、大多数の民族が外から来て先住民を征服した場合、外来の征服民族が圧倒的に少なくて、且つ本国からの援助が得られない（軍事力はあっても、長期にわたって文化全体までの征服に至らない）場合は、言葉において被征服者の言語に征服される。それが言語学の一つの法則になっている」と説く。

弥生文化が西から東へと伝わったことは歴史上ほぼ間違

いなく、そうした文化の伝播過程において、地名がなんらかの影響を受けたことは、大いに起こり得るといえよう。

つまり、日本の先住民である縄文文化人が「沢」を使っていた。時代の経過とともに、渡来の民族である稲作などの弥生文化を伝えた弥生人が「谷」を使い、その勢力を全国に広げていったが、飛騨山脈が勢力を伸ばす楯となり、東日本は従来の沢として残ったが、西日本は谷になり、飛騨山脈は混在地帯となった、と解することができる。

ただし、縄文文化圏である東日本に「谷」が比較的多い。この現象は東日本に弥生人が入って、一部谷地名として残したのではないかと考えられるが、逆に西日本では弥生文化に圧倒されて、「沢」地名はほとんど残らなかったとも言える。

いずれの説も、縄文文化の影響を強く残す地域は「沢」で東日本、弥生文化の影響が大きかった地域は「谷」で西日本、という考え方に集約される。また、それを否定する説は見当たらない。

沢地名地域である前穂高岳南東面、谷川岳越後側は谷地名が多い

東日本は沢地名地域であるが、谷地名が多い事例を吟味する。上高地を流れている梓川を安曇節では「槍を下れば梓の谷に　宮居涼しき神垣内（かみこうち）」と謳う歌詞があり、この歌詞は梓川を沢ではなく谷と称している。現在の国土地理院の地形図では、梓川の北西方向を明神池から上流へ向かって下宮川谷、上宮川谷、下又白谷、中又白谷、奥又白谷、横尾谷（横尾本谷、涸沢）、一ノ俣谷、二ノ俣谷、槍沢と続く。つまり、この一帯は槍沢と涸沢以外は沢地名ではなく谷地名であり、非常に珍しい。この沢ではなく谷である謂（いわれ）を長野県松本市および大町山岳博物館に問い合わせたが、その要因については分からないようだ。

陸地測量部がこの方面で最初に発行した5万分の1地形図「燒嶽（現・上高地）」（大正元年測量、大正2〈1913〉年6月30日発行）は、前穂高嶽として表記のある山は現在の西穂高岳、穂高嶽は現在の前穂高岳の違いはあるが、この地域、つまり、梓川の西・北西方面の水流地形の表記は、横尾谷（本谷、唐谷）、一ノ俣谷、二ノ俣谷、鎗澤の表記のみである。その後、安曇村では下宮川谷、上宮川谷、下又白谷、中又白谷、奥又白谷など村周辺で呼ばれ、表記されている谷を地形図に加えている。ただし、「唐谷」が「涸沢」に変わった。

このことからこの地域は、槍沢以外は「谷地名」であったといえよう。槍沢は後述する剱沢が剱谷であったように、古名は鎗谷あるいは鑓沢谷のように谷が付いていたのではなかろうかと推測し、この地域が谷であることを推し量ってみる。

関東の奥秩父や奥武蔵に谷地名が比較的多く、沢・谷の境目が明確ではない混在地帯がある。この現象は、弥生人の東国進出の拠点がこのあたりに置かれたことで多くの弥生人が移り住んだためだ、と推測されている。この推測から梓川や谷川岳越後側の推論を導き、それを端的に述べると、弥生人が一時期、上河内（上高地）に進出したことがあった、あるいは飛騨の弥生人が安房峠から短期間、随時に上河内へ越境していて谷と名付けた、と推測される。

一方、槍沢が谷ではなく沢であることは、幡隆上人が開いた槍ヶ岳へは登拝登山者が多く、槍ヶ岳から導かれて槍沢谷であった名が、近代になって地元の先導者（案内人）たちが慣習的に使っている沢のみとし、谷を省略して槍沢としたのではなかろうか。つまり、梓川上流西側一帯は谷族である弥生人の勢力が強く、その一帯のみを谷と名付けたが、槍沢谷をのちに槍沢とした、と推測する。上高地を中心としたこの地域で、弥生式土器、弥生人の道具が発見されないだろうか、大変興味のあるところだ。

ネットに「飛弾山脈の地名は、明治以降にできたものも多いと推測します。西日本の谷地名の習慣のある人が名づけると～谷に、東日本の沢地名の習慣のある人が名づけると～沢になったのでしょう」あるいは「穂高を目がけて谷がいくつもはいり込んでおり、谷文化の飛弾、もしくは越中の人たちが険しい岩場に挑戦したことが伺えます」とあるが、江戸期から黒部川などは奥山廻りで名が付いており、越中人が穂高岳まで出向いたとは考えられない。このような推測は、混乱する原因をつくっているようなものだ。

谷川岳越後側は、陸地測量部（現・国土地理院）が5万分の1地形図「湯澤」を最初に発行した大正元年測図・大正3（1914）年5月30日発行のものには、萬太郎谷、茂倉谷、檜又谷、（登川）本谷の記載があり、現在の2万5000分の1地形図では、仙ノ倉谷、（大根下シ沢）、（毛渡沢）、（蓬沢）が加えられている。この谷名も一時、弥生文化の拠点となった山域であろう。

飛弾山脈（北アルプス）特に黒部川流域は沢と谷の境界

北アルプスを取り巻く新潟県は沢地名が92・5％、長野県は93・0％で、ほかの東日本と比較すれば、谷の割合が多い。一方、富山県の谷地名は85・5％、岐阜県が94・7％で、沢地名が全くない県が多いなかで、沢地名の割合が極めて高い。したがって、日本の沢・谷地名の分布状況を俯瞰すると、その境界は北アルプスであり、混在状態はそこに集中しているといえよう。つまり、北アルプスを俯瞰すれば混在状態が把握できると同時に、沢・谷地名の境界であることがよく理解できる。なかでも立山連峰と後立山連峰の間を流れている黒部川は、すべて富山県内にあるが、「谷・沢」地名が日本で一番混在している地帯である。

富山県は黒部川水系以外の神通川、庄川、小矢部川、常願寺川、早月川、片貝川など34水系の河川名が、本流・支流とも「沢」という名称は、庄川の中沢とイチコ沢などほんのわずかである。それ以外は川や谷や俣などであって、沢ではない。

黒部川の実態を詳細に確認した。現在の国土地理院発行2万5000分の1地形図による黒部川支流の名称を右岸と左岸に分け、源流から下流に向かって順に列記すれば次のとおりで、その混在している実態が一目瞭然で、説明の必要がない。

右岸では祖父沢、祖母沢、岩苔小谷、温泉沢、赤牛沢、中ノタル沢、口元ノタル沢、東沢谷（支流・三ノ沢、二ノ沢、一ノ沢）、針ノ木谷（支流・南沢、小南沢）、元サワボ川、小スバリ沢、大スバリ沢、赤沢、鳴沢、新越沢、タル沢、棒小屋沢（支流・西沢小沢）、東谷（支流・鹿島ウラ沢）、餓鬼谷、祖母谷（支流・祖父谷〔枝流・猿猴沢、奥不動谷、中ノ谷〕、名剣沢、西ノ谷、清水谷、硫黄沢）、ガラ谷、百貫谷、不帰谷、小便谷、狢谷、猫又谷（平成23年更新になし）、黒薙川（支流・コザ杉谷、猪頭谷、十六谷、北俣谷、杉谷）森石沢、弥太蔵谷、音谷である。

左岸では五郎沢、赤木沢（支流・ウマ沢）、薬師沢（支流・左俣、右俣）、金作谷、スゴ沢、廊下沢、熊ノ沢、オクノ木挽谷、中ノ木挽谷、元木挽谷、ヌクイ谷、中ノ谷、御山谷、タンボ沢、御前谷、内蔵助谷、黒部別山谷、〈一つの流れ〉剱沢―剱沢雪渓―南股―剱沢（支流・真砂沢、別山沢、武蔵谷、平蔵谷、長次郎谷）、北股（支流・三ノ窓雪渓、小窓雪渓）、半月沢、雲切谷、仙人谷、阿曽原谷、オリオ谷、志合谷、蜆谷、欅谷、小黒部谷（支流・折尾谷、中谷、西谷）、チョ雀谷、小屋谷、ウド谷、四平谷、似合谷、サンナビキ谷、嘉々堂谷、ボセ谷、尾沼谷、宇奈月谷、イワシ谷、深谷。

つまり、黒部川の支流語尾の「谷・沢」の数は、右岸（黒部川の信州寄り）は、「川」の2ヶ所を除いて、「谷」が24、「沢」が24で、谷が50％、上流は沢、下流に谷が多い。左岸（黒部川の富山県寄り）は、「俣、股、雪渓」の7ヶ所を除いて、「谷」が36、「沢」が12（剱沢は1とする）で、谷が75％である。下流はすべて「谷」である。黒部川全体では、「谷」が60で62・5％、「沢」が36で37・5％。一応「谷」地名地域の面目を保ってはいるが、「黒部川は、おおむね上流が沢で、下流が谷である」ともいえる。

なお、白馬岳から北へ延びる雪倉岳・朝日岳・犬ヶ岳の主稜線の黒部側、つまり、富山県側はすべて谷であり、長野県側はすべて沢である。

黒部川の支流が谷地名から沢に変わった要因

黒部川の源流から黒部川を挟んで西は立山連峰、東は後立山連峰が3000m近くの山々を連ねて日本海に没している。藩政時代にこの広大な山域を黒部奥山と呼び、加賀藩は、立山登拝道以外はみだりに人の立ち入るのを禁じ、奥山廻り役を派遣して監視させた。しかし、地元の猟師は山中に入り、特に信州の杣人やイワナ釣りはひそかにこの奥山に入っていた。それらの人々が呼んでいた地名は、奥山廻り役が呼んでいた地名とは関係なく、現代に息づいている。

230年間閉じられていた黒部奥山は、加賀藩が王政復古後の1870（明治3）年9月に奥山廻り制度を廃し、「御縮山の禁」が解かれて、狩猟、イワナ釣り、薬草採り、水晶などの鉱石の採掘などには、誰でも自由に入山できることとなった。1877（明治10）年から趣味登山（近代登山）として、アーネスト・メイスン・サトウらの外国人たちによる、大町から針ノ木峠を越えて立山方面への登山が盛んになる。

明治の中ごろから大正の初期における日本人による探検登山時代に、登山者の多くが信州側から信州の猟漁師や杣人を案内人として、黒部川および立山連峰へ入った。信州の猟師などの活動域は東日本の沢地名の地域であり、信州から入山する登山者は東日本の人が圧倒的に多く、やはり沢地名地域の人たちである。案内人の猟漁師は黒部の谷地名を沢と教え、それを登山者がなんの疑問も持たず登山記に発表した。その結果、江戸期からの「谷」地名が「沢」に変わるとともに、無名の支流に新しく命名する場合は「沢」としたことにより、黒部川一帯が「沢」地名として定

着してしまったといえる。なお、この見解は富山県立富山図書館館長、日本山岳会富山支部（会員番号５５７５番）の顧問であった故・広瀬誠の説に基づく部分が多い。

その証として、日本山岳会の機関誌『山岳』第10年第２号（１９１５〈大正４〉年12月刊）の付録に「登山地図第一輯『劒岳』」がある。それには「劒澤」（後述する陸地測量部、大正２年７月発行の地形図では「劔川」）「長次郎沢」「平蔵沢」などの表記がある。陸地測量部、昭和７（１９３２）年６月発行の５万分の１地形図から、それまで表記のなかった長次郎谷、平蔵谷が地形図に載った。それよりも早く発行された地図には、正式名の「谷」ではなく「沢」が多い。

具体的に示そう。越中では往時から「栂山」と呼び、１９０２（明治35）年に陸地測量部が設置した測量標名も「栂山」で、古絵図には「数合山（すごうやま）」（現・スゴノ頭は「奥数合山」）と表記されている山を「越中澤岳」にしてしまった。１９１０（明治43）年７月に日本山岳会の中村清太郎、三枝威之介と信州の案内人（遠山兵三郎、大西又吉、仁科春吉）の５人、つまり、支流地名を沢と呼ぶ地域の人たちが縦走し、中村はその登山記『山岳』第６年第１号「越中アルプス縦断記（上）」に「越中澤岳（新稱）」と名付けて発表した。その根拠は、越中では「ヌクイ谷（だん）」と呼び、表記は文献によっては「温谷」と書かれているが、黒部川と合流する付近に温泉が湧いており、そこから名付けられた名である。その谷を中村は「越中澤」とし、その源頭にある山を「越中澤岳」に変えてしまった。つまり、越中（富山県）に信州の澤を付けた名であって、一つの山に越中・信州が混合した、実に奇妙な山名となっている。中村は中ノ谷を温谷（ぬくいたに）とし、現在のヌクイ谷を越中澤としている間違いや、登山記には「今は稍近い澤の名をとつて仮りに越中澤岳と呼んで置く、勿論後来適当な名が定められゝば撤回するに躊躇しない。それに品右衛門の所謂中廊下ノ頭がこれであるらしい（注・信州平村のもので黒部の主、平ノ小屋の遠山品右衛門は同じ登山記に「温（ヌクイ）の頭」と言い、そのように書かれている）」と述べているが、「栂山」という名が付いていることを知らなかったことと、栂山であることを提言する人がいなかったのであろう。その後は混合している山名がまかり通ってしまった。

陸地測量部が５万分の１地形図「立山」を初めて発行した大正２（１９１３）年７月30日の図には「ヌクイ谷」と表記し、その場所も間違いなく現在の所と同じである。た

だし、その図には越中沢岳は無名で、昭和34（１９５９）年5月30日発行の地形図から「越中沢岳」と表記した。当時の管轄市町村は、なんの疑問も正しい認識もないまま、地名調書に「越中沢岳」と記入したのであろう。ほかにも境界にある山名が地名調書に未記入であったことがあり、そう疑わざるを得ない。

黒部川のほとんどを開拓した東京の冠松次郎は、自著の『黒部谿谷』（１９２８〈昭和3〉年7月、アルス刊）に「劔澤を始めとして小黒部谷、仙人澤、内蔵の助澤、御山澤、御前澤に到る迄」とあり、規模の大きい小黒部谷以外の支流を、ことごとく澤に置き換えている。地名にはかなり関心を持っている冠松次郎ではあるが、この支流の地名についてはなぜか「谷」を「沢」に置き換えている例が多い。薬師岳の金作谷の命名について、今西錦司、西堀栄三郎が宮本金作の名をとって「金作谷」と名付けることについて、冠とも相談しているにもかかわらず、冠の著書には「金作澤」と記されているなど、冠は谷と沢は方言であることを知らず、支流の「谷」は間違いであるか、支流であっても大きな川に相当する流れを「谷」と認識し、ほとんどの支流は沢としていたのではなかろうか。

冠松次郎が黒部川と初めて接したのは、１９１１（明治44）年7～8月、白馬岳に登り祖母谷を下降した山行であるが、信州の案内人であった。１９１５（大正4）年7月、佐伯平蔵らと劔岳へ登り、登山者として平蔵谷を初めて下降したが、この山行が立山案内人と接する始まりで、黒部川中央部の探索などは立山案内人が先導している。

その後、冠松次郎は木暮理太郎の紹介によって宇治長次郎および大山案内人を伴うことになるが、その始まりは１９２０（大正9）年8月、平から岩小屋沢岳支尾根を初踏破した山行で、その後はすべて長次郎または大山案内人が黒部峡谷の開拓を先導している。つまり、黒部の支流を「谷（たん）」という以外には言葉を知らない芦峅案内人や大山案内人と同行しているにもかかわらず、冠は「谷」を「澤」と書いている。

１９１３（大正2）年に劔岳第2登をなした日本山岳会会員で東京在住の近藤茂吉は、平蔵と別山尾根を初下降し、「平蔵谷」の名付け親ではあるが、「平蔵澤」と命名している。それを地元では「平蔵谷」とした。

現在の奥黒部ヒュッテから水晶岳の脇へ突き上げている大きな支流「東沢谷」の越中名は中岳谷であったが、現在では一般的に「東沢」と呼んでいる。正式には国土地理院の地形図に記されているように「東沢谷」であり、なんと

か沢と谷を融合させて、越中と信州の両方の面目を保てるような形になった名のようである。もっとも、東沢谷から烏帽子岳、三ツ岳を越えた所に高瀬ダムがあり、その東面には「東沢」と名が付く沢がある。その東沢の所属する大町市と穂高町の境には東沢岳・東沢乗越があり、信州の杣人（江戸期の東沢谷には杣人が多く入っていた）は、間違いを避けるために谷の付く支流を承知していたのではなかろうか。

現在の「薬師沢」という名称は、信州側で付けた名称で、薬師岳を沢名に冠した名である。越中の絵図や加賀藩公称の文献では「折谷（おりだん）」と記されており、これも信州名に置き換えられた一例である。折谷は「下り谷」とも書かれた図があるので、オレダンではなく、オリダンと読むことが分かる。薬師岳の東南尾根上にある三等三角点（２６５０・７ｍ）の測量標名称は「折谷」で、目立たない所で、わずかに越中名を留めている。

これらの事例が示すように、「川」や「谷」が「沢」に変わった。一部逆の例もある。御前谷、御山谷も御前沢、御山沢と書かれている登山記が極めて多く、新しく命名した水流は、ほとんどが「沢」である。江戸時代の黒部奥山廻りの黒部川の絵図は、「俣」などを除けばほとんどが「谷」であり、それを踏襲していた越中名の谷地名が、信州名の沢地名に変わった所が極めて多い、と言えよう。

劔沢の古名は「劔沢谷」「劔谷」、大正期の地形図は「劔川」

劔沢は江戸期の黒部奥山廻り絵図では「劔澤谷」（上新川郡奥山巡廻道筋之内見取繪圖など。注・１８９６〈明治29〉年に上新川郡から中新川郡が分離し、現在の劔沢は中新川郡に所在）、天保期成立の黒部古図には「劔谷」と記されている。また、後述する陸地測量部発行の５万分の１地形図では、大正期は「劔川」であった。

しかし、１９０７（明治40）年７月、測量登山で劔岳に登頂した柴崎芳太郎一行の快挙を報道した明治40（１９０７）年８月５日付『富山日報』の「劔山攀登冒險譚」には「劔澤」と載っており、劔岳近代登山の初登である１９０９（明治42）年の登山記が、１９１０（明治43）年３月発行の『山岳』第５年第１号に発表されており、それには「劔澤」とあり、その後の登山者の登山記には、ほとんどが「劔沢」である。筆者は、劔沢以外の地名が記された登山記をいまだ見ていない。現在の立山方面の山荘・山小屋のオーナー

は、「劔沢」以外の地名の認識はない。山岳ガイドも同様であろう。戦中によく源次郎の劔沢小屋へ遊びに行ったという源次郎の孫たち、つまり、現在の芦峅の古老に聞いても、劔沢以外に聞いたことがないと言う。

なお、「劔岳」や「劔沢」の「劔」という文字は、２００４（平成16）年、「劔」に統一されたが、それまでは10種類ほどの字が記されていた。ここでは谷・沢地名を検討の題材としているので、引用・転記以外はすべて「劔」と表記する。

陸地測量部（後の地理調査所・現在の国土地理院）発行の地形図から、現在の劔沢筋に「劔沢」の初出（発行した地形図のうち未見の図が若干あるため、初出と考えられるものを含む）とその変遷を、２万５０００分の１地形図の「劔岳」「十字峡」が最初に発行された１９７０（昭和45）年８月30日までを追ってみた。

その結果、地形図上では、５万分の１地形図が最初に発行された１９１３（大正２）年には「劔川」、それが１９３２（昭和７）年には「雪渓」と変わり、１９５３（昭和28）年に劔小屋が「劔澤小屋」に変わったことにより、地名ではなく小屋名ではあるが、地形図上での「劔沢」という固有な地名が表記された初出である。

１９５９（昭和34）年に「雪渓」が「剣沢雪渓」となり、地名としての劔沢の初出で、真砂沢出合より下流は「南股」が新しく表記されると同時に、二股の下流に「剣沢」が表記された。また、「眞砂谷」は「真砂沢」に変わっている。

地形図・地勢図上の地名表記の変遷を見ると次のとおり。【　】は劔沢筋の地名。Ｎｏ／図名／縮尺／図歴／発行日の順で示す。

（　）は地形図に（　）で記されている記述、課題地名である【　】と［　］の記述は筆者が記した。

①立山　５万　大正元年測図　大正２年７月30日［５万分の１地形図「立山」の最初の発行］

【劔川】［現在の平蔵谷出合と長次郎谷出合までの長さで記されている］、【劔川】［黒部川との出合］

②立山　５万　大正元年測図六年製版　大正６年６月30日

【劔川】［①の「劔川」２ヶ所の表示位置と同じであるが、表記は旁が異なる］

③立山　５万　大正元年測図昭和五年修正測図（地上写真併用）　昭和７年６月30日

劔御前小屋（別山乗越小屋）―【劔小屋】―雪渓［旧・劔川の位置、平蔵谷出合・長次郎谷出合一帯］―眞砂谷［出合］―二股・近藤岩―十字峡

④高山　20万　大正十年製版昭和二十三年修正　昭和23年11月30日
雪渓―眞砂谷［出合］―十字峡
⑤立山　5万　大正元年測図昭和五年修正測図同二十八年応急修正　昭和28年6月30日
劔御前小屋（別山乗越小屋）―【劔澤小屋［旧・劔小屋］】―雪渓［旧・劔川の位置、平蔵谷出合・長次郎谷出合一帯］―眞砂谷［出合］―二股・近藤岩―劔?―十字峡［二股と十字峡の間に「劔」の文字がある。ただし、川、澤、大瀧などの文字は見当たらない］
⑥高山　20万　大正十年製版昭和二十三年修正同二十九年資料修正（行政区画）　昭和29年10月30日
真砂谷［出合］―十字峡［「雪渓」の表記がなくなっている］
⑦立山　5万　大正元年測量昭和32年要部修正測量　昭和34年5月30日
劍御前小屋―【劍沢小屋】―【劍沢雪渓】［旧・雪渓の位置、平蔵谷出合・長次郎谷出合一帯］―真砂沢［出合、旧・眞砂谷］―【南股】―二股・近藤岩―【劍沢】―劍大滝―十字峡
⑧現在の2・5万分の1地形図「劔岳」・「十字峡」の劔沢筋は、
劔御前小舎―野営場管理所―【劔沢】―武蔵谷［出合］―【劔沢雪渓】［平蔵谷出合・長次郎谷出合一帯］―別山沢［出合］―真砂沢［出合］―真砂沢ロッジ―【南股】―北股［出合］―二股・近藤岩―【劔沢】―劔大滝―十字峡

以上、劔沢という地名は、地形図上では昭和30年代（1955年～）ではあるが、実質的には1907（明治40）年の測量登山から使われている。

地形図上の新規の表記や変更は、市町村の申請と陸地測量部の確認などの手続きを経て地形図に表記されたり、変更されるが、その時期は、市町村の申請時期と陸地測量部の確認、地形図の発行時期によってかなり遅れることがある。

この地形図上の「劔川など」の表記と事実上使われている「劔沢」表記の違いは調査を重ねているが、いまだにそれを明らかにする材料を見ない。ただし、「劔沢」は古来「劔沢谷」「劔谷」「劔川」であり、弥生人が名付けた「谷」地名であったことは確かである。

おわりに

本稿では河川支流の語尾表記のうち「沢」と「谷」地名を理解するための概要を述べた、あるいはイメージとして捉えた程度に過ぎない。本来ならば各分野の学説から考察を深め、全国の文化や方言などから縄文文化・弥生文化を探らなければならないであろう。

剱沢の古名は「劔沢谷」「劔谷」、大正期の陸地測量部発行5万分の1地形図が「劔川」であるにもかかわらず、1907（明治40）年の測量登山を報じた『富山日報』は「劍澤」であり、1909（明治42）年の近代登山劔岳初登の登山記は「劔澤」であることや、沢地名山域である前穂高岳の南東面が「谷」、谷川岳越後側も「谷」が多いことなどは継続して究明するが、今回はこれ以上は深入りしない程度のリポートとした。

積雪期鹿島槍ヶ岳南峰の初登頂を巡って1

忘れられた一高旅行部と濱田和雄の記録

中村純二

『日本山岳会百年史』を一部修正

『日本山岳会百年史』（続編・資料編、２００７年刊〈文献①〉）の「日本山岳会百年史年表」Ａ23ページ、「１９３０（昭和５）年12月18日　立大山岳部の堀田弥一ら：鹿島槍ヶ岳（厳冬期初登頂）」は誤りに付き、次項のごとく修正の上、文献①のＡ21ページに挿入する。

「１９２６（大正15）年３月31日　第一高等学校旅行部の濱田和雄ら３名は、爺ヶ岳、冷池経由鹿島槍ヶ岳南峰に積雪期初登頂」

山学同志会「東西の接点　鹿島槍に挑んだ人たち」（太田忠行編、２０１０年刊〈文献②〉）によれば、昭和５年１月２日、立大の堀田彌一、逸見真雄は、鹿島槍東尾根、一ノ沢ノ頭の上部２６００ｍまでワカンで登ったが、ここで敗退した。同年３月22日、逸見真雄と小原勝郎は、冷沢北股をアイゼンで登り、正午、南峰に登頂した。沢の氷は午後も全く融けず、下りの方が苦労だった。その年の４月３日には、神戸商大の田中伸三らが冷沢に入り、鎌尾根経由国境稜線に達し南峰に登った。

カクネ里には、昭和３（１９２８）年ごろから京大の今西錦司、四手井綱彦、西堀榮三郎、大阪医大の水野祥太郎らが入り、今西らは広大な雪渓と天狗尾根側ルンゼの積雪期登山の真価を味わい、今西は日本の代表的万年雪と記した。また、昭和６（１９３１）年の10月15日、京大の伊藤愿や藤田喜衛らはビバークののち、天狗尾根から北峰に達

した。

積雪期の北峰は昭和7（1932）年12月14日、青山学院山岳部の大塚信久、中隈武夫により初登頂された〈文献⑰（後出）〉。

鹿島槍北壁と見られるアラ沢からの登攀は当初から格好の対象であったが、積雪期に初登頂されたのは昭和12（1937）年1月で、東京商大の小谷部と森川が天狗尾根のキャンプ3から成し遂げた。

これらに対し、一高の濱田らは大正15（1926）年に爺ヶ岳経由南峰に積雪期登頂したのだが、冷沢や北壁からの登頂ではないのであまり発表したがらず、その記録は知る人ぞ知るの形となってしまったのである。



田辺和雄氏
昭和36年11月9日ナイロビにて死去
写真は田辺夫人提供

濱田和雄らによる積雪期鹿島槍ヶ岳南峰の初登頂

濱田和雄は明治33（1900）年、東京芝区に生まれ、兄は有名な陶芸家・濱田庄司だった。東京府立四中を経て旧制第一高等学校理科に入学、山や高山植物が好きで、旅行部（現在でいう山岳部）に入部した。

旅行部では、ほぼ10年ごとに部員が年代別会に属することになっていた。濱田は自然に対する態度が敬虔であり、地形判断は適確、常に率先して重い荷物を背負い、小屋の清掃もよく行ない、危険を感じれば潔く撤退するなど、山のベテランだったので、たちまち「アザラシ会」という大正末期から昭和初期までの部会の会長となった。1年後輩だった深田久弥も「今に至るも、先輩の態度を模範とし、田辺流を踏襲している」と述べている（一高旅行部縦の会『仲間と旅の思い出』1990年刊〈文献③〉）。

大正14（1925）年、濱田和雄は積雪期鹿島槍の初登頂の計画を立てた。しかし、大正12（1923）年に松尾峠の遭難事件もあったので、雪崩の危険が多い、鹿島槍に突き上げる冷沢に入ることは止め、爺ヶ岳東尾根を迂回して鹿島槍に達するコースを考え、まず爺ヶ岳を日帰りで往復しようという計画を立てた。

大正14年4月10日、濱田和雄、塩川三千勝、安芸悌一の

3名は、飯田町発大町泊。11日、半晴の日に鹿島集落・狩野久太郎宅入り。12日曇り、西股・北股合流点まで出かけ伐採人夫に会ったが、沢は雪崩の危険が甚だ多かった。翌13日は風強く、雨のため沈殿。14日晴れ、3名で6時30分出発。1767m三角点8時55分。やせ尾根では一時曇ってきたので小休止13時。爺ヶ岳頂上14時43分、霧のため視界ゼロ。往路を下山し、鹿島集落18時50分。この日の行動は、積雪期爺ヶ岳初登頂となっている。

翌大正15（1926）年3月29日、濱田リーダーと石原巌は大町から鹿島集落に向かい、二ツ屋からはスキーを履き狩野宅に泊まった。

3月30日曇り、午後、背後の尾根を1767m三角点まで雪踏みを行ない、雪洞を掘ってきた。夕方、塩川三千勝が合流。

3月31日快晴、鹿島集落発3時、1767m三角点着6時。風が強く、前日の雪洞は大いに助かった。折から鹿島槍のモルゲンロートは荘厳極まりなく、これは早出した賜物だった。

南東に出た尾根に取り付き、強風と飛雪のなか、やせ尾根伝いに爺ヶ岳着11時。ここから先の稜線は風がすこぶる強く、信州側に張り出した雪庇にも注意しながら冷池着12時。布引岳を経て14時15分、鹿島槍ヶ岳の最高点・南峰頂上（2889m）に立つことができた。

帰りは爺ヶ岳に17時30分に着いたが、黒部川から吹き上がる強風で雪が吹雪のように舞い上がるなか、信州側に出た雪庇を避けて少し下った場所でひと休みした、17時40分。やせ尾根ではとっぷり日が暮れ、歩度は遅くなって22時過ぎ、ようやく狩野家にたどり着いた。

以上は『一高旅行部記録1925～1926年』（ガリ版刷り〈文献④〉）による。この文献は手元に見当たらなかったところ、酒井國光会員のご尽力により、上田茂春氏から複写をいただくことができた。

4月1日晴れ、この日はゆっくり静養、狩野氏から温かい接待を受けた。狩野家の帳面〈文献⑤〉に感想を記したが、それは今でも残っているだろうか。

4月2日、大町に出て電車待ち（筆者〈濱田〉の感違い。当時、電化はなされていない）をしていたら、どこから話を聞いたものか、駅の売店の親父が我々の初登頂の行動を嗅ぎ付けて、新聞社の通信員だか記者だかを呼びに行った気配が見える。

その当時、私たちはひどくジャーナリズムを毛嫌いしており、さらに私どもは、本来、鹿島槍は東尾根か天狗尾根

から北峰に登ったのち、最高峰の南峰に達するのが正攻法と考えていた。爺ヶ岳から冷池のコースで南峰に登った点には少々引け目を感じていたため、私はこっそり駅の近くのそば屋に身を潜め、時間ぎりぎりに駅まで駆けつけ、飛び乗らんばかりに電車の中へ逃げ込んだのである。

この一件に関しては、仲間の深田久弥も『山岳遍歴』の中で書いており、私が便所に隠れたとしているが、これは誤報であって、お金を払ってそばを食べていたのである。

その後、濱田和雄は田辺和雄と姓を変えた。右の鹿島槍南峰積雪期初登頂の文章は、田辺和雄『山とお花畑』（全3巻、1961年刊、高陽書院〈文献⑥〉）の第1巻35ページ「北アを想う」の中で、彼自身が記しているものである。

田辺（旧姓濱田）和雄の当時の登山活動

前述のように濱田は人格高潔で山の経験も深く、土地の人が雪崩で危ないと言った巻機山なども安全に登り、スキーで快適な滑降をしている。

『一高旅行部五十年』（1968年刊〈文献⑦〉）には濱田より1年後輩の佐藤捨三による「大正十二年から十五年までの回想」の一文が見られる。

大正13（1924）年5月、濱田和雄、塩川三千勝、私の3名で、伊那側から南アルプスに入り、小渋川を徒渉、広河原からはカンジキとシュタイクアイゼンを併用して赤石岳の積雪期初登頂に成功した。帰途、大河原の小学校では先生に請われて、濱田リーダーが積雪期赤石岳初登頂の講演を行なった。

大正14（1925）年の夏も同じ濱田、塩川、私の3名で甲州側から白根三山に入り、塩見岳経由大河原に下山した。そのとき農鳥小屋では、一高の先輩でもあった梅谷知事一行と一緒になり、ロウソクの明かりの下でウィスキーのご馳走にもなった。我々は野呂川上流に下って一泊、翌日、北岳に登ったのであるが、なんと頂上の岩には白ペンキで「梅谷知事一行通過」と大書されていた。

私ども3名は大河原の宿に一泊し、翌朝、遅立ちのつもりだったところ、宿から「知事一行が間もなくお着きになるので、至急出発して欲しい」と請われた。濱田先輩は「すぐ引き払うが、知事にお会いしてから出発する」と言われ、一同玄関の外で待っていた。やがて一行が到着すると、知事は玄関の式台に腰を降ろし、草鞋の紐を解こうとした。このとき峻厳な濱田演説が始まった。小屋で受けたご厚意を謝したのち、北岳頂上に人を派してペンキ書きを消させよ、との内容であった。双方無言。一高生たちは直立不動

のままであった。やがて知事の「よし分かった。人をやって消させよう」との言葉で一件落着した。

これには次の後日談も加わった。当時、慶應義塾山岳会員だった越智栄一郎氏らは、大正14年7月、常念岳を振り出しに白根三山に登ったところ、北岳頂上の大岩に白ペンキで「山梨県知事梅谷閣下御登山記念」と記されていて、すぐ隣の黄花石楠花とともに、あまりに透徹した自然と人工の汚れとの対照に唖然として下山した由である。今回『一高旅行部五十年』の記事を読んだ越智氏から、実に痛快ですっきりした。今度『関西山草』第6号に「黄花石楠花の思い出」なる一文を記したく思うが、よろしいでしょうか、との問い合わせが来て、編集者の一員として喜んで了承した記憶がある。

早稲田大学・生物同好会編『田辺和雄先生追悼号』（1961年刊〈文献⑧〉）の中で、武田久吉博士は次のような文章を残しておられる。

「田辺君は大変な山好きで、花好きの家庭に育ったため高山植物を研究するのが生涯の願いとなった。一高を卒業する以前に既に大分植物学の素養を身につけていた。ある年の学年試験の際、同級生から植物学についての質問を受けたところ、その説明に時間をとられ、自身のための準備がおろそかになって不合格の憂目をみた。田辺君のお蔭で進級できた友人、大岡工学博士らはすっかり恐縮して、同君に謝罪したが、彼は平然として、一人の落第によって数名が進級できた以上、何等意に介する必要は無いと言って、一向自分の損失は顧みなかった。彼は既に大人の風格を備えていた。

一高を卒業して東大植物学科に入っても、深山幽谷を跋渉し、高山植物の宝庫と言われる八ヶ岳の面白味に心酔、卒論も八ヶ岳の高山植物に定めた。その際植物教室の指導教官は皆山に弱いからと私の出馬を求めて来られた。

八ヶ岳では特に縞枯山に興味を持ち、また白馬岳では積雪期にも一二日間山頂に滞在して研究したので、私も行を共にした思出がある。他にも登山中大雨にあったり、一一月の寒夜を共にフォスト・ビバークしたり、愉快な登山を楽しむことができた。今回のアフリカ遠征では、正に国宝的存在を失ったような気がしている。」

田辺先輩の初登頂ルートを追体験

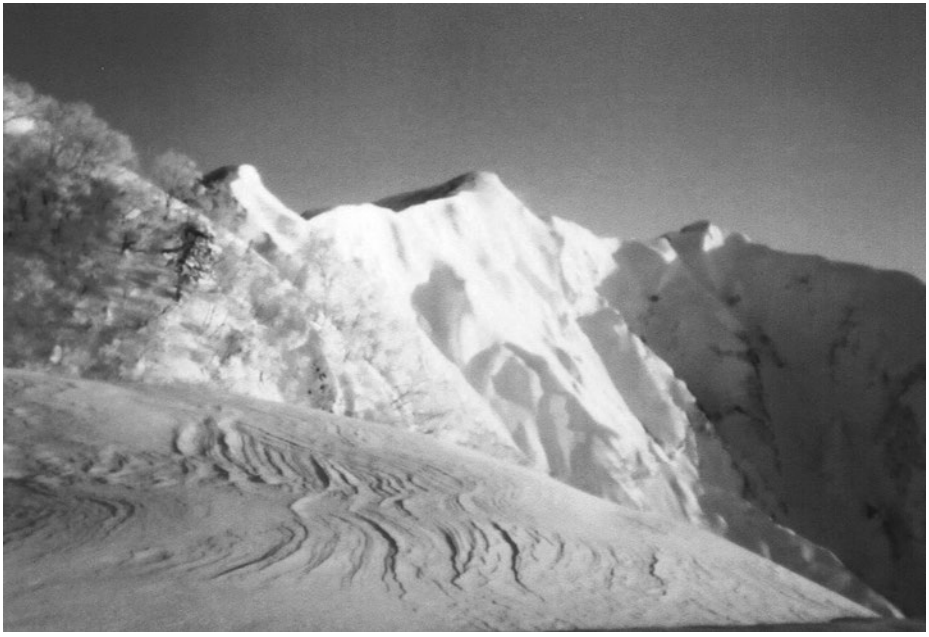
最後に私事になるが、田辺先輩が鹿島槍南峰に初登頂された春の積雪期に、ルートはどんな状態だったか写真でも撮れればと思って、4月上旬、私は妻と2人で赤岩尾根か



高千穂平への登り



冷池、強風下のテント（左、立山、右、剱岳）



冷池より、左、鹿島槍南峰、右、北峰を望む



鹿島槍南峰より南側を望む（近景：爺ヶ岳、中景：蓮華岳、遠景：穂高連峰・槍ヶ岳）

ら冷池に登り、鹿島槍南峰を往復した。

昭和50（１９７５）年４月４日、私どもは鹿島スキー場から黒沢峠を越えて大谷原に下り、赤岩尾根を目指して高千穂平でテント泊。ここまでワカン。

４月５日晴れ、アイゼンを履き、まず南方にトラバースして赤岩尾根に取り付く。先行パーティの踏み跡が少々残ってはいたが、ときどきカッティングも行なった。このころから冷沢で雪崩の音が２回ほど聞こえた。稜線に近づくとともに風はますます強く、冷池に着いたときは、身体を20度ほど黒部側に傾けないと立っていられなかった。数十分かけて小屋の屋根に積もった積雪上にテントを張ったが、この夜、テントはバタバタと大きな音を立て続け、ほとんど一睡もできなかった。張り綱も夜中に２度張り直した。

４月６日快晴、風はやや治まったが、ダイヤモンド・ダストが飛び交い、樹々の霧氷が美しいのに、先行の福岡大・上野パーティ３名は雪洞でいまだ眠っているらしく、一向に登ってこない。新雪の中、ひと足先に鹿島槍に達すべく先を急いだ。テント発６時、布引岳８時。ここから先は雪庇に注意しつつ身体を黒部側に10度以上傾けて登った。南峰頂上着９時20分。南は槍・穂高、西は薬師、立山、剱、東から北にかけて鹿島槍北峰、五竜、白岳、唐松、鑓、杓子、白馬。まさに３６０度の大展望がすばらしかった。いまだ福岡大は見えないので、妻はスケッチ、私は慎重に北峰に向かった。しかし、北峰との鞍部に達したころ福岡大の３名がやって来たので、南峰に引き返した、10時。聞けば雪洞の中は音がなく、寝過ごした由。彼らは今日中に高千穂平まで下るので、今夜は自分たちの雪洞を使ってくださいとのこと。喜んでお受けした。夜は雪洞に入り、物音一つしないなかぐっすり寝ることができた。上野氏らとはすっかり親しくなり、その後、大峰山・山上ヶ岳の山開き前の季節に、女人禁制の山上ヶ岳から前鬼行者巡りまでの縦走をともに行なったりした。

４月７日晴れのち曇り、日の出までゆっくり寝て８時出発。慎重に、足跡のない所は必ずカッティングをしながらゆっくり下る。トラバース地点（10時）では、リュックのために大きく雪の斜面をカットし、30分近く休んだ。トラバースはさらに慎重に２時間をかけた。高千穂平が近づくと今度はラッセルが大変で、16時ようやくテント場着。

４月８日、鹿島集落も訪れたが、あいにく「おばば」こと「きく能」さんはお留守で、山荘の屋根には１ｍ近くの積雪があった。



鹿島槍南峰より北峰を望む



隣の赤岩尾根より見た爺ヶ岳東面

精確無比な田辺和雄の山行手帳〈文献⑨〉

田辺和雄は大正8（1919）年から昭和36（1961）年までの間に、50冊近くの自筆の山行手帳を記している。その内容は山行に関するあらゆるデータであって、行程日時、天候、同行者名、写真の撮影データ、山座のスケッチや同定、数々の植物の名前や調査項目、10m四角形内の植生を調べた結果など、当人にしか分からないメモまで精確至極のものである。

一高旅行部樅の会『失いし山仲間』（1972年刊〈文献⑩〉）において深田久弥は、田辺和雄が彼にくれた色紙「古い山友達、そして新しい話友達」をそのまま題名にした、以下の追悼文を記している。

「田辺先輩は常に私共の規範であり続けた。しかし二〇年早く一人で逝ってしまった。いま私の手元には田辺君が持ち歩いた山行手帳が五〇冊近くある。これ程山を愛し続け、高山植物を深く研究した人物は誠に貴重である。」

と記し、生涯記を記したいと話しておられたが、成立を見ないまま、彼も茅ヶ岳で急逝されてしまった。

私は早川滉氏と二人で、なんとか積雪期鹿島槍南峰の初登頂の行なわれた大正15年度の手帳を探し出して、初登の真実の姿を明らかにしてみたいと考えた。

私どもが和雄氏ご長男の許可を得て世田谷文学館に出かけたところ、37冊が所蔵されていたが、あいにく大正15年のものはなかった。谷川岳資料館に何冊かあるとのことで足を運んだが、ここにはなかった。その後、桧枝岐村の「武田久吉メモリアルホール」で早川氏が2冊見付けたが、やはり大正15年のものはなかった。石川県加賀市の「深田久弥山の文学館」へは、深田久弥氏ご長男の深田森太郎氏を通じて問い合わせたが、いまだ見つかっていない。貴重な資料なので、大正15年度の浜田和雄氏の山行手帳をどなたかお持ちならば、山岳界のためにもぜひこの際、関係者なり私どもなり宛にご連絡いただきたく、お願い申し上げたい。

なお、積雪期鹿島槍南峰初登頂の記録が、山崎安治氏や安川茂雄氏、大町山岳博物館ほか各所でどのように扱われてきたかは誠に興味深く、研究に値する。この件については、ぜひ以下の早川滉会員の一文を読んでいただきたい。

また、田辺和雄氏の高山植物研究面については、植物学者の大場秀章氏に詳しい文章をお寄せいただいた。これもぜひ併せて読んでいただきたい。

（旧制第一高等学校旅行部OB）

積雪期鹿島槍ヶ岳南峰の初登頂を巡って2

その初登頂者が知られていない理由

早川 滉

私の鹿島槍を巡る体験

私の所属したクラブ、早稲田大学岳友会は1956（昭和31）年にワンダーフォーゲル部を飛び出した5人の学生によって、同好会としてスタートした。組織的な制約、束縛を嫌って、自由な発想の山を求めていたとはいえ、先輩もいない、受けるべき伝承もない、ヨチヨチ歩きの若者たちの集団だった。メンバーの真摯な取り組みが実を結ぶころの5年目には、春山合宿に利尻岳での分散パーティによる集中登山をプランしていた。

その前の冬山合宿ではその方式をマスターすべく、鹿島槍ヶ岳で東尾根、天狗尾根に分散しての集中登山となった。4年生の私は天狗尾根に入山した。そして、豪雪による天狗ノ鼻での1週間もの停滞後の下山中に、パーティ5人中の2名が崩壊した雪庇とともに墜落した。幸い他パーティにザイルを借用しての自力救出ではあったが、クラブ初の遭難事件だった。

その2名を稜線まで引き揚げた夜に、私は無事救出を伝えるために鹿島集落の狩野さん宅へ走った。〃鹿島のおばば〃こと狩野きく能さんは、我がことのように喜んでくれた。それから37年たって、私は鹿島槍の歴史が詰まった当時の「登高記念」帳を見せていただくために、狩野さん宅を訪ねた。〃おばば〃は代替わりして律子さんになっていた。それには「早稲田大学岳友会　冬山合宿　天狗尾根東尾根」とあり、参加者8名と、東京から事後処理に駆け



1961 年元旦　雪庇崩壊墜落地点スケッチ図

つけた3名の署名があり、落ちた2名にはそれぞれ「マカリ沢に落ちた男」「マカリ沢で満月を見る」と添え書きがあった。この遭難事件は、鹿島槍南峰・積雪期初登頂者の田辺和雄がアフリカで急逝したもう56年も前の、１９６１（昭和36）年の元旦に起こった出来事であった。

私は卒業して3年目に、リベンジとばかり独りで赤岩尾根に行ったが、風雪で敗退。再び25年ほど後の3月にクラブの仲間と東尾根に行ったが、先行するパーティの渋滞で、第1岩峰までで終わった。

その後、岳友会はちょうど30年目の、１９８６（昭和61）年に学生による継続が途絶えた。そこで、岳友会では学生時代からの夢であった山小屋建設が活動の核となり、仁科三湖の一つ、中綱湖の上方、北アルプス対面の森の中に、山小屋が完成した。そして、完成した翌１９８９（平成元）年5月に、初めて鹿島槍のピークを踏んだ。車中より日の出を見て、雪の北俣本谷をたどって南峰、北峰に立ち、暮れなずむ鹿島槍、爺を山小屋の風呂から眺めた。日帰りができるのだった。初見参より28年も要していた。

私は学生時代に事故を起こした鹿島槍以外には、後立山に入ったことがなく、ほろ苦い、なじみの薄い山であったが、山小屋のおかげで身近な山となり、その歴史の根源にも触れるチャンスともなった。

山小屋をベースに、雪の落ち着いたゴールデンウィークごろには、北アの稜線から単独でスキー滑降を楽しんだ。針ノ木大雪渓、爺の頂上より、そして、赤岩尾根の南に広がる西俣の大斜面を降りた。この西俣の古い記録がないかと登山史本や『鹿島槍研究』（吉田二郎著）、立教大山岳部報などを調べたが、スキーの記述はなかった。先の「登高記念」帳の最初のページを飾った堀田彌一氏に上高地山研でお会いしたので、西俣のことを伺った。すればなんと、当時立教大はほかの山の初登頂を目指していたが、ほかのパーティに先を越されたので、たまたま鹿島槍へ登っただけとのこと。ホームゲレンデでもなく、西俣をスキーで下ったこともなかった。

一方、山小屋からも近いし、近所付き合いとして大町山



「濱田和雄らのたどりし稜線を描く」
（初登頂よりちょうど 70 年後の 1996 年 5 月 4 日、黒沢尾根小熊林道にて　早川画）

1926 年 3 月 31 日、浜田らは鹿島部落、狩野久太郎宅の裏山を登り、絵の〔左端〕の東尾根に出て、丸山からの尾根が合流するポイント（1767 m）に前日準備した雪洞が快適に使えた。爺ヶ岳を経て長躯 19 時間をかけ、鹿島槍ヶ岳南峰（最高点）往復した。

そして、このスケッチで早川の鹿島槍を巡る体験をたどると、次のごとくになる。

左端のピーク：爺ヶ岳南峰に扇沢より南尾根に取り付き、南峰頂上でスキーを着け主稜線をたどり、種池小屋より扇沢へ滑降（単独、97 年 5 月）。

次のピーク：爺ヶ岳主峰へは同じく南峰経由でたどり、頂上よりスキーで東尾根上部の陰になる白沢上部を滑り、白沢天狗尾根のコルより正面の急斜面、矢沢を降りた（単独、このスケッチを描いた前日の 96 年 5 月 3 日に）。

その次のピーク：爺ヶ岳北峰より右へ派生する冷尾根の陰に赤岩尾根があり、高千穂平までで風雪敗退（単独、64 年 3 月）。

その赤岩尾根の西に西俣のスロープが広がっており、主稜線下より滑降（単独、94 年 5 月）。鹿嶋槍双耳峰のコルへ北俣本谷をたどり、南峰、北峰を往復（クラブの仲間と 3 名で、初見参だった。89 年 5 月）。同年 8 月には爺～鹿島槍の縦走もし、初の夏山も楽しんだ。次の東尾根は、北峰直下の第 1 岩峰までで敗退（2 名で、86 年 3 月）。

北峰から北へ派生する天狗尾根では、冬山合宿で天狗ノ鼻での豪雪停滞後の下山中に、5 人中 2 名の墜落者を出す遭難事故があり、これが鹿島槍のお付き合いの始まりとなった（61 年 1 月）。

岳博物館友の会にも入会した。企画展など展示を自由に楽しめるのはありがたい。クラブでの催しの相談にも載っていただいた。

２００９（平成21）年、同博物館の企画展「アルピニズム誕生　昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」の展示年表の中に「昭和１（大正15年が正しい。１９２６）年3月　鹿島槍ヶ岳北峰登頂　濱田和雄（一高旅行部）」の1行だけの表記があった（後出）。「濱田和雄（一高旅行部）」は私の知らない人物だった。私はこのときまで、鹿島槍ヶ岳初登頂は堀田彌一氏率いる立教大隊（１９３０年12月）だと思い込んでいた。

初めて知った田辺和雄の存在

私がこの情報によりＪＡＣ図書室で調べて、初めて初登頂の内容を文献⑦で知るのは、もっと後のことだった。当初、西俣初滑降の記録が研究テーマとなっていたが、調べが進まないままにテーマがいつの間にか隣の鹿島槍初登頂に移ってしまったのだ。一方、「濱田和雄」が「田辺和雄」と分かれば、資料集めや調べは順調に進んだ。田辺氏は私の学生時代、北アルプスのガイドブックの著者としてなじみが深かった。

それは朋文堂のマウンテンガイドブックシリーズ『白馬・後立山連峰』、『上高地・槍・穂高』、『尾瀬』、『立山・剱・黒部』で、マナスル初登頂に端を発した登山ブームの折から、多くの人々に親しまれた。これらには写真やスケッチ、図版、データも豊富で、植物名の記載も多く、充実したガイドブックになっていた。スキーと積雪期登山の項もあったが、そのガイドは一般書だけに、山の安全を説き、無謀を戒め、しっかりしたリーダーかガイド同伴を勧め、山は白馬岳本峰、唐松岳、五龍岳に簡単に触れるだけで、自分が初登頂した爺や鹿島槍には全く触れていない。

調べれば、私の出身校の早大高等学院の教諭で、早大の講師であったが、マンモス校ゆえに面識はなく、学院卒業アルバムを広げれば田辺先生の姿があった。捕らえてみれば我が師の図だった。

初登頂記録や情報の行方

その後、私は中村純二先輩に知己を得て、私が外部の資料をそろえ、一高旅行部の内部は中村先輩が担当で、突き合わせることにした。

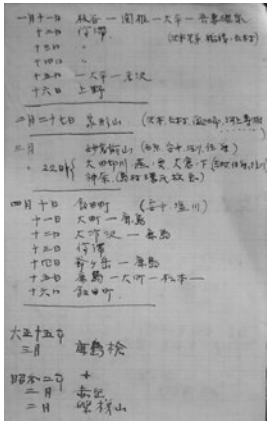
田辺が直接書き記した記録は現在2編、そのほかに、同じく登頂者である石原巌による1編がある。

【文献⑨　自筆の手帳・山日記】

深田久弥が田辺家より託された50冊のうち40冊（うち3冊は白ページ、未記入だった）を、寄贈された世田谷文学館で閲覧したが、大正15年には「3月」、「鹿島槍」の項目が清書されているだけだった。期待した生々しい記録メモはなかった。これでは記録とは言えまい。

檜枝岐村の「武田久吉メモリアルホール」で2冊が見付かったが、年号が大正15年ではなかった。残り8冊については、石川県加賀市の「深田久弥山の文学館」、深田久弥のご長男・森太郎氏にも問い合わせたが、まだ見つかっていない。私どもはこの行方を探している。

この山日記、手帳類にはありとあらゆるデータ等があり、40日以上の山行の細やかな行程、植生調査コドラート法のデータ、写真撮影のデータ、描いたパノラマ・スカイライ



文献⑨山行手帳自筆の手帳
大正 15 年のページ

ンでの山座同定、細かいがすべてではない、当人しか分からない部分もありそうで、実に興味深い。

【文献④　『第一高等学校旅行部記録１９２５～１９２６年』（ガリ版刷り）】

今回見つかったこの91年前の文献は、シンプルな作りの61ページに、2年間48山行の簡単な時間記録を収録、ときにはわずかなコメントが付く。登攀記といえるほどではなく、１９２５年4月爺、１９２６年3月鹿島槍ともに初登頂のコメントもなく、奥付、発行日もない、内部向けの資料だった。このシンプルな速報が1編目の記録である。2年間のまとまった旅行部記録集と言えるが、これがどこまで伝わったのか。

年代順では文献④の次に、【文献⑪　１９３５（昭和10）年発行　日本山岳会『山岳』第30年2号　黒田孝雄編「日本山岳会30年」】が出ている。この47ページの本文に、たったの1行、「一高のパーティによって　爺岳が大正14年4月に、鹿島槍が大正15年3月に初めて登られている」とある。しかし、氏名、内容等は明らかにされていない。初登頂より10年目のことである。

そして、次が【文献⑮　１９５７（昭和32）年発行　『鹿島槍研究』（吉田二郎著、朋文堂刊）】。

鹿島槍を単独で扱った本は、半世紀後の文献②までない。この本は２８９ページもの部厚さで、当時これほど立派な内容の研究がまとめられているとは、と感心もしたが、著者自身の登攀記録に嘘があったり、創作だと指摘され、著者は登山界から消え去った。初登頂については、文献⑪の内容を超えるものはなかった。

１９６０年代になって、やっと鹿島槍初登頂の情報が相次いで公表されるようになった。しかし、遠方アフリカでの田辺和雄の死とともに葬られたかのような感がある。それはなぜか。

自著に初めて記録を発表

田辺和雄の自書（著）に初めて鹿島槍ヶ岳初登頂の様子が描かれた。これが2編目の記録である。初登頂より35年目、36年目に当たる。

【文献⑫　１９６０（昭和35）年2月20日発行　『山と博物館』第5巻第2号　田辺和雄「北アを想う」（大町山岳博物館刊）】

ここに初めてメンバーやルート、その登攀タクティクスなど、すべてが記された。

この「北アを想う」の文章は、翌年発行の文献⑥『山と

お花畑』のために書かれたものであることが分かる。そして、この文章が文献⑥の著者略歴には表せない、彼の登山人生のすべてを余すところなく語っているのだ。記憶にはない人の背におぶさっての幼少期の山から、小学生、中学生のときの登山、そして、同じく案内人を雇っての、中学4年のときの初めての北アルプス登山。「……それからの8年後の大正15年3月、積雪期の鹿島槍の初登頂に成功した。これも私にとってはかなり大きな思い出である。……」と、文中で「初登頂」の文字を初めて使った。その冬山を志してのスキー練習、ピッケル、アイゼンの使用など、慎重に計画を進めての初登頂までを詳しく、約4200字分の原稿の中で回顧している。ここに全文を掲載できないのが残念だ。

文献⑥『山とお花畑』全3巻のうちの第1巻「北アルプス編」にある「北アを想う」の文章中、登頂の翌日、大町駅で新聞記者をまいて便所に隠れるくだりはちょっと複雑だ。「……この一件は深田久弥君が面白がって、最近もある記事の中に書いているが……」とあり、その「ある記事とは」この『山と博物館』の記事のことである。言いたい放題の冗談めいた軽いジャブの応酬は、永い間の親友というだけではなく、2人は親戚同士で、田辺和雄の長男孝氏の媒酌人は深田夫妻だったのである。

【文献⑥　1961（昭和36）年5月31日発行　『山とお花畑―原色写真で見る高山植物―』全3巻（田辺和雄著、高陽書院刊）】第1巻『北アルプス編』の紀行と随想の部（巻末）に、この文章はそのまま掲載されている。

なお、第2巻「尾瀬・上信越・東北・北海道編」は同年7月31日に、第3巻『富士山・八ヶ岳・南アルプス・木曽駒ヶ岳・近畿以西と外国の山編』は同年8月31日に発行されて、豪華な全3巻がいち早くそろった。著者はその喜びを、第3巻の「あとがき」に、「聞くところによると出版社高陽書院はこの本の合本の豪華版を作る計画があるということである。いま私は早稲田大学アフリカ大陸縦断隊の隊長として、本隊の後を追って出発しようとしているところで、その豪華版の誕生の際にはジャングルか砂漠の中に在ることだろうが、いずれにしても楽しみなことである。以上全3巻完結に当たってのことばを申し述べる次第である。」と記している。

しかし、3ヶ月も経たないうちに悲運が田辺を襲う。田辺の出国は8月3日だったので、第2巻は間に合ったのだろうか。第3巻も合本の豪華版も手に取ることはなかった。この本が遺著、まさに辞世の言となってしまった。

【文献⑬　１９６０（昭和35）年４月15日発行　『山岳事典』（小島六郎編、山と溪谷社刊）】の「日本登山年表」に「大正15年３月　一高浜田和雄氏等、爺岳東尾根から鹿島槍ヶ岳に登山」とある。ここで初めて浜田の名前が自書以外で明らかにされた。35年目だった。出典はやはり文献④であろう。

年表関係として【文献⑲　１９６８（昭和43）年発行日本山書の会『日本近代登山史年表』】に触れておきたい。これには「大正15年３月　一高浜田和雄ら鹿島部落より爺ヶ岳を経て鹿島槍登頂」とあるが、文献・資料の欄に「一高記録１９２５～６年（編者未見）と山岳第30年２号（昭10・12）日本山岳会三十年（黒田孝雄）による」とある。しかし、前記したように『山岳』第30年２号には浜田の名はない。出典は前記文献⑬か、やはり文献④なのか。実は、この年表の編者３人のうちの１人、小野敏之氏のコレクションが成田山新勝寺にあり、この収蔵品の中からこの文章を書くきっかけになった文献④が見付かったのだった。

同じく初登頂者によるものではないが、古い情報がある。【文献⑭　『現代登山全集』全10巻（編者＝諏訪多栄蔵、山崎安治、安川茂雄、山口耀久）　第４集『白馬　不帰　鹿島槍』（昭和36〈１９６１〉年６月30日発行）】の紀行・記録編に「積雪期爺岳東面をめぐって」（古原和美）の文章があり、その２３４～５ページに、大正15年の一高旅行部の情報が記載されている。

大町に移り住んだばかりの熊本大ＯＢの古原氏が、熊本大山岳部の合宿のために爺ヶ岳東面を調べたときのこと、「……参考になる文献を捜していると爺岳東面のまとまったものは全くなく、東尾根についても格好なものが見当たらない。それでも地の利を活かして、鹿島部落の狩野治喜衛さんの家に行って、古い『登高記念』帳をひっぱり出していろいろと調べた結果、いくつかの過去の資料を得る事が出来た。爺岳東尾根の初登は大正14年春旧制一高山岳部で、面白いことに翌年爺岳東尾根を経て、鹿島槍まで登った記録が、そのまま積雪期鹿島槍初登攀になっているのである。（大正15年一高山岳部〈旅行部の間違い〉記録）。……」とある。

これは昭和32年の調査のことで、その内容が昭和36年６月には刊行されていた。文中の古い「登高記念」帳とは、昭和５年の鹿島槍厳冬期初登頂の立教大隊・堀田彌一氏の「記録」から始まっており、一高はそれ以前の、まだ「登高記念」帳のない時代だったのだ。過去の資料とは何か。文献④『第一高等学校旅行部記録』が狩野家に残存されてい

れば、もっとはっきり具体的に表記されるはずだ（なお、「登高記念」帳は、昭和30年までのものが大町山岳博物館に寄託されており、以後の分は狩野家に保管されている）。

前記の文中に月日、時間など、文献④からの情報らしいものもない。文献⑦（後出）の本文の終わりのところに「……翌日はゆっくり休養し、狩野氏の暖かい待遇を受ける。差し出された帳面に何やら感想を認めたが、今でもそれは保存されているだろうか。……」とある。過去の資料とは、この帳面（文献⑤）だったのか。

いずれにせよ、これは初登頂者によらない情報で、先の文献⑬『山岳事典』に次ぐ情報だったと言えよう。

登山史研究家・山崎安治が、情報が少なく、知られていない田辺和雄を世に紹介した功績は大きい。

【文献⑦　１９６８（昭和43）年発行　一高旅行部縦の会『一高旅行部五十年』】に石原巌は、「登頂した3名のうち浜田（田辺）、塩川（昭和15年没）が亡くなり、自分だけになってしまい、当時を書き残したものもない」と記憶と記録を頼りに当時の状況と行動を報告した。

石原は昭和9年1月の創刊号から休刊する11年7月号まで、梓書房の雑誌『山』の編集長を務め、登山界の事情に長じていたが、その後満州に渡り、戦後の引き揚げ後も登山界と疎遠で、田辺とも交流がなかったようで、文献⑫や⑥の存在も知らなかったようだ（石原は１９８２〈昭和57〉年に亡くなっている）。

文献⑦の内容を山崎は【文献⑯　１９６９（昭和44）年発行　自著『日本登山史』】において、爺ヶ岳、鹿島槍の初登頂の内容を要領よく説明している（ただし、北峰登頂となっている）。そして、【文献⑰　１９８３（昭和58）年発行　山崎安治編集責任『日本登山記録大成』全20巻のうち第12巻『白馬・後立山Ⅱ』】には、文献⑦と全く同じ文章を全文掲載し、その末尾には、文献④の前記した鹿島槍の部分の記録の文章が初めて紹介された。そして、編者として北峰ではなく南峰登頂と訂正している。

そして、北峰登頂については、昭和7年12月の青山学院隊、翌8年1月の立教大隊の解説がなされている。

その後、山崎は自書に必要があれば、必ず文献④と⑦の内容を取り上げた。その例は枚挙にいとまがない。１９７１（昭和46）年発行『世界山岳百科事典』の「日本登山史年表」（北峰表記のまま）、１９７９（昭和54）年発行『登山史の発掘』（北峰表記のまま）、１９８３（昭和58）年発行『岳人事典』の「日本登山史年表抄」、文献⑯の改訂版、【文献⑱１９８６（昭和61）年発行『新稿　日本登山史』】

等々。

これほどに、山崎によって取り上げられたにもかかわらず、その後、登山史上から忘れられたような扱いになるのだった。

大町山岳博物館における展示・出版

(1) 平成10（1998）年1月24日～3月1日開催　長野オリンピック　文化・芸術祭参加　大町山岳博物館企画展「鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の自然と歴史展」

山岳博物館としては初めての、山別による展示の企画展だった。当時の説明資料によれば、歴史関係として「鹿島槍ヶ岳の雪と岩の開拓史」をテーマに、「ルートの開拓は、大正15年爺ヶ岳東尾根からの積雪期初登頂」の文言が資料に見られるが、これ以上の日時、氏名、人員等は一切ない。展示を見ているはずだが、このとき私は気付いていなかった。

(2) 平成13（2001）年10月25日発行　『新・北アルプス博物誌――山と人と博物館』　編者＝大町山岳博物館　信濃毎日新聞社刊（大町山岳博物館創立50周年記念）

第2章「人――北アルプスの歴史」　Ⅱ．登山史の裏舞台　「〝鹿島のおばば〟を想う――故・狩野きく能さんのこと」（丸山雅弘）に「……大正15年4月（3月の誤り。深田久弥著『日本百名山』の誤りを踏襲しており、ほかの資料にも、この誤りは多く見られる）に一高の田辺和雄、塩川三千勝、石原厳の3氏によって初登頂された」とあるが、この本の巻末の付記「北アルプスの登山史年譜（抄）」の1926（大正15）年の欄には、この大事な記載がない。

(3) 平成21（2009）年7月4日～8月30日開催　大町山岳博物館企画展「アルピニズム誕生　昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」

この展示年表の中に「昭和1（大正15年が正しい。1926）年3月　鹿島槍ヶ岳北峰登頂　浜田和雄（一高旅行部）」の1行だけの表記があった。私はこのときまで、鹿島槍ヶ岳初登頂は堀田彌一氏率いる立教大隊（1930年12月）だと思い込んでいたが、もっと前になされていたのだった。しかし、これに関する資料展示は一切なく、内容は知らされていない。当時、発行された企画展の図録にも、この年表以外は何も載っていない。私はこの情報により、前述のようにJAC図書室で調べて、初めて初登頂の内容を文献⑦で知ったのである。

(4) 平成22（2010）年3月31日発行　『北アルプス登山史資料1　―鹿島槍ヶ岳登山史―』

これは(3)の企画展の際に収集した資料のうちで、とりわけ欠かせない重要な文献をまとめたとあり、文献⑦の全文と、それに「要約」として文献④の行動が、時間表記を省略してコースのみがダイジェストされている。しかし、肝心の田辺和雄の自書（著）、1960年発行の文献⑫大町山岳博物館機関誌『山と博物館』と、文献⑥『山とお花畑』全3巻に触れていないのは決定的なミスと言える。

一高旅行部の初登頂が知られなかった理由

(1) 文献④『一高旅行部記録1925～1926年』の速報から、1960年の文献⑫『山と博物館』までの35年間に、わずか1行の文献⑪情報と、これをそっくり引用しただけの文献⑮ではあまりにも少ない。空白ともいえる時間だった。

(2) 文献④の内容がシンプルで、時間記録とわずかなコメント付きで、爺、鹿島槍ともに初登頂の表記もなく、奥付、発行日もない内部向けの資料だった（一高旅行部記録として2年分まとまってはいるが、初登頂記録の発信としては物足りない）。

文献②の説明では「……浜田はこの鹿島の記録は東北稜（東尾根のこと）あたりから直接登攀したものでないから、とあまり発表したがらなかった。……」とあり、これは文献⑦の本文にもあるが、浜田の人柄が大きく影響している。文献⑫も⑥も同文で、ジャーナリズムを毛嫌いしてとあるが、浜田は表立つことを避けていた。

(3) 重要な文献④はガリ版刷りで、四散してしまって、ごく一部の人しか知らない。文献②の説明では「……このため鹿島槍ヶ岳の積雪期初登頂記録は、知る人ぞ知るである。……」となっている。

(4) 文献⑦『一高旅行部五十年』が出て、文献⑯、⑰、⑱の改訂版等など多くの山崎氏の説明があったにもかかわらず、登山史上から一時忘れられたのはなぜなのか。

(5) 初登頂の記録が、初登頂者・田辺和雄によって語られたのは文献⑫、⑥で、石原厳の文献⑦よりも8年早く、実に35、36年目のことだった。そして、その出版物が世に出てすぐに著者が亡くなっていた。それも遠いアフリカで……。そのエッセイ「北アを想う」は、前記の『山とお花畑』第1巻『北アルプス編』の紀行と随想の部にあり、この紀行と随想は深田久弥がすべて担当しているが、最後の1編のみが田辺の文章になっていて、高山植物の花の写真に埋もれた感があり、見落とされたのだろうか。さすがの山崎安治も見落とした。これが、積雪期鹿島槍初登頂が知

られていない最大の要因と言えよう。

(6) 文献①『日本山岳会百年史年表』（続編・資料編、２００７年発行）には、厳冬期初登頂は昭和５年、堀田氏となっていて、狩野家の「登高記念」帳の最初のページをも飾っている。このインパクトが大きいのか、私も勘違いをしていた。一高の記録は、ほかの北アルプスの積雪期初登頂に比して全く遜色のない重要なものであるのだが、これが掲載されていない。２年前の２００５（平成19）年発行『日本登山史年表』（山と溪谷社創立75周年記念出版）には載っているので、文献①は欠落、欠陥と言える。この影響は大きいので、この欠落を修正するべく私どもはこの一文を書き、研究をまとめた。これでカバーできたと言えるだろうか。

(7) 文献⑭『現代登山全集』全10巻　編者＝諏訪多栄蔵、山崎安治、安川茂雄、山口耀久（昭和36〈１９６１〉年６月30日発行、東京創元社刊）。この編者のうち山崎安治は、前記のように自著で相次いでこの記録をフォローしている。

しかし、もう一人の編者の安川茂雄は、奇しくも文献⑯『日本登山史』（山崎安治著）と同年同月に、『近代日本登山史』（四季書館刊）を上梓した。そして、これの増補版として『増補　近代日本登山史』も昭和51（１９７６）年11月10日に発行している。５８２ページの部厚い本で、内容も豊富で、詳細な引用文も多く分かりやすい良い本だと思うが、この本には一高は全く登場せず、よって鹿島槍の初登頂については何ひとつ書かれていない。

この２人の登山史は、これほど大きなスケールでまとめられたのは初めてで、日本の登山史本の双璧と言えるものであるが、安川著に鹿島槍の初登頂がないのは不思議と言うほかない。これも登山史上で忘れられた理由のひとつなのだろうか。

安川氏以外にも、一高旅行部を取り上げなかった筆者は実に多い。紙面の関係上ここでは取り上げない。

(8) 大町山岳博物館は、１９５１（昭和26）年創立の歴史を誇る随一の山岳博物館であり、地元、お膝元ではあるが、後立山連峰の盟主・鹿島槍ヶ岳登山史には力を注いでいなくて残念だ。

北ア３０００m級の山としては、山麓や平野部から直接、山頂だけでなく、山体も眺められる数少ない山で、住民にも愛されている象徴的な山である。だが、住民も初登頂の歴史を知らない。

博物館は開館して今年で66年目になり、鹿島槍ヶ岳を

テーマにした企画展はこれまでに2回あるが、その説明は物足りない。前述のように、せっかくの初登頂者からの初登頂に関する寄稿（文献⑫大町山岳博物館機関誌『山と博物館』）にも、公刊された文献⑥『山とお花畑』にも触れていない。これでは、言葉はきついが山岳博物館としては失格である。

博物館の次の節目は75周年か。この２０２６年は、期せずして積雪期鹿島槍ヶ岳初登頂の１００周年記念の年にも当たる。このチャンスを活かして積雪期初登頂を顕彰し、１００周年を盛大に祝う特別企画展を開催して、失地回復をしていただきたいものだ。

アフリカに逝った田辺和雄

１９６１（昭和36）年8月、田辺隊長の早稲田大学アフリカ大陸縦断学術調査隊（計8名）は、アフリカ南部モザンビークを出発し、南アフリカ、現ジンバヴエ、現タンザニアの旅を3ヶ月続け、10月20日には、アフリカ最高峰キリマンジャロ（５８９５ｍ）の第3ヒュッテ（約５０００ｍ）より4名の隊員が頂上を往復した。高所障害とも思えた体調不良と腹痛を訴えた田辺はヒュッテで待機し、皆と下山したが、異常な疲れと腹痛で、第1ヒュッテからは呼んだ車での下山となった。その後、ケニア・ナイロビでは回復したかに思われたが、街で倒れて、その症状より即手術となる（10月29日）。切除した3分の2の胃には慢性潰瘍が認められ、これさえ除去すれば快方へ向かうと期待されたが、その後、腹膜炎症状と吻合部の縫合不全の合併症で、11月9日に帰らぬ人となった。そして、その遺骨が帰国したのは11月18日であった。これに関して、家族への外務省公電は、ナイロビでの入院、手術。快方に向かっている。そして、突然の訃報の、短い3通だけだった。

早稲田大学生物同好会発行の『早稲田生物』（文献⑧）では、一周忌に追悼文集を発行した。これには早大総長をはじめ、高等学院長、早大教授陣、武田久吉氏、深田久弥氏、東大関係者、田辺が教授を務めた旧制松江高校関係者、穂苅三寿雄氏（槍ヶ岳山荘）、平野長英氏（尾瀬・長蔵小屋）、伊藤正一氏（三俣山荘）、ご長男の田辺孝氏、高等学院関係者、アフリカ縦断隊員、生物同好会メンバー等々の追悼文が37人にも及び、立派な追悼文集になっている。いかに田辺氏が皆に慕われていたか、がよく分かる。

『早稲田生物』の追悼文には、田辺の出発前の顔色や、やつれを懸念する文章が見られる。遠征準備、特に資金面、出発前の過労、精神的な労苦、あるいは出発間際の、豪華

な『山とお花畑』全3巻の矢継ぎ早の出版の苦労等々、様々なことがあったのだ。

さて、『山と溪谷』や『岳人』には、追悼文は見当たらなかった。生前、縁の深かった出版社、高陽書院は当時も火の車だったようで、その後姿を消した。4冊ものガイドブックを出した朋文堂ですらもうない。同社の雑誌『山と高原』にも追悼記事はなかった。遠くアフリカでの死は見過ごされてしまい、表立ったことをきらう、田辺の性格そのままの最後だったと言えようか。登山界にとってはもう関心がなかったのか。あるいは単なる見過ごしだったのか。

ご長男の孝氏によれば、田辺は山を職業の場とする登山家になりたかったが、当時はまだそんな時代ではなかったので、植物学者の道を選んだとか。植物研究で山に溶け込むような生活をし、登山家からステージを替えていた。

登山家としてよりも、突き進む植物学者としての田辺和雄の人生は、途半ばだった。

（早稲田大学岳友会会員）

田辺和雄博士とその高山植物研究

大場秀章

田辺和雄は、日本での植物学あるいは生態学の研究の歴史上においても忘れえぬ存在である。とくに、日本の山岳地域の植物の生態や群落を正確に観察し、その特徴や様相を植物学の用語によって記述し、さらに精巧な写真を用い視覚化し、紹介した功績は大きい。また、それまでは未知の点が多かった日本の山岳地域の地形、景観、植生等をカラー写真によって捉え、植物学や生態学だけでなく、多分野の専門家や山岳愛好家らに提供し、絶賛を浴びてきたことは今でも私の記憶にも残る。

田辺が私淑した武田久吉は、田辺が花好きの家庭に育ち、第一高等学校を卒業する以前に、植物学の素養を相当身に付けていたと記している。また武田は、田辺が同校を卒業し現在の東京大学に進む際、植物学を専攻することを決意し、そのことを彼に報告に来たことをも公言している。その後、田辺は高山植物への関心を深め、わけても八ヶ岳の高山植物に心酔し、同地域の高山植物についての研究を卒業研究のテーマに定め、大学の指導教官ではない武田にその指導を（おそらく個人的に）依頼した、ということだ。なお付記するが、この八ヶ岳での植物研究では、高山植物へのそれに加えて、太平洋戦争後に多くの生態学者が協力して研究した、亜高山帯針葉樹林に現われる縞枯れ現象についても田辺は関心を寄せていた。しかし、このことは残念ながらほとんど知られていない。

その経歴と業績

田辺和雄は、明治33（１９００）年5月8日に東京市芝区に生まれた。兄は陶芸家・濱田庄司である。小倉謙編『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』（昭和15〈１９４０〉年、同教室発行）によると、田辺（旧姓、濱田和雄）は大正13年度（大正13年4月から同14年3月）に東京帝國大學理學部植物學科に入学した。同級生には田辺と山行きをともにしたことがある、竹中要ほか8名の、計10名がいた。田辺は昭和2年3月に卒業し、同年4月に竹中らとともに大學院に進学した。昭和5年度の名簿には田辺の名はないので、昭和4年度（１９３０年3月）が在籍最終年である。

編集に関わった『植物文化人物事典』（大場秀章編、２００７年、日外アソシエーツ）で、私は田辺和雄を採録し、次のような記述をしたので、全文をここに引用させていただく。

「明治33年（１９００年）5月8日～昭和36年（１９６１年）11月9日。登山家　松江高校教授。旧姓名は濱田。東京出生。東京帝国大学［昭和2年］卒。専植物生態学。

大正15年鹿島集落から爺ヶ岳を経て鹿島槍積雪期初登頂を記録。東京帝国大学で武田久吉に卒業論文の指導を受け、白馬岳・八ヶ岳・尾瀬を中心に高山植物の研究を続け、昭和5年古海正福の後任植物学担当教授として松江高校へ赴任後も、大学院学生時代から力を注いだ高山植物の生態研究をライフワークとした。特に日本アルプスをフィールドとして完成させた『高山植物写真図聚』（共著）は名著として名高い。昭和36年11月早稲田大学アフリカ大陸縦断学術調査隊隊長として南アフリカ踏査旅行に赴きキリマンジャロ登山中に発病、ナイロビの病院で客死した。」

前記に続き、以下14篇の著作を掲げる。

＊『高山植物写真図聚』武田久吉、田辺和雄共編、１９３１・１９３２年、梓書房

＊『白馬岳―山とスキーと植物の案内』田辺和雄著、１９３７年、古今書院

＊『日本高山植物図鑑』武田久吉、田辺和雄、竹中要共著、１９５０年、北隆館

＊「植物および動物生態写真撮影法」田辺和雄著、１９５５年、山中書店、岡田弥一郎編『生物学実験法講座』第2巻Cに収載

＊『原色高山植物』田辺和雄著、１９５６年、朋文堂

＊『原色日本植物生態図鑑』第1巻「水平分布・垂直分布編」田辺和雄著、１９６０年、保育社

＊『山とお花畑―原色写真でみる高山植物』第1巻『北ア

ルプス編』田辺和雄編、１９６１年、高陽書院.

＊『山とお花畑―原色写真でみる高山植物』第２巻『尾瀬、上信越、東北、北海道編』田辺和雄編、１９６１年、高陽書院

＊『山とお花畑―原色写真でみる高山植物』第３巻『富士山・八ヶ岳・南アルプス・木曽駒ヶ岳・近畿以西と外国の山編』田辺和雄編、１９６１年、高陽書院

＊『日本高山植物図鑑―学生版』武田久吉、田辺和雄著、１９８３年、北隆館

＊『上高地・槍・穂高』（マウンテンガイドブックシリーズ第１）田辺和雄著、１９５２年、朋文堂

＊『白馬・後立山連峰』（マウンテンガイドブックシリーズ第２）田辺和雄著、１９５２年、朋文堂

＊『尾瀬』（マウンテンガイドブックシリーズ　第３）田辺和雄等著、１９５３年、朋文堂

＊『立山・剱・黒部』（マウンテンガイドブックシリーズ第７）田辺和雄ら共著、１９５４年、朋文堂

田辺和雄博士の足跡に想う

早稲田大学生物同好会が昭和37（１９６２）年に発行した『早稲田生物』第９号は、「田辺和雄先生追悼号」の副題を伴い、多くの同僚、知人、学生、友人が故人を追悼する文章等を寄せており、田辺の人柄や山行その他の活動等がしのばれる。残念ながら私は故人、濱田とは直接の接点は持たないが、自ら行なってきた植物学研究の後年に至り、高山植物に関心も持つようになり、しかもジャイアントセネシオへの興味から、キリマンジャロではないが、近接のケニア山に調査に出かけもした。田辺がなぜにジャイアントセネシオに関心を抱いたのか、私には想像するしかないが、忘れられぬ研究上の先人として、田辺が残した仕事の意義などを考えてみたことがあった。

「田辺和雄先生追悼号」に掲載された追悼文などから、私なりに田辺和雄博士の人となりや足跡などを振り返ってみたい。

竹中要はのちに遺伝学者として活躍するが、東京大学在学中はとくに田辺と親しく接した同級生であり、お互いに影響を与え合った仲でもあった。その竹中が、田辺が学部学生だったころには「まだ写真はやらなかった」と書いているのが興味深い。竹中によれば、「その頃はわたしの方が写真では先輩であった。現東北大学教授木村有香君（２年先輩）にわたくしが教えて、浜田は木村君から習ったように記憶する。しかし大学院の頃にはわたくしより上手に

なっていたし、その後はめきめき腕をみがいて……。彼は江戸っ子で非常にこり性であり、この生来の素質をしばしば発揮していた。」と書いている。蛇足だが、私は東北大学在職中に、当時七十数歳であったが、生涯現役の研究者であった木村有香先生から写真撮影についてご指導を賜ることができた。

中野治房教授は、明治16（１８８３）年に千葉県で生まれ、明治42年、東京帝国大学理科大学植物学科を卒業された。田辺が入学した大正13年８月31日に、助教授として植物学科に着任した。中野先生は卒業後、しばらくして第七高等学校造士館教授兼鹿児島高等農林学校教授の職に就かれていた。東大では、田辺の師である中野先生は、一方で田辺とは三十数年にわたる交友関係を保ち、田辺としばしば山行をともにした。

中野先生は、大正15（１９２６）年から柴田桂太教授の指導で卒論に着手した田辺と、何かにつけて話し合うようになったという。八ヶ岳というフィールドでの野外調査が研究上も最重要な田辺には、実験室での分析を中心とされる柴田教授よりは、同様に野外での研究に中心を置かれている中野先生からの助言は間違いなく大きなものがあったはずだ。田辺は中野先生の研究調査に同行しただけでなく、御嶽山、槍ヶ岳、白馬岳、霧ヶ峰などの山行をともにしている。年齢の差が20年もある師弟の山行は、当時にあっても普通とは言えないものだろう。単に楽しみのためだけのものではなかったであろう。ともに生態学者として同一現象を眺め、意見を交換したこともしばしばあったに違いない。

中野先生は、田辺から写真技術、山の地理、植物分布については指導されることが多かった、と書いているが、そうした部分も実際あったのであろう。植物写真撮影では大型の三脚付き写真機を携帯し、長いタイムをかけ悠々と撮影した、と記している。中野先生によれば、田辺の植物撮影はほとんどが現状下の植物を対象にしたもので、換言すると生育地または環境付きの写真であることであった、この点が田辺の写真を評価する上で最も注意すべきことだと言っている。花を宿に持ち帰り、これを撮影することは特別の限られた場合だけであった、と言う。すなわち、田辺は高山から離れた高山植物の撮影はしなかったし、また、そこからは高山という生育地から切り離された高山植物には関心を示さなかったという姿勢が見えてくる。

田辺の研究に挑む姿勢を最もよく観察し、田辺を理解していたのは、中野先生であった、と言ってよい。

なぜキリマンジャロ・ルウェンゾリだったのか

海で誕生した生物は陸上に進出し、そこで乾燥や強い紫外線に適応した陸上植物が誕生した。高山は低圧のために大気は乾燥しやすく、また紫外線量も強く、生物にとってはとくに苛酷な極限環境である。平地では目にしえないような植物が生え、植物の環境ストレスや環境適応、あるいはそうした特殊環境下での進化を研究する上で、高山はほかでは得がたいフィールドであり、一部の専門家の注目を集め続けてきた。

日本は、一年中氷雪に閉ざされる氷雪帯が存在しないため、その下限の高度を結んだ雪線に達する山岳が存在しない。そのため、森林限界から雪線の間の植生帯をいう高山帯が、完全な形では存在しない。

生態学や進化学などの立場から高山植物の研究を目指す学徒にとって、全帯域をカバーするヒマラヤやアルプス、アンデス、中央アフリカの高山などは、研究のためのフィールドとして羨望の的であり、誰しもが機会こそあればそうした山岳での研究を一度は憧れる。なかでもキリマンジャロやルウェンゾリ、ケニアなど赤道直下の中央アフリカの高山には、ジャイアントセネシオと呼ぶ、茎が高さ10m近くにもなり、木化する高山植物が氷河の末端、氷舌付近にまで生えている。植物界の常識では説明が難しく、田辺が足跡を残したころからスウェーデンやドイツなどの研究者による、その謎に迫る生態学や生理学などの諸研究が始められていたのだった。田辺はこうした研究の動向の一部を察知し、彼の日本での体験を活かした新たなアプローチを、彼地で展開してみたいと考えていたのではないだろうか。

そのころ一方で田辺は、自らの体にそれまでには感じたことがなかった変調をも意識し始めていたのではないだろうか。それが彼をして最後のチャンスとして、未だ見果てぬ夢であった本物の高山での調査研究に彼自らを挑ませたのではないだろうか。これは私の想像である。

山を愛し、山を研究のフィールドとしたとはいえ、日本で田辺が研究できたのは高山帯下部という、かろうじて高山帯の一部とみなされる範囲でのものに過ぎなかった。それでも多くの制約の中で、田辺は高山帯と下方の植生帯の連続性など、核心部分では独創性の高い研究成果を発表してきたのだ。

田辺は研究者としては決して恵まれた環境に籍を置いたとは言えない。しかし、自らの足でフィールドを開拓し、それを自らの研究の場とした。諦めなかった。学生時代、東京帝國大学植物學教室という、当時、世界でも最高級の

植物学者を擁した研究環境で研鑽を積んだ人間としての矜持を、田辺和雄は片時も失うことはなかったのだと、私には想われてならない。

（植物学者、東京大学名誉教授）

吉田 博、一匹狼の山岳画家

――44歳で木版画に新境地を開く

関塚貞亨

米国で高評価を得て、太平洋画会を結成

吉田博は１８７６（明治９）年、旧久留米藩士・上田秀之の次男として生まれる。１８８８年に福岡県立修猷館に入学し、同校の図画教師であった吉田嘉三郎に画才を見込まれ、養子となる。吉田家には４人の女子がおり、特に三女の「ふじを」（藤遠）が画才に優れていたので時にスケッチ旅行に帯同し、のちに結婚する。

１８９３年に修猷館を卒業し、京都で洋画家・田村宗立に師事するが、１年後に三宅克己と知り合って水彩画を描き始め、三宅の勧めで上京して、小山正太郎が主宰する不同舎に入門、前後して義妹のふじをも不同舎に入門する。そして博は奥多摩、日光、会津に旅行し、この時期に画才に磨きがかかった。不同舎時代の後半、１８９６年に養父の嘉三郎が死去し、養母、義妹４人の生活が19歳の博の肩に懸かる事態となる。その時期に明治美術会の会員となり、プロの画家となって会の10周年記念展に「雲叡深秋」〈注１〉「雲」などを出品し、ようやく名前を知られるようになる。

そのころに横浜関内の店で吉田の水彩画を見た東洋美術収集家のチャールス・フリーアが吉田にアメリカ行きを勧めて、美術館への推薦状を渡した。そして１８９９年に、会友の中川八郎とともに片道切符だけ持って渡米し、デトロイト美術館を訪れた。２人の優れた美しい絵を見た美術館長は「日本画家水彩画展」を開催、地元新聞も「従来の



不同舎時代の吉田博（NHK テレビの画像より）

日本画と違って遠近法を用い、大胆でしかも詩情にあふれ、東アジアの音響が聞こえるようだ」と絶賛し、続いて開かれたボストン美術館でも好評だった。特に吉田の絵は好評で、総額２９１９$と平均収入の10年分を得て渡欧する。イギリス、フランス、ドイツ、イタリアを歴訪、再び米国に戻り、丸山晩霞ら5人による「日本画家水彩画展」をボストン・アート・クラブで開催、１９００年に帰国した。

１９０２年、前年に解散した明治美術会を引き継ぐ形で、吉田の発案で同人による「太平洋画会」を結成、第１回展に「榛名湖」など13点を出品、翌年の第２回展には21点を出品している。明治美術会の解散については、１８８６年にフランスから帰国した黒田正輝、久米桂一郎が会を脱会して白馬会を結成したこと、さらに吉田ら帰朝組が組織の刷新を提案したことが要因となった。

黒田正輝の、印象派につながるような明るく軽快な絵は評判となり、白馬会は美術界の主流となって、次第に太平洋画会は野党的存在となってゆく。太平洋画会の会友の中にも白馬会とつながりを持つ人もあったが、吉田はかたくなに対抗意識を持ち、黒田の芸術性を認めつつも、友好を結ばなかったのは残念なことであった。

太平洋画会が発足した翌１９０３年に義妹ふじをを伴っ

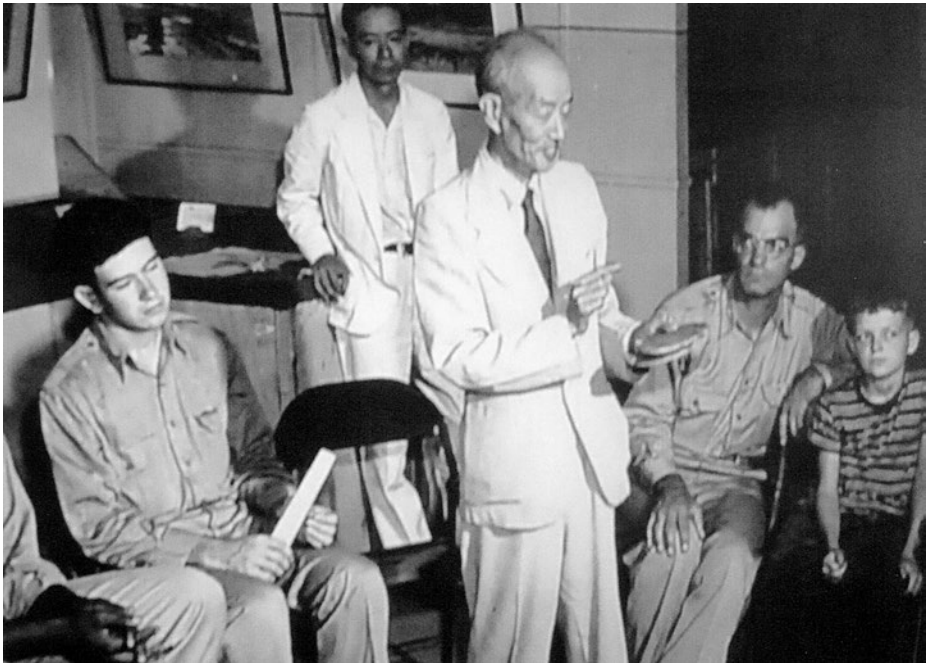
て渡米、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントンDCなどで展覧会を開催した。翌年には欧州諸国およびエジプト、モロッコを巡歴して1907年2月に帰国し、翌年5月、第6回太平洋画会に兄妹で226点もの作品を展示して話題となった〈注2〉。

吉田にとって、帰国した1907年には特記すべき2つの出来事があった。4月に義妹ふじをと結婚したこと。博31歳、ふじを19歳であった。結婚前の3月に開かれた東京勧業博覧会の審査で白馬会の作品が優遇され、太平洋画会の作品が差別されたとして、7月に会友の褒状返還運動が起き、吉田が博覧会審査委員長だった黒田正輝に暴力を振るったという噂も広がった。そして黒田、吉田の反目が美術界にとってマイナスであると憂えた浅井忠〈注3〉が和解に動き、騒動は一応収束した。

結婚前のふじをは、博の絵画への取り組みについて「雨が降ってきて皆さんが宿に引き上げても、兄さんは雨の風景も絵になるとスケッチを続けました」と語っている。1910年に文展無鑑査、審査員となる要因となった1908年第2回文展の最高賞を受けた「雨後の夕」も、日が沈んで月が黄色く輝きだし、遠景には漁村の灯りが見えるという宵の風景を描いたもので、それまでの朝か昼間の風景が一般的であった常識とは、違う自然風景を描く画家であった。

会友には丸山晩霞、大下藤次郎という山岳会会員もおり、吉田博も夏の2ヶ月は、小林喜作を伴って登山をするようになる。喜作も本職が猟師であり、案内人としては一匹狼的存在であったから、吉田とはウマが合ったのであろう。そして、1909年5月16日、一ツ橋帝国教育会館で開かれた日本山岳会〈注4〉第2回大会に、欧州アルプスの風景など18点を出品する。この大会には博も出席しているが、このように山岳会に協力しながら山岳会に入会しなかったのは、晴れがましいことが嫌いだった岡野金次郎に通じるようなところがあったのか、野党精神のなせる業なのか、今となっては永遠の謎である。

吉田が木版画に興味を持ったきっかけは、米国で、幕末や明治初めに作られた粗悪な浮世絵版画が高値で取引されているのを憂え、自ら版画を制作し、良質な木版画を海外に販売しようと考えたこと。そして、遠縁にあたる浮世絵画商・松木喜八郎を通じて版元・渡辺庄三郎を紹介され、木版画制作に乗り出した。1920年、44歳のときであった。渡辺は川瀬巴水、伊東深水の版画を制作しており、彼らの原画は5円で買い取っていたが、吉田の原画は20円と



不落合の吉田邸は米軍将校のサロンのようだった（NHK テレビの画像より）

いう高値を出している。その後、１９２５年には渡辺版画を離れ、自ら主宰して精密な木版画制作に乗り出し、翌年に「日本アルプス十二景」「富士一〇景」などを発表している。

それに先立ち、１９１９年に帝国美術展の発足に伴い、「草吹く風」「雨後」を出展、１９２４年の第５回帝展からは審査員を務めることになる。さらに１９３６年７月に足立源一郎、石井鶴三、石川滋彦らと「日本山岳画協会」を設立し、第１回展に「黒部川廊下」を出品する。戦争中は従軍画家を務めるが、戦時中は次第に目立たない存在となってゆく。

１９４５年８月の敗戦。吉田博はアメリカでは最も有名な日本画家であったから、幸いに焼け残った下落合の吉田邸は米軍将校のサロンのようになり、来日した連合国軍最高司令官マッカーサーの夫人も、来日して最初に吉田邸を訪問している。吉田は米軍人向けの木版画教室を開くなど、晩年を迎えて幸せな日々を送り、１９５０年４月５日に永眠。墓は小石川の龍雲院にある。

〈注１〉吉田博22歳の油彩作品。遠景の滝、木立、中景の岩、近景の渓流、小石１つまで、色違いの細密画の

ような描写で卓抜した技巧を見せた作品。

〈注2〉夏目漱石の『三四郎』の第8章で、三四郎が初めて本郷の里見邸に美禰子を訪ね、2人で丹青会展を見て、兄妹の作品を見る場面で「ヴェニスでしょう」。美禰子が「お兄さんが余程旨い様ですね」と言う。三四郎はここで初めて画が1人でなく兄妹の2人であることに気が付く、という場面がある。漱石は「太平洋画会」の吉田兄妹の作品を見て、この描写を書いた。また、美禰子が画家・原口のモデルとなって、団扇を持ってポーズをとる場面のヒントも、博がふじををモデルとして描いた水彩画が基になっていると考えられる。

〈注3〉2016年12月9日は夏目漱石没後百年で、NHKは年末に連日のように漱石にまつわるドラマやエピソードを放映していて、『三四郎』の中の画家・原口は黒田正輝と放送していたが、漱石は知っている画家の数人をこき混ぜて画家・原口を作ったと思う。漱石が最も親しくしていた画家は、イギリス滞在中に同じ下宿で交流があった浅井忠であった。

〈注4〉『山岳』第4年第2号の225ページに「本会名称の改正」と題し「従来の山岳会を本年（一九〇九年）六月一日より日本山岳会と改称したり、日本の『山岳会』という意味なり、日本の山岳のみを研究する会という意味にはあらず、」（原文のまま）と宣言している。

日本山岳会第2回大会に山岳画18点を出品

1909年5月16日、一ツ橋帝国教育会館で開かれた日本山岳会第2回大会に出席し、太平洋画会同僚の大下藤次郎の勧めもあったのであろう、次のとおり水彩画18点を出品している。

（一）瑞西ロテルブルネン山村の絶壁と霊峰の瀑布
（二）瑞西インターラークンの山市よりユングフラウを望む夏の朝
（三）瑞西ルセルン湖を隔ててリギを望む
（正式にはフィア・ヴァルテ・スタッテー・ゼー。4つの森の国の湖）
（四）グリンデルホルム高原より見たるエテルホルンの夏の朝（ヴェッターホルンであろう）
（五）瑞西グリンデルチールドの山家よりエテルホルンの夏の朝
（六）瑞西ミュレンの大氷河

（七）瑞西スタンダホルムの夏雲
（八）瑞西クラインシャイデグの高原より見たるユングフラウとシルバーホルムの氷河を望む
（九）瑞西ルセルン市街と同湖を隔ててリギを望む
（十）瑞西夏夕のルセルン市街とピラタス
（十一）瑞西ルセルン市端よりルセルン湖を隔ててピラタスを望む夏の月夜
（十二）瑞西グリンデルヲルドよりマンクを望む夏の午後（メンヒか）
（十三）瑞西グリンデルヲールド山村のエテルホルンの夏の月
（十四）伊太利北部ルガノの山岳
（十五）西班牙トレドーの山岳
（十六）阿弗利加大砂漠の巨崖
（十七）阿弗利加テベスの山岳（午後三時の光景）
（十八）北米大陸バイクシイヤーの山岳
（原文のまま）

夏は小林喜作と登山三昧

吉田博は、油彩と木版で喜作の肖像とされる細密な絵とともに、針ノ木雪渓を登る2人の姿を木版画で残している。喜作は猟師が本業で、山案内は賃金が低いとして乗り気ではなかったが、吉田博とはウマが合ったのであろう。喜作については、松方三郎が名著『アルプス記』に「喜作の場合」として語っている。

要約すると「羚羊というのは山に置いてある。だから鉄砲を担いで山に入れば好きなだけ獲れる。裏の畑へ大根を採りに行くのと変わらない。喜作は黒部の品右衛門亡き後、信州から飛騨、越中を股にかけて縦横に駆ける猟師の第一人者であった。本当の猟師は一升飯を食わなきゃ駄目だ。熊の足跡でも見付けたら、2日でも3日でも跡をひたむきに追う。このように、喜作は伝来の典型的な猟師であった。

大天井から槍に抜ける道を喜作新道と呼ぶ。喜作にとっては、晩飯を殺生小屋〈注5〉で済ませ、提灯をぶら下げて中房までその晩のうちに飛ばしてしまうのは簡単なことであった。最期は、後立山の棒小屋で雪崩に打たれて親子ともあえなく亡くなった。いかにも悲惨な最期だが、熊も羚羊も獲るのは御法度の世の中になって、貧乏して死んだとか、遊覧バスに跳ねられて死ぬよりは、はるかに相応しい最後であるような気がする。」

さらにうろ覚えながら、新田次郎の小説『孤高の人』で、

新田が富士山・剣ヶ峰の測候所に勤務しているとき、「チャ、チャ、チャ」と速い速度でアイゼンの音を響かせて登って来た加藤文太郎を見て、喜作の健脚を思い出す描写があった。

吉田の版画「針木雪渓」で喜作と吉田が杖を突き、同じように荷物を担いで登る描写がある。喜作はゆっくりではなく、猟をするときと同じように素早く歩いたのではないかと想像し、吉田博はテント場に着いてやっと周囲の景色を落ち着いて眺めることができたのではないか、と木版画の名作「劔山の朝」を見るたびに考えたことがある。「新越乗越」からの劔岳がないことからの、勝手な想像である。

〈注5〉小林喜作は1875（明治9）年に生まれ、1923年に雪崩に遭い没した。一説には上に人がいて、雪崩を起こしたという。殺生小屋は喜作が坊主の岩小屋跡に建てたが、穂苅三寿雄の肩の小屋ができてから寂れた。

吉田 博の作品解説

最初の「劔山の朝」は、吉田博が数多く発表した山の木版画で代表作とされている。鹿島槍近くの冷池テント場の朝の風景で、朝日に染まった岩肌、雲と対比するように手前の天幕は薄暗いが、朝餉の準備の煙は微妙に表現され、木版画として新境地を開いた。1926（大正15）年に数多く制作された、木版画の白眉の一点である。

②③の水彩画2点は、ともに不同舎時代、18歳から22歳までの作品であろう。②の水彩画「日光中禅寺湖」は、遠景の湖水と山並みは紙を活かしてごく薄く描き、近景の樹の描写に技巧を凝らしている。③は奥多摩の渓谷の風景であろう。中景の橋と木立、近景の渓流と岩の描写はすばらしい。橋の上の牛と農夫の点景は、菱田春草の日本画にも同じような描写があるが、周りの景色はあっさりしていて、菱田の絵に触発されたとしても濃密な描き込みで、すばらしい作品となっている。

④の浅間山の風景は、軽井沢が別荘地として開発される前、馬子の追分でも聞こえてきそうなのどかさで、噴火すれば牙をむく浅間山も穏やか。東北の大震災で生き残った奇跡の松を連想させる松の描写も効果的である。吉田博の山岳画では、最も穏やかな自然を描いた作品である。

⑤は義妹ふじをの1903（明治36）年、16歳、不同舎時代の作品である。漱石の『三四郎』の中で美禰子が、丹青会展で「お兄さんが上手い」と言っているが、文展無鑑

査の兄に劣るとしても、山中湖付近から描いた富士山は、立派にプロとして通用する技量である。１９８７(昭和62)年、95歳まで生きて、女流画家として一家をなしたふじをの、若き日の作品である。

⑥は南アルプス・シリーズの1点で、甲斐駒ヶ岳から富士山を望む、吉田博独特の雄大な自然風景を描いた１９２８年作の木版画である。⑦は三保の松原あたりから望む富士山である。１９２６年に制作された1点で、中景の木立だけで2度刷り、空も3度刷り、全体では20版という手の込んだ、縦53・3㎝、横71・2㎝の大型の作品である。

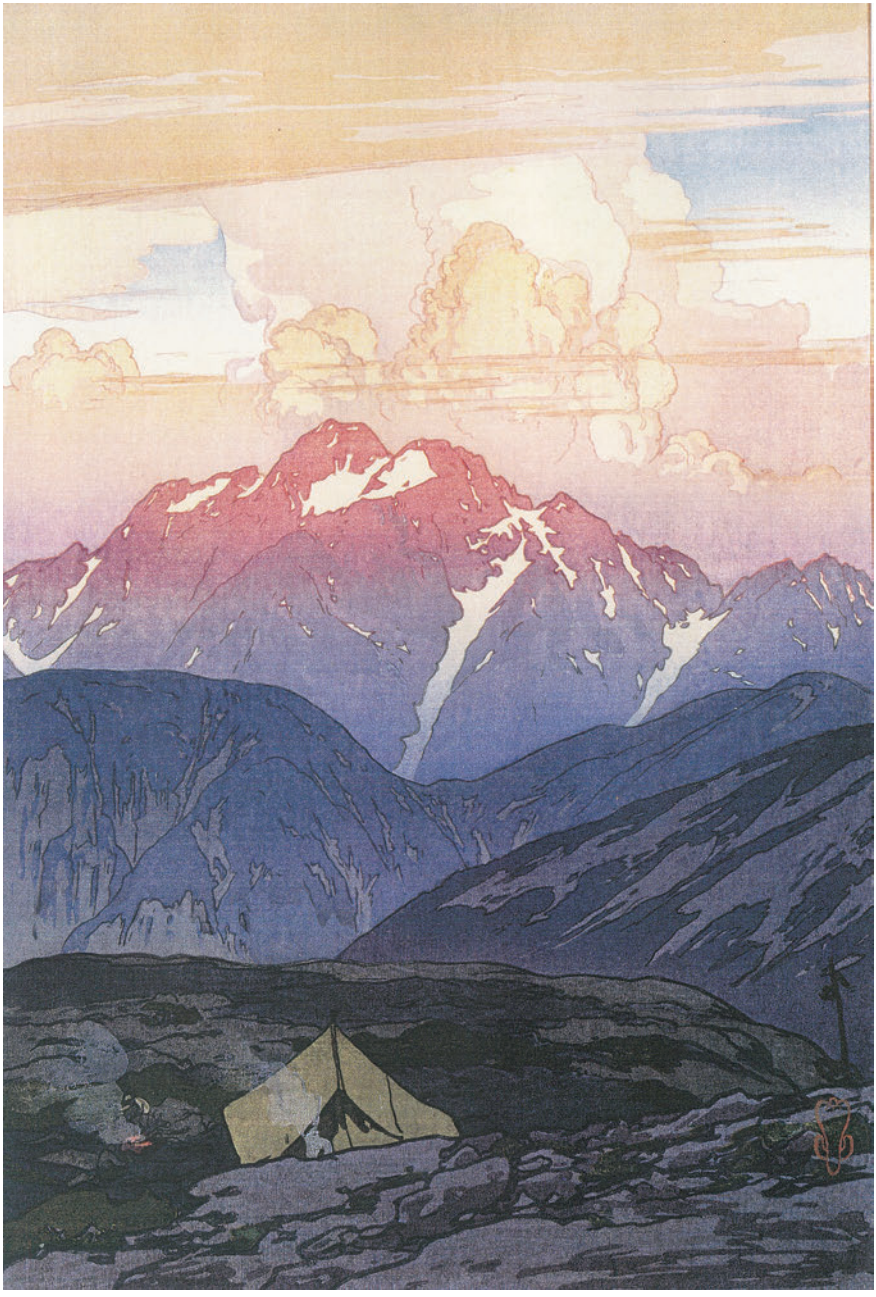
⑧⑨は１９２６年の作品だが、吉田博の小林喜作への「オマージュ」ともいえる木版画となった。⑧の槍ヶ岳は、喜作が坊主の岩小屋の跡に建てた殺生小屋近くの岩から槍の穂を見上げた風景、⑨の針木雪渓の下部に描かれた2人は喜作と吉田博とされ、2人とも荷物を背負っているのが、当時の案内人と客の登山風景と違うところだ。

⑩は義妹ふじをを描いた珍しい肖像画で、たびたび触れている漱石の『三四郎』で、原口画伯が美禰子をモデルに描いた「森の女」のポーズから連想したので紹介した。黒田正輝にも「湖畔」という団扇を持った夫人を描いた傑作があるが、20代後半の婦人像で、若い美禰子とは違う。だ、原口画伯は印象派の女を連想するように明るく、軽快なタッチで描かれた、と漱石が表現しているのが、この画と違うところだ。

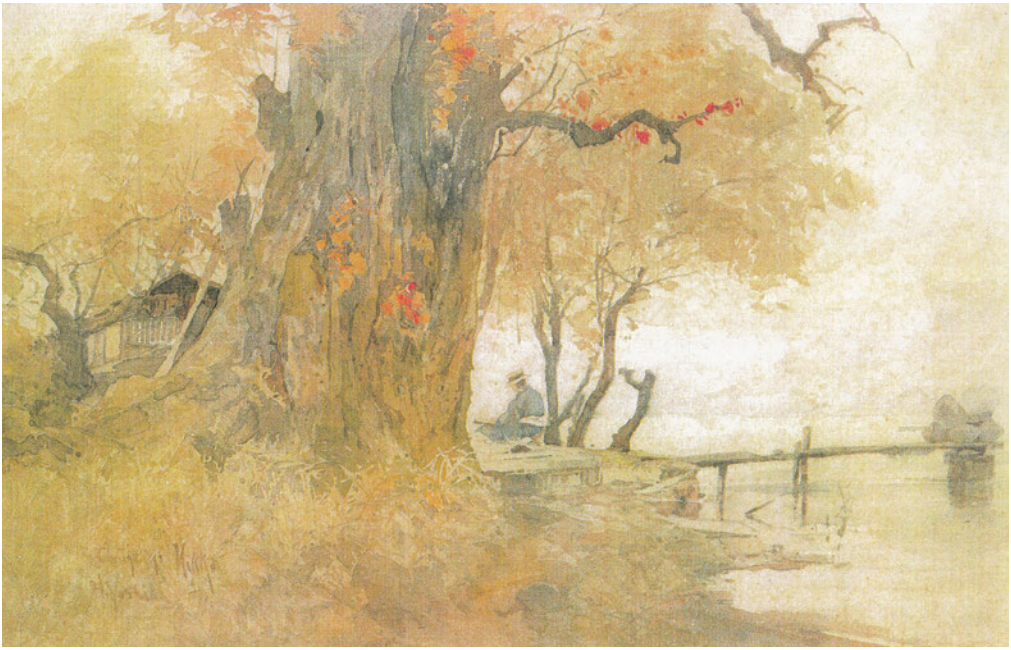
⑪は小林喜作とされる油彩画で、木版画もある。自然描写に優れた吉田は、肖像画の傑作はほとんどない。これは数少ない肖像画の傑作である。

⑫⑬は亡きダイアナ妃がケンジントン宮殿の事務所に飾っていた吉田博の木版画2点である。⑫の「光る海」は、１９０６年の瀬戸内海シリーズの傑作、⑬の「猿澤池」は１９３３（昭和８）年の作品で、博の孫が１９８０年代にダイアナ妃の写真集から、この2点の額を背景とするダイアナ妃の事務所での肖像画を見付けた。

⑭１９３０年に長男・遠志を連れてインド旅行をしたときの作品で、翌年に制作したカンチェンジュンガ・シリーズのうちの夕景である。吉田の外国の山岳風景では、アメリカのヨセミテやロッキー、ヨーロッパ・アルプスの傑作が多い。インドの風景は木版画にも傑作が多いが、唯一のヒマラヤ山岳画なので、吉田の木版画作品としては必ずしも優れていないが紹介した。



① 木版画「劔山の朝」（1926 年作品）



② 水彩画「日光中禅寺湖」（1894～96 年作品）



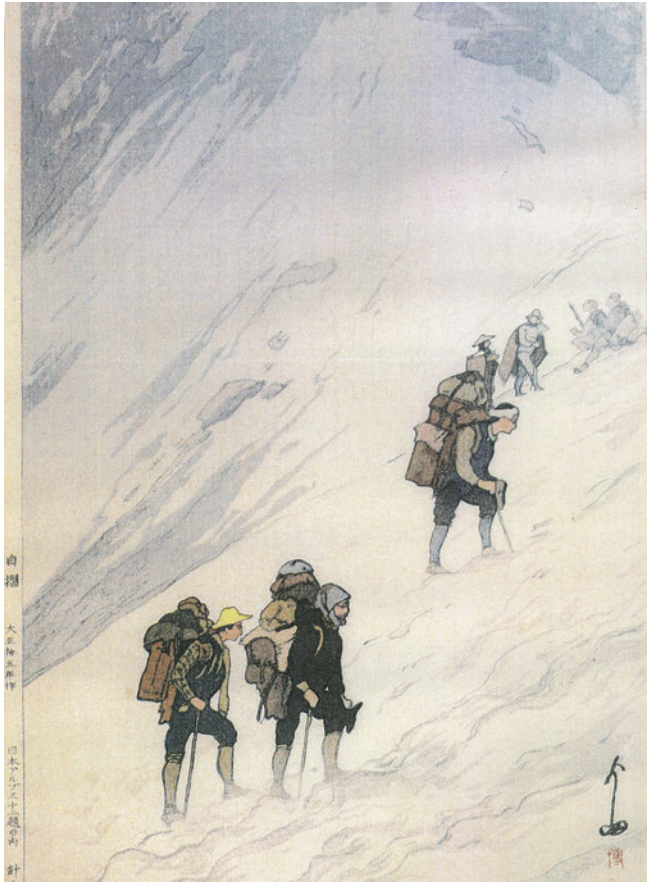
③ 水彩画「渓谷」（1894～96 年作品）



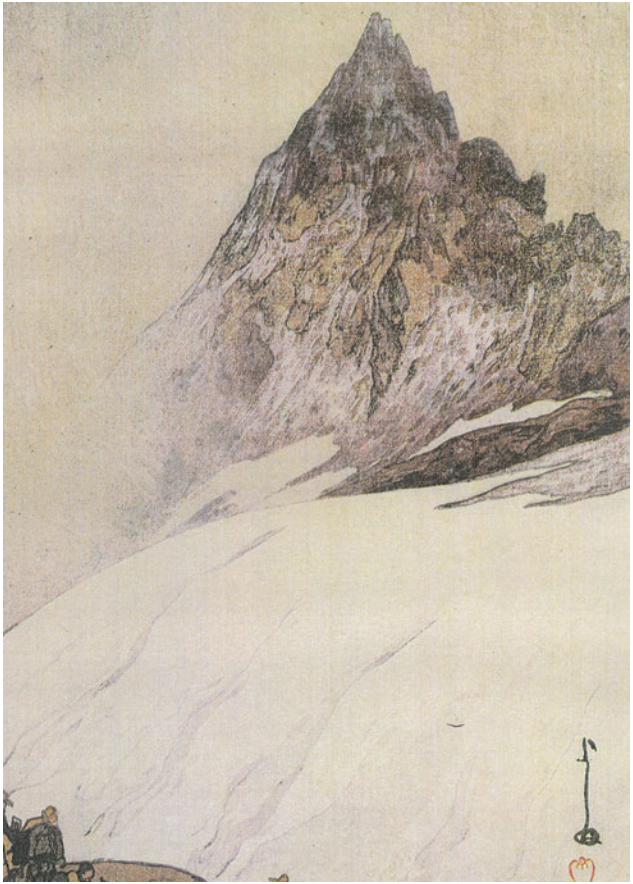
④　水彩画「浅間山」（制作年代不明）



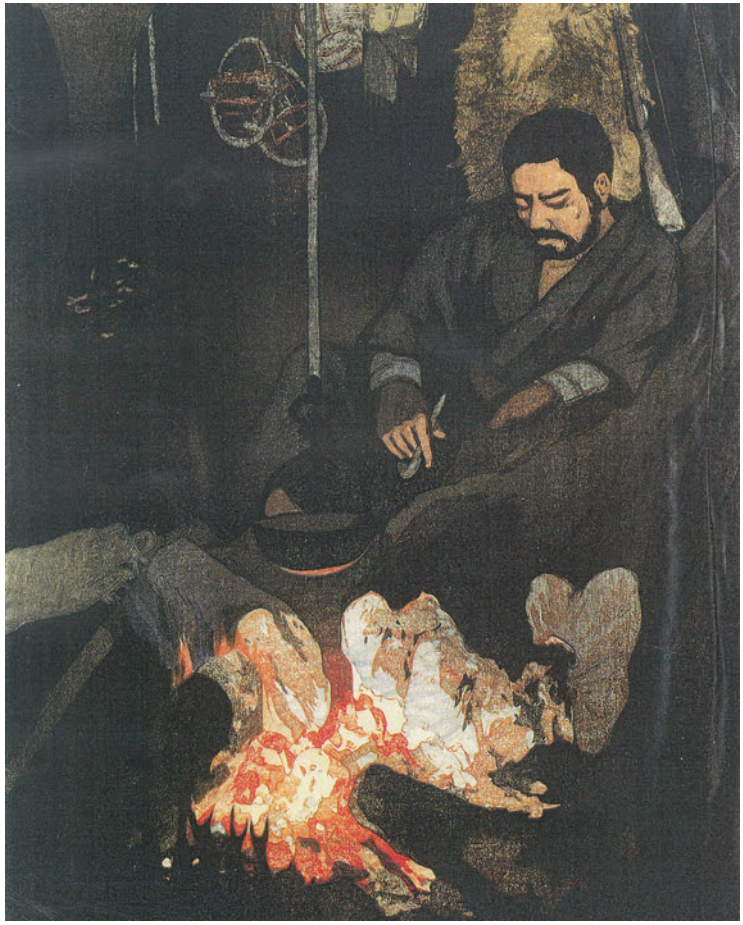
⑤　義妹ふじを水彩画「山中湖付近からの富士山」（1903 年作品）



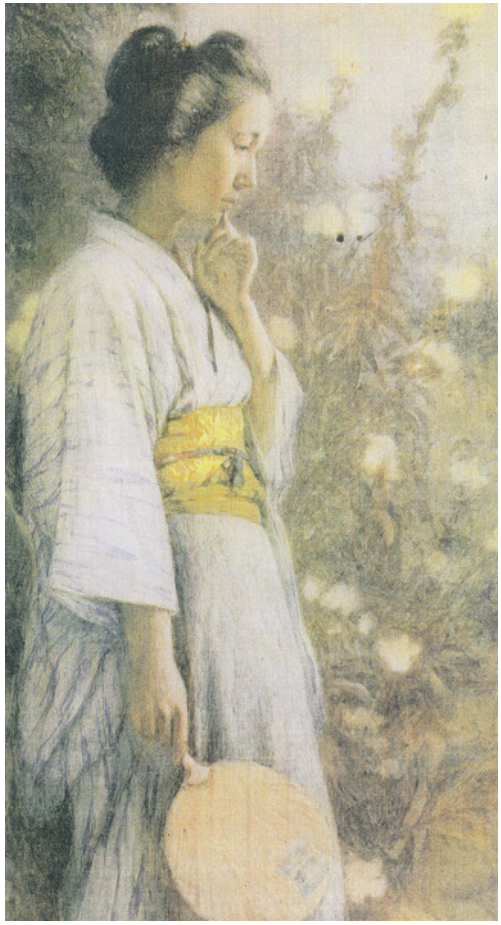
⑨　木版画「針木雪渓」（1926 年作品）



⑧　木版画「槍ヶ岳」（1926 年作品）



⑪　油彩「猟師の話（喜作）」（1922 年作品）



⑩　水彩画「婦人像」（制作年代不明）



⑥　木版画「駒ヶ岳山頂より」（1928 年作品）



⑦　木版画　富士十景「朝日」（1926 年作品）



⑬　木版画「猿澤池」（1933 年作品）



⑫　木版画「光る海」（1926 年作品）



⑭　木版画「カンチェンジャンガ午後」（1931 年作品）

小島烏水と親交があった飛騨の岳人

――住　廣造と中野善太郎のこと

木　下　喜代男

日本山岳会が創立された3年後の明治41（１９０８）年、私が所属する飛騨山岳会が設立された。岐阜県大野郡大名田村（現・高山市）役場助役、飛騨一円の小学校長、銀行家など16名の発起によるものであり、このときの設立趣意書は『山岳』第5年第2号（明治43年7月15日発行）の会報欄に掲載されている。

そして、明治42（１９０９）年から飛騨山岳会員の住廣造、古瀬鶴之助、上木甚四郎など10名近くが次々と日本山岳会に入会し、飛騨山岳会自体も団体入会している。現在残っている資料では、住廣造の会員番号は１９３であった（会員番号制度ができたのは大正9年で、その時点の在籍者に付与されたが、すでに退会していた人が多かった）。

明治42年9月に高山町で全国山林家大会が開催され、岐阜県知事の招待で日本山岳会を代表して高頭仁兵衛が出席している。このとき高山在住の会員・住廣造に篤いもてなしを受けたことが、『山岳』第4年第3号（明治42年11月3日発行）の会報欄に報告されおり、早くも中央と飛騨との交流が始まっている。

この時期、飛騨山岳会員は飛騨山脈などへ精力的に入っているが、明治42年8月10日には、古瀬鶴之助（当時、小坂小学校長）はじめ12名が白山に登っている。古瀬はこのときの様子を「白山登山紀行」として『山岳』第5年第1号（明治43年3月31日発行）へ写真2点とともに寄稿。な



白山頂上の飛騨山岳会会員（明治 42 年 8 月 10 日）

おこの前頁には、鵜殿正雄の登山史に残る画期的な記録「穂高嶽槍ヶ岳縦走記」が載っている。

古瀬はその後、笠ヶ岳と硫黄岳（今の焼岳）に登り、『山岳』第5年第3号（明治43年11月30日発行）に「硫黄岳笠ヶ嶽登山記」を寄稿している。

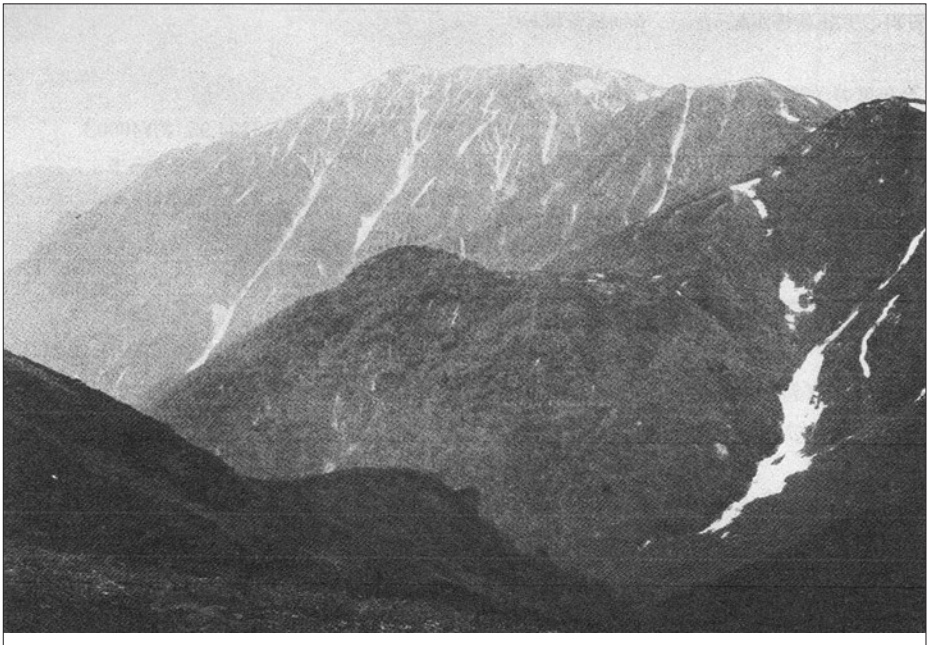
続いて中野善太郎、二木長右衛門（会員番号358）などが入会。のちに飛騨山岳会長になる造り酒屋の二木長右衛門は当時、札幌農学校に学んでいて、そこで覚えたスキー術を大正2（1913）年、道具とともに高山へ持ち帰り、母校の斐太中学へ伝えている。

これら会員のなかで、特に小島烏水と交友があったことが分かっているのは、住廣造と中野善太郎だ。

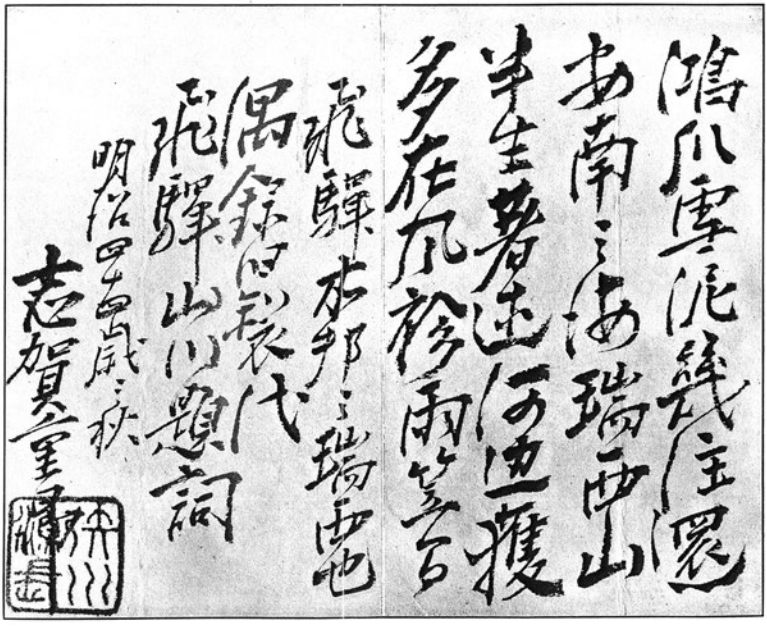


住 廣造（すみ こうぞう、通称ひろぞう。明治13〈1880〉年8月21日～昭和39〈1964〉年12月12日）

住は日本山岳会入会当時、高山の繁華街・下三之町で「住伊書店」を開き、書籍、教科書の販売、楽器の取次などをするかたわ



（影撮藏鷹野高 員會岳山本日）　岳ケ笠るめ望りよ脈山驒飛



『飛騨山川』に掲載された志賀重昂の漢詩

ら、両替店も営んでいた。

カメラを担いで乗鞍岳、槍・穂高岳、白馬岳、立山など飛騨山脈を広く歩き、多くの絵はがきを作成、販売している。

彼の偉業は、採算を度外視して、飛騨に遺る江戸期からの多くの書籍を活版本にしたことである。当時、飛騨には印刷所がなかったためすべて東京まで送り、印刷製本をした。そして、これらの本のほとんどは当時、住と親交があった小島烏水に贈与されたのである。

住が発行した書籍、地図は30点以上にもなるが、主なものは『飛州志』、延享3（1746）年に代官所の地役人・上村木曽右衛門が書いた『飛騨国中案内』、地役人・富田礼彦著の『斐太後風土記』『運材図會』、後述の『飛騨山川』、『飛騨遺乗合府』で、飛騨の歴史を知る上で大変貴重なものばかりだ。

まず飛騨叢書第1編として、明治42（1909）年に『飛州志』を出版した。これは徳川八代将軍・吉宗の命で天領飛騨の代官・長谷川忠宗が、治政の資料として飛騨の諸事、諸物を調べ、まとめたものだ。

この『飛州志』は、『山岳』第3年第3号（明治41年10月25日発行）の「雑録」の項で、小島が「飛騨叢書の出版」として内容を紹介している。このころから小島と住の交友が始まったと思われる。

続いて明治44（1911）年11月には、飛騨の郷土史家・岡村利平編纂の地誌『飛騨山川』を出版した。

『飛騨山川』の巻頭には、日本山岳会創設メンバーの高野鷹蔵が撮影した笠ヶ岳の写真が載せてあり、題辞として志賀重昂が自筆の漢詩を寄せている。それは志賀がスイスで詠んだというもので「鴻爪雪泥幾往還　安南之海瑞西山半生著述何邊獲　多在風袗雨笠間」そして「飛騨本邦之瑞西也　偶録舊製代飛騨山川題詞」としたためてある。

次に小島が以下の序文を載せ、本文「山嶽」の項には、23ページにわたって「飛騨山脈風景論」を書いている。

飛騨の面積は廣いとは言えぬが、飛騨が有している山川は、我が日本では、最も壮大にして、純美なるものであると言って、差支えがない。（中略）殊にこの国の名を不朽にする飛騨山脈は、悉く飛騨の領域に属しているというわけではないが、何事も小規模な日本にしては、少し出来過ぎたほどの大山脈で、造化の傑作を、日本国内に於いて求めようとすれば、ここを於いて他に無いのである。（中略）『飛騨山川』は、この国

に関する地理書の中で、最も新しい、そうして纏まった案内記である。この書が手引草になって、日本のパミール高原、日本アルプス、及び風光上にその影響を受けた美しき国土が、久しい間の閉鎖を解いて、一般に世の中に知られて来ることは、私の深く希ふところである。

明治四十四年十月

この時期、主著『日本風景論』がベストセラーとなって版を重ね、全国的に有名になっていた志賀重昂の題辞があったためか、初版本はたちまち売り切れた。志賀が一地方の出版本に自筆の題辞を寄せた経緯は、住が直接依頼したのか、小島を通じたものなのか、よく分からない。

今この本を見てみると、登山史を知る者にとっては「豪華な顔ぶれ」と言いたくなる、日本山岳会創立当時の高野、小島、高頭も写真や文を寄せていて、住の交友の広さがうかがえる。

余談ながら、志賀の『日本風景論』にある「登山の氣風を興作すべし」がこの時代の青年の登山・旅行熱をあおり、木暮理太郎や小島なども大きい影響を受けたことはよく知られている。志賀の本の感化で登山を始めた人たちが日本山岳会を誕生させた、と言われるくらいだ。

小島は、初版が出たときには書生の身分で手が出ず、第6版になってようやく購入でき、貪るように読んだと書いている。その3年後、志賀に署名を依頼したら、『飛騨山川』にも寄せた七絶中の転結「半生著述何邊獲　多在風袗雨笠間」を墨書してもらったという。なお、大切にしていたこの署名本は、米国からの帰途、盗難でなくなってしまった。したがって、『飛騨山川』にある墨書は貴重なものかもしれない。

その後、大正15（1926）年に『改訂飛騨山川』という小型版が出たときは、志賀の題辞、小島の序文とも削られていて、小島は大変残念がっている。

なお、旧版、改訂版ともに高頭仁兵衛の乗鞍岳登山記（『山岳』第1年1号「飛信界の乗鞍岳」から抜粋）と、小島烏水の「渓谷の四季」「島々谷」が載せてある。高頭はその後も小島とたびたび高山を訪れ、住と交流しているので、この転載は、住の依頼に応じたものであろう。

飛騨叢書の第3編は、大正3（1991）年9月に出版された桐山力所著、岡村利平編の希少本『飛騨遺乗合府』であった。

この本は、日本山岳会員に送料12銭の負担のみで贈与す

る、との広告が『山岳』第10年第2号（大正4年12月27日発行）の会報欄に掲載され、小島ほか多くの会員が恩恵に与った。

住の依頼で、小島はこの『飛騨遺乗合府』の書評を、飛騨の郷土史研究者の紀要『飛騨史壇』に載せている。

『飛騨遺乗合府』といふ本は、撰者が飛騨国に関する野史私乗の、世に遺ったものを、求め得る度ごと毎に、透写合綴したと云う叢書で、原本は岐阜県下を捜索しても、斐太中学に一部あるのみであると云う。

この本の撰者は、この国の小八賀郷、桐山村の名望家桐山勘兵衛といふ人で（実際はその子桐山力所）、農民か商家の出であるが、この人多芸で、詩文を作り、竹蘭を書き、笙笛を善くし、茶湯の法にも通じ、同国の篤学者、岡村利平氏が、嘱を受け、原本の巻冊に秩序がないのを、見よくするために、寺社、地誌（紀行文を含む）、雑抄、史伝、追加の五部門に分ち、部分的に異本類本あるものは、厳密に校合せられ、叢書中に収めてある一々の書目に就いて、解題を加え、一冊に纏めた印行本として、世に出されたのである。飛騨一国の群書類従といった感がある。

そして本書の出版書肆（しょし）は、一意専心、この洵美なる郷土の紹介に全力を注いでいられる、同国高山町の住書店主人住廣造氏である。素より興味を主とした書籍でなく、飾りッ気のない素材のままの、山川の地誌、生国に対する執着の力だけで、書き溜めた郷土の資料であるから、始めから至って少数の読者を有する宿約の下に生まれたものであるかも知れぬ。併しながら、かくのごとき美しい人情の動機に依って生まれた貴重なる本書に対して、私は紹介の義務を負うのを悦ぶのである。（以下、内容の詳細を紹介）

そして、地方にいて浩瀚な大冊を次々と発行する住に対し、都会人でもなかなかできないことだ、と賛辞を送っている。

小島はその後「飛騨笠ケ岳の早期登山者円空・南裔・播隆」「凡兆の句碑」など飛騨のことをいろいろ書いているが、この『飛騨遺乗合府』はじめ、住の発刊した一連の飛騨叢書に依ることが多かった。

住は郷土の文化発展にも尽力し、郷土史研究者の組織「飛騨史談会」の機関紙『飛騨史壇』の編集、印刷も引き受けていた。

前述のように、小島はこの『飛騨史壇』にたびたび寄稿している。なかでも「山の町」では小島が好んだ高山の町の美しさを褒め、「江戸錦絵に描かれたる飛騨の山水」では、研究している浮世絵の知識を披露している。

小島は大正3（1914）年7月29日、のちに日本アルプスにおける探検登山の掉尾を飾ったといわれる、双六谷遡行のため高山入りをする。

住はこの小島の探検成功のためいろいろ骨を折った。小島が高山滞在中、多くの名士、文人墨客などとの交流の御膳立をするとともに、8月1日には、高山町役場にて小島の講演会開催をセットしたのである。

飛騨山岳会主催となった講演会の来場者は300名、演題は「飛騨山脈の自然としての高貴性について」であった。飛騨の人々は、小島の講演で飛騨山脈というものの価値を知り、近代登山というものを知ったといってよい。この晩は住、二木長右衛門、歌人の福田夕咲らと夜半まで飲み歩き、「デカダン生活とはこんなものか」などと書いている。

そして住は、事前に登山口である上宝村の有力者へ、小島の探検行への協力を依頼している（以降の行動は、後述の中野善太郎の項に）。

住はそれまで印刷を東京の会社に依頼していたが、自ら印刷所を持つことにし、大正8（1919）年、「斐太中央印刷所」（のちに斐太中央印刷㈱）を設立した。

住は中央の有名人との交際が多く、彼らが高山へ訪れると町長より先に住を訪ねたというが、登山家にありがちな狷介（けんかい）孤高的な性向からか、地元人との付き合いは希薄だったという。

昭和39（1964）年に住が没したとき、武田久吉が『山岳』第60号に追悼文を寄せている。

それには、飛騨に関する多くの貴重な書籍出版事業のことを紹介し、「飛騨や高山の文化のために尽くされた功績は甚だ大きく、これは東京付近在住の人であったなら、当然近来流行の春期又は秋期の叙勲に該当するに違いない」と功績を称えてある。

遺言で、5200余点の書籍、郷土資料などが高山市に寄贈され、「住香草文庫」になった。なお「香草」とは、名前の廣造をもじった住の雅号「香艸」からきている。

中野善太郎（なかの　ぜんたろう。明治21〈1888〉年11月1日～昭和27〈1952〉年4月25日）

飛騨山岳会員でもあった中野は、大正4（1915）年、日本で初めて奥穂高岳から西穂高岳へ縦走を行なって、日

本登山史に名を留めている人物である。

小島烏水は、大正３（１９１４）年８月２日、高山から上宝村本郷へ入り、見座の水琴亭吉本旅館に投宿。

８月３日、下佐谷の猟師・高田勘太郎はじめ６名のガイドと、当時、双六小学校長だった中野善太郎ら６名が同行して入渓した。この探検は、住や中野の尽力で上宝村挙げての協力態勢が布かれ、まことに大掛かりなものであった。飛騨ではこのとき、小島烏水が持参したピッケルやリュックサックなど近代登山の装備、服装を初めて目にしたのである。

小島一行は、８月６日に双六谷源流の双六池に達し、探検万歳を叫んだ。その足で双六岳に登ったあと笠ヶ岳への稜線で露営。翌日、笠ヶ岳へ登ってから穴毛谷を下山し、蒲田温泉に泊まって祝宴を行なった。

この６日間の山行中、中野は小島からいろいろと登山のことを教わるなど、大変親しくなったという。

この双六谷遡行は、小島が『山岳』第９年第３号（大正４年３月10日発行）の付録に「飛騨雙六谷」と題した詳細な記録を載せ、中野も同号に「雙六谷探検記」を寄稿している。

大正４（１９１５）年６月、硫黄岳（焼岳）が大噴火し、大正池ができた。

この年の８月７日、前述のように中野は蒲田のガイド今田由勝と白出沢を遡行し、奥穂高岳から西穂高岳へ初縦走をした後、小鍋谷を下った。

このときの貴重な記録は、『山岳』第10年第３号（大正５年５月15日発行）に「蒲田谷より穂高登山」と題して、概念図入りで掲載されている。なおこの図では、今の西穂高岳が前穂高岳になっている。

中野はこのほか『山岳』に幾編かの山行記録を寄稿しているが、第29年第２号（昭和９年12月発行）には、「北アルプスの紅葉風景」と題して昭和６（１９３１）年10月に笠谷から笠ヶ岳に登り、下佐谷へ下った記録を載せている。この文の巻頭には、小島烏水が次のような文を寄せている。

> 筆者中野山堂、名は善太郎氏、大正三年、私が初めて飛騨双六谷を見座より水源地の双六谷まで遡行した時に、氏は双六小学校長として一行に加わられた。（以下略）

そして小島は、ほとんど世に知られていない笠谷の記録と、文政年間、笠ヶ岳の頂上に播隆が安置した仏像の詳細

な記録は貴重なものだ、との感想を述べている。
中野は教職退職後、地元上宝村の観光開発に尽力するとともに、地域の民俗資料の収集なども行なった。
飛騨山岳会は、創立後盛んに飛騨山脈に登り、白山や御嶽山の実測図を作るなど活発な活動を行なっていたが、大正時代半ばになると動きが低調になってきていた。
このため住、中野、二木、福田夕咲などの尽力で、大正12（１９２３）年、再設立を行なった。飛騨山脈の飛騨側から入る登山客増に伴い、飛騨側の開発、登山客の誘致や案内に対応できる組織に改編しての再出発であった。
再設立を記念し、この年の8月、2年前にアイガー東山稜初登攀を果たした槇有恒を招聘して、講演会を開催している。
来場者は約３００名。講演の内容は、欧州での登山、そして、この年の1月に槇が岳友・板倉勝宣を失った松尾峠の遭難についてであった。のちに遭難史に残ることになるこの事故からまだ半年経ったばかりであり、事故の内容を語る槇の心痛はいかばかりであったことか。飛騨人は、このとき初めてアルピニズムというものを知ることになるが、この講演会の御膳立をしたのは住と中野であった。
このころ日本山岳会との関係は、窓口になっていた小島の渡米もあって次第に疎遠になり、住、二木以外は退会する会員が続出している。
これは今のように交通・通信手段が発達しておらず、まだ支部も設立されていないころで、他地域の会員との交流がままならなかった当時の、地方会員共通のジレンマが原因であったと思われる。なにせ飛騨では、まだ国鉄の高山線が高山町まで開通していない不便な時代であった。
飛騨山岳会自体も、『山岳』第11年第1号（大正5年10月20日発行）で名簿からの削除が報じられている。
飛騨山岳会員が再び日本山岳会とつながりを持つようになったのは、昭和40年代、今西錦司元会長が岐阜大学学長に就任されたころからである。
この時期、今西元会長は盛んに飛騨の低山を登りに来られ、我々がご案内した。そのとき私を含め何人かが入会を勧められ、推薦をいただいたのである。そして、間もなく岐阜支部が設立された。

〈参考文献〉

『佐久良組の人々』住　斉
『ふるさとのあしあと』上宝郷土研究会会報・第5号
『小島烏水全集』

『山刀・創立百周年記念特別号』飛騨山岳会
『日本山岳会百周年史』
『飛騨人物事典』高山市民時報社
『日本登山史』山崎安治

大学ワンダーフォーゲル部の発足

――学生登山の戦後史と現況

城島紀夫

今から80年前の１９３６（昭和11）年に、我が国で初めて大学生のワンダーフォーゲル部（以下、ＷＶ部）が、体育系の課外活動の種目として公認された。ここに誕生したＷＶ部は、太平洋戦争終結後の１９４６（昭和21）年に新制大学において設立が全国に広がって、大きく発展した。

学生登山の流れ　旅行部から山岳部へ

学生登山は、１９１０年代（大正時代初期）に旧制高校を中心に一高旅行部や三高旅行部などが設立されて、山旅が広まった。この年代に設立された学校（中・高・大学）の登山系の部は、21校のうち10校が旅行部や遠足部やスキー部と名乗り、11校が山岳会や山岳部や登嶽部と名乗っていた。この当時の日本人の伝統的な登山は、夏山を中心とした山旅であった。いくつもの社会人山岳会も夏山登山の活動を行なっていた。

１９１９（大正８）年に大学令が公布されて、私立大学の設置が認可されるようになり、続く約６年の間に旧制大学や旧制高校に次々と山岳部が設立された。１９２０年代には、部の名称も山岳部が主流となった。

１９２１（大正10）年に、槇有恒がアイガー東山稜の初登攀に成功したころから、我が国に西洋流の登山思潮（アルピニズム）が移入され、当時の西洋憧憬やアルプス憧憬

の気風も手伝って、雪と氷の冒険的な登山が学生登山のなかでハイライトを浴びるようになった。学生たちの山岳部の活動は、数年のうちに雪と氷に加えて岩壁にも挑むようになり、冒険の度合を強めて先鋭化した。

学生登山が分岐した

山岳部は次第に伝統的登山の愛好家たちの入部が減少し、部員減少が始まった。学生登山の分岐であった。

伝統的登山を愛好する学生たちにとっては、山岳部から分化した新しい部が発生することが望まれていたが、課外活動において部を認可する基準の中に「一種目、一部」という原則があったために、新しい登山系の部を創設することは困難であった。このような背景から、多くの山岳部においてアルピニズムを愛好する部員たちが大半を占める結果となっていた。課外活動では、今日のように任意の同好会やサークルの結成は一切認められていなかったのである。一方で社会人の登山界では、登山思潮や登山スタイルに応じて自由に新しい集団が生まれていった。

このような流れを、田口二郎は次のように述べている。「大正後期にアルピニズムが渡来したとき、学生登山は従来のスタイルのものと新しいものとに分岐した。新思潮のアルピズムを奉じて新生した山岳部があり、また古くからある山岳部で新旧の二つの内容をもって発展したものなど、さまざまであった」と。(『東西登山史考』)

スポーツの新種目となったWV部

1936(昭和11)年2月に、我が国で初めて明治大学ワンダーフォーゲル部が体育系登山種目として認可され、学友会運動部への加入を果たした。

前年に設立していた立教大学と慶應義塾のWV部は、両部とも体育会への加入を認可されていなかった。

このあと間もなく太平洋戦争が始まり、大学におけるすべての課外活動は休止の状態に追い込まれて、WV部の活動は、後続の設立を見ないままに中断された。

WV部が本流となった現代山岳部との違い

WV部と山岳部との相違について、従来から対比的に言われてきた数々の説明を要約すると次のようなものである。

山岳部＝氷・雪・岩に挑む、海外遠征、自然と対決する、冒険主義、アルピニズム、ヒロイズム、登頂や登攀が第一(記録主義)、より高く・より困難を目指す、少数、個人、

などである。

ＷＶ部＝夏山合宿、部員全員合宿、縦走登山、自然に親しむ、安全に、尾根や渓谷や森林や里山などをたどり景観を得る、厳冬期の登山は行なわない、多数、共同行動、などである。

ただし、山岳部が前記のように先鋭的になったのは、西洋式の氷や雪に挑む登山方式が我が国に移入されて以後のことであった。これ以前の山岳部は、夏山と山旅を中心として活動しており、今日のＷＶ部と似通った活動を行なっていた。深田久弥も「昔の山岳部は、多分にワンゲル的であった」と述べている（『瀟洒なる自然』）。

戦後に発足・発展したＷＶ部

我が国において大学ＷＶ部が発足した状況は【表・1】のとおりである。この一覧表は、これまでに書かれた登山史にはほとんど記されていなかった「戦後の学生登山史」の資料として、部誌や周年記念誌などを基に調査したものである。

ＷＶ部設立の大きな波は、関東から関西へと及んだ。関東地区では私立大学が先行し、その他の地区では国立大学が先導役を果たした。

太平洋戦争が終結した翌年の１９４６（昭和21）年に、明治大学（体育連合会加入）と慶應義塾大学（文化団体連盟加入）のＷＶ部が活動を開始した。両校ともに戦時中に休止していた部活動の再建であった。

続いて１９４８（昭和23）年に、中央大学が戦後初めてのＷＶ部を創設して学友会体育連盟に加入し、立教大学（文化団体加入）が部を再建した。後続のＷＶ部は、体育会への加入を認可されることが通例となった。

同年に、前記の大学が全日本学生ワンダーフォーゲル連盟を結成して、関東地区の大学に向けてＷＶ部の設立奨励運動を開始した。併せて関係者に山岳部との相違点を周知させることも同連盟の大きな課題であった。

早稲田大学（体育会加入）、法政大学（体育会加入）のＷＶ部創設に続き、１９５１（昭和26）年に東京大学が国立大学で最初のＷＶ部を発足させた。東京大学ワンダーフォーゲル部は１９５５（昭和30）年に全日本学生ワンダーフォーゲル連盟に加入し、１９６０（昭和35）年にはＯＢ会を結成、１９６１（昭和36）年に運動会（体育会）への加入を認可された。

国立大学におけるＷＶ部の設立は、東京大学ワンダーフォーゲル部が先例となって、お茶の水女子大学、北海道

大学と続き、全国の大学へと波及した。

女子大学で最初のWV部は、1954（昭和29）年にお茶の水女子大学で誕生した。次いで東京女子大学、津田塾大学、女子美術大学、奈良女子大学にWV部が誕生し、女子大学においても登山系の部活動が盛んになった。女子大学初の山岳部は、この前年、1953（昭和28）年に東京女子大学において誕生していた。

【表・1】に見られるように、大学のWV部の普及は、終戦直後の1946（昭和21）年から1955（昭和30）年までの10年間に、関東を中心とする20の大学に拡大して、新しい登山文化が構築されていった。

続いて1965（昭和40）年までの10年の間には、さらに137の大学でWV部が設立された。この結果、1965（昭和40）年当時には、我が国の国立大学73校のうちで56校においてWV部が活躍する盛況となった。

戦後の教育制度の変革によって教育の大衆化が進み、大学への進学率が上昇するとともに大学が増設された。これにつれて1960年代には、WV部の活動が全国的な人気を呼び、各大学WV部において多数の入部者を迎えた。1960年代後半から1970年代前半が「大量部員時代」とも呼ばれた時期である。

1965（昭和40）年当時の部員数は、大阪大学／316名、関西学院大学／84名、慶應義塾大学／210名、神戸大学／112名、中央大学／142名、東京大学／107名、明治大学／97名、横浜市立大学／44名などであった。

部員数の推移について東京大学ワンダーフォーゲル部に例をとって見ると、1970年に70名、1980年に66名、1990年に46名、2000年には27名と推移しており、1965年ごろが最多であった。ほかの大学もほぼ同様の傾向で推移した。

1960年代の後半あたりから、体育系の各部の部員数が減少し始めた。大学生たちの課外活動における体育離れと呼ばれた現象が始まり、規律を求められる部活動よりも任意性の高い同好会やサークルの方に人気が集まるようになった。WV部においても多くの部が、部員全参加制であった夏合宿を任意参加制に変更するようになった。

以上のように、戦後に発展したWV部の活動は、戦前に山岳部から分岐したが新規創部が認められなかった伝統的登山を課外活動として回帰させた現象であったと捉えることができる。

田口二郎も「大正後期に登山界がアルピニズムを主流とするようになってからも、日本の登山の牢固とした底流と

して生き続け、日本の土壌に育まれたそれ（伝統的登山・筆者注）は、戦後にはアルピニズムと並ぶ登山の二本の本流の一つとしての地位を築いて来たのである」と指摘している。

急速に発展した背景は

１９４９（昭和24）年の新制大学の発足と同時に、教育課程において大学生の体育実技が初めて必修となったため、ＷＶ部、山岳部、野球部などが行なう実習行事が、単位認定のための正式課目として取り扱われるようになった。大都市にある学生数が多い大学は、体育施設や指導者が不足していたために、これを補って実技単位を与えるための臨時の措置が必要であった。

正式課目として認定された種目の部員たちは、部長や監督の証明によって体育実技の単位が授与された。また、大学が認定した部が主催する実習に一定時間以上の参加をした学生には、実習の責任者の証明によって単位が授与された。この実習で、ＷＶ部が主催したキャンプと登山が人気を集め、ＷＶ部の入部者が増大し始めたのであった。

このような事情に加えて、大学数とその学生数の増加が続いたことや、経済成長による娯楽の普及などを背景として、大学のＷＶ部は大きく発展した。戦前には高等教育を受ける学生は少数の富裕階層の若者であったが、戦後には教育の大衆化によって、学生登山も多数の学生に行き渡ったのである。

活動内容と部員数

大学ＷＶ部が発足した初期のころの、夏期合宿の行き先と参加者数は次のとおりであった。

東京大学においては、１９５３年／南アルプス（26名）、５４年／奥秩父（20名）、５５年／志賀高原（50名）などと記録されている。明治大学の場合は、１９５３年／戸隠山（７日間、１１８名）、５４年／奥日光（８日間）、５５年／笹ヶ峰（８日間、１１７名）などと実施された。夏季合宿以外の山行もテント合宿を原則として、縦走登山を中心として活動した。

山小屋の建設とＯＢ会の結成

戦前には、大学が管理する山小屋は山岳部の活動施設として大学が建設していた。

我が国で最初のＷＶ部専用の山小屋が、１９５４（昭和29）年に、明治大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会によって

建設された。これが前例となって、大学のＷＶ部は山岳部とは別個の山小屋を建設することが通例となり、山岳部と並んで登山活動を行なうＷＶ部の伝統として定着した。

明治大学に続く山小屋の建設は、１９５６年に中央大学、１９５８年に慶應義塾大学、１９５９年に工学院大学と続き、一橋大学、京都大学、九州大学、東京大学、金沢大学などの国立大学を含めて、全国のＷＶ部に及んだ。

多くの大学ＷＶ部のＯＢたちが、山小屋の建設事業を契機としてＯＢ会を結成し、小屋の建設資金の拠出や設備の寄付や現役部員の活動費を補助する事業が始まった。新しく創部して活動する現役のＷＶ部にとっては、テントなどの装備調達費用や年間活動費の一助となるＯＢ補助金は欠かせないものであった。

ＷＶ部は部員数が多いため、卒業年次ごとの同期会がそれぞれに会の名称を掲げて集う例が多く、この同期会が伝統的に継続されているＷＶ部は全体のＯＢ会も盛況となっているようだ。これらのＷＶ部ＯＢ会では、「ＯＢ会報」を発行している。最近では、会員への郵送に代えて電子化して配信する例が、東北大学などに見られる。

現役部員とＯＢ・ＯＧとの合同山行を、年間企画として慣例化している部も多く見られる。

ＷＶ部ＯＢ会が、創部以来の「部誌」を会員から収集して電子化し、会のウェブサイト上で公開する事業が始まっている。横浜国立大学、東京大学などである。

部誌と周年記念誌

発行されていた部誌の名称、並びに近年に発行された周年記念誌は、【表・1】のとおりである。

１９４６（昭和21）年に、慶應義塾大学と明治大学のＷＶ部が年刊の「部誌」の発行を再開した。後に続いて創部したＷＶ部は、ほぼ例外なく設立直後から部誌を毎年発行した。当初には多くのＷＶ部同士が部誌によって情報交換を行ない、地域ごとの連盟の結成や合同山行（合同ワンデルング）の契機となっていた。

部誌には年間の活動記録が参加者名とともに詳細に記録され、併せて全部員が執筆する紀行や随筆などが掲載された。巻末には部員名簿（卒業年次、氏名、住所など）が必ず記載されており、ＯＢ会の活動資料として活用された。

１９６０年代の後半あたりから、部員数の減少により「部誌」の発行が途絶えた。現在も年度ごとに部誌の発行を続けているＷＶ部は、慶應義塾大学、明治大学など少数だと見られる。

部の創設以来50周年を迎えて、「周年記念誌」を発行するＷＶ部が２０００年代に増加した。ＯＢ会が発行したこれらの周年記念誌は、過去に発行した年刊の部誌をベースとして創部以来の歴史が編纂されているため、部の伝統や年次ごとの特徴的な活動が伝えられており、時代背景を映し出しているものが多い。年度ごとの部誌の発行が途絶えると、将来には密度の濃い記録としての周年記念誌の発行が困難になるのではないだろうか。

学生登山の現況　ＷＶ部と山岳部の活動状況

全国の大学のＷＶ部と山岳部の両部の活動現況は【表・2】に示すとおりである。

全国の総合大学１１７校を調査対象として、各大学と両方の部の２０１６年度公式ウェブサイトを閲覧した。

山岳部は近代（戦前）まではほぼすべての大学で活動していたが、戦後には休部や廃部が続いたために部数は年々と減少しており、今日ではＷＶ部の方が多くなっている。

活動している両部の部数を国立大学について見ると、51校のうちでＷＶ部が45校（約90％）で活動しており、山岳部が29校（約57％）で活動している。

国立と公・私立の合計１１７大学について見ると、ＷＶ部が84校（組織率・約72％）であり、山岳部が55校（組織率・約47％）となっている。

組織率において公・私立の方が国立大学よりも低い原因は、公・私立大学の方に開設の歴史が新しい大学が多く、旧制大学以来の登山文化が伝承されていないためだと見られる。

最近のＷＶ部の部員数（２０１６年度）は、大阪大学／31名、金沢大学／53名、関西学院大学／37名、九州大学／69名、京都大学／35名、慶應義塾大学／42名、中央大学／43名、東京大学／27名、北海道大学／22名、明治大学／49名、早稲田大学／18名などとなっており、全国的に幾分増加の傾向にあるものと見られる。

活動が多様化の模様

昨今の年間活動内容は各部によってまちまちであるが、大きく次の３つに区分することができる。①登山を中心とするもの、②登山のほかにアウトドア種目を取り入れて、年度ごとに部員の意向に応じて企画するもの、③登山活動は行なわず、ほかのアウトドア種目の中からその都度企画するもの、である。このうち②と③は年間計画が不明確であり、年度初めに年間計画を定めない部も多くなっている。

①の例として、明治大学WV部の年間計画（2016年度）を見よう。次の3種類の活動が企画されている。

(1)全員参加制の公式合宿（7回）、(2)自由参加制の公式合宿（6回）、(3)部員同士で行なうフリープランが月1回程度、である。

(1)の全員参加合宿の内容は、新人歓迎ハイク、新人養成（2泊）、初夏（2泊）、夏期（7～10泊）、小屋整備（2泊）、秋期（2泊）、春期（2～4泊）として構成され、(2)の自由参加の公式合宿は、OB会と共同の小屋合宿、リーダー養成、正部員養成、秋期、山小屋整備、ゲレンデスキー、春期の各合宿とされている。厳冬期登山は禁止している。

近年では、WV部と山岳部がほぼ同様の活動を行なっている大学が増加しており、この傾向は年とともに進んでいるものと見られる。私立大学において登山を行なわない前記③の区分に属するWV部の中には、活動内容を「アウトドア全般」とするものもある。また、山岳部の中には、登山に代えてフリークライミングを中心に活動する部も出現している。

大学WV部が登山のほかに採用している種目には、サイクリング、クロスカントリースキー、イカダ川下り、カヌー、無人島合宿、フリークライミング、ボルダリングなど種々雑多となっている。

教育の一環として行なわれている課外活動としては、各部ごとに一定の目標が必要だと思われる。最近では、国立大学の一部において活動内容を登山に特化するという傾向が見られる。

「ワンダーフォーゲル部」という名称は、「活動種目」を表していない。活動種目を特定して、活動種目名を部の名称にすることが、ワンダーフォーゲル部の今後の課題だと思われる。

〈参考資料〉

各大学のワンダーフォーゲル部並びに山岳部の『周年記念誌』

城島紀夫『ワンダーフォーゲル活動のあゆみ』（古今書院）

表１　ワンダーフォーゲル部の発足状況

発足年		大学名(発足月)	部誌の名称	周年誌発行(発行年)
1935	昭和 10	立教大学（４月）		
		慶應義塾大学（５月）	ふみあと（1937 創刊）	
1936	昭和 11	明治大学（２月）	WanderVogel（1938 創刊）	
		〈以上は戦前の状況〉		

1946	昭和 21	明治大学（１月）	WanderVogel	30 年、60 年（1997）
		慶應義塾大学（２月）	ふみあと	25 年、50 年（1986）
1948	昭和 23	立教大学（４月）	いろりび	30 年、50 年（1987）
		中央大学（６月）	渡り鳥	40 年、60 年（2009）
1949	昭和 24	早稲田大学（10 月）	彷徨	50 年、60 年（2009）
1951	昭和 26	法政大学（６月）	雲海	50 年（1999）
		東京大学（10 月）	山路	50 年（2001）
1953	昭和 28	横浜市立大学（４月）	峠	50 年（2003）
		日本大学（６月）	くさはら	50 年（2003）
1954	昭和 29	東京都立大学（３月）	乗越	（現 首都大学東京）
		お茶の水女子大学(４月)	アルペンローゼ	
		神奈川大学（４月）	どろぐつ	
		國學院大学（５月）	野づら	50 年（2004）
1955	昭和 30	学習院大学（４月）	紫峰	30 年、50 年（2006）
		津田塾大学（４月）	やまなみ	
		東京経済大学（４月）	くぬぎ	60 年（2015）
		東京女子大学（４月）	こまくさ	
		明治学院大学（４月）	ヤッホー	50 年、60 年（2015）
		北海道大学（５月）	道標	50 年（2005）
		関西学院大学（９月）	溪聲	50 年（2006）
1956	昭和 31	岩手大学		20 年（1985）
		京都大学	水行末雲行末風来末	
		埼玉大学	雲採	50 年（2006）
		千葉大学	峠	（現徒歩旅行部）
		広島大学	どんこ	
		福井大学	渡り鳥→ろくしょ	50 年（2005）
		女子美術大学	草鞋	49 年（2005）
		成蹊大学	石楠花	50 年（2008）
		東京農業大学	しゃくなげ	
		東京薬科大学	道草	
		東京理科大学		
		東北学院大学	めっこめし	
		星薬科大学	さすらい	
		武蔵工業大学	かたつむり	（現 東京都市大学）
		立命館大学	漂雲	
		龍谷大学		
1957	昭和 32	宇都宮大学	嶺雲	
		東京工業大学	つばくら	
		奈良女子大学	すばこ	
		福島大学		
		横浜国立大学	スカイライン	50 年（2007）
		京都府立西京大学	漂	50 年（2008）

1957	昭和 32	兵庫農科大学	やまざる	（神戸大学に移管）
		関西大学	千里	50 年（2006）
		甲南大学	そんぶれろ	
		上智大学	はばたき	50 年（2008）
		天理大学	WOLKE	
		東海大学	ななかまど	50 年（2007）
		同志社大学	みちくさ	女子 50 年（2014）
1958	昭和 33	茨城大学		
		大阪大学	霧	50 年（2009）
		金沢大学	Bergheim	35 年（1993）
		京都工芸繊維大学	きうま道	
		東北大学	報告	
		東北大学（医）	ワンデルング	
		富山大学		
		新潟大学	飯豊	
		大阪府立大学	たをり	
		大阪女子大学	ラテルネ	（大阪府立大に統合）
		大阪市立大学	径	50 年（2008）
		姫路工業大学	白鷺	（現 兵庫県立大学）
		大阪樟蔭女子大学	かりがね	
		関東学院大学	さんが	
		工学院大学	泥汗	
		成城大学	HORN	
		東京歯科大学	蒼雲	
1959	昭和 34	大阪外国語大学	Viator	50 年（2009）
		大阪学芸大学	踏み跡	（現 大阪教育大学）
		京都学芸大学	足跡	（現 京都教育大学）
		名古屋大学	道祖神	25 年、50 年（2009）
		神戸商科大学		（現 兵庫県立大学）
		大阪経済大学	ケルン	
		大阪工業大学	山塊	
		大阪歯科大学	シルヴァ	
		専修大学	熊笹	
		玉川大学	Dorsum	
		南山大学		
		日本大学（医）	まいまいついぶろ	50 年（2009）
		武蔵大学	跋渉	
1960	昭和 35	神戸大学	六甲育ち	50 年（2010）
		東京学芸大学	雪笹	50 年（2011）
		東京教育大学		（現 筑波大学）
		一橋大学	頂	
		北海道大学（水産）	滄海	
		山形大学	わたりどり	50 年（2009）
		愛知大学		
		愛知学院大学	ちやす	
		近畿大学	草枕	50 年（2011）
		駒沢大学	駒草	
		西南学院大学	路	
		東北薬科大学		
		日本女子大学	歩っ歩	

1960	昭和 35	武蔵野美術大学		
1961	昭和 36	愛媛大学	与茂太	
		岐阜大学		
		九州大学	峠	
		高知大学	歩荷	
		島根大学	落水楽山	
		東京農工大学		
		三重大学	なため	
		室蘭工業大学	蘭岳	
		山梨大学	甲斐嶺	
		琉球大学	南風	
		高崎経済大学		
		九州産業大学	鳥魂	
		神戸女学院大学		
		芝浦工業大学	牛歩	
		千葉工業大学	いしがき	50 年（2011）
		千葉商科大学		
1962	昭和 37	香川大学		
		滋賀大学	峰声	
		信州大学		
		東京医科歯科大学		
		山口大学	鳳翩	50 年（2012）
		愛知県立女子大学		
		愛知工業大学		
		大阪電気通信大学		
		岐阜薬科大学		
		札幌医科大学	蝦夷	
		東京電機大学	雁	
		東洋大学	ランペ	
		日本大学（歯）	道標	
		名城大学	開拓者	
		山梨学院大学		
1963	昭和 38	愛知学芸大学		（現 愛知教育大学）
		岡山大学		
		電気通信大学		
		宮崎大学	路	
		北九州市立大学	とり	
		京都市立芸術大学		
		都留文化大学		
		名古屋市立大学		
		亜細亜大学		
		熊本商科大学	漂泊	（現 熊本学園大学）
		女子栄養大学	みちくさ	
		第一薬科大学		
		大東文化大学		
		日本福祉大学		
		広島工業大学		
		桃山学院大学		
1964	昭和 39	大分大学	志高	
		熊本大学	小径	

1964	昭和 39	徳島大学	きゃらばん	
		弘前大学	遊鳥	
		山口県立大学		
		国際基督教大学		
		獨協大学		
		福岡大学	指標	
		酪農学園大学		
1965	昭和 40	九州工業大学	CAIRN	
		佐賀大学	木霊	
		名古屋工業大学	旅鳥	
		名古屋学院大学	みち	
		名古屋女子大学	さわらび	
		日本獣医畜産大学		
		流通経済大学		
		和光大学		

（註 1） 1956 年以降は国立・公立・私立の順、五十音順。
（註 2） アンダーラインは国立大学。大学名は創部当時のもの。
（註 3） 部誌名の空欄は未判明のもの。

表 2　両部の活動部数（2016 年 9 月末現在）

総合大学の校数	部の数（部）		同一大学内の組織情況（校）			
（校）	WV部	山岳部	両部あり	WV 部のみ	山岳のみ	両部なし
国　立　51	45	29	28	17	1	5
公・私立　66	39	26	22	17	4	23
計　117	84	55	50	34	5	28

インドネシア・南東スラウェシの山、メコンガ山

児玉　茂

つかみ所のない山群の最高峰

インドネシアの島々の中央部、赤道を挟んでKの形をした島がある。地図を開くと、Kの形そのままに4つの細長い半島が各方向へ延び、それらが中央部に合わさって島を形造っていることが分かる。全体の面積は意外に大きくて、本州から関東地方を除いた広さよりやや大きい。北へ延びる半島はすぐに直角に曲がり、東に方向を変える。その先端部にある大きな街がマナードで、日本の遠洋漁業の基地もある。南西に延びる半島の南端に近い西側にマカッサルがあり、スラウェシ島全体の首都である。東に延びる矢印のような半島は大きな町もなく、山地と森林が広がる未開の地である。そして、南東に延びる半島も同様に山地ばかりであるが、南端部が少しだけ開けた平地があり、多数の付属する島々がある。この半島南端の、マルク海に面する湾岸に開けた小さな港町がクンダリで、ここが現在の南東スラウェシ州の州都である。

各半島の脊梁をなす山々は起源の古い堆積岩および貫入岩類と火山岩からなり、活動中の火山は北半島の先端部に集中し、火山列はさらに北上しサンギヘ島のアウ火山に続く。そして、南西半島の南端にも大きく裾野を引く第四紀の火山がある。北半島と南西半島、東半島と南東半島はちょうど中央部分で結節していて、東側、西側で地質構造が全く異質であることから、地殻表面の移動（プレート・

テクトニクス）により東西別々の島が結節したと考えられていて、両島間には南北方向の地溝（最低部はポソ湖底でマイナス４４０ｍ）が走り、そこに連続する海（ボネ湾）は２０００ｍを超える深度がある。南東半島の中央部から北部の辺りは極めて特異な地質で、超塩基性岩（橄欖岩や蛇紋岩）が広く分布し、鉄鉱石、ニッケル鉱石の大産地になっており、１９７０年代から世界最大のニッケル鉱山企業（INCO）が、山奥に大規模な鉱山施設を造っている。そもそもスラウェシは古来から鉄の産地として知られていて、「スラウェシ」の名もここからきている（Sula-Besi「鉄の島」の意味）。

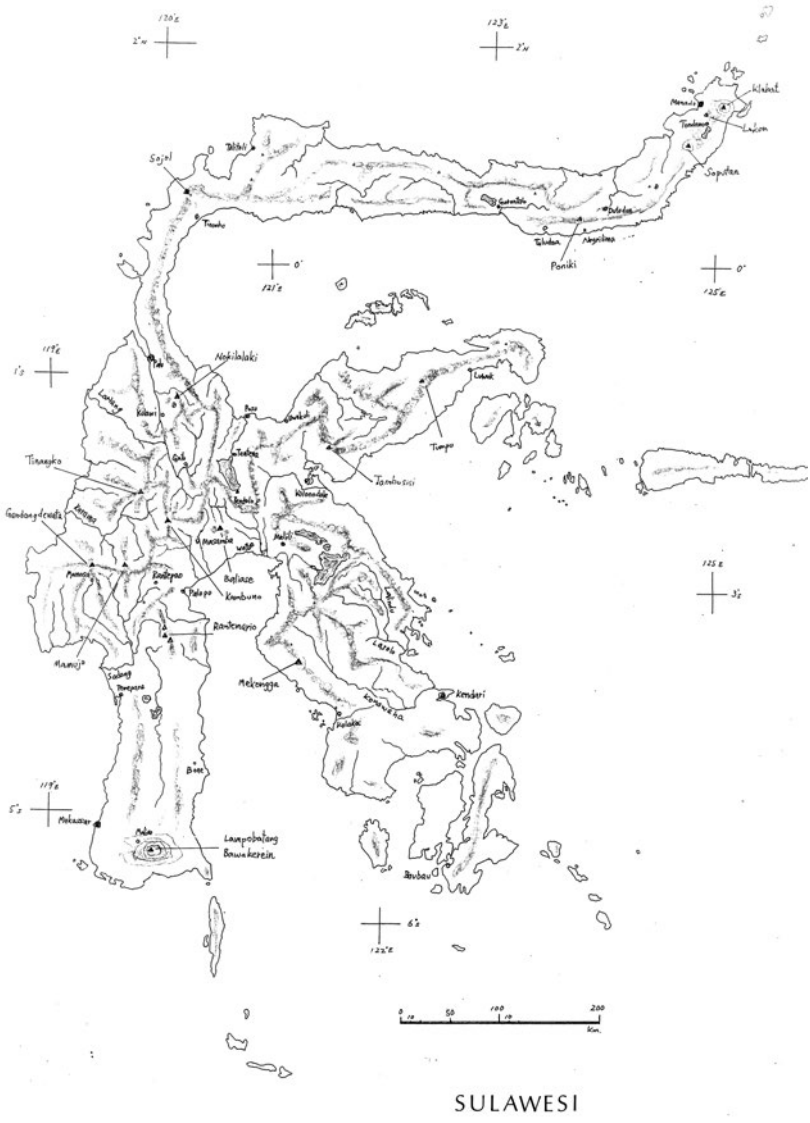
地形的に見ると北半島と南西半島は活発な変動帯で、高い山や急峻な山が多く、特に中央部のタナ・トラジャを囲むように、東西方向と南北方向に３０００ｍ峰が集中する山脈がある。３４７８ｍのランテマリオ山を最高峰とするラティモジョン山塊は、３０００ｍ台の無名の山が20㎞にわたって並び、まだ登られていない頂もある。さらにトラジャ地方の背後に連なる巨大な東西方向の山塊はほとんど探られたことがなく、３０００ｍ峰がいくつあるのか、１９９０年代に地形図が完成するまで誰にも分からなかった。

一方、東半島と南東半島の山は緩やかな曲隆山地が続き、弧を描くような山が多い。それでも結節点に近い部分には２８００～２７００ｍ台の山が連なる。この部分も情報が全く限られ、３０００ｍの山がまだあると思われていた。南東半島も北西―南東方向の山脈が海岸まで迫る、山また山の重畳たる山地の連なりである。このつかみ所のない山群の中の最高峰がメコンガ山で、ボネ湾側に走る山脈に位置する。

スラウェシ島は山の多い島で、低地と平地は少なく、周囲は海に囲まれているため、陸上よりも海上に本拠を求めざるを得ない。このような自然条件はスラウェシ島全体に等しく当てはまり、古来、海洋と島々とを舞台に活躍する人々（ブギス人など）が外の世界につながっていた。一方、内陸の山地には山岳民族（トラジャ人など）が各所に孤立的に分散して住み、現在でもこの構図は変わりようがない（地図1参照）。

＊

日本でメコンガ山は知られているのだろうか。気になって『コンサイス外国山名辞典』を開くと、「インドネシア。スラウェシ島南東半島部の内湾寄り。マリリの南東約65㎞。高度２７９９ｍ。3度39分S、１２１度15分E」と載っ


SULAWESI
Sojol
Tolitoli
Tilamuta
Gorontalo
Kotamobagu
Poso
Palopo
Bantaeng
Bulukumba
Rantepao
Mamuju
Mamasa
Majene
Pare-Pare
Makassar
Bone
Kendari
Raha
Poleang
Bau-Bau
Tinombo
Buol
Toli-Toli
Luwuk
Tentena
Tomini
Kolonedale
Malili
Mekongga
Lompobatang
Bawakaraeng
Sapudan
Wakatobi
Tomia
Kaledupa
Binongko
Poniki
Talaud
Sangihe
Siau
Manado
Bitung
Gorontalo
Tomini
Tolitoli
Buol
Toli-Toli
Donggala
Parigi
Poso
Tentena
Luwuk
Banggai
Kolonedale
Tinombo
Palu
Enrekang
Sidenreng
Sengkang
Soppeng
Watampone
Bantaeng
Bulukumba
Selayar
Malili
Kendari
Raha
Poleang
Bau-Bau
Mekongga
Lompobatang
Bawakaraeng
Makassar
Pare-Pare
Majene
Mamuju
Mamasa
Rantepao
Palopo
Kolaka
Buton
Sapudan
Wakatobi
Tomia
Kaledupa
Binongko
Talaud
Sangihe
Siau
Manado
Bitung
0
50
100
200
Km.

地図 1

ていた。日本語の一般向きの世界地図帳ではスラウェシ島そのものが小さ過ぎて、南東半島の山名までは載っていない。『タイムズ・アトラス』（１９７８）では地図は少し大きいが、なぜか山名が全く違い、標高も違い、メコンガ山は特定できない。そこで、オランダ時代に作られた*Atlas van Tropisch Nederland*（１９３８）で確認してみると、正しい位置にメコンガ山は示され、標高も２７９０ｍとなっている。メコンガ山は海上（ボネ湾）から、また視界が良ければ対岸の南西半島からも目視でき、早い時期にきちんと測量されていたことが分かる。

市販の何種かのガイドブックを見ても、南東スラウェシ州の扱いは皆小さく限定的で、クンダリのホテル情報すらわずかである。旅行コース以外も紹介されているシエラ・クラブの*Adventuring Indonesia*には、「スラウェシの南東半島はインドネシアの群島中で未だに最も訪問者の少ない地域で、特に複雑に入り組んだ入江を持つ島々は知られていない」とあるが、そこをガイドしているわけではない。一方で「特殊な場所」もないではない。マルク海に位置するトゥカンベシ列島も南東スラウェシ州の属島の一つだが、その前縁に世界有数の巨大な環礁ワカトビがあり、超一級のダイビング・スポットとして一部の人に知られている。*Lonely Planet*によれば、シーズン中にはバリから飛行機が飛び、人の住まない小島に造られた超高級バンガローにダイバーを運ぶという。

最新の旅行地図Periplus Map（１／２６０万）では、南東半島を縦横に道路が通っているが、それは本当なのだろうか？　褶曲や断層に沿った大きな谷筋もあるが、そこに集落がほとんどない。全体が１０００ｍを超える山地であることや、海沿いには道路が通っているとしても、人も住まない山中にわざわざ道路を通すものだろうか？　Periplus Mapの道路表記によれば、メコンガ山の東側の谷筋に細い道路が通っており、上流に向かって山を越え、トウティー湖の南岸に達している。もし道路があるならば東側から登り、トウティー湖へ抜けたいと考えている。クンダリから先、メコンガ山に近づくにはどの道路が使えるのか？　行って見なければ答えが出ない不安がある。

２０１１年に手に入れた登山ガイドブック*44 Gunung di Nusantara*があり、これにメコンガ山が載っている。登山のルートは西側にあるらしい。クンダリを経由して北コラカ県ランテアギン郡ティヌカリ村へ行き、そこから登ると書かれているが、地名の載っていない大まかな地図では確認する術がない。クンダリからバス４時間でコラカ

（ボネ湾に面する港）へ、ここで次のバスに乗り換えてボネ湾沿いの曲がりくねった道を約2時間走りランテアギン郡タンボラ村へ、ここから小型車に乗り換えて約30分でティヌカリ村に達する、とある。西側からの登山口までは、公共交通手段を使っても丸1日あればなんとか達せそうである。そこから先の登山ルートの説明は距離や時間ばかりが記され、山の様子についてはあまり書かれていない。

大学登山クラブの全面的なサポートを得る

2015年11月20日　パートナーは今回もAlikで、午前10時10分に快晴のスラバヤ・ジュアンダ空港を離陸した。約1時間後にはマカッサルの上空を通過、中部スラウェシの重畳とした山並みが手に取るように見えた。すぐにボネ湾に出ると、今度は対岸に南東スラウェシの山々の連なりが見えるが、メコンガ山の辺りは雲が出ていた。海上を20分ほど飛んで南東半島上空に入ると、森林伐採の跡が目立ち、赤土むき出しの道路が縦横に付けられているのが見える。機体は間もなく南東に向きを変えて高度を下げる。前方にクンダリ湾の少し濁った緑色の海が見える。森のない乾いた低い山地を越え、白茶けた平地の上を飛んで湾上に出ると、再び大きく向きを変えて着陸態勢に入った。南東半島の平地は、クンダリとコラカを東西方向に結ぶ明解な構造線の南側に広がっている。国立公園になっている湿地帯を除く大部分は乾燥した土地のようで、この平地部分に飛行場があり、かつて日本海軍はここに滑走路を増設し、さらに航空基地を造っていた。現在は市街地に最も近い、最初の滑走路だけが使われているようだ。

ジャワとは1時間時差があり、11時50分、クンダリ空港（正式名称はハルオレオ・クンダリ空港で、現地トラキ語で「8つの太陽」という意味）に着陸。空港の建物はまだ新しくて簡素そのもの、いかにも地方空港然としている。クンダリに降り立っての第一印象は「ただ暑い」ということだ。どこでも空港周辺は殺風景なものだが、ここは白塗り平屋の建物以外には何もない。タクシー運転手は、街に向かう公共交通手段はほかにないよ、と口々に言って誘う。

とにかく街に出なければ何も始まらないが、運転手には行く先をハルオレオ大学（Universitas Halu Oleo）と告げた。宿の情報すらないまま私たちが頼ったのは、大学の登山クラブである。地方都市にも大学は必ずあり、登山クラブも大抵はあるからである。乾いた景観の中に家も少なく耕地らしいところも見えず、道路以外は埃だらけの荒地を

30分以上走って、建物が増えだしたあたりに大学はあった。そこは広いキャンパスで、タクシーに乗ったまま分散する建物を訪ねるが、学生がほとんどいない。いったん外へ出て、門前にある食堂で昼食とする。ここには学生たちもいて、ようやく情報を得られた。ここは新しいキャンパスで、登山クラブ MAHACALA は本部の農学部森林科にあるという。本部はクンダリの中心部にあるということだ。

クンダリの中心部に入るが、建物の高さはおおむね3層程度で古びているものが多い。ジャワ資本のデパートも古びていて小さい。オランダ時代にクンダリにも行政機関が置かれていたはずだが、そのような歴史的建物も残っていない。道路は拡張工事中の部分が多く、車の量も多いとは言えず、信号機も少ない。ジャワの地方都市と比べても30年以上も昔に遡った感じで、全体として人工的に造られた新しい街のように見える。

少しも文化的な雰囲気の感じられないクンダリであるが、この地域の文化・文明的中心は島々の方にあって、最大の付属島であるブトンが島嶼地域の中心を成し、古くからマルク諸島の香料や周囲の海域で採れる海産物をジャワに運ぶ交易圏の中継貿易地として大いに栄えた。イスラームの受け入れも早く、西の強国ゴワ、東の強国テルナテの間に位置したブトン島のバウバウには強大なスルタンがおり、砦を兼ねた王宮が築かれていた。17世紀になると香料の貿易独占を目論むオランダがこの交易圏に入り込み、ブトン島もその支配下に置かれてしまう。独立後に南東スラウェシ州が新たに作られてからも、しばらくはバウバウが州都であった。

乗り合いベモはキャンパス近くで止まった。道路を渡って大学の中に入ると、すぐの所に学生のクラブのような建物があり、MAHACALA UHO の看板が出ており、ここがどうやら目的の登山クラブらしかった。いきなり中に入って来意を告げると、大いに喜ばれ歓迎された。ほかの登山クラブの場合もそうであったが、学生に混ざって大人びた卒業生が何人かたむろしていることが多く、話を聞いてくれるのはたいていそういう人たちである。部屋の暗さに慣れて6、7人いる一人一人の顔が見分けられるようになると、実に様々な人相があった。学生のリーダーはシャイなパプア人らしいし、マルク系の顔もある。やはりここは、東インドネシア圏の入口であるということを改めて知った。地元の言葉はトラキ語であるが、ここにいる学生のうち1人以外はトラキ語を知らなかった。それ故に学生たちの会話はインドネシア語が使われている。ハルオレオ大学

は国立大学で、各地から学生が集まってくるらしい。マンモス大学でもあり、学生数は2万人いるとのことだ。そしてMAHACALAは、1992年にできたクラブで、高校生を含む若い学生を中心に233人のメンバーがいるそうで、登山を中心にアウトドア活動全般を行なっている。

メコンガ山の計画を伝え、情報を求めると懸案は次々と解けてゆく。「メコンガ山の登り口は西側で、道路も西側のみ。コラカへ行き、北上して山麓の村から登山を始める。日程は7〜8日を要する。東側に道路はないし、東側から登る道はなく、森林である。中央の谷を通る道路もない（地図には半島の東岸に立派な道路が通っているが、途中までしか通じていない）。よってマリリへは西海岸を通っていくしかない」。やはり地元に聞くのが早い。

メコンガ山は地元でも憧れの対象だが、MAHACALAはまだ2度しか登っていないそうである。入口のガラス戸に各地の登山クラブのステッカーがたくさん貼られていた。登山クラブ同士の交流を物語るものだが、その中にGRAHAPALA RINJANIを見つけた。ロンボック島のマタラム大学のクラブで、一緒にリンジャニ山に登ったことがある。マカッサルのハサヌディーン大学の有力グループであるKORPALA UNHASもあった。さらにバンドゥンのWANADRIもあった。彼らは1995年にやって来て、メコンガ山に道を開いたそうである。クラブ同士がそれぞれ地元の山に登るに際して協力をし合う彼らは、ジャワの山にも登りたいということで、今度はAlikにスメルー山の情報を色々と聞き出している。

話が進んだところで、私たちの計画にMAHACALAのメンバーも加わることになった。願ってもないことだが、二つ返事でいきなり山登りに参加できるのだから、この学生たちはよほど暇なのだろう。初めは2011年に登ったという1人と、その仲間の参加が決まったが、さらに夕方になってもう1人、大学1年だという若いのも行くと言い出した。早速5人7日分の食料計画を作り、近くのスーパーに買出しに行くということに急展開した。残る問題としては、登山申請を1週間前に出す必要があるらしい。しかし、MAHACALAのメンバーが加われば、許可はすぐに得られるだろうと言う。

買出しに同行した後、食料、装備のパッキングは彼らに任せて、先輩が私たちを近くのホテルに案内してくれた。彼らは入れ替わり立ち代りにずっと私たちに付き合ってくれていて、だいぶ薄暗くなってきたころ、背後の林でカチャカチャという音がする。タルシウス（メガネザル）が餌探

しに出かけるときの合図だという。警戒心の強いタルシウスが、こんな街中にもいるというのは全く驚きだ。話し込んですでに5時間も経ち、虫の音の騒がしい夜になったのでホテルにいったん引き上げた。再び訪れるとなんと手作りの食事の用意もしてくれて、一緒に食卓を囲んだ。彼らは私たちを山の仲間として認めてくれたのだろう。日中は暑いが夜になれば気温も少し下がって、壊れたクーラーの部屋でもなんとか眠れそうである。長い1日が終わり、早速、明日からメコンガ登山の活動が始まる。

面倒だった登山許可の取得

11月21日　今日も快晴。7時にホテルを出てMAHACALAに向かう。5分の距離である。メンバーの1人はパッキングを始めていたが、残りの連中はまだごろごろと寝ていた。下宿に帰った者もいて、まだ仲間はそろわない。すでに日差しは強烈で、日陰に入ってメンバーが集まってくるのを待つことにした。

登山口の村まではチャーター車で行くが、昨晩のうちに予約をしてくれていて、8時に来るという。公共交通機関を使うと時間がかかり、今日中に着けるかどうか分からないらしい。車でも5時間以上かかるということだ。地図は1／5万のBAKOSURTANAL（国土地理院）地形図のコピーを持参するという。このスラウェシ1／5万はようやく1992年に完成したもので、手に入りにくいものである。スラウェシの精確な地図は戦前、オランダ時代には完成されておらず、特に山地に関しては概念図の域を出なかった。AMS1／25万の南東スラウェシ部分は、1960年代に空中写真を使って作られているが、それ以外の地図はどれもオランダの地図が流用されており、メコンガ周辺は未測量状態のままになっていた。ちなみに、前記の『熱帯オランダ・アトラス』以前のオランダ地図では、山名をMengkoka（メンコカ）としていたが、のちにMekonggaに訂正されたが、AMS地図の表記は古いままである。

メコンガ山は山体そのものが大きいため1／5万地形図では2枚の図幅が必要で、しかも低緯度の故に図郭が日本のものよりかなり大きく、全体を見渡すのは大変である。私も事前にこの地形図を検討したが、見慣れた地形とはかけ離れた特異なものである。山頂部分は広い台地状となっていて、その台地上に等高線が閉曲線になった小山がたくさんある。高さも形も同じようなピークが並んでいて、最高点はどこにあるのか判然としない。図幅内だけでなく、

東側も北側の図幅もゆったりした地形の山ばかりである。しかも森林を示す緑色の点が全面に展開し、そこに人工物はほとんど見当たらない（地図2参照）。

準備が整うまでの間、朝早くから集まってきた仲間たちに気に懸かっていたこの土地の様子を聞いた。空港からここまでの間で農地を見ていないが、農地はどこにあるのかという問いに、クンダリの周囲に農地はなく、プランテーションもない。漁師は多く、魚市は港にある。地元トラキ人の主食はもともとサゴヤシなので、米作りは新しいが、コラカへの道の途中には水田が広がっているという。新しく開かれた山麓部は、人口過密のジャワからの移住地になっているが、最近はパプアからの移民も多いとのことだ。地物を示すトラキ語の単語もいくつか教えてもらった。山は Osu、川は Alaa、海は Otahi、森林は Lalongasu、木は Puu。ジャワ語やインドネシア語との共通語彙は全くなさそうだ。

昨晩22時に私たちがホテルに引き上げた後に、話を聞き付けて参加を決めたというつわものがもう1人、ザックを担いでメンバーとして加わってきた。これで6人になったわけだが、食料はなんとかなるであろう。すべての準備が整い、出発メンバーとMAHACALA 全員が集まって円陣を組み、安全を祈る儀式を行なった。記念写真を撮って9時30分に車に乗り込むが、後ろの座席は荷物で一杯で、座る所もない。

コラカまでは南東スラウェシ州の基幹道路を、平地と山地の境を縫いながら4時間ひたすら走る。目の前に海が一気に広がり、ここから先はボネ湾と呼ばれる大きな内海に開けたスラウェシの海洋世界に入る。南東半島から首都マカッサルへはここから定期船に乗って渡る方が、ボネ湾に沿って陸路を行くより3日以上も早い。砂浜と喬木マングローブが交互に現われる海岸を北上する道は景色も良く、快適そのものだが、それは長くは続かない。山が海岸線ぎりぎりにまで迫り、あるときは海浜に沿い、またあるときは崖を登り返して山襞の深くまで入って行くというような急カーブや上り下りを繰り返すような難路に変わる。当然人の住めるような平地はなく、山林と海の境を道路だけがうねりながら続く。

このような箇所を2時間も走り、少し広い平地が現われると人家が並び、飲み物などが売られている店があった。背後は高い崖であるが、道路の下側は白い砂の海岸になっていて木陰があり、海水浴もできるらしい。ここはスンガイ・タンブラシと呼ばれる場所で、ドライバーの休憩場所

となっている。地名の由来は、崖と道路の間に水源がある、全長30ｍにも満たないごく短い川が流れているためらしい。私たちも浜へ降りて透明な水をごくごくと呑み、流れに足を漬けて休憩した。

行く手に半島が見えて、半島に続く尾根を乗り越えて大きく下って行くと、広い平坦な低地が現われた。遠くまで水田が開かれ、山沿いにはサゴヤシ林が見られ、さらにチョウジの植栽林もある。峠を越える部分には多雨林も残っていて、今までとは随分と趣の違った土地条件になってきた。道路沿いには住居が並び、奥にも家々が続いているのが見える。この最初の集落を過ぎるころからココヤシの植栽が徐々に増え、斜面を含めてまるで全体を包み込むようにココヤシの一大植栽地へと移り変わった。ココヤシはそれぞれに巨大で、40ｍの高さに達している。これほど立派で壮大なココヤシ林を今までに見た覚えはない。

16時50分、広い敷地のある大きな家の前に車は止まった（標高43ｍ）。ここがティヌカリ（Tinukari）で、ここが村長の家であった。時ならぬ客を見に人々が集まってきたが、村長も階上から降りてきて私たちを出迎えてくれた。学生たちが何やら村長と話をして、休む間もなく村の車を借りて今来た道を戻り、先ほどの水田の広がった村（Wawo）へ向かった。村長は「今日中に許可を取れば明日から登山を開始できるから、郡長の所へ今すぐに行きなさい」とアドバイスをくれたらしい。残念ながら郡長は不在で、戻るまでの間、海辺に出て暇をつぶすことになった。

遠浅の穏やかな海が広がっている。潮の満ちた時間帯で、木製の１００ｍもある桟橋の先に船着場がある。ちょうど小さな船が到着したところで、３名の乗客が降りてきた。聞けばバリから戻って来たという。思いがけない感じを持ったが、島々をつなぐ海上交通は大昔から続いていて、この不便そうな土地も海を通して物資や人々が往来し、不自由ない生活がそれなりに営まれているということなのだろう。間もなく日が沈む時間になり、ボネ湾に美しい光を放って沈み行く太陽を撮影することができた。

郡長の家で彼の帰宅を待っていると、心配そうに我が村長もやって来た。忙しそうに振舞う郡長であったが、結局、郡長レベルでは許可は出せないので、県令の所へ行って許可をもらうように、という話であった。なんだか面倒な話になったが、私にはかつて同様の状況に出くわした経験がある。それは中部スラウェシでの話であったが、山へ向かおうとして村人（実は非番の警官だった）に押しとどめられ、なぜか挙動不審者として疑われ、宿で軟禁状態に置か

れた。その後、郡長の邸宅（オランダ時代の建物）に連れて行かれ話をしたが、結局、パルの移民局へ行って許可書をもらって改めて来い、ということになり、登山を諦めたことがあった。ジャワであれば地元警察や村長に挨拶をする程度の問題なのだが、スラウェシでは、いまだに外国人が山に入ること自体が「許可」を必要とするようである。帰りがけに登山計画の説明をしに郡の警察署に寄ったが、ほとんど関心がない風であった。

Abdul Rahman 村長の家では、広い2階の部屋全体を使わせてくれた。村長の家は、いうなれば村の集会所を兼ねたもので、人々の出入りも多く、公共の建物なのかもしれない。前庭にはランガール（礼拝所）もある。私たちのような旅行者に対しては、宿泊所を提供し3度の食事も振る舞ってくれる。もちろん料金を請求するようなことはない。村長の話では、オランダ人、イギリス人、アメリカ人が泊まったことがあり、日本人も3度来たことがあるそうだ。その日本人は資源調査の人だったという。

山頂域は神聖な神の住まい

11月22日　巨大なココヤシ林の天蓋の下、緑に囲まれた美しい村の朝である。一番にニワトリ、ときどきトッケー（大型のヤモリ）と犬の声、夜明け前からアザーンも響く。蚊も多くうるさいが、上空にはツバメがたくさん舞っている。5時30分の気温は25・6度で少し涼しい気がする。庭にはコショウ、グアバ、カカオ、ウビカユ、パパイアが植えられ、高さ10mを超える巨大なバナナが数本ある。今日は日曜日。役所は休みで、日程を進めることができない

食事の後、村長から話を聞く。まずMekonggaという山名については、山上の異神伝説からきている神の名だと言い、この村がある地域の民族名および言語名にもなっているようだ。ちなみに、メコンガ語とトラキ語の違いは、「単語の違いが認められるほどの差」であると、*A critical survey of studies on the languages of Sulawesi*（KITLV 1991）にはある。ティヌカリ村の人口は約1000人で、トラキ人のほかに対岸の南西半島の民族ブギス人も住む。主産業はコプラの生産で、ほかにカカオやチョウジ、コショウ、そしてコメが作られている。道路を少し先まで行くと水量のある川があり、長さ80mほどの鉄製の頑丈な橋が架かっていて、郡境になっている。この川はランテアギンという名で、郡名にもなっている。この川を遡った先に目指すメコンガ山がある。ランテアギン川は奥が深く、暴れ川

で、洪水で橋が流されたことが何度もあるそうだ。地形的に見れば、ティヌカリ村とその先のワウォ村も、ランテアギンの氾濫原の上に造られていることが分かる。

村長の家の近所の人たち、いつも手伝いに来ているオバサンたちが連れ立って海水浴に行くというので、私たちも一緒に連れて行ってもらうことにした。Alik が村のトラックを運転して荷台にオバサンたちを満載し、9時50分に出発。なんと行く先は、昨日休憩した砂浜、スンガイ・タンブラシだった。ムスリムの女性がこれほどに喜び勇んで海水浴を楽しむとは、思いもよらぬことだった。子どもたちもはしゃぎ回り、浜の木陰では男たちがタカベに似た魚を大量に焼き、楽しい昼食の準備をする。遠浅の海で波も穏やか、沖には裾礁があるのか、そこから海の色がマリンブルーに変わる。やがて村の別のグループも次々にやって来て、浜は一時大にぎわいになった。

午後は村長のバイクに乗せてもらい村の奥、ランテアギンの谷の入口近くにある集落を案内してもらった。新しい村長の家もこの地区にある。ココヤシ林の奥にはカカオの広い植栽地が開かれていて、谷には小さい水田もあり、ここではバリ牛が農耕用に使われていた。村長は、この土地で作れない作物は何もない、と自慢げである。村人はしばしば山には入るが、神の住まいである山頂域には決して登らないのだと言う。山にはアノア（*Bubalus quarlesi* 小型のバッファロー、スラウェシ固有種、IUCN 絶滅危惧種）がたくさんいて、地元の人々にとって特別な存在になっているらしい。ひと月前にも村長自身が狩に加わり、アノアを獲ったそうだ。その狩は槍を使い、銃は持って行かないという。伝統的な様式や掟があるのかもしれない。アノアは山中で突然出くわすと、角で突かれる危険があるという。

気温33度の午後はさすがに暑さでぐったりする。誰もが昼寝の時間で、犬もだらしなく寝ている。夕方が近くなって屋根のある高床の東屋で涼んでいると、野菜売り、バイクにあふれる商品を載せた雑貨屋、女性用の服を売る商人、魚の行商が庭先に次々とやって来た。商店のないこの村では、家々を回りながらの商売をやっている。

ようやく環境にも慣れてきたところで、学生と山の話を始めた。メコンガ山に登った経験があるワヒュー君は南西スラウェシのマロスの出身、学部の5年生。彼の同級の、いかつい顔のマダン君はブトン出身。バウバウにも大学はあるが、国立大学で学ぶためクンダリに来たという。昨日加わってきた、痩せ型で髪の長いのはラフマン君で、彼もブギス人。初々しい1年生はチャクラ君で、上級生には頭

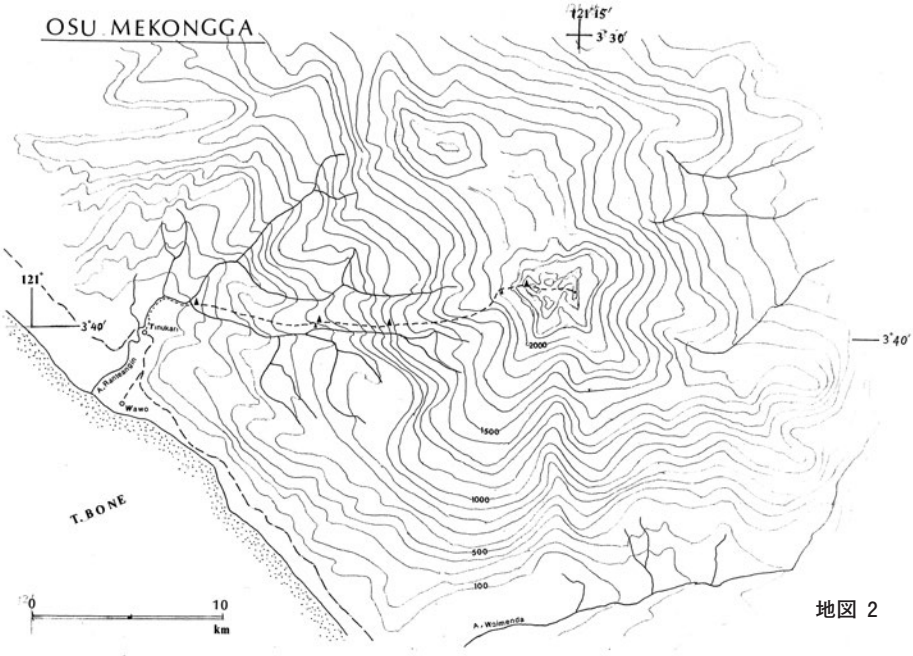
が上がらない様子、彼もブギス人である。ワヒューとマダンはリンジャニ山に登ったそうで、ブトンからスンバワ経由でロンボックへ渡れるので、便利だと言う。日常的にはクンダリ近郊の小山に登るらしい。メコンガ山に次いで登山価値のある山は、カバエナ島の１５００ｍの山で、岩登りもできるという。

経験者のワヒュー君が説明するメコンガ山の行程は、まずランテアギン川を徒渉を繰り返して遡る。腰以上の深さがある箇所もあるらしい。尾根に上がる所が急であるが、その先は稜線の下側をトラバースする形で登って行き、非常に長くて3日もかかる。尾根に出てからは岩場もあり、頂上へはピークをいくつも越えなければならないそうである。地図だけでは想像できないが、珍しい地形や植物、動物たちにも出会えそうだ。

ランテアギン川の徒渉から登山開始

11月23日　4時50分、26度C、快晴。学生だけであれば村長の許可を得ればよいのだが、私のために30㎞先の北コラカ県の県都ラススア（Lasusua）へ行かねばならないことになった。ランテアギン川を渡ると再び山が海岸に迫り、道路は山側へ大きな迂回を余儀なくされる。急な坂道はまだ拡張工事の最中で、木々が大々的に伐採されて赤土が剥き出しの、粗い工事が行なわれていた。南東スラウェシ州としては、現在のところ唯一の州外につながる道路であり、スラウェシ島を巡る大幹線道路トランス・スラウェシの一部をなしている以上、拡幅工事は急がねばならないのかもしれない。海の眺めを一度も見ることなく山の中の道をうねうねと通り、ようやく下りになると正面に整然とした町並みが見えてきた。古い地図には名前も載っていないので、新しく造られた町のようである。並木と花壇で飾られた幅広の道路の先には、官庁らしい建物が並んでいた。

やや緊張して建物に入り来意を告げると、椅子に腰掛けて待つように言われた。制服を着た、小間使いの役人たちが出たり入ったりしている。どうやら県令はここにはいないらしく、しばらくたって、道路を挟んだ向かいにある木々に囲まれた公園のような場所に案内された。ここは確かに公園になっていて、遊具が並び、小動物がケージに飼われていた。なんとも思いがけない所で珍しいサル（♂）を間近に見ることができた。スラウェシ島には独特のマカク属がいて、その複雑な地史を反映して地域によって種類が違い、5種に分れている。北半島の山では黒い *Macaca nigra*



地図 2

を見たし、中部スラウェシでは *M. tonkeana* を見ている。南東半島に分布するのは *M. ochreata* である。この近くの山から出て来たのを捕えたというから、目の前にいるのは *ochreata* に違いない。全体が茶色っぽい毛並みだが、尻毛が薄い茶色で、背中は焦げ茶色、頭頂部に黒毛がある。ほかにも珍しいハトが飼われていた。目の周りに赤いリングがあり、長い嘴（くちばし）を持つ、美しい緑色のミカドバト *Dicula forsteni* である。これも南部スラウェシの特産種だ。

ここでも順番待ちをして、やっと呼び出しがあった。なんと県令は公園のカフェテラスにいて、ここで書類に目を通し、決済のサインをしていた。蒸し暑い役所の中よりも、風通しの良いこの場所の方がよほど気が利いている。恰幅が良い県令は私たちに気を遣ってくれて、好きな飲み物や食べ物をなんでも注文しなさい、と勧める。メコンガ登山の計画を一応聞いただけのことで、後はこれといった話は何もない。許可といっても書類が発行されるわけではなく、はっきりした規定があるわけでもなく、要するに外国人も含めた外部の人間の管轄域への出入りを把握する必要があるだけのようである。そこが公園などの場合は、外国人であってもノートに名と住所、目的などをその場で記入すれば済むのだが、スラウェシの県、郡の場合は、依然と

して「登録」ではなくて「許可」という手続きになるらしいのだ。

役所という所はなかなかの階級社会で、取り巻き連中はいちいち県令の動きに対応して立ったり座ったりしている。興味深い話もあった。海岸近くに日本人のサカモトという人の墓があり、彼はその日本人を尊敬しているというのだ。後日談になるが、帰路にハサヌディーン大学に寄り、山のOB連中と話をして彼のことに及ぶと、「その県令なら同級生で良く知っている。あらかじめ分かっていたなら、連絡を付けておいたのに！」と言われた。

12時40分に村長宅に戻り、昼食を振る舞われた後パッキングをし、14時10分に山へ向けてようやく出発となった。村長は私をバイクに乗せて、昨日の村外れまで送ってくれた。奥の村の先までココヤシ林が続き、道はここで終わって河原へ降りる。水は透き通り、流れの幅は40mほど、深さは膝上くらいなので、問題なく対岸へ渡る。気温は32・8度C、水温28・2度C。ワヒューが前回来たときは、腰まで水があって難渋したようだ。

上流を見ると、丸太を流しながら数人の村人が泳ぎ下ってくる。上流の方向からは、確かに伐採のチェーンソーの音が響いてくる。この地では、伐採された木材はこのような方法で海岸まで運ばれるらしい。伐採跡は尾根近くまで広がっているが、大規模なものではなく、上流側には広がっていない。流れは左に右に移り、そのたびに左岸へ右岸へと徒渉を繰り返しながらを進むが、流速も遅く、深さも太もも程度で気持ち良く遡れる。河原の岩は白い結晶質のものが多く、平たく磨かれている。周囲の尾根はいつの間にか森林に覆われだし、セミのにぎやかな声が響いてくる。遠くの岩の上に、白い大きなショウビン属のカワセミ（*Halcyon melanorhynca*）が止まって水面を見ている。

左岸から低い滝になって支流が入って来ると、本流は大きく90度も曲がり込み、大きな深い淵を造っている。山から降りて来たら必ずこの淵でひと泳ぎしよう、と思いつつその淵の縁を渡って行く。丸石の多い浅い流れの幅は、中洲を含めて50m以上ある。ここがどうやら最後の徒渉点であるらしく、対岸の砂利の浜に上がってサンダルを脱ぎ、登山靴に履き替えた。メコンガ山に続く尾根はここから始まっている。目の前の土の出た急な登りにかかるが、はっきりした道が付いており、50mばかり登ったすぐ上に、古びて苔むした小屋が建っていた。

17時15分、今日の行程はここまで。標高186m、気温28・1度C。この小屋の脇の畑の跡に2張のテントを張っ



ランテアギン川を遡る



回復中の低地多雨林

たが、まだ蒸し暑くてとても中には入れない。周囲に少しカカオが植えられているが、人影はない。なぜか親子の犬がいて付きまとってくる。間もなく夕方ゼミがにぎやかに鳴き出した。ヤイロチョウのような、良く通る鳥の声も奥の方から聞こえてくる。やがて薄暗くなると、空には十三日の月が出た。キャンプの上を2、3羽のヨタカが飛び交い、手の届きそうな高さまで降りてくる。

豊かな自然の中に残る人間の営為

11月24日　5時起床、夜通し虫の声がにぎやかであった。虫の声と交代に鳥たちもすでに鳴き出し、夕方ゼミも近くで鳴いている。なかなか生き物が多く、自然がすぐ近くにあるように感じる。気温は22・6度C、風はなく、朝露がたっぷり降りてテントはびしょ濡れだ。黒い大きなオウチュウが3羽、近くの木の上で騒いでいる。ブトン人のマダン君は敬虔なムスリムであるらしく、テントから出てくると布を広げて朝の祈りを行なっている。Alik のガソリン・コンロが早くも壊れたため、たった1台のブタン・コンロで6人分の調理をする事態となり、時間が掛かる。ご飯は今日から薪で炊くことになった。7時50分に出発。

しばらくは農園の跡地のような所を通り、放棄された畑に草が延び放題の中を掻き分け、強い日差しの中を汗をかきながらしばらく登り続けて小尾根を越える。ここからなぜか林道のような幅のある道を進む。道脇には50 mはあろうかと思われる、驚くほど巨大なイチジクが立っていた。周囲には大木も多く見られ、その樹冠部では、イチジクを食べに来たカラフルなアカコブサイチョウがひとしきり騒いで、大きな羽音を立てて飛び去って行く。珍しいアカコブサイチョウも、ここでは容易に見られそうだ。やがて、まるで農家の庭先のようなこぎれいに整備された段々畑が出てきて、見上げる尾根の中腹には家が見える。この先に村でもあるのかと思えるくらいだが、家は一軒のみで、カカオの広い植栽地のほかは野菜が少々植えられているだけだ。

小屋に着くと、そこには夫婦と犬とニワトリが住んでいて、新しく家も建てており、2人の大工が屋根に登って作業をしていた。しばらく休憩をし、話を聞くことにした。ラダン（畑や農園）と家を作ったのは２０００年で、すでに15年経っているそうである。主人はトラジャの出身で、開拓して土地を開いたそうだが、その前にこの辺りには森林伐採用の道路が開かれ、その道を使ってこの土地にやっ

て来たようだ。彼らのほかに今はこの土地で耕作をしている者はいないそうだ。とはいえ、電気が通じており、パラボラ・アンテナがあり、部屋の奥ではテレビが点いていた。BAKOSURTANAL の地形図で見た限りでは周囲に人工物は何もなかったが、その後に開発が進んでいたらしい。

南東半島のこの地域に新たな経済的進展が望めない状況の中で、農産物企業 HBI が１９８０年からランテアギンの谷の森林伐採の許可を取得して、メコンガ山に向かって林道を切り開き、１９９８年までに大量の丸太を運び出した。この結果、山地崩壊が各所で生じて、大雨が降り続くと下流の村々に洪水が及んだ。ティヌカリ村の橋が度々流されたという話は、ここにつながる。HBI は材木運搬のために海岸沿いの道路も整備したから、村々はその恩恵を受けているわけだが、度重なる洪水被害に対して、伐採の中止を求めたデモが行なわれたらしい。１９９８年に伐採は中止となり、翌年には HBI は撤収したということである。

以上の情報は、KORPALA UNHAS が２００４年にメコンガ山頂に登ったときの報告書に載っていたものだが、低開発地における開発を巡る葛藤を象徴するような話である。一方、登山の側から見た場合、この搬出道路はメコンガ山の登山を可能にしたと言えそうだ。１９９５年に WANADRI がやって来て道を開いたとは MAHACALA からの情報であったが、道路の終点からメコンガ山頂まで、登山者としての初トレースをしたということだろう。

小屋からしばらく暑い日向のラダン跡を進むと森林の中に入った。林床は平坦で、樹木はかなり密生していて層状構造もできているが、乾燥した森の印象である。ここに道路が開かれていたとは、言われなければ分からない、そのくらいに回復している。特に谷の側は伐採されていないため大木が多く、深い森が谷底まで続いている。斜めに倒れた木の幹を伝って、親子連れのマカク（*M. ochreata*）が通過した。臀部が白っぽくなっているのが見える。この辺りではアカコブサイチョウも頻繁に目にする。ときどき現われるラダンの跡は丈の高い草が密生して、掻き分けて進まねばならない。しかも天蓋がないので、強烈な日差しの中を歩かなければならず、暑さに消耗する。

11時30分、昼食のための水を汲みに谷を降りる。谷からは涼しい風も吹き上げてくる。ワヒューがここを歩いた２０１１年は雨に濡れ、森林も灌木林もヒルがたくさんいたそうだが、今は乾いていてヒルがいないのは幸いだ。標高はようやく４００ｍを超えたあたりで、道は小さな谷を何度も渡るようになるが、まだ良い森林が続いた。大木には



上部の道路跡に広がるシダの薮



石灰岩の崖を登る



山頂付近の雲霧林



山頂部の石灰岩の登り

何種もの鳥が集まり、特にインコのおしゃべりがにぎやかである。尾根を回って迂回した先に冷たい水の流れる小谷があり、小型のトンボが飛び、水たまりにはミズスマシやアメンボがいる、ちょっとしたオアシスもあった。15時30分、すぐ下に水場があるので、少し早いが、道路の痕跡の路肩の小広くなった所にテントを張る。標高７４５ｍ。

11月25日　5時、気温21・2度C。鳥がよく鳴き、周囲を見回しても自然はそのまま残っているように思える。8時55分に出発。間もなく広く開けた道路の跡に出た。空が広いが、日差しは強く日陰が欲しい。前回ワヒューは、開けた道に出ると傘をさして歩いたという。森が回復している部分は下生えも少なく歩きやすい一方で、歩きにくくて難渋するのは草地と森林の境目で、光が多く灌木の藪が密生する。切り開きはどこにもないので、パラン（山刀）を振るって切り開いて進むが、必ずトゲのある樹種やトウ（ロータン）が混ざっている。1時間もかけて藪を抜け、小広い草丈の低い道路跡に抜け出たときは、誰もが荷を投げ出して休んだ。傾斜は全般に緩やかなままだが標高は９００ｍとなり、陽性のシダの密生を潜ったり、踏み越えたりする。トゲの付いたパンダナスの大木の密生地があるかと思うと、幹の赤茶色いピガフェッタヤシが門のように立ち塞がっている。

突然開けた広い草原の中央に、何やら人工物が置かれていた。高さが1・5ｍほどのスラウェシの地図を象ったモニュメントで、２０１３年に軍隊がこの地でエクスペディションを主催したらしい。この鉄製のモニュメントをわざわざヘリコプターを使って持ち上げたのだろうか。今日の行程は昨日とは違って水場がない。尾根を巡って谷に入っても水が流れていなかった。そして、大きく崩壊して道の痕跡がなくなった箇所があり、迂回ルートを手分けして探しながら進んだ。今までになく道路跡がはっきりした箇所に出る。浅い谷があり水音もするので、この乾いた道の上にテントを張ることにした。17時40分、標高１２２７ｍ。初めて木々の間からメコンガ山方面が見えた。今日もひとしきり夕方ゼミが鳴いて夜を迎えた。夕食後は木々を集めて焚き火もできた。21時過ぎに、鳥のような声でタルシウスが鳴いた。

苔むす雲霧林を抜け、岩壁を巡らす山頂へ

11月26日　5時、気温16・6度C、本日も快晴である。

6時30分に山の間から日が昇る。水をたっぷりボトルに汲んで8時15分出発。尾根が大きくなり、谷は奥深くなってきた。昨日から目に付きだしたが、黒いアノアの糞がたくさん落ちており、登るほどに頻繁に見かけるようになった。この高さまで来ると、さすがにサイチョウはいなくなった。稜線をなす尾根もだいぶ近付いてきているが、まだまだトラバース道は続き、トゲの灌木を切り開く行程もまだ続いている。やがて道の中央部に露岩が現われだし、その周囲に実を付けた、乾いた灌木が生えている。森林の構成種の中にローレルの仲間が見られ、山地林の様相が濃くなってきた。南半球系の針葉樹である *Dacrydium sp.*（エダハマキ）の葉も落ちていた。

道路跡がはっきりして森林は遠のき、明るく開けて様相がすっかり変わってきた。砂利交じりの坂をひと上りすると、広い稜線に出た。見下ろす谷からは風が吹き上げて涼しい。谷は深く、対岸のゆったりした山の斜面は深い森林がびっしりと覆っている。13時10分、標高は１８９６ｍである。いつしか雲が広がりだして、涼しい風に乗って霧も谷から上がって来た。道路はここが終点ではなく、尾根を越えてまだ少し続いている。岩の縁面の出た道路をしばらくたどり、戻るように尾根に登り返す踏み跡に入った。ここからが登山道ということになるようだ。地形図を見ると、尾根はここから少し細くなるが、傾斜はまだ緩やかである。

地衣類が地面を覆う特異な箇所を過ぎると、二次林らしい細い樹木ばかりの森林に入った。すっかり霧に包まれて湿ってきた。平坦なキャンプサイトに出て、ここで昼食とする。この場所は凹地になっていて、かなり広い池の跡がある。干上がった池の底には、水没してコケに覆われた丸太が無数に横たわり、異様な光景である。池の周囲には湿性の植物が見られるが、どれも乾き上がっている。この池跡の上からは自然林に入るが、樹高も低くなり、日本の森林の山を登るような感じがする。ここでマテバシイ属のドングリを拾う。ときどき露岩が現れるが、緩やかな登りが続いて主稜線上に登り着くと、にぎやかに鳴き交わすインコの群れがいた。天気は持つと思われたが、遠くで雷鳴がして、ついに雨が降りだした。雨具を着けて、薄暗くなった森の中を黙々と進む。

地形図では、２２００ｍを超え、主尾根の方向が変わるあたりから大きな岩塊が現われる。これまでの緩い傾斜から一転して岩の壁が立ちはだかり、大きな岩が積み重なる状態に変わった。ここまで山体を形造っていた雲母質の結

晶片岩が、ここから一気に石灰岩へと置き替わり、その上を覆う形で頂上部分の広い台地を形成していることが分かる。

植生も変化し、コケを付けた、細くひねくれた針葉樹（*Podocarpus spp.*）や、小さい葉を付けた灌木が目立つようになった。モスフォレスト（雲霧林）の林相である。木の根や岩角を伝い、岩塊をいくつ越えても同様の腕力を必要とする登りが続く。細い岩尾根を乗り越えると一気に落ち込んで、針葉樹の枝を頼りにそろそろと岩場を下って行く。土の部分は滑り、木々は湿ったコケをまとって冷たい。苔むした岩の重なる下側には、大きな空洞があり、全体が凹地になっている。石灰岩地独特のドリーネ地形のようである。ドリーネの縁の岩塊を回り込んで対岸の岩に取り付く。急な50ｍもある岩場を登り返さねばならない。なかなか苦労の多いルートである。こんな所にもアノアの糞はたくさん落ちている。

雨は止んできたが、水を吸ったコケに体を寄せるとびしょ濡れになる。あたりはすっかり暗くなってしまった。岩が小さくまばらになり、苔むした樹林の中になんとか2張テントが張れそうな空間を見付けて荷を降ろす。18時20分、標高２４０８ｍ。22時には快晴に変わり、月が冴える。気温12・1度C。周囲からカエルの声がにぎやかに聞こえている。

11月27日　5時15分に鳥が鳴き始める。5時30分、気温11・6度C、快晴、周囲は深いコケの森である。凹地、岩塊、岩壁が組み合わさった地形で、植生も条件に合わせてひねくれたり、苔むしたりの変化をする。この先も同様の条件が続いており、一つ一つを越えて行かねばその先は見通せない。これが地形図上にあった閉曲線の小山ということになるが、一つ一つが大きな岩塊の積み重ねでできていて、平坦どころではなかった。

メコンガ山頂を目指して9時に出発。細い苔むした樹林を登って土の出た部分を下ると、尾根状の鞍部に出た。左側は急だが、右側は緩い谷になっている。ここが唯一の水場らしいが、１００ｍばかり下ってようやく小さな水たまりがあった。学生たちはさらに下ってボトルに水を満たして上がってきた。水たまりは小さな滝の下にできていて、水は少し黄色がかっており、飲むとコケの味がした。滝はスレート状の岩で、風化してボロボロであった。林床には小型のドングリがたくさん落ちているが、どれも食痕が付いている。

10時40分、岩の出た小尾根に着いた。標高は２４７８ｍ。ここまでもルート選択が難しく、下手にルートを外すと戻るのに相当なエネルギーが必要だ。岩は滑り、所々に大穴も開いている。周囲を深い樹林に囲まれた凹地に降り立つと急に静寂になり、何か特別な場所に来たような雰囲気に包まれる。そこにはオレンジ色のランが咲き、カエルたちの声が満ちている。岩尾根の上からは、木々を透かして大きな岩壁を見せる台形のピークが見えた。さらにその先にも、似たような森林が覆い所々岩の突き出した山がある。メコンガ山頂はどこにあるのか見通せない。

ゆっくりと霧が湧きだし始めたが、天気はまだ持ちそうだ。急な岩塊の続く斜面を登り切ると、乾いた土の出た緩やかな小平地に出た。すぐ上は覆いかぶさるような急な岩壁で、どこを登ればよいのか見当がつかない。ルートはこの岩壁を右へしばらくトラバースして、樹木と岩塊の折り重なった部分を真上に登る。すぐ上に明るい空が見えるが、再び右へ右へと登っていくと鋭く尖った岩場に出て、上を見ると空だけが見える。浸食されてナイフのように割れて尖った岩を強引に掴み上がると、頂上の一角に出た。12時30分、メコンガ山山頂域の最高点に立つことができた。ときどき霧ときどき晴れで、展望は悪くない。頂上の北側直下は石灰岩が針のように尖った割合に広い石畳、南側は垂直の岩壁である。見渡せる限りは森林また森林の緩やかな山が続き、はるか先にたわんだ広い尾根も見える。ここから先に踏み跡はなく、この森に入り込むのは困難のように思えるが、この特殊な環境に適応した、未知の生物たちが見つかる可能性がある。

ＧＰＳの位置は１２１度14分12秒Ｅ／03度39分51秒Ｓ、標高は２６５６ｍを示した。１／５万地形図では２６００ｍの表示が最高地点を示しているので、メコンガ山の標高は２６５０ｍ前後であろう。頂上の岩の間には石の標識が据えられ、インドネシアの国旗を掲げる木の棒が残されていた。MAHACALA のオレンジ色の旗を広げて、代わる代わる記念撮影をする。

12時55分に頂上を後にする。岩山を乗り越え、水場の尾根で大休止。16時にキャンプサイトを通過し、ドリーネを越えて、最後の石灰岩の岩場を下り切るころには薄暗くなった。なかなかのアルバイトである。森林に入るとすっかり暗くなり、ライトを点けて下る。池の畔までたどり着けず、傾斜した小平地でテントを張った。19時20分、２１６０ｍ。夜中に起きると天気は快晴になっており、月が強く輝いていた。１時05分、14・9度Ｃ。



メコンガ山頂に立つ

11月28日　光の差す朝のこの森の景観はすばらしい。リスが鳴き、インコの群れが鳴く。9時20分に出発。道路の終点を経て、水場のある2日目のキャンプサイトまで下る。

11月29日　道路跡を下り切り、大きな淵で水浴を楽しんで、ティヌカリに無事下山した。

図書紹介

宮城公博 著
『外道クライマー』



集英社インターナショナル
2015年3月
四六判 277ページ
1600円+税

5年前の夏、頭を丸めて那智大社を訪れた若者がいた。不謹慎にもご神体である那智の滝を登攀して逮捕され、その謝罪のためである。本書はこんな不埒な話から始まる。なぜ「那智の滝を登ろうと思ったのか。答えはシンプルだ。登り尽くされた現代に、未だ日本一の滝が未登のまま残っている。そんなものがある以上、沢ヤなら登りたいと思わないほうがおかしいのだ」

山頂に立つために沢をルートとし、未知の渓谷をたどることが日本の山登りの一つの分野であった。しかし今や、彼らは全く違う。草鞋で渓流を遡行し滑滝をたどってというような牧歌的な話では全くない。どうやら21世紀になったころから、とんでもない沢ヤ・山ヤが出現したようだ。本書に登場するのは、時代に先んじたアヴァンギャルドなクライマーだ。

それでは著者の宮城さんの登山、沢登りとはどんなものか。「これまで誰も考えたことのないような」「ありえないことを発想し、それを鍛え上げた知識・経験・判断・肉体・精神・魂で、クールに『実行』するのがナウいクライマーであり沢ヤなのだ」と宣言する。確かに、沢にはほかの登山にはない探検性という圧倒的な魅力がある。初遡行は地理的な未知、地図の空白部を行くことになる。そのなかでも特に困難な地形、「ゴルジュ」に魅かれるという。タイのジャングルにおける長期間の探検的遡行、台湾のチャーカンシーのゴルジュ、称名廊下の遡行、それに冬期称名滝・ハンノキ滝登攀の記録とその哲学を、彼自身の言葉で語ってもらおう。

タイの46日間に及ぶジャングル初遡行は本書の半分を費やして書かれている。この計画は、日本の土着的登山の発想を密林の渓谷に持ち込むものだったから、焚火とプリミティブな旅という認識しか抱いていなかった。ところが、「白濁した瀑流に飲まれ、身体はきりもみ状態になり、溺死への恐怖感で嗚咽が漏れた」と、自然を侮っていたが故に、とんでもない目に遭うし、空腹を満たすための闘いもある。数ページにわたる大蛇の捕獲描写はハラハラドキドキ、その大蛇を焼いて喰う、炒めて

喰う。「苦しいことをするのが登山なんだ」。かくして相棒にムカつきながら46日、150㎞以上の道のりが終わる。ひどく潔癖な精神の持ち主だが、それが苦境に陥ると、たちまち細かいこだわりなどは棄ててしまう、いい加減なご都合主義が楽しい読み物になっている。

次に、「魂の震えるビッグな壁が残されている」として、台湾はチャーカンシーのゴルジュに向かう。そこは「激流と1000メートルの壁の間に挟まれ、あまりに完璧に、出来すぎるほど見事に、無駄のないゴルジュであった」。しかし、「いいだろう、やってやろうじゃないか、俺たち沢ヤの力を舐めるなよ！」とばかり、挑む。岩登りや沢登りの経験者なら、そのクライミング描写に手に汗を握り昂奮するはずだ。

それでは称名廊下と厳冬期の称名滝はどうだろうか。「たとえ三回に一回は死ぬという確率であったとしても、やりたいと思えるほどの魅力があり、理屈では説明できない。そして私には、自然の猛威を剥き出しにした本当の称名滝の内院に入り込みたいという欲望があった。そこに、自分だけの何かを残したいのだ。登山とは、狂気を孕んだ表現活動なのだ。」新しい行為は破壊的で反発を招くものだが、読者は彼の実践を正当に評価しなければならない。

文章はテンポよく畳みかけて小気味よい。時に奇をてらって猥雑だが、これは青年の血気、過激、大胆、潔癖、はにかみ、そして中途半端への憎悪によるものだ。つまりは著者がまぎれもない青年であるからに違いなく、そんな自分たちの登山の哲学を、「人類のパイオニアワークと現代の冒険」で次のように論述する。

「衝動と自制、相克するそれらをいかに高め、研ぎ澄ませ続けるかが、アルピニズム・冒険の基本中の基本なのだ」が、まず、現代の冒険への違和感から始める。「西洋的合理主義によって発展したアルピニズムが探検性を失い、スポーツ的に変化していくなか」、「現代においてマスコミも大衆も、登山やクライミングをしている人でさえ、冒険の意味を正しく認識していない」。現代では冒険は、「個人の限界を追求する行為」、要するに冒険するその個人にとって冒険的であれば冒険であると認識されている。そこに何か違和感を覚えるのだ。それは彼が「人類にとっての」ということに拘るからである。人類にとって初めて行なわれた挑戦的行為と、個人にとっての初めての挑戦的な行為とを、同じ「冒険」というカテゴリーで論じるから誤解が生まれる。現代の冒険と言われるものは「冒険的ではあっても冒険ではなく、偉大な先人たちの只の後追いにすぎない」今や冒険は抽象化されるか、大衆化されてお金で買える贅沢になってしまった。そして本多勝一の地理的探検終焉論にも言及する。バリエーション登山も、初挑戦であれば立派な冒険になり得る。山を目的として、その他一切を捨てて生きている沢ヤが

魂を込めて挑んだ未踏壁やゴルジュは冒険だ。「何パーセントかの確率で起こり得る死、それを覚悟して挑んだ登攀には、たとえ死線にどれだけ近づいたとしてもほどよい高揚感がある。想像を上回る自然の驚異によって生命が危険にさらされ、結果死んだとしても、事前に覚悟があればその責任を自分のものとすることができる。」「私たちがやろうとしているのは、自殺ではない。冒険だ。情熱に基づいた純粋な行動は、仮に死が伴ったとしても否定されるべきではない」。解説の角幡唯介さんも著者の行動と思想を的確に分析して、彼の考えを支持する。「登山や冒険とは本来、危険で自立的な行為」であり、「反社会的であることから免れることはできない」と。

痛快ではあるが、著者たちの行動を全面的に支持するにはためらいがある。それは、著者の「セクシー登山部」で公開する顰蹙ものの写真や少し下品な発言のためである。だからといって人は「節度ある行動をすることで節度を身につけ、勇敢な行動をすることで勇敢になる」などと言っても著者にはムダだろう。礼節を重んじるよう慫慂（しょうよう）するわけではないが、先人の次の言葉を贈ろう。「人間は品行が多少悪くてもいいが、品性がよくないといけない」。会員のなかには、彼を不届きだと思う人がいるかもしれない。それはJACが100年を経て、かつて前衛であったことを今、保守しようとしているからだ。だが、時代は先へ先へといく。登山と冒険が、先鋭であり前衛であり前を乗り越えていくものであれば、どうしても誰かが実践していかなければならない行為なのだ。さて、このような若者を当会が受け入れることができるかどうか。だからこそ、本書を大勢の会員に読んでもらいたい。

登場人物は、著者ほかピオレ・ドール賞受賞者からチーム野良犬まで多彩な精鋭揃い。「世界中に眠る魂の震える大ゴルジュを夢見て…私は沢を、登り続ける」と希望を語って本書を終える。それでは、著者の行為は、角幡氏や服部文祥氏の探検・サバイバルとどう違うのか、その答えは、次著に待ちたい。

（絹川祥夫）

同志社大学山岳部・山岳会 編

『山その大いなる旅 Ⅱ』

（同志社大学山岳部創設90周年記念誌／DAC報告26号）



同志社大学山岳部・山岳会
2016年11月刊
243ページ

同志社大学山岳部は1925年に創設され、2006年にはその80周年記念誌が発行された。80周年記念誌ではアピ、サイパルなどの初登頂をはじめ、その創設から戦前戦後の輝かしい成果が670ページの大冊に収められている。なお80年記念誌は、『山岳』101年（2006年）の書評に宮下啓三氏が詳しく紹介しているので、ここでは触れない。

ここで紹介する90周年記念誌は、その80年に続くその後の10年間の活動を中心にまとめられたものである。と同時にDAC報告26号と副題にあるように、この間の山岳部の活動が簡単に報告されている。美しい写真の入った243ページの報告書である。ここで注目すべきはこの10年間に行なわれた3つの海外登山の報告である。すなわち2007年のクビ・カンリ峰（6721m）、2010年のチャンラ峰（6563m）、2015年のアイチェン峰（6055m）の3座のいずれも無事故初登頂の報告である。いずれも詳しい活動記録、装備・食糧などの報告、会計報告が記載されている。

同志社大学山岳部山岳会は1970年のダウラギリ主峰など特記すべき記録も多いが、特に数多くの初登頂の記録が注目される。しかもすべての海外登山が無事故で成功していることはすばらしい記録といえよう。しかも大学山岳部の部員の減少、弱体化が言われ、初登頂の対象となる山が少なくなっている現在、80周年の2005年からこの10年間に、3座の初登頂に成功していることは称賛に値する。

この3隊が目指した地域は、いずれも西ネパール・チベットの国境付近にあり、古くはスウェン・ヘディンや河口慧海などの足跡があるが、ほとんど人が入っていない。2002年の同志社大学チベット・ヤルツァンポ河源流学術登山隊や、2004年の日本山岳会関西支部西チベット学術登山隊の調査に基づいてかなり明らかになった地域である。このような長年の調査の成果と、DACの伝統である未知への探求心による3隊の成果がここに示されている。

2007年のクビ・カンリ峰は和田豊司隊長、千田敦司登攀隊長のほか学生7人の隊であるが、部員数減少のために弱体化した大学山岳部の再建のためにと、計画段階から関西の大学山岳部に声をかけて参加者を募った。その結果、甲南大、京都府立大からそれぞれ1人の参加を見た。このような企画は一大学だけでは難しい海外登山を、他大学の若者と共有し、関西の大学山岳部のレベルアップを図るという意味で、興味深い。

なおこの隊の報告は、3隊の中でも一番規模が大きいだけに、報告として紙面の割合も多い。登山隊成立に至る経過と詳しい登山報告のほか、学術調査として氷河測量調査や高所医学に対する研究、河口慧海の足跡調査の報告もある。さらにルンポカンリ（7095m）の西面の偵察の報告がある。

また2010年の隊、2015年の隊は、それぞれ4人、5

人のすべて現役の学生のみからなる小規模な隊である。しかも注目すべきは２０１０年のチャンラ峰の22歳の隊長はクビ・カンリ隊の最年少隊員であり、隊員の平均年齢21歳の初々しい隊であることである。また２０１５年のアイチェン隊の隊長は年齢23歳、平均年齢は22・６歳、最年少は19歳と、これまた現役の隊として実に若々しい隊である。このような現役の学生のみからなる隊を３、５年おきに出せる層の厚さに驚きを禁じ得ない。時代を重ねて経験と伝統を継承してきたことを含めて、ＤＡＣの指導には学ぶべきことが多い。22、３歳の若者の情熱をくみ取って、その実現に力を貸すＯＢの存在なくして為しえないことである。

一つの大学の山岳部が海外登山を計画実施するには、山岳部が部員数、経験などを含めて活動的であること、対象となる魅力的な山があること、登山許可の獲得や資金、その他いろいろな相談に乗ってくれる大学、先輩などの支援体制があること、などが必要である。このどれが欠けても、海外登山は実現が難しい。特に初登頂を狙うのであればなおさら広い知識が必要である。ＤＡＣはこの難題を実にスマートに実現していて、羨ましい限りである。創部以来の伝統の重みを感じさせる。

本誌は山岳部のこの10年間の活動も紹介しているが、部員数が毎年10人を割らず、特に最近は常に20人前後で推移しているのは頼もしく、今後の活動が期待できる。今はこのような充実した山岳部であるが、一時は休部に追い込まれたように、部員数の減少に危機感があった。それを克服したのは関係者、特に先輩たちの努力や的確なアドバイがあってのことであろう。考えさせられる報告である。

なお同志社大学山岳部・山岳会は２００３年、シェルパ族から受けたそれまでの登山協力への感謝としてシェルパ族学校クムジュン・スクールの教室、学生寮を寄贈した。しかしそれが、２０１５年ネパール大地震で被害を受けたとの報に接し、校友会、先輩から浄財を募り、義援金として寄贈したことをさりげなく書いているが、このような山岳部・山岳会を通しての国際交流が盛んになることは嬉しいことである。

本書は単に海外遠征の報告書として見るだけでなく、最近の大学山岳部の活動に関して示唆に富む内容を含んでおり、今後さらにＤＡＣの未知への領域への挑戦を期待させられる本である。

（平井一正）

山本正嘉 著

『登山の運動生理学とトレーニング学』



東京新聞　２０１６年12月刊
７１４ページ
２７００円＋税

昨年12月中ごろ、山本先生から小包が届いた。開いてみるとヒマラヤ襞の峻峰をあしらった青いカバーの掛かった分厚い本が出てきた。２０００年に出版された『登山の運動生理学百科』を改訂されているという話をお聞きしていたので、すぐにそれと分かった。

私の職場は、長野県山岳総合センターといって、指定管理ではあるが長野県教育委員会傘下の施設で、安全で楽しい登山や野外活動の啓発を目的として講習会や安全登山のための情報発信などをやっている。

増え続ける長野県内での山岳遭難事故を防止するためには「自分の実力に合った山に登る」ことが最も大切と考えて、２０１４年に長野県山岳遭難防止対策協会と一緒に「信州山のグレーディング」を作り、２０１５年には自分の登山体力を知るために「登山体力セルフチェック in 美ヶ原」というイベントを行なった。「信州山のグレーディング」は、長野県内の主要登山ルートを対象に、横軸に技術的難易度、縦軸に体力度のマトリクス表でマッピングしたもので、経験の浅い登山者に登山ルートの難しさを直感的に知らせる目的で作った。技術的難易度はルートの地形的な特徴を言葉で定義し５段階に評価したが、体力度は山本先生の考案された「登山中の消費エネルギーを計算する式」の「コース定数」（そのコースの登り標高差・下り標高差・距離・コースタイムの４つから計算される数値）という指標を使わせていただき10段階で評価した。経験と勘でやるならガイドブックなどによく載っている３段階か４段階の評価が精一杯だと思うが、科学的根拠に基づいて数値で評価したので精密な評価が可能となった。これで山の難しさは数値化できたが、登山者自身の体力を対応させないと実力に合っているか判断できない。何か良い方法はないですか、と山本先生に相談して「マイペース登高能力テスト」を教えてもらった。登山者なら経験的に知っていると思うが、体力のある人は登るのが早い。体重の10％程度の荷物を背負って１時間で標高差５００m程度を登ることができれば「信州山のグレーディング」のどのルートも体力的な不安は少ないが、３００mも登れないようなら、一番易しいルートでも体力的なリスクが大きいというこ

とを評価するのが「マイペース登高能力テスト」である。これは六甲山で関西ガイド協会の三輪さんたちが10年以上も前からやっていたことを山本先生が科学的に裏付けをしたもので、私たちは２０１５年から長野県松本市郊外の美ヶ原でやり始めた。

前置きが長くなってしまったが、このようなご縁で山本先生から出版前の本が届き、その本に対して私が書評を書くことになった。

「学」という字が2つも入った長いタイトルと７００ページを超える分厚さに圧倒されそうだが、本を開いてみると少し安心する。大きめの文字で、写真や図・グラフがほとんどのページに入っていて読みやすい。前半は疲労というキーワードで、様々な疲労の原因と対策を通して人体の運動生理学的な仕組みを丁寧に解説する。体の仕組みが分かったところで次はトレーニングである。疲労の原因がいくつもあったように、体力といってもいろいろな体力がある。筋力、持久力、柔軟性、平衡性、敏捷性、そして防衛体力など。歳をとることによる体力変化、性別による差などいろいろな切り口からそれぞれの体力に対するトレーニング方法を解説する。次に海外での登山やトレッキングのことを想定した、高所登山への備えとしての高所順応の具体的な方法。最後は、これまでの常識的な登山や体力の範囲を超えてウルトラマラソンやトレイルランニングなどを通して人間の体力的な可能性と限界についても触れている。

自分の体力が落ちたと感じている人がこの本を読めば、自分の体で何が起きているか理解でき、これから先も登山を続けていくためのトレーニングのやり方が見つかる。登山中に体のトラブルに見舞われた経験のある人が読めば、トラブルの原因が分かり、再び起こさないためにはどうすればよいか分かる。これから山登りを始めようと思っている人が読めば、自分の体力レベルを知って山登りを楽しむ方法が分かる。４０００ｍを超える海外の登山やトレッキングに行ってみたいと思っている人が読めば、高所登山に必要な体力レベルや日本にいてもできる高所順応の方法が分かる。子どもを連れて行くことの多い人が読めば、体力が完成していない人が登山をするときの注意点が分かる。タイトルから「百科」という言葉はなくなったが、あらゆるタイプの登山に対して、体・体力・トレーニングのことを網羅してある。

登山ブームと言われる今、幅広い年代の、幅広い目的や指向を持った人たちが登山をしている。どのような目的であろうが、山に登るという行動をする限り体へは同じような負荷がかかる。その負荷に耐えられなければ楽しいはずの山登りは楽しくないものになってしまうばかりか、遭難事故を引き起こしてしまうかもしれない。だから安全に楽しく山登りをしたいと思えば、自分の体や体力について深く理解していなければならな

い。そのためにバイブルとなる本である。（杉田浩康）

小泉武栄 著
『「山の不思議」発見！ 謎解き登山のススメ』



ヤマケイ新書　2016年12月刊
221ページ
780円＋税

著者の小泉さんは、日本山岳会の「山の自然学講座」の講師をされていたのでご存じの方も多いだろう。自然地理学、特に地形学や植物的自然を中心に研究を重ねられてきた。著作も多くて、山の自然に関する解説、山の自然への啓蒙という内容で懇切丁寧に、具体的に例をたくさん示しながら易しく書かれたものが多い。表記の新著もタイトルが示すようにこの傾向のものであるが、さらに一歩を踏み込んだ内容になっている。すなわち、「この本で私がすすめたいのはゆっくり山を歩いて自然をじっくりと観察し、自然の謎を発見してそれを解いて楽しむという、新しいタイプの登山です」と冒頭にあり、山の中である現象を見つけたならば、それを自らが解明に努めること、そのためにはどこを見て、何を調べて、どのように考えてゆくのかの謎解きを事例（写真も含めて）を示しながら説明している。

著者が提唱する「山の自然学」とは、「自然を地形・地質から動植物・昆虫まで、全部ひっくるめて、あるがままに把握しようという、欲張った、でもなかなか楽しい学問分野」であり、「山の生い立ちから山をつくる岩石、さまざまな地形、土壌、さらにそこに生えている植物までが一連の『つながり』として理解できるようになる大変有効な考え方である」というものである。本書の源流となる著作のひとつ『山の自然学』（1998年岩波新書）では、日本列島各地の山々で見られる景観、特に珍しく、不思議な現象に焦点を当てて、その疑問に答えてゆく形で書かれている。それに対して本書ではその疑問の所在から始めて、解き方を教える形で書かれていて、本で知識を得るだけではなく、問題の所在を発見するように勧めている。

現在しばしば行なわれている観察会について、第2章の、「『自然』を本当に観察していますか?」では、「多くの自然観察会が名前を教えてもらってそれでおしまいです。野鳥や魚や昆虫の観察会も然り。樹木や高山植物の観察会も同様です。参加者は見分け方を覚えるのに熱中し、周りの景色などもう目に入りません。」というのが実態のようで、なかなか自然の成り立ちを説明するような形では進められてはいない。「要するに自然観察

会とはいっても、誰も『自然』など見ていないのです。見ているのは野草や野鳥や高山植物や岩だけなのです」。

「自然」を理解するためには、地質とか植物とか昆虫とかを個々に取り上げているだけでは永遠に答えにたどり着けない。自然を構成する要素それぞれが相互に関連し合って存在しているわけだから、それぞれの関連を、構造的に理解してゆく必要があるし、実際の山とか、大きな自然を対象とするときは、部分ではなく全体として、総合的に捉えるしか方法がない。掴みがたい自然そのものの解明は必然的に「自然学」という方法に行き着くのだろうと思われる。

この「自然学」の適用対象として日本の山は打って付けなのかも知れない。それは日本の山が多様性に富んでいるということである。「日本列島の山はじつに多彩で不思議に富んでいます。そのため私は長年調査にあたりながら飽きることがまったくありませんでした。特にこの10年ばかりは日本の山が面白くて、海外には2、3回しか出かけていないほどです」とある。日本の山が多彩だというのは、外国の山との比較において初めて言えることで、著者はこの点で世界の山をたくさん見知っている。文中に写真が載せてあるレバノンの山の一様性は全く問題にならないとしても、よく対象に選ばれるヨーロッパ・アルプスなどでは、氷河の影響が圧倒的に大きく、植物相も動物相も貧困である。

同じヨーロッパでも東ヨーロッパの山々は氷河の影響も小さく、アルプスよりはるかに多様な山が多いが、地質や乾燥条件、生物地理的条件によって日本の山ほどの多様性がない。これに対して日本の山は、高い山頂と北海道の山の一部には氷河痕跡があり、周極系の植物が分布する寒冷条件がある一方で、気温変化に合わせて移動しながら生き延びた氷河期前の生物がいて、結果として高山植物から亜熱帯性の植物、動物までが、狭い日本列島内に見られ、所によっては一つの山群の中にさえ見られるという恵まれた条件にある地域である。また特異な環境のひとつである新旧の火山も多数あり、それぞれが個性的であるなど、おそらく日本の山は、様々な特徴を持った山々の集合で、それだけ自然は多彩で面白いし、また興味深い登山ができるということにもつながる。

純粋にスポーツとしての登山を行なおうとすれば、日本では限られた山域、限られた季節に限定されてしまうのは残念であるが、例えばスコットランドの山はどれも氷河に覆われたことのある岩山ばかりで、ロッククライミングの対象には事欠かないが、アルプスのような氷河を抱く高峰もなく、生物的自然にも全く恵まれない。好みの問題はあるとしても、『日本の山はなぜ美しい』(1993年　古今書院)という著書のタイトルのように、日本の山はやはり美しく、登っていて楽しいのではなかろうか。

本書に載せられている謎解き事例の一つに、「くじゅう火山群のミヤマキリシマ群落はなぜみごとなのか」がある。九州の山にツツジが多い理由は何かと問われて、すぐに答えを出せる人はなかなかいないだろうと思う。それでは中国や四国の山、関西の山、そして関東の山はどうであろうか。一つ一つ登った山のことを思い出して、はたしてツツジがあったかを思い出していただきたい。そして、それぞれの山の特徴の違いを考えてもらいたい。そうすれば自ずと答えが見つかるだろう。「山の不思議」を自ら発見して、「謎解き登山」を行なうことで、日本の山の面白さ、楽しさをより一層味わってもらいたいものだと著者は読者に伝えたいのである。

（児玉　茂）

池田常道　編
『岩と雪　BEST SELECTION』



山と渓谷社　２０１７年２月刊
３３６ページ
２８００円＋税

齢70を過ぎてささやかながら年金もいただいて、義務といっては、たまに訪れる孫たちと精いっぱい遊ぶぐらいが関の山。贅沢を望まなければ何をどうしようが好き勝手にできる立場だが、やれ高齢者医療がどうの、年金がどうのという報道に接するたびに申し訳なく、私たちの世代が社会的に大きなな負担となっている現状では、せいぜい頭を働かせ（＝本を読み）、体を動かして（＝山へ行って）、人様の迷惑にならぬようにと考えつつ日々過ごしている。そんなところに本書が刊行された。

『岩と雪』そのものは、今から60年ほど前、昭和53（１９５８）年に山と渓谷社の川崎隆章が自ら編集長となって創刊した（当時の言葉で言う）先鋭登山のオピニオン誌で、途中、６年半におよぶ空白期間を挟んで、平成７（１９９５）年まで、都合30

年余りにわたって169号発行して終刊となった。今となっては 幻の山岳誌 といった気配も漂う。

創刊号から終刊号までの期間を私の年齢に当てはめれば、12歳から49歳までとなり、私の青春前期から壮年期にほぼ重なる。しかも私が36歳のとき、その『岩と雪』85号に、イギリス人クライマーのポール・ドースンが書いた、日本の岩場訪問記を翻訳して初めて翻訳料をいただき、引き続き何度か訳稿を掲載していただいて、その後翻訳者として活動するきっかけを作ってもらったのだから、同誌との間には因縁浅からぬものがあり、恩義を感じている。

この『岩と雪　BEST SELECTION』に取り上げられている38編のすべてを、リアルタイムで読んでいるわけではない。誰しも似たようなものだと思うが、私にも若くて血気盛んな時代があり、小難しい理論や理屈をこねくり回すより実践第一、などと嘯いている時期もあった。そんなときに評論めいた文章をじっくり読むなど、どだい無理だし、俗人根性や劣等感だって人並みにあったから、他人の挙げた成果を素直に喜ぶことができず、知って苛々するくらいなら、いっそ知らない方が……と決め込んで、雑誌記事など一切読まない時期も短くなかった。そうこうするうちに結婚したり、子どもができたりすれば、凡俗な私は、しばらく山はお茶を濁す程度、ということにもなったのだった。それでこの機会に2日間かけて、この『岩と雪BEST SELECTION』を隅から隅まで読んだ。やっぱり、充分に理解できない、という箇所もあったけれど、いろいろな意味で面白かった。

『岩と雪』はその成り立ちからして、ちょっと「？」と思わせるところがある。第1号の「編集後記」を、この Selection では冒頭に置き「創刊の辞」として載せている。むろん筆者は、編集長・川崎隆章である。「山と渓谷社の創立30周年が2年後に近づいてくる。」そこで同社のなすべきことの一つは「日本の岳界に最良にして唯一の、本格的山岳雑誌を誕生させることである。そのように思うと、もはやあと2年間待っていることは出来ない。30周年には30周年で新らしい希望が生れるであろう。」とあるが、そこでは、なぜ2年間待っていられないのか、理由を書いてないし、「30周年には30周年で新らしい希望が生れるであろう。」とは、ずいぶん行き当たりばったりである。

だが、それも時代の勢いなのだろうと好意的に理解した上で、同じ年の1月にRCCⅡが発足していることを考え合わせれば、ハハーンと頷ける。当時兆してきた海外登山の流れを掬い上げ、台頭してきた社会人山岳会を中心とした先鋭登山とその実践者を、この雑誌に糾合しようとしたのだ。

創刊号では、島田巽や吉沢一郎、山崎安治、高木正孝といった、日本山岳会系の海外通の論文や海外事情の紹介文、海外登山の報告を8本掲載する一方、「一九五六～八年 積雪期登攀記

録」という触れ込みで32本の記事を掲載して華々しい。マナスル以降の岳界の盛り上がりようがうかがえる。しかし『岩と雪』は１９６０年の２月に第７号「特集＝北海道研究」を最後に発行を止め、代替としていずれ「山岳年鑑」を刊行すると宣言した。創刊からわずか２年、創刊号で触れた、山と溪谷社の創立30周年を迎える前のことだった。

それまでの初期７号の中で、この BEST SELECTION の編者、池田常道さんの眼鏡にかなって取り上げられているのはわずか３編、山崎安治の「ヒマラヤ登山の動向と将来」（第１号）、本多勝一の「パイオニア・ワークとはなにか」（第２号）、吉田二郎の「スーパーアルピニズム試論」（第２号）である。ちなみに、この初期７号のなかで私の記憶に最も強く残った記事は、小林一裕が第６号に書いた「ドイツ隊十一の初登頂より」だった。１９５５年にドイツ隊の４人パーティが、主目的のアンナプルナⅣ峰（７５２５ｍ）に初登頂したあと、帰りがけの駄賃に周辺の６０００～５０００ｍ峰10座に初登頂した、という内容だった。

「山岳年鑑」に衣替えするはずだった『岩と雪』は、６年４ヶ月後の１９６６年に、突如、復刊する。昭和41年７月１日発行、定価３００円とある復刊１号、通巻８号が書店に並んだときのことは、今でも覚えている。私も山岳会に在籍してすでに４年、大学２年になっていた。学校の正門前の教科書を中心に販売する書店の、白い宣伝ビラの垂れている下の雑誌専用棚にそれはあった。私は迷わず買ったが、目次に目を通して肩すかしを食らったような感じだった。多分、先述した初期６号の「ドイツ隊十一の初登頂より」に影響されたのだろう、そのころすでに、私にとって海外といえばヒマラヤで、アルプスは視野に入っていなかった。それなのに、復刊した『岩と雪』８号の目玉記事は「ヨーロッパ４つの壁の冬期登攀記録」であり、「日本人によるアイガー北壁初登攀の波紋」だったのだ。

それより２年前の１９６４年に外貨の個人持ち出し枠が５００＄を限度に自由化され、先鋭登山家たちは争うように、シベリア鉄道の先に横たわるアルプスへ視点を定めた。その結果、１９６５年に芳野満彦＝渡部恒明ペアが日本人として初めてマッターホルン北壁の登攀に成功し、その後高田光政＝渡部恒明のペアがアイガー北壁に取り付き、頂上直下から渡部が墜落し、高田はひとりルートを完登して生還したのだった。『岩と雪』の復刊はその事件の翌年、１９６６年のことで、当時ネパールもパキスタンも登山禁止の状態だったし、インドの山はインドの軍や警察が独占していたから、新生『岩と雪』がアルプス関連の２つの記事を特別扱いしたのも当然といえば当然だったが、私の期待に添うものではなかった。

その後、外貨の個人持ち出し枠が徐々に引き上げられ、ネパールやパキスタン、インド、さらには中国までも徐々に登山を解

禁し、許可峰の範囲を徐々に広げたので、海外登山は世界的に隆盛するようになった。そんな時代を待っていたかのように、池田常道さんが『岩と雪』の編集陣に加わり、得意の語学力を活かして積極的に国内外の情報を集め、整理して組み立て直し『岩と雪』の誌面を作るようになった。池田さんは１９７６年発行の第51号から編集長となり、少ないスタッフとともに『岩と雪』にかかりっきりになった。『岩と雪』のクロニクル欄は、いつしか『岳人』の「記録速報」欄を押しのけて、クライミング界の表看板となり、『岩と雪』はオピニオン誌兼情報誌として中心的な役割を果たすようになっていった。

そうこうするうちクライミング界に大きな変化が現われた。アメリカのヨセミテに端を発したフリークライミングの新たな波と、アメリカンエイドという、過渡的でちょっと中途半端な手法、それらに続くスポーツクライミングの発生、さらにはクライミングコンペの誕生、用具と考え方の進展に伴うアイスクライミングの高度化とミックストクライミングへの展開――こういったものを池田さんは『岩と雪』の誌面を使って要領よく整理して読者に提供していった。

しかし、クライミング界におけるこのような急展開、多様化は諸刃の剣だった。細分化し先鋭化する登り方（手法）に多くのクライマーたちは困惑し、自分の進むべき方向を見失って、『岩と雪』の発行部数は長期的に漸減し、ついに１９９５年４月発行の１９６号をもって終刊となった。

だが、『岩と雪』という名称はともかく、その灯はまだ燃え尽きたわけではないと、私は信じている。この『岩と雪 BEST SELECTION』の出たこと自体が、ささやかではあるが一つの根拠だし、急激な多様化・細分化も行き着くところまでいけば、再び統合の方向へ向かっていくはずだから。ネット環境の浸透によって情報が溢れ、雑多で無意味な情報も行き交っているこの時代だからこそ、見識を具え方向性を持った、ある種のスタンダードが必要である。「編集の手を入れて分かりやすくすることは、記録を客観視する上で大切なことです。」と本書の「あとがき―21年目の編集後記」にもある。

（海津正彦）

アスプリー・チェリーギャラード 著　中田 修 訳
『世界最悪の旅』



オセアニア出版社
２０１７年１月刊
菊判　７６０ページ
７０００円＋税

アスプリー・チェリーギャラードの『世界最悪の旅』の新訳が刊行された。訳者の中田修氏（英文学者）はすでに極地探検三大古典『スコット南極探検日誌』『アムンセン南極点』『ピアリー北極点』を全訳されている。長い時間をかけ、経験豊かな訳業と広汎な知識を駆使して何度も訳し直し（推敲ではなく）本書を全訳された。加納一郎訳のもの（1944年刊）は現在朝日文庫（1993年刊）になっている。全訳とされているが、未訳部分がある。ペンギンの巣作りの様子（654～657ページ）、トロール網引きで採集した海洋生物の説明（660～662ページ）部分で、文庫本にして約7ページ余りになる。

訳者は可能なかぎり原著に近いものにしようと心掛けたという。図版・写真は初版のすべてが収録され、原著と見紛うほどの印刷に仕上げられている。本のカバーの彩色画も文言も原著そのままである。糸綴じ製本なので開いた本を押さえても割れない。訳者の希望を最大限汲んだ編集と訳者の熱意が印刷・製本の技術者に伝わり、原著により近い形となった。丁寧な注釈が詳細を極めているのは言をまたない。

著者チェリーギャラードは南極委員会からの依頼で公式記録を書いたが、委員会の意図と隔たりが生じたため原稿を引き揚げ、誠実な個人的告白として自費出版した。スコットの日記やエバンスらの体験記がすでに刊行されていたが、探検隊の全体を一つにつなげて記述したものはまだなかった。著者はあらゆる資料を集めて探検隊の全容を再構築した。

「この本はある意味では、ウィルソンとバワーズと私との間にあった友情の続編だ。それは冬旅行の厳しさにも耐えぬき、いつまでも破れることのない友情だった。」（7ページ）とあるように『世界最悪の旅』は鋭い観察と冷静な分析に深い考察を加え、豊かな語彙を使って紡ぎ出した人間の物語である。

「冬にクロージア岬へ行きたいんだ。そしてエンペラーペンギンの発生学を解明したい」（292ページ）と願うウィルソンの希望で「奇怪な鳥の巣探しの探検」が行なわれた。

南極の冬は暗闇で酷寒となる。低温のためソリの摩擦で雪氷が溶けず、砂のように抵抗が増して距離が伸びない。8時間で2・4kmしか進めない日もあった。衣服は凍り付いて鎧のようになる。そんな厳しさのなか、著者は決まり文句を発明する。「お前はひどい目にあったな、辛抱だ、辛抱だ。」（303ページ）と自分の言葉で自分を鼓舞する。切実なだけに逆にユーモアさえ漂う。

苦闘の末、クロージア岬でエンペラーペンギンの卵の採取に成功する。石小屋の覆いにしていたテントを吹き飛ばされ、3日間のブリザードに耐えた後、奇跡的にテントを見付ける。帰途、バワーズがクレバスに落ちるも事なきを得て無事帰還した。「私たちはさほど心を煩わせずに冬旅行をやり通した。足で道をさぐり声で互いを感じ取って。互いに絶対の信頼を置き全力

を尽くす覚悟の三人の友だった」（７００ページ）と著者に言わしめたのは、自制心と忍耐力に富むウィルソンのリーダー性に支えられたからだった。

著者の敬愛するウィルソンは多才な人だ。医師であり、動物学者であり、画家でもあった。スコットの右腕となり、科学班の長として隊をまとめ上げた。スケッチがすばらしい。カラー写真のなかった当時、ウィルソンの彩色画は科学的に正確で美しい。彼の絵の腕前は少年時代の父親の教育にあった。スケッチを何枚か描くことを条件に自由な旅に送り出されたという。身に付けた高度な描写力が遺憾なく発揮された。「輪郭を素早く描き鉛筆で色の名前を書き込む」（２２１ページ）１分で指が冷えて動かなくなる。ミトンで指を温め再び描き始める。こうして描かれたスケッチをもとに彩色画に仕上げる。幻日や月の暈の輪（カバー表紙・３７２ページ）が忠実に再現されている。

本書で見逃せないのが付録の充実ぶりである。著者の年譜は本邦で初めて示された。今までほとんど知られていなかった著者の人物像と人生が浮き彫りになった。いくつかのエピソードも楽しく読める。

著者はウィルソンを通じて隊員に応募する。多額の寄付はしたが、採用の条件にはしなかった。このことにスコットは好印象を抱く（採用の条件にした寄付の申し出は多数あったという）。科学班の中で唯一専門を持たない著者は、ウィルソンの助手として採用された。スコットが著者を隊員に選んだのは天啓に近い。スコットが伝えるべき探検隊の全容を、図らずもこの最年少隊員が著わすことになったのだから。スコットがこのことを予見していたのではないかとさえ思えてくる。

１９２３年にマロリーと知り合いになる。マロリーはこのとき、エヴェレスト第２次遠征を終え登頂の可能性を見出していた。奇しくも２人は同年で、ともにケンブリッジ大学出身であった。俊英な登山家と本書を出版したばかり（１９２２年）の著者とは、どんな会話をしたのだろうか。楽しい想像が膨らむ。翌年、マロリーは「第３の極地」エヴェレストに消息を絶つ。国葬並みの追悼会だったという。

１９１９年には、北極探検家ナンセンの訪問を受ける。ソリの滑走部の有効性について語り合う。この内容は本書に収められている（５４５～５４７ページ）。

付録には１９４８年に書かれた「追記」がある。著者の敬慕したスコットとウィルソンのことを書き足し、探検を回想している。その中でアムンセンとの「極点レース」について触れている。「極点へ四週間の差で先着したのが、アムンセンかスコットかということは長い目で見た場合重大なことだろうか」（７０３ページ）と、騒ぎ立てた世間の反応に疑問を呈している。批判にさらされたスコット隊の遭難についても序章で次のように書く。「世界最悪の旅をしたからといって人が偉くなるわけ

でもないことや、また記録と標本が無事に残りさえすれば、人が生還しようと途中で倒れようと、百年もたてば同じことだということもわきまえていた。」（61ページ）

それぞれの探検隊が、独自の目的を達成した成果を真っ当に評価することの必要性を説く。「極点レース」もスコット隊が生還できなかったことの意味も百年の歴史が判断すると理解していた。一部に焦点を当てて比較し、探検隊全体の優劣を決め付けてしまう愚かしさを指摘したのだ。

著者の誠実な態度は随所に読み取れる。

「私は文章を書くと自分ながらがっかりしてしまうものだが……」（8ページ）と謙遜するが、著者は語彙が豊かで確かな表現力を持つ。そして誠実な文章を書く。この誠実さを訳者の中田修氏がそのまま引き継ぎ、人間の行為と思索が一体化した結晶を我々に見せてくれる。著者の克明な案内でこの南極探検の全容を追体験できるのだ。スコットらは最期まで人間としての尊厳を手離さなかった。人はどう生きてどう死ぬべきか、人が永遠に問い続けねばならぬ課題を見事に具現化した。

科学班で専門を持たない最年少隊員の手になる本書は、永遠に色褪せることのない「人間の尊厳の物語」だとも言える。『南極書誌』（マイケル・ロソヴ編）に「南極について書いた本で最もすばらしい本であるとしばしば言われている。」（カバー裏表紙）とあるが、ジャンルを超えて必読の、世界の名著に加えられるべき一冊であろう。

著者の仲間に寄せる敬意と訳者の熱意に想いを馳せながら、雪原や氷河を一歩ずつそりを引いて進む隊員たちのように、700ページを超す本書を読み進め、読書の醍醐味を味わえた。原著初版（1922年）から95年後の現在、邦訳で原著のすべてを味わえる幸せを感じられるのは、筆者一人だけではないだろう。

なお、訳者による本書の解説書ともいえる『南極のスコット』（1998年清水書院）の併読をお勧めしたい。

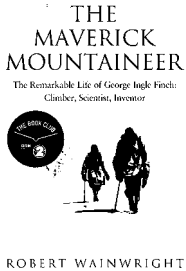
- 情熱を極地に捧げし人々がいまに生きおり書物のなかに
- 人間の尊厳を謳う物語『世界最悪の旅』は世界の名著

（宇都木愼一）



Robert Wainwright 著

『THE MAVERICK MOUNTAINEER
The Remarkable Life of George Ingle Finch: Climber, Scientist, Inventor』



Allen & Unwin, London, 2016
2015年刊
410ページ＋写真8
£17.99

この本は、オーストラリア人の登山家で科学者（物理学、化学）でもあったジョージ・イングル・フィンチ（*1）の伝記である。フィンチは1922年英国エヴェレスト第2次遠征隊に参加し、自作の酸素マスクを着けてマロリーがつくった世界最高所到達記録を塗り替えた。また世界で初めての手作りした羽毛服を持ち込み、プリズスも登山用に小型軽量化し上部テントで使用するなど登山用具の発展に多大な貢献をしている。さらに科学者として発明家として英国を戦火から守る顕著な業績を残したにもかかわらず、今まで評価するまとまった文献がなかった。著者は長期間にわたり娘や関係者、残された文献から彼の波乱に富んだ人生を浮き彫りにしている。

＊

19世紀末から20世紀初頭にかけ、大英帝国は7つの海を制覇しながらも北極と南極への一番乗りを逃した。残された地球上の「第3の極地エヴェレスト初登頂達成」は大英帝国の喫緊の課題となった。

当時ネパール王国は開国しておらず、インドを支配下に置く英国・王立地理学協会（＝RGS*2）はダージリン経由でエヴェレスト北面からの登頂活動を決定し、チベットへの入国交渉に入った。RGSは広く世界で実績を挙げている地理学者、植物学者などを参加させ地域情報を得る一方で、登頂を目指す登山者が必要だった。エリート登山者の集団である英国・山岳会（＝AC*3）に呼びかけてエヴェレスト委員会（*4）を立ち上げ、エヴェレスト一番乗りを目指した。

＊

1888年8月4日、フィンチはオーストラリアの裕福な家に生まれた。3歳で父からシドニー湾に投げ込まれるなど自分自身で生き抜く力を鍛えられた。乗馬も幼いころから教えられ、一人で遠くまでワラビーの狩猟に行き、馬の背で眠りながら翌朝に帰宅したことや、素手で毒蛇を捕まえられる自然児として育った。13歳のとき、馬で遠出し、その地方の最高峰から遥か遠くの景色まで見えることに感動して、将来は登山家になろうと決心した。また、海にも出かけセーリングもやっている。

母の血をひいたのか、譜面を見ながらピアノを弾くこともできた。学校では父の影響で科学の実験に興味を持った。

１９０２年８月、家族は汽船でヨーロッパへ１年間の旅に出た。一家は母の望みでパリに腰を据えた。兄弟で月夜のノートルダム寺院の尖塔に登るなど悪戯も楽しみ、旅の終わりを迎えた。父と妹はオーストラリアに戻ったが、華やかな社交好きの母はパリ滞在を決め、フィンチも弟とともに残った。それからはアルプス登山に出かけ、スキーも上手になった。１９０５年１月、初めて厳冬期のアルプスに出かけ新雪に手こずり、夕方たどり着いた避難小屋は積雪で扉が開かず、煙突穴から小屋に逃げ込むような厳しい体験をしながらも、フィンチはウインパーのマッターホルン初登頂記などの書物を読みあさり、ますますアルプスに惹かれていった。

１９０７年秋、高等学校の成績も良く、パリにあるソルボンヌ大学へ入学を示唆されるも、彼自身はスイス・チューリヒの大学を選び化学を専攻した。実験が楽しめるとともにアルプスが近いことが魅力だった。入学当初はドイツ語に苦しみながらもリーダーシップを発揮、学外では仲間にピアノを披露するなど信望を高めていた。学友たちと酒を飲み高歌放吟し橋を渡っているとき、前方から来たお巡りさんに深夜に大声で歌うなと咎められた。仲間の一人がお巡りさんを担ぎ上げ橋の上から川に投げ込んだ。フィンチはとっさに靴を脱ぎ欄干を乗り越え凍りつくような流れに飛び込み、溺れかけていたお巡りさんを岸辺に引きずり上げた。このように仲間から勇者として尊敬されていた逸話もある。フィンチはコンサート・ピアニストにもなりたかったようだ。腕前を見てもらおうとオーストリアの有名なピアニストの前で弾いたが、期待した評価を得られずピアニストはきっぱり諦めている。

そこに弟が留学生としてチューリヒに来て、２人はますますアルプス登山にのめり込んでいった。兄弟でガイドから徹底的にピッケル、アイゼン、ロープワーク、そして地図の使い方を学んだ。ベルナー・オーバーラントのヴェッターホルンを手始めに、アイガー、メンヒ、ユングフラウなどに登り、その後、ダン・ブランシュ、マッターホルンに登頂するなど高峰に登山を重ね、ときには遭難者の救助にも当たっている。

当時、英国では登山者はアルプスに登るためにガイドを雇っていた。フィンチは１９０９年、ガイドレス登山を標榜するチューリヒ学士山岳会に入会。長髪で手作りのアノラックなど見慣れない容姿で登山を重ね、また、アルプスで最も危険とされていたモンテローザ東壁、マッターホルンのツムット稜、モン・ブランの南面の登攀に成功している。大学卒業時、化学技術コースで最優秀生に選ばれゴールド・メダルを授かり、離れた両親にも親孝行ができた。

当時の英国では、スタッフが学生を教育するとともに一緒に

研究をする講師兼実技指導方式の科学教育は実施されていなかった。1912年、英国にやって来たフィンチは早速、燃料研究に携わり科学者として生活。翌年にはインペリアル・カレッジ(*5)に奉職し、化学技術の研究者と指導者の重責を担った。

1914年、26歳の誕生日に第1次世界大戦が勃発。志願兵のフィンチ少尉は砲兵隊に配属され、将校たちのパーティで知り合ったベティと1915年6月に結婚。3日間の新婚旅行に同行したものの新妻・ベティは準備された新婚宅を一度も訪れなかった。彼女はフィンチのお金と地位に魅かれて結婚したのだ。

1915年暮れにバルカンに移動。新任地はドイツ軍の空爆で大きな被害を受けていた。ドイツ空軍の攻撃をじっくり観察したフィンチは、大きなソーセージ型風船の使用を思いつき実行に移した。敵機の攻撃目標から目をそらし、さらに水素に着火して大きな炎を燃え上がらせて敵機の目を欺いた。また6万発の不発弾処理に活躍したが爆発の破片で片目を損傷し、片眼鏡を掛けることになった。このように戦士として科学者として高い評価を得た。16万の兵隊がマラリアに感染した。フィンチも不衛生な野戦病院で数ヶ月間、後遺症の多いキニーネを服用した。看護婦のグラディス・メイと相思相愛の仲になった。16年12月フィンチはベティから急病であると連絡を受け、翌年早々に妻を訪ねた。妻は健康だが、4ヶ月の赤ちゃんを育てているのを知った。二度と会ったことのない妻だが、9月に出産した赤ん坊、ピーター・イングル・フィンチ(*6)の将来を心配してフィンチは父親として出生届にサインしている。

1918年9月、フィンチが英国に戻った3ヶ月後、第一次世界大戦は終わった。インペリアル・カレッジに戻り講義を始めた。19年12月、英国陸軍兵としての栄誉を称えられ、バッキンガム宮殿でキング・ジョージV世から胸にメダルを着けてもらう名誉に浴した。

＊

第1次世界大戦後の1919年8月、英国はチベット入国許可とエヴェレスト登頂許可を得るべく交渉を開始。エヴェレスト隊派遣の話が具体化してきたので、フィンチは登頂実現の具体策を提案している。

1920年晦日にダライラマから入国・入山許可が下された。RGS、サー・フランシス・ヤングハズバンド会長は翌年早々に「本年、エヴェレスト偵察隊を派遣し、翌22年には登頂隊を派遣する」と発表した。2週間後RGSとACは「エヴェレスト委員会」を立ち上げ具体策を練り始めた。委員会の構成は、RGSから軍隊でチベットに駐在経験のある会長ヤングハズバンドを含む登山経験がない3人と秘書、ACから1895年マンメリーとともに最初のヒマラヤ遠征に参加した会長の化学者ノーマン・コリー教授ら3人と秘書の総員8人で構成された。

やがて登山隊員候補の選定が始まり、2人のジョージが選ばれた。35歳でケンブリッジ大学卒、伝統的なガイド同伴でアルプ登山の実績を積み重ねているマロリーとオーストラリア人でスイスの大学卒、現代風に言えばアルパイン・スタイルでアルプス高峰のバリエーション・ルート登攀の第一人者のフィンチだ。

出発4週間前になって、形式的と思われるエヴェレスト同行予定の2人の医師による身体検査があった。マロリーを診察した医師は彼を問題なしと判断。フィンチは別の医師の検査を受け、さらに別の医師の審査も受けたが最終的に血色が悪い、栄養不足、膝にも問題ありなどと診察結果が提出され、遠征隊参加は不可能となった。

一時は憤慨したがフィンチは気を取り直し、遠征用道具類の改良に尽力した。オックスフォード大学を訪ね、減圧室を借りて超高所レベルにセットされたチャンバー内に籠り、酸素マスクの性能を自身の体を使って確認した。また、プリムス・ストーブは極地探検やアルプスでは使用に耐えたが空気が薄い超高所では使用に耐えないので、軽量化と着火を改良しキャラバン中も高所でも使用可能なものにした。朗報を待つフィンチに同行の医師が急性心臓病で亡くなったとの訃報に続き、偵察隊は7200mに達するも強風で前進を阻まれ帰途に着いた、と悲報が届いた。

直ちに翌年の第2次隊結成に取り組み始めた。隊員候補のフィンチは昨年「不適」の診察結果を下した同じ医師の検査を受けた。今回は「全く異常なし」の検査結果が出ると、昨年同様に委員会のRGS関係者から執拗な引き落とし策があったが、アルプスでの登山実績と大戦中の英国への貢献を称え支援する人たちの尽力でようやく隊員に選ばれた。委員会メンバーのACコリー会長は昨年の失格は健康不良によるものではなく、家庭問題に難があったと伝えている。12月12日、勤務先のインペリアル・カレッジから6ヶ月の有給休暇が許可され、再婚相手のグラディス・メイとの離婚も結審し、12月27日、晴れてバブルスと3回目の結婚をした。

高所での酸素の使用について意見が分かれたが、持参することになった。従来、鉱山などで使用するものは重くて高所には適さないので、シリンダーの材質やサイズなど各方面から検討した。第2次遠征隊用に英国で酸素を充填したシリンダーと酸素マスクはスエズ経由カルカッタで荷揚げされ、破損を防ぐため貨物列車でダージリンに送られたが、3月27日と28日に2班に分けてBCに向かう本隊の出発には間に合わなかった。フィンチはクロフォード隊員と酸素装備の到着を待ちBCに向かうべく指示された。手元に届いた酸素シリンダーとマスクは長旅と高温、多湿に曝されダメージを受けていたが、幸い酸素は抜けていなかった。この待機中にあることが閃いた。

4月4日、到着した酸素装備一式をキャラバンに耐えうるように梱包し直してBCを目指して出発した。ダージリンの店頭でゴムチューブ、T型の3方向に穴があるガラスのパイプ、そして玩具のサッカーボールを購入した。

各宿泊地で酸素シリンダーの緩みを締め直しマスクの補修に奔走した。14日間のキャラバンを費やした本隊に10日間で追いつき、4月16日、BC建設予定地に到着した。BCでも酸素使用について激論が交わされた。酸素効用を確信し寸暇を惜しんで修理に勤しむ姿に次第に理解者も現われ、フィンチはようやく酸素取扱い説明会を開いた

BCからシェルパとポーターによる荷揚げを繰り返しアタック態勢が整い、2グループのアタック隊が決まった。第1次隊のマロリーたちは5月10日午後、酸素なしでアタックに出発。高所順応のため登り下りを繰り返しCVを設け、翌5月21日、8225m（人類初の高所到達記録）に達するも、登頂後安全に下山することに確信が持てず頂上アタックは諦めた。下山途中で2度も滑落事故を起こしながらも全員BCに帰着。

第2次隊のフィンチたちはアタックに出発するまで酸素装備の点検・修理や持参品のチェックに費やし、16日BCを出発しアタックに向かった。18日、CⅡ入り。19日、CⅢ入り後、最後の酸素マスク改良(*7)を行なった。20日、フィンチとブルースは初めて改良を加えた酸素マスクを着けてラピウ・ラに登り、2人とも酸素吸入がいかに有用であるかを実感した。

21日、CVへの荷揚げとともに、下山してくるマロリー隊の支援にも当たった。荷揚げの際、フィンチたちは酸素を吸いながら重い酸素シリンダーを背負ってポーターを追い抜いたので彼らは驚いた。不思議そうに眺めるポーターたちに「英国の空気」だと説明している。荷揚げ後CⅢに帰着。5月24日、フィンチたちはポーターに酸素シリンダーを担がせCⅢを出発し、順調にCⅣ入り。25日朝、写真担当のノエルは自分自身を含め全員の行動が余りにも鈍いのに気づき、15分ほど酸素を吸った。効果がてきめんに現われ体力が回復し、フィンチたちは静止中でも酸素の効果が大きいことを体感した。その後も重いシリンダーなどを背負いながら酸素を吸ってポーターを追い越すなど驚異的な速さで前進を重ね、翌日に頂上アタックが可能なように7925mにCVを設営した。26日、悪天で行動できず。

5月27日、フィンチたちはCVを出て、しばらくしてマロリーのルートから離れ北壁を少し横切り、多少危険だが強風の影響が少ない頂上直下につながるルートを選んで8326m（人類初到達記録更新）に達したが、悪戦苦闘空しく仲間の酸素マスクが壊れた。このような高所でもフィンチは酸素マスクを修理すべく尽力したが、ガラス・チューブが破損していた。生命の危機に瀕している仲間を救出することが最大の任務となり、登頂を断念した。

フィンチは第3次アタック隊に参加すべく同意したものの、疲れが残っている上に天候の悪化を懸念し参加を取りやめた。第3次隊はフィンチの進言もあり酸素を持参し吸っている。不幸なことに6月7日、高みを目指す氷河の上で雪崩に流されがマロリーは両手が雪面から出ていたので自力で脱出し、一緒にいた隊員も助かっていたが、下方にいたシェルパ9人中7人が死亡する惨事となって1922年の登山は終わった。

エヴェレスト委員会や英国ではマロリーが高所記録を作ったことで大喜びの真っただ中に、フィンチが酸素マスクを着けて高所記録を更新したニュースが入った。それに相次いで3次隊のシェルパ7名が雪崩に巻き込まれたとの訃報とともにフィンチは3次隊に参加していなかったとの知らせも入った。委員会の中にはフィンチを快く思っていない人たちもおり、複雑な雰囲気に包まれた。

7月16日、フィンチはブルースがプロポーザーになってAC会員になった。翌23年の遠征隊は資金難と組織内の調整が取れず実現せず。マロリーとフィンチは英国内や大陸諸国からも招待を受け講演（*8）に奔走していた。フィンチは第3次隊に選ばれるものと確信し、多忙でも酸素マスクを含む装備関係や高所用食料の改善に努めていた。

エヴェレスト委員会から第3次遠征隊の発表があった。しかし、登攀隊員の中にフィンチの名前はなかった。著者は当時の公式記録、委員会会員、登山隊員の日記など入手できた資料を詳細に調べたが、どこにも「フィンチ」の名前すら発見できず、抹殺されていたと記している。

1924年1月、第1回冬季シャモニ・オリンピックで、雪崩により亡くなった7名のシェルパを含め隊員21人に「アルピニズム最高の偉業」として金メダルが授与されている。

同年、第3次遠征隊のマロリーは酸素の効用を認識し、その後フィンチによって軽量化されたシリンダーとさらに改良された酸素マスクを持参・使用して登頂に向かった。しかし、8000m付近でアービンとともに雲間に確認された後、消息を絶った。この第3次遠征隊が許可された地域外へ立ち入ったことと報告書内容に異論があり、以後9年間、エヴェレストの登山許可は取得できていない。

その後、インペリアル・カレッジで研究、実験指導に戻り金属触媒、金属表面加工などの研究で車や軍用機のエンジン改良に貢献。アインシュタインの理論に触発され量子物理学の研究が広まった。電子が動くといった概念を実験的に確認し、後ほど1937年、ノーベル賞を受賞したインペリアル・カレッジの同僚、トムソンとも一緒にこの実験をしている。1928年、ベルギー最高勲章を授与され、1937年にブラッセルの大学から客員教授として招かれた。1938年、フィンチは英国・王立協会（最古の科学学会*9）の特別会員・フェローとして迎

えられた。

1939年秋、第2次世界大戦が始まった。兵士として参戦するには歳を取っていたが、政府の科学アドバイザーとして不活性ガスの使用でドイツ空軍からの火災被害を最小限に留めた。また、効果的なJ爆弾を開発しドイツへの致命的な反撃に寄与している。その威力を知った同盟国アメリカから、フィンチは1944年11月招待された。ペンタゴンで「高湿で家屋・家具が木製の日本」への空爆用（*10）にJ爆弾の改良を依頼されその責を果たした。その間、物理科学分野の発見に対し英国・王立協会から最高賞「ヒューズ・メダル」（*11）が授与された。

1952年、フィンチはインドのネルー初代首相から招請された。首相の肝入りで設立されたノーベル賞受賞者6名を擁する「インド国立化学研究所」の最重要部門である「国立科学・工業調査会」を指導する科学者兼管理職に抜擢された。ロンドンを飛び立った飛行機はネルー首相の計らいで快晴のアルプスやモン・ブラン三山の上空を飛行し、フィンチはこれらの山々を眼下に眺め感慨にふけった。

1953年、インド滞在中のフィンチはエヴェレスト遠征隊ハント隊長から「エヴェレスト登頂作戦のアドバイスが欲しい」との手紙を受け取り、「隊員による犠牲的な登頂支援隊のさらなる活用と酸素の使用など」事細かにアドバイスしている。幸いハント隊長はフィンチの青写真どおりに登頂作戦を展開することができ、5月29日、英国隊は世界第3の極地エヴェレストの初登頂に成功し、エリザベス女王の戴冠式に花を添えた。ハント隊長はデリーでフィンチに再会し、高所での酸素の使用を推し進めた勇気などに謝意を表した。また、RGSの年次晩餐会でワディー会長は「酸素に対するRGSの偏見は解消された」と語った。

1957年、仇敵によって運営され形骸化したエヴェレスト財団の会長になり、59年末にAC第33代会長に就任し、4年間重責を全うした。3番目のバブルス夫人とは3人の娘に恵まれ、アルプスや海にも出かけ、晩年は音楽を楽しみ英国の最高峰スノードンに一緒に出かけるなど幸せな生活を送った。1970年11月、登山と科学（物理と化学）研究の最前線で、また発明家としても輝かしい稀有の功績を残し、82年の生涯を閉じた。

研究論文を除いてほとんど書き残していないのは、大陸の旧友たちに危害が及ぶことを危惧しての配慮だろうか。

8ページ24枚の写真で往時をうかがい知ることができよう。

60余年前、書物を読み「戦前のエヴェレストで最高所到達記録をつくりながら、異端者扱いされたフィンチは2度とエヴェレスト隊員に選ばれなかった」と、フィンチの名前は頭の片隅に残っていた。この伝記を読み終えて、フィンチは植民地出身

者への偏見と学歴偏重の時代に正直に信念を貫き通し、登山、科学そして発明に格別な実績を残した尊敬すべき、傑出した偉人であることを確信し嬉しかった。邦訳本が出版されることを期待する。

＊1. George Ingle Finch。
＊2. The Royal Geographic Society。
＊3. The Alpine Club 。
＊4. The Everest Committee:。
＊5. The Imperial College。
＊6. Frederick George Peter Ingle Finch：俳優として活躍していたが1977年1月、心臓発作で急死。アカデミー賞にノミネートされ、夫人が代わって最高男優賞のオスカーを受け取った。
＊7. ガラス・チューブの両端にチューブを付け、片方は酸素シリンダー、そして一方は酸素マスクに付ける。ガラス・チューブの3ヶ所目に呼吸時の無駄な酸素消費防止用の風船（小型サッカー・ボール）を付ける。これが現在使用しているマスクの原型となっている。
＊8. マロリーはNYタイムズの記者から「なぜエヴェレストに登るのか?」と質問を受け、「そこにitがあるからだ。誰も登頂していない世界の最高峰を目指すことは挑戦的であり、全世界を征服しようとする人間の本性的な欲望である」と答えた。山一般について述べたものではない。
＊9. The Royal Society。
＊10. 私事になるが72年前、国民学校4年生、敗戦10日前の未明、阪神大空襲で拙宅は五右衛門風呂の釜を残し灰塵に帰した。数ヶ月前、近くに落ちた焼夷弾より数倍大型化され、火炎の広がりも早く威力も凄かった。恐らくフィンチの知恵によって改良されたものだろうと思うと複雑な気持ちである。
＊11. The Hughes Medal。

（南井英弘）

追　悼

谷口　けいさん



たにぐち　けい
（1972〜2015）
会員番号 15634

しみじみ、生きていて欲しかった人だ。山の世界だけでなく、日本の宝もののような人だった。私はいまなお谷口けいを「故人」として扱うことができない。

けいさんに地平線会議に来てもらったのは、２０１０年1月26日の「３６９回地平線報告」だった。その1ヶ月前、聞きに行った彼女の講演会で、けいさんの挑戦の心、人としての豊かな資質、感性は、登山の世界にとどまらず、もっと広い世界に向けて発信すべき人、と確信した。ファシリテーター（学習や議論の進行などを〝促進する〟機能を担おうとする者）としての能力にも秀でていることに驚いた。

「タテとヨコのハイブリッド」と題した（タイトルは地平線会議）けいさんの年頭の報告会は、期待以上にすばらしかった。デナリの写真を見せながら、「私は小学生のころから植村直己さんが好きで……」と、冒険にあこがれる少女だった、と明かした。大学卒業後に入った社会人山岳会で、先輩からマッキンリー登山に誘われ、まだ新人のけいさんは６０００ｍの高所で高山病に倒れた先輩を逆にサポートしながら、２日連続の登頂に成功してしまう。しかも、１回目はたった独りで。「もしかしたら、自分ってまだ何かできるんじゃないか？」世界が一気に開けた瞬間だった。

その後のけいさんの輝かしい登攀歴について、ここでは触れない。当時、「地平線通信」に彼女が書いた「報告者のひとこと」に表現者としての谷口けいの考え方がうかがえるので引用する。

〈2時間半は、あっという間だった。結局、伝えたいことっていくら時間があっても足りないってことだ。冒頭でも触れたのだけど、山ヤの中で積極的に「伝える」を実践している人は少ないと思う。言葉で伝えるのが苦手だから、山というキャンバ

スを相手に自己表現をしているのだと思うのだ。それは、描いたり、造り出したり、奏でたりする表現者達と同じことなのではないかなと最近感じている。

有形の物は人に伝わりやすいけれど、自然を相手に描いている無形のアートは、もしかしたら誰にも知られないまま。素晴らしい感動との出会いを、私は多くの人と共有してみたいと思ったのが「伝える」ことを始めたきっかけかな。あの場にいた皆さんの其々に、少しでも新しい風を吹き込むことが出来たなら、とても嬉しい。それは、疑問・同感・反感・驚きｅｔｃ.どんな形でもいい。

「ケイさんは落ち込むことってないんですか」と聞かれた。何言ってんのー、しょっちゅう壁にぶつかっては落ち込んでるよ。「例えば何に?」色々あるけど、自分の存在意義って何だろ、とかさ。って言った瞬間、そこにいた人達の疑わしげな表情が崩れて、嬉しそうにウェルカムされたと感じてしまった。

つまり、地平線会議には自分の存在意義を探し求めて旅を続けている輩が多いってこと? う〜ん、同じ匂いを感じるわけだ。それから貧乏って言葉使ったけれど、風呂無し共同トイレの四畳半に住んで低収入だからって＝貧しい、じゃないよね。誰よりも贅沢に生きているんじゃないかと思うのだけど。(谷口けい)〉

おそらくけいさんの方にも、自分の世界を広げておきたい気持ちがあったのだろう。けいさんと私は、いい友人になった。

報告会の直後にもらったメール。「江本さん、あれこれお忙しい中、わたくしなぞのことをお忘れでなく、感謝感激しております。感激と言えば、先日我が家に届いていた『岳人』に、江本さんが書かれていた「谷口けいの冒険」にはビックリ仰天しました。ちょっと、あれ読むと、谷口けいって凄い人みたいじゃないですか! 褒め過ぎですよ!!」

当時、私は「岳人時評」という連載を受け持っていて、その中でけいさんのことを正直に書いたのだ。メールは続く。「だけど嬉しかったのは、『冒険家』に憧れる私の気持ちをすごーく分かって頂いてるってことが伝わってきたことです。そのせいで、江本さんのページ読んでよ〜と知人に自慢しています。客観的に、自分のことを書いてもらったことは初めてです。書いてくれたのが江本さんで、本当に嬉しく思います。」

その後、家に来てもらったり(その都度私の野菜満載の「エモカレー」を食べた)、入院先の病院へ見舞いに行ったり、結構会う機会もあったが、日本にいない人だからメールでのやりとりが多かった。地平線会議を終始大事にしてくれ、２０１１年の３・11東日本大震災の際は、４月の「地平線特別報告会　サンイチイチを生きる」に駆けつけ、宮古市での支援活動を報告してもらった。震災当時、タスマニアの原生林にいたけいさんは帰国後、テントなど装備を持って仲間と現地に飛び込んだの

だ。

　海外からはたとえば、こんなメールが届いた。

「ボンジュールの国から」（２０１２年８月18日のメール）。

「江本さま　すっかりご無沙汰しております。相変わらず、全然日本に居りませんケイです。夏の初めに、一日だけのタイミングで帰国していた本多有香さんに会うことが出来ました（地平線会議へは行かれなかったのですが）。世界で頑張っている日本女性にはとても惹かれるものがあって、有香さんには会いたかったんですよね。だから一日だけタイミングがあって、とてもラッキーでした。それから、４００回目記念の地平線会議、本当に行かれなくて残念でした。毎回、江本さんからの通信を読んで想いを巡らせています。」

「風の谷のフンザから」（２０１３年８月９日のメール）。

「すっかりご無沙汰しています。私は今、久しぶりのパキスタンに山登りに来ています。今日は一山登って下山してきて、憩いの地フンザにて２日間の休養中。パソコン借りて、久しぶりにメールを見ていました。角幡さんの『アグルーカ』、賞とったんですねー。素晴らしい。今日は私は、『世界最悪の旅／チェリー・ガラード』読んでいました。冒険読み物は、歳をとってもワクワクさせてくれますよね。」

　以下は「時効」と判断して書いておく。２０１４年、けいさんは第19回植村直己冒険賞の受賞者に選ばれた。冒険賞はその年の行動についてのものなので、このときの受賞理由は「アラスカ・ルース氷河の新ルート登攀と女子学生登山隊との未踏峰マンセイル峰初登頂」が名目だった。冒険賞に選ぶ理由としては弱いかも、と感じたが、それまでの数々の挑戦に対してのものだったのであろう、と私は受け止めた。

　冒険館とけいさんの双方をよく知る者として、私がボリビアにいるけいさんとひそかに（受賞者名は２月の発表記者会見まで伏せられる）連絡をとることになった。簡単には受けないのでは、と予想しつつ受賞決定をメールで知らせると、間もなく返信があった。

「江本さん　帰国しましたが、山梨へ向かって移動中の為、電話に出れずに済みません。取り急ぎメールにて、失礼します。

　植村直己冒険賞、無理ですっ！

　絶対ダメです。

　まだ何もやって無いですよ、私。

これから未だ未だやりたい事いっぱいあるし、全然満足してないんですから。

　私を殺さないで～（笑）！

　小学生の頃から植村さんに憧れて、今の私がいますが、私の中では植村さんは死んでないし、賞とは全然関係ないところで生きてるワケです。

　他のどうでも良い（少なくとも私にとってはどうでも良いピ

オレドールとか）賞なら受賞するかもですが、植村直己冒険賞は無理です。

分かりますかー？

分かりますよね、江本さんなら！」

東京で待機していた冒険館の館長が山梨の自宅に出向いて直接受賞を伝えたが、けいさんの気持ちは変わらなかった。植村直己という冒険家の心を大事にするからこその固辞だったので、館長もやむを得ないか、との気持ちで彼女の判断を受け止めたという。そんなわけで２０１４年の植村直己冒険賞は「該当者辞退」の、ある意味爽やかな顛末となった。

２０１５年4月25日、ネパールで起きた大地震の際もすぐ連絡をくれた。

「巨大地震の真っ只中、ネパールに居ました（居ます）。震源地ラムジュン近くの割には、被害の殆どないマナンで地震に遭いました。被害は殆どなくて無事だったのですが、外界との連絡がまるで通じず、それでもカトマンズはヤバそうだと直感したので、そのまま予定通りにトロンパス越えて、昨日ムクティナート、今日はムスタン入口のカグベニというところまで下りてきて、ようやくネットワークが繋がるようになったところです（停電ばかりで安定しませんが）」（5月2日）

帰国してからは、ネパールの被災地支援のための資金集めに尽くした。

最後に我が家に来たのは、この年の6月だったか。長くけいさんの〝留守本部〟の役割をしている寺沢玲子さんと、なごやかな時間が流れた。

２０１５年12月21日、４人の仲間（男ばかり）と大雪山・黒岳の北稜を登攀、登攀終了後、滑落、翌日遺体で収容された。谷口けい。本名桂。日本にとってかけがえのない生命だった、と改めて思う。

（江本嘉伸）

水谷　弘治さん



みずたに　こうじ
（1936〜2016）
会員番号 7373

水谷弘治さんは２０１６年８月６日、全く突然に逝った。

当日の早朝に自宅を出発し、ご長男の貴さんを含む沢登りの仲間４人と、奥秩父・荒川水系の滝川支流・豆焼沢遡行を目指した。車を乗り捨て、遡行開始地点へ続く急斜面を下降している途中、運悪く地中（岩の間？）にあった地蜂の巣を踏んでしまい、集中攻撃を受けたのだった。２０１４年にも沢登りの最中に蜂の急襲に遭っていたため、アナフラキシー・ショックを起こして急逝した。

山岳救助隊の人たちと同行の３人によってその日のうちに搬出され、３人で八王子の自宅に帰ることができた。また、救助隊の人たちから「計画書はしっかり書かれてあり、下降ルートも間違っていない」と言われたことは、長年登山を続けてきた水谷さんにとって、名誉なことだった（『山と共に生きた…水谷弘治』水谷　貴さん筆「当日の経緯」から要約）。

水谷さんは大阪生まれ。高校生時代の恩師・広瀬勇先生に立山登山に連れて行ってもらい、残雪を蓄えた雄大な立山や、岩と雪渓が輝く剱岳を眺めた感動が忘れられず、登山を始めることになった、と生前、徳子夫人に語っていたそうだ。

水谷青年は、その後直ちに山岳会の門を叩いて腕を磨き、１９５７（昭和32）年には、先輩クライマーたちとともに大阪山の会（ＯＡＣ）の創立に関わった。当時は戦後登山興隆の真っ最中の時代で、いわゆる社会人山岳会の活動は活気に満ちていた。水谷さんたちは、当面の目標を北岳バットレスの厳冬期登攀や、並みのクライマーの目の行き届かない平川谷（後立山連峰・白岳南東面）、入山者の少ない御嶽山飛騨側の尾根とルンゼに的を絞って、翌１９５８（昭和33）年12月には、十数人で御嶽合宿を敢行した。一方、平川（赤岩沢）では１９５９（昭和34）年９月に、伊勢湾台風による鉄砲水（らしい）で２名の仲間を失い、水谷さんも捜索に専念した。その後、数次の攻撃で北岳第２尾根の側壁（１９６０年１月）と中央稜（１９６１年１月）を首尾よく完登した。もちろん脂の乗り切った25歳の水谷さんは、中心的クライマーとして力を発揮した。次いで笠ヶ岳東面、錫杖岳、白山の飛騨側と新鮮なフィールドで登山活動を展開し、リーダー会の中心メンバーとして、さらに登山活動にのめり込んでいく。

私は自分自身の青春のささやかな登山を反芻しながら、昭和30年代のガリ版刷り「ＯＡＣ会報」を読み耽ってしまった。水谷さんの登山活動は関西地区、紀伊半島の週末山行はもとより、積雪期の奥飛騨、南・北・中央の日本アルプス、海谷山塊、北海道の夏山へと発展していった。国内の山域で今やクラシックと呼ばれるルートのほとんどを、水谷さんはトレースしたのではないだろうか。

当然の成り行きとして、次はヒマラヤを目指すことになった。１９７１年、当時、知られざる山域だった北西ネパールのカン

ジロバ・ヒマールを目指し、ツォカルポ・カン（６５５６ｍ）初登頂を果たした。大阪府岳連隊とはいっても、阿部和行氏（隊長）と吉永定雄氏（副隊長）と水谷さん（35歳）と三好隊員の構成。なんのことはない、紫岳会とＯＡＣという2つの山岳会の合同隊だった。帰国後の１９７２年5月、水谷さんは阿部和行、今西寿雄両氏の推薦を得て日本山岳会に入会した。

その後も１９７７年、41歳でＯＡＣの独自隊を率いて、カンジロバ・ヒマールのカンチュンネ峰へ長期遠征を実施した。１９８３年には台湾へ渓流遡行に出かけて楠梓仙渓右股を初遡行したり、ＪＡＣ関西支部の阿部和行氏らとオーストリア・チロル地方のスキー山行も楽しまれた。大峰奥駈けも旧友と８日間で完遂した。

当時、世は開発、建設に湧くなか、水谷さんは建設会社に勤めていたはずだが、勤め先と山の関係、休暇をどうやりくりしたのだろうか。いつもの私との酒飲み話で明解な答えは得られなかったけれど、のちに社長に就任されたのだから、有能な建築家にして営業マン、経営者でなかったはずがない。

家庭生活や家族についても、私のような凡庸な山ヤとは異なる。海外遠征（計12回）や毎週末と休日、年末年始は、50年余を通して山の中で過ごした人である。徳子夫人は、お正月はいつも3人だけ、春休みも夏休みも2人の息子さんを連れて3人だけの小旅行だったと言う。近所の人には「水谷さんとこは母子家庭やね」と言われていたそうだ（『山と共に生きた…水谷弘治』より）。

水谷夫妻は２００８（平成20）年に、長年住み慣れた大阪（豊中市）を離れて、八王子市に引っ越して来られた。その後10年ほどの山行回数の多さには圧倒される。お子さんたちは独立し、ご本人も会社を退任したとはいえ、毎週山行を繰り返し、ＯＡＣやＪＡＣ関西支部の仲間たちと西ネパールの秘境ムスタン遠征やトルボ地方の巡礼に熱中したのだった。東京に来ても仲間をつくり、東京山旅倶楽部の柴田勇氏らと北アルプスや八ヶ岳の積雪期登山やスキー山行を繰り返し、徳子夫人やご長男を頻繁に誘っている。夫人が海外遠征に同行した回数は5回に及ぶという。２０１０年にＪＡＣ東京多摩支部が発足すると、奥多摩や秩父に足を向けるようになり、雲取山の登山道整備や「多摩百山」取材山行には、ほとんど欠席なしだった。

東京多摩支部の沢登り同好会にも加わり、その指導者であり、扇動者でもあった。3年半の間に夏と秋の遡行回数は15回を数えた。私の所属するＪＡＣアルパインスキークラブや東京多摩支部のスキー山行にも頻繁に参加された。最晩年の5年ほどはトレーニングを兼ねた単独行も多く、年間山行日数が60日を超えた。東京多摩支部幽霊会員を自認する私とは、お互い近所に住んでいたり、酒好きだったりの縁で、4年ほどの間、親しく付き合わせていただいた。そして、水谷さんの幅広く長い登山

体験を伺ったり、最近の登山を批評し合ったり、若い人たちの冒険的登山を肴にして呑み、かつ語った。山の本についても大いに語り合った。

水谷さんの先輩であり、終生のパートナーであった吉永定雄氏の薫陶や影響は大きかったと思う。吉永さんは山岳書の収集と文献渉猟で知られ、優れた翻訳書も多く、水谷さんの書架には、デイヴィッド・L・スネルグローヴ著、吉永定雄訳『ヒマラヤ巡礼』の１９７５年版が収められ、もちろん、鮮やかな筆跡で水谷さんへの献呈辞が記されている。トルボ地区の項は何度も読まれた跡があった。水谷さんの本好きも並々ならぬもので、マメな世話好きも手伝って、吉永さんの膨大なコレクションの保管先探しや、諏訪多栄蔵氏の旧蔵書の遺贈先探しに大阪との間を行き来しておられた。拙宅の取り散らかした本の山の中に『泉を聴く』（西岡一雄著）を見つけて「ほう、随分しぶい本読んでんなぁ」と嬉しそうだった。水谷さんは、若いころ先輩に連れられて好日山荘を訪れたことだろう。

水谷さんはここ数年の間に、関西時代の山仲間を相次いで失っている。阿部和行さん（２０１３年）、大西保さん（２０１４年）、住吉仙也さん（２０１５年）たちだ。吉永定雄さん（２０１４年）については『山岳』２０１５年に、友情あふれる追悼を書いておられる。「次々と先に逝きよってかなわんわ」と嘆いておられたのも、つい最近のことだ。

水谷さんの山行はすべて「山行ノート」に克明に記録されていて、最近は、概要をＰＣに入力されていた。「山は3回登れる。まず地図や登山史、記録を調べる。実際に登る。帰ってから地図をなぞって記録するんや」。松澤「仰せのとおりです。今やそんなことやってる登山愛好家は稀。水谷さんは貴重な老人登山家だ」と2人で呑みながら語ったことだった。この習慣も、吉永さんらの影響があったのだろうと思っている。

60年余を山に明け暮れた水谷さん、特に最晩年はやり過ぎと思われる山行の数々だったが、好きな沢登りにブレーキをかける気はなかった。冒頭に書いた沢登りに同行した岡田陽子さんによれば、水谷さんも柴田さんも、今夜の焚火で呑もうと、それぞれのザックに銘酒の瓶をしのばせていたという。山だけでなく酒も忘れることのなかった人だ。

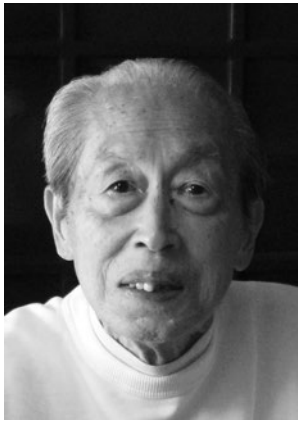
こうして、山行ばかりをあげつらってきたが、山と仕事の合間（？）にボーイスカウト豊中18団が１９７４年に発足したのを機に、野外活動の経験を買われてボーイ隊隊長に就任し、永らく豊中地区の役員も熱心に務めたとのことだ。また、この2年ほど、早稲田大学の地域研究グループの学生たちをご自宅に合宿させて世話をしたことも、世話好きでマメな水谷さん夫妻ならではの仕事だったといえる。

昨年夏の追悼の集いのために急遽作成した小冊子に、徳子夫人の提案で『山と共に生きた…』と副題を付けた。まさしくそ

のとおりの生涯だったが、２０１５年にいただいた賀状に〈羊は常に群れで行動する。外敵から身を守るために。人は、時には群れ、時には一人で生涯を楽しむ。八王子にも群れて楽しむ山仲間ができ、人生の最終章を謳歌出来そうである〉とあり、西ネパール・トルボ地方で撮った群羊の写真が添えられてあった。私も大人数での登山は歓びと楽しみが減殺されると思っているし、水谷さんのセンチメントの一端を垣間見た気がした。人一倍体躯に恵まれ、超元気な水谷さんの80歳の死は、惜しまれてならない。

（松澤節夫）

恩田　善雄さん



おんだ　よしお
（1926～2016）
会員番号 6666

恩田善雄さんが２０１６年10月17日に他界された。享年90。

恩田さんは１９２６年６月22日に、新潟県古志郡上組村（現・長岡市）で出生、幼少から東京に転居されて工学院で学ばれた。学業を終えられた後、東京大学理工学研究所や東大宇宙航空研究所、東大工学部境界領域研究施設で、流体力学から航空機関連の研究生活を永く続けられた。60歳の定年後は、民間会社で研究開発の責任者としての仕事を74歳まで続けられた。

戦時中の15歳ごろから登山に目覚め、戦争末期の１９４５年には徴兵検査を受けたが、軍務に服する前に終戦を迎えた。戦

後間もなく「山と高原の会」に入会したが、2年後に「東京白稜会」に転じた。その後の主要な山歴は、文末に示すとおりである。

恩田さんと私がJACに入会したのは1969年で、そのときすでに2人とも社会人団体に所属しており、少し視野を広げようとの意図があったのだが、所属クラブの現役会員であったところから二足の草鞋を履きこなすことは困難で、JACの方は全くと言ってよいほどにご無沙汰のしっぱなしであった。

私が東京白稜会へ入会したのが1956年、恩田さんの入会は1949年なので、7年ほどの差があるわけだが、年齢差は約10年。入会時にすでに完成された登山者であった恩田さんに比べて私は全くの初心者とあって、当時ははるかに遠い存在だった。それから60年間、恩田さんと山の世界を共有することになる。

恩田さんが白稜会入会後間もなく着手した甲斐駒ヶ岳の研究は、白稜会の主要なテーマとなり、四季を問わずあらゆるルートからのチャレンジを重ね、岳界では「甲斐駒と言えば白稜」とさえ言われるようになった。さらに北アルプスの後立山連峰東面のヴァリエーション・ルートにも着目し、特に1958年冬に実施した白馬岳主稜から不帰への極地法の展開は、当時の不十分な装備の下での24日間の苦闘として岳界の注目を浴びた。また、1957年から1960年代にかけての不帰東面の、積雪期を含む幾多の初登攀をリードした。これらの活動は、1945年に発足してまだ確たる目標を定め得なかった東京白稜会を、強いリーダーシップで前進させることとなる。これはひとえに、恩田さんの力にほかならなかった。

恩田さんはまた、1967年から14年間、立山の文部省登山研修所の講師を務めて、広く学生・社会人の岳人の育成に尽力された。

一方、恩田さんは登山の実践面のみならず、広く地誌などを含む文献を繙(ひもと)いて登山史の発掘、地名の研究にも多大な実績を残された。その一つの集大成が、白稜会創立60周年の記念誌としての『甲斐駒ヶ岳事典』である。そのほかにも会報「白稜」に寄稿された多岐にわたる研究や随想、さらには1985年から始めた「鉄驪峰通信」と題するエッセイは、病に倒れられた2014年6月まで77号に及び、山に関するエピソード、想い出など、その健筆ぶりには誠に脱帽するばかりである。山岳雑誌などへの寄稿も数知れない。

私が入会した当時の仰ぎ見るばかりの存在も、会歴を重ねるに従い徐々に距離が近づき、1959年4月の不帰Ⅱ峰西壁、この年末の白稜会創立15年記念の冬期甲斐駒集中登山において、赤石沢本谷など大きな山行でパーティを組むことができるようになった。また、1963年から70年まで東京白稜会の代表を務められたが、その折には私もそれを補佐する形で会の幹

事を務めたので、山行面のみならず山岳会運営面でより密接な関係を持つことになった。そして、１９８９年ごろからは、お互いに登り残した山々へ、旧い会員同士の山行にご一緒することが多くなった。

２０００年代初めのころから身体のあちこちに故障が認められ、いろいろと療養に努められながらも、一つまた一つと新しいピークへの情熱を傾けられる姿は、常に我々後輩の励みとなった。月2回の白稜会の集会にもほとんど欠席されることはなかった。それも２００６年ごろまでで、次第に体調が悪くなられて、たまに懇親山行に姿を見せられる程度となってしまった。

２０１３年6月に仲間たちで開催した恩田さんの米寿祝いの席が、元気なお姿を拝見した最後になってしまった。その後は、体調に障りがあるのではとの遠慮もあって、お会いすることもなくこのたびのお別れとなってしまったことは、残念でならない。

恩田さんがこよなく愛された東京白稜会も創立以来70年を超え、在籍会員の高齢化に伴ってその活動が徐々に低下しているが、その最後の灯が消える日までは、残った我々が盛り立てていきたいと考えている。どうぞ安らかに眠ってください。

〈略歴〉

１９３９年：奥多摩・御岳山初登山

１９４１～４４年：主として奥多摩、丹沢に入る

１９４５年８月：終戦（19歳）

１９４６年８月：燕岳～槍ヶ岳縦走

１９４７年８月：烏帽子岳～槍ヶ岳～徳本峠越え。主として単独で表丹沢、西丹沢の沢を登る。「山と高原の会」入会。12月：高尾山～陣馬山～三頭山～氷川駅（現・奥多摩駅）24時間縦走

１９４８年：初めて甲斐駒ヶ岳、穂高岳、中央アルプス、谷川岳などに登る

１９４９年：「東京白稜会」入会。同夏、甲斐駒・尾白川本谷、黄連谷右俣を登る。初めて谷川岳・一ノ倉沢に入り、2ルンゼ登攀

１９５０年２月：スキーで八ヶ岳・夏沢峠越え。４月：甲斐駒・黄連谷左俣登攀。８月：初めて甲斐駒・坊主岩の頂に立つ

１９５１年５月：谷川岳東面生活

１９５２年５月：谷川岳東面生活。９月：甲斐駒・赤石沢本谷の登攀に成功

１９５３年１月：甲斐駒・黄連谷左俣中央稜登攀。７月：赤石沢八丈沢を登る。８月：戸台川本谷

１９５４年１月：坊主岩～甲斐駒～北沢縦走。５月：白馬岳東面合宿。７月：後立山縦走合宿～穂高岳・岳

沢合宿。8月：甲斐駒・赤石沢奥壁を右ルンゼより登る。結氷期の西坊主の沢、北坊主の沢を単独で登る

1955年：後立山・杓子岳東尾根冬山合宿。9月：甲斐駒・赤石沢S状ルンゼ登攀

1956年：奥又白谷より奥穂高岳冬山合宿。7月：甲斐駒・尾白川本谷滑滝沢を単独登攀。8月：初めて早月尾根より剱岳に登り、針ノ木峠を越える。のち穂高岳・涸沢に転進、滝谷第1尾根、屏風岩第1ルンゼを登攀。結氷期の甲斐駒・黄連谷右俣を登る

1957年：岳沢より北穂高岳冬山合宿。1月：岳沢～前穂高岳～奥又白谷下降。4月：白馬岳主稜登攀。6月：不帰3峰B尾根登攀。7月：甲斐駒・赤石沢奥壁右ルンゼ右壁登攀。8月：仙丈ヶ岳北面を単独開拓

1958年：白馬岳主稜から不帰冬山合宿。3月：不帰1峰尾根を末端より登る。8月：穂高岳・涸沢合宿の後、不帰1峰東北壁、2峰西壁を開拓する

1959年：白馬岳主稜から不帰冬山合宿。4月：不帰2峰西壁登攀。8月：剱岳南壁、チンネなどを登る

1960年1月：甲斐駒・赤石沢本谷登攀。5月：不帰2峰東北壁を登る

1961年1月：結婚。7月：甲斐駒・戸台川支流駒津沢、水場の沢。8月：南アルプス・鋸岳で山頂に残された古い名刺を整理する

1963～70年：東京白稜会代表を務める

1966年2月：甲斐駒・尾白川黒戸北沢を登る。7月：戸台川奥駒津沢

1967～80年：文部省立山登山研修所講師として冬、春、夏の剱岳周辺を登る

1974年：韓国・雪岳山冬山合宿

1979年7月：甲斐駒・双児沢を開拓

1980年2月：甲斐駒西面・嫦娥岳単独登頂

1987年3月：東京大学を定年退職。このころより中級山岳のピーク・ハンティングを始める

1999年11月：山梨県白州町に甲斐駒資料館開設（恩田コレクション）

2001年5月：本田工業㈱東京研究所を退職（74歳）

（この略歴は、恩田さん自身が2003年にまとめられたものに若干私が付け加えたもので、現役当時の個々の登山や、結婚後および退職後のピーク・ハンティングは含んでいない）

（市川 正）

田部井　淳子さん



たべい　じゅんこ
（1939〜2016）
会員番号 6349

田部井さんは１９７５年5月16日12時30分、世界最高峰エベレスト（８８４８ｍ）の頂上に、世界で初めての女性として立った。男性初登頂者のエドモンド・ヒラリー卿から数えて37人目の登頂者で、日本人としては6人目の登頂だった。当時の日本山岳会今西錦司会長は、世界の最高峰に挑んだエベレスト日本女子登山隊の成功は、決して偶然のものではない。まさに彼女たちの実力の所産である、と偉業を讃えている。

私と田部井さんとの初めての出会いは、１９７３年だったか、エベレスト日本女子登山隊の久野（旧姓宮崎）英子隊長に会って、１９７０年の日本山岳会エベレスト登山隊での情報を提供してくるようにと、同隊の大塚博美隊長の指示で女子登山隊の訓練場所に行ったときだった。その時点で田部井さんがサミッターと決まっていたわけでもなく、数多い女子隊員の中で、特に田部井さんという存在を意識したことはなかった。

その後、日本山岳会や海外登山報告会などで顔を合わせたりしたが、親しく話をするようなこともなかった。田部井さんと親しくお付き合いをすることになったきっかけは、１９９１年の日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（ＨＡＴ-Ｊ）の創立にある。この1年前にインドで国際自然環境会議が開催されたが、エドモンド・ヒラリー卿を会長とする国際山岳環境団体ＨＡＴが存在することを知った。この国際会議に出席した澤村幸蔵・日本山岳協会副会長、山田二郎・日本山岳会会長、森田千里・日本勤労者山岳連盟会長、さらに当時、ヒマラヤ登山隊を積極的に派遣していた遠藤登・日本ヒマラヤ協会会長らが日本にも国際的に活動できる山岳環境団体の必要性を感じ、自然環境保全活動に高い関心を寄せていた田部井淳子さんと相談した。ヒラリー卿の国際組織はＨＡＴだから、その日本版は世界初女性エベレスト登頂者の田部井淳子さんを代表として、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（ＨＡＴ-Ｊ）が立ち上げられた。当時、私は日本山岳会・海外登山担当理事をしていたが、山田二郎会長からＨＡＴ-Ｊへ行って田部井淳子代表

を助けてきなさい、と派遣された。当初のＨＡＴ-Ｊは、主要各山岳団体から派遣される形で集まった委員で構成され、約１５００名の会員で田部井ＨＡＴ-Ｊはスタートした。２０２０年には創立30周年を迎えることになるが、残念ながら２０１６年10月20日、田部井さんは腹膜癌のため77歳にしてご逝去された。

田部井さんは１９３９年９月22日、福島県三春町で印刷業を営む石橋家の２男５女の末っ子として生まれた。小学４年生のとき、先生に連れられて那須岳に登ったのが初登山で、昭和女子大学英米文学科時代、同級生が奥多摩・御岳山へハイキングに誘ってくれて自然や山に興味を持ち、『東京周辺の山々』というガイドブックを読み、自分から山に出掛けるようになった。

大学を卒業して、日本物理学会で会報誌を作る仕事に就いたが、山岳雑誌で見た冬の剱岳に憧れ、22歳のときに社会人山岳会「白嶺会」に入会、２年後にはさらに高みを求め、より先鋭的な「龍鳳登高会」に所属した。ここで夫となる田部井政伸さんと出会う。一ノ倉沢南稜を登り終わった後、政伸さんが差し出した、雪渓の雪に缶詰のゆで小豆を載せた「山のかき氷」を一緒に食べたのがきっかけで、３年後の１９６７年、東京市ヶ谷のアルカディア（旧私学会館）で結婚式を挙げた。この年の10月13日、木下是雄、錦織英夫両会員の紹介で日本山岳会に入会（会員番号６３４９番）、登山熱はさらにエスカレートしていく。

当時、意識の高い登山者なら、当然の願望として目指すは海外登山であった。「女性だけで海外遠征を……」を合言葉に、女子登攀クラブを１９６９年３月５日に結成する。田部井さんのほかに宮崎英子、関田美智子、若山美子の４人が発起人となり、わずか２週間後には14人の優秀な女性登山家が集まった。将来に８０００ｍ峰を見据えた高峰登山をしたい、継続的に続けられる登山計画を立てる、低くても楽しく、面白い登山を数多くしていきたいなど、しっかりしたビジョンを抱いて、女性たちの登山の普及、振興への先端を切った。

田部井さんは、１９５０年、世界で初めて８０００ｍ峰に立った、モーリス・エルゾーグ率いるフランス隊のルートからのアンナプルナⅠ峰の登山に強い興味とこだわりを持っていた。１９７０年、同じアンナプルナ山群だが、アンナプルナⅢ峰（７５５５ｍ）のヒマラヤ登山計画を立案、８名の女子登山仲間で出発することになった。田部井さんは当時、登山者として最も総合力の強い30歳。副隊長を務め、５月19日、平川宏子さんと２人で日本人として初めて登頂に成功した。当然、女性としても初めての快挙で、この後、１９７５年のエベレスト日本女子登山隊へと続いていくのだが、その間、山好きなご主人との間に長女の教子さんが誕生。家庭と育児そして仕事と、苦労のなかでのエベレストの登山準備だった。ご主人政伸さんの理解と協力があってのことだろう。

その１９７５年のエベレスト日本女子登山隊では、女性だけの力でエベレストに登りたい、登るんだという意識は強かったが、自分が世界で初めての女性サミッターになるんだという意識はなく、登頂に成功したのち、その結果として世界の女性で初めてなんだという実感がわいた、と聞いたことがある。

田部井さんが頂上に立っていたときは、反対側のチベット側から播多（パンドゥ、33歳）という女子隊員を含む中国登山隊も頂上を目指して登ってきていた。田部井さんが登った11日後の５月27日、９人の男性とともに彼女も頂上に立ったが、田部井さんも日本女子登山隊も中国隊の動向は知る由もなく、カトマンズに下山してからニュースで知った。それからのち、その播多さんと会ってみたいという思いが募るなか、４年後の１９７９年、フランスでヒマラヤ登山史の映画化が企画され、８月、シャモニに３人のエベレスト女性登頂者が招待された。中国からの播多さんとポーランドからのワンダ・ルトキェビッチさんが呼ばれ、会いたいと思っていた、自分以外のエベレスト女性サミッターに会うことができたのだった。

１９９５年、中国で開催された国際婦人年世界会議でも会い、この年、田部井さんがエベレスト登頂20周年を記念して日本で開催した「エベレスト・ウィメンズ・サミット」にも播多さんは来日した。この「サミット」は、エベレストへ登った世界の女性登山家との富士登山に加え、山岳環境保護の啓発として、ＨＡＴ－Ｊの青少年国際交流環境体験登山活動の一環として実施された。当時、世界で32名の女性エベレスト登頂者の中から６ヶ国・９名の登頂者と、ネパールに永住する米国籍の山岳ジャーナリスト、エリザベス・ホーリー女史が来日し、出席した。

田部井淳子代表のＨＡＴ－Ｊは、日本における国際的に活動できる山岳環境団体として期待されるなかで設立されたが、田部井さんを中心にいくつかの国際事業を開催してきた。１９９１年11月９日と10日、田部井さんの母校、昭和女子大学のキャンパスで開催した「山岳環境保護国際シンポジウム東京会議１９９１」は、日本のみならず世界の登山界に山岳自然環境保全活動の重要性を訴えたが、その認識が高まり、ＨＡＴ－Ｊの存在感も高まった。

この国際会議には、世界の登山界における田部井淳子の名声や実績から、世界中の著名な登山家が来日してくれた。エドモンド・ヒラリー卿、モーリス・エルゾーグ、ラインホルト・メスナー、クリス・ボニントン、エドワルド・ムスロフスキー、ピエトロ・セガンチーニ、リチャード・プラム、ロバート・マッコウネル、カマール・フリ・ミルザ、モハン・Ｓ・コーリー、テク・チャンドラ・ポカレル、許競、ドミニック・シトリングなどの錚々たるメンバーに日本の先鋭的かつ卓越した登山家が出席、皇太子殿下のご臨席の下、高い成果を挙げることができ

た。

ヒマラヤ登山を含め登山者の環境マナーやモラルなどの問題に加え、青少年への自然環境保全意識の啓発など青少年活動と環境活動の重要性が話され、田部井さんを中心にＨＡＴ-Ｊでは国際青少年環境体験登山計画を立案した。簡単に言うと、アジアの高校生たちにアジアの国の山々の清掃登山に参加してもらい、自然環境保全活動の重要性の理解と実践を促すことだ。１９９２年、第１回大会として日本の富士登山で実施、日本の高校生の参加はあったものの、海外からの参加はわずかであった。田部井さんの「やると決めたんだから、やめないで、しっかりやるのよ」という叱咤激励の下、２回目は韓国の雪岳山、第３回は中国の長白山と回を重ねるたびにアジア各国からの出席者も増え、台湾、香港、ネパール、パキスタン、インド、カザフスタンなどの山々に、各国の高校生約50名の参加者で毎年実施してきた。

２００１年、日本を代表する山岳都市を自負する松本市が「世界岳都都市会議 in 松本」を開催、12ヶ国・13都市が参加した。この関連イベントとして、アジア９ヶ国の高校生が松本に集まって、交流と自然環境学習、そして田部井さんの発想でエコ・弁当の品評会を開いた。カナダの極地探検家のマーチン・ウイリアムズ氏とニュージランドの登山家ラッセル・ブライス氏も参加、ラッセル・ブライス氏の弁当は、弁当箱に生の太いニンジン１本といったシンプルなもの。自然に優しい、ゴミにならないお弁当をテーマに、山でのエコ活動に対する田部井さんのユニークな取り組みのひとつであった。また、携帯トイレの普及、奨励にも力を入れ、山小屋のトイレ問題でも大きな影響を与えている。

あるとき、ＨＡＴ-Ｊで富士登山に出掛けたが、「今日はＨＡＴ-Ｊの田部井さんが上がってくるので、トイレをきれいにしておかなくては」と我々をＨＡＴ-Ｊの会員とは知らずに、山小屋の番頭さんがトイレ掃除をしていた。そのトイレには、田部井さん推奨でＨＡＴ-Ｊで作成した「トイレはきれいに――――」、使用した紙は持ち帰りましょう！」のラベルが貼ってあった。

また、田部井さんは自分が山登りをできること、エベレストをはじめヒマラヤの山に登らせてもらったことに深く感謝し、その御礼の形として貢献、奉仕活動に心を配っていた。そして１９９４年、ネパールのゴミ対策の一環としてルクラ村に焼却炉を設置、燃えるゴミと燃えないゴミを分別することからゴミ意識を高めたいという作戦。さらに、焼却炉際の小学校に通じている道路が不潔かつ荒地のため、通学路として整備した。平たい石畳のきれいな道路となり、生活路としても人の行き来が多くなった。

また自然を大切にする心を育てたいと、チョプロン村に植樹活動の一環として「リンゴ園」を開墾するなど国際支援にも力

を発揮、これらの運行・管理は地元のＳＰＣＣ山岳環境団体と提携し、この所有権、管理体制をＳＰＣＣに移譲して亡くなられた。いま、リンゴ園も季節になるとリンゴの実がなり、地場産業としての有効利用をできないかとＨＡＴ-Ｊと地元住民、ＳＰＣＣと話し合っている。焼却炉はその重要性が認識され、ＳＰＣＣの手でさらに大きいものの新設を手掛けている。こんな環境活動に刺激され一昨年、ＨＡＴ-Ｎ（ネパール）が誕生した。ネパールでの環境意識の高まりを見ると、田部井さんの功績の大きさを改めて認識させられる。

２０１１年3月11日の東日本大震災の被災者の方々に、自然に親しんでもらいながらなんとか心を癒してもらえないかと、早速、ＨＡＴ-Ｊの中に「東北応援プロジェクトチーム」を設置し、その実践に当たった。自分が福島生まれということも後押ししたことと思うが、地元での自然体験ハイクをはじめ、東京および近隣地域に避難している被災者の皆さんのために、参加費無料でハイキングや自然散策を実施した。田部井さん亡き後も、彼女の意志を継いで今も続けられている。

また、この東北応援活動に並行して、被災した福島の高校生たちを富士登山に誘い、困難を乗り切る楽しみを知ってもらおうと、２０１２年夏に第1回を開催した。今年、２０１７年で第６回を迎えるが、１０００名の高校生を富士山に登らせたいという志半ばで田部井さんは他界されたが、ご主人の政伸さん、ご子息の進也君などご家族、関係者が頑張って、高校生１０００名登頂達成まで活動を続けていくと聞いている。

ＨＡＴ-Ｊのみならず、森の女性会議、ＭＪリングと銘打って１９９６年、分野を問わず働く女性たちが集まり、山旅を楽しみながら情報交換し、女性の立場から山の自然を守るという目的を中心に、一生懸命生きていこうという集団を結成した。いろいろな仲間たちと楽しく生きていきたいと、社会奉仕・貢献活動、慈善活動の取り組みに加え、遊びゴコロも開花……。本格的にシャンソンを歌ってみたいという田部井さんの情熱が高じ、それぞれの世界で仕事の最前線で活躍してきたつわものの女性たちが集まって「怖いもの知らずの女たち」という、ユニークなグループ・ネームのサークルが誕生した。「一度は歌ってみたかった」と題したリサイタルが、２００５年12月２日に１６０名の聴衆を集めて開かれ、２０１６年6月6日、佐渡で開催されるまで12回の公演として花開いた。耐寒用の羽毛服から華やかなドレスに着替え、日焼け止めクリームではなく舞台用の濃いお化粧へ、酸素マスクに代って口元にはマイクが……。登山家から芸能人に変身したものの、当人も照れながら「私、登山者に変わりありませんから」のひと言が印象的だった。「田部井淳子さんを送る会」の小冊子「山を愛し続けた田部井淳子さん、77年の生涯」に見る限り、確かに田部井淳子は登山家以外の何者でもない。世界各国76ヶ国の最高峰登頂というエ

ネルギュシュな実績は、どの登山家にも真似ができない。国連加盟国が193ヶ国あり、まだまだ登ってない山がたくさんある、というのが口癖だった、また、西遊旅行が1980年から始めた田部井さん同行の登山ツアー・シリーズが104回も実施された。山の高低、難易度にかかわらず、行ったことのない山に登ってみたい、見たことがないものを見てみたい、という好奇心の塊で登り続けた結果だろう、と書かれているのを読んで、生前の田部井さんに励まされた日々を思い出した。

1970年の日本山岳会エベレスト登山隊を機に知り合い、HAT-Jでは田部井さんが会員番号1番、私が2番という、創立からの長いお付き合いである。2020年には、HAT-Jの創立30周年をともに元気で迎えよう、と約束していたのに……。

1992年の正月、日本テレビの番組「いく歳、くる歳」で南極ロケに同行した際、「またひとつ年を取っちゃうね」と何気なしに話したところ、「いくつになってもいいから、長生きしなきゃだめよ」と強い口調で、1歳年上の田部井姉さんに言われたことを思い出した。そう遠からずワシも逝く、極楽浄土でHAT-Jをつくって待っていてくれ！

厳しい闘病生活にも負けず、やるべきことやった田部井淳子さんに敬意を表し、心よりご冥福をお祈りいたします。

―合掌―

〈略年譜〉

1939年：9月22日、福島県三春町に生まれる
1962年：昭和女子大学英米文学科卒業、日本物理学会に就職
1964年：設立と同時に龍鳳登高会に入会
1967年：田部井政伸と結婚
1969年：「女性だけで海外遠征を」を合言葉に、女子登攀クラブを設立
1970年：女子登攀クラブの「アンナプルナ日本女子登山隊」に参加、アンナプルナⅢ峰に登頂（女性初、日本人初）
1975年：5月16日、「エベレスト日本女子登山隊」に副隊長兼登攀隊長で参加、女性として世界初のエベレスト登頂に成功。ネパール王国から最高勲章グルカ・ダクシン・バフ賞を受賞
1978年：初めての著書『エベレスト・ママさん』を上梓
1981年：アフリカ大陸最高峰キリマンジャロ登頂。女子登攀クラブ隊長としてシシャパンマ（8027m）に女性初の登頂
1987年：南米大陸最高峰アコンカグア登頂
1988年：北米大陸最高峰マッキンリー（現デナリ）登頂
1991年：南極大陸最高峰ビンソンマシフ登頂。ヒラリー卿

やメスナーらを招き、HAT-J主催の山岳環境保護国際シンポジウム東京会議を開催

1992年：オセアニア大陸最高峰カルステンツ・ピラミッド登頂。ヨーロッパ大陸最高峰エルブルース西峰登頂、女性初の世界7大陸最高峰登頂者となる

1995年：HAT-Jなどが主催し、エベレスト登頂を果たした女性たちを招いて「ウィメンズ・サミット」を東京で開催

1996年：3つ目の8000m峰チョ・オユー（8201m）に登頂。働く女性のための山の会「森の女性会議」発足

1998年：58歳にして九州大学大学院比較社会文化研究科に入学、修士論文のテーマは「エベレストのゴミ問題」

2000年：九州大学大学院修士課程修了

2005年：「シャンソンの夕べ　怖いもの知らずの女たち」第1回公演

2009年：20～40代女性のための山の会「MJリンク」設立

2011年：東日本大震災の被災者を元気づけるため、HAT-J東北応援プロジェクトを立ち上げる

2012年：被災した東北の高校生たちのための富士登山プロジェクトを開始

2016年：スマトラ島最高峰クリンチ山登頂、これが最後の海外登山となった。10月20日、腹膜癌のため逝去、享年77

（神崎忠男）

徳久　球雄さん



とくひさ　たまお
（1931～2016）
会員番号 3768

徳久先生のご逝去を知ったのは昨年11月2日、私が検査入院から帰宅した朝のこと。大腿義足で自由には動けない私は、7日の飯田橋富士見町教会のご葬儀にも参列がかなわなかった思いを、青山学院大学山岳部OBの方々に託すほかありませんで

した。

１９３１年8月、品川区大井で生誕なさった先生は、お母様の縁もあってお茶の水女子大学附属小学校に通われ、のちに九段高校から東京教育大学に進学。高校2年のクリスマスに富士見町教会でプロテスタントとして受洗なさったことは、折に触れて垣間見る温厚な篤実さと自他への厳格さを併せ持つご性情にもうかがえる気がします。

先生は地理学専攻の東京教育大学（現・筑波大学）をご卒業後、千代田区内の中学校教師として着任（後述）。時をほぼ同じくして東京教育大学大学院に進まれ、研究科を１９５７年に修了なさいました。大学時代に所属した山岳部での登山活動を含めて、このころが爾後の広汎なご活動と旺盛な好奇心の嚆矢となった時期でもあったようです。一方で現在に至った幅広く多彩なご活動とご交誼からは、先生の生涯を通じてその細部までを熟知なさっているのは、ご家族と一部のご友人であろうとも拝察します。

なかでも青山学院大学に赴任なさった34歳の１９６６年4月から、桜美林大学へご転任前の１９９２年8月末（61歳）までは、経営学部の教授として教鞭を執りながら体育会山岳部の部長もご兼任。対内外の諸事を硬軟綯交（ないま）ぜた持ち前の気風と手腕で円滑に処理なさるとともに、青学山岳部が歴史と伝統の奥座敷からより現代的なアルピニズムのステージに上がろうとする過渡期に、ひと役買った立役者のお一人でもありました。

このことからも、同大の山岳部長もお務めになった約26年間は、先生にとって教師人生で最も長く、また高揚感も大きな期間であったことが推察され、私ら山岳部員にとどまらず、授業を受けた学生たちにとっても、「トクさん」（または「タマさん」、生意気にも私ら現役部員までがそうお呼びしていました）は最も長く、濃密な時を共有した師でもあったのです。

私ら、かつての青学山岳部員が知る先生は、学者としての「徳久球雄」にも増して、山ヤとしての「トクさん」に近い部分が大きかったようにも思います。その思い出やエピソードは枚挙にいとまがありません。専門分野での学者や教育者として、また日本山岳会ほか数多くの地理・山岳関連諸団体に残された業績や足跡は、関わられた皆さんが所有する書誌の類やインターネットでその詳細に触れることができるので、ここではその内容に字数を割くまでもないでしょう。

身近な徳久先生の回想にあたって、私は先生が一番長く籍を置かれた青学山岳部での一部特定の思い出とエピソードを記させていただくに留めます。

＊

この原稿執筆にあたって真っ先にその話を伺ったのは、山岳部で私の9期上の中川武さん（１９６４年卒業、日本山岳会会員、会員番号５６７９）でした。

１９５５年ごろ、当時中学2年生だった中川さんの母校、創立間もない千代田区立九段中学校に学卒の徳久先生が地理教師として着任。同時に、中川さんご自身も所属なさっていた同中学校の山岳部に顧問としても就任なさいました。当時、マナスル初登頂（１９５６年、槇有恒氏を隊長とする日本山岳会隊による）前後の、現在よりも熱を帯びた第2次ともされる登山ブームの最中にあったとはいえ、指導者不足の問題からも、さすがに東京の公立中学校での山岳部設立は珍しいものだったのでしょう。しかも中川さんを含む部員数15名というのは、現在の大学山岳部と比べても大所帯です。

そんな環境の中で中学生の全部員を率いて行った、夏の上高地をベースにした焼岳や西穂高岳・独標登山は、中川さんには六十余年を経てなお忘れがたき思い出として残っている、とのことです。東京教育大学山岳部出身の徳久先生は、若き指導者としても充分な指導力をお持ちだったことは推察されますが、それでもなお、中学生たちの面倒をみさせるべく、夏期休暇中の同大学山岳部の現役後輩たちを駆り出した先生の手腕というか人間力というかには、のちの先生の「フレキシブルな敏腕」に通じるものと、今にして感得しました。強引でなく柔軟、豪腕よりは才腕かと。若くして受洗したクリスチャンとしてのご矜持とまでは言わずとも、それに通じる、または類似のものを無意識に、ごく自然な像でご自身の中に育んでおられたのかも知れません。

中川さんは、その後に進んだ都立城南高校でも所属なさった山岳部の顧問が、徳久先生の東京教育大学時代の同級生だったことも手伝って、青学山岳部に至るまでの連綿と長い奇縁を先生との間に結ぶことができた、とのことでした。また、大学卒業後の１９６８年には、ご自身のお仲人としても先生との長い縁を結実させました。

このように、若き時代に学業と山の両面で長い師弟の縁を培ってこられた徳久先生と中川さんは、現在に至るまで、教授、指導、援助、協力と、時には天秤、時には車を支える車軸のような関係で親交を深めておいでになりました。

＊

私の5期上にあたる土田紘介さん（１９６８年卒業、日本山岳会会員、会員番号７４４９）も、青学山岳部の現役時代から今に至るまで、徳久先生と深い交誼を結んでこられました。

その手始めが、徳久先生が１９６６年4月に大学（経営学部）と山岳部長への同時ご着任10日ほど前の、現役4年生の北アルプス・横尾尾根での遭難死（このとき土田さんは2年生）でした。先生にとっては、ご就任早々の難仕事になりました。

お二人のご縁はこれ以降、まず先生にとってはご就任2年目の36歳の夏、現役部員主体のアラスカ遠征（チュガッチ山群のマーカス・ベーカー峰〈４０１６ｍ〉登山）の隊長、土田さん

は現役4年生部員としてのご参加でした。結果は西稜からの初登攀に成功。しかしこのとき、先生は幼少のご子息の体調不良（のちにご逝去）のために、隊長を急遽、栗林一路ＯＢに交替されました。ただ、準備段階でアラスカ州政府事務所を訪ねた折に、何人かの隊員が約束の時刻に遅れたことを先生から厳しく叱責されました。このとき、土田さんは先生の普段の温厚柔和な人柄の中に、自他を厳格に律する一面を垣間見たようです。

この後も土田さんが関わったものとしては、隊員としてご参加の１９７４年のヒマルチュリ遠征、監督時代の部員死亡事故など。山岳部という組織にはありがちで、また避けられないかも知れない明暗を分ける様々な事柄に、主に渉外とはいえその実務に携わられた先生の本職以外のご負担は、楽しいものばかりではなかったことでしょう。ちょっと大げさに言えば、先生にとって部長であった１９９２年まで繰り返される悲喜でもありました。「山岳部60周年に当たって」として先生の寄稿から……。

われ山に向いて眼をあぐ
わが助けはいずこより来るや
わが助けは天地をつくりたまえる
主より来る　（詩１２１）

新改訳聖書からの引用ですが、ここには先生が山から授かった安らぎのようなものがうかがえます。

雑誌・書籍編集の仕事をなさっていた土田さんはその後、幼くして亡くなった先生のご子息の追悼集『善かつ忠なる僕』の編纂、土田さんの実妹が先生の実娘のピアノ・レッスンをなさったこと、そして、先生の編著『日本山名辞典』（三省堂、改訂後は「事典」）、『山を読む事典』（東京堂出版）、『新岳人講座』全9巻（東京新聞出版局）などのお手伝いに加えて、お仲人としての先生とのご親交を深めていかれました。

＊

ご生前の先生に、おそらく最後にお目にかかった青学山岳部出身者は、山岳部で私の2年先輩にあたり、飯田橋富士見町教会近くにお住まいと会社を構える岩井胤夫（つぎお）さんでした。岩井さんが現役社長のころは、富士見町教会に礼拝なさる先生としばしばお目にかかる機会もあったそうですが、現役を退かれる前後から10年ほどの久闊を埋めるべく、昨年2月下旬に、日野市三沢にお住まいの先生宅を訪ねられた由。その折には脚がご不自由、かつてはふっくらなさっていたご体躯も、20kgほど減ったとかでスリムになっておられたものの、顔艶は良く、次回の山岳部仲間との来訪を約して辞去なさいました。

岩井さんの現役時代にも、同期の沢口登さんの富士山での滑落事故、私自身の槍ヶ岳・北鎌尾根での滑落事故と、宿命のように繰り返される事故の数々ほか、先生は本職以外の渉外業務に忙殺された26年間だったのかも知れません。

＊

最後に、ほとんどないにも等しいのですが、私自身と先生との思い出を少し。

１９６９年６月、入部して間もない槍ヶ岳・北鎌尾根での滑落事故後、国立松本病院で１年半の入院加療を余儀なくされた私は、先生から２度のお見舞いを賜りました。最初は入院間もない夏、私の実父の運転でまだ中央高速道も開通していない国道20号線を、塩尻峠越えで８～９時間かけて。事故の顛末話はあまり交わすことなく、今にしてみれば38歳になって間もない、失礼ながら無垢とも思える笑みだけが脳裏に残っています。その後は１９８０年代初めごろだったか、私が在職していた地図出版社に、先生が編纂中の学研の登山地図の資料請求のためご訪問いただいた折に、喫茶店で長々と山話を交わしたこと、土田さんを通じて、微力ながら先生の編著『日本山名辞典』の原稿の一部を書かせていただいたこと、私がまだ在籍中の日本山岳会の図書室で交わした短い雑話ぐらいのものでした。

＊

先生が終生（大げさですが）、一番長い時間をお過ごしになった青山学院大学、それも山岳部の一部ＯＢとの思い出話に終始しましたことをお赦し下さい。でも、きっと良くも悪くも青山学院大学山岳部が最も青学らしかった時期に、それを横支えしてくださった徳久球雄先生への、お礼の言葉で結ばせていただきます。

〈略歴〉

１９３１年、東京都品川区に生まれる。東京教育大学で地理学を専攻、同大大学院を修了後、研究科を経て１９６６年、青山学院大学に赴任、同時に山岳部長に就任する。

90年代からは桜美林大学大学院教授、北海学園北見大学教授などを務める。専門の人文地理学研究・教育から環境・資源調査、山岳・観光・旅行団体の役員まで、活動は多岐にわたる。日本山岳会でも理事・評議員を務めた。

（中川博樹）

会務報告

2016年（平成28年）4月～2017年（平成29年）3月
（◎総会　□理事会　◇人事　☆事業）

◇2016年度役員・評議員・支部長

会　　長　小林政志
副　会　長　吉川正幸、大久保春美、山田和人
常務理事　神長幹雄、佐藤　守
理　　事　勝山康雄、中山茂樹、野口いづみ、大槻利行、落合正治、山賀純一、直江俊弐、星　征雅、谷内　剛
監　　事　平井拓雄、重廣恒夫

委員会の担当理事
【総務】佐藤、谷内
【デジタルメディア】谷内
【公益法人】直江
【財務】吉川
【図書】神長
【資料映像】勝山
【山岳編集、会報編集】神長
【遭難対策】中山
【山岳研究所】大槻
【自然保護】谷内
【科学】野口
【医療】野口
【山行】勝山
【支部事業】大久保
【「山の日」事業】山賀
【家族登山普及】山賀
【YOUTH CLUB】中山、落合、直江、星
【110周年記念事業実行】小林
【日本山岳会再生】小林

評　議　員　田邊　壽、村井龍一、宮崎紘一、山本良三、尾上　昇、西村政晃、黒川　惠、高原三平、坂井広志、野沢誠司、高野　剛、石川一樹、佐野忠則

支　部　長　（北海道）西山泰正・（青森）大久保勉・（岩手）阿部陽子・（宮城）佐藤昭次郎・（秋田）今野昌雄・（山形）木村喜代志・（福島）小林正彦・（茨城）浅野勝己・（栃木）渡邉雄二・（群馬）田中壮佶・（埼玉）松本敏夫・（千葉）三木雄三・（東京多摩）竹中　彰・（神奈川）込田伸夫・（越

後）遠藤家之進正和・（富山）山田信明・（石川）中川博人・（福井）森田信人・（山梨）深沢健三・（信濃）塚原賢勝・（岐阜）高木基揚・（静岡）大島康弘・（東海）髙橋玲司・（京都・滋賀）田中昌二郎・（関西）金井良碩・（山陰）中井俊一・（広島）兼森志郎・（四国）尾野益大・（福岡）高木荘輔・（北九州）関口興洋・（熊本）松本尭爾・（東九州）加藤英彦・（宮崎）末永軍朗

□平成28年度第1回（4月度）理事会議事録

日時　平成28年4月13日㈬19時00分～20時55分

場所　集会室

出席者　小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・直江・谷内各理事、平井・重廣各監事（中山・落合理事は審議事項2まで、平井監事は協議事項2まで所用のため欠席）

欠席者　山賀・星理事

オブザーバー　節田「山」編集人

【審議事項】

1. 支部長の就任承認について

以下2名の支部長の就任について審議した。

神奈川支部　辺田伸夫（9546）（事由）神奈川支部設立による就任　岩手支部　阿部陽子（11181）（事由）菅原敏夫支部長からの交代（賛成11、反対なしで承認）

2. 本部役員の出張について

本部役員へ出席要請のあった5件の支部事業等への旅費の支出について、旅費規程第2条により審議した。（賛成11、反対なしで承認）

3. 高額寄付の受入承認および支部の外部助成金申請承認について

日本大学エベレスト基金委員会、故宇野彰男会員ご遺族からのそれぞれ100万円の寄付の受け入れについて寄付受入および管理規程第3条により審議した。（賛成13、反対なしで承認）

また、東九州支部17万円、公益法人運営委員会300万円の外部助成申請について同規程第4条による報告を受けた。

4. 「山のお弁当」の契約について

「山のお弁当」の事業化に伴い事業者との間で契約書および覚書の締結をすること、今後の契約書および覚書の修正は会長決裁にて行なうことについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

5. 入会希望者の承認

54名の入会について別添資料により審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. YOUTH　CLUB委員会の体制変更並びに委員会規程の修正について（山田）

YOUTH　CLUB委員会の体制変更に伴い委員会規程を変更することについて協議した。

2. 平成28年度通常総会の議案について（佐藤・吉川）
平成28年度通常総会の議案について協議した。

3. 会員名簿の私的な利用について（佐藤）
会員名簿が私的に利用された事案について協議し、会報「山」に個人情報の取扱いについて注意を喚起する記事を掲載することとした。

4. 第10回日中韓三国学生交流登山について（中山）
第10回日中韓三国学生交流登山（8月12日～19日）の計画概要について協議した。

【報告事項】

1. 東京情報大学映像研究室からのネパール映画上映会開催にかかる後援依頼について報告があった。（佐藤）

2. 鈴鹿山岳会からの「山日記（1949年号）」の転載許可申請について報告があった。（神長）

3. 平成28年度の上高地山岳研究所の管理人雇用およびアルバイト採用について報告があった。（大槻）

4. 会員制度に関する「山」の原稿について報告があった。（小林）

5. 支部事業委員会において審査された平成28年度特別事業補助金（11支部13件）の結果報告があった。（大久保）

6. 平成28年度第1回評議員懇談会を4月19日に開催するとの報告があった。（佐藤）

7. 平成28年度通常総会に向けて今後の作業スケジュール等について報告があった。（佐藤）

8. 全国山の日協議会からの「山の日」に関する報告があった。（大久保）

9. 各支部における平成28年度「山の日」事業予定について報告があった。（大久保）

10. 7月10日の「マナスル&山の日」記念事業の準備状況について報告があった。（大久保）

11. マナスル60周年関連行事への役員の出席について報告があった。（佐藤）

12. ネパール大地震救援募金の3月31日現在の状況について報告があった。（佐藤）

13. 委員会規程別表と組織図を現行に合わせて整備したとの報告があった。（佐藤）

14. 風雨により劣化した日本山岳会看板を「高尾の森づくりの会」の協力を得て新たに制作し、設置したとの報告があった。（吉川）

【連絡事項】

1. 越後支部創立70周年記念事業について（佐藤）

2. 日本山岳ガイド協会の国際山岳救助連盟（ICAR）加盟について（佐藤）

3. 平成28年度安全登山普及指導者中央研修会（第1回）の開催（佐

藤）
4. 日山協からの祝日「山の日」記念事業への協力依頼（佐藤）
5. 北海道からの知床世界自然遺産地域における登山用携帯トイレの使用呼びかけ（谷内）
6. 「安全登山ハンドブック（２０１６）」の配布について（佐藤）

【今後の予定】
1. マナスル初登頂60周年記念式典　4月29日㈮～30日㈯ラディソンホテル（カトマンズ）
2. ザ・マナスル・デー　5月8日㈰一橋記念講堂
3. 次期理事会等
・5月度常務理事会　5月10日㈫　集会室
・5月度理事会　5月18日㈬　集会室

□平成28年度第2回（5月度）理事会議事録

日時　平成28年5月18日㈬19時00分～20時40分
場所　集会室
出席者　小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、佐藤常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・星・谷内各理事、平井・重廣各監事
欠席者　神長常務理事
オブザーバー　節田「山」編集人
会務報告
【審議事項】
1. １１０周年記念事業の費用総額と海外登山基金の取崩しについて
１１０周年記念事業の費用総額の報告とこれに充当する海外登山基金の取り崩しについて審議した。（賛成14、反対なしで承認）
2. 平成27年度事業報告・決算（案）について
平成28年度通常総会議案である、平成27年度事業報告・決算（案）について別添資料により審議した。（賛成14、反対なしで承認）
3. 定款および定款施行細則の改正について
平成28年度通常総会議案である、定款および定款施行細則の改正について別添資料により審議した。（賛成14、反対なしで承認）
4. 支部長の就任承認について
以下2名の支部長の就任について審議した。　関西支部　金井良碩（６９８８）事由＝支部長代行からの移行による就任　北九州支部　関口興洋（１３６４３）事由＝伊藤久次郎支部長からの交代による就任（賛成14、反対なしで承認）
5. 入会希望者の承認
27名の入会について別添資料により審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

【報告事項】
1. 後援名義使用申請3件について報告があった。（佐藤）
2. 当会所蔵物品等の借用申請4件について報告があった。（佐藤）

3. 山と渓谷社からの日本山岳会ＨＰ公開情報の「登山白書２０１６」への転載依頼について報告があった。（佐藤）
4. 熊本地震および今後の災害発生時における日本山岳会の対処方針について（小林）
熊本地震に対する当会独自の募金活動等は見合わせることとした。しかしながら、今後も起こりうるであろう災害に対応すべく体制作り等について検討を重ねていくことを申し合わせた。
5. 来訪したインド The Himalayan Club の Ms. Nandini Purandare の対応について報告があった。（小林）
6. 平成28年度行事予定を支部等へ周知することの報告があった。（佐藤）
7. 老朽化した空沼小屋（旧秩父宮殿下ヒュッテ）の修復保存募金への協力依頼について報告があった。（佐藤）
8. 高尾５９９ミュージアムでの「山の日」パネル展について報告があった。（吉川）
9. 長野県登山安全条例に基づいて指定された登山道について報告があった。（佐藤）
10. 4月29日㈮～30日㈯にカトマンズで開催されたマナスル初登頂60周年記念式典および5月8日に毎日新聞社主催で開催されたザ・マナスルデーについて報告があった。（小林）
11. 日本山岳会、群馬県山岳連盟、群馬県勤労者山岳連盟の山岳3団体および群馬県からなる「群馬県山岳団体連絡協議会」の設立について報告があった。（佐藤）
12. 8月10日㈬～11日㈭松本市・上高地にて開催される第1回「山の日」記念全国大会のスケジュールについて報告があった。（大久保）
13. ネパール大地震救援募金が終了し、被災地に届けたこと、会報「山」および当会ＨＰで報告を掲載したことについて報告があった。（佐藤）
14. 上高地山岳研究所の元川里美管理人を防火管理者として選任し、梓川消防署に届けたとの報告があった。（大槻）
15. 平成28年度会費滞納除籍対象者76名について報告があった。（佐藤）

【連絡事項】
1. 「第5回梅棹忠夫・山と探検文学賞」授賞式　6月7日㈫13時～
長野市
2. 「山の日」制定記念・田淵行男写真展「北ア展望」　6月7日㈫～10月30日㈰　田淵行男記念館
3. 「エベレストを越えて」　4月22日㈮～7月6日㈬植村冒険館（板橋区）

【今後の予定】
1. 第70回ウェストン祭　6月5日㈰10時～　上高地
2. マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」施行記念事業
7月10日㈰10時15分開場　ＪＩＣＡ市ヶ谷ビル

3. 第32回東北・北海道集会　7月30日㈯～31日㈰　森吉山荘
4. 第1回「山の日」記念全国大会　8月10日㈬～11日㈭　松本市・上高地
5. 次期理事会等
・6月度常務理事会　6月1日㈬18時30分～　集会室
・6月度理事会　6月8日㈬19時～　集会室
6. 平成28年度通常総会　6月25日㈯14時～　ＴＫＰ市ヶ谷ビル9階

□平成28年度第3回（6月度）理事会議事録

日時　平成28年6月8日㈬19時00分～21時05分
場所　集会室
出席者　小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・野口・大槻・山賀・直江・星・谷内各理事、平井・重廣各監事（所用のため平井監事は審議事項2まで、直江理事は報告事項9まで欠席）
欠席者　中山・落合各理事
オブザーバー　節田「山」編集人

【審議事項】

1. 委員会規程「別表」の改正について
ＹＯＵＴＨ－ＣＬＵＢの組織変更に伴う委員会規定の改正について審議した。（賛成12、反対なしで承認）
2. 支部長の就任承認について
以下2名の支部長の就任について審議した。
東海支部　髙橋玲司（１２９５５）（事由）小川務支部長からの交代による就任　福岡支部　高木荘輔（１２９２０）（事由）中馬重人支部長からの交代による就任（賛成12、反対なしで承認）
3. 入会希望者の承認
16名の入会について別添資料により審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 平成28年度会議日程について（佐藤）
平成28年度の常務理事会および理事会の開催日程について協議した。
2. 支部合同会議の開催について（佐藤）
東日本支部合同会議を9月10日㈯～11日㈰、西日本支部合同会議を9月24日㈯～25日㈰の日程で開催することについて協議した。

【報告事項】

1. 北九州支部からのＪＡＣマーク使用承認申請を許可したとの報告があった。（佐藤）
2. 「アルパインフォトビデオクラブ」の名称を「アルパインフォトクラブ」と変更したとの報告があった。（佐藤）
3. 準会員制度新設に伴い準備中である準会員規定案の見直し状況について報告があった。（佐藤）

4. 吉川副会長の「高尾の森づくりの会」代表就任に伴い、山田副会長が担当業務執行理事となったとの報告があった。（吉川）
5. 国土地理院「電子国土賞」の選考方法について他薦が廃止となったとの報告があった。（佐藤）
6. 一般財団法人「全国山の日協議会」の理事会構成について報告があった。（小林）
7. 6月5日㈰に開催されたウェストン祭の開催状況について報告があった（小林・大槻）
8. 7月10日㈰に開催されるマナスル初登頂および国民の祝日「山の日」記念事業の準備状況について報告があった。（大久保）
9. 14件の寄付金・助成金受入の事前申請、受入について報告があった。（吉川）
10. 日本山岳会の予算と今後の財政見通しについて報告と施策の提案があった。（吉川）
11. 日本で開催される三国学生交流登山の日程について報告があった。（吉川）
12. 7月26日㈫に開催される山岳遭難防止セミナーについて報告があった。（佐藤）
13. 平成29年度全国支部懇談会の主管は茨城支部となるとの報告があった。（谷内）

【連絡事項】

1. 再生委員会　6月21日㈫19時～　集会室
2. 平成28年度通常総会6月25日㈯14時～　ＴＫＰ市ヶ谷ビル9階
3. 同好会連絡会議　7月4日㈪18時30分～　１０４会議室
4. マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」施行記念事業
   7月10日㈰10時15分開場　ＪＩＣＡ市ヶ谷ビル
5. 次期理事会等
   ・7月度常務理事会　7月6日㈬18時30分～　集会室
   ・7月度理事会　7月13日㈬19時～　集会室

◎平成28年度通常総会

6月25日㈯　午後2時00分～
東京都新宿区市ヶ谷八幡町　ＴＫＰ市ヶ谷ビル
出席者１４３名、委任状１８２６名（会員数５０２０名）

議案　1. 平成27年度決算報告
　　2. 平成27年度事業報告
　　3. 定款・定款施行細則改正

議案審議はいずれも原案どおり可決承認された。本総会では厳しい財政状況が改めて報告され、会員を増やすために準会員制度を導入することが提案された。小林政志会長は、会長挨拶で「将来的に財政の基盤を安定させること、それには会員増強の仕組みをつくること、しっかりした活動をしていくために制度を見直す重要な会議」と述べた。

□平成28年度第4回（7月度）理事会議事録

日時　平成28年7月13日㈬19時00分～21時08分

場所　集会室

出席者　小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・谷内各理事、平井・重廣各監事

（所用のため山田副会長は業務執行報告事項9まで、直江理事は業務執行報告事項11まで欠席。協議事項2については直江理事出席後に協議した。）

欠席者　星理事

【審議事項】

1. 監査法人との財務に関する指導・助言業務契約の継続について

太陽有限責任監査法人との財務に関する指導・助言業務契約を継続することについて審議した。（賛成12、反対なしで承認）

2. 支部助成金および新入会員報奨金の送金について

今年度は各支部に対して支部助成金2300円（会員1人当たり）、新入会員獲得報奨金4000円（新入会員1人当たり）を送金することについて審議した。（賛成12、反対なしで承認）

3. 準会員規程の制定について

平成28年度通常総会での定款改正を受けて準会員規程を制定することについて審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

4. 賛助会員規程の制定について

平成28年度通常総会での定款改正を受けて賛助会員規程を制定することについて審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

5. 規定類管理規程「別表」の改正

規定類管理規程「別表」を現行に合わせて改正することについて審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 会員増強施策への取り組みについて（小林）

会員増強を最重要課題とし、支部、委員会、同行会等各組織を通じ会全体で取り組むことについて協議した。

2. 会員名簿発行に関する考え方について（佐藤・直江）

平成28年度通常総会において提案のあった会員名簿の発行について必要性、個人情報の取り扱い等各面から協議し、今後も継続して協議することとした。

【報告事項】

1. 入会希望者10名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2. 平成28年度通常総会の開催状況と今後の課題について報告があった。（佐藤）

3. 平成27年度事業報告書の内閣府への提出について報告があった。（吉川）

4. 8月1日㈪～9日㈫に「高尾599ミュージアム」において日本山岳会関連の展示会を行なうことについて報告があった。（吉

会務報告

川）

5. 7月10日(日)に行なわれた「マナスル初登頂及び国民の祝日『山の日』記念事業」の開催状況について報告があった。（大久保）
6. 7月4日(月)に行なわれた同好会連絡会議の開催状況について報告があった。（佐藤）
7. ㈱ポパルからの「山を考える」リーフレットの転載許可申請についての報告があった。（佐藤）
8. 第17回ライチョウ会議長野大会からの後援名義使用承認申請について報告があった。（佐藤）
9. 長野県安全条例に基づく「登山を安全に楽しむための指針」について報告があった。（佐藤）
10. HAT-Jからの国民の祝日「山の日」施行初年記念植樹への協力依頼があった。（佐藤）
11. 会員データ管理システムの新システムへの移行作業の進捗状況と今後の運用スケジュールについて報告があった。（山田）
12. 会員データ管理システムと関連した会報「山」の発送形態、発送方法の変更と今後の見通しについて報告があった。（神長）
13. 「山」目録の完成と広報方法について報告があった。（神長）
14. 『山岳』第百十一年の内容、目次案について報告があった。（神長）

【連絡事項】

1. 第59回高頭祭　7月25日(月)弥彦山上大平園地
2. 第1回「山の日」記念全国大会8月10日(水)～11日(木)　松本市内、松本市上高地

【今後の予定】

1. 公益法人に対する内閣府立ち入り検査　7月26日(火)10時～17時　集会室
2. 再生委員会　8月1日(月)19時～　集会室
3. 日中韓三国学生交流登山のお別れ会　8月18日(木)18時30分～　檸檬屋（港区新橋3-2-2　03-3503-0772）
4. 次期理事会等
   ・8月度常務理事会　8月2日(火)18時30分～　集会室
   ・9月度常務理事会　9月6日(火)18時30分～　集会室
   ・9月度理事会　9月15日(木)19時～　集会室
   ・東日本支部合同会議　9月10日(土)～11日(日)　プラザエフ
   ・西日本支部合同会議　9月24日(土)～25日(日)　大阪アカデミア

□8月の理事会は夏休みのため休会

□平成28年度第5回（9月度）理事会議事録

日時　平成28年9月15日(木)19時00分～21時34分
場所　集会室
出席者　小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・谷内各理事、平井監事（所用のため山賀理事は審議事項2ま

で、神長常務理事は審議事項4まで欠席）
欠席者　星理事、重廣監事
オブザーバー　節田「山」編集人

【審議事項】

1. 平成28年度（前期）海外登山助成対象登山隊の審査について
「東京農業大学創立125周年マナスル環境学術登山隊2016」を平成28年度（前期）海外登山助成対象登山隊として承認し、20万円を助成することとした。（賛成12名、反対なしで承認）

2. 個人情報取扱規程の改正について
個人情報取扱規程を改正し、平成28年9月15日より施行することとした。（賛成12名、反対なしで承認）

3. 会員証取扱規程の制定について
会員証取扱規程を新たに制定し、平成28年10月1日より施行することとした。（賛成13名、反対なしで承認）

4. 準会員制度導入に伴う支部助成金などの変更について
準会員制度導入に伴い、平成29年度の支部助成金のうち事業補助金を300円減額し、支部会員1人あたり1000円とすることとした。また、準会員に関する運営交付金・新入会員獲得報奨金を会員と同額支給することとした。（賛成13名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 委員会規程における業務内容の見直しと次年度事業計画の策定について（小林）
全委員会において委員会規程における業務内容の見直しを図り、次年度事業の具体的施策として会員増強策と「山の日」普及活動を盛り込むことについて協議した。

【報告事項】

1. 8月の入会希望者18名（うち復活1名）、9月の入会希望者14名（再申請1名、復活1名）について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2. 秩父宮記念山岳賞審査委員会委員長の交代について報告があった。（大久保）

3. 7月26日㈫に行なわれた内閣府による立入検査の実施状況および受検結果について報告があった。（吉川、佐藤）

4. 寄付金19件の受入について報告があった。（吉川）

5. 内閣府による立入検査時の指摘を受けて会計管理手続き等を変更することについて報告があった。（吉川）

6. 財務状況と支部の現状分析について報告があった。（吉川）

7. 各種資料の使用承認申請6件、後援名義使用申請1件、画像使用許可1件について承認したとの報告があった。（神長、佐藤）

8. 平成28年度安全登山普及指導者中央研修会（第2回）の開催について報告があった。（佐藤）

9. マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」施行記念事業について報告があった。（大久保）

10. 第1回「山の日」記念全国大会の実施状況について報告があった。（大久保）
11. 日中韓三国学生交流登山の実施状況について報告があった。（中山）
12. 平成28年度新入会員オリエンテーションの実施状況について報告があった。（谷内）
13. 7月16日㈯～17日㈰に開催された自然保護全国集会について報告があった。（谷内）
14. 9月10日㈯～11日㈰に開催された東日本支部合同会議の開催状況について報告があった。（佐藤）
15. 登山教室等を実施する場合の旅行業法上の取扱いについて報告があった。（佐藤）
16. 年次晩餐会の参加申込み方法の変更について報告があった。（佐藤）
17. 同好会「平日クラブ」の新規登録について報告があった。（佐藤）
18. 「山」、『山岳』の発行予定について報告があった。（神長）
19. 『改訂　新日本山岳誌』の執筆者への印税支払いについて報告があった。（節田）

【今後の予定】

1. 西日本支部合同会議　9月24日㈯～25日㈰　大阪アカデミア
2. 次期理事会等　10月度常務理事会　10月4日㈫18時30分～　集会室　10月度理事会　10月12日㈬19時～　集会室
3. 支部長会議　12月3日㈯10時30分～　京王プラザホテル
4. 年次晩餐会　12月3日㈯13時30分（受付開始）　京王プラザホテル

□平成28年度第6回（10月度）理事会議事録

日時　平成28年10月12日㈬19時00分～20時40分
場所　集会室
出席者　小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・直江・星・谷内各理事、平井監事
欠席者　山賀理事、重廣監事
オブザーバー　節田「山」編集人

【審議事項】

1. 平成28年度秩父宮山岳賞の審査について
秩父宮記念山岳賞審査委員会からの推薦を受けた候補者について審議した。（賛成14名、反対なしで承認）
2. 日本山岳会とＨＡＴ　Ｊの共催による「山の日」記念植樹について
ＨＡＴ－Ｊより要請のあった「山の日」記念植樹の共催について審議した。（賛成14名、反対なしで承認）
3. 平成28年度会長特別表彰について

平成28年度会長特別表彰候補者について審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 名誉会員の推薦について
　平成28年度名誉会員候補者の推薦について協議した。（小林）

【報告事項】

1. 9月受付分の入会希望者15名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）
2. 第4回アジア・太平洋登山医学会、第37回日本登山医学会合同学術集会の後援依頼を承認した。（野口）
3. NHKプラネット名古屋支社からのウェストン画像の使用申請を承認した。（神長）
4. 学生部2015年ネパール登山隊について会計報告があった。（吉川）
5. 平成28年支部合同会議における各支部からの意見について報告があった。（佐藤）
6. 事務局職員に関する規程を現行の法令に則して見直しているとの報告があった。（佐藤）
7. 平成28年度第2回評議員懇談会を11月7日㈪に開催するとの報告があった。（佐藤）
8. 平成28年度晩餐会の準備状況について報告があった。（佐藤）
9. 広報サイトの立ち上げと会員サイト見直しの進捗状況について報告があった。（谷内）
10. 景信山メディカルハイキングの実施について報告があった。（野口）
11. 「山」10月号の発行予定について報告があった。（神長）

【連絡事項】

1. 富士山国有林におけるニホンジカの重点的な捕獲実施　9月21日㈬～2月17日㈮
2. 「北極圏1万2千キロと妻への手紙」展　9月9日㈮～11月8日㈫　板橋区・植村冒険館
3. 「第17回ライチョウ会議長野大会」　10月15日㈯～16日㈰　大町市文化会館大ホール
4. 日・米・独オオカミフォーラム2016横浜の開催　10月27日㈭　横浜市
5. 岩橋崇至作品展「北アルプス」　9月27日㈫～10月30日㈰　千代田区JCIIフォトサロン

【今後の予定】

1. 平成28年度第2回評議員懇談会　11月7日㈪17時～　集会室
2. 支部長会議　12月3日㈯10時30分～　京王プラザホテル
3. 年次晩餐会　12月3日㈯13時30分（受付開始）京王プラザホテル
4. 次期理事会等
　11月度常務理事会　10月31日㈪18時30分～　集会室
　11月度理事会　11月9日㈬19時～　集会室

5. 事業計画・予算等
・平成28年12月7日㈬　平成29年度事業計画・予算（提出依頼）
・平成29年1月15日㈰　平成29年度事業計画・予算（提出期限）
・平成29年1月25日㈬　平成28年度事業報告・会計報告（提出依頼）
・平成29年2月28日㈫　平成28年度事業報告（提出期限）
・平成29年3月31日㈮　平成28年度会計報告（提出期限）
・平成29年6月24日㈯　平成29年度通常総会（主婦会館　プラザエフ）

□平成28年度第7回（11月度）理事会議事録

日時　平成28年11月9日㈬19時00分～20時05分
場所　集会室
出席者　小林会長、大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・直江・星・谷内各理事（所用のため中山理事は業務執行報告2まで欠席）
欠席者　吉川副会長、山賀理事、平井・重廣各監事
オブザーバー　節田「山」編集人

【協議事項】
1. 名誉会員の推薦状況について
　平成28年度新名誉会員の推薦について協議した。（小林）
2. 平成28年度支部長会議の開催について
　12月3日㈯に開催される平成28年度支部長会議について協議した。（佐藤）

【報告事項】
1. 10月受付分の入会希望者11名、準会員入会希望者5名について承認したとの報告があった。（小林）
2. 寄付金8件について報告があった。（佐藤）
3. 平成28年度年次晩餐会の準備状況について報告があった。（佐藤）
4. 平成28年度新永年会員34名について報告があった。（佐藤）
5. 上高地山岳研究所の閉所作業が完了したとの報告があった。（大槻）
6. 以下の規程類の整備検討状況について報告があった。（佐藤・小林）
・職員関係規程類
・会章、会員章に関する規程
・上高地山岳研究所管理規定
・運営要領
・委員会規程別表の見直し
7. 11月7日㈪に開催された平成28年度第2回評議員懇談会における意見等の報告があった。（佐藤）
8. 日本山岳会の会員動向と財務状況について報告があった。（佐藤）
9. 船村徹会員の文化勲章受章について報告があった。（大久保）
10. 「田部井淳子さんを送る会」の開催について報告があった。（佐藤）

11.「山」11月号の発行予定について報告があった。（節田）

【連絡事項】

1. 栃木支部創立十周年記念式典11月27日(日)　宇都宮市
2. 日本勤労者山岳連盟望年会12月2日(金)19時～　日本勤労者山岳連盟事務所
3. 日本ヒマラヤ協会２０１６年華甲望年会　12月10日(土)18時～　プラザエフ
4. ＯＵＴＤＯＯＲ ＦＥＳ　平成29年3月4日(土)～5日(日)　大阪万博記念公園
5. 平成29年度広島支部総会　成29年4月8日(土)　広島市

【今後の予定】

1. 支部長会議　12月3日(土)10時30分～　京王プラザホテル
2. 年次晩餐会　12月3日(土)13時30分(受付開始)　京王プラザホテル
3. 次期理事会等　12月度常務理事会　12月6日(火)18時30分～　集会室　12月度理事会　12月14日(水)19時～　集会室

☆平成28年度年次晩餐会

12月3日、東京・新宿の京王プラザホテルで開催。皇太子殿下がお忙しいなかをご出席されたのをはじめ、４８１名の会員が参加した。

小林会長は冒頭の挨拶で、今年の大きなイベントのマナスル初登頂60周年と「山の日」のスタートに触れた。また、再生委員会の立ち上げや準会員制度の導入、会員サービス向上のための新たな会員カードづくりについて述べた。

会は物故会員への黙祷、新永年会員34人の紹介、鈴木正崇会員の秩父宮記念山岳賞受賞の表彰式、33支部の会員紹介などが行なわれた。恒例の鏡開きは小林会長、皇太子殿下のほか、宗實・新永年会員代表、鈴木・秩父宮記念山岳賞受賞者、柴崎・会長特別表彰受賞者の5名が行ない、続いて八木原圀明・日本山岳協会会長の音頭で乾杯した。なお晩餐会に先立ち、海外登山報告、秩父宮記念山岳賞受賞記念講演会、絵画展、図書交換会などが催された。翌日の懇親山行は乙女峠へのハイキングを行なった。

□平成28年度第8回（12月度）理事会議事録

日時　平成28年12月14日(水)19時00分～21時15分
場所　集会室
出席者　小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、佐藤常務理事、勝山・野口・大槻・落合・山賀・直江・谷内各理事、重廣各監事
欠席者　神長常務理事・中山・星各理事、平井監事
オブザーバー　節田「山」編集人

【協議事項】

1. 今後の業務予定について

今後の以下の業務予定について協議した。（佐藤）

・理事会、常務理事会の日程変更

・支部長会議の開催時期等

2. 次期執行部の課題について
次期執行部における重点課題について協議した。（小林）

3. 次期執行部組織のポイントについて
次期執行部組織の運営におけるポイントについて協議した。（小林）

4. 秩父宮記念山岳賞の発表時期と発表方法について
「秩父宮記念山岳賞実施規程」における発表時期とその方法について協議した。（大久保）

5. 会長表彰の取り扱いについて
会長特別表彰以外の会長表彰制度の取り扱いについて協議した。（佐藤）

【報告事項】

1. 11月受付分の入会希望者9名、準会員入会希望者9名について承認したとの報告があった。（小林）

2. 寄付金9件について報告があった。（吉川）

3. 平成28年度決算見込みと平成29年度予算見込みについて報告があった。（吉川）

4. 委員会規程の見直しとその取りまとめ結果について報告があった。（小林）

5. 支部長会議の開催状況について報告があった。（佐藤）

6. 晩餐会の開催状況について報告があった。（佐藤）

7. 会員より平成29年度年次総会において社員提案権行使の申し出があった。（佐藤）

8. 110周年記念時計販売の結果について報告があった。（佐藤）

9. 栃木支部創立10周年記念式典への出席について報告があった。（小林）

10. ラジオニッポンより会長へ番組出演の依頼があり、受諾したとの報告があった。（小林）

11. 北日本新聞社開発センターからの資料貸出申請について報告があった。（神長）

12. 国立登山研修所からの利用予約方法の案内について報告があった。（佐藤）

13. 平成29年度事業計画・予算の提出依頼を12月7日に発信したとの報告があった。（佐藤・吉川）

14. 山行委員会主催海外登山を当初予定であった6月中旬実施から9月実施に変更するとの報告があった。（勝山）

15. 「山」12月号の発行予定について報告があった。（節田）

【連絡事項】

1. 日山協平成29年新春懇談会　1月14日㈯13時～15時　アルカディア市ヶ谷「富士の間」

2. 都岳連新春の集い　1月28日㈯17時～　ホテルＪＡＬシティ田町

3. 4支部（千葉・茨城・栃木・群馬）懇談会　2月18日㈯～19日㈰
妙義グリーンホテル

4. 日本山岳遺産サミット　2月25日㈯13時～　神保町三井ビル23F
　インプレスグループ　セミナールーム

【今後の予定】

1. 次期理事会等
　1月度常務理事会　1月12日㈭18時30分～　集会室
　2月度常務理事会　2月1日㈬18時30分～　集会室
　2月度理事会　2月8日㈬19時00分～　集会室

2. 事業計画・予算等
　・平成29年1月16日㈪　平成29年度事業計画・予算（提出期限）
　・平成29年1月25日㈬　平成28年度事業報告・会計報告（提出依頼）

□1月の理事会は休会

□平成28年度第9回（2月度）理事会議事録

日時　平成29年2月8日㈬19時00分～21時05分
場所　集会室
出席者　小林会長、吉川・大久保各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・星・谷内各理事、平井・重廣監事
（所用のため平井監事は審議事項2まで欠席）
欠席者　山田副会長
オブザーバー　節田「山」編集人

【審議事項】

1. 高額な寄付金および助成金の受け入れについて
　高尾の森づくりの会、家族登山普及委員会それぞれの寄付金および助成金の受入れについて審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

2. プロジェクトチーム等の廃止について
　110周年記念事業実行委員会、マナスル初登頂60周年事業ワーキンググループ、ネパール大地震救援ワーキンググループを事業終了のため、ルーム検討ワーキンググループを活動の予定がないため廃止とすることについて審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

3. 表彰規程の制定について
　会長特別表彰規程に一般表彰を加え、新たに表彰規程として制定することについて審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

4. 日本山岳会上高地山岳研究所管理規程の一部改正について
　準会員制度の導入に伴い、関連する条文を改正することについて審議した。（賛成14名、反対なしで承認）

5. 日本山岳会上高地山岳研究所利用要領の一部改正について
　準会員制度の導入に伴い、関連する条文を改正について審議したが、支部会友の取扱いについて再検討の必要があり、審議を継続することとした。（賛成14名、反対なしで継続審議）

6. 秩父宮記念山岳賞実施規程の一部改正について
秩父宮記念山岳賞の発表時期の明記とともに、条文の構成を見直すことについて審議した。（賛成14名、反対なしで承認）
7. 会章等の使用に関する規程の制定について
会章等の使用に関する規程の制定について審議したが、会章の形状等について詳細な表示を要するとし、審議を継続することとした。（賛成14名、反対なしで継続審議）

【協議事項】
1. 会員からの「役員選考等に関する意見」への対応について役員選考に関する提案の申し出を受け、理事会としての対応について協議した。（佐藤）
2. 日本山岳会上高地山岳研究所の増収策について山岳研究所運営委員会策定の増収策を協議した。（大槻）

【報告事項】
1. 1月受付分の入会希望者13名、準会員入会希望者8名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）
2. 谷口けい冒険基金の後援名義使用許可を行なったとの報告があった。（佐藤）
3. 世田谷文学館企画展からの協力名義使用申請について、これを許可したとの報告があった。（佐藤）
4. 北日本新聞開発センターからのウェストンの写真画像の使用申請について、これを許可したとの報告があった（神長）
5. （株）ＪＴＢパブリッシングからの「日本三百名山」名称使用申請について、これを許可したとの報告があった。（神長）
6. 毎日映画社からのナンダコート初登頂80周年記念事業への後援名義使用申請について、これを許可したとの報告があった。（神長）
7. 日本山岳ガイド協会からの「安全登山のための知識と技術公開講座」に対する名義後援使用申請について、これを許可したとの報告があった。（佐藤）
8. 16件の寄付金および助成金の受け入れについて報告があった。（吉川）
9. 3月4日㈯～5日㈰に開催される第5回登山教室指導者養成講座の実施要項について報告があった。（大久保）
10. 1月28日㈯～29日㈰に開催された第12回ボルダリングジャパンカップの状況について報告があった。（落合）
11. 3月9日㈭に開催される平成28年度第3回評議員懇談会について報告があった。（佐藤）
12. 2月16日㈭に開催される医療委員会主催講演会について報告があった。（野口）
13. 「山」の発送および封入物について報告があった。（神長）
14. 「山」2月号の発行予定について報告があった。（節田）

【連絡事項】
1. 日本・ブータン友好協会第37回通常総会　2月25日㈯　14時～15

時30分　早稲田大学15号館02教室

2．第5回小島烏水祭　4月8日㈯　高松市

【今後の予定】

1．次期理事会等

3月度常務理事会　3月7日㈫18時30分～　集会室

3月度理事会　3月14日㈫19時00分～　集会室

平成28年度第3回評議員懇談会　3月9日㈭15時～　104会議室

2．事業計画・予算等

・平成29年2月28日㈫　平成28年度事業報告（提出期限）

・平成29年3月31日㈮　平成28年度会計報告（提出期限）

・平成29年6月24日㈯　平成29年度通常総会（主婦会館プラザエフ）

□平成28年度第10回（3月度）理事会議事録

日時　平成29年3月14日㈫19時00分～20時40分

場所　集会室

出席者　小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・落合・山賀・直江・星・谷内各理事、平井・重廣各監事（所用のため神長常務理事は業務執行報告11まで欠席）

欠席者　大槻理事

オブザーバー　節田「山」編集人

【審議事項】

1．海外登山基金の使用計画変更について

海外登山基金からの110周年事業に係る支出の取り崩しおよび同基金の来年度以降の目的（計画）を海外登山等の助成金および120周年記念事業の海外登山の助成金とすることについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

2．平成29年度事業計画書・予算書（案）承認の件について

平成29年度事業計画書・予算書（案）について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

3．会章等の使用に関する規程の制定について

会章等の使用に関する規程の制定について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

4．上高地山岳研究所管理規定および利用要領の一部改正について

上高地山岳研究所管理規程および利用要領を一部改正することについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

5．平成29年度山研管理人の雇用について

平成29年度日本山岳会上高地山岳研究所の管理人およびアルバイトの雇用契約締結について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

6．中部山岳国立公園登山道標識デザインの統一化について

中部山岳国立公園登山道標識デザインの統一化について、環境省に対し当会が一般社団法人全国山の日協議会、公益社団法人

日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、公益社団法人日本山岳ガイド協会とともに要望書を提出することについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

【報告事項】

1. 2月受付分の入会希望者19名および1団体、準会員入会希望者6名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）
2. 日本山岳会再生委員会から準会員入会者数の推移、会員カード申込数および提携先件数の報告があった。（佐藤）
3. 5月13日㈯・14日㈰東京国際フォーラムにて開催予定である「全国山の日フォーラム」の概要について報告があった。（大久保）
4. 全国山の日協議会の継続的な事業に関する標語案について報告があった。（大久保）
5. 安曇野山岳美術館からの「没後20年記念原田達也版画展」への名義後援依頼につき、これを承諾したとの報告があった。（佐藤）
6. 公益法人安曇野文化財団からの「岩橋崇至写真展」への名義後援依頼について、これを承諾したとの報告があった。（佐藤）
7. 5月10日㈬～12日㈮開催の「第59回山松会夏山相談所」への協賛依頼について、これを承諾したとの報告があった。（佐藤）
8. 3月9日㈭に開催された「平成28年度第3回評議員懇談会」において「役員選任及び役員就任年齢の制限」について意見交換を行なったので、今後、理事会において検討、対応していきたいとの報告があった。（佐藤）
9. 2月16日㈭に開催された医療委員会主催講演会「登山者に役立つ膝の痛み・トラブルの予防と対処」について報告があった。（野口）
10. 3月4日㈯・5日㈰に開催された「第5回登山教室指導者養成講習会」について報告があった。（大久保）
11. 平成29年度通常総会出欠はがきを料金受取人払郵便とし、仕様変更することについて報告があった。（佐藤）
12. 平成29年3月末（平成28年度末）会費滞納除籍対象者について報告があった。（佐藤）
13. 「山」3月号の発行予定について報告があった。（節田）

【連絡事項】

1. マナスル環境学術登山隊２０１６報告会について　2月25日㈯東京農業大学

【今後の予定】

1. 次期理事会等
   4月度常務理事会　4月4日㈫18時30分～　集会室
   4月度理事会　4月12日㈬19時00分～　集会室
   平成29年度第1回評議員懇談会　4月18日㈫17時～　集会室
2. 事業計画・予算等
   ・平成29年3月31日㈮　平成28年度会計報告（提出期限）
   ・平成29年6月24日㈯　平成29年度通常総会（主婦会館プラザエフ）

支部の活動報告

北海道支部

２０１６年度は前年度の支部創立50周年を受けて次の１００周年に向けてのスタートの年という位置づけで活動を展開した。新たな公益事業としては8月11日の国民の祝日「山の日」制定に合わせて一般の参加者を募集して、ファミリー登山会を小樽市の塩谷丸山で実施した。支部の会員・会友16名が小学生から高齢者までの32名の参加者をサポートして全員頂上に立つことができた。そのほか、公益事業としては恒例の子供サマーキャンプ、大雪山の高山植物盗掘防止パトロール、ＮＨＫ文化センターの登山教室を実施。一方、共益事業としては支部会員・会友の登山技術向上を目的に岩登り研修、沢登り研修、アイスクライミング研修、さらに雪崩事故防止講習会を開催した。また、四季を通じての定例山行を道内各地の山で実施して会員・会友の相互交流を図った。また、年7回の支部通信、会報「ヌプリ」の発行、親睦のための集会等の事業、行事を企画実施した。

《会議》

＊4月15日㈯　支部総会　２０１５年度事業報告、会計報告、２０１６年度事業計画、予算案、などについて審議、議案すべてを承認。出席１１１名（当日出席44名　委任状67名）。

＊定例の常任委員会　4月～3月毎月1回開催。5～12名の常任委員出席。前月までの活動報告と今後の事業計画等の協議。

《山行・野外活動》

＊雪崩事故防止講習会　○12月14日㈬～15日㈭　第1回実地講習　十勝連峰・三段山　7名参加（うち講師3名）。○1月21日㈯～22日㈰　第2回実地講習　オロフレ山エリア　10名参加（うち講師3名）。

＊岩登り研修　○5月19日㈭　小樽・赤岩　参加者4名。○7月7日㈫　小樽・赤岩　参加者6名　○9月8日㈭　小樽・赤岩　参加者5名。

＊沢登り研修　6月29日㈬札幌近郊・空沼岳湯ノ沢　参加者9名。

＊定例山行（夏山）

○6月21日㈫～22日　夕張岳　金山コース13名参加　○7月

2日㈯～3日㈰　斜里岳　参加者15名。○7月23日㈯～24日㈰　十勝岳　新得コース参加者14名。○9月17日㈯～18日㈰　喜茂別岳／庚申草山　参加者8名。○10月15日㈯～16日㈰函館市・庄司山／北斗市・二股岳　参加者17名。

＊定例山行（山スキー）

○1月11日㈬　札幌近郊・無意根山千尺高地　参加者14名。○1月25日㈬～26日㈭　ニセコアンヌプリ／イワオヌプリ参加者10名。○2月4日㈯～5日㈰　十勝連峰　前十勝岳／三段山　参加者9名。○2月15日㈬～17日㈮　羊蹄山　参加者9名　○3月4日㈯～5日㈰　北大雪・白滝天狗平　参加者10名。

＊ＮＨＫ文化センター　新さっぽろ　登山教室

○「週末はゆっくり登山」5～10月（原則月1回土曜日催行）室蘭岳、黄金山、ニセコ・白樺山～シャクナゲ岳、十勝連峰上ホロカメットク山、尻別岳、風不死岳　○「熟年からのゆっくり登山」5～10月（原則月1回水曜日催行）日高山脈ペラリ山、登別市・来馬岳、積丹岳、小樽天狗山～塩谷丸山、旭川・中鶴根山／旭岳～中岳温泉、札幌岳　○「スノーシューで冬の野山を歩く」1～3月（月2回、第4日曜日催行）札幌・三角山、札幌近郊・蓬莱山、札幌・藻岩山、札幌・白川市民の森青山、赤井川村・丸山、札幌近郊・山鳥峰

《プロジェクト・地域活動》

＊子供サマーキャンプ（第17回自然児学校）

7月28日㈮～30日㈰　日高町・国立日高青少年自然の家からまつキャンプ場で小1から小6までの児童生徒29名と保護者3名が参加して実施。2泊3日のテント生活をしながらツリークライミング、坊主山（７９１ｍ）登山、キャンプファイヤー、手作りパン焼き体験などを楽しむ。

＊山の日制定記念の公募登山

新しい国民の祝日「山の日」に合わせて一般公募のファミリーを対象にした登山会を開催。8月11日㈭に小樽市・塩谷丸山（６２９ｍ）に小学生から74歳までの16家族32名が16名の支部スタッフのサポートで登山し全員無事登頂。

＊高山植物盗掘防止パトロール（花パト）

○5月20日㈮　自然保護研修会　札幌エルプラザで開催　20名参加。

○6月1日～10月10日　大雪山系・十勝連峰地域を24名で延べ１０４回のパトロール実施。

○官民合同パトロール　6月25日㈯　十勝総合振興局　ウペペサンケ登山口でパンフレット配布　1名参加。7月9日㈯　上川総合振興局　大雪山系赤岳・小泉岳をパトロール3名参加。

＊支笏湖復興の森づくり

6月18日㈯　下草刈り作業5名参加、　10月14日㈮　森林伸長量調査　3名参加。

＊山のトイレ関係

6月に十勝連峰美瑛富士避難小屋に携帯トイレブースを設置。道内山岳9団体持ち回りで点検・清掃活動。北海道支部は8月2日㈫～3日㈬に3名参加で実施。

＊海外登山調査研究

千島列島の調査研究を目指す北海道大学との「生態系観察登山」の実施に向けて　2月1日㈬に札幌エルプラザで大学関係者と支部会員合同の勉強会を開催。

《広報・出版活動》

＊支部通信　年7回発行　会員会友へ郵送またはメール送信で配布（約300部）。

＊北海道支部会報『ヌプリ』の第47号4月1日発行　山の関する紀行文、エッセイ、山の歴史・評論などを掲載。

《その他行事・集会》

＊各種集会

○8月27日㈯　夏季交流会　ルーム白石　会員会友合計16名出席。○12月10日㈯　北海道支部年次晩餐会開催。会員・会友等58名出席。○1月19日㈭　新年交流会　ルーム白石　22名参加。　○11月18日㈮　北海道内山岳団体交流会　札幌ガーデンパレス・レストランで9団体から38名参加。団体は北海道山岳連盟、日本山岳会北海道支部、札幌山岳連盟、北海道山岳ガイド協会、日本ヒマラヤ協会、ＨＡＴ-Ｊ北海道支部、北海道道央地区勤労者山岳連盟、北海道勤労者山岳連盟、山のトイレを考える会

（藤木俊三）

■　青　森　支　部

平成28年度の青森支部の活動は、5年ぶりに新入会員1名を獲得することができた。地域に根ざした公益事業として、年2回実施の白神山地ブナ林再生事業、八甲田山遭難防止対策スキーコース・ポール立て、北八甲田山登山道維持ボランティアなど、多くの登山者から感謝された。また「山の日親子登山」を行なった。親子登山は60名（支部会員12名）の参加があり、支部会員の活性化にもつながり盛会裏に行なわれた。主な活動は次のとおりである。支部現勢40名。

《会議・その他》

＊5月14日㈯　青森支部総会　青森ワシントンホテル　参加12名。

＊11月12日㈯　支部年次晩餐会　青森ワシントンホテル参加11名。

＊12月3日㈯　日本山岳会年次晩餐会　東京　参加8名（含家

族）。
＊2月24日㈮　北八甲田登山道維持ボランティア懇談会　青森県庁観光課　参加2名。
＊3月3日㈮　南八甲田登山道管理連絡会発足　環境省十和田湖湖畔　参加2名。
《山行・野外活動》
＊4月29日㈮～5月1日㈰　支部春山スキー山行　酸ヶ湯温泉駐車場　参加7名。
＊7月3日㈰　青森ウェストン祭　新郷村　参加5名。
＊7月30日㈯～31日㈰　第32回東北・北海道地区集会　秋田支部森吉山　参加8名。
＊10月1日㈯～2日㈰　支部秋山山行　下北大尽山　参加6名。
＊11月19日㈯～20日㈰　支部晩秋山行　北八甲田仙人岱小屋　参加4名。
＊1月1日㈰～2日㈪　支部冬山山行　北八甲田仙人岱小屋　参加1名。
＊1月14日㈯～15日㈰　山岳スキー研修　竹越会員山荘　参加13名。
《プロジェクト・地域振興活動》
＊6月25日㈯～26日㈰　白神山地ブナ再生事業春季　参加19名
＊7月9日㈯　北八甲田登山道維持活動　県観光企画課　参加8名。
＊8月11日㈭　山の日　親子登山　戸来岳　参加60名（支部会員12名）。
＊9月24日㈯～25日㈰　白神山地ブナ再生事業秋季　参加10名。
＊2月27日㈪～28日㈫　八甲田山スキーコース・ポール立て　参加5名
＊3月28日㈫～29日㈬　八甲田山スキーコース・ポール立て　参加6名。

（須々田秀美）

■岩手支部

平成28年度は、例年になく山の行事や記念事業が続き、岩手の岳人にとっては多忙な1年であった。八幡平地域が十和田八幡平国立公園に指定されて60周年を迎えた6月を皮切りに、8月11日の「山の日」制定、次いで「希望郷いわて国体・大会」の開催県であったことから、数年前より準備体制に入り10月の本番終了後の締めくくりまで、県内至る所で会員各位の活躍が輝いた。特に岩手県山岳協会会長の高橋時夫会員は国体副部長として、また藤井公博会員が全国障害者スポーツ大会県選手団長の大役を担い、3年後のオリンピックを視座した完成度の高い結果へ導いている。

岩手支部は4月の総会で新支部長に阿部陽子会員を選出して

スタート、他の役員はほぼ留任し、年度前半の事業は旧3役による企画を遂行した。その一つは、菅原敏夫前支部長が音頭をとって一般公募した山の日制定記念「標高811mの藩境塚を訪ねる」である。『岩手日報』の無料情報欄で呼びかけたところ、11名の一般参加があった。

年度後半に至って準会員制度等を公知したところ、2名の会員と6名の準会員を獲得できた。近年は会員が減少し、支部財政が困窮してきていただけに、新体制での会員急増は驚くべき変化であり、喜ばしい限りであった。その背景には、山行の一般参加を募集したことや、岩手放送ラジオの番組「いわての山トレッキングガイド」が3年を越えて定期放送され、日本山岳会の知名度がメディアを通じて上昇したこと、さらには会員各位の熱心な勧誘が相乗効果をもたらしたと考察される。山ブームでありながら山岳会への所属意欲が薄い昨今、日本山岳会岩手支部ならではの活動を見出したいものである。

《会議》

＊4月2日㈯　支部委員会　委員11名。

＊4月2日㈯　総会　27年度事業報告、決算報告、28年度事業計画・同予算案の審議、新役員体制の選出　会員17名。

＊10月21日㈮　第1回支部役員会議　4名。

＊12月10日㈯　支部全員協議会（委員会）29年度山行計画等の審議　会員15名。

＊2月18日㈯　第2回支部役員会議　4名。

＊4月1日㈯　第3回支部役員会議　5名。

《山行・野外活動》

＊4月23日㈯　4月例会「箱ヶ森」公益　参加9名、一般1名。

＊5月21日㈯　5月例会「遠野3山パトロール・又一ノ滝・遠野市内」公益　参加7名。

＊5月28日㈯　下見登山「夏油高原高森・三角沼」　参加4名。

＊6月18日㈯　6月例会「遠野3山パトロール・六角牛山」公益　会員8名。

＊6月19日㈰　残雪の裏岩手連峰開山祭（八幡平市）後援5名。

＊7月1日㈮　岩手山山開き　参加2名。

＊7月9日㈯　7月例会「薬師岳・又一ノ滝縦走」公益　参加6名。

＊7月30日㈯～31日㈰　第32回東北・北海道地区集会　森吉山参加5名。

＊8月11日㈭　「山の日」制定記念山行「標高811m夏油高原高森・三角沼」公益　参加7名、一般公募11名。

＊8月27日㈯～28日㈰　岩手山8合目避難小屋管理　参加3名。

＊9月10日㈯　9月例会「稲庭岳」公益　参加4名、一般公募4名。

＊9月24日㈯　遠野3山パトロール「六角牛山」公益　参加5

名。
＊10月8日(土)　10月例会「女神山と子規古道」公益　参加6名、一般2名。
＊11月12日(土)　11月例会「大股山・綾里富士」　参加7名、一般8名。
＊12月10日(土)　12月例会「東稲山」　参加12名。
＊1月14日(土)　1月例会「太田薬師」　参加9名、一般3名。
＊3月4日(土)　2月例会「網張スキー」　参加8名。
＊3月25日(土)　3月例会「平庭岳」参加8名、一般1名。
《広報》
＊9月30日(金)　支部通信第44号発行。
＊3月20日(月)　支部通信第45号発行。
《その他の行事・懇親会》
＊4月2日(土)　支部懇親会。
＊12月10日(土)～11日(日)　国民宿舎衣川荘　忘年会15名。

（阿部陽子）

■宮城支部

宮城支部は1958年に設立され今年で59年目、来年度は60周年を迎える。会員数は漸減が続き、4月1日現在、会員44名、準会員1名の45名となっている。また、2014年に発足した支部友会会員は11名で、主に宮城の里山を中心に活動を続けている。

今年度は公益事業の一環として、登山教室や親子登山教室に力を注いできた。これらの事業は将来における支部会員、支部友会員増を期待しての実施であるが、親子登山教室は不調で、公募方法に課題を残した。

このほかに、月例の役員会と山行および仙台市内小学校登山教室支援を行なっている。また、「山の日」記念事業として、山形支部との交流登山も実施した。さらに、福島第一原発事故の影響把握を目的に実施した空間放射線量調査について、阿武隈山域の調査結果を「原発事故による阿武隈山域の放射線量」と題し『山岳』111年に掲載された。この報告については「別刷」として日本山岳会関係者以外の方々にも配布するとともに、2016自然保護全国集会でその概要を報告した。なお、この調査の功績に対し、当支部柴崎自然保護委員長は、日本山岳会会長特別表彰に佳(よ)くされた。

今年度の特記すべき活動として、中華民国山岳協会との30年ぶりの交流が挙げられる。宮城支部唯一の名誉会員であり、台湾稲作発展の恩人と称される平澤亀一郎寿翁等を紹介・展示する記念館を台湾政府が一昨年12月に開設した。寿翁は中華民国山岳協会の設立時にも尽力された経緯があり、寿翁生前中には宮城支部と同協会との交流が行なわれていた。記念館の開設を

機に、途絶えていた交流が、同協会顧問張玉龍氏一行7名の来仙により、交流が30年ぶりに復活した。一行は7月24～31日まで在仙し、宮城支部との交流・親交を深めた。在仙中には宮城支部有志のお手伝いの下、寿翁ゆかりの山「仙台カゴ」登山や、「ビアパーティ」、「蔵王・松島観光」、「東日本大震災被災地視察」、「宮城県庁訪問」、「月山登山」などを楽しんでいただいた。

《会議》

＊4月24日㈰　総会　事業報告・計画、決算・予算の審議　出席者35名（当日出席16名、委任状19名）。

＊定例役員会　5月11日㈬、6月15日㈬、7月13日㈬、8月17日㈬、9月21日㈬、10月26日㈬、11月23日㈬、1月18日㈬、2月15日㈬、3月15日㈬　出席者延べ数107名。

《山行・野外活動》

＊5月22日㈰　第3回登山教室（仙台カゴ）会員10名、支部友会会員8名、一般13名参加。

＊6月12日㈰　梅雨払い山行（大倉山）会員10名、支部友会会員5名参加。

＊6月18日㈯～19日㈰「山の日」記念宮城・山形支部交流登山（摩耶山）会員11名、一般7名参加。

＊7月21日㈫～24日㈮　夏山山行（甲斐駒ヶ岳＆仙丈ヶ岳）会員2名、支部友会会員1名参加。

＊7月30日㈯～31日㈰「山の日」制定記念第32回東北・北海道地区集会（森吉山・桃洞滝）会員9名、支部友会会員2名参加。

＊8月7日㈰　第2回親子登山教室（フリー山行＝ハマグリ山）会員5名参加。

＊8月28日㈰　沢登り山行（振子沢）会員3名参加。

＊11月6日㈰　第3回親子登山教室（七ツ森、笹倉山）、会員7名、支部友会会員2名、一般7名参加。

＊11月27日㈰　第4回登山教室（オボコンベ山）会員4名、支部友会員6名、一般14名参加。

＊1月15日㈰　冬山山行（面白山）会員6名、支部友会会員1名、一般2名参加。

＊2月12日㈰　厳冬期山行（刈田岳）会員2名、支部友会会員2名参加。

＊3月26日㈰　春山山行（阿武隈山地）会員9名、支部友会会員7名、一般3名参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊槇有恒寿翁学習活動事業P・T打合せ会の開催。

《講習会》

＊第4回登山教室指導者養成講習会の開催

10月15～16日、主催＝(公社)日本山岳会支部事業委員会、共催の東北ブロック、主管の宮城支部の下に各支部の次期リーダー育成を通じ、資質を備えた会員の増強および活動の一層

の活性化に資するための講習会を実施した。講習は講義と実技からなり、講師は日本山岳会の理事でもある日本登山医学会理事の野口いづみ氏、日本山岳会支部事業委員会委員長の宮崎紘一氏、日本山岳協会認定登攀ガイドの松原直之氏が務めた。東北各支部からの受講者は26名だった。

《広報・出版活動》

＊支部情報誌「宮城山岳通信」の発行

今年度は10月（第7号）を発行して支部会員、支部友会会員、日本山岳会（本部および各支部）に送付した。

＊「原発事故による阿武隈山域の放射線量」の題で「山岳（111年）」に掲載された記事を「別刷」とし山岳関係機関以外にも送付した。

《その他の行事、懇親会》

＊ビールパーティー　7月27日㈬　H・JALシティ仙台　25名参加（中華民国山岳協会張玉龍氏他招待）。

＊支部晩餐会（望年会）　12月11日㈰　シェルブール仙台　22名参加.

（冨塚和衛）

■秋田支部

秋田支部は設立58年周年を迎え、会員数は59名。会員の高齢化、減少は避けられない状況にある。支部の活性化を図るため、中堅会員の登山教室指導者養成講習会への参加などを助成した。また、活動会員が固定化していることから、会員増の努力をし、活性化を図りたい。

28年度の主な事業としては、第32回東北・北海道地区集会が秋田支部主管で開催された。

《会議》

＊4月2日㈯通常総会　27年度事業報告、決算の承認。28年度事業計画、予算案の審議。出席52名（当日出席25名、委任状27名）

＊第32回東北・北海道地区集会担当者会議

・4月18日㈪　担当者会議4名出席。
・5月19日㈭　担当者会議8名出席。
・5月26日㈮　阿仁森吉センター現地会議3名出席。
・6月17日㈮　担当者会議4名出席。
・6月20日㈯　森吉山荘打ち合わせ2名出席。
・7月16日㈯　桃洞沢散策現地調査6名参加。
・7月23日㈯　森吉山登山現地調査10名参加。

＊7月2日㈯　役員会　東北・北海道地区集会について協議11名出席。

＊9月8日㈭　役員会　東北・北海道地区集会について報告9名出席。

＊1月21日(土)　29年度通常総会に提出する議案の審議。11名出席。
＊2月16日(木)　準会員規程制定の周知や会員増の協議10名出席。
《山行・野外活動》
＊5月21日(土)　春の里山山行・勝軍山　参加18名（内会員外5名）。
＊7月30日(土)　第32回東北・北海道地区集会開催　87名参加。
＊7月31日(日)　第32回東北・北海道地区集会記念山行　森吉山登山・桃洞沢散策82名参加。
＊10月23日(土)　秋の里山山行・源五郎岳　参加15名（内会員外4名）。
《プロジェクト・地域振興活動》
＊5月21日(土)　勝軍山に標柱を設置・公益（登山振興）参加3名。
＊6月12日(日)　太平山山開き市民登山に協力・公益（登山振興）秋田市からの一般参加者約30名をサポート。支部会員参加12名。
＊11月5日(日)　太平山歩道整備および標柱取付け、倒木処理・中岳周辺刈り払い。公益（登山振興）参加17名（会員11名、太平山県立自然公園管理員1名、会員外5名）。
＊「自然学習センターまんたらめ」で行なう自然観察会、太平山登山などに協力。4月～10月　小・中学生延べ76名、一般参加約60名、そのほか。
＊10月15日(日)～16日(月)　第4回登山教室指導者養成講習会3名参加。
《広報・出版活動》
＊支部会報「秋田山岳」第100～103号まで4回発行。
＊28年度から「支部だより」第1～2号を発行。広報活動として、支部会員および各支部、他山岳会や公民館等に配布。
《その他の行事、懇親会》
＊4月2日(土)　通常総会終了後懇親会を開催、出席26名。
＊4月9日(土)～10日(日)　全国支部懇談会、4名参加。
＊12月5日(土)　日本山岳会年次晩餐会に参加4名。
＊1月21日(土)　新年会を開催、14名参加。

（鈴木裕子）

山形支部

2016年度会員動向は、物故会員2名（3170後藤又兵衛、10643　佐藤　誠二両氏）、新入会員1名で、支部会員数57名（永年会員6名）である。
支部活動は高齢化の大きな波で、残念ながら活発とはいいがたい状態である。加えて、支部活動の基となる総会、支部晩餐

会や山行などのはがき回収率が低迷していることである。目標回収率など書き込み協力を呼び掛けているが、回収率向上がなかなか定着しない。さらに、近年、支部役員辞退、断りが相次ぎ、深刻な問題となっている。

このような状況を思うとき、山を介して集まった会員があっての支部であり、支部運営に苦慮する問題点を各会員、支部として考えてみる必要性を感じている。

《会議》

＊支部総会　4月16日(土)　山形ビッグウイング　20名出席。

＊役員会　3回（6月4日、10月29日、3月11日、いずれも土曜日）。

＊支部長・事務局会議　9月24日(土)～25日(日)　東京　支部長・事務局長出席。

支部長会議　12月3日(土)　東京　支部長出席。

《山行》

＊全国支部懇談会（越後支部）　弥彦山　4月9日(土)～10(日)　5名参加。

＊第1回支部山行　一年峰（高畠・米沢）　5月22日(日)　2名参加。

＊山形・宮城支部交流登山　6月18日(土)～19日(日)　摩耶山（越沢口）・羽黒山　宮城19名、山形12名、計31名参加。

＊東北・北海道地区集会　7月30日(土)～31日(日)　森吉山　3名参加。

＊第2回支部山行　日本国　9月4日(日)　7名参加。

登山教室指導者養成講習会（宮城支部）　10月15日(土)～16日(日)　秋保温泉　1名参加。

＊第3回支部山行　蔵王樹氷原を滑る会　1月20日(金)～22日(日)　蔵王ヴァルトベルグ　宮城1名、ＡＳＣ3名、支部5名、計9名参加。

＊第4回支部山行　鳥海山　3月11日(土)～13日　ベース＝山雪荘　5名参加。

《地域振興活動》

＊登山路整備　松田会員による大山高館山から由良八乙女浦まで約10㎞に及ぶ「庄内海岸アルプス」（仮称）の精力的な登山路補強と刈払が年間を通して行なわれている。支部で2回の手伝いを行なった。

・庄内海岸アルプス（仮称）　8月21日(日)　荒倉山（登山路補強・刈払）8名参加。

・庄内海岸アルプス（仮称）　10月16日(日)　荒倉山（登山路補強・刈払）5名参加。

《公益目的事業》

＊公益清掃登　7月10日(日)　蔵王連峰（刈田岳・馬ノ背・熊野岳・中丸山・坊平）7名参加。

＊第23回アルパインフォトビデオクラブ写真展　6月5日(水)

～22日㈬　酒田市総合文化センター　クラブ所属支部会員3名中心に開催　推定1200名来場。

＊「学校から見える山」プレゼント　5月～10月　庄内地区の金峯山・母狩山の鳥瞰図とパノラマ図に山の説明文を添えて金峰少年自然の家利用　児童1学年1クラス分を寄贈。

《懇親会》

支部晩餐会　11月12日㈯～13日㈰　大堀温泉（最上町）　18名参加。今回も畠中永年会員から参加者全員に地元に遡上する鮭の味噌粕漬のプレゼントがあった

《自然保護関係》

自然保護全国集会（7月16～17日）には自然保護委員が不在で不参加だったが、その後2名の申し出があった。

《今後の課題》

何とか支部活動を継続しているが、支部役員の辞退、断りの陰が支部活動に影響している。この傾向がこのまま続くのであれば、支部として由々しき問題になりかねない状況である。このような状況を支部会員全員の問題とするためにも、はがき回収率を根気よく呼びかけ、諸々の行事への参加を促していきたい。

支部活動を広げ、仲間意識高揚を目指しての支部会報「山」の発行を目指したが、残念ながら実現しなかった。

（木村喜代志）

■福島支部

福島支部は平成29年12月に創立70周年を迎え、①記念誌出版（資料発掘）、②記念山行、③70周年式典開催の3事業を行なうことを決定。平成28年度はその集大成であることを念頭に支部一丸となって取り組んだ。

公益事業では、東日本大震災の年から継続してきた山岳3地域（吾妻、安達太良、那須・甲子）放射線量調査と記録化を実施し、測定値が年々低下していることを把握した。さらに登山道整備、植生復元、一般公募の「岩登り講習会」、第1回山の日には「あだたら山親子登山」を実施し、17家族74人の参加を得て盛況のうちに終了した。しかしその中身は一部会員の参加によるものであり、会員拡大も成果を得られなかったことが反省点として上げられ今後の課題でもある。

《会議》

＊4月16日㈯　支部総会　事業報告、計画、決算、予算、支部役員案など満場一致で可決。出席者19名（委任状44名）。

＊4月2日㈯　第1回支部役員会、出席10名。

＊9月24日㈯　第2回役員会兼70周年記念事業委員会、出席10名。

＊11月11日㈮　第拡大役員会開催、支部活動中間総括と次年度事業方針について協議、出席12名。

＊2月4日㈯　臨時役員会・70周年記念事業実行委員会、12名出席。

《山行・野外活動》

＊5月28日㈯「第3回フリークライミング講習会」開催、地元紙に行事内容を提供　会員7名、非会員10名参加。基本技術と実技習得。

＊6月3日㈮　尾瀬長蔵小屋平野太郎氏と面接、支部で寄贈した山の鐘調査実施、6名参加。

＊6月4日㈰　支部創立70周年記念男鹿岳登山、8名参加。

＊8月4日㈭～7日㈰　支部創立70周年記念飯豊連峰縦走登山実施、参加9名。

＊9月27日㈫～28日㈬　黒部源流下の廊下遡行、参加4名。

＊10月16日㈰～18日㈫　穂高涸沢登山、参加6名。

＊11月14日㈪　支部創立70周年記念二ツ箭山登山、参加114名。

＊3月24日㈮春山スキーツアー（裏磐梯・高曽根山）実施、8名参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月上旬～11月　山岳地域放射線測定（公益）吾妻、安達太良、那須甲子を選定　山頂、登山道の定点測定実施。

＊6月19日㈰　吾妻山登山道整備作業実施、7名参加。

＊9月5日㈪　吾妻山登山道復元作業実施、8名参加。

＊10月22日㈯　吾妻山植生復元作業支援（地元自然保護クラブ主催）を実施、7名参加。

《広報、出版》

＊支部広報誌「支部会報8～13号」発行。

《その他の行事、懇親会》

＊9月4日㈯　吾妻小舎での「支部納涼会16名参加。

＊2月　4日㈯　支部新年会　二本松市内22名参加。

（渡部展雄）

■茨城支部

茨城支部は2017年に創立10周年を迎えて、節目の年として10月13日㈮～14日㈯に茨城支部主催で全国支部懇談会（山は筑波山）を実施する。全国最小規模の支部なので全員参加で2016年はその準備を行なった。支部総会は年1回、6月に開催し、支部例会は隔月に開催している。総会と支部例会に先行して2時間、公益事業として一般市民にも公開した講演会を開催している。支部山行は、ほぼ毎月実施し、そのほかに公益事業として茨城県自閉症協会親子登山への協力登山を当支部会員が数名参加し実施している。茨城支部報は年1回、6月に発行している。平成29年3月末現在、会員44名、支部友15名、合計59名。

《講演会》

公益事業として会員以外の一般市民にも公開

＊4月23日(土)「地磁気の逆転」茨城支部会員・河村譜氏（元気象大学校長、理学博士）。会員20名、一般市民10名、計30名参加。

＊6月19日(日)「シルクロードを巡る旅　その2」茨城支部事務局長・西川元禧氏。会員22名、一般市民8名、合計30名参加。

＊9月4日(日)「茨城県で本当に怖い異常気象」茨城支部会員・清水輝和子氏（気象予報士）。会員22名、一般市民10名、合計32名参加。

＊11月13日(日)「インド北部のチベット文化圏キナール、スピティ、ラホールの谷」　茨城支部会員・長岡正利氏。会員20名、一般市民13名、合計33名参加。

＊1月14日(土)「定点観測で見つめる日本の高山帯の変化」茨城支部会員・小熊宏之氏（工学博士、国立環境研究所勤務）。会員20名、一般市民3名、合計23名参加。

《支部山行》

＊4月10日(日)　花の筑波山（山田茂則L）　5名参加。

＊5月15日(日)　奥多摩・御嶽山～日ノ出山（西川L）　7名参加。

＊5月22日(日)　群馬・太田金山（高木L）　5名参加。

＊6月4日(土)　山梨　道志山塊・高川山（柳L）　5名参加。

＊9月1日(木)～3日(土)　新潟・荒沢岳、未丈ヶ岳（山田明L）　2名参加。

＊9月17日(土)　山梨　大月・岩殿山（高木L）　7名参加。

＊10月4日(火)～7日(金)　秋の涸沢（齋藤L）　11名参加。

＊10月16日(日)～17日(月)　キノコ山行、会津・七ヶ岳（山田茂則L）　11名参加。

＊11月6日(日)　筑波山芋煮会（山田茂則L）　24名参加。

＊12月8日(木)～9日(金)　忘年山行・筑波山薬王院コース（山田茂則L）　14名。

《特別山行》公益事業として茨城県自閉症協会　親子登山への協力登山

＊6月17日(金)　尾瀬下見登山（齋藤L）。茨城支部2名参加。

＊8月6日(土)～7日(日)　会津・大杉岳、尾瀬散策（齋藤L）　茨城支部4名、協会41名参加。

＊10月22日(土)～23日(日)　尾瀬・燧岳（齋藤L）茨城支部3名、協会6名参加。

《広報活動》

6月1日(水)「茨城支部報（年1回）の発行。

《その他の行事》

＊4月9日(土)～10日(日)　全国支部懇談会（越後支部主催）弥彦山。茨城支部6名参加。

＊8月11日(木)　支部会員の親睦を深めるため、牛久シャトーで納涼ビアパーティを開催。

＊9月11日(日)「山の日」記念交流ハイキング　筑波山（山岳3団体での共催）　200名参加。
＊12月3日(土)　日本山岳会晩餐会　京王プラザホテル　茨城支部12名参加。
＊2月18日(土)～19日(日)　栃木・千葉・茨城・群馬4支部合同懇談会（群馬支部主催）富岡アルプス・神成山または世界遺産富岡製糸場見学　茨城支部9名参加。

（西川元禧）

■栃木支部

栃木支部は設立して10年目となり、11月に支部創立10周年記念式典・祝賀会を開催した。山岳会本部・北関東ブロック関係者のほか、公益事業を共催している栃木県山岳連盟と栃木県青年会館にも来賓として出席いただいた。創立からの連綿とした活動を評価していただいている。

支部会員数はここ数年50名程度で推移している。新入会員もあったが、亡くなられた会員もあり会員増には至っていない。会員の高齢化は進んでいて、支部活動を担う若手会員の増強が急務である。

若年層対応として活動しているユース栃木は、県高校山岳部に協力し合宿などのサポート登山を行なった。3月に起きた那須岳での高校山岳部の雪崩事故には参加していなかったが、支部として安全な登山のための若手に対する指導・育成を心掛けていきたい。また中高年層に対するマスターズクラブは「栃木百名山登山」を継続している。

公益事業は、登山の振興と安全登山教育を目的に奥日光で行なう「親子登山教室」は5年目を迎え、今年度は男体山で実施した。下野新聞の「山の日」記念「とちぎ私の山同行記」男体山登山取材も同日行なわれ、大きく記事になり山岳会の良いPRとなった。また、第10回となる「山の講演会」は支部創立10周年記念行事の一つとして行なわれた。重廣恒夫講師は歩んできた登山をたどり、「探検的ヒマラヤ登山のすすめ」を提唱した。

《会議》
＊5月29日(日)　通常総会　事業報告・計画、決算・予算・記念行事募金および栃木支部規約改定など原案通り満場一致で可決した。出席27名。総会終了後日下田名誉会員を囲んで「マナスル登頂60周年をお祝いする会」を開催。
＊支部役員会　平成28年度役員会11回開催。支部役員12名と事業委員6名が集まり、支部運営や事業について協議。

《山行・野外活動》
＊4月24日(日)　春山山行　日光霧降高原歩道と外山登山　参加11名。
＊8月20日(土)～21日(日)　夏山山行と懇親会　奥鬼怒加仁湯、鬼

怒沼山　参加15名。

＊10月29日(土)　秋山山行　男体山　参加14名。

＊1月22日(日)～23日(月)　冬山山行と新年会　塩原明賀屋本館、前黒山　参加15名。

＊右記支部山行のほか、ユース栃木は4月に成蹊学園虹芝寮を拠点とした一ノ倉岳スキー登山、7月に北岳（高校夏山合宿サポート）を行なった。マスターズクラブは5～2月に栃木百名山に4つある「鶏」の付く山などの山行を実施した。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊7月3日(日)　日光清掃登山　栃木県山岳連盟との共催　前白根山・奥白根山・五色山ほか　参加者約200名（内支部関係者11名）。

＊7月23日(土)～24日(日)　親子登山教室　奥日光の光徳・男体山で開催。学習院山桜会や栃木県山岳連盟・県教育委員会などの後援を受け実施。参加親子12家族28名、支部関係者10名。

＊9月4日(日)　那須岳クリーンキャンペーン　那須茶臼岳　参加者約120名（内支部関係者9名）。

＊11月27日(日)　支部創立10周年記念式典・祝賀会　小林日本山岳会会長、北関東ブロック各支部長、栃木県山岳連盟会長（代理）、栃木県青年会館理事長の来賓6名、出席者38名で実施。

《広報・出版活動》

＊11月27日(日)　栃木支部創立10周年記念誌（支部報第9号）を発行。

《講演会》

＊9月27日(火)　第8回ヒマラヤの集い「赤道直下エクアドルの山々～赤道直下の氷河の山を映像で紹介～」　講師　高所登山家　パトリシオ・ティサレマ氏。講演会後に講師を囲んで懇親会を実施。参加者40名（内支部関係者20名）。

＊11月27日(日)　第10回「山」の講演会　支部創立10周年記念行事の一つとして、式典・祝賀会と同日開催した。「21年ぶりのヒマラヤ登山―ナンガマリⅡ峰（6209m）初登頂―」講師　重廣恒夫氏。講演会後に講師を囲んで懇親会を実施、参加者約90名（内支部関係者47名）。

《「山の日」制定記念行事》

＊8月11日(木)　栃木県「山の日」制定記念フェスティバル　日光だいや川公園。一般参加者約2000人。栃木県山岳3団体（栃木県山岳連盟・栃木県勤労者山岳連盟・日本山岳会栃木支部）で『ふるさと「栃木」の山を登ろう！』をキャッチフレーズに、ブースを設け『ふるさと「栃木」の山登山相談所』を開設し来場者の相談に応じた。

＊8月12日(金)　栃木県「山の日」協議会主催　ファミリー登山教室　日光霧降高原　参加親子98名。栃木県山岳3団体で、安全な山登りの楽しみ方や自然の素晴らしさを体験する登山。栃木支部は隠れ三滝コースを担当。　**（前田文彦）**

群馬支部

群馬支部にとって平成28年度は、従来の事業を継承しつつも、それらを着実に発展させ、進化させることのできた1年であった。さらに新しい活動の枠組みやテーマにも取り組んだ1年でもあった。

群馬県庁で8月に開かれた「ぐんま山フェスタ」では、地元紙の上毛新聞社、県山岳連盟、県勤労者山岳連盟とともに共催団体に加わり、その企画段階から携わった。群馬支部ではマナスル60周年を記念した記録映画と田中支部長による講演を柱に山岳写真展や相談コーナーなども設け、来場者に山の魅力をアピールした。さらに、日本山岳会3代会長木暮理太郎を顕彰する出身地太田の「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の協力による資料展示なども行なった。イベント全体としても成功を収め、来場者数は3日間開催の前年に比べ、2日間開催であったにもかかわらず、倍増の5500人に達した。

8月には、谷川岳を舞台に「山の日記念イベント」も開かれ、群馬支部では谷川山麓での家族自然観察ツアーを実施した。このイベントをみなかみ町や地元団体とともに共催した群馬県山岳団体連絡協議会は、28年4月に県山岳連盟、県勤労者山岳連盟と群馬支部によって設立された。協議会では、群馬の山のグレーディングや「ぐんま県境稜線トレイル」の現地調査や推進シンポジウムの開催などにも取組んだ。

支部山行も2年目を迎え、谷川岳周辺での自然観察ツアー、合同支部懇の直前下見山行なども含めると年4回実施し、尾瀬宿泊山行では支部会員の懇親を深めることもできた。さらに武田会員がマナスル60年の記念すべき年にマナスル登頂を果たしたことも特筆すべきニュースであった。

今年2月には千葉・茨城・栃木・群馬4支部の合同懇談会を初めて県内で開催し、4支部の会員など50人を超える県内外の山岳関係者が集まり盛況だった。

《会議》

＊5月18日㈬　通常総会（前橋・群馬県社会福祉総合センター）第16回例会を兼ねて開催。27年度事業報告・決算報告、28年度事業計画・予算案などを審議。出席21名・委任4名。

＊7月20日㈬　第17回例会（高崎・城址公民館）　山フェスタ（8月6・7日　群馬県庁）、山の日イベントin谷川岳（8月11日）、上州武尊スカイビューウルトラトレイル（9月10～12日）などについて報告・協議。ショートスピーチ＝佐藤光由「登山ブームと遭難」、出席14名。

＊9月21日㈬　第18回例会（前橋・群馬県社会福祉総合センター）　山フェスタ、山の日イベント、上州武尊スカイビューウルトラトレイル、支部合同会議などの報告。4支部合同懇談会などについて協議。ショートスピーチ＝武尾誠「ロング

トレイル」、出席21名。

＊11月16日㈬　第19回例会（高崎・城址公民館）　県民登山、支部山行（尾瀬アヤメ平）などについて報告。来年度支部事業について協議した。ショートスピーチ＝武田裕光「マナスル登頂」、出席12名。

＊1月18日㈬　第20回例会　（前橋・うたや）　今年度事業報告、来年度事業計画の件、4支部合同懇談会、3月の稜線トレイル推進シンポジウムなどについて。出席22名。会議後新年会を開催。

＊3月15日㈬　第21回例会　（高崎・南公民館）　4支部合同懇談会の総括、来年度事業計画の進展状況について報告、山岳写真協会両毛支部展への後援について協議・承認ほか。出席18名。

《山行》

＊6月5日㈰　第3回支部山行　富岡神成山　合同支部懇談会の下見山行を兼ね実施。参加9名。

＊10月15日㈯～16日㈰　第4回支部山行　尾瀬アヤメ平、ロッジ長蔵泊。参加7名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊8月6日㈯～7日㈰　ぐんま山フェスタ2016（群馬支部共催）　マナスル60年記念イベント「映画と講演」、写真展示、相談ブースなど。一般来場者およそ5500人、支部会員13名が企画・運営に参加。

＊8月11日（木・山の日）　山の日記念イベントin谷川岳　みなかみ町の谷川岳周辺で開催。群馬県山岳団体連絡協議会が地元団体とともに共催。群馬支部が主管した自然観察ツアーのほか、谷川岳登山、清水峠越えなどに450人の一般参加、支部から10名が講師・スタッフとして参加。

＊9月10日㈯～12日㈪　上州武尊スカイビューウルトラトレイル（県岳連他主催）　定員700人、支部から2名が運営スタッフとして参加。ほかに岳連会長・理事長の支部会員2名も参加した。

＊10月30日㈰　群馬県民登山大会（県岳連主催）　赤城山で実施。併催のチャレンジキッズ（子ども登山体験）に支部から2名がスタッフとして参加。

＊11月3日　木暮理太郎碑前祭と偲ぶ会（木暮理太郎翁の足跡をしのぶ会主催）　日本山岳会3代会長木暮理太郎の生家近くで開かれた碑前祭と偲ぶ会に支部から3名が出席。

＊3月18日㈯　ぐんま県境稜線トレイル推進シンポジウム（群馬県主催）　群馬県が進めている「ぐんま県境稜線トレイルプロジェクト」の周知を図るため、後援の上毛新聞社、運営協力の山と溪谷社の助力も受け協議会が共催。群馬県庁県民ホールで女優の工藤夕貴さんの講演会、稜線トレイル関係者によるパネルディスカッションなどを開いた。一般来場者4

００人、支部から7名が企画・運営スタッフとして参加。

《広報・出版活動》

＊支部報第４号を７月、第５号を１月に発行した。それぞれ２００部、２５０部を印刷し、支部員、ＪＡＣ本部と各支部ほか県内山岳団体などに配布した。

《そのほか》

＊群馬県による「山のグレーディング」策定事業では、県山岳団体連絡協議会のワーキンググループに山行歴豊かな会員を５名が参加、７月末に公開の運びとなった。

＊同じく県が進めている「ぐんま県境稜線トレイル」のプロジェクトは谷川連峰から四阿山南の鳥居峠までの１００㎞の稜線をたどるロングトレイル整備計画。この計画推進に県山岳団体連絡協議会の一員として岳連、労山とともに加わった。現地調査では県西部の四阿山、草津白根山・万座温泉周辺地域を担当。また三国峠～白砂山間の未開通区間の調査には本隊、サポート隊に各1名を派遣した。前記の推進シンポジウムにも中心メンバーを送り出しその開催に注力した。

＊千葉・茨城・栃木・群馬４支部合同懇談会を２月18日㈯～19日㈰、富岡市の妙義グリーンホテルで開催した。１日目は講演会、懇親会。２日目の山行では西上州を仰ぐ神成山で低山ハイキングを楽しんだ。観光組は世界遺産の富岡製糸場を訪ねた。参加合計54名。

（根井康雄）

■埼玉支部

平成28年度は8月11日に「山の日」が施行された記念事業として、埼玉県山岳連盟と共催で武甲山登山、記念講演会&コンサート、秩父夏休み親子キャンプを実施した。

支部活動は各委員会が年間計画を掲げて支部事業を推進している。広報委員会では、会員への迅速な情報公開、新規会員の獲得および一般登山者への情報提供を目的に、埼玉支部ホームページをリニューアルし、年３回の支部報の発行を実施した。社会貢献委員会では埼玉県障害者スポーツ協会と共催で、障がい者およびその家族とともに登山を楽しむ毎年恒例となった「ふれあい登山」を大高取山で実施。

自然保護委員会では越生町教育委員会の後援で「大高取山自然観察会」、さいたま森林サポータクラブと「森づくり」を共催した。山行委員会は毎月1回の月例山行で多様な会員の要望に合わせた山行、四季の山として季節の特徴を生かした山行を実施した。登山教室の指導者養成および次世代を担うリーダー養成のために、日本山岳会主催の初級登山教室指導者養成講習会や登山ガイドの指導のもと沢登り・岩登り講習などを実施。安全登山委員会では山小屋管理人や山岳救助隊による講演会、救急時の対応講習を実施した。

《総会》

＊4月16日(土)　平成28年度通常総会（大宮ソニックシティ）では、現在会員は137名、出席者37名、委任状は68名で開催され松本支部長を議長に選出。平成27年度事業報告および収支決算報告、平成28年度事業計画（案）および収支予算（案）、役員人事（案）並びに支部規約改定（案）が承認された。

《埼玉支部委員会》

＊毎月開催　支部長・支部委員・会計・監査・事務局長が出席し、各委員会の事業報告や計画の立案・審議等を行なった。

《行事・講演会・講習会・シンポジューム・支部新年懇談会》

＊4月19日(日)「ふれあい登山」は越生町自然休養村センターまでバスで行き、大高取山および虚空蔵尊から越生駅に下山した。参加者は障がい者12名、付き添い11名、山岳関係者28名、障害者スポーツ協会2名、その他3名の総計56名で実施した。

＊5月22日(日)　自然保護委員会では、森林サポータクラブと第1回森づくりで草刈を実施し、会員5名を含む計22名が参加した。

＊6月4日(土)　安全登山委員会は「ハイキングレスキュー講習」を飯能市市民会館および天覧山周辺で、埼玉岳連・遭難対策委員長の瀬藤武氏を講師に参加者15名で実施。

＊8月11日（祝日）「山の日」施行記念事業として武甲山登山および講演会&コンサートを埼玉岳連と共催で開催し、会員15名が参加。

＊8月13日(土)～14日(日)「山の日」施行記念事業として秩父夏休み親子キャンプを埼玉岳連と共催で開催し、会員1名、総計63名が参加した。

＊10月9日(日)　NPO埼玉森林サポータクラブと共催で第2回森づくり活動および自然観察会を越生虚空蔵尊で開催し、会員8名、サポータクラブ17名が参加した。

＊10月22日(土)～23日(日)　玉原高原で自然観察会「玉原高原の自然を訪ねて」を実施し、16名が参加した。

＊11月27日(日)　越生町教育委員会の後援で、第4回大高取山自然観察会を開催し、越生町民、他支部会員などを含め計27名が参加した。

＊12月7日(水)　安全登山講演会では「北岳周辺での登山・山小屋事情と変遷」を白根御池小屋管理人の高妻潤一郎氏を講師に開催し、総計49名が参加した。

＊平成29年1月14日(土)　新年支部懇談会を、横瀬町の日向山でハイキング後、秩父神社で安全登山祈願、神社近くの「妙見」で、参加者28名で実施した。

＊1月19日(木)　自然保護委員会では、浦和コミュニティセンターで第6回シンポジューム「埼玉の自然を知ろう」を開催した。

＊1月21日(土)　安全登山講演会「どの山でも登山届を出そう。いざという時にあなたを救う」は山岳救助隊飯田副隊長によ

る講演に38名（一般14名、会員24名）参加。
＊1月22日㈫　ＮＰＯ埼玉森林サポータクラブと共催で第3回森づくり活動および自然観察会をさいたま緑の博物館で開催し、会員3名が参加した。
＊2月26日㈰　安全登山講習会「登山で事故！さあ　どうする」は恵秀彦氏および渡邉浩氏を講師に川鍋ビル８Ｆで開催され、一般参加6名を含む総計25名が受講した。
《山行・三支部合同懇親山行》
＊4月17日㈰　総会記念山行として秩父・釜ノ沢五峰に19名が登山。
＊5月21日㈯～22日㈰　鹿沼岩山（岩登り講習を含む）および那須連峰の南月山並びに茶臼岳に14名で登山。
＊6月5日㈯～6㈰　四季の山（春）に、大白川登山口から守門岳を14名で登山。
＊7月3日㈰　皇海山に栗原川登山口から16名で登山。
＊7月29日㈮～31日㈰　四季の山（夏）に飯縄山および高妻山に10名で登山。
＊9月4日㈰　横隈山に野上駅から出牛峠を越えて9名で登山。
＊10月1日㈯　西上州・諏訪山（浜平コース）に9名で登山。
＊10月29日㈯～30日㈰　東京多摩・神奈川・埼玉（14名）3支部による第1回南関東ブロック懇親山行が東京多摩支部主催で武州御嶽山および大岳山で開催
＊12月10日㈯～11日㈰　忘年山行（講演会）の両詰山および猪狩山に21名が参加。
＊1月14日㈯　新年懇親登山を横瀬町日向山で実施、参加者は28名。
＊2月11日㈯～12日㈰　四季の山（冬）を霧ヶ峰・蓼科山で実施、12名参加。
＊3月5日㈰　ときがわ町弓立山に16名で登山。
《全国支部懇談会》
＊4月9～10日　第32回全国支部懇談会が長岡市岩室温泉「ゆもとや」および弥彦山等を会場に越後支部主催で開催され、埼玉支部からは13名が参加。
《海外登山》
＊10月2日㈰～8日㈯　支部創立7周年記念登山として、台湾ツアー（雪山・玉山）を計画。台風の影響で、七星山、基隆山、麟趾山・鹿林山に変更し、12名で登山。
《埼玉支部報の発行、ホームページの再構築》
＊埼玉支部報は、18号を6月、19号を11月、20号を平成29年3月に発行した。
＊デジタルメディア委員会の全面的な協力を得て埼玉支部ホームページを再構築し、平成28年4月から本格稼働した。山行・行事・講演会などの情報を迅速に会員に提供するとともに一

般登山愛好者にも最新の活動状況を知らせ、会員増にも期待したい。

（松本敏夫）

■千葉支部

支部創立10周年を迎えるにあたり役員は全員が留任、新役員も加わり記念事業に取組む体制を通常総会で整えた。また前年に引き続き高齢化と参加者の固定化を打破しようと「誰もが参加し、皆で進む千葉支部」をスローガンに、山行・各種事業計画を立てる方針を再確認した。児童養護施設の子どもたちの初めての宿泊体験を7月に鴨川市内で実施したほか、8月には東京湾クルーズで夜景を眺めながらの「ビールパーティー」、10月は新企画の「我が街歩き」を専門知識のある県職員のガイドにより市川市で行ない、好評を得た。

「山の日」関連事業としては、8月11日に「親子で登ろう千葉の山」と銘打ったハイキングを千葉県観光公社内浦山県民の森と協力して伊予ヶ岳で実施。これが千葉テレビや千葉日報などマスコミで大きく報道された。9月には市川市の団体と協力して「山岳映画の会」を開催、12月は茂原市子どもセンターとの共催で、親子約40人を引率して富山で親子ハイキングを行なった。

公益目的事業としての調査では、房総半島郡界尾根踏査事業を引き続き進め、児童養護施設の子どもたちの引率山行も継続している。

年4回発行する支部報「千葉支部だより」は、全面カラー化にリニューアルし支部員増強につなげている。

《会議》

＊5月14日㈯　通常総会　27年度事業・決算報告、28年度事業・予算計画など原案通り満場一致で可決、その後懇親会を実施。出席72名（当日出席34名、委任状38名）。

＊定例役員会　毎月第3火曜日開催。支部役員延べ103名が出席し、支部運営や「山の日」関連事業、支部10周年記念事業について協議。

《山行・野外活動》

＊4月23日㈯　奥多摩倉戸山（お花見山行）　参加18名。

＊6月5日㈰　谷川岳氷河地形観察会　参加18名。

＊12月23日㈮　房州アルプスと鎌倉古道（忘年山行）　3コースに分かれての集中登山形式が好評を得た。参加20名。

＊1月21日㈯～22日㈰　三ツ峠　参加10名。

＊上記を含め、ほぼ月1回の山行と自然観察会、歴史・文学散歩、印旛沼散策などを行なった。延べ153名参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊房総半島郡界尾根踏査（公益目的事業）

4月2日㈯　第9回　木の根峠～236mピーク～金束　参

加7名。11月5日㈯　第10回　参加12名。11月26日㈯　第11回　参加7名。12月24日㈯　第12回　参加16名。1月29日㈰　第13回　参加9名。3月5日㈰　第14回　参加8名。3月19日㈰　第15回　黒塚番所跡～元清澄山～清澄寺　参加10名。

＊青少年野外活動支援（公益目的事業）

5月8日㈰　岩殿山　参加12名（児童5名）。　7月16日㈯～17日㈰　内浦山県民の森（宿泊体験）参加14名（児童5名）。12月17日㈯　陣馬山　参加14名（児童5名）。2月11日㈯宝登山　20名参加（児童5名）。来年度は初めて山小屋泊を行なう予定。

＊「山の日」関連事業（公益目的事業）

・8月11日㈮　伊予ヶ岳（県民ハイク）　参加20名。

・12月11日㈰富山（親子ハイク）参加43名（親子15組）。

《広報・出版活動》

＊支部報　年4回（6、9、12、3月）発行。

＊ホームページをリニューアル。

《講演会等》

＊5月14日㈯　支部総会記念講演会「房総の眺望と富士」　講師＝山口秀輝さん（美しい房総の自然を写す会会長）　参加41名。

＊9月10日㈯「山岳映画鑑賞と千葉の山」　地元市川市の山岳映画サロンの協力を得て、千葉支部主催で開催し好評を得た。一般参加190名、会員20名。

《その他の行事・懇親会》

＊8月20日㈯　ビールパーティー　（千葉港内遊覧船内）　参加19名。

＊2月18日㈯～19日㈰　4支部（栃木・茨城・群馬・千葉）合同懇談会（群馬支部主催）　神成山。千葉支部参加14名。

（高橋琢子）

■東京多摩支部

支部活性化の課題の一つである若手会員増強のスキームができ上がってきた。平成24年度から始まった登山教室では、2年間のカリキュラムを終えた修了生が延べ78名となった。内、JACに入会し東京多摩支部会員となった者は入会手続き中の4期生を含め49名である。

修了生の中には登山教室のサポーターを務める者がおり、彼らに対して将来のリーダーを目指すリーダー育成研修を特別事業補助金の活用により3年間に渡って行なってきた。すでにサブリーダーを務める者もおり、リーダー育成の成果も上がりつつある。5周年記念事業で最後に残った多摩100山選定、取材登山、ガイド記事作成が進行し、来年度にはHPでの多摩100山ガイド公開と会員向けには報告書の作成を進めている。

《会議》

・5月8日㈯　立川市女性総合センター第3学習室にて通常総会　27年度事業報告・収支決算案、28年度事業計画・予算案などを審議。出席178名（当日出席63名、委任状115名）

・幹事会　立川市女性総合センター第1会議室にて毎月第3火曜日開催　幹事・監事が延べ175名出席。予算・決算・事業計画・プロジェクト事業等の審議・活動報告。

・総務、財務、広報、IT、山行、集会、自然保護、安全、奥多摩BC運営委員会の9つの委員会と登山教室、山の日、多摩百山、2017年の4つのプロジェクトチームが毎月PT会開催。

《山行・野外活動》

＊定例山行　12回実施　延べ123名参加。

4月23・24日（土・日）八方尾根6名参加、5月14日㈯　富士山五合目9名参加、6月4日㈯　瑞牆山14名参加、7月8・10日（土・日）　雨飾山13名参加、8月27・28日（土・日）蝶ヶ岳・常念岳9名参加、9月10日㈯　御坂黒岳11名参加、10月22日㈯　瑞牆山7名参加、11月26日㈯　大室山11名参加、12月10日㈯　蓼科山13名参加、1月8・9（日・月）黒斑山・高峰山4名参加、2月11日㈯　大菩薩嶺11名参加、3月25・26日（土・日）15名参加。

＊平日山行　毎月第3木曜日実施。11回実施　延べ121名参加。

4月21日　山梨・坪山18名参加、5月19日　生藤山15名参加、7月21日　丹波天平10名参加、8月21日㈰　小坂志川中流7名参加、9月15日　笠山・堂平山5名参加、10月20日　金時山7名参加、11月17日　北高尾・杉沢ノ頭13名参加、12月15日　孫山8名参加、1月19日　麻生山16名参加、2月16日　草戸山10名参加、3月16日阿夫利山12名参加。

・4月3日㈰　奥多摩山開き20名参加。

・4月3日㈰　新入会員交歓散策・奥多摩セラピーロード32名参加。

・5月　都岳連カタクリパトロール　延べ4名参加。

・6月2・3日（木・金）　雲取山石積み登山道整備4名参加。

・6月11・12日（土・日）　登山教室修了生懇親山行「八海山」25名参加。

・6月22・23日（水・木）　三ツ峠アツモリソウ保護活動12名参加。

・8月23日㈫　御岳山レンゲショウマ観察会　一般19名参加。

・10月2日㈯　国立四小高尾山観察ハイキング学童23名、保護者7名、教員4名参加。

・10月19日㈬　奥多摩小屋周辺清掃　3名参加。

・10月29・30日（土・日）　3支部合同懇親山行44名参加（内多摩支部会員26名）。

・12月26日(月)　会員向け高尾山シモバシラ観察会13名参加。
・1月6日(金)　高尾山シモバシラ観察会　一般24名参加。

《プロジェクト・地域振興活》

・4月～3月　第4期初級登山教室　受講生22名。
・4月～6月　立川市と共催で初心者登山教室　受講生33名。
・7月～3月　第5期初級登山教室　受講生26名。
・登山教室リーダー育成事業として登山実習下見兼リーダー育成研修（2回実施、延べ31名参加）と合宿研修22名参加、講座22名参加、外部講座派遣6名参加。
・奥多摩ＢＣ。今年度の利用者数は延べ１１７名。
・山の日施行記念フェスタ開催　8月7日(日)　高尾山親子森育ハイキング一般親子20名参加、8月11日(木)　奥多摩セラピーウォーキング一般16名参加、8月11・13・14日(木・土・日)スケッチ山の絵展、山の映画会一般・会員２５０名参加。
・多摩１００山。ガイドブック原稿まとめ。来年度ＨＰで公開予定、会員向けには報告書をまとめ中。

《広報・出版活動》

・支部報「たま通信」4月、7月、10月、2月の4回発行。
・7月に平成27年度版アニュアルレポート発行。
・ホームページ１００回以上更新、メールマガジン「たま便り」60回配信。
・メールマガジン配信者数は２１２名。

《講演会》

・7月20日(水)「火山と安全登山」福岡孝昭講師一般22名、会員18名参加。
・8月23日(火)「エベレスト・ローツェ登頂報告会」伊藤伴講師一般・会員27名参加。
・10月28日(月)「魔の山マッキンリーの咆哮」大蔵喜福講師　一般21名、会員35名参加。
・11月4日(金)「生物多様性の保全と地域づくり」松井宏宇講師一般・会員28名参加。
・1月28日(土)「山はすばらしい教室」高橋清輝講師　一般62名、会員80名参加。

《安全講習会》

・5月15日(日)「ロープワーク講習会」会員16名参加。
・9月25日(日)「緊急連絡網シミュレーション実地講習会」会員14名参加。
・11月20日(日)「山でのファーストエイド講習会」会員16名参加。
・1月23日(月)「ケガを予防するテーピング講習会」会員26名参加。
・3月29日(水)「下半身を鍛える安全登山講習会」会員28名参加。

《その他の行事・懇親会》

・8月14日(日)　納涼ビアパーティー　40名参加。
・11月13日(日)　秋の奥多摩芋煮会　19名参加。

・1月28日㈯　年始晩餐会　72名参加。
・スキー同好会　5回開催延べ21名参加。
・沢登り同好会　10回開催延べ43名参加。
・海外登山研究会　7回開催延べ42名参加。
・5地区サテライト・サロン　延べ12回開催　148名参加。

（山本憲一）

神奈川支部

平成28年3月19日㈯、神奈川大学（横浜市神奈川区）において日本山岳会神奈川支部設立総会が開催され、日本山岳会33番目の支部として神奈川支部が設立された。神奈川県在住のJAC会員約400名に呼びかけ、134名が加入した。

支部立ち上げ直後の平成28年度は、支部員の親睦を深めることを第一目的として日帰りの支部山行（公式山行）を4回実施し、延べ91名が参加したほか、支部会員の企画による準支部山行を6回実施した。

他支部との交流では、隣接する静岡支部との交流会を開催し、この交流をきっかけに個人山行が複数企画・実施されている。また、南関東ブロック3支部（東京多摩・埼玉）合同山行、支部懇談会（越後支部主催）に参加した。

年度後半には、支部設立を記念して「かながわ山岳誌プロジェクト」を立ち上げた。次年度からの本格着手に向け、プロジェクト幹事4名を中心にプロジェクトチーム（15名、3月末現在）で打合せと作業を行ない、県内の山と峠282ポイントを抽出し、これらを踏査するために約80のコースを決めた。本事業は支部公益目的事業として5年計画で実施するもので、『日本山岳誌』の神奈川県版を作成し、情報提供等を通して社会へ貢献する。マスコミに広報するとともに一部の踏査コースは一般公募の山行も実施予定である。

このほか、本部の依頼に応じて国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」助成事業に協力し、ウェブサイト「親子で楽しむ山登り」に掲載する6コース（大野山、弘法山、矢倉山、城山、南郷山、南山）の取材と原稿作成を行なった。

支部報（電子版）は年度中に4回発行し、JAC神奈川支部のウェブサイトに掲載するとともに、支部会員にメール配信を行なった（郵送は有償で希望者のみ）。

《会議》

＊役員会　神奈川工科大学横浜事務所にて偶数月第3木曜日に計6回開催。事業計画やプロジェクト、予算・決算等について、審議・報告を行なった。執行体制は、役員12名、監事2名、顧問4名、オブザーバー2名。

＊山行委員会・YOUTH委員会　神奈川工科大学横浜事務所にて奇数月第3木曜日に計6回開催。山行委員会幹事（16名、

3月末時点）を中心に、個別の山行計画の相談等を行なった。

＊かながわ山岳誌プロジェクト　神奈川工科大学横浜事務所にて12月5(月)に第1回の打合せを行ない、7名が参加した。以降は山行委員会と同時開催で計3回の打合せを行ない、次年度に向けた準備作業を行なった。

《支部山行》

＊4月16日(土)　設立記念山行（弘法山）　41名（会員外8名）参加。

＊5月15日(日)　丹沢三ノ塔（諸戸～ヨモギ平～三ノ塔～大倉）　24名参加。

＊6月18日(土)　鎌倉アルプス（北鎌倉～六国見山～鎌倉アルプス～鎌倉巡礼道～まんだら堂～鎌倉駅）　13名参加。

＊12月17日(土)　忘年山行（大山）　13名参加。

《準支部山行》

＊9月18日(日)　大野山（親子登山取材山行）　4名参加。

＊9月25日(日)　南山（親子登山取材山行）　4名参加。

＊10月15日(土)　矢倉岳（親子登山取材山行）　10名（支部会員外7名）参加。

＊10月23日(日)　湯河原（城山・南郷山、親子登山取材山行）　5名参加。

＊2月11日(土)　西丹沢・世附権現山4名(支部会員外1名)参加。

＊3月10日(金)～12日(日)　妙高赤倉スキー山行7名参加。

《他支部との交流》

＊4月9日(土)～30日(日)　全国支部懇談会（新潟市岩室温泉、越後支部主催）　4名参加。

＊10月29日(土)～30日(日)　南関東B（東京多摩・埼玉）合同懇親山行（御岳山・大岳山、東京多摩支部主催）　7名参加。

＊11月19日(土)～20日(日)　静岡支部との交流会（箱根金時山）、17名（計33名）参加。

《懇親会》

＊1月26日(木)　新年会（わたみん家横浜東口店）　15名参加。

（寺井素子）

■越後支部

越後支部は、創立70周年を迎えた。全国2番目の支部であり、歴史と伝統が引き継がれてきているが、会員の年齢構成を見ると平均年齢73歳（2016年5月）と全国平均よりも高く、20～40歳代はゼロ、50歳代9名、60～65歳23名、66～70歳29名と組織的には厳しい状況に置かれている。

ここ数年、高齢化による退会・物故者数が新入会員獲得数を上回っている。新入会員獲得と支部の活性化が最大の課題となっている。

「すべての活動を会員拡大につなげる」ことを目標に役員会

での共通認識や活動を強め、少しずつではあるが成果も見られるようになった。

通常総会、支部晩餐会では、記念講演や親睦登山を取り入れ、有意義な集会を目指してきた。3年目を迎えた年3回の「公募登山」は、公益事業の柱として定着している。高頭祭および新潟県登山祭は、「山の日」記念事業として新たに出発した。集会委員会の「山靴・よりあいの集い」2年目となり会員相互の交流に大きな役割を果たしている。

越後支部創立70周年記念事業の日本三百名山「越後支部執筆21座踏破」では、支部会員参加が延べ200名と会員が積極的に一つの目標に向かって活動することで支部活性化が図られた。また、第32回全国支部懇談会は、越後支部が主催となって岩室温泉および弥彦山塊で4月9～10日に開催された。全国から253名（越後支部66名、本部および他支部187名）が結集した大集会となった。アクシデントはあったものの柔軟に対応し参加者から好評を得ている。

中長期的な視野で会員拡大と支部活動の強化を図り、支部活性化を目指すことが重要となっている。

《会議》

＊5月28日㈯　通常総会　事業報告・計画、決算・予算、創立70周年記念事業など原案通り満場一致で可決、その後懇親会を実施。出席者172名。（当日出席47名、委任状125名）

＊役員会　5月28日㈯　第1回役員会、6月18日㈯　第1回委員長会議、9月22日㈭　第2回委員長会議、12月10日㈯　第2回役員会、3月3日㈮　第3回委員長会議、支部役員が集まり、支部運営や事業について協議。延べ74名出席。総務、事業、広報、集会、自然保護、図書、県山協などの委員会、子ども登山教室準備会、三役・事業委員長会議など、適宜会議を開催し事業運営について協議。

《山行・野外活動》

＊5月7日㈯～8日㈰　第2回「靴音・よりあいの集い」親睦登山・青田南葉山（上越市）20名参加。

＊5月29日㈰　親睦登山・米山（上越市・柏崎市）36名参加。

＊公募登山　6月12日㈰　斑尾山～袴岳20名参加、7月24日㈰　苗場山（小赤沢～苗場山～和田小屋）7名参加、8月28日㈰　越後駒ケ岳（枝折峠から往復）11名参加、10月16日㈰　風吹大池（小谷～風吹大池～蓮華温泉）28名参加。

＊7月25日㈪　第59回高頭祭を弥彦山大平園地で開催70名参加。引き続き弥彦山山頂にて新潟県登山祭および松明登山を実施、150名参加。

＊「山の日」記念事業・親子登山（妙高・笹ヶ峰「夢見平」）4名参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊5月29日㈰　清掃登山・米山（上越市）36名参加。

＊6月12日(日)　清掃登山・斑尾山～袴岳20名参加。
＊7月24日(日)　清掃登山・苗場山（小赤沢～苗場山～和田小屋）7名参加。
＊8月28日(日)　越後駒ヶ岳（枝折峠から往復）11名参加。
＊10月16日(日)　風吹大池（小谷～風吹大池～蓮華温泉）28名参加。

《越後支部創立70周年記念事業　日本三百名山「越後支部執筆21座踏破」》
＊3月27日(日)　浅草岳8名参加、4月24日(日)　二王子岳6名参加、5月15日(日)　金北山15名参加、5月22日(日)　守門岳6名参加、5月29日(日)　米岳36名参加、6月5日(日)　粟ヶ岳8名参加、6月19日(日)　巻機山9名参加、6月25日(土)　佐武流山9名参加、7月2日(土)　火打山6名参加、7月3日(日)　妙高山6名参加、7月10日(日)　えぶり差岳10名参加、7月17日(日)　焼山　火山活動のため中止、7月24日(日)　苗場山6名参加、8月21日(日)　平ヶ岳14名参加、8月28日(日)　越後駒ケ岳13名参加、9月11日(日)　八海山9名参加、9月26日(月)　中ノ岳7名参加、10月2日(日)　鳥甲山6名参加、10月13日(木)　雨飾山7名参加、10月22日(土)　青海黒姫山9名参加、11月3日(木)　御神楽岳10名参加。支部会員参加は、延べ200名と県下各地の会員が積極的に一つの目標に向かって活動し、創立70周年記念事業を通して活性化が図られた。

《広報・出版活動》
＊6月25日(土)　越後支部報第16号発行、10月16日(日)　越後支部報第17号発行、2月15日(水)　越後支部報第18号発行。

《講演会》
＊5月28日(土)　定期総会「妙高の自然～登山者にできること～」講師、春日良樹氏　会員47名参加。
＊7月25日(月)　「山の日」記念事業・第59回高頭祭「『山の日』制定までの経緯と各支部における取り組み」講師＝成川隆顕氏（全国山の日協議会監事）会員70名参加、新潟県登山祭「山の日記念行事の全国的盛り上がりについて」講師＝磯野剛太氏（全国山の日協議会理事長）　一般80名、会員70名参加。
＊5月7日(土)　第2回「靴音・よりあいの集い」（上越市・南葉高原）「山との出会い」講師桐生恒治氏、「深田久弥と上越の山」講師＝高辻謙輔氏　20名参加。

《その他の行事、懇親会》
＊4月9日(土)～10日(日)　第32回全国支部懇談会を岩室温泉および弥彦山塊で実施（越後支部主催）。総参加者253名。（支部会員66名、本部及び他支部187名）参加。アクシデントで親睦登山は組織的には中止。
＊12月10日(土)　越後支部創立70周年記念式典・祝賀晩餐会において、杉本敏氏（藍綬褒章受章）の祝賀会を実施。会員80名参加。

＊新潟県山岳協会登山講習会への講師派遣　5月14日㈯～15日㈰　第62回自然保護研修会（佐渡市）、6月19日㈰　岩登り講習会（新発田市）、7月2日㈯～3日㈰　安全登山研修会（三条市）、9月23日㈮～25日㈰　中高年安全登山指導者講習会、2月20日㈯～21日㈰　冬山講習会（新発田市）、3月12日㈰　残雪期の安全登山研修会（南魚沼市）。

（後藤正弘）

■富山支部

平成28年度は、恒例の「播隆祭」が第31回を迎えた。昭和58年5月に富山県旧大山町河内村の生家跡に建立した「播隆上人顕頌碑」前において、「生家の会」の皆さんや富山支部会員、一般併せて51名の参加を得て播隆上人の遺徳を偲んだ。「播隆祭」は6月の第1日曜日に毎年実施しているため「ウェストン祭」と日程が重なり、なかなか参加できない状況である。この後、富山支部が継続して登山道整備を行なっている高頭山への記念登山を行なった。

8月11日には「山の日記念」の親子登山を富山県朝日町にある「大鷲山」で実施した。開会式では朝日町町長と富山県警山岳警備隊員の挨拶の後、元気に出発した。大鷲山は頂上から日本海が一望に見渡せ、手前の山稜が鷲が羽根を広げたように見えることからその名がついたと言われている。この山はこれまで国土地理院の地図に記載がなかったため、同日、海岸の登山口から国土地理院の職員と山岳会のメンバーがＧＰＳを使い、ルートの測量を行ないながら頂上を目指した。イベント参加者は標高５００ｍの林道から上り始め、８１６ｍの頂上へ元気に到着した。

2月22日富山支部主催の第8回山岳講演会を開催した。講師は、日本山岳会富山支部会員で富山県警山岳警備隊隊長の高瀬洋氏に「県警山岳警備隊の活動状況」というテーマで講演いただいた。高瀬氏は富山県氷見市のご出身で２００８年より山岳警備隊長として数々の山岳遭難救助に携わってこられた経験からの興味深い内容だった。時間内に収まり切らないくらいの多岐にわたる内容だった。会員や一般から80名の参加者で盛況だった。

来年は支部創立70周年の節目となるため、「支部創立70周年記念事業実行委員会」を立ち上げ、記念式典、記念誌発行、記念登山などの検討に入った。

《会議》

＊4月15日㈮　支部総会　事業報告および収支決算報告、事業計画および予算案を承認　富山電気ビル　出席26名。

＊1月22日㈮　親睦会総会・新年会　立山国際ホテル　出席10名。

＊役員会は7回開催（5月、6月、8月、10月、12月、3月、4月）

《山行・野外活動》

＊4月9日㈯～10日㈰　全国支部懇談会　越後支部担当　新潟市・弥彦山　7名参加。

＊4月23日㈯～24日㈰　京都・滋賀支部創立30周年記念式典・記念交流登山　参加6名。

＊5月22日㈰　城ヶ平山（一般募集）　参加26名。

＊7月15日㈮～17日㈰　朝日連峰　参加5名。

＊9月2日㈮～5日㈪　南アルプス荒川三山・赤石岳参加6名。

＊10月16日㈰～17日㈪　5支部合同懇親山行　参加47名（支部から6名）。

＊10月22日㈯　千石城山（山岸会員追悼登山）　参加12名。

＊1月20日㈮　瀬戸蔵山　参加7名。

＊2月19日㈰　高坪山　参加5名。

＊2月25日㈯～26日㈰　5支部合同スキー山行　岐阜支部担当　参加32名（支部から7名）。

＊4月2日㈰　八乙女山　参加6名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊5月28日㈯　高頭山登山道整備（公益）　参加9名。

＊6月5日㈰　第31回播隆祭（公益）式典参加54名、記念登山（高頭山）参加8名。

＊・8月11日㈰「山の日記念親子登山」大鷲山　参加36名。

《広報・出版活動》

＊富山支部会報発行　6月21日第102号、10月31日第103号、3月2日第104号。

＊第8回山岳講演会「県警山岳警備隊の活動状況」　2月22日㈬　富山県民会館401号室　80名参加。

《その他の行事、懇親会》

＊8月2日㈫　例会・懇親会　山行報告＝自然保護全国集会報告（鍛治）、播隆祭・朝日連峰（山田）、三嶺・城ヶ平山（渋谷）　とやま市民交流館　参加18名。

＊12月9日㈮　例会・懇親会　山行報告＝赤石岳（渋谷）、ネパール（北田）、支部長会議・晩餐会（山田）　とやま市民交流館　参加18名。

（河合義則）

■石川支部

4月16日の総会において、長年お世話になった前川陽事務局長に代わり、樽矢導章会員（80082）の就任により新体制での活動を開始した。

主要な活動としては2年目になる「山の日施行記念・白山親子登山教室」の実施と、深田久弥ゆかりの山「富士写ヶ岳方位

盤再建事業」がある。白山親子登山教室は事前座学を実施、座学は一般参加者から好評であった。
　富士写ヶ岳方位盤は関係団体の協力の下、設置場所整備や山頂からの眺望も整備し、8月7日に落成式を迎えた。
　支部活性化施策として本年10月より入会希望者への説明会も兼ねて月例集会を実施した。集会参加者からは、月例山行提案もあり今後の支部活性施策として継続開催とする。

《会議》

＊4月16日㈯17日㈰　支部定期総会　参加38名（出席20名、委任状18名）事業報告、計画案および会計報告・予算案等を全員一致で可決。その後会場を移して宿泊懇親会実施。
＊5月27日㈮　第1回役員会議兼第1回親子登山教室実行委員会、9月28日㈬　第2回役員会議、3月15日㈬第3回役員会議、

《山行・野外活動》

＊5月14日㈯～15日㈰　毛勝山　毛勝谷遡行予定を北西尾根に変更、山頂では360度の眺望を堪能した。参加4名。
＊6月11日㈯　沢登り大日沢　参加5名。
＊6月18日㈯～19日㈰　白山加賀禅定道兼白山大汝避難小屋保全清掃　参加7名。
＊7月23日㈯～24日㈰　上高地山研集会（焼岳組・上高地散策組）各々のコースで楽しむ。参加20名。
＊9月3日㈯～4日㈰　剱岳早月尾根　参加7名。
＊10月16日㈰～17日㈪　5支部合同懇親山行（岐阜支部担当）猪臥山　石川支部参加2名。
＊10月22日㈯　沢登り　沢上谷　参加4名。
＊1月28日㈯　雪山山行　富士写ヶ岳　参加5名。
＊2月25日㈯～26日㈰　5支部合同スキー大会（岐阜支部幹事）大日ヶ岳　石川支部参加1名。
＊2月26日㈰　荒島岳　参加3名。
＊3月11日㈯　雪山訓練　中宮山　かんじきラッセル訓練・積雪弱層テストなど技術研修。参加7名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月9日㈯〈公益〉山の日施行記念「富士写ヶ岳方位盤再建事業」支援　設置場所整備。参加8名。
＊4月24日㈰第20回久弥祭。支部参加2名。
＊4月30日㈯〈公益〉「富士写ヶ岳方位盤再建事業」支援　山頂眺望整備。参加13名。
＊5月28日㈯〈公益〉登山道整備（浅犀みくまり道）参加11名。
＊6月4日㈯〈公益〉登山道整備（白山杉峠道）参加11名。
＊6月5日㈰　石川県山岳協会「安全登山の集い」支援参加2名。
＊6月26日㈰〈公益〉「富士写ヶ岳方位盤再建事業」支援　方位盤資材荷揚げ　地鎮祭　参加13名。

＊7月16日㈯～17日㈰　日本山岳会自然保護集会　支部参加1名
＊7月19日㈰（公益）「富士写ヶ岳方位盤再建事業」支援　方位盤へリコプター空輸作業　参加6名。
＊7月31日㈰　山の日施行記念「白山親子登山教室」（座学フィールド研修）医王山」スポーツセンターやキゴ山周辺で支部員より指導実施。一般受講者5名、支部11名。
＊8月7日㈰〈公益〉「富士写ヶ岳方位盤再建事業」完成　落成式　石川県内各山岳組織より80余名参加にて落成式を挙行する。支部15名参加。
＊8月20日㈯～21日㈰〈公益〉山の日施行記念「白山親子登山教室」白山頂上での雲間からのご来光、ブロッケン現象に歓声が上がる。一般参加6名　支部11名
＊10月29日㈯〈公益〉秋山親子登山　奥獅子吼山　昨年と今年と開催した親子登山参加者を中心として開催、白山遥拝所である奥獅子吼山からの白山の眺望とナメコ汁に一同堪能する。一般参加4名、支部9名（他幼児1名）。

《広報・出版活動》

＊支部会報「峰」を季刊（6月、9月、12月、3月）で年4回発行。そのほか随時、山岳関連情報を石川支部ホームページ、フェイスブックや会員宛てにメールもしくは郵送にて案内。

《その他の行事・懇親会》

＊毎月第3水曜月例会　10月より開催、毎回前月の山行写真をプロジェクターで投影。次回山行計画等検討する。同時に入会希望者への説明会も実施する。
・10月18日　剱岳・早月尾根報告　参加15名。
・12月21日　白山周辺（内尾―瓶ノ壺）報告　参加14名。
・1月18日　冬山医王山報告　参加12名。
・2月15日　冬山富士写ヶ岳報告　参加10名。
・3月15日　雪上訓練中宮山報告・笈ヶ岳計画　参加18名。
＊11月19日㈯～20日㈰　山祭り集会（吉野谷セミナーハウス）忘年会としていろんな話題で盛り上がる。参加15名。

（樽矢導章）

■福井支部

平成28年度の支部活動としては、月1～2回の例会山行や森づくりなどを行なったが、昨年と同様天候不順が多く、やむなく中止することもあった。

《会議》

＊4月14日㈭　通常総会
午後6時から、福井市研修センターにて平成27年度事業報告および決算報告が承認され、平成28年度事業計画案・予算案が提案承認された。出席者51名（当日出席者25名・委任状26

名）。
＊3月18日(土)　役員会　出席者6名。　平成29年度の事業計画案や活動等の意見交換をした。

《支部山行》
＊4月4日(月)　三里山　6名参加・オブザーバー1名。
＊4月9日(土)～10日(日)　全国支部懇談会（越後支部主管）　9名参加。
＊4月29日（祝）火燈山～富士写ヶ岳　7名参加・オブザーバー1名。
＊5月21日(土)　経ケ岳（唐谷コース）　6名参加。
＊6月6日(月)　赤兎山～大長山　7名参加。
＊6月27日(月)　白山　4名参加・オブザーバー1名。
＊7月2日(土)～4日(月)　本部山行委員会ｉｎ福井（9名）　1日目＝一乗城山と懇親会　2日目＝一等三角点（一乗城山「点名・星峠」）　3日目＝赤兎山。支部から9名参加。
＊7月9日(土)　花はす公園観賞（雨の為杣山登山は中止）　3名参加・オブザーバー1名。
＊7月11日(月)　黒姫山　7名参加。
＊7月24日(日)　鍬崎山　7名参加。
＊8月8日(月)　白山（お花松原）　5名参加。
＊8月11日(木)　三ノ峰・県最高地点　6名参加。
＊8月20日(土)～22日(月)　白根三山（北岳・間ノ岳・農鳥岳）　6名参加。
＊9月3日(土)　雲谷山　6名参加。
＊9月11日(日)　立山（室堂～雄山～大汝山～雷鳥沢～室堂　7名参加。
＊10月3日(月)　雨飾山　6名参加。
＊10月16日(日)～17日(月)　5支部懇親山行（岐阜支部主管　飛騨古川）　6名参加。
＊10月23日(日)　武奈ケ岳　8名参加。
＊11月7日(月)　僧ケ岳　8名参加。
＊11月13(日)　由良ケ岳　10名参加。
＊12月11日(日)　鬼ケ岳に登山後、支部忘年会「かんぽの宿福井」21名参加。
＊1月23日(月)　日野山　4名参加。
＊2月19日(日)　銀杏峰　7名参加。
＊2月25日(土)～二十六日(日)　5支部合同スキー山行（岐阜支部主管）郡上市高鷲町蛭ケ野「大日岳」　4名参加。
＊3月6日(日)　荒島岳　4名参加。
＊3月12日(日)　あげはら山　6名参加。

《その他の行事》
＊4月23日(土)～24日(日)　京都・滋賀支部創立30周年記念式典・記念交流登山　5名参加。
＊「平成越知山御山再興地蔵石像設置事業」（越知神社～六所山

間に地蔵石像六十体設置）奉仕作業に4月～6月まで従事する。延べ会員、オブザーバーを含め、30名参加。

《公益年間プロゼクト》

＊5月29日㈰　「泰澄大師白山開山千三百年念プレイベント」山の日制定記念として《越知山泰澄トレイル実行委員会（越前町実行委員会）が主催、泰澄塾と日本山岳会福井支部と入尾・笈松活性化委員会が共催で行なう。初心者と経験者の2コースに分けて登山（支部会員サポート）。室堂にある越知神社にて神事を行ない、泰澄汁をいただきながら、吹奏楽団による演奏を聞く。県内外から120名が参加、支部会員16名参加。

＊森づくりでは4月から11月まで各月の1日現地にて作業。ベンチ3脚を設置する。池のガマに昨年除草剤散布した部分を撤去するが、完全に撤去はすることはできなかった。また、散策路を拡幅するのに大木2本に絡まっている根を撤去作業に11月までかかる。

（舩田洋子）

■山梨支部

新会員の確保、技術の向上、山岳文化の啓発、支部の活性化などを目的に、第2回「やまなし登山基礎講座」を9月から12月にかけて開催した。受講者は昨年度より減ったものの、全員から「大いに役に立った」または「役に立った」とのアンケート回答を得た。講座は、支部会員が得意分野の講師を務める自前方式（2講座は非会員の専門家）。受講者のみならず、講師側の会員にとっても自身の経験を再考するよい機会になっている。また、山梨学院大学生涯学習センターの広範な支援により開講しており、地域との連携を基盤にしているという点でも意義がある事業である。このほか、第57回木暮祭、9回の支部山行をはじめ、多くの事業を行なった。

《会議》

＊総会　4月16日㈯　平成27年度事業報告・決算報告、平成28・29年度役員、28年度事業計画・予算案を承認した。会員69人中、出席61人（出席34人、委任状27人）。

＊委員会　毎月第2水曜日に開催。支部長以下12人が出席（平均出席者10人）。前月の事業総括、当該月事業の検討、重要案件の協議等を行なった。

＊リニア中央新幹線勉強会　7月22日㈮、川村晃生・山梨大学名誉教授を講師に開催。リニア新幹線が南アルプスへ及ぼす影響などについて知見を広めた。8人が出席。

《山行・野外活動》

＊支部山行　4月29日㈮　山梨市・西沢渓谷、22人参加。5月26日㈭　北杜市・鞍掛山、レインジャー調査を兼ねて実施、会員6人・登山基礎講座修了生4人参加。6月11日㈯　甲州

市・岩崎山、8人参加。7月24日㈰　甲州市・水晶山、2人参加。9月9日㈮　山梨市・剣ヶ峰、6人参加。10月16日㈰　北杜市・五里山、6人参加。11月17日㈭　大月市・扇山、登山基礎講座実践登山として実施、受講生22人・会員12人参加。12月4日㈰　大月市・百蔵山、登山基礎講座同期会山行として実施、修了生7人・会員3人参加。12月11日㈰　笛吹市・大蔵経寺山、山梨百名山新標柱建立作業を兼ねて実施、12人参加。1月15日㈰　韮崎市・荒倉山、12人参加。

＊交流登山　10月1日㈯・2日㈰　第6回中部ブロック4支部交流会、信濃・御嶽山、8人参加。

＊その他　11月3日㈭　登山基礎講座ロープワーク講習会、甲府市・湯村山、受講生17人・会員6人参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊第2回やまなし登山基礎講座　会場＝山梨学院大学生涯学習センター講義室ほか　受講生26人。第1回（9月8日）「オリエンテーション」「自然保護と山岳環境保全の法令」講師＝古屋寿隆（開催日はすべて木曜日）、第2回（9月15日）「安全に楽しく登る」内藤順造、第3回（9月29日）「登山中の病気・けがの応急処置」恵秀彦（日本山岳会医療委員会委員、MFAインストラクター）、第4回（10月6日）「地図読み・コンパス初級」所一路、第5回（10月13日）「地図読み・野外実習（愛宕山）」所一路、第6回（10月20日）「山の気象」猪熊隆之（山岳気象予報士／株式会社ヤマテン代表取締役）、第7回（10月27日）「装備・服装」北原孝浩、第8回（11月3日）「実践登山①湯村山ロープワーク基礎」内藤順造、第9回（11月10日）「山岳写真の撮り方」北原孝浩、第10回（11月17日）「実践登山②扇山総合的登山」古屋寿隆、第11回（11月24日）「山梨の登山史」深沢健三、第12回（12月1日）「山のスケッチ入門」遠山若枝、第13回（12月8日）「山梨の山と文学」矢崎茂男、第14回（12月15日）「遭難救助の現場から」竹内敬一。

＊山梨県山岳レインジャー活動（山梨県から県山岳連盟に委託された高山植物保護・調査事業。加盟団体として活動）　5月26日㈭　北杜市・鞍掛山、6人参加。6月25日㈯・26日㈰　南アルプス市・北岳、5人参加。7月17日㈰　南アルプス市・櫛形山、2人参加。8月1日㈪・2日㈫　韮崎市・鳳凰三山、3人参加。

＊第57回木暮祭　木暮理太郎を顕彰する碑前祭。山梨支部・山梨県山岳連盟・増富ラジウム温泉峡観光協会による木暮碑委員会主催、北杜市後援。10月16日㈰開催。一般50人、会員15人参加。

＊第35回深田祭　深田久弥を偲ぶ碑前祭。一般100人、会員12人参加。

《広報・出版活動》

＊「支部通信」第3期第1号（A4版4ページ）の発行（11月

1日）。
＊会誌『甲斐山脈』第9号（A5版44ページ）の発行（3月31日）。

（矢崎茂男）

■信濃支部

支部事業の課題は、活動の活性化、高齢化対策、そして会員増加対策――これは、全国の支部と同様の課題である。多忙な日常生活の中、限られた時間、限られたスタッフ、限られた予算で、こうした課題に取り組むのは、簡単なことではない。せっかく作った時間なら、自由気ままに自分の山を楽しみたい、そう思いたいところだ。しかし、多くの先人、先輩たちが営々と築いてきた日本山岳会の伝統を引き継いでいくには、会員皆がそうした支部の課題を共通認識することが肝要だ。

28年度は、当支部が主管するウェストン祭が70年の節目を迎えた。そこで、これに合わせ70年を振り返る「ウェストン祭70年のあゆみ展」を上高地で開催したほか、記念講演集「パトニヴェイルからの風・続巻」を刊行した。本年は国民の祝日「山の日」が制定され、その第1回全国大会が上高地で開催されたこともあって、こうしたウェストン祭関係の事業は、山の日に関連する行事として、環境省や自然公園財団、松本市など多くの関係機関の協力をいただいた。また、山の日記念全国大会では、支部会員も大会のコンシェルジュ（案内役）を務めた。

10月には、中部ブロック4支部の交流会を、噴火災害から2年を経て、なお低迷する御嶽山麓の木曽町で開催した。御嶽の現状を知るための公開講演会を、信州大学と木曽町から講師を招いて開いたほか、翌日は御嶽山9合目までの交流兼慰霊登山を行なった。

さらに、12月から1月にかけては、支部創設70年を迎えるに当たり、記念山行として南米アコンカグア登山に挑んだ。残念ながら悪天候に阻まれ登頂は逃したものの、ある意味で山岳会を象徴するような平均年齢70歳の隊は存分に健闘した。

《主な事業》
＊4月10日㈰　支部山行・白馬乗鞍岳
＊4月24日㈰　平成28年度支部通常総会
＊4月29日㈮～5月1日㈰　支部山行・雷鳥沢、大日岳
＊5月28日㈯～6月12日㈰　ウェストン祭70年のあゆみ展
＊6月4日㈯　ウェストン祭記念山行・徳本峠越
＊6月5日㈰　第70回ウェストン祭
＊7月24日㈰　支部山行・鉢盛山
＊8月11日㈭　第1回「山の日」記念全国大会
＊8月27日㈯～28日㈰　支部山行・苗場山、鳥甲山
＊10月1日㈯　第6回中部ブロック4支部交流会　公開講演会

「御嶽山は今…」

＊10月2日(日)　御嶽山交流兼慰霊登山
＊12月21日(水)～1月12日(木)　支部山行・アコンカグア
＊3月4日(土)～3月5日(日)　支部山行　乗鞍高原スキー例会
＊支部報第63号発行　支部インフォメーション発行（4回）ウェストン祭記念講演集「パトニヴェイルからの風・続巻」刊行
□平成28年度新入会員　6名。

（米倉逸生）

■岐阜支部

今年から山行での事故を防ぐために、事前ミティーング開催を心がけている。参加者で山行について話し合い、登山ルート、危険個所、予定時間等を共有し、計画書を作成する。各会員が、安全な計画を立てられるようになれば、計画に見合った技術・体力意識が育まれるのではないだろうか。年度後半から実施され始めている。以下は28年度の主な活動報告である。

《会議》

＊4月16日(土)　定時総会　事業報告・計画、決算・予算など原案どおり満場一致で可決。その後懇親会を実施。出席33名。
＊4～3月　毎月第2木曜日に役員会を12回開催。支部役員14名ほどが集まり、支部運営や事業について協議。

《公益事業》

＊山岳講演会　11月11日(金)「黒部横断２０１４　十字峡を越えて八ッ峰へ」（立山ガイド協会所属　上田幸雄氏）聴講者１１名。
＊権現の森林づくり　4月3日(日)～11月12日(土)　14回　植栽地整備、苗木（１００本仮植）、ドングリ（ポット１００個種まき）、登山道整備、防獣ネット整備（１７００ｍ）、道具小屋の整備　参加67名。
＊写真展12月1日(木)～28日(水)　岐阜市・長良　喫茶パウズ。1月6日(金)～31日(火)　山県市大桑　香り会館　作品25点　出展者10名。

《共益事業》

＊月例山行
5月15日(日)　今西錦司記念山行／野坂岳　参加10名。
7月24日(日)～29(日)　海外山行／アグン山（インドネシア・バリ島）　参加7名。
8月7日(日)　例会／白草山　参加5名。
9月3日(土)～4日(日)　山の日制定記念／御嶽山　参加8名。
10月2日(日)　例会／三十三間山　参加13名。
11月6日(日)　例会／荒峰山　参加8名。
12月4日(日)　例会／鎗ケ先　参加12名。
1月22日(日)　例会／兎走山～金華山　参加17名。

2月19日(日)　例会／高沢山　参加16名。
3月12日(日)　例会／綿引山　参加12名。
＊バリエーション山行
4月3日(日)　例会／猿ケ馬場山　参加3名。
5月1日(日)　例会／ソンボ山　参加10名。
5月29日(日)　ゆきたくない山／銚子ケ峰　参加8名。
6月11日(日)～12(日)　県外山行／京ケ倉～大城　参加7名。
6月19日(日)　岩登り講習会／伊木山　参加4名。
7月24日(日)　誰も知らない二等点の山シリーズ／西ノ平　参加5名。
7月31日(日)　沢登り／沢上谷　参加10名。
10月27日(日)　ゆっくり山行／百々ケ峰　参加9名。
1月15日(日)　越美国境の山／三ノ宿　参加3名。
2月12日(日)　例会／貝月山　参加11名。
3月26日(日)　例会／水無山　参加11名。
＊自然観察会
6月26日(日)　例会／小津権現山　参加11名。
9月25日(日)　例会／下呂御前山　参加10名。
12月11日(日)　例会／鶴形山　参加16名。
＊他支部山行
4月9日(土)～10日(日)　全国支部懇談会／越後支部　参加8名。
10月16日(日)～17日(月)　五支部合同懇親山行／飛騨市　参加19名。
2月25日(土)～26日(日)　5支部合同スキー山行／大日ヶ岳　参加9名。
＊懇親会
12月10日(土)　理事会・忘年会　参加　13名。
1月23日(土)　新春懇談会　岐阜キャスルイン　参加　26名。
《会報》
＊9月30日(金)「岐阜山岳　第80号」発行。
＊3月31日(金)「岐阜山岳　第81号」発行。

（今峰正利）

■静岡支部

平成25年度より、それまで事務局一極集中で進めていた支部運営を、なるべく多くの会員が運営に携わっていくようにと、委員会運営方式になった。新しい方式で2年が経過したが、各運営委員の努力、協力でなんとか大きな問題もなく進められてきた。

また、支部会員で本年3月5日に103歳となられた荻野恭一氏より寄贈された「文珠山荘」を会員の協力で少しずつ整理・整頓をし、年6回程度の企画運営をしてきた。この企画に参加

して山岳会へ入会した方も数名いる。さらに公益事業のハイキングセミナー、会員山行でも同様に参加者の入会があった。各委員会の努力による成果と考えている。

《会議など＝事務局》

＊通常総会　4月13日㈬　48名出席、親睦会35名参加。

＊定例会　5月11日㈬　17名出席、6月8日㈬16名出席、7月13日㈬　16名出席、9月14日㈬　17名出席、10月12日㈬　15名出席、12月14日㈬　19名出席、2月8日㈬　14名出席、3月8日㈬　16名出席。

＊新年会　1月15日㈰　日帰り温泉「柚木の郷」13時～15時、50名参加。

＊交流会　4月9日㈯～10日㈰　第32回全国支部懇談会、越後支部15名参加。10月1日㈯～2日㈰　中部4支部（静岡、山梨、信濃、越後）交流会、信濃支部担当「御嶽山慰霊登山」13名参加。11月19日㈰～20日㈰　神奈川支部との交流会、「箱根・金時山」18名参加。

《ハイキングセミナーなど＝公益事業委員会》

＊第1回ハイキングセミナー　5月15日㈰「竜爪山」受講生9名、会員6名参加。

＊第2回ハイキングセミナー　6月12日㈰「二王山」受講生7名、会員8名参加。

＊第3回ハイキングセミナー11月27日㈰「富士見岳」天候不良で受講生1名、会員7名参加。

＊自然保護全国集会　7月16日㈯～17日㈰　高知市で開催、白鳥勝治氏参加。

＊山の日記念講演会・写真展ならびに記念ハイキング　8月11日㈭　静岡県山岳4団体（日本山岳会、県岳連、市岳連、労山連）主催で開催。講師＝野口いずみ氏「山岳医療について」、松島信幸氏「南アルプスの地質について」来場者200名。

＊山の日記念ハイキング　10月16日㈰　東部＝富士山宝永山10名参加、中部＝大日古道43名参加、西部＝湖西連峰10名参加。

《会員山行＝集会山行委員会》

＊6月5日㈰　秋のセミナー下見を兼ね「富士見岳」8名参加。

＊7月16日㈯～18日㈪　南アルプス「茶臼岳、上河内岳」14名参加。

＊9月24日㈯～25日㈰　「黒部川・下の廊下」10名参加。

＊11月5日㈯～6日㈰　南アルプス「深南部・不動岳」11名参加。

＊2月18日㈯～19日㈰　「雪山・山スキー＝高峰高原」14名参加。

＊3月11日㈯　「文珠岳・森谷沢コース」17名参加。

＊11月12日㈯～29日㈰　懇親山行「富士山表口村山口登山道」20名参加。

＊納涼懇親会8月17日㈬　静岡センチュリーホテルで開催24名参

加。

《文珠山荘（ルーム）運営委員会関連》

＊4月16日㈯～17日㈰「花見と野趣の会」（映画・ビョンド・ザ・エッジ～歴史を変えたエベレスト初登頂）鑑賞。会員6名参加。

＊6月25日㈯～26日㈰「掃除と山の歌を歌う会」（映画・アイガー北壁）鑑賞。会員12名ほか3名参加。

＊9月10日㈯～11日㈰「納涼祭」（映画・黒部の太陽完全版）鑑賞。会員15名ほか4名参加。

＊10月29日㈯～30日㈰「ハロウイン」（映画・八甲田山完全版）鑑賞。会員17名参加。

＊12月10日㈯～11日㈰「忘年会」（映画・クライマー～パタゴニアの彼方に～）鑑賞。会員16名ほか2名参加。

＊3月11日㈯～12日㈰「文珠山荘をベースに山を登る会」セミナー（文珠岳、森谷沢コース）と共催。（映画・氷壁）鑑賞。会員20名ほか2名参加。

《会報＝会報編集委員会》

＊5月　会報「不盡」春季79号発行。

＊11月　会報「不盡」秋季80号発行。

＊1月　会報「合冊第2巻」（51号～75号）発行。

（木村勝利）

■東海支部

本年度も、40歳以下の入会希望者には入会金の助成を継続した。その甲斐あって平成28年度も多数の40歳以下の新入会員を迎え入れることができ、高齢化に歯止めをかけている。

東海支部員の平均年齢は現在64歳となっており、全国で2番目に低い平均年齢を保っている。3月末現在の支部員数は368名となり、昨年末より18名の純増となった。

《会議》

＊支部通常総会　5月21日㈯　本部より小林政志会長を迎え、高砂殿にて開催。出席214名（当日出席74名＋委任状140名）　支部長交代を含め大幅な役員の交代があった。新支部長には高橋玲司氏が就任。副支部長には山田明美氏（留任）、佐野忠則氏（新任）、片岡泰彦氏（新任）が就任した。

＊常務委員会　毎月第4水曜日開催（支部長、副支部長、各委員長が参加―支部運営の基本事項について審議）。

＊正副支部長会議　毎月第3水曜日開催（支部長、副支部長、総務委員長が参加常務委員会に先立ち、主要事項の事前審議）

＊各委員会（22委員会）―毎月1回開催（各委員会の活動内容の審議）

《山行・野外活動》

＊山行委員会定例山行（計画52山行内実施39―参加者合計28

7名）

＊青年部（個人山行―合計38隊（上廊下遡行、大雪山、後立山縦走、鳳凰三山縦走、冬季剣小窓尾根、八ヶ岳アイスクライミング、戸隠アイスクライミング、西穂高西尾根など）、合同山行（猿投山読図山行―10名、ゴザフェス―50名、クライミング講習会―30名、イグルー講習会―6名）、合宿訓練―5月GW　岳沢（15名）、9月小川山（20名）、

＊支部友会定例山行（実施36回、参加180名）

＊東海ユース（定例山行―22回（171名）、個人山行―82回（211名）

＊亀の会（定例―9回（193名）、自主企画山行―3回（61名）

＊登山教室（2教室、月1回の座学と山行、生徒数―1教室あたり15名、指導支部員1山行あたり4名）。

＊ボランティア活動―公募による視覚障がい者支援登山（5月―49名参加、11月―46名参加）、支部員対象視覚障がい者支援登山（ひまわり登山5回実施）、親子ふれあい登山（10月―221名参加）、知的障がい者支援登山（4月―69名参加）、幼稚園児・小学生を対象とした森の探検隊実施―猿投の森　11月12日（参加　子ども・保護者・引率105名＋支部員11名）。

＊森づくり活動―県有林「やまじの森」、東大演習林、JAC所有山桜フィールドでの森づくり、遊歩道の整備、間伐作業など―通年（作業日数35日、参加―年間428名）、わいがや講座と緑陰講座の開催（年間7回、参加者累計106名）。

＊森の音楽祭―10月22日（自然観察会含む）、参加者505名（内支部員80名）。

＊自然観察会―毎月1回第3土曜日（参加者累計190名、支部員が説明員として参加）。

＊同好会の活動―同好の士と本支部の事業目的に沿った多様な活動を通じて有意義なクラブライフを享受している（現在8つの同好会が活動中）。

《事故防止事業》

＊指導者研修講習会―6月から11月にかけて7回実施。

＊携帯電話とメールによる登山届の提出促進（通年）。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊第4回夏山フェスタの開催　6月11日～12日に名古屋ウインクアイチ7、8階にて開催。特別協力の形で運営に参加。26の山小屋をはじめ、登山用品メーカー、自治体などが92の出展数があり、来場者数は2日間で7410人であった（78名の支部員が支援スタッフとして従事）。

《広報・出版活動》

＊支部報の発行（年4回―4月、7月、10月、1月）。

＊ホームページを利用した支部活動の情報発信（通年）。

＊メールマガジン「東海支部だより」を11月に配信開始、月1回のペースで支部員・支部友会員・東海ユース・猿投の森づ

くりの会の希望者に配信している。

《講演会》

＊6月18日　成瀬　陽一氏講演会「俺は沢ヤだ」。

＊7月12日　三浦裕氏講演会「ファーストエイド」。

＊11月19日　和田誠士氏講演会「剣沢幻視行」。

＊1月21日　関裕一氏講演会「山岳番組の舞台裏」

《「山の日」啓蒙活動》

＊6月11日・12日―夏山フェスタ会場にて参加者全員（741名）に「山の日」啓蒙のチラシを配布。

＊8月11日―御在所山頂にて「山の日」啓蒙チラシの配布。

＊10月22日―森の音楽祭にて「山の日」啓蒙チラシの配布。

（毛利邦男）

■京都・滋賀支部

2016年度は支部創立30周年となり、記念式典を京都・滋賀支部にふさわしい比叡山延暦寺にて実施。全国各地から大勢の方に参加していただき、盛大に催すことができた。記念式典は講演会、ハーモニカの演奏会で盛りあがり、翌日は座禅・写経組と、山行組は3コースに分かれて比叡山千日回峰行の道を歩いた。ほかには記念海外登山および京・滋30山を選定し山行を実施した。また、「山の日」記念活動として親子登山教室を開催し、会員相互の交流を深めるため、多くの山行例会を実施した。

《支部総会・支部役員会・部会等》

＊第31回京都・滋賀支部通常総会　4月2日㈯　鴨沂会館33名参加。懇親会20名参加。講演会　ネパール大地震「復興が遅々する現状」　講師＝浅原明男氏

＊支部役員会　毎月第1水曜日　年12回開催。

＊自然保護部会　年6回　隔月に開催。

＊山水会　10月19日㈬　「里山を歩いて思うこと」講師＝光会員20名参加。2月15日㈬「京の四季と自然への祈り」講師＝八木透会員32名参加。

＊支部新年会　1月11日㈬　48名参加。

《支部創立30周年記念事業》

＊記念式典　4月23日㈯～24日㈰　比叡山延暦寺会館　134名参加。記念講演＝立山カルデラ砂防博物館学芸課長・飯田肇氏、千日回峰大行満大阿闍梨・上原行照師記念登山ほか＝無動寺坂コース29名、横川峰道コース49名、大比叡コース23名、座禅・写経コース27名参加。

＊支部創立30周年記念山行　京都・滋賀の30山　2016年4月30日㈰から2017年3月25日㈰　までに京都府の15山（大文字山、頭巾山、愛宕山、依遅ヶ尾山、多祢寺山、磯砂山、長老ヶ岳、三国峠、地蔵山、魚谷山、千丈ヶ岳、ポンポン山、

鷲峰山、桟敷ヶ岳、皆子山）滋賀県の12山（東山、金糞岳、金勝（竜王山）、油日岳、赤坂山、武奈ヶ岳、百里ヶ岳、横山岳、賤ケ岳、蓬莱山、綿向山、比叡山）の山行を行ない、延べ２７５名が参加した。

＊支部創立30周年記念海外登山　11月16日㈬～12月1日㈭　ネパールトレッキング（ムクチナートからトロンパス越え）行程約80キロ。9名参加。

《「山の日」記念支部活動》

8月10日㈬～11日㈷　「山の日」親子登山教室　赤坂山登山とキャンプの集い　53名参加（内一般25名）。

《自然保護部会活動》

巨木観察を5回行ない、延べ17名が参加した。

《他支部交流山行》

9月3日㈯～5日㈪　広島支部交流登山　小谷山　賤ケ岳から山本山　19名参加（広島支部6名）。10月16日㈰～17日㈪　5支部合同山行・猪臥山（岐阜支部6名参加）。11月5日㈯～6日㈰　森の勉強会（書写山）1名参加。2月25日㈯～26日㈰　5支部スキー山行高鷲スノーパークから大日山（岐阜支部）7名参加。

《平日山行》

京都・滋賀のあまり登られていない山を中心に8回の例会を行ない、延べ35名が参加した。

《山歩会山行》

京都・滋賀の里山を中心に6回の例会を行ない、延べ50名が参加した。

《その他の山行》

5月14日㈯　今西錦司レリーフの集い8名参加。5月16日㈪　春のスケッチ山行琵琶湖畔6名参加。6月5日㈰　人工登攀壁クライミング29名参加（一般参加者含む）。7月16日㈯～18日㈪　八間山・飯井山巨木観察　白根山　志賀高原6名参加。7月30日㈯　大文字山納涼山行13名参加。9月17日㈯～19日㈪　月見登山と巨木観察・浅間隠山7名参加。10月27日㈭　秋のスケッチ山行（堂満岳～打見山）5名参加。1月5日㈭　初詣登山　松尾大社から松尾山磐座参拝13名参加。2月11日㈯～12日㈰　スキー例会　藪原スキー場7名参加。

（方山宗子）

■関西支部

平成27年に関西支部は設立80周年を迎え、記念誌の発刊、記念式典の開催などを進めてきた。そして、平成28年度は総仕上げとして、重廣恒夫を隊長とする東ネパール登山隊を派遣し、ナンガマリⅡ峰の初登頂を果たした。併せて、平成25年より進

めてきた、瀬戸内から日本海、日本海から太平洋への県境縦走を完成させた。また、これら記念事業のため全国から3か年にわたり９９０万円のありがたい募金が寄せられた。
　準会員制度の新設など新たな課題に対処するため、支部規約改正に取り組み、役員の負担軽減、会員、準会員、会友の増加を目指すこととした。

《会議》
＊通常総会　4月20日（水）ホテルグリープラザ大阪　参加者47名。事業報告、決算報告、事業計画、予算を可決。
＊評議員会　4月13日㈬に開催、支部運営について諮問。
＊委員会　7回実施、述べ１０３名が出席。
＊委員長会議　6回実施。
＊支部規約改正プロジェクト会議　5回実施。

《山行》
＊関西支部県境縦走　毎回1泊2日で8回実施、述べ94名参加。
＊４０００山グランプリ　9回テント泊で実施、述べ１３２人参加。
＊ゆるやか山行（里山探訪・歴史と文化をたずねる）10回実施、延べ１９７名が参加。
＊一般山行（熊野伊勢路など）14回実施、延べ１８３名参加。
＊海外トレッキング　3月28日から4月4日　ベトナム・ファンシーハンで実施、9名が参加。

《安全登山啓発》
＊登山教室　初級から上級の3クラスで、座学1日と実践3日を1クールとして3回実施、参加者延べ２４４名。
＊レスキュー講座　1月28日㈯　テーピング実習、参加者13名。

《自然保護》
＊本山寺山森林づくり　森林保全など22回実施、延べ１４９名参加。
＊東お多福山草原復元活動　ススキ草原復元活動など21回実施、延べ40名参加。
＊第20回森の勉強会　11月5～6日奈良県桜井市与喜山暖帯林で実施（京都・滋賀、東海支部と共催）、10名参加。
＊自然保護全国集会　7月16～17日　高知市牧野記念植物園地、参加者8名。

《プロジェクト》
＊80周年記念海外登山ＰＪ会議（ヒマラヤ塾）　7回実施、延べ65名出席。
＊プロジェクトトレーニング山行　6回実施、延べ96名参加。
＊登山報告会　1月21日㈯　大東洋　80名参加。

《山の日関連行事》
＊藤木祭　10月2日㈰　大阪、兵庫各岳連と共催　芦屋市高座・滝前、一般参加を加え約１２０名参加。
＊著者と語る会　大阪府立中央図書館　沖充人氏の講演「イン

ドヒマラヤをめぐる」、参加者37名。

《その他関連行事》

＊新年会　1月21日㈯　大東洋、参加者55名。

《広報》

＊支部報発行　6、9、12、3月の4回発行。

＊ホームページ　適宜更新。

（金井良碩）

■山陰支部

山陰支部は、支部設立（1949年4月1日）で、2019年に筋目の創立70周年を迎えることになる。このため70周年記念事業として記念式典の開催内容や70周年記念誌編纂を平成28年度の重要課題として月例会等で検討してきた。併せて一昨年来より支部活性化として取り組んでいる神話の国「出雲の国」と伯耆大山のある「伯耆の国」の山々100座を設定し、古事記や風土記で語り継がれる神話に絡めて、支部会員や友の会員で月例山行を中心に踏査して出版物にまとめ、記念事業の一環として進めている。

継続事業として取り組んでいる中国四国支部交流会は、今回は広島支部に担当していただき、広島県民の森を基地にして比婆山系での交流登山を行なった（大雨の中での参加となった）。また、京都・滋賀支部創立30周年記念式典に4名の会員が参加するなど他支部との交流を積極的に進めてきた。

高齢化と会員減少は、当支部にとっても深刻な問題で、会員増強は喫緊の課題となっている。先進事例を参考に、会員の加入促進にむけて頑張っていきたいと考えているところだ。

《会議》

＊月例会の開催　米子市公会堂第7集会室で各月第4週の火曜日に開催した。

＊4月22日運営委員会　平成28年度支部総会の議題について協議。

＊4月26日㈯　通常総会　米子市公会堂第7集会室　出席者19名。平成27年度事業報告、会計監査報告、平成28年度事業計画、山陰支部創立70周年記念事業への取り組みと平成28年度予算等を審議して、執行部（案）を満場一致で承認した。

＊9月24日㈯～25日㈰　平成28年度支部合同会議（関西ブロック）　大阪府プラザエフ会館　出席者支部長他1名。

＊12月3日㈯平成28年度支部長会議　京王プラザホテル　支部長出席。

＊12月3日㈯平成28年度本部年次晩餐会　京王プラザホテル　2名出席。

＊12月10日㈯山陰支部年次晩餐会　米子ワシントンホテル　出席者19名。

《山行・野外活動》

＊4月10日　月例山行　鷹峰山（920・6m）　参加者3名。

＊4月23日～24日　京都・滋賀支部創立30周年記念式典　比叡山行者道（峰道を歩く）。

＊4月25日㈪　月例山行　島根半島東端・馬着山（210m　会員、会友18人参加。

＊7月1日㈮　月例山行　宝仏山（1002m）物故者会員の追悼山行　参加者5名。

＊7月12日㈫　月例山行　吾妻山（1238m）　4名参加。

＊8月8日㈪　月例山行　津黒山（1118m）　3名参加。

＊8月24日㈬　月例山行　猿政山（1268m）　5名参加。

＊9月2日㈮　月例山行　花見山（1188m）会員、会友18名参加。

＊9月25日㈪　中四国支部交流登山　比婆山系　6名参加。

＊11月4日㈮　月例山行　京羅木山（473m）会員、会友16名参加。

＊12月18日㈯　月例山行　車山（171m）・天馬山（251m）・比婆山（280m）3名参加。

＊3月12日㈰　月例山行　天狗山（610m）・大出日山（601・6m）4名参加。

《プロジェクト地域振興活動》

＊地区公民館学習口座登山指導（公益事業）計3回　指導員3名派遣。

＊3月18日㈯～19日㈰「大山冬山パトロール」冬山安全登山指導（公益事業）　3名出席。

（中井俊一）

■広島支部

2016年度の特記事項は、広島支部「学生クラブ」の富士山登山で、11月20日㈰にリーダーと学生の2名が滑落・死亡する遭難、支部創立20周年（2017年11月1日）記念事業委員会の設立、ジュニア・ユース育成事業が成果を表わしたこと、支部ルームがフル活用状態、図書室の寄贈本1400冊を超えていることなどである。会員数は期首185名入会11名、退会5名、期末191名。支部友会員、会友を含めると期首総数216名、期末総数228名だ。

《会議》

＊通常総会　4月9日㈯　ホテルJALシティ広島　山田和人副会長を迎える。出席147名（当日出席79名、委任状68名）。

＊役員会　6月23日㈭、10月20日㈭、3月16日㈭。拡大役員会1月19日㈭　支部ルーム。

＊正副支部長事務局長会議　12回開催　支部ルーム。

＊総務本部役員会　12回開催。総務委員会　9月27日㈫。い

ずれも支部ルーム。

＊顧問会議　11月16日㈭　顧問3名　支部ルーム。

＊新入会員オリエンテーション　5月19日㈭　新入会員13名　支部ルーム。

＊支部規程改訂　役員数「20名以内」を「25名以内」に改訂。

＊支部ルームの活用　4月～2月の11ヵ月間合計227日（20・6日／月）520件（47件／月）2533名（230名・月）。例会、ミーティング、山楽サロン、ルームメイトなど。

《山行・野外活動》

＊安全登山推進本部　リーダー研修会　4月10日㈰　仏舎利塔　参加者28名。救急員育成講習会　11月12日、19日、20日、参加者15名。

＊第1山行委員会　例会10回　延べ参加者261名。主に県内。県外では第11回夏山登山バス＝白馬岳　26名（他の山行例会、登山講座受講生を含むと総勢4隊44名）。

＊第2山行委員会　例会12回　延べ参加者130名。白山、白馬岳、大杉谷・大台ヶ原など。

＊第3山行委員会（旧J－HAT）例会　年間9回、延べ参加者95名。

＊スキー委員会　・ニセコ　12月15日㈭～20日㈫　7名。・本部バックカントリークラブ例会　1月27日㈮～30日㈪　早大小屋拠点　3名。信州スキー　2月4日㈯～8日㈬　14名。

＊支部友委員会　例会　年4回　延べ参加者74名。古道・街道巡り（石州街道）11名。

＊国際委員会　支部創立20周年記念事業　10月30日㈰～11月6日㈰　台湾　玉山・雪山。

＊交流委員会　①第32回全国支部懇談会　4月9日㈯（越後支部担当）広島支部1名　②第1回中四国ブロック会議（広島支部担当）　9月17日㈯　支部ルーム　本部・大久保副会長　山陰支部6名　広島支部12名　四国支部5名　③第3回3支部交流会（広島支部担当）　9月18日㈰～19日㈪　比婆山　本部・大久保副会長　山陰支部6名、広島支部21名、四国支部8名。④第7回北九州支部交流会（広島支部担当）　10月8日㈯～10日㈪　聖山～高岳　広島支部14名　北九州支部14名。⑤第12回京都・滋賀支部交流会（京都・滋賀支部担当）　9月3日㈯～5日㈪　賤ヶ岳　参加者広島支部6名。⑥京都滋賀支部創立30周年記念式典　4月23日㈯～24日㈰　比叡山延暦寺　参加者広島支部8名。⑦年次晩餐会（本部担当）12月3日㈯　京王プラザホテル　参加者広島支部2名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊ジュニア・ユースの育成（公益事業）

①ジュニアクラブ・子どもハイキング4回　延べ参加者1名（子ども38名　保護者32名）。ワラビ採り、キャンプ、もみじ饅頭手づくり体験、かまくらづくり。

②学生クラブ7回　延べ参加者45名（大山合宿5名　御在所フェスタ5名など）。11月20日に富士山で2名滑落死亡故発生。
③ユースクラブ19回（自主訓練を除く）　延べ参加者102名。空木岳、前穂高岳、小川山、八ヶ岳など。
＊自然環境保護・保全活動（公益事業）
①中央分水嶺新道整備（聖分かれ―野田の百本松）9月10日㈯～11日㈰　延べ参加者29名。
②第15回ひろしま「山の日」県民の集い　6月4日㈯　八幡高原・霧ヶ谷湿原再生化事業　広島支部29名。6月5日㈰　初心者の登山教室指導（龍王山　臥龍山）参加者7名。ジュニアツリークライミング指導　参加者9名。
③国民の祝日「山の日」8月11日　JA会館　講演「山を想う　山を語る」講師＝江本嘉伸氏　広島支部参加者16名。
＊13年目の中国新聞文化センター登山講座（公益事業）　講師派遣（広島・呉・福山・岩国の4地区5教室　「里山ハイキング」「初級登山講座」「中級登山講座」計10クラス）受講者延べ1041名。
《広報・文化活動》
＊広島支部報「JAC HIROSHIMA」　4月1日、7月1日、10月1日、1月1日号（通算62号）の発行。
＊山楽（さんがく）サロンの開催　第19回＝7月19日㈫　尾道憲二「天気図を読む」19名。第20回＝9月29日㈭　岡谷良信「ガイドレスで登ったマッターホルン」26名。第21回＝2月2日㈭　佐久間智子「西中国山地の草原」26名。
＊医科学委員会　支部報連載「登山の健康講座」3回（通算50回）
《その他の行事・懇親会》
＊忘年会　新年会とも実施せず。

（国枝忠幹）

■四国支部

四国支部の1年は、高松市峰山公園の桜吹雪とともに始まる。公園内のはにわっ子広場に建立された小島烏水顕彰碑前で実施される烏水祭も、今年で第4回を迎える。新たな年度の始まりを告げる四国支部の行事として、すっかり定着した感がある。
今年度の特筆すべき行事は、7月に高知市で開催した自然保護全国集会である。会場の選択には、ずいぶんと知恵を絞ったものである。その結果、四国高知県が生んだ「日本植物分類学の父」牧野富太郎博士の業績を顕彰するために設置された高知県立牧野植物園を主会場とした。基調講演は「SOS三嶺の自然」と題し、シカの食害をテーマとした。講演に続く分科会終了後は、宿泊・懇親会場の「工石山青少年の家」に移動し、高

知名物「鰹のタタキ」のほか地元で捕獲されたシカや猪のジビエ料理に舌鼓をうち、夜更けまで参加者一同大いに親睦を深めた。まさに自然保護集会に相応しいものとなったと密かに自負している。

そのほか、前年度に引き続き、愛媛県内を中心に初心者向け登山教室「フラワートレッキング」を実施した。これは季節の花を愛でながら、安全登山の技術や植物の知識を学ぶものである。また関西支部との合同山行として４０００山グランプリ（ＧＰ）を3回実施した。これは、『新日本山岳誌』掲載の山々を順次踏破するものであり、将来にわたって継続して取り組む。

《会議》

＊5月14日㈯　通常総会　道後友輪荘（愛媛県松山市）　審議事項は、27年度事業報告および会計報告、28年度事業計画および予算案並びに役員改選。会員総数78名。翌15日㈰に記念山行を実施。

＊毎月1回　会員有志による情報交換会「サロン会」を支部ルーム（徳島市川内町）で開催。

《山行・野外活動》

＊5月15日㈰　善神ヶ森・陳ヶ森　参加者22名。

＊5月21日㈯～22日㈰　奥白髪山・奥工石山・笹ヶ峰・国見山（４０００山ＧＰ）参加者17名（うち四国支部9名）。

＊6月11日㈯　四国一の大ヒノキ探訪　参加者7名。

＊7月17日㈰　工石山・工石沢遡行（自然保護全国集会記念山行）　沢登り参加者15名（うち四国支部8名）。

＊8月20日㈯～21日㈰　鶴松森・不入山・天狗の森・横倉山（４０００山ＧＰ）参加者8名（うち四国支部3名）。

＊9月10日㈯　大アレ　参加者5名。

＊10月22日㈯　伊島探訪　参加者6名。

＊11月12日㈯～13日㈰　剣山～三嶺／丸石（ＪＡＣ ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢとの合同山行）参加者26名（うち四国支部13名）。

＊12月17日㈯　御在所山・鷲尾山（４０００山ＧＰ）参加者11名（うち四国支部6名）。

＊1月15日㈰　鶏ヶ峯山・奥河内山（干支の山行）参加者8名。

＊2月11日㈯　腕山（スノーハイク）参加者6名。

＊3月26日㈰　寒峰（福寿草鑑賞）参加者4名。

＊初心者登山教室「フラワートレッキング」　愛媛地区で実施、国内43回参加者３３４名ほか欧州アルプスで実施（4名参加）。

《広報・出版活動》

＊支部報「四国山岳」第3号　28年4月発行。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月16日㈯　第4回小島烏水祭（高松市峰山公園）碑前祭（烏水顕彰碑前）・石清尾山周回登山・讃岐うどんのお接待・夕食懇談会　参加者１０２名。

＊7月16日㈯～17日㈰　２０１６年度自然保護全国集会（本部主催・四国支部主管）　テーマ「どうする！山の野生動物との関わり」　参加者95名（うち四国支部27名）。
＊9月3日㈯　環境保全活動（古道整備：池ノ峠）　参加者5名。
＊12月10日㈯～18日㈰　ナンガマリⅡ峰初登頂報告会（松山市・三好市菅生・徳島市）　参加者71名。
＊12月11日㈰　環境保全活動（間伐材再利用薪づくり　菅生登山口周辺）　参加者18名。

《その他行事》

＊9月17日㈯～18日㈰　「第1回中国・四国ブロック会議」および「第3回山陰・四国・広島3支部交流会」（広島支部主管）参加者39名（うち四国支部8名）。

（森山宏昭）

福岡支部

《会議》

1・平成28年度通常総会を5月21日㈯　中央市民センターにて開催した。支部会員数76名、総会出席者数19名、委任状30名、合計49名。中馬董人支部長挨拶に続き、平成27度事業報告、平成27年度会計報告、平成28年度事業計画、平成28年度会計予算等が審議され承認された。福岡支部規約に基づき、支部長の任期満了に伴い交代の時期にあたり、推薦により高木荘輔（１２９２０）会員を支部長に選任した。各役員については留任となった。

2・役員会は例年どおり各月第2火曜日に開催した。

《プロジェクト・地域振興活動》

1・猪熊隆之気象予報士講演会

＊4月28日㈭　ＪＲシティでの講演会を開催した（福岡県勤労者連盟主催）。約１００名が参加。

＊4月29日㈮～30日㈯　第6回「パハル・フェスタｉｎ坊がつる～猪熊隆之気象予報士と天気講座でくじゅうに登ろう！」を予定したが、熊本・大分地震の影響で中止とした。

2・自然観察会「基山のオキナグサ保護の状況」講師＝五十嵐賢会員　5月7日㈯　参加者12名。

五十嵐氏は山と渓谷社『福岡県の山』などの著者でもあり、佐賀の城山に咲いているサクラツツジや基山のオキナグサの保護活動を行なわれてきた。これが評価され平成27年度自然公園関係功労者環境大臣表彰を受けられた。これを記念し今回の自然観察会講師をお願いした。実際にオキナグサ保護の状況を観察し、復元してきている様子も見ることができた。また五十嵐さんは平成28年秋の褒章で「藍綬褒章」も受賞された。

3・夏山フェスタｉｎ福岡２０１６

６月25日㈯～26日㈰　福岡タワー　主催＝夏山フェスタｉｎ２０１６実行委員会　来場者数＝25日約１０００名　26日約２７００名　合計約３７００名　セミナー参加者延べ４１００名。

国民の祝日「山の日」の制定を記念し、登山愛好家の裾野を広げる好機として、山に親しみ、理解を深めてもらうイベントを福岡タワーにて開催した。主催は日本山岳会などからなる夏山フェスタｉｎ福岡２０１６実行委員会で、協力団体として福岡支部、北九州支部、福岡県山岳連盟、福岡県勤労者山岳連盟なども加わった。結果は大盛況で大成功であった。

＊６月25日　13：00「九州オルレの風景」２１０名、14：00村松優子「美しい九重の植物たち」２７０名、15：00井上晋「山を形成している樹木たち」２５０名、16：00古野・春山・渡部「組織登山者と未組織登山者」２５０名、17：00龍山康朗「天気をよんで遭難を防ごう」２５０名、18：00山小屋「日本の山の恩恵」１５０名、計１５６０名。

＊６月26日　10：00渡部秀樹「地図読みの基本」２７０名、11：00川上信也「デジカメで撮る風景」３００名、13：00田部井淳子「日本の山の素晴らしさ」５００名、14：00山本正嘉「夏山に向けて～トレーニング」４００名、15：00土井理「山での突発性の病気」２８０名、16：00翠川幸二「山岳遭難救助の現場から」２６０名、17：00徳永哲哉「安全快適登山術」２３０名、計２５４０名。

＊ブース出展　メーカー関係16社、旅行関係４社、自治体関係９団体、その他６団体。

4・祝日「山の日」制定記念ｉｎ福岡登山大会

主催＝「山の日」制定記念福岡２０１６実行委員会　主管＝福岡支部、北九州支部、福岡県山岳連盟、福岡県勤労者山岳連盟、全九州アルパインガイドクラブ　後援＝福岡県、福岡市、北九州市、添田町、太宰府市、西日本新聞社、朝日新聞社ほか。８月11日（木・祝）当日、福岡支部・福岡県岳連主導の「英彦山登山大会」、福岡県労山主導の「宝満山登山大会」、北九州支部主導の「風師山登山大会」の三山での大会を共催で行なった。

5・ふるさとの山清掃ハイク・忘年登山「三日月山・立花山」

２０１６年12月10日㈯　コース＝下原～三日月山～立花山～クスノキ原始林～下原。途中ゴミを拾いながら清掃登山を行なった。

6・岳人のつどい「山の映画会」

＊映画『思いを運ぶ手紙』（監督：ウゲン・ワンディ／２００４／ブータン／70分）上映会とブータン紀行・スライド映写会　日時＝２月５日㈰14：00～16：00　会場＝太宰府館・まほ

ろばホール　参加者＝会員28名、一般63名、合計：91名。映画約1時間10分上映後、渡部秀樹氏によるスライド上映「しあわせの国ブータンとは」（約20分）も行なった。

＊懇親会16：30～18：30　（岳人のつどい新年会）を同会場にて行なった。参加者＝会員24名、一般＝12名、合計36名。

《広報・出版活動》

支部報30号を2017年3月15日に発行した。主な内容＝①支部長就任にあたって「一人でも多くの会員増を！」（福岡支部長・高木荘輔）　②総会・記念講演「基山におけるオキナグサの保護活動」（五十嵐賢）　③特集「山の日」に思う、「井上靖先生とシルクロード、ヒマラヤの旅」（石原國利、東海支部・岩稜会会員）、「英彦山・宝満山・風師山で登山大会～8／11「山の日」制定記念登山in福岡2016～」（高木荘輔）、「福岡支部報第30号発刊に思うこと」（倉智清司）、「スイスの楽しいSL」（山本博）、「紙芝居『ボーズヤの約束』を作成し終えて」（水野公代）、「鳳凰三山縦走」（酒匂輝昌）、「韓国・済州島の漢ハンナサン拏山登山（1966年4月）―蒸し返される日韓問題と私のトラウマ―」（辻和毅）、「春のジョムソントレッキング」（小野サツキ）、「西安・漢陽陵を見学して」（佐々木耕二）、「チベット・アムドの黄河上流域に遊牧民を訪ねて」（渡部秀樹）、「ランタンヒマール　ナヤカンガ峰（5844m）登頂」（中溝幸夫・九州大学山岳部）　④追悼文、「上岡謙一さんを偲ぶ」、「松本康司さんを偲ぶ」（高木荘輔）　⑤ふるさとの山清掃・忘年登山「三日月山・立花山」（倉智清司）など。

（渡部秀樹）

■北九州支部

支部山岳指導員研修は4年目になり、リーダーとしての人材が着実に育ちつつある。合わせて山岳専科の講習会も定着化してきた。しかしながら入会には繋がらず会員減を食い止め、増やしていくのが大きな課題となっている。今後は、一般参加主体の山行計画や講習会での入会勧誘などに力を入れたい。

《会議》

＊総会　5月14日㈯第17回通常総会を「ラメール雅」で開催。出席者38人。支部友支部会費の値上げ、通常会員支部会費徴収（案）が審議され、承認可決された。

＊臨時役員会　4月6日㈬、12月6日㈫、3月14日㈬。

＊定例役員会　5月18日㈬、7月6日㈬、9月7日㈬、11月2日㈬、1月11日㈬、3月1日㈬。

＊山行委員会　12月22日㈭、1月18日㈬

《講習会等》

1・支部山岳指導員研修　5回　延べ人数53人（指導員13人）。

2・山岳専科　4回　延べ人数64人。

3・岩登り教室　1回　14人。

《自然環境保全活動》

＊九州森林管理局より委嘱を受けた森林保全巡視員20人を選出し、森林保全巡視活動を行なうとともに、登山道の清掃など自然環境保全活動を行なった。

＊英彦山頂上に設置されたバイオトイレの清掃作業を月に1回程度を行なった。

《行事・野外活動》

・4月26日(日)　英彦山清掃登山（支部28人、総数57人）。
・4月9日(土)～10日(日)　全国支部懇談会（2人）。
・5月14日(土)　「槇有恒碑前祭」が行なわれ40人が出席した。午後1時からは、門司港レトロ旧大連航路上屋にてマナスル登頂60周年を記念して「マナスルに立つ」を上映し、48人が観賞した。
・5月17日(火)～19日(木)　幸幼稚園児ハイキングサポート14人。
・5月22日(日)　戸ノ上山にて登山体力測定（29人）。
・5月29日(日)　英彦山山開き　12人参加。
・6月25日(土)～26日(日)　山の日記念フェスタｉｎ福岡　約370人。
・8月3日(水)～9日(火)　山の文化展　入場総数2007人。
・8月11日(祝)　家族登山（風師山～矢筈山）　参加者94人。
・9月24日(土)～25日(日)　西日本支部合同会議（大阪）　2人参加。
・10月8日(土)～10日（祝）　広島支部との交流登山　14人参加。
・11月3日(木)～4日(金)　宮崎ウエストン祭12人参加。
・12月3日(土)～4日(日)　本部年次晩餐会6人参加。
・12月11日(日)　「忘年の集い」（ラメール雅）31人参加。
・2月5日(日)　岳人の集い（福岡支部主催）3人参加。
・3月16日(木)　さいわい幼稚園児卒園ハイキングサポート8人。

《支部山行》

・4月2日(土)～3日(日)　市房山（6人）。
・4月3日(日)　岩石山　（14人）。
・5月8日(日)　四王司山（6人）。
・6月2日(木)　弟見山（8人）。
・9月11日(日)　右田ヶ岳（11人）。
・10月15日(土)～16日(日)　九重・黒岳（13人）。
・10月22日(土)～23日(日)　石鎚山（5人）。
・11月20日(日)　津波戸山（15人）。
・1月21日(土)～22日(日)　安蔵寺山（8人）。

《広報出版活動》

会報誌「北九だより」の発行4回　5月No.76、7月No.77、10月No.78、1月No.79。

《同好会活動》

1・版画教室　12回開催（ルーム）。

2・ポレポレの会（山行および史跡探索）10回　平均12人参加。

《その他行事》

小倉サロン（毎月第4水曜日）情報交換　11回開催。

博多サロン（3か月毎第1木曜日）情報交換　4回開催。

（関口興洋）

■熊本支部

平成28年度は、4月早々熊本地震に見舞われ、まさに出鼻をくじかれた格好の新年度の始まりだった。4月16日の地震は熊本の県民に大きな衝撃を与えたが、会員の3名の方が家屋の半壊という被害に遭われ、現在もみなし仮設生活を強いられているが、幸いにも山岳会においては人的被害は見られなかった。

会の活動は大きく軌道修正を余儀なくされた。4月に予定していた支部通常総会は当然のごとく延期になり、結局は5月の末、やっとのことで会場の確保ができ、参加された会員の無事を確認した。

当然ながら事前に計画していた年間事業は、4月、5月、6月の行事や山行は中止せざるを得なかった。7月の北アルプス遠征が今年度最初の事業となった。平成29年度は熊本支部が創立されて60周年を迎える記念すべき年になるため、支部ではその記念の事業として「熊本の一等三角点」の再調査と確認作業を実施すべく、準備委員会を設立して順次計画実行に移る際の熊本地震で、この事業も見直しを迫られた。今年度は通常の支部行事のほかに、この設立60周年記念事業としての特別事業を計画、準備委員会を立ち上げた。役員会も月1回の定例会と準備委員会も並行して実施された。

今年度も昨年度に続き、「支部のリーダー養成」として山岳会の特別補助を交付していただき、夏の沢登り、冬の雪山における研修会を実施した。今回は国際山岳医でもある土井　理会員の指導でかなり重厚な研修が実施された。

支部活動の主目的もある会員の増強の「登山教室」も実施しているが、会員からは多少マンネリ化しているのではないかとの意見もあり、この登山教室のテーマでもあった「阿蘇外輪山の完全踏破」も9月の登山教室で一応の結果が出たのを機会に、今までこの事業に参加された一般の皆さんに、再度のお誘いをし、会員確保を充実することになった。それによって過去に参加された方から、このような誘いがあれば必ず参加するとの意見が多く寄せられ、今年度から採用された「準会員」制度にも多くの関心が寄せられて、思いがけぬ6名の加入者があった。

先に述べたように、平成29年度は熊本支部が設立されて「還暦」を迎え、その記念行事の計画準備が実行委員会の20名を中心に進められた。特に「何か記念に残ること」を考え、支部会

員全員で熊本県内にある一等三角点を踏査し、歴史や自然をより観察しようと取り掛かった。この事業も地震のため3ヶ月の活動停止があり、予定を大きく変更することになった。熊本県には14座の一等三角点があり、１７００ｍクラスの高山から４００ｍクラスの低山があって、特に低山では登山の対象になっていないものもあった。また、県境をまたいで4座の一等三角点もあり、結局この17座を調査研究の対象とした。約1年間の調査期間で、延べ59名の会員が協力し、設立60周年の記念日には何とか間に合うこととなった。通常の支部行事に加え、この記念事業は支部会員にとって大きな負担と、労力を与えてしまったが、結果はかなり詳しい内容となり、何よりも会員が登ったこともない低い「山」に挑戦し、地図の見方や植生の調査、そして地元に聞いたその山の歴史など、通常の登山活動では得られない貴重な経験をしたことが大きな糧となった。

《会議》

＊5月28日㈰　平成支部総会　熊本婦人会館　27名

＊毎月1回支部役員会　事業の仔細計画や支部の運営内容の検討を行なった

《山行・事業等》

＊4月16日㈯　森林巡視登山（阿蘇高岳）地震災害のため中止。

＊5月15日㈰　第16回登山教室　五家荘「保口岳」　地震のため中止。

＊6月11日㈯～12日㈰　宮崎支部との交流会　熊本地震のため延期。

＊7月15日㈮～18日㈪　北アルプス遠征（北穂高岳）　6名。

＊7月30日㈯　市民登山教室（座学）　テーピング技術講習　22名。

＊7月31日㈰　市民登山教室（実技）　九重扇山登山　19名。

＊8月11日㈷　「山の日協賛親子登山」　玉名市・小岱山　32名。

＊8月20日～21日　第12回登山研修会「沢登り」宮崎県・藤河内渓谷　10名。

＊8月27日㈯　夏季例会（ビールパーティ）支部会員の親睦と交流　31名。

＊9月11日㈰　第15回登山教室　南阿蘇「高森峠～国民休暇村」　34名。

＊10月2日㈰　九州山脈トレイルランへの参加協力（他団体のトレイルラン大会協力）　11名。

＊11月5～6日㈰　宮崎ウェストン祭　ウェストン祭および記念山行を実施　10名。

＊11月20日㈯　（金峰山・三の岳）森林保全巡視登山　21名。

＊12月3日～18日　第7回山の写真展　実数４５５名（名簿記載１４９名）。

＊12月11日㈰　海外登山報告会　19名。

＊1月14日(土)　支部新年晩餐会　支部会員・会友の親睦と新年の挨拶会　26名。
＊2月5日(日)　第8回冬山登山研修会　九重山群・御池　29名。
＊3月3日～6日　冬季研修会（大山雪山研修会）　7名。
＊3月12日(日)干支の山（霧島・白鳥山）　30名。
《出版・広報》
＊年3回支部報発行　37号・38号・39号　支部活動の報告や情報提供・会員の登山報告。
＊支部通信〈隔月〉の発行　登山計画の案内や会員への連絡を行なった。
《山の日記念事業委員会（日本山岳会・熊本山岳連盟・熊本山岳ガイド協会）》
＊2月6日　第1回山の日記念事業委員会
＊3月10日　第2回山の日記念事業委員会
《熊本支部設立60周年記念事業準備委員会》
＊3月　設立60周年の周知広報（東部公民館）　役員会などで準備計画を立てる。
＊4月　準備委員会の設置　会員に呼びかけ16名の委員を選出。
＊4月　準備委員会の開催（東部公民館）　記念事業その他の説明と担当者決定。
＊4月16日　熊本地震発生被害状況の調査。
＊5月　第2回準備委員会（帯山公民館）　準備計画の再検討。
＊6月　第3回準備委員会（帯山公民館）　特別事業一等三角点調査の計画。
＊7月　第4回準備委員会（白川コミセン）　三角点の調査進捗状況と変更。
＊8月　第5回準備委員会（帯山公民館）　担当者の変更・進捗状況報告。
＊9月　第6回準備委員会（帯山公民館）　調査の協力者募集と計画。
＊10月　第7回準備委員会（帯山公民館）　調査報告会と調査日程の確認。
＊11月　第8回準備委員会（東部公民館）　各調査の問題点報告と再調査。
＊2月　第9回準備委員会（東部公民館）　各調査の問題点報告と再調査。
＊3月　第9回準備委員会（東部公民館）　再調査結果と役割分担決め。

（松本莞爾）

東九州支部

平成28年度支部定期総会は当初4月16日㈯の開催予定であったが、14日夜と16日深夜の熊本・大分地震のため急遽延期し、5月14日㈯に開催した。今年度の支部の公益的事業としては、「山の日」のスタートを記念して当支部が県内主要山岳3団体に呼びかけて実施した『「山の日」記念ｉｎおおいた・くじゅう登山大会』が特筆すべきである。九州の登山のメッカ、九重連山に約４００名の登山愛好者が集い、盛大に開かれた。15回目を数える「青少年体験登山教室」をはじめ、久住山御池の遭難者慰霊碑の前での「山の安全を祈る集い」、九重山の登山道清掃登山、祖母傾山系でのスズタケの枯死とシカの食害状況調査の活動などに取り組んできた。

共益事業では支部の登山活動の基点として位置づけている毎月の月例山行を定例的に実施したほか、別に会員の研修山行も3回実施した。合宿山行や忘年山行と忘年会など会員相互の交流と親睦とを中心にした登山活動も展開した。また、支部の活性化と次期リーダー育成を視野に入れた青年部を昨年立ち上げたが、今年はその育成のための研修も計画的実施にこぎつけた。人数は少ないが今後の活動の発展を期待している。

海外の岳人交流とし実施している韓国山岳会蔚山支部との交流は、今年度は当方に韓国を迎える順番で、当初は28年秋に阿蘇登山を予定していたが、熊本地震とその後の阿蘇の噴火活動などにより実施を見送っており、29年秋に実施を予定している。

《会議》

＊支部定期総会

5月14日㈯　大分市・コンパルホール　会員74名中出席61名（うち委任状28名）。平成27年度事業報告・決算報告・監査報告、28年度事業計画・予算案などを承認・可決。

＊支部役員会

・第1回役員会　6月2日㈭大分市・コンパルホール
平成28年度事業の具体化について、ほか

・第2回役員会　7月14日㈭コンパルホール　「山の日」記念集会について、第15回青少年体験登山大会について、ほか。

・第3回役員会　9月28日㈮大分市・コンパルホール
韓国山岳会蔚山支部との交流について、ほか。

・第4回役員会　9月28日㈮大分市・コンパルホール
本部合同会議の議題と課題について、ほか。

・第5回役員会　11月17日㈭大分市・コンパルホール
青年部活動について、ほか。

・第6回役員会　1月23日㈪大分市・コンパルホール
本部報告への事業報告について、ほか。

・第7回　3月23日㈭大分市・コンパルホール　平成28年度

事業報告・決算報告、平成29年度事業計画・予算計画等定期総会議案審議ほか。

＊会計監査
4月8日㈭午後2時～　大分市府内町・コンパルホール

《公益事業》

＊「山の日」記念ｉｎ大分・くじゅう登山大会
8月11日㈭　久住分かれ避難小屋前広場　主催＝公益社団法人日本山岳会東九州支部・大分県山岳連盟・大分勤労者山岳連盟・全九州アルパインガイドクラブ　参加者約４００名。

＊第15回青少年体験登山大会（青少年登山教室）
9月11日㈰　コース＝牧ノ戸峠～久住山往復　参加者70名（支部会員20名）。

＊清掃登山
10月15㈯～16日㈰　長者原～雨ケ池越～坊ガツル登山道　参加者11名。

＊山の安全を祈る集い
8月7日㈰　池の小屋の上の遭難慰霊碑前　参加者31名（一般参加者含む）。

＊スズタケ枯死とシカの食害調査
第5回　6月4日㈯参加者8名／第6回　10月1日㈯参加者6名。場所＝本谷山西の稜線（大分県植物研究会と共同作業）。

《共益事業の実施》

＊月例山行　28年度のテーマ「近県の名山に登ろう」
・5月22日㈰福岡県・立花山（３６７ｍ）、松尾山（３４３ｍ）　参加者13名。
・6月12日㈯　宮崎県・比叡山（７６０ｍ）　参加者16名。
・7月17日㈰　長崎県・虚空蔵山（６０８ｍ）、佐賀県・黒髪山（５１６ｍ）　参加者17名。
・8月7日㈰　九重山遭難慰霊碑（山の安全を祈る集い・別項参照）。
・9月4日㈰　宮崎県・牛の峠（９１８ｍ）、男鈴山（７８３ｍ）、台風接近により中止。
・10月8日㈰　宮崎県・冠岳（４３８ｍ）　参加者15名。
・11月3日㈫　宮崎県・玄武山（９７４ｍ）　参加者16名。
・12月10日㈯・11㈰　（忘年登山・別項参照）。
・1月21日㈰　宮崎県・尾鈴山（１４０５ｍ）　参加者12名。
・2月25日㈯・26㈰　熊本県・岩宇土山（１３４７ｍ）、鷹巣山（１４５４ｍ）、積岩山（１４１４ｍ）　参加者12名。
・3月11日㈯　熊本県・根子岳（１４０８ｍ）、参加者14名。

《忘年登山および忘年会》

＊忘年登山　12月10日㈯＝釈迦岳（１２３１ｍ）、御前岳（１２０９ｍ）　参加者32名　11日㈰＝猟師山（１４２３ｍ）、黒岩山（１５０３ｍ）　参加者31名。

＊忘年会　10日　筋湯温泉「八丁原ヴューホテル」　参加者36名。

《合宿交歓会》

＊10月15日(土)～16日(月)　九重・坊ガツル「あせび小屋」　参加者11名。

《研修山行》

＊第1回　5月14日(土)　高崎山　研修＝ロープの結び方、簡易のハーネス装着、懸垂下降、トラバースの確保など、参加者10名。

＊第2回　7月9日(土)　尺間山　研修＝読図と厳しい稜線コースの研修　参加者9名。

＊第3回　7月31日(日)　小表山　研修＝岩稜コースの研修　参加者10名。

《青年部の活動》、

＊青年部山行　6月19日(日)　牧ノ戸峠から久住山・扇ヶ鼻。

＊研修山行

・第1回　11月26日(土)　由布岳池代コース　研修＝読図とルートファインディング、参加者4名。

・第2回　1月15日(日)　高崎山　研修＝岩場におけるアイゼンワーク、ロープワーク　参加者4名。

・第3回　2月18日(土)　九重山・小田川　研修＝積雪の斜面で、歩行訓練、アイゼンワーク、ロープワークなど。

・第4回　3月4日(土)～5日(日)　島根県・三瓶山　研修＝積雪のある避難小屋に宿泊し、積雪生活技術を学ぶ　参加者3名。

《支部報発行》

＊季刊発行　春季（第73号　4月25日）、夏季（第74号　7月25日）、秋季（第75号　10月25日）、冬季（第76号　1月25日）

（飯田勝之）

■宮崎支部

平成27年度は支部にとって最大の行事であつた支部創立30周年記念事業を終えたので、平成28年度は支部の年間事業計画および山行計画に基づき行事の遂行に専念することができた。

特筆すべきことは、宮崎支部が公益的活動として、平成14年に初めて宮崎家庭裁判所から補導委託を受けて実施している委託補導登山は、平成28年で、第20回目を迎えることができた。

家庭裁判所から少年を委託されて補導登山を行なっている取組みは全国的にも珍しく、裁判所部内でも高く評価されたもので、平成29年2月に福岡高等裁判所長官から宮崎支部に対して感謝状が授与された。

「山の日」制定に関する事業としては、最初の国民の祝日「山の日」8月11日(木)に霧島国立公園内のえびの高原で、環境省、

宮崎県など17団体と共催の上、山の日制定記念イベントを開催し、約７０００人の一般参加者を得て盛大に開催することができた。

さらに宮崎市中央公民館まつり、および市主催の地域と市民活動創生事業の祭典にも参加して、山の日制定の横断幕を掲げるとともに支部独自の広報パネルを作成展示、さらにパンフレットを配布するなどして、山の日制定の意義を広く市民に働きかけた。

支部活動の全体を見ると一部の行事で、悪天候による一部内容の変更、中止を余儀なくされたものはあったものの、支部が継続的に実施している子供登山教室、宮崎ウェストン祭、ときめき宮崎の山歩き、森づくり活動、日本一早い諸塚山山開き、登山技術研究会など、支部の年間行事計画に基づく主要な共・公益事業は、ほぼ順調に推進することができた。以下項目的な支部の活動は次のとおりである。

《会議》

＊４月２日㈯　支部第33回通常総会・第２１７回定例登山研究会（41名参加　委任状16名）。

＊毎月第１木曜日開催　定例役員・委員長会議（延べ１１９名参加）。

＊毎月第１木曜日開催　定例山岳研究会（延べ３２４名参加）。

＊支部編集会議　年４回開催（３月、６月、９月、12月）。

《定例山行》

＊５月22日㈰　ときめき宮崎の山歩き・白鳥山（49名参加）。

＊６月11日㈯　国見山・ケラガッカ山（９名参加）。

＊７月30日㈯～31日　第19回子ども登山教室　五ヶ原岳（51名参加）。

＊８月20日㈯　霧島山系、アバンダント郷土の森（20名参加）。

＊９月11日㈰　可愛岳（９名参加）。

＊11月４日㈮　祖母山（ウェストン祭記念山行、42名参加）。

＊12月10日㈯　双石山（忘年登山、19名参加）。

＊１月15日㈰　国見山（22名参加）。

＊２月11日㈯　元越山（24名参加）。

＊３月４日㈯　冠岳・諸塚山（10名参加）。

《自然保護・環境保全事業》

＊７月３日㈰　支部育林作業（田野の森、10名参加）。

＊９月25日㈰　わくわくの森、綾の森育林作業（３名参加）。

＊12月10日㈯　双石山登山口周辺の清掃作業（21名参加）。

＊２月19日㈰　支部育林作業（野尻の森、４名参加）。

《広報活動》

＊５月22日㈰　山の日制定イベント一般公募による、ときめき宮崎の山歩きにおける山の日制定に関するミニ講話（27名参加、一般参加者22名）。

＊８月11日㈭　山の日制定記念イベント会場における横断幕掲

示、パンフレットの配布（11名参加、一般参加者７０００名）。

＊11月26日(土)～27日(日)　第22回宮崎中央公民館まつり（支部活動の山岳写真・資料・パネルなどの展示、山の日制定横断幕の掲示、同広報活動の実施。29名参加、一般参加７００名）。

《出版事業》

＊宮崎支部報　年４回発行（各Ａ４判・８ページ・２００部）　４月１日（56号）／７月１日（57号）／10月１日（58号）／１月１日（59号）。

（末永軍朗）

委員会の活動報告

総務委員会

本会の運営と管理部門を担当する機関として個々の事業に対応しつつも、組織の質的充実と業務の円滑な推進に努めている。本年度は、会として費用の削減を求められていることから、担当する事業ごとの費用削減と合理化を積極的に進めた。毎月第1、3の月曜日に定例の委員会を開催し、そのほかに各行事の打合せや事前準備のために年十数回臨時の委員会や作業日を設けている。

1　新人会員オリエンテーション

9月9日(土)　対象者265名中43名が参加。

新入会員に、会についてよく理解し充実したクラブライフを過ごしてもらうために実施している行事である。会長の挨拶ののち、会の歴史、組織と活動、山岳傷害保険、ルームや図書室・上高地の山岳研究所等の施設やホームページの利用方法を動画を使って説明し、各委員会・同好会の代表もそれぞれ説明をした。終了後の懇親会では本部役員等も含め全員で親睦を図った。今年度より新たに、遠隔地で当日参加できない会員への説明や入会の促進に役立ててもらうためにCDROMを製作し、CDROM各支部に配布をしている。

2　同好会連絡会

7月6日(月)　対象28団体中27団体が出席。

同好会の活発な活動を促すとともに、業務上必要な事項の連絡や意見交換を行なうために、年1回実施している。近年、構成員の減少などにより活動実績がほとんどなく、休眠中の同好会も見られるようになってきた。同好会活動を活性化するために、同好会規程の改正の検討を開始した。

3　JACオリジナルグッズの制作と販売

会員サービスの一環としてオリジナルグッズを製作し、事務局で販売している。本年度は、会員の要望や販売数の分析に基づいて、帽子・Tシャツ・バンダナ・ワッペン・クラブタイ・ソーラーランタンなどを製作した。売上金を財務強化に役立てることが期待されており、魅力的な商品を開発するとともに、より多くの会員に届けられるよう、在庫管理・販売方法の見直しを行なう予定である。

4　支部合同会議

（東日本）　9月10日(土)～11日(日)　東京

北海道・東北・北関東・南関東・中部ブロックの各支部と役員などを含め52名が出席。

（西日本）9月24日㈯～25日㈰　大阪

東海・北陸・近畿・中国・四国・九州ブロックの各支部と役員等含め41名が出席。

各支部と本部のコミュニケーションを促進するために、2年前より各支部長と事務局長が参加する形態で実施しており、本年度は、支部活動の活性化と会員増強を主な議題とし、ブロック化、準会員制度や会員カードなどの新たな施策が各支部に与える影響などが話し合われた。多人数が参加しているために各支部からの出席者の発言時間があまりとれず、十分な討論時間もとれないなどの問題が指摘されていたため、今年度は試行的に東西2地区で分割して開催した。この結果、各支部とも一定の発言の機会は確保されたが、2か所での開催準備等、事務増による負担が大きいことから、分割開催については再検討を要する。

5　年次晩餐会　12月3日㈯　京王プラザホテル（東京）　481名が出席。

本年度は、開催の案内を会報送付時に同封し、また、参加申し込みの方法を変更したことにより費用の削減と合理化が実現できた。会員サービスの向上のため、同伴者の参加を可能にした。昨年度より採用した全席指定も定着し、会も円滑に進行できた。

同日行なわれた講演会では秩父宮記念山岳賞受賞者（鈴木正崇会員）「日本の山岳信仰と修験道」と会長特別表彰者（柴崎徹会員）による講演と、海外登山隊「ナンガマリⅡ峰（6209m）初登頂」、学術調査隊（ゴジュンバ氷河調査）の報告を行なった。

展示会場では図書交換会（図書委員会）、写真展（アルパインスケッチクラブ）、「山の日」関連のパネル展示、「マナスル登頂―書簡で辿る」のテーマ展示などを実施した。

6　支部長会議　12月3日㈯　10：30～12：30　京王プラザホテル「高尾」　33支部が出席。

年次晩餐会開始前の時間を利用して、会務と次年度日程の報告、準会員制度・会員カードなどの施策に関する意見交換、全国支部懇談会（茨城支部）の案内などを行なった。

7　定例説明会　隔月第4金曜日の19：00～

入会者を増やすための施策として、Ｗｅｂを閲覧して会に興味を持った方々を対象に定期的に開催している。本年度は5回開催し、延べ27名が参加した。2年間実施しているがＷｅｂ閲覧からの参加者が減少しているので、Ｗｅｂサイトの改装を含めた広報手段の検討を行なっている。

8　マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」施行記念行事　7月10日㈰　ｊｉｃａ（市ヶ谷）

総務委員会として、記念写真の撮影、取材対応、受付などの総務業務を担当した。

（今田明子）

■――デジタルメディア（ＤＭ）委員会

ＤＭ委員会は、インターネット利用による当会の広報、事務連絡の支援を目的として活動している。公益社団法人としての公開情報および、当会主催のイベントの案内を行なうＷｅｂサイト（ホームページ）の運用、会員向けメールマガジンの発行、および会務に関わるメールシステムの運用管理を１９９７年来行なってきた。毎月定例会議を開催するのに加えて、メーリングリストなどを通じて記事の掲載、編集検討を行ないつつ、通信事業者のサーバーを利用したインターネットシステムの運用を行なっている。

２０１６年度の活動は以下の通り。

１　ｗｅｂサイト運営

ｗｅｂサイトへの活動記録記事や、案内記事が多量、多岐にわたるようになったことから、会員募集案内はじめ一般関係者からのアクセスを容易にすべく、当会の組織や歴史の紹介、および委員会、支部および同好会の活動、イベントの案内を中心とし広報的内容に重点を置いたＡサイトを新たに設けた。また従来から公開している当会の委員会、支部、同好会等の活動記録、および会員専用の会務運営に関わる活動規程や、活動要領、各種の事務書類の書式をＢサイトとして運営し、会員の利便を図っている。なお、Ｂサイトへ、各委員会、支部、同好会が登録したインターネット担当者が記事を投稿でき、最近、自主的な投稿も増えつつある。

２　メールシステムの運用

日本山岳会の会務、委員会、支部、同好会の活動を支援するため、当会独自のメールアドレス（ドメイン）のメールシステムを運営している。種類は、（１）通常のメール受発信を行なうメール（２）特定のグループを対象として運用するメーリングリストなどが準備されている。

３　メールマガジン発行

メールマガジンは、Ｂサイトの会員専用ページを閲覧するためのパスワードを申請した会員、およびメールマガジン配信を希望申請した会員を対象としている。右記ｗｅｂサイトに掲載された委員会、支部等のイベント紹介にリンクして最新情報とともに、当会が協賛するイベントや、登山関連の有用なニュース・情報提供を目的に概ね隔週に発行している。

４　ＳＮＳの活用

ｗｅｂサイトに掲載された記事へのアクセス数向上、および外部への活動紹介を発展させるために、試験的にＦａｃｅ　Ｂｏｏｋを活用しイベントなどの紹介を始めた。一般登山者がＦａｃｅＢｏｏｋで紹介されたイベントに参加し、当会へ入会する事例も増え、当会の広報に有効に機能している。

ＤＭ委員会は、ｗｅｂサイトの編集にさらに改善を加えるべく検討を進めているが、各委員会、支部等には記事の充実のために会報への紹介と併せて、Ｗｅｂサイトへのイベント案内、活動報告の投稿（ま

たはDM委員会への原稿提供）をお願いしたい。
連絡先　internet@jac.or.jp

（多田真弘）

■図書委員会

図書委員会の仕事の基本は図書室の蔵書管理である。事務局と連携しながらの日々のルーティンワークが基本となる地味な仕事である。会の図書室の本はほとんどが著者や出版社からの寄贈本である。しかし、ただ寄贈を待っているだけで本が集まるわけではない。会員に奨めたい本や時代を表わす注目本、そして会の図書室に後世への資料として残しておかなければならない本が都合よく寄贈されるとは限らない。そのため図書委員会では常に新刊本に対するアンテナを敏感にして、寄贈がない本については、こちらから寄贈依頼をするという方法で蔵書を集めている。

ちなみに毎号の『山岳』の最終ページ横組みの「山岳図書目録」はそのために毎月作成しているリストを1年ごとにまとめたものである。近年は新刊本の印刷部数も少なくなったため、出てすぐに集めなければ本はなかなか手に入らない。また登山ブームに便乗して、これまで山岳書を扱わなかった出版社までが山岳関係本を出版しはじめたため、いっそうこちら側からのアプローチが必要になっている。

納本のリストは毎月の会報で報告しているが、2016年度は和書131冊・洋書6冊の寄贈があった。またそのほかに和書21冊・洋書5冊を購入している。購入した和書はほとんど図書交換会で購入したものである。

現在の蔵書管理はすべてパソコンが中心で、作業は事務局が行なっているため、図書委員会が日々の作業をしているわけではないが、30年ほど前まではまだまだPC環境も整っていない上、図書室専門職員もいなかったため、図書委員がいちいち手書きの図書カード（年配の方は記憶があるだろう。図書館では本はすべてカードで分類され、木製のカードケースに入っていた。引き出しごとに分類され、引き出しの中には縦に走る鉄製の棒が。懐かしい図書館の風景である）を作っていたと聞いている。たぶんカードも、書名カードと著者名のカードの2種類を作らなければならなかったと記憶している。

そのこと一つを取り上げても、会の図書室は、代々の図書委員の様々な苦労のうえに成り立っていることを肝に銘じている。そして、それを継続して発展させることが当会のみならず、山岳界全体から求められている使命と考えている。

16年度に開催した行事3企画。

●マナスル60周年&山の日記念イベントでの、蔵書の展示
　7月10日（日）開催　JICA市ヶ谷ビルで開催の本部企画に協力参加。
　「マナスル」関係本や「山の日」関係本の準備と展示。
●信州大学付属図書館・小谷コレクションの閲覧会　8月18日㈭　開

催

蔵書家で知られた故・小谷隆一氏の山岳書が信州大学に寄贈されたのは２００３年。本会も所蔵し、日本に４点といわれる「シュラギントワイト・アトラス」の１点は、小谷氏から信州大学へ。山岳資料の充実に力をいれる信州大学付属図書館を見学することで、当会の蔵書管理方法を探った。

●第34回・図書交換会　12月３日㈯開催

出品本は約３００冊、完売。故・近藤等名誉会員を偲び、近藤氏の著書・訳書の展示コーナーを併設した。その冊数の多さに、近藤氏の山の世界に与えた影響の大きさを実感した。

そのほか、会報「山」の「図書紹介」欄のコーディネートも図書委員会の毎月の仕事である。紹介する本の選定→執筆者の選定→依頼→原稿の入稿までをコンスタントに行なう必要がある。会報委員会との連携がうまくいっているので、概ねスムーズに進んでいることも報告する。

（三好まき子）

資料映像委員会

当委員会の主たる業務は、過去から引き継がれている歴史的に貴重な山岳文化資料（絵画・映像を含む）の適切な保存と管理、内容の調査・研究、新たな収集、公開展示、貸出し、画像使用許可、寄託資料の管理、内外の問合せに対する対応などを行なうこと。

年度毎の事業内容は継続性の見地から大きな変化はないが、内容の見直し・追加・重点項目の設定を行ない、年間計画書（事業、担当および事業別予算）を作成している。事業の進捗を確認し、重要事項を審議するために月例会議を実施し議事録に残している。また、活動内容で本会会員に公開すべきものは会報やｗｅｂに随時掲載している。

今年度の主な公益・共益事業の活動結果を以下に記す。

1　「第20回全国山岳博物館等連絡会議」の開催

・11月26日、参加10館12名と当委員会の委員・理事10名の参加で東京都写真美術館会議室を会場に開催した。これは毎年実施している山岳関連博物館と美術館の情報交換・討議の会議で、各館の学芸員による現状報告、情報提供、抱えている課題とそれに対する意見交換や助言が行なわれた。20年間の継続した開催で、各館相互および本会との協力関係を深める有意義な会議となっている。本会議の内容は会報「山」８６０号（２０１７年１月）を参照。

2　絵画・資料・映像資料の保存と貸出しおよび寄託管理

・収蔵現物資料の点検と内容調査・記録、保存環境改善（保存資材交換等）、資料貸出し・画像使用許可（25件）、問合せ対応を行なった。管理中の資料・絵画のデータベース登録数は約５００件（個別資料は数千点）、映像資料（ＤＶＤ・ＶＨＳ・フィルム）は４５０タイトル。

・本会内に保管しきれない絵画と資料は、適切な保管・管理と、展

示・研究に活用していただける博物館・美術館8館に寄託してある。これらの年度末棚卸しと、寄託継続などの管理業務を行なった。

3　マナスル初登頂60周年および「山の日」施行記念事業「日本山岳会の創立とマナスル初登頂」展

・7月10日、東京JICA市ヶ谷ビルにて、本会主催で実施された記念事業に資料展示で参画した。1905年、本会創立当時の発起人と創立を強く示唆し日本に近代登山の夜明けをもたらしたW・ウェストンを紹介。マナスル初登頂時の写真や当時の新聞記事、隊員が使用した登山用具や記念の品を展示した。

・5月8日、毎日新聞社主催「ザ・マナスル・デー」展（会場・一橋大学講堂）に資料貸出しで協力した。

4　晩餐会特別展示「マナスル初登頂から60年」展

12月3日の年次晩餐会にて、マナスル初登頂関連の書簡・日記・登山許可書など初公開の原本・現物を展示した。第3次登山隊の初登頂に多大な貢献をした第1次、第2次登山隊や裏方の活躍にスポットを当て、その苦労を伝える多くの資料、この登山のために考案・製作された装備、通信機器（科学委員会担当）を展示。参会者には好評であった。

5　外部および支部の「山の日」制定記念イベント協力

・5月26日から9月4日、山口県立美術館と松本市美術館の「遥かなる山」山岳絵画展（全120作品）に本会協力名義の下、本会会員中村清太郎と茨木猪之吉作品の所蔵絵画4点を展示した。

・各地で行なわれた「山の日」制定記念イベント（安曇野市山の日フイルムフェスティバル、松本市立博物館特別展、群馬支部・栃木支部・東京多摩支部の事業）に、写真、映像、パネルを貸出し協力した。

（荒井真二）

■『山岳』編集委員会

本会の機関誌『山岳』第百十一年（2016年）は、担当の神長常務理事以下昨年と同様のスタッフで編集作業が行なわれ、9月中旬に発刊された。

表紙は昨年に引き続き岐阜県下呂市在住の田立泰彦会員（会員番号9233）にお願いし、北アルプス・抜戸岳の画で飾っていただいた。

今号の白眉は「歴史と信仰の山を訪ねて」と題した皇太子殿下の玉稿である。昨年から施行された国民の祝日「山の日」にちなんで特別に寄稿されたもので、約半世紀に及ぶご自分の山での足跡を、歴史と信仰をテーマに30ページにわたって綴っておられる。平易な文章に込められた山への熱い想いと、多方面にわたる知識の蓄積がうかがわれ、多くの読者に感銘を与えたことであろう。

「論考」としては『山の日』祝日運動を推進した日本山岳会の記録」を、「山の日」事業委員会で中心となって活動された成川隆顕会員にま

とめていただいた。「山の日」制定までの道のりが克明に記録されており、今後、日本山岳会にとって「山の日」をどう位置付けたらいいか、大きなヒントになるものと思われる。

続いての「論考」は「『日本人の山・マナスル』をもう一度考える」。昨年はマナスル初登頂から60年という節目の年だが、その歴史を知っている会員も少なくなった。これを機に改めてマナスルの重みを感じていただきたいもの。さらにもう1本は、マナスル初登頂の年に生まれた大学探検部の歴史を岡村隆さん（法政大学探検部OB）に「大学探検部60年の軌跡」と題して綴っていただいた。3本の「論考」を併せて読むと、登山・探検界における時代の流れが俯瞰できて面白い。

そのほか中村保、沖允人両会員には、日本山岳会創立110周年記念出版の自著『ヒマラヤの東、山岳地図帳』と『インド・ヒマラヤ』をそれぞれ語っていただいた。お二人のライフワークの集大成ともいえる本で、日本山岳会の将来を担う若者たちにとって、格好の参考書となるに違いない。

「記録」は東ネパール1本、西ネパール2本、チベット1本である。登攀対象がだんだん小粒になっているが、海外登山助成金の交付とともに記録を発表することで、次世代をサポートしていきたい。

「調査・研究」では、昨年に引き続き宮城支部の柴崎徹会員に「原発事故による阿武隈山地の放射線量」を発表していただいた。これらの功績により、同会員は年次晩餐会において会長特別表彰を受けられた。

そのほか「図書紹介」以下は例年どおりの構成である。

なお、昨年度の製作費総額は398万8139円で、前年度比10万3169円の減となっている。内訳は製作費289万2780円、通信・発送費51万2069円、発送用封筒代21万2112円、編集費32万8256円、その他経費4万2922円。印刷部数は5600部である。

（神長幹雄）

会報編集委員会

毎月20日過ぎに会報「山」を発行している。昨年4月、柏澄子編集長からバトンタッチされ、出版社で編集経験のある節田重節（会員番号6720）と原邦三会員（同9080）が前半と後半を分担して作業している。

経費節減のおりから増ページはせず、毎月20ページ内に収めている。したがって、総会や年次晩餐会など大物の記事が入る月は、ページ取りが苦しくなり、定型的な記事だけになってしまうこともあり悩ましい。本部からの発表や支部並びに委員会からのインフォメーション原稿だけでは、まるで「官報」のようになってしまうので、できるだけフレッシュで有益な、そして人間臭い記事の掲載を心がけている。また、会報は会員の皆さんのフリーな発表の場でもある。皆さんからのご投稿を、いつでもお待ちしている。

なお、昨年の製作費総額は904万1662円で、毎月の印刷・製

本費が約26～27万円。本年は年間にわたって20ページを維持したため、経費は安定している。通信・発送費が前半の6ヶ月は月額約38万円、後半の6ヶ月は、発送方法が透明のポリエチレン封筒に代わって月額約36万円となり、若干の経費削減となっている。

（節田重節）

■国際委員会

海外委員会は日本の山岳界において、海外登山の情報提供源として大変大きな役割を果たしてきた。ヒマラヤ周辺諸国との関係においては、世界に先んじて数々の未踏峰や未踏ルートの許可取得、未知の山域研究などを行なってきた実績がある。

しかしながら、昨今の複雑な国際情勢や国内経済事情、またパイオニアワークの精神を持ってヒマラヤ登山を目指す日本隊が極端に減ってきた現状を見ると、海外委員会の役目は節目を迎えたと判断し、新たなコンセプトで「国際委員会」を発足させるに至った。

古くから海外登山の研究を行なってこられた先輩方、また先鋭登山を続けるクライマーにとってはご不便をおかけすることになるが、すでに時代は国境の壁を超え個人と個人がネットでつながり、情報収集や許可取得を容易に行なえる時代になっており、さほどの混乱はないものと想像できる。

新しい「国際委員会」は、以下の2つの目標を掲げることにした。

「日本の登山文化、山岳地域の情報を外国語で海外に発信」

世界でも特異な豪雪地帯を有する日本の山岳地帯においては、その積雪量と雪質が近年、海外のスキーファンに知られるようになり、多くの外国人が北海道、白馬、妙高などへ、日本の雪への憧れもあり訪れるようになった。江戸後期における越後魚沼の雪国の生活を活写した『北越雪譜』。１９９８年、長野オリンピックで外国人向けに国土庁が日本の雪国を紹介するために発行した小冊子には、『北越雪譜』の世界から」とサブタイトルがつけられていた。

日本山岳会創立の立役者小島烏水や創設時の会員でもあった民俗学者の柳田國男などに見られるように、１００年以上も前に山への情熱や山の研究が行なわれていた日本の山岳史や、世界に誇る豊かな自然を海外に紹介することによって、日本ファンをさらに増やしていければうれしいと思う。

「日本の自然の豊かさや山岳文化・伝承などを支部の言葉で世界に発信」

政府による「地方創生」が叫ばれて久しいが、成功事例はあまり耳にしたことがない。身近なところでは白馬村の成功例があるが、ここはあまりに恵まれた環境ゆえ、白馬が成功しなければどこも成功できないとも言われてきた。しかし、私たち山岳愛好者の目から見れば、白馬にも劣らない自然環境を有する山はいくらでもあるはずだ。海外

から訪れる登山者にそうした日本の美しい自然に接していただければ、きっと満足して帰り、また新たな登山者を増やしていけるものと期待できる。

まずは日本語で、支部ならではの魅力的な「私たちの山」の紹介をお願いしたいと思う。また、外国語に堪能な方、ぜひご協力いただき、活動に加わっていただきたいと切望する。

（古野　淳）

■――山岳研究所運営委員会

山岳研究所運営委員会は、毎月第2火曜日夜に当会の市ヶ谷のルームで実施し、定例のミーティングと4月下旬～11月中旬の上高地開山期間中に「山研」をベースに実施する建物設備の維持管理、会員サービス業務およびミニ水力発電小委員会と連携した自然エネルギー利用研究などを活動の柱としている。以下に２０１６年度の主な活動を列挙する。

・4月23日～24日　「山研」の開所作業を実施した。この年は例年にない寡雪で除雪作業はなく、水源地からのミニ水力発電用の引水作業ははかどった。飲料水は水道利用につき給水管の接続のみ行なった。

・4月27日　上高地開山式が開催され今シーズンの山の安全を祈願。山研管理人が出席した。

・5月2日～3日　「山研」１階の集会室兼食堂にミニ水力発電による照明器具の設置を山研運営委員自らの手によって施工した。

・6月4日～5日　信濃支部主催のウェストン祭開催時期に、新入会員を対象とした恒例の「徳本峠越えとウェストン祭参加」を企画・実施し16名が参加した。

・8月10日～11日　腐食していた「山研」テラスの南側および西側の側面モルタルを山研運営委員自らの手によって補修した。

・8月11日　第1回「山の日」記念全国大会が上高地で開催され、山研運営委員が式典に参加した。

・8月20日　梓川消防署安曇出張所の協力の下、「山研」において山研運営委員による消防訓練（避難訓練、消火訓練、ＡＥＤ操作訓練）を実施した。

・10月29日～30日　「山研」の閉所作業を実施した。

・11月15日　上高地閉山式が開催され神に感謝、山研運営委員と山研管理人が出席した。

・11月17日　上高地右岸水道事業組合による右岸水道本管の水抜きとエア抜きに合わせて山研の水道本管の水抜きとエア抜きを実施した。

・12月5日「山研」の自動火災報知器設置工事が完了、同月9日に消防署検査を受け合格した。「山研」は消防法上、「旅館・ホテル等」に分類されており、法令の改正によって平成30年3月末までに面積に関係なく自動火災報知器の設置が義務化されている。

・3月8日　準会員制度導入に伴い、「日本山岳会上高地山岳研究所管理規程」および「日本山岳会上高地山岳研究所利用要領」を一部改正、理事会にて承認を得た。
・3月14日　長野県が推進する「1村1自然エネルギープロジェクト」にミニ水力発電の利用研究を登録した。

このほか、上高地町内総会、上高地を美しくする会、明神池お船神事などに山研運営委員、山研管理人が出席し、行政関係者および上高地関係者との交流を重ねた。

現在の「山研」は、1993年5月に「日本山岳会創立90周年記念事業」の一環として改築されたもので24年を経過している。建物の維持管理と会員サービスの観点からこれまでテラスの手すり補修、水道管敷設工事、自動火災報知器設置など大小の補修工事などを行なってきた。今後大きな補修工事として屋根と外壁の塗装工事が控えている。塗装工事は前回の工事から14年を経過している。また年数の経過とともに各種の設備機器についても入れ替えしなければならないものもあり、山研の運用費について対策を余儀なくされている。

一方、「山研」の利用者は増加傾向にあり、団体利用と平日利用が大きな要因となっているが、山研を毎日運営管理している元川管理人は2シーズン目となり、そのお人柄と上高地自然観察の知識量で利用者に喜ばれていることも大きな支えとなっている。

今後は、会員全員の視野に立って会員サービスを基本姿勢として山研運営委員会を的確に運営していきたいので、会員みなさんのご理解とご協力をお願いするところである。

（安井康夫）

自然保護委員会

この一年、自然保護委員会はシカの食害問題が急速に拡大している喫緊の問題を活動の一つの柱として取り組んだ。いま、私たちに何ができるのか、前に進むには、と多くの人に学ぶ日々であった。

○自然保護全国集会の開催

高知県立牧野富太郎植物園、四国支部と共催で「どうする！山の野生動物との関わり」をメインテーマに、7月16～17日の2日間、植物園を会場に参加者95名、16支部、高知県林業振興・環境部、高知市環境部、四国森林管理局、中国四国地方環境事務所からの参加者を迎えて開催した。1日目は各支部の活動報告と基調講演は「SOS三嶺の自然」。高知大学教授で四国支部会員の石川愼吾氏による講演内容は剣山系三嶺山域のシカの食害の調査、対策まで一連の研究事業の貴重なお話であった。その後、4グループに分かれて「山の野生動物」との関係を軸に分科会を行なった。2日目は宿泊所の高知市立工石山青少年センターのある工石山を中心にフィールドワーク、牧野植物園で観察会に分散して実施。

○講演会開催

11月25日（金）日本山岳会104号室で麻布大学いのちの博物館

上席研究員・高槻成紀氏の講演会を開催。演題は「シカ研究者がみた最近の日本の山」。人口が都市に集中し自然から遠ざかった生活になり、自然で起きている野生動物による被害を知らない現状を登山者の立場から発信することが重要と話された。

○機関紙『木の目草の芽』発行

隔月刊で122～127号発行。主な内容は自然保護全国集会、講演会記録、リニア新幹線、支部活動報告など。日本山岳会の各機関、支部、支部自然保護委員会、山岳団体、自然保護団体、マスコミ等の関係機関、一般の購読希望者等に贈呈・送付。

○自然観察会開催

6月5日（日）練馬区立牧野記念庭園で開催。講師・平野裕也氏。

10月22日（土）横浜市青葉区寺家町・通称＝横浜（寺家）ふるさと村、講師・櫛田勁氏　日本山岳会・山の自然学研究会員。

○山岳団体自然環境連絡会

山岳7団体で構成している連絡会の月1回の情報連絡会に参加、今年度は2つのイベントを開催、参加。

10月1日～2日「山の日」記念行事の講演に下野綾子氏がシカの食害問題講演と植樹祭に委員参加。

3月11日（土）オリンピック青少年センターで「深刻化するニホンジカの被害」をテーマにシンポジュウムを開催、参加。

○その他

「マナスル初登頂60周年及び国民の祝日・山の日施行記念行事」に参加、自然保護活動のパネルを作成展示。宮城支部自然保護委員長柴崎徹氏「東日本大震災後の山岳放射線調査」で会長特別賞を受賞。

（川口章子）

■科学委員会

最近は委員の老齢化により、行事の実施が重荷になりつつあった。山岳会そのものが老齢化しているので、若手山岳会員の勧誘を行なった。委員会活動内容を理解しもらうため、積極的参加を促した。以下に2016年度の主な公益的・共益的活動内容を報告する。

1　探索山行

恒例の科学委員会主催の探索山行を、6月11日㈯～12日㈰に「大正池誕生101年の上高地の自然を訪ねます」として実施した。2日間とも好天に恵まれ、13名の委員を含む39名が参加した。1日目は、産業総合研究所の及川氏の案内で大正池から河童橋間を中心に歩いた。101年前の焼岳噴火の規模・形態の説明から、大正池誕生の様子を理解した。ウェストンレリーフ前では世界一若い花崗岩の説明を受けた。夜の及川氏による「火山セミナー」では、その昔、飛騨方向（岐阜県側）に流れていた梓川が、焼岳の噴火により現在の松本方向へ変わったとの説明に聴き入った。2日目は、本会山岳研究所の元川管理人も加わって、徳沢までの登山道沿いの草花、樹木、地形の解説を受けた。

2　フォーラム「登山を楽しくする科学」

3月11日、第9回のフォーラムが立正大学品川キャンパスで開催された。日本トイレ研究所理事上幸雄氏による「山のトイレ改善へ―糞闘の記」、立正大学地球環境科学部教授による「シカとオオカミが作る生態系―狩猟者はオオカミの代役となり得るか」、そして日本山岳修験学会会員、科学委員会委員松本敏夫氏による「修験道と霊山・霊場―武蔵国の民間信仰の山々を楽しむために」の3講演に、委員20名を含む110名の参加者が聴講した。資料として3講演の要旨冊子を作成、配布した。

3　「マナスル」から「山の日」まで60年記念事業と晩餐会での展示

7月10日のJICA（市ヶ谷）で行なわれた記念事業会場で、「マナスル登頂への科学技術的サポート　―5万分の1地形図の作成と無線連絡技術―」としてポスター展示を行なった。マナスル登頂にあたり、世界で初めて開発・作製された携帯無線機の特徴の説明、地形図が日本隊により独自に作成されたこと、この地形図の存在が無線技術の開発に役立ったことを説明した。このポスターは、8月1日～9日に「高尾559ミュージアム」でも展示された。さらに晩餐会の展示コーナーではポスター展示のほか、無線機の模型も展示した。

4　多摩支部で安全登山に関する講演（於立川市女性総合センター）

7月20日㈬、福岡委員が多摩支部で「活火山の安全登山」の講演を行なった。

5　研修山行

9月28日㈭・29日㈮・30日㈯に「大崩壊地形の立山カルデラと大活断層である跡津川断層見学」を主な目的に、委員11名と会員6名が参加して行なわれた。残念ながら強雨のため29日のカルデラおよび断層見学は中止となり、28日の梓川が飛騨川に流れていた証拠の地層（焼岳起源岩石、砂の存在を確認した）見学がわずかな成果であった。

6　例会は1月と8月を除いて、毎月第3木曜日に開催、毎回約20名の委員が出席。30分のショートセミナーで、委員の情報内容を広げることに努めた。1月は新年会、8月は暑気払いの会を行なった。委員会活動の活性化のため、今後も若手委員の勧誘に努めるとともに、3月のフォーラムの参加者を増やすことに注力したい。また、支部活動などでの登山の科学に関連する講演会への講師の派遣と紹介をしたいと考えている。会員の皆様からのご依頼、ご相談をお待ちします。

（福岡孝昭）

■医療委員会

医療委員会の目的は医学の知識の不足から起こる遭難について啓発活動を行ない、遭難を未然に防ぐことである。

楽しく安全な山登りをするためには、山ではどのように身体に負担

が掛かるか、どのような病気やケガが起こるか、どのようにそれらに対処したらよいかを知る必要がある。委員会のメンバーは日本登山医学会や日本山岳文化学会山岳医学医療分科会の会員が多い、

委員会の主な活動は、登山の医学についての啓発活動を行なうこと、そのために講演会を開催することと会報「山」の医療コラム（Climbing&Medicine）を執筆することである。さらに、一般社団法人日本登山医学会の後援も行なっている。

1　昨年度の委員会事業

1）6月13日㈪　会員向け講習会「山で虫を防ぐ」をルーム104号室で開催した。講師は有害生物研究会・秦　和寿委員で、参加者は21名であった。詳細は山岳会ホームページ・医療員会・「山で虫を防ぐ　浜口欣一」を参照。

2）10月1日㈯　山の医療を実地に学んでいただくための企画として、初めての登山医学講習会・メディカルハイキングを景信山で開催した。受講者は18名だった。内訳はＪＡＣ会員13名、多摩支部主催初心・初級者登山教室受講生5名だった。医療委員6名と併せて24名である。講義実施項目はハチ刺され、虫刺され、切り傷・すり傷、出血、足首捻挫、膝痛、腰痛、足つり、骨折などの対処、心肺蘇生実習、携行医薬品の解説などであった。詳細は山岳会ホームページ・医療員会・「医療委員会主催景信山メディカルハイキング報告　浜口欣一」を参照。

3）２０１７年2月16日㈭，千駄ヶ谷の東京体育館で講演会「登山者に役立つ膝の痛み・トラブルの予防と対処」を開催した。参加者は１１７名で，内訳はＪＡＣ会員34名、会員外83名と，会員外が7割以上を占めた。講師は聖マリアンナ医科大整形外科学講座講師で膝関節外来を担当している小林哲士先生だった。詳細は山岳会ホームページ・医療員会・「医療委員会主催　膝痛の予防と対処の講演会開催報告　野口いづみ」を参照。

2　一般社団法人日本登山医学会の支援として、第36回日本登山医学会学術集会を後援した。会期は6月4～5日、場所は栃木県総合文化センターで、参加者は１７１名、参加委員9名であった。詳細は山岳会ホームページ・医療委員会・「第36回日本登山医学会開催報告　上小牧憲寛」を参照。

3　会報「山」の医療コラム（Climbing&Medicine）関係

手軽な階段昇降、踏み台昇降を大いに利用しよう　大野秀樹　第８５３号

健康長寿のための山登り１：運動習慣の作り方　齋藤　繁　第８５５号

健康長寿のための山登り２：心拍数による運動強度の調節　斉藤　繁　第８５７号

登山者のハチ刺され遭難　野口いづみ　第８５９号

漢方薬は登山にも役立つ　大野秀樹　第８６１号

下山後の筋肉痛とアミノ酸効果　浜口欣一　第８６３号

4　次年度の活動方針

1）第2回メディカルハイキング景信山　5月20日
2）第37回日本登山医学会、第4回アジア・太平洋登山医学会後援
大会長・花岡正幸、テーマ：登山医学と高所生理学の新たな幕開け　会期＝6月2～4日　松本市キッセイ文化ホール
3）会報「山」の医療コラム（Climbing&Medicine）の継続
5　その他　委員会は不定期開催で、委員会事業の審議と山岳医療に関する新しい知見などについて討議している。
6　今期の委員：担当理事・野口いづみ、委員長・浜口欣一、委員・大野秀樹、稲村道子、神尾重則、村上和子、小清水敏昌、秦和寿、上小牧憲寛、梶谷博、斎藤繁、角田元、植木貞一郎、山内佳奈、香川茂雄、土井理

（浜口欣一）

山行委員会

1　山行委員会の役割について
山行委員会の役割は、理事会の指導のもと、「国内外の登山の企画、実施」を行ない、会員相互間の交流、懇親等を図り、会員一人びとりの登山技術の習得、向上を目指し、ひいては日本山岳会の設立目的である〈登山を通じてあまねく体育、文化、および自然愛護の精神の高揚を図ること〉に貢献することにあると考えている。当委員会は、日本山岳会の本部委員会にあって、最も山岳会らしい委員会のひとつだ。なお、平成27年度からより分かりやすく、委員会名称を「山行」委員会（旧集会委員会）と変更した。
引き続き、山行委員会は、「会員の役に立つ、会員のためになる委員会」を目指して国内・海外の山行、講習会等の企画、運営、実施に取り組んでいく。
2　活動方針　〈安全に楽しく、全国の仲間と一緒に、憧れの山に登ろう〉
右記役割と会員ニーズを踏まえ、当面の活動方針を以下の通り定めている。
1）全国の会員が自由に参加でき、かつ楽しく有意義な山行を企画。
山行に当たっては、何よりも「安全」に最大限配慮。
2）会員の圧倒的多数は、60歳代70歳代の会員だ。その大多数の中高年会員を主な対象とした山行を実施する。山行以外にも安全登山に資する講習会などを企画する。
3）軽いハイキングから日本アルプス縦走までの幅広い、積雪期も含めたオールラウンドな山行を行なう。会員ニーズに応えた、日本山岳会らしいユニークな海外トレッキング・ツアーを企画する。
4）何よりも「山を楽しむ」ことを最優先し、単に山に登るだけに留まらない、楽しい「プラスワン（植物、地形、文化、温泉など）の山行」を志向していく。
5）全国の支部、他の委員会などとのコラボレーションを積極的に

図っていく。

3　活動内容

1）公益事業として「登山リーダーのための救急救助講習会」を6月に開催。憲会員に講師を依頼し、「登山リーダーに求められるレスキュー技術の実技講習」を公益事業として実施。会員外22名を含め、参加者は41名。

2）会員向け事業として、平成28年度、以下の14山行を企画、実施。

5月　「大峰奥駆け、吉野～前鬼まで」修験道の山を歩く。参加者15名、4泊5日。

5月　「スペイン最高峰テイデ山」理事会の承認をいただき、日本山岳会らしい海外山行を実施。参加者9名、8泊9日。

6月　花シリーズ①「庚申山」バス利用。参加者15名、1泊2日。

6月　花シリーズ②「十文字峠、御座山」バス利用。参加者16名。1泊2日。

7月　「福井の山旅」支部とのコラボ山行。福井支部と共催して福井の山を楽しむ。参加者9名＋福井支部11名の計20名、2泊3日。

9月　「早月尾根～剱岳」北ア3大急登を登る。参加者10名、3泊4日。

9月　「北アルプス縦走第5回：餓鬼岳～槍ヶ岳」北アの大パノラマの眺望に恵まれ、餓鬼～表銀座を踏破。参加者12名、5泊6日。

9月　「南アルプス縦走第4回：塩見岳～農鳥岳」南ア深奥部の稜線漫歩を楽しむ。参加者8名、4泊5日。

10月　「会津山行：御前、志津倉」紅葉と温泉を満喫する山旅。バスを利用。参加者11名、1泊2日。

10月　「西上州の山」鹿岳、四ツ又山、荒船山に登る。参加者6名。1泊2日。

12月　「晩餐会記念懇親山行」乙女峠～丸岳～長尾峠へとハイキングを楽しむ。途中、富士山の絶景を堪能。参加者76名、バス利用日帰り。

1月　「スキー懇親会」八方尾根スキー場で実施。参加者17名、2泊3日。

2月　「蔵王スノートレック」蔵王の樹氷原でスノートレッキングを楽しむ。バス利用。参加者16名、1泊2日。

3月　「雪の乗鞍岳に登る」雪山登頂シリーズの3回目。悪天候のため、途中撤退するが雪山を満喫した。参加者13名、1泊2日。

3）研修会の実施　「山行委員会研修会」を、11月に茨城の月居温泉で実施。1年の振り返りと年間計画の策定に向け、論議を行なった。合わせて、委員各自の研鑽と委員会内のコミュニケーションの向上を図った。翌日、高鈴山へハイキング。

4）「日本三百名山登頂シリーズ」への参画　昨年度に引き続き、日

本山岳会１１０周年記念事業の一環である、「日本三百名山登頂シリーズ」の企画、運営にも携わった。

5）月例会を毎月第1水曜日、ルームにて担当理事にご出席をいただき、実施している。各山行などの詳細については、日本山岳会ホームページの「山行委員会」を参考に。なお、右記山行、講習会などへの延べ参加者は、総計２８５名（昨年度対比31名増）となっている。

（清登緑郎）

■「山の日」事業委員会

日本山岳会が「山の日」の制定に向けて「山の日」制定プロジェクトを立ち上げたのは、今から8年前の２００９年のことだった。以降、ほかの山岳団体とともに広報活動を展開し、超党派「山の日」制定議員連盟の活躍によって「国民の祝日に関する法律」が改正されて「山の日」が誕生したのが今から3年前の２０１４年。これを機に、「山の日」制定プロジェクトは名称を「山の日」事業委員会と変え、「山の日」の意義の国民への浸透と普及のための活動を続けてきた。

２０１６年8月11日、はじめての「山の日」となった当日は、長野県上高地で第1回「山の日」記念全国大会が開催された。穂高連峰を望む式典会場では皇太子殿下ご一家をお迎えして各種行事が執り行なわれた。この大会には多数の日本山岳会会員が企画協力をするとともに、詳細なレポートを会報「山」に掲載している。

「山の日」をひと月後に控えた7月10日には、マナスル登頂60周年と「山の日」施行を記念した東京でのイベント「『マナスル』から『山の日』まで60年、いま未来に伝えること」に企画・運営の両面で積極的に参加。マナスル初登頂が日本の登山界に与えた影響と、その後の登山界の変遷、現代の登山者事情などを絡めながらシンポジウムを行ない、「山の日」の意味を改めて考える機会とした。

同時に、山の日を再認識してもらうためのリーフレット「山の日を知ろう」を2万部製作して各イベント会場で配布。「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」という「山の日」の意義を、より多くの人々に知らしめるとともに、「山の日」誕生までの経緯や日本山岳会の「山の日」への取り組みを紹介している。

そして重要なのは、各支部の協力を得て展開された地方ごとの「山の日」関連イベントである。記念登山や講習会、シンポジウム、家族登山など、さまざまな取り組みを通してふるさとの山を見直し、「山の日」の意義を広く国民に知らしめる機会を作っていただいたことに対し、この場をお借りして深く感謝申し上げたい。事業委員会としては、今後も各支部が関る「山の日」のイベントに対し、資料提供や講師の派遣などで協力を続けていく予定である。

「山の日」が施行されて2年目となる今年の8月11日には栃木県那須町で第2回「山の日」記念全国大会が開催される。これに対し、事業委員会では「山の日」を紹介するためのリーフレット「山の一番を知っ

ていますか?」を作成した。こうした資料を有効に使いながら各種イベントを盛り上げ、より多くの人に「山に親しむ機会」を与え、「山の恩恵に気づき、感謝する」ことを応援するつもりである。

（萩原浩司）

■家族登山普及委員会

当委員会は、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成を受け、ウェブサイト「親子で楽しむ山登り」を作成している。ウェブサイトは、山を通じて子どもを育成するためのツールとなるもので、子どもやその親に山に親しんでもらい、豊かな人生を歩んでもらうとともに、山の知識や経験によって山の自然や山の文化を理解し、未来の「山」を考える足掛かりとなることを目指している。また安全登山の周知を図り、事故を減らすことを目標としている。

２０１６年度は、「親子で楽しむ山登りｖｏ．４」を作成した（http://jac.or.jp/oyako/）。助成申請額は約９５０万円。

２０１５年度まで作成したサイトに、あらたにコンテンツを加え、またスマートフォン用に一部プログラムを作り直した。

例えば、

・ファミリー登山に適した山（コース）を紹介するページで、関東や関西の山を増やして１６０コースにした。

・「山の便利グッズ」や「山のサバイバルテスト」「山のおどろき辞典」などの新しいコンテンツを加えた。

・専門家に「子どもの体と山登り」「子どもたちを危険から守るには」について、原稿を執筆いただき掲載した。

また、子どもたちの投稿写真を募集したコーナーも設けた。これには、アルパインフォトクラブから協力をいただけることになった。

スマートフォン用としては、親子登山コースの地図や原稿をリライトし直し、ＧＰＳによる現在位置を示す地図から山を検索することが可能になった（https://oyk.red）。

こうしたことを積み重ねてきた結果、サイトのページビュー数は年々着実に伸び、本体の日本山岳会のホームページよりもはるかに多くの閲覧者があるまでに成長した（２０１４年４月１日～２０１５年３月31日のページビュー数は19万１７０９ビュー、２０１５年４月１日～２０１６年３月31日のページビュー数は67万８０２４ビュー、２０１６年４月１日～２０１７年３月31日のページビュー数は93万１０１８ビュー）。

このサイトがアップされてから3年が経過し、ファミリー登山を行なう人口が増えているように思える。山だけでなく、雑誌や書籍などでもファミリー登山に関する記事を目にすることが多くなった。また「山の日」実施を記念して、全国の支部でイベントが行なわれたが、東京多摩支部の「親子自然観察ハイキング」（８月７日に高尾５９９ミュージアムおよび高尾山で実施）などをはじめ、20近い支部で親子登山や子どもの登山教室などを開催していただいた。さらにこの気運

が広がっていくことを期待している。

ただ残念なことに、２０１９年度に申請していた「親子で楽しむ山登りｖｏ．５」は、不採択となってしまった。今後のことについては、これから検討を始めるところである。

（永田弘太郎）

■――ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ委員会

《ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ》

ＷＶ部員が１８０人を超えた。ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ委員会では毎月１回、登山講習会のプランや、大所帯になった部員の山行計画に対応するための組織運営や安全対策が主に話し合われる。

ＷＶ例会は、毎月１回、30、40人がルームに集まり、各山行報告の後、レベル別の部門ごとに集まり、次回の山行の打合せが行なわれている。また、会員外向けの軽登山も月１回行なわれていて、ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ会員勧誘の原動力となっている。

青年部例会は、毎月１回、10数人のいつものメンバーで登攀中心の登山計画や技術講習、情報交換などが行なわれる。当初は主に学校山岳部ＯＢがリーダーを務めてきたが、野澤リーダーを中心に「踊り場山行」と呼ぶ合宿山行で力を付けた部員たちが育ってきており、次期リーダーとして活動を始めている。

学生部例会は、大学の山岳部員とＷＶ部員20～30名が毎月１回ルームに集まり、山行報告や講習会などを検討し、（情報交換が中心となるが）海外遠征もここで仲間を募って計画を立てている。日中韓学生交流登山は現状日本山岳会において唯一の国際交流の場となっており、各国学生たちにとって心に残る経験となり、国境を越えた友情を得る機会となっている。その意義は大きい。クライミング大会は約70名、マラソン大会は約１００名がエントリーして競い合った。

そのほか不定期に、中山理事を中心に各大学の監督を集めた監督会議を開催（復活）している。どのクラブも運営上の悩みを抱えており、ここでの情報交換の意義は大きい。

《ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ委員会》

委員長＝古野淳、副委員長＝野沢誠司

委員会開催日　４月25日、５月30日、６月27日、７月25日、８月29日、９月26日、10月24日、11月28日、12月26日、１月30日、２月27日、３月27日

《青年部》

４月29日～５月１日　早大ヒュッテ雪上訓練　Ｌ野沢ほか７名。５月14日　岩稜訓練・日和田の岩場（青年部は助教として参加）　Ｌ野沢ほか７名。５月28日　西丹沢・マスキ嵐沢　Ｌ直江ほか５名。６月４日　富士山　Ｌ野沢ほか３名。６月26日　大黒茂谷　Ｌ野沢ほか４名。７月２日　三ツ峠屏風岩右フェイス　Ｌ中谷ほか３名。７月16～17日　三つ峠クライミング　Ｌ古城ほか３名。７月23～24日　笛吹川・釜ノ沢西俣　Ｌ野沢ほか５名。７月30～31日　小仙丈

沢　L野沢ほか5名。8月13～14日　川乗谷逆川・水根沢　L野沢ほか2名。8月19～21日　穂高登攀　L野沢ほか7名。9月3日　水根沢　L野沢ほか2名。9月11日　八ヶ岳　天狗尾根～真教寺尾根　L中谷ほか2名。9月17～19日　岩木山、八甲田山、八幡平　L野沢ほか5名。9月24～25日　御在所クライミング　L松原ほか4名。10月7日　三ツ峠・屏風岩　L松原ほか2名。10月9～10日　明神南西稜　L中谷ほか4名。10月10日　両神山八丁尾根　L野沢ほか1名。10月15日　登攀技術・危急時対策研修会　事前練習会＝天覧山の岩場　L東(秀)ほか7名。10月21日　城山クライミング　L松原ほか2名。10月22～23日　三ツ峠　登攀訓練　L中谷ほか3名。10月28日　城山クライミング　L松原ほか1名。10月29～30日　登攀技術・危急時対策研修会＝長野県山岳総合センター。参加者15名。10月29日　二子山中央稜　L中谷ほか2名。10月30日　両神山赤岩尾根～八丁尾根　L中谷ほか2名。11月18日　湯河原・幕岩　L松原ほか3名。12月3日　富士山雪上訓練偵察　L野沢ほか3名。12月10日　富士山雪上訓練　L野沢ほか3名。12月10～11日　YOUTH合同忘年会＝甲斐大和自然学校　参加者16名。12月17日　湯河原・幕岩ロープワーク講習　L野沢ほか7名。12月17～18日　空木岳・池山尾根　L松原ほか10名。12月23～25日　塩見岳　L中谷ほか3名。12月23～25日　蝶ヶ岳登山講習会　L古野ほか20名。1月7～9日　地蔵尾根～仙丈ケ岳　L松原ほか7名。1月14～15日　雪崩講習会＝中山高原信州大町チャレンジフィールド　L野沢ほか16名。1月21～22日　浅間山雪上訓練　L野沢ほか7名。1月29日　八ヶ岳・阿弥陀岳北稜　L中谷ほか2名。2月11～12日　八ヶ岳・石尊稜　L中谷ほか2名。2月11～12日　谷川岳雪洞　L工藤ほか4名。2月18～19日　赤岳真教寺尾根　L松原ほか7名。2月22日　足尾アイスクライミング　L菊地ほか2名。2月24～25日　空木岳池山尾根　L中谷ほか4名。3月4～5日　八ヶ岳・西岳・権現岳　L野沢ほか6名。3月10～15日　宮崎クライミング　L松原ほか4名。3月18～20日　槍ヶ岳中崎尾根　L松原ほか5名。3月24日　城山チューブロック・西南カンテ　L中谷ほか1名。

《WV部　登山講習会》

4月1日（初級）登山デビュー　計画から歩行技術までを学ぶ　中山　16名＋講師スタッフ3名。4月3日（初級）登山デビュー　計画から歩行技術までを学ぶ　中山　11名＋講師スタッフ2名。5月27日（初級）はじめての地図読み（春編）道迷いを防ぐための読図とは　近藤、山田和人　22名。5月29日（初級）はじめての地図読み（春編）道迷いを防ぐための読図とは　近藤、永田、五十幡　10名＋スタッフ3名。6月10日（初級）山の生活技術　衣食住のスキルアップで楽しく快適に　大槻　15名。6月18～19日（初級）山の生活技術　衣食住のスキルアップで楽しく快適に　大槻　6名＋講師スタッフ2名。6月23日　観察会　都心の樹木観察会　山田　8名。7月22日（初級）安全のための気象講習　実地で知る天気の知識と観天望気　東　21名。7月24日　（初級）安全のための気象講

習　実地で知る天気の知識と観天望気　東　11名＋講師スタッフ3名。8月5日（初級）基礎のファーストエイド　いざというときの山での行動は　憲　32名。8月12日（初級）基礎のテント設営　大小テントで学ぶテント生活の基本　飯田12名。8月27～28日（初級）基礎のテント設営　大小テントで学ぶテント生活の基本　飯田　6名＋講師スタッフ2名。10月21日（初級）基礎のセルフレスキュー実践で学ぶアクシデント対処法　川瀬　17名。10月22日（初級）基礎のセルフレスキュー　実践で学ぶアクシデント対処法　川瀬　9名＋講師スタッフ2名。11月4日（初級）基礎の地図読み講習（秋編）山を知り、道迷いをなくそう　近藤、山田　20名。11月6日（初級）基礎の地図読み講習（秋編）山を知り、道迷いをなくそう　近藤、山田　13名＋講師スタッフ3名。12月16日（初級）冬の低山の楽しみ方　関東のベストシーズン　永田9名　1月21日　（初級）スマホGPSの使い方　事故を減らすためのGPS　永田。2月24日　（初級）初めての雪山デビュー（1）夏山とは違う、雪山の基礎知識　山田　2月26日　（初級）はじめての雪山デビュー（2）ワカンを使って野山を歩く　山田、永田　13名＋講師スタッフ3名。

3月4～5日（初級）初めての雪山デビュー　（3）アイゼンで歩いてみよう〟山田、永田　9名。

《WV部　月例山行》

4月10日　縦走（初級）　13名。5月21～22日（上級）笹ヶ峰　火打山縦走　12名　6月25～26日　頸城山塊　笹ヶ峰　6名。7月18日　日光　男体山　11名。8月11日　奥秩父・金峰山　9名。9月22日　谷川岳　10名。10月30日　御坂山、黒岳　14名。11月23日　三頭山　9名。12月11日　大菩薩嶺、笹子雁ヶ腹摺山　12名。1月15日　熱海玄岳　16名。2月11～12日　奥日光　切込湖・刈込湖　19名。3月12日　三浦アルプス　21名。

《学生部》

5月10日　救助講習会座学（法政大学）。　5月15日　救助講習会（関八州見晴台）。　8月7日～8月12日　日中韓三国交流登山（国立登山研修所、立山登山など）。　11月12日　第5回クライミング大会（神奈川大学）　リードアッパー：1佐藤淳平（学習院）、2辻拓真（室蘭工）、3赤木雅人　（東洋）、4沼田ほあし（東京医科歯科）。11月13日　第53回マラソン大会（皇居）　団体戦：明治A＝1：13：55、早稲田A＝1：16：59、日大A＝1：17：08、　個人戦：1小清水健人（明治）＝55：29、2中川卓人（芝工）＝58：27、3内海卓真（立教）＝59：28、19須貝綾菜（学習院）＝69：44、43小島芽子（立教）＝78：15、45遠藤恭子（立教）＝79：46。11月20日　アバランチナイト（早稲田大学）　2月1～3日　アイスクライミング・ホワイトアウトナビゲーション講習会（八ヶ岳）

（古野　淳）

日本山岳会再生委員会

当委員会は、前理事会からの引き継ぎを受けて、ＪＡＣの直面している財政問題を総合的に検討するために２０１５年７月に発足した。具体的には、制度設計・収益事業・会員サービスの３ＷＧ（ワーキンググループ）を設置し、それぞれで詳細検討された事案を再生委員会で総合的に審議した。２０１６年度の活動報告を以下に記す。

1　制度設計ＷＧ

財政再建の重要な柱として、準会員制度の導入を提案し、２０１６年６月の総会で定款および定款細則の変更の形で承認いただいた。その後の理事会で準会員規程を決定し、同年10月からの実施を案内したところ、２０１７年３月までに34名が準会員として入会している。正会員と異なる主な点は、入会時の紹介者が１名でよいこと、入会金は５０００円であること、年会費が半額の６０００円であること、準会員としての有効期限は最長３年であること、総会での議決権を有していないことである。今後、制度が定着していけば、本会構成員の大きな柱になるものと期待している。また、当ＷＧでは、永年会員が今後増加する点についても詳細検討したが、終身会員との関係などで会費徴収は困難であることが判明したので、改めて寄付のお願いを一層強く推し進めることにした（会報２０１６年１月号および４月号参照）。そのほかに、企業などの賛助会員を増やす努力の必要性も確認した。

2　収益事業ＷＧ

公益社団法人としての収益事業は限定的であるが、どのような事業展開が可能かを検討した。その一つが広島支部の支援を受けて、「山のお弁当」を高尾山をターゲットに販売することにした（会報２０１６年５月号参照）。製造業者との話は順調に進んだが、販売経路で大きな壁にぶつかり時間を要したが、２０１７年４月に商標登録を行なうことができ、徐々に販売体制が整ってきたので、今後の展開に期待がもてる状況になっている。もう一つが、ＪＡＣの名前の入ったグッズの販売である。これは、１００周年と１１０周年の記念事業として、名入りの時計を販売したところ好評であったことがヒントとなっている。当会が今まで行なってきたグッズ販売とは異なって、在庫など管理面のリスクを無くした受注販売とし、出来得れば支部の周年行事などでの大口販売を目指している。販売委託する業者と詰めの交渉を行なっており、話がまとまり次第、会報やホームページで会員に周知する予定である。

3　会員サービスＷＧ

会員へのサービス向上は以前からの懸案であったが、今回本格的に取り組んだ。その前提の課題が会員証の問題であった。従来の会員証は、紙で有効期限も明記されていなかったため、会の外でサービスを受けることは困難であった。そこで、プラスチック製で有効期限３年を明記した新しいデザインの会員証を発行する

ことにした。この方針は会報２０１６年10月号で会員に周知した。そして会報２０１７年１月号で本件実施をお知らせしたところ、１か月で１０００件以上の申し込みがあり、関心の高さが示されている。これをベースにＷＧでは、まず多くの登山者が入る山域の山小屋にＪＡＣ会員へのサービスを依頼したところ、北アルプス22件、八ヶ岳７件、尾瀬５件から提携受諾の回答をいただき、ホームページで公開している。今後さらに、他の山小屋関係、登山用品、山麓の温泉や宿泊設備、博物館・美術館などにウィングを広げて行くべく準備を進め、今年の夏山シーズン前には第２弾として公表する予定にしている(注)。

以上のように、この２年間の審議を通して、再生へ向けた方策と実行への第一歩を踏み出したところである。そこで、当委員会としては、初期の目的を概ね果たしたので、現理事会の任期満了に合わせて解散することにした。２０１７年６月の総会で決まる次期理事会で、当委員会で示した方向性に沿って、受け皿となる組織を新設するなどして、強力に各事業を推進することで、財政再建を成し遂げることを期待したい。ここ数年、当会は６００万円前後の赤字決算を余儀なくされてきたが、現理事会では３年間で赤字体質を改善することを目標として経費削減と収入拡大に努めた結果、２年目に当たる２０１７年３月期末決算では、１１０周年記念事業を除くと、赤字は２００万円程度に縮小した。

日本山岳会の黒字化まで、あと一歩というところまで来ているが、そのためには引き続き経費削減に努めることはもとよりであるが、再生委員会が推し進めてきた施策の成果を得ることが必須である。

(注)会報の２０１７年６月号に同封して、割引対象となる施設のリスト１５０件を公表した。

(小林政志、森　武昭)

〈ヤマケイ新書〉体験的登山技術論	澤田　実	山と溪谷社	780	新書判	253p
〈ヤマケイ新書〉日本百霊山	とよだ　時	山と溪谷社	880	新書判	286p
〈ヤマケイ新書〉山の神さま・仏さま	太田昭彦	山と溪谷社	800	新書判	237p
〈ヤマケイ新書〉山の天気にだまされるな！	猪熊隆之	山と溪谷社	800	新書判	237p
〈ヤマケイ新書〉「山の不思議」発見！	小泉武栄	山と溪谷社	780	新書判	221p
〈ヤマケイ文庫〉溪語り・山語り	戸門秀雄	山と溪谷社	900	文庫判	301p
〈ヤマケイ文庫〉定本山村を歩く	岡田喜秋	山と溪谷社	940	文庫判	356p
〈ヤマケイ文庫〉ドキュメント単独行遭難	羽根田　治	山と溪谷社	800	文庫判	254p
〈ヤマケイ文庫〉ドキュメント雪崩遭難	阿部幹雄	山と溪谷社	880	文庫判	317p
〈ヤマケイ文庫〉果てしなき山稜	志水哲也	山と溪谷社	950	文庫判	373p
〈ヤマケイ文庫〉穂高の月	井上　靖	山と溪谷社	880	文庫判	284p
山ごはん 12 か月	ネコ・パブリッシング/編	ネコ・パブリッシング	1250	A5	106p
山旅句	高澤光雄	北海道出版企画センター	1600	四六判	225p
山と渓谷へ	益田福三	白山書房	3000	A5	286p
山梨県の山―分県登山ガイド	長沢　洋	山と溪谷社	1900	A5	143p
山の途中で	須田漢一	かまくら春秋社出版事業部	1500	A5	365p
山の霊異記	安曇潤平	KADOKAWA	1333	四六判	190p
山ふたり―関東・尾瀬・熊野編	三輪敏広・三輪和恵	春風社	2400	A5	317p
山ふたり―新潟・富山・福井・長野編	三輪敏広・三輪和恵	春風社	2300	A5	286p
やめる勇気、やり遂げる心	三浦雄一郎	ＰＨＰ研究所	1200	四六判	191p
雪山を愉しむ―関西からの日帰り雪山登山	草川啓三	ナカニシヤ出版	1800	A5	143p
ゆっくりたのしむ山歩き	古谷聡紀	永岡書店	1200	A5	191p
ゆる山歩き	西野淑子	東京新聞	1200	四六判	125p
【ら】					
らくらく山さんぽ	交通新聞社/編	交通新聞社	800	A5	144p
ランドネ山旅プラン 100	枻出版社/編	枻出版社	1200	A5	143p
霊山と日本人	宮家　準	講談社	1080	文庫判	329p
ロシア極東秘境を歩く	相原秀起	北海道大学出版会	2800	四六判	215p
【わ】					
私の五葉山　＊写真集	中嶋啓治	無明舎出版	1000	四六判	96p
私の日本地図 2―上高地付近	宮本常一/著　香月洋一郎/編	未來社	2400	四六判	306p

はじめての絶景山ハイク 関西	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1200	A5	127p
HAPPY MOUNTAIN	山と渓谷社/編	山と渓谷社	1200	A5	124p
バテない体をつくる登山食	大森義彦/監	誠文堂新光社	1800	A5	223p
日帰り登山のススメ	鈴木みき	講談社	550	文庫判	183p
日帰り山あるき 東海	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1700	A5	191p
ヒマラヤに捧ぐ ＊写真集	野口 健	集英社インターナショナル	2500	190 × 270	127p
ヒマラヤの東 山岳地図帳―日本山岳会創立 110 周年記念出版	中村 保	ナカニシヤ出版	10000	A4	352p
「琵琶湖」の絶景を望む近江の山歩き 16 選	竹内康之	淡交社	1600	A5	111p
福岡県の山―分県登山ガイド	五十嵐 賢	山と渓谷社	1900	A5	151p
ふくおか歴史の山歩き	江上智恵	海鳥社	1800	A5	143p
富士山と文学	岩田小夜子	創英社	1800	A4 横	143p
二人者 Die Beiden	田辺 寿	文芸社	1000	四六判	124p
フライパンで山ごはん	ワンダーフォーゲル編集部	山と渓谷社	1200	A5	128p
文豪山怪奇談	東 雅夫/編	山と渓谷社	900	四六判	203p
冒険登山のすすめ	米山 悟	筑摩書房	820	新書判	203p
ぼくの道具	石川直樹	平凡社	1500	四六判	237p
星野道夫 アラスカのいのちを撮りつづけて	国松俊英	ＰＨＰ研究所	1400	A5	175p
北海道自然探検ジオサイト 107 の旅	日本地質学会北海道支部/監	北海道大学出版会	2800	四六判	368p
北海道夏山ガイド 5 ＊最新第３版	長谷川 哲	北海道新聞社	2300	四六判	315p
北海道夏山ガイド 6 ＊最新第３版	長谷川 哲	北海道新聞社	2300	四六判	331p
【ま】					
まほろばの山と高原 続	みず森ひろ史	白山書房	1400	四六判	247p
南アルプス鳥瞰絵図	村松 昭	信濃毎日新聞社開発局出版部	1400	955 × 630	1p
南谷真鈴 冒険の書	南谷真鈴	山と渓谷社	1200	四六判	192p
宮城県の山―分県登山ガイド	早川輝雄	山と渓谷社	1900	A5	143p
宮澤賢治、山の人生	澤村修治	エイアンドエフ	2400	四六判	151p
モンブラン山群 ＊写真集	大野 崇	山と渓谷社	2800	290 × 220	79p
【や】					
野外危機回避マニュアル	羽根田 治	地球丸	1200	四六判	191p
やさしい山のお天気教室	粟澤 徹	枻出版社	1300	A5	191p
やってはいけない山歩き	野村 仁	青春出版社	1000	新書判	228p
山歩きスタートブック	西野淑子	技術評論社	1280	四六判	159p
山あるきを楽しむ本 関西版	京阪神エルマガジン社/編	京阪神エルマガジン社	820	260	111p
〈ヤマケイ新書〉御嶽山噴火生還者の証言	小川さゆり	山と渓谷社	880	新書判	252p
〈ヤマケイ新書〉山岳名著読書ノート	布川欣一	山と渓谷社	880	新書判	302p

東京近郊の入門山ハイク	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1200	A5	127p
ときめくヤマノボリ図鑑	池田菜津美	山と溪谷社	1300	A5	125p
とことん親切マップで登る 3 時間登山	中田真二	誠文堂新光社	1300	A5	190p
登山外来へようこそ	大城和恵	KADOKAWA	920	新書判	192p
登山って最高！―水石採集をとおして	若松俊道	東洋出版	700	四六判	163p
登山の運動生理学とトレーニング学	山本正嘉	東京新聞	2700	A5	713p
登山白書 2016	山と溪谷社ヤマケイ登山総合研究所/編	山と溪谷社	9800	A4	288p
富山県警レスキュー最前線	富山県警察山岳警備隊/編	山と溪谷社	1600	四六判	302p
とやま山と人	佐伯邦夫	北日本新聞社	1500	四六判	209p
トレイルトリップガイドブック	石川直樹	講談社	1400	四六判	143p
トレイルランニング	小川壮太	山と溪谷社	1980	A5	199p
【な】					
「中尾佐助 照葉樹林文化論」の展開	山口裕文・金子務・大形徹・大野朋子	北海道大学出版会	16000	A5	763p
71 歳からの百名山	高橋尚子	郁朋社	1000	A5	152p
奈良県の山―分県登山ガイド	小島誠孝	山と溪谷社	1900	A5	143p
難所の歩き方―山登りＡＢＣ	谷山宏典	山と溪谷社	1000	四六判	125p
日本登山大系 普及版 7・槍ヶ岳・穂高岳	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘/編	白水社	2200	四六判	268p
日本登山大系 普及版 8・八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘/編	白水社	2300	四六判	306p
日本登山大系 普及版 9・南アルプス	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘/編	白水社	2400	四六判	325p
日本登山大系 普及版 10・関西・中国・四国・九州の山	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘/編	白水社	3000	四六判	461p
日本 2 百名山ひと筆書き	田中陽希	NHK 出版	1700	四六判	285p
日本の岩場 下巻　＊新版	菊地敏之	白山書房	2000	A5	159p
日本の火山	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1600	A5	159p
日本の火山ウォーキングガイド	NPO 法人火山防災推進機構/監	丸善出版	1900	四六判	192p
日本の山岳標高 1003 山	日本地図センター/編	日本地図センター	1800	A4	175p
「日本の霊山」がよくわかる本	戸部民夫	ＰＨＰ研究所	700	文庫判	287p
日本百名山登頂記 6	池田　和	日本図書刊行会	1850	四六判	327p
日本百名山登山地図帳 上	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1800	260	127p
日本百名山登山地図帳 下	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1800	260	127p
【は】					
廃道探索	平沼義之	実業之日本社	840	文庫判	351p
白山花ガイド　＊第 4 版	栂　典雅	橋本確文堂	1000	文庫判	159p
はじめての親子ハイク 関東周辺	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1200	A5	127p

サバイバル！　＊増補版	服部文祥	筑摩書房	800	文庫判	318p
沢登り＆岩登り入門	浜島一郎/監	地球丸	1200	四六判	191p
沢登り銘渓 62 選	豊野則夫	山と溪谷社	2500	A5	295p
山岳読図シミュレーション BOOK　＊改訂版	椢出版社/編	椢出版社	1200	260	127p
山行記	南木佳士	文藝春秋	670	文庫判	232p
静岡の山 日帰りコース 158	永野敏夫	羽衣出版	2300	A5	351p
シルクロードに仏跡を訪ねて―大谷探検隊紀行	本多隆成	吉川弘文館	2800	四六判	259p
信州湿原紀行	日野　東	信濃毎日新聞社	1700	A5	223p
信州山歩き地図 4 里山編	中嶋　豊	信濃毎日新聞社	2000	A4	172p
新日本山岳誌―日本山岳会創立 110 周年記念出版　＊改訂版	日本山岳会	ナカニシヤ出版	18000	232 × 175	1993p
新バリエーションハイキング	松浦隆康	新ハイキング社	2000	A5	388p
新編 山小屋主人の炉端話	工藤隆雄	山と溪谷社	1300	四六判	285p
新編 山のミステリー	工藤隆雄	山と溪谷社	1200	四六判	253p
図説 穂高神社と安曇族	穂高神社/監	龍鳳書房	1500	A5	124p
3D 地形図で歩く日本の活断層	柴山元彦	創元社	1800	A5	203p
絶景！世界の山小屋	グラフィック社編集部/編	グラフィック社	1500	四六判	143p
空から見た日本の名峰	根本達久	山と溪谷社	2500	270	78p
それでもわたしは山に登る	田部井淳子	文藝春秋	620	文庫判	78p
ソロ山行ステップアップ術	高橋庄太郎	地球丸	1200	四六判	111p
【た】					
高尾山と中央線沿線の山―ヤマケイアルペンガイド	渡邉明博	山と溪谷社	2200	A5	224p
高滝山・正木山登山詳細図 全 32 コース	守屋益男	吉備人出版	500	685 × 1000	2p
だからこそ、自分にフェアでなければならない。―プロ登山家・竹内洋岳のルール	小林紀晴	幻冬舎	600	文庫判	206p
旅にとり憑かれたイギリス人	窪田憲子	ミネルヴァ書房	3500	四六判	331p
旅人の表現術	角幡唯介	集英社	1800	四六判	350p
探検家と地理学者―18 世紀フランスの啓蒙思想と地誌学	大嶽幸彦	古今書院	3200	A5	155p
探検家、40 歳の事情	角幡唯介	文藝春秋	1250	四六判	207p
丹沢山紀行 続	菅原信夫	白山書房	1800	A5	302p
知識ゼロからのロングトレイル入門	日本ロングトレイル協会/監	幻冬舎	1300	A5	175p
地図がわかれば社会がわかる	田代　博	新日本出版社	1700	四六判	190p
地図のない場所で眠りたい	高野秀行・角幡唯介	講談社	680	文庫判	345p
地図マニア空想の旅	今尾恵介	集英社インターナショナル	1300	四六判	252p
チベット高原の不思議な自然	村上哲生	築地書館	2400	四六判	234p
中国 5 県　山辺・野辺・海辺・川辺への道 80 コース	清水正弘	南々社	1600	A5	175p
低山トラベル	大内　征	二見書房	1600	A5	180p
天空の山旅日記	関口　保	山と溪谷社	2700	A5	163p
東海女子の山歩き	山女子編集部	メイツ出版	1600	A5	128p

ウェストンが残したクライマーズ・ブック―外国人たちの日本アルプス登山手記	クライマーズ・ブック刊行会/編	信濃毎日新聞社	1500	A5	163p
愛媛県の山―分県登山ガイド	石川道夫・西田六助・豊田康二・岡山健仁	山と溪谷社	1900	A5	127p
エベレスト初登頂　＊新訳	ジョン・ハント/著 吉田　薫/訳	エイアンドエフ	2700	四六判	363p
獲物山	服部文祥	笹倉出版社	1600	260	130p
大阪の山歩き110	清水　満	ナカニシヤ出版	1800	A5	182p
大阪府の山―分県登山ガイド	岡田敏昭	山と溪谷社	1900	A5	127p
奥多摩・奥武蔵 日帰り山あるき	ブルーガイド編集部/編	実業之日本社	1600	A5	175p
奥多摩・高尾384km	佐々木　亨	山と溪谷社	1500	A5	137p
奥多摩登山詳細図 東編	守屋二郎	吉備人出版	880	685×1000	2p
【か】					
鹿児島の離島の火山	小林哲夫	北斗書房	700	A5	65p
上高地の自然誌	上高地自然史研究会/編	東海大学出版部	2700	A5	199p
上高地の花ハンドブック	前田篤史	ほおずき書籍	1800	A5	188p
香春岳自然誌	熊谷信孝	海鳥社	4000	A5	231p
危険回避のための読図入門	地球丸/編	地球丸	1500	260	111p
北イタリア国境の町々―遥かなるアルプスの峠 下	河野　穣	朝日出版社	1200	四六判	195p
北岳 八十歳の新雪	風間嘉隆	白山書房	1500	四六判	151p
北の山の栄光と悲劇　＊復刻版	滝本幸夫	柏櫓舎	1800	四六判	350p
京都府山岳総覧	内田嘉弘	ナカニシヤ出版	2200	A5	254p
串田孫一―緑の色鉛筆	串田孫一	平凡社	1400	四六判	219p
熊！に出会った襲われた	つり人社書籍編集部/編	つり人社	1111	四六判	159p
黒部の山人 新編	鬼窪善一郎/語り 白日社編集部/編	山と溪谷社	1200	四六判	244p
群馬県の山―分県登山ガイド	太田ハイキングクラブ	山と溪谷社	1900	A5	159p
激走！日本アルプス大縦断	NHKスペシャル取材班	集英社	640	文庫判	360p
外道クライマー	宮城公博	集英社インターナショナル	1600	四六判	277p
源流テンカラ	高桑信一	山と溪谷社	2400	A5	349p
高山の大気環境と渓流水質	永淵　修	技報堂出版	3500	260	198p
高度成長期 日本の国立公園―自然保護と開発の激突を中心に	村串仁三郎	時潮社	3500	A5	429p
【さ】					
最高の山ごはん	ホシガラス山岳会	パイインターナショナル	1600	180	159p
埼玉県の山―分県登山ガイド	打田鉄一	山と溪谷社	1900	A5	143p
再発！それでもわたしは山に登る	田部井淳子	文藝春秋	1400	四六判	223p
里やま深やま	後藤信雄	上毛新聞社事業局出版部	1000	A5	144p

山岳図書目録（2016 年）

日本山岳会図書委員会

スポーツク・ライミングが 2020 年の東京オリンピックの正式種目に決まりました。登山とスポーツ・クライミングの関係をどうとらえるかは意見の分かれるところだと思いますが、スポーツ・クライミングを足掛かりにして、登山の世界へ足を延ばす若い人が増えてくれることを願います。

目録作成にあたって、雑誌やムックの登山ガイドブックの掲載を控えました。すると、リストアップした冊数が意外に少なくなりました。また、「どこかで読んだ本」の焼き直しではないかと思われる本や、「２匹目のドジョウ」をねらったかのような本も見受けられます。登山ブームと言われながら、山の本の世界の現状が見え隠れします。

＊判型が数字で表示されているものの単位は mm（天地×左右）、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

山岳図書目録

書　名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
アイスクライミング 全国版 新版	廣川健太郎/編	白山書房	2300	A5	303p
アウトドア刃物マニュアル	荒井裕介	誠文堂新光社	1800	A5	239p
“悪夢の超特急”リニア中央新幹線―建設中止を求めて訴訟へ ＊増補版	樫田秀樹	旬報社	1600	四六判	299p
あたらしい登山案内	ホシガラス山岳会	パイインターナショナル	1600	180	159p
アルプス星夜 ＊写真集	菊池哲男	山と溪谷社	3600	260 × 310	111p
あれを食べに、この山に行ってきました	鈴木みき	平凡社	1200	A5	157p
ALONE ON THE WALL―単独登攀者、アレックス・オノルドの軌跡	アレックス・オノルド/著　デイヴィッド・ロバーツ/著　堀内珙司/訳	山と溪谷社	2500	四六判	342p
犬と走る	本多有香	集英社	600	文庫判	268p
茨城県の山―分県登山ガイド	酒井國光	山と溪谷社	1900	A5	143p
インドネシア山旅の記	重田哲朗	山と溪谷社	2770	260	219p
インド・ヒマラヤ―日本山岳会創立 110 周年記念出版	日本山岳会東海支部「インド・ヒマラヤ」出版委員会	日本山岳会　ナカニシヤ出版/発売	6000	A5	650p

― 掲載広告一覧 ―

カモシカスポーツ（表２）
山と溪谷社
㈱モンベル
アルパインツアーサービス㈱
アライテント
雷鳥沢ヒュッテ・ロッジ立山連峰
早月小屋
立山室堂山荘
槍ヶ岳山荘ほか
㈱好日山荘
カシオ＜ PRO TREK ＞
㈱アトラストレック（表３）

山と自然を、より豊かに楽しむために
登山者必読の山の知識を新書で提供

ヤマケイ新書

アルピニズムと死 YS001
山野井泰史　僕が登り続けてこられた理由

モンベル 7 つの決断 YS002
辰野 勇　アウトドアビジネスの舞台裏

山の名作読み歩き YS003
大森久雄 編　読んで味わう山の楽しみ

体験的山道具考 YS004
笹原芳樹　プロが教える使いこなしのコツ

今そこにある山の危険 YS005
岩崎元郎　山の危機管理と安心登山のヒント

「体の力」が登山を変える YS006
齋藤 繁　ここまで伸ばせる健康能力

ドキュメント 御嶽山大噴火 YS009
山と溪谷社編　証言と研究から大災害の現場を分析

現代ヒマラヤ登攀史 YS010
池田常道　8000 メートル峰の歴史と未来

山の常識　釈問百答 YS011
釈 由美子　教えて！ 山の超基本

山岳遭難の教訓 YS013
羽根田 治　実例に学ぶ生還の条件

明解日本登山史 YS014
布川欣一　エピソードで読む日本人の登山

もう道に迷わない YS015
野村 仁　道迷い遭難を防ぐ登山技術

山のパズル YS017
山と溪谷社 編　脳トレで山の知識が身につく

日本の山はすごい！ YS020
山と溪谷社 編　「山の日」に考える豊かな国土

日本の山を数えてみた YS021
武内 正・石丸哲也　データで読み解く山の秘密

山の神さま・仏さま YS026
太田昭彦　面白くてためになる山の神仏の話

日本百霊山 YS029
とよだ 時　伝承と神話でたどる日本人の心の山

御嶽山 生還者の証言 YS030
小川さゆり　事故から 2 年、復興への兆し

山の天気にだまされるな！ YS031
猪熊隆之　気象情報の落とし穴を知ってますか?

山岳名著読書ノート YS032
布川欣一　山の世界を広げる名著 60 冊

「山の不思議」発見！ YS033
小泉武栄　謎解き登山のススメ

体験的登山技術論 YS034
澤田 実　脱初心者のための実践アドバイス

山岳遭難は自分ごと YS026
北島英明　「まさか」のためのセルフレスキュー講座

山のリスクセンスを磨く本 YS037
昆 正和　遭難の最大の原因はアナタ自身にあった





山と溪谷社　〒101-0073　東京都千代田区神田神保町 1 丁目 105 番地
☎03-6744-1900（代表）／ http://www.yamakei.co.jp

SINCE 1975

mont·bell

終わりなき進化

悪天候時の快適性を左右するレインウエア。
体をドライに保つことはもちろん、
軽さと動きやすさも重要な要素。
そこで、縫い目を最小限に抑えながらも
動きやすさを損なわない
独自の立体パターンを考案。
さらに、縫い糸に至るまで撥水加工を施すなど、
一切の妥協を許さず、最高の防水性と
抜群の軽量性を実現しました。





しなやかな着心地と
世界最高レベルの防水透湿性


素早くフィット感を調節でき
明瞭な視界を確保するフード


携行しやすい
軽量・コンパクト収納


バックのハーネスが干渉しない
位置に配置したポケット

ストームクルーザー®

#1128531 ストームクルーザー® ジャケット Men's
税抜き価格 ¥19,500(+税)　サイズ：S·M·L·XL　重量：257g(Mサイズ)　収納サイズ：7×7×15cm
※男性用XXLサイズ、女性用モデル、パンツもご用意しています。

株式会社 モンベル
【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス
0088-22-0031／TEL.06-6536-5740
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。
www.montbell.jp



登山とトレッキングの専門旅行会社です。

パタゴニアのフィッツロイ山群を仰ぎ見ながら歩く

オリジナルツアーを企画してみませんか。

山岳会、ハイキング・クラブ、山のお仲間などで企画するオーダーメイドの山旅を承ります。ぜひ、お気軽にお申し付けください。

山旅の出張説明会も承ります。

山のお仲間がお集まりの時に、世界の山旅に精通したスタッフが資料や映像をお持ちして皆さまの元へご説明にお伺いします。

ツアーカタログをご請求ください。

世界中の山旅を掲載したカタログを無料でお送りいたします。お電話またはEメールにてお気軽にお申し付けください。ホームページでも最新のツアー情報をご覧いただけます。

世界の山旅・辺境の旅を手がけて48年の実績



日帰りハイキング



トレッキング



登頂ツアー



ネイチャリングツアー

旅行企画・実施

観光庁長官登録旅行業第490号／一般社団法人 日本旅行業協会 正会員

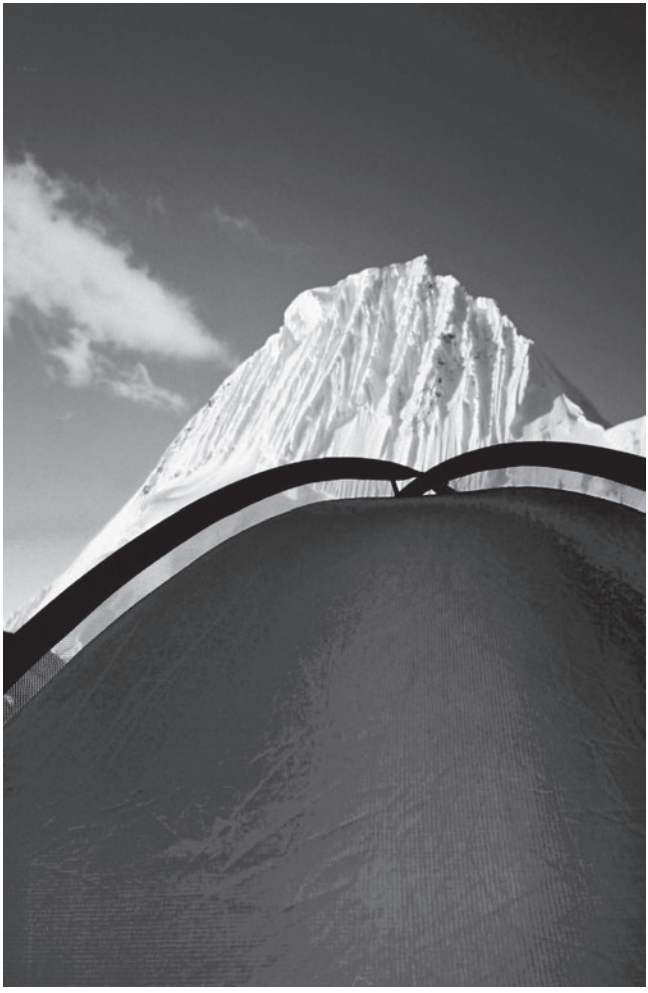
アルパインツアーサービス株式会社

本社／〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11（第7東洋海事ビル4階）

東京／☎03(3503)1911　大阪／☎06(6444)3033
名古屋／☎052(581)3211　福岡／☎092(715)1557
札幌／☎011(711)7106　仙台／☎022(265)4611(転送)
((株)りんゆう観光)　広島／☎082(542)1660(転送)

アルパインツアー　検索　ツアーカタログをご請求ください。　●営業時間・平日9:30~18:30 土日祝/定休

HP www.alpine-tour.com　✉ info@alpine-tour.com



アルパマヨ西南壁　佐藤嘉彦

ウラヤマでも、ヒマラヤでも

Made in JAPAN

ARAI TENT

www.arai-tent.co.jp | 04-2944-5855



奥大日岳をバックに隣接するヒュッテ（左）とロッジ

雷鳥沢温泉 ◆ 湯量豊富な登山とハイキングの宿

雷鳥沢ヒュッテ
[シーズン中]TEL.076-463-1835

ロッジ立山連峰
[シーズン中]TEL.076-463-6004

事務所 TEL.076-482-1617（FAX兼） http://www.raichozawa.net



早月尾根は山を楽しむだけでは無くお花も楽しめる尾根です、花の百名山にも載っています。

早月小屋
[シーズン中]TEL.090-7740-9233
[メール予約可]hayatsuki@ma.net3-tv.net
http://www.net3-tv.net/~hayatsuki/ 〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峅寺63-2 佐伯謙一



立山室堂山荘
バスターミナルより徒歩10分
TEL 076-463-1228 http://www.murodou.co.jp



槍ヶ岳山荘
☎090-2641-1911

槍沢ロッヂ
☎0263-95-2626

南岳小屋
☎090-4524-9448

大天井ヒュッテ
☎090-1401-7884

岳沢小屋
☎090-2546-2100

[事務所]
〒390-0813
長野県松本市埋橋1-7-2
TEL.(0263)35-7200
FAX.(0263)35-0637

http://www.yarigatake.co.jp/

あなたの街の登山口
好日山荘

登山・アウトドアの専門店

好日山荘

全国各地で展開しています。







近畿エリア

【大阪府】
グランフロント大阪店 06-6485-7230
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH UMEDA 06-6485-7363
なんば店 06-6645-0630
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH NAMBA 06-6645-0631
近鉄あべのハルカス店 06-6616-7811
くずは店 072-856-6805
【兵庫県】
キャンピングリサーチ西宮山口店 078-907-6570
神戸本店 078-265-2045
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH KOBE 078-855-8043
有馬アウトレット店 078-958-5150
明石大久保店 078-938-2010
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH AKASHI 078-938-2010
姫路駅前店 079-280-5520
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH HIMEJI 079-280-7520
【京都府】
京都店 075-708-5178
FOOTWEAR 075-353-6880
【奈良県】
ならファミリー近鉄百貨店奈良店 0742-93-4555
【和歌山県】
紀三井寺店 073-448-2001

甲信越エリア

【新潟県】
新潟亀田店 025-378-5123
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH NIIGATA 025-378-5123
【長野県】
白馬店 0261-85-2560
松本パルコ店 0263-31-0580

北海道エリア

【北海道】
サッポロファクトリー店 011-522-5513
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH SAPPORO 011-206-1323

関東エリア

【東京都】
銀座好日山荘 03-6228-5018
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH GINZA 03-6264-5353
アウトレット新宿東口店 03-6380-1515
池袋西口店 03-5958-4315
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH KEBUKURO 03-5958-4315
玉川ガーデンアイランド店 03-3700-2550
町田店 042-739-7017
調布パルコ店 042-426-8055
立川店 042-512-5755
キャンピングリサーチ瑞穂店 042-568-7913
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH NISHITAMA 042-568-7913
イオンモール東久留米店 042-497-4101
ロックランズ店 03-5659-0808
FC R&T MOUNTAIN PROSHOP 042-850-5633
【神奈川県】
横浜西口店 045-317-1049
川崎ダイス店 044-272-7717
さいか屋横須賀店 046-854-5501
さいか屋藤沢店 0466-24-1977
【埼玉県】
大宮店 048-783-2710
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH OMIYA 048-783-2760
浦和パルコ店 048-764-9701
【千葉県】
伊勢丹松戸店 047-710-3552
ららぽーとTOKYO-BAY店 047-402-2590
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH TOKYO-BAY 047-404-8961
【茨城県】
LALAガーデンつくば店 029-850-1265
【栃木県】
宇都宮パルコ店 028-678-2940

中国・四国エリア

【岡山県】
岡山駅前店 086-801-3133
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH OKAYAMA 086-801-3133
【広島県】
広島ゼロゲート店 082-569-6031
FC 好日山荘&TENMAYA 福山店 084-927-2810
FC 好日山荘&TENMAYA 広島アルパーク店 082-208-1930
【愛媛県】
FC パルフィールド 089-971-1141
【香川県】
FC ベースキャンプ高松店 087-868-6373
【徳島県】
FC GoGo CAMP 088-678-5538

東海・北陸エリア

【愛知県】
名古屋駅前店 052-414-7100
名古屋栄店 052-269-1821
春日井店 0568-86-0051
【静岡県】
静岡パルコ店 054-275-0018
浜松メイワン店 053-482-7805
【岐阜県】
イオンモール各務原店 058-380-0014
【三重県】
四日市店 059-329-7500
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH MIE 059-329-7777
【富山県】
マリエとやま店 076-471-7005
【石川県】
金沢西インター大通り店 076-292-8020
Berghaus & JackWolfskin Shop 香林坊 076-214-5260
【福井県】
福井北四ツ居店 0776-52-7015

九州エリア

【福岡県】
アイム小倉店 093-512-3455
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH KOKURA 093-482-2060
福岡パルコ店 092-791-6654
Mt.GEAR 大名 092-406-7850
トリアス店 ウェア館 092-410-9390
キャンピングリサーチトリアス店 092-410-1670
CLIMBING GYM GRAVITY RESEARCH FUKUOKA 092-410-1670
【熊本県】
熊本パルコ店 096-288-3652
【鹿児島県】
FC A-Ruku 099-204-7330

ウェブショップ本店 検索
http://www.kojitusanso.com/

次に登る日を、もっと好い日に。
好日山荘

好日山荘 検索
http://www.kojitusanso.jp/

※FCはフランチャイズ店舗になります。

CASIO

最高峰へ。

MANASLU

PRO TREK
Feel the field

8,000m峰登頂のために、
全てを研ぎ澄ませたマナスル8k。

トリプルセンサー Ver.3



※高度計測の開始から3分間は1秒計測、その後は2分／5秒間隔（切替可能）で計測します。

電波ソーラー プロトレック PRX-8000T。

PRX-8000T-7AJF
¥160,000＋税

protrek.jp

公益社団法人　日本山岳会
The Japanese Alpine　Club
――1905（明治 38）年設立――
住所：〒 102-0081　東京都千代田区四番町 5-4　サンビューハイツ四番町

2016 年度役員・評議員・支部長名簿

会　　長	小林　政志		
副 会 長	吉川　正幸	大久保春美	山田　和人
常務理事	神長　幹雄	佐藤　　守	
理　　事	勝山　康雄	中山　茂樹	野口　いづみ
	大槻　利行	落合　正治	山賀　純一
	直江　俊弐	星　　征雅	谷内　　剛
監　　事	平井　拓雄	重廣　恒夫	

評 議 員	田邊　　壽	村井　龍一	宮崎　紘一
	山本　良三	尾上　　昇	西村　政晃
	黒川　　惠	高原　三平	坂井　広志
	野沢　誠司	高野　　剛	石川　一樹
	佐野　忠則		

支部長	北海道＝西山　泰正	青　森＝大久保　勉	岩　手＝阿部　陽子
	宮　城＝佐藤昭次郎	秋　田＝今野　昌雄	山　形＝木村喜代志
	福　島＝小林　正彦	茨　城＝浅野　勝己	栃　木＝渡邉　雄二
	群　馬＝田中　壯佶	埼　玉＝松本　敏夫	千　葉＝三木　雄三
	東京多摩＝竹中　　彰	神奈川＝込田　伸夫	越　後＝遠藤家之進正和
	富　山＝山田　信明	石　川＝中川　博人	福　井＝森田　信人
	山　梨＝深沢　健三	信　濃＝塚原　賢勝	岐　阜＝高木　基揚
	静　岡＝大島　康弘	東　海＝髙橋　玲司	京都・滋賀＝田中昌二郎
	関　西＝金井　良碩	山　陰＝中井　俊一	広　島＝兼森　志郎
	四　国＝尾野　益大	福　岡＝高木　荘輔	北九州＝関口　興洋
	熊　本＝松本　莞爾	東九州＝加藤　英彦	宮　崎＝末永　軍朗

編集後記

『山岳』第百十二年（２０１７年）号をお届けいたします。今年も盛りだくさんの内容になりましたが、やはり、刊行は7月下旬になってしまいました。刊行が遅れましたこと、申し訳ありませんでした。

さて今号ですが、「記録」欄に力の入ったものが並びました。厳冬期の黒部を横断し、剱沢大滝左壁の通称「黒部ゴールデンピラー」を登攀した記録です。２００８年から続けてきたという佐藤裕介氏の挑戦の記録は、まさに悪天との闘いでもありました。この冬の時期に、3日の好天に賭けて1ヶ月の日程を用意したという意気込みは大変なものです。結局、雪洞による停滞19連泊の末の行動再開によって登り切った記録は壮絶なものでした。

東ネパールのナンガマリⅡ峰の記録が続きます。関西支部創立80周年の記念事業として企画された登山隊ですが、６０００m峰とはいえ、ヒマラヤの登山経験に差があり、しかも年齢幅の大きい登山隊であるにもかかわらず、重廣恒夫隊長以下全隊員が力を合わせて登頂した成果が文章にも表われていました。また、東京農大の若いＯＢのメンバーだけで東稜から挑んだマナスル登頂の記録も貴重な教訓を残しました。登頂後、1人の隊員が滑落するという事故がありましたが、なんとかその悲劇を乗り越えて登山のすばらしさを発信し続けてほしいと思います。

「調査・研究」では、１１０周年記念海外学術登山隊のゴジュンバ氷河調査報告が掲載されています。ヘリコプターによる空撮と地上からの実地踏査によって多角的にゴジュンバ氷河の後退を検証した記録です。ゴムボートでの水深の計測など多くの困難を乗り越えながら、氷河と水の動きまで調査し報告書にまとめた労作です。調査隊を指導、牽引していった大森弘一郎会員の努力と執念には頭が下がります。

五十嶋一晃会員による、河川の支流を表わす「沢・谷」地名考も興味深いレポートになりました。おおむね東日本は「沢」地名、西日本は「谷」地名、また縄文文化人は「沢」、弥生文化人は「谷」といった地域による違いを考察しながら歴史まで掘り下げていこうという姿勢には共感できるものが多々あるはずです。

「読物・紀行」は5編そろいました。

まず「積雪期鹿島槍ヶ岳南峰の初登頂を巡って」3編の原稿がそろいました。中村純二会員にからは、濱田和雄（田辺和雄）らによる積雪期初登頂の記録が、また早川滉氏からは、その初登頂が知られていない経緯を、そして大場秀章氏からは田辺和雄の高山植物の論考が続きます。鹿島槍ヶ岳南峰の初登攀と植物学の泰斗でもあった田辺和雄の多彩な人となりが綴られます。

また関塚貞亨会員からは、山岳画家・吉田博の人物像が綴られ、木下喜代男会員からは、小島烏水と飛騨の岳人とのかかわりを描いた人物レポートが届きました。昨年の大学探検部のレポートに続いて、城島紀夫会員からは、大学ワンダーフォーゲル部の発足に関する活動内容や現況などが綴られております。児玉茂会員から寄稿されたメコンガ山紀行は、日本人にはなじみの薄いインドネシアの山ですが、入山方法から登山に至るまで、未知の部分が多いだけに楽しい読み物となっています。

（神長幹雄）

『山岳』編集委員会
担当理事／委員長　神長幹雄
委員　節田重節、成川隆顕、小泉弘、永田弘太郎、萩原浩司

山岳　第百十二年（通巻一七〇号）
二〇一七年八月十五日発行

本体価格三五〇〇円

発行所　公益社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二―〇〇八一）
電話　〇三―三二六一―四四三三
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九

発行人　小林政志
編集人　神長幹雄

印刷所　株式会社　東京印刷
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区三崎町三―二―一三
電話　〇三―三二二一―八七〇
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七三三
消費税込み三七八〇円

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。